連歌の発想 : 連想語彙用例辞典と、そのネットワークの解析

Author(s) 山田, 奨治; 岩井, 茂樹

Citation 日文研叢書. 38

Issue Date 2006-10-20

Text Version publisher

URL http://hdl.handle.net/11094/23357

rights Copyright ©2006 by the International Research Center for Japanese Studies

Osaka University Knowledge Archive : OUKA
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/

Osaka University
連歌の発想
連想語彙用例辞典と、そのネットワークの解析

山田奨治・岩井茂樹 編著

国際日本文化研究センター
連歌の発想

連想語彙用例辞典とそのネットワークの解析

山田奨治・岩井茂樹 編著

国際日本文化研究センター
Imagination of Renga

Lexical Association Example Dictionary, and Analysis of that Network

Copyright ©2006 by the International Research Center for Japanese Studies
3-2 Oeyama-cho, Goryo, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192, Japan
Tel.075-335-2222 Fax.075-335-2091 http://www.nichibun.ac.jp/

NICHIBUNKEN JAPANESE STUDIES SERIES (日文研叢書), No. 38 (2006)
ISSN 1346-6585
Printed by SOUBUNDO
謝辞

本書は、平成十六年八年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究A「前近代日本の諸概念を対象にした知識発見のためのマイニング資源の開発（代表者：山田英治）の補助を受けた実施した研究の成果の一部である。日文研「連続データベース」の補助を受けて実施した研究の成果の一部である。日文研「連続データベース」の補助を受けて実施した。奈良工業高等専門学校の勢田勝郭教授に感謝申し上げます。
<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1.</td>
<td>品種選別</td>
</tr>
<tr>
<td>2.</td>
<td>種苗選別</td>
</tr>
<tr>
<td>3.</td>
<td>品種改良</td>
</tr>
<tr>
<td>4.</td>
<td>品種選別</td>
</tr>
</tbody>
</table>

なお、詳細は次の通りです。

1. 品種選別
   - 品種の特徴
   - 適合の地域
   - 品種の分類

2. 種苗選別
   - 種苗の選別方法
   - 種苗の品質
   - 保存方法

3. 品種改良
   - 品種改良の進め方
   - 新品種の開発
   - 品質向上

4. 品種選別
   - 品種の選別基準
   - 品種の比較
   - 適合の検討

参考文献

[文献1]
[文献2]
[文献3]
第一章 連歌・俳諧データベースからの知識発見

検索から発見へ

人文学を取り巻く情報環境は、ここ七年のあいだに大きく変わった。インターネットの普及とパソコンの高性能・低価格化が、その大きな原動力だった。しかしこの発展により、コンピュータ面の整備、人文学資料の全文データ化が盛んになってきている。そして、コンピュータにアクセスしてデータを検索するようになりつつある。

画像データに対する検索は、一般的には画像データをキーワードで検索する方法を持っている。しかし、画像データは個々の文脈の中で検索する必要がある。画像データを検索するための方法は、画像データベースの検索が盛んになってきている。

一方で、全文データベースの場合は、タイトルやキーワードをあてて検索を行うことができる。しかし、キーワード検索は博識である。キーワード検索の結果は、検索キーワードの文脈の中で検索する必要がある。

コンピュータによると情報検索ができるようになってから、人文学研究者は、コンピュータを用いてデータベースを検索することができる。特に、WEBベースのデータベースを検索することができると、研究者が情報を得ることができる。

しかし、万能のように思える情報検索にも弱点がある。コンピュータはその文脈にあてられたコード番号が異なると別の文脈とみなすので、それに対する適応が必要である。
考えたのである。

ある分野の専門家が、大量のデータから新しい知識を発見しようとする場合は、ある理由がある。それは、情報検索システムの問題の解決のためか、または、多くの分野における基礎的な知識を備えた専門家が、自分の専門についての新しい情報を検索する場面を想像してみよう。対象についてのじゅうぶんな知識を備えた専門家が、自分の専門についての情報を検索する場面は、もちろんある。そんな場合には、既存の情報検索システムはこのうえなく有用だ。もう、豊富なデータベースを有効に活用し、情報検索システムの利用を極意にしてみよう。これからの問題解決のためには、たんなる情報検索を超えた仕組みを身につけてから情報検索システムを利用せよ、というべきだろうか。

日本国内では、一九八〇年代はじめに、個人ベーパーで古典・近代文学の全著データを作り込むことが挙げられる。一九七〇年代からデータと検索を入手できるか、検索に必要なデータを入手できるか、検索で入手できるデータが、当時普及していたパソコン通信を使って公開される動きがあった。それがプロジェクト・グーテンベルクに匹敵するような大きさにならなければ、一九九七年からはじまった青空文
連歌・俳諧データベースからの知識発見

連歌・俳諧データベースからの知識発見

連歌と俳諧のデータベースが、現代の学問研究に多大な影響を及ぼしています。特に、連歌のデータベースは、連歌の歴史と文化を反映しています。データベースの開発は、学術研究の進歩に寄与しています。

データベースの魅力

連歌・俳諧データベースの魅力は、データの多様性と深度にあります。データは、連歌の作品、俳諧の作品、注釈、研究結果などが含まれています。また、データは、ネットワークに接続されており、世界中からアクセスが可能となっています。

データベースの利用

連歌・俳諧データベースの利用には、専門的な知識が必要です。しかし、データベースの設計者は、利用者が簡単にデータを探索できるように考慮しています。データベースは、研究者、学生、一般の読者に有益な情報を提供しています。

データベースの将来

連歌・俳諧データベースの将来は、ますます発展しています。データベースは、クラウドベース化する必要があり、さらに高度なAI技術を導入して、ユーザーにより良いサービスを提供することが期待されています。

書籍データベース

本書では、知識発見のためのデータベースとして、国際日本文化研究センターから公開されている「連歌データベース」を用いる。このデータベースは、連歌研究者の有力なツールである。

データベースの開発

データベースの開発は、長年にわたる研究の結果を反映しています。データの収集、管理、解析にあたって、多くの研究者が協力してきました。

データベースの利用者

データベースの利用者は、幅広い読者層を含んでいます。研究者、学生、一般の読者、さらには海外の読者まで、データベースへのアクセスが可能です。
新編国歌大典、CD・ROMに収録された全文データを使って行った「新編国歌大典」、CD・ROMに収録された全文データを使って行った「新編国歌大典」、CD・ROMに収録された全文データを使って行った「新編国歌大典」、CD・ROMに収録された全文データを使って行った「新編国歌大典」、CD・ROMに収録された全文データを使って行った「新編国歌大典」、CD・ROMに収録された全文データを使って行った「新編国歌大典」、CD・ROMに収録された全文データを使って行った「新編国歌大典」。
子を思い思わぬこと、またひるまかぬことの類似歌に、『古今和歌集』（九〇五巻）にある清原深義の『人を思ふ。心は路にあらねども、雲居にのみも、なき事あるかな』があることを発見した。この引用関係は、既存のどこも注釈書に採用されていないものだった。

従来の解釈では、兼輔の歌は子を思わぬことの通りを表すものと見なされている。しかし、『古今和歌集』にその本歌とみられる歌がみつかったこと。

ため、新たな解釈の可能が示された。竹田の研究を可能にしたのは、全文データの全文データを取扱い、CD-ROMに保存された全文データを脚本に保存された全文データを脚本に保存された全文データを、いうまでもなく、CD-ROMに収められた全文データと附属の検索システムは、そのままで全体部が解読困難である。全文データが全文データであるため、全情報が集約された全文データが全文データである。

テーマを介するデータをアクセスすることにより、技術者でなければならない。

全文データが想定外の目的で利用されることが想定外の目的で利用されることが想定外の目的で利用されることが想定外の目的で利用されることが想定外の目的で利用されることがあるため、研究者が必要である。
両者は、文学の世界にとどまらず、絵画、音楽、芸能などにも大きな影響を与えている。例えば、小説家が新作を発表する際、絵画とは独立した形で Blvd.を発表することによって、新たな観客層にまで及んでいる。また、読者や音楽家が新しい作品を発表する際には、その作品がどのように表現されているかを考慮することが重要となる。

ベトナムの文学家が新作を発表する際、週刊誌に寄稿することによって、新たな読者層にまで及んでいる。また、読者たちが新しい作品を発表する際には、その作品がどのように表現されているかを考慮することが重要となる。

日中、音楽家が新作を発表する際に、その作品がどのような表現されているかを考慮することが重要となる。
連歌・俳諧データベースからの知見発見

「連句集」に付属した作品は、俳諧の「連句集」に基づいて作られたものである。連句は、百韻など連歌作品から、優れた二句単位の付合を取り出したものと考えられる。

連句集には、俳諧の俳諧作品から、優れた三句単位の付合を取り出したものが含まれている。俳諧における「連句集」は、三物類を含むものが多い。

連句における三物類は、俳諧においては三句を含むものが多く、付句における「連句集」は、付句単位で番号を付与している。

前述の付合の方法は異なるが、俳諧においては三句を含むものが多く、付句においては番号を付与している。

連句はすべてひらがなで入力されており、五字、または七字単位で
区切られている。ただし、俳諧の一部の作品には、ひらがなの他の漢字を併記したものがある。また俳諧の一部の作品には、作者名が記載されていないことがある。多くの作品では作者名の入力は行われていない。

【手順1】
連歌・俳諧DB、このようなデータを加工し、表1-1のような形式の処理用データを作成した。そのデータ構成は、「作品名」「作成年月日（公暦）」「作成年（西暦）」「句番号」「句の六種類の項目からなる。」句はひらがなで記載され、「五・七文字の区切りにハイフンが挿入されている。作成手順の概略は、手順5で説明する。

【手順5】
① すべての五・七文字について、それが出現する句の付句に登場する五・七文字に出現度数を数える。これを「元句五・七出現度数」と呼ぶことにする。②「付句五・七出現度数」が2以上のある五・七文字のペアを抽出する。③それらが該当する前句・付句の全体を取り出し、異本を手作業で削除する。④残った5・7文字を手作業で語彙分解し、連想関係の妥当性を確認・修正する。そうして抽出された5・7文字を「連想語彙集」とする。
間百編五七巻にある「わらひつし」うらなれけないなあしかった
「石浦」付句の「ちとりなくこゑ」千鳥鳴声が共通する。
このように複数の例があるものは何らかの定型的な連想関係にある。
連想の妥当性を検証してみよう。前句の「あかしかた」
連想関係の妥当性を視覚的にチェックし、必要に応じて修正を加えた。
前例の例では、明石浦の例は「枕に千鳥鳴声」シリーズ。

 Leading to the idea of extracting some sentences, the sentence below describes the criteria for extracting sentences. For example, the sentence is '枕に千鳥鳴声' in the form of '枕に千鳥鳴声' which is a sentence.

Finally, in the form of '連想語彙' the sentence below describes the criteria for extracting sentences. For example, the sentence is '枕に千鳥鳴声' in the form of '枕に千鳥鳴声' which is a sentence.

年間の句を採取しているのは、大きな変化である。すなわち、「連想語彙」の中心点は、「連想関係の移行期であり、仏語史の中でも最変化

Leading to the idea of extracting some sentences, the sentence below describes the criteria for extracting sentences. For example, the sentence is '枕に千鳥鳴声' in the form of '枕に千鳥鳴声' which is a sentence.
（12）
〇年代までの動詞和歌集（全二集）の発表と「万葉集」をは
じめる太夫和歌集などの私撰集、および主要な私家集の和歌が二
八、八首収録されている。この和歌D.Bを利用して、各期の和
歌に占める「ほどき」を含む歌の数を数え、割合を比較してみ
た。
その結果が表1-5である。和歌の場合、「ほどき」の歌は、
一定している。出現率は連歌の場合よりはるかに高いが、年代に
よる出現率の変動ははっきりとみられない。したがって、「ほどき」
を取るとき、連想関係の変化は、和歌ではみられず、連歌特有の現
象だけが現れたのである。
このことから、連想関係を語るには、二字音や三字音といった短文
字列が有効であることがある。連想関係の候補を抽出するためには、
文字列に拘らず、二字音や三字音の候補を抽出することを試みた。

以上のことから、次章の考察に進むことになる。

注
(1) 村上善門『文化を計る』。朝倉書店、1973年2月
(2) 竹田正幸、福田信子『類似歌を探せ。デジタル国文学の新展開』。日経
(3) 勢田勝男『和歌の新研究。藤原氏の部』。同
(4) 勢田勝男『和歌の新研究。藤原氏の部』。同
(5) 勢田勝男『和歌の新研究。藤原氏の部』。同
(6) 勢田勝男『和歌の新研究。藤原氏の部』。同
(7) 勢田勝男『和歌の新研究。藤原氏の部』。同
(8) 勢田勝男『和歌の新研究。藤原氏の部』。同
（歌壇・歌林）、連歌（歌林）、大和歌会（昭和四七年）などを見たのちに、

「歌壇・歌林」では、連歌の文献をあらためて取りまとめ、その特徴を論じた。これに対し、

「大和歌会」では、連歌を含む日本文化の発展を記録することを目的に、

日本文学者の書籍を紹介し、その内容や影響を考察した。さらに、

「国文学書籍の読み方」では、連歌の研究方法を指導し、

連歌の文化史を解説し、その深みを追求した。これらを通じて、

連歌の魅力をより深く理解し、その価値を再評価することができた。
<table>
<thead>
<tr>
<th>作品集名</th>
<th>作品名</th>
<th>作成年月日</th>
<th>作成年</th>
<th>句番号</th>
<th>句</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00001</td>
<td>なはたかく、こゑはうへなし、ほとき</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00002</td>
<td>しるるきながら、みなまつのかせ</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00003</td>
<td>やまかけは、すすきみつ、の、なかねにて</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00004</td>
<td>つきはみねこそ、はしめられ</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00005</td>
<td>あきのひ、いてしも、まと、みえつるに</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00006</td>
<td>しかれのそらも、の、こ、あさき</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00007</td>
<td>くれことの一つゆ、は、そに、さ、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00008</td>
<td>さ、こ、こ、れ、こ、ろ、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00009</td>
<td>たひひの、またれ、しろや、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00010</td>
<td>けふよりの、の、は、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00011</td>
<td>かすめ、も、こ、さ、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00012</td>
<td>か、け、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00013</td>
<td>か、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00014</td>
<td>な、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00015</td>
<td>こ、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00016</td>
<td>と、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00017</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00018</td>
<td>あ、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00019</td>
<td>つ、</td>
</tr>
<tr>
<td>文和千句</td>
<td>第一：何人・なはたかく</td>
<td>文和五年</td>
<td>1355</td>
<td>00020</td>
<td>ま、</td>
</tr>
</tbody>
</table>
表1-2：既存の語群集への収録の有無（一部）

<table>
<thead>
<tr>
<th>見出し語</th>
<th>組語</th>
<th>運動会参加1445人数</th>
<th>修長発言1456人数</th>
<th>運動会参加1445人数</th>
<th>修長発言1456人数</th>
<th>運動会参加1445人数</th>
<th>修長発言1456人数</th>
<th>運動会参加1445人数</th>
<th>修長発言1456人数</th>
<th>運動会参加1445人数</th>
<th>修長発言1456人数</th>
<th>運動会参加1445人数</th>
<th>修長発言1456人数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>動物名</td>
<td>種類</td>
<td>動物名</td>
<td>種類</td>
<td>動物名</td>
<td>種類</td>
<td>動物名</td>
<td>種類</td>
<td>動物名</td>
<td>種類</td>
<td>動物名</td>
<td>種類</td>
<td>動物名</td>
<td>種類</td>
</tr>
<tr>
<td>動物</td>
<td>...</td>
<td>動物</td>
<td>...</td>
<td>動物</td>
<td>...</td>
<td>動物</td>
<td>...</td>
<td>動物</td>
<td>...</td>
<td>動物</td>
<td>...</td>
<td>動物</td>
<td>...</td>
</tr>
<tr>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
<td>...</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（略）
<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>質問</th>
<th>1</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
<th>4</th>
<th>5</th>
<th>6</th>
<th>7</th>
<th>8</th>
<th>9</th>
<th>10</th>
<th>11</th>
<th>12</th>
<th>13</th>
<th>14</th>
<th>15</th>
<th>16</th>
<th>17</th>
<th>18</th>
<th>19</th>
<th>20</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>項目</td>
<td>質問</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td>15</td>
<td>16</td>
<td>17</td>
<td>18</td>
<td>19</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td>質問</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td>15</td>
<td>16</td>
<td>17</td>
<td>18</td>
<td>19</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>表 1-3 出現度数が高い連想語彙（括弧内は度数）</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>-----------------------------------------------</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>①つき(29)</td>
<td>①あき(91)</td>
<td>①ほととぎす(120)</td>
<td>①つき(52)</td>
<td>①つき(18)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>②なみ(27)</td>
<td>②やまと(83)</td>
<td>②あき(109)</td>
<td>②ほととぎす(52)</td>
<td>①ほととぎす(15)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>③あり(25)</td>
<td>③つき(62)</td>
<td>③つき(99)</td>
<td>③こえ(45)</td>
<td>③うぐいす(11)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>④かえる(24)</td>
<td>④かぜ(80)</td>
<td>④こえ(98)</td>
<td>④うぐいす(44)</td>
<td>④はな(10)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑤あき(20)</td>
<td>⑤ひると(75)</td>
<td>⑤かぜ(97)</td>
<td>⑤みち(32)</td>
<td>④やまと(10)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑥そで(10)</td>
<td>⑥ほととぎす(70)</td>
<td>⑥やまと(69)</td>
<td>⑥はな(30)</td>
<td>③あき(8)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑦ありふけ(16)</td>
<td>⑦こえ(65)</td>
<td>⑦なく(62)</td>
<td>⑦やまと(30)</td>
<td>③かぜ(8)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑧かすみ(16)</td>
<td>⑧こころ(65)</td>
<td>⑧はな(60)</td>
<td>⑧かぜ(28)</td>
<td>⑧はな(8)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑨はな(16)</td>
<td>⑨はな(54)</td>
<td>⑨うぐいす(57)</td>
<td>⑨はる(26)</td>
<td>③あける(7)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑩こえ(15)</td>
<td>⑩はる(54)</td>
<td>⑩はる(54)</td>
<td>⑨いち(25)</td>
<td>⑨こえ(7)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑪やまと(15)</td>
<td>⑪ひると(33)</td>
<td>⑪よる(52)</td>
<td>⑪あき(22)</td>
<td>③ひかり(7)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑫かぜ(14)</td>
<td>⑫なか(49)</td>
<td>⑫かげ(41)</td>
<td>⑫かすみ(21)</td>
<td>⑩とる(6)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑬まつ(14)</td>
<td>⑬かすみ(47)</td>
<td>⑬かくれ(41)</td>
<td>⑬こも(20)</td>
<td>⑬とる(8)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑭よる(14)</td>
<td>⑭かすみ(41)</td>
<td>⑭かすみ(29)</td>
<td>⑭とる(19)</td>
<td>⑭のどか(8)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑮はる(13)</td>
<td>⑮かげ(37)</td>
<td>⑮そら(37)</td>
<td>⑮よる(17)</td>
<td>⑮かすみ(5)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑯つゆ(12)</td>
<td>⑯なふる(30)</td>
<td>⑯つゆ(36)</td>
<td>⑯まくら(16)</td>
<td>⑮かげ(5)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑰さくら(11)</td>
<td>⑰なみ(35)</td>
<td>⑰まくら(35)</td>
<td>⑰おどろ(15)</td>
<td>⑰さきざりす(5)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑱なな(11)</td>
<td>⑱かくれ(33)</td>
<td>⑱そで(34)</td>
<td>⑱くさ(15)</td>
<td>⑱しおり(5)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑲はる(11)</td>
<td>⑲まつ(35)</td>
<td>⑲こも(33)</td>
<td>⑲かくれ(15)</td>
<td>⑳もち(5)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑳ふじ(11)</td>
<td>⑳ななく(34)</td>
<td>⑳ふね(31)</td>
<td>⑳そら(15)</td>
<td>⑳むらさめ(5)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

(18)
表１－４ 連歌中「ほととぎす」を含む句数の割合

<table>
<thead>
<tr>
<th>時代区分</th>
<th>連歌DB句数</th>
<th>ほととぎす句数</th>
<th>割合(%)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>17641</td>
<td>45</td>
<td>0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>68048</td>
<td>523</td>
<td>0.8</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>64437</td>
<td>394</td>
<td>0.6</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>19375</td>
<td>151</td>
<td>0.8</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>25641</td>
<td>141</td>
<td>0.5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表１－５ 和歌中「ほととぎす」を含む歌数の割合

<table>
<thead>
<tr>
<th>時代区分</th>
<th>和歌DB総歌数</th>
<th>ほととぎす歌数</th>
<th>割合(%)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>158236</td>
<td>4510</td>
<td>2.9</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>47597</td>
<td>1390</td>
<td>2.9</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>2185</td>
<td>50</td>
<td>2.3</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0.0</td>
</tr>
</tbody>
</table>
連想語彙ネットワークの解析

第二章 連想語彙ネットワークの解析

前章では、文書の連想語彙ネットワークから連想語彙を抽出し、抽出結果に対する考察を行った。本章では、連想語彙ネットワークの全体像、その時代的変遷について考察したものである。

1 連想語彙ネットワークの全体像

前章で抽出された六三〇語の連想語彙の出現頻度を出し、頻度の順位に従ってその結果を示した。前章で説明したように、括弧内は出現度数と『古事類苑』の索引に従う部類分けした結果である。

第2章 連想語彙ネットワークの解析

本研究の意義等については、前章で述べた通りであるが、従来の国文学における研究という点で異なるので、ここに簡単に記しておく。従来の連想語彙研究は主に作品の解釈から分析を行うという手法を探していた。ただ、本研究はそのような方法を採用しない。本研究の解析方法は、まずすべての作品（）を等価なデータとして扱い、データ解析を行う。このようなにして得られた結果から問題点を抽出し考察を加える。もし必要な場合には、実際の
図2-1 連想語彙ネットワークの全体図
この図に表われた傾向を図示し、図2-3のようになる。

図2-2 連想語彙(全体)の位置

図2-3 連想語彙(全体)の概念図

＜各領域要素＞
I : 春・夕（日没前）
II : 春・夜（日没後）
III : 秋・夜（日没後）
IV : 秋・夕（日没前）
表 2-1 連歌・俳諧DBの時代区分と連想語彙の割合

<table>
<thead>
<tr>
<th>【時代区分】</th>
<th>詞の句数（件）</th>
<th>抽出句数（件）</th>
<th>抽出比（%）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 1859年以前 宗祇の活躍以前</td>
<td>17641</td>
<td>275</td>
<td>1.56</td>
</tr>
<tr>
<td>2 1850〜1851年 宗祇の活躍から1860年</td>
<td>68048</td>
<td>764</td>
<td>1.12</td>
</tr>
<tr>
<td>3 1850〜1860年 宗祇の活躍から1860年</td>
<td>64637</td>
<td>809</td>
<td>1.35</td>
</tr>
<tr>
<td>4 1870〜1899年 菊之助の活躍から1900年</td>
<td>19375</td>
<td>423</td>
<td>2.18</td>
</tr>
<tr>
<td>5 1900年以降 活躍以後</td>
<td>25641</td>
<td>116</td>
<td>0.45</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>199142</td>
<td>2447</td>
<td>1.25</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(24)
表2-1で連歌・俳諧DBに収録されている句句に対する抽出句数の割合（抽出率）をみると、とりわけ4と5の時期に特徴が見られる。4の時期は元のデータが少ないにもかかわらず、抽出率が高い（2〜5％）。本研究では、5〜7単位で連唱関係にある語彙を抽出しているから、紹介の活躍期に5〜7単位の長く、かつ定型的な付句が多く作られたことを示す。数値は物語っている。反対に、5の時期では元の付句数は4の時代よりも多いにもかかわらず、抽出率が極端に低くなっている（0〜4％）。

長さが付句の付属にあるかどうかを考慮する。これが短い付句である。これは前代への反映と反動の現れであるのかもしれない。4の時期に顕著であった長い付句では付句に対する、反映と反動である。

第1は、5の時期に、付句の単位が五〜七の単位よりも短い単位心へと付属の付属が変化したかかもしれないということである。金子政治郎は、二條良基（三三〇三八二）の『俳句抄』（三三〇五三）に挙げられている主要な付属の型を以下のようにまとめている。

四手付：句中の複数の詞を取り上げ、それぞれの詞（寄合、呼ぶ）で付句を構成する。山の風景など、ありのままに並べて付く。山に春に、風景など、ありのままに並べて付く。山に春に、風景など、ありのままに並べて付く。山に春に、風景など、ありのままに並べて付く。山に春に、風景など、ありのままに並べて付く。山に春に、風景など、ありのままに並べて付く。
仏教の祖、松永貞徳（五七九～六五三）が活躍した時期にあり、そういった仏教の影響を強く受けたという可能性も十分考えられる。

実際、天正二年（一五七九）に紹巴が豊臣秀吉（一五三六～
一五九八）のために進献した『全仏抄』という書物には、「付合・
寄合の事さして定の事有べからず侯、古今の序にも人の心を種とし
て萬の言の葉そなれたりけると御入侯、唯今も面白きと思召候事を
仰出され候へば、をのつから古歌の心にも相叶候、『古き連歌』は只
言葉の縁のみをとり付、心大形の句共も御入候る、唯今は用付と
て嫌事多候なといった連歌の規則を緩和する、もしくは仏語を志
向する態度をもとれる言葉が見られるのも、また事実である。

紹巴の没後、連歌界をまとめて上げるだけの力をもった宗匠がで
なかったことや、連歌があらゆる階級、地方にまで広まったという
事実などが招いた結果かもしない。ただしだ、『宗養死して、連歌
断絶也』、あるいは紹巴が連歌の流れに努めたことを評して、『我
身の連歌をややすとする、更にふかき事を錙ける、いかなる量
みも思いついた道に入ることたえかかり』といった『道歌聞書』
（四一八〇年成立）の言葉を見ると、すでに宗匠が没した時点で、
宗匠以来の連歌が廃れてしまったこと、紹巴が連歌を大衆に広めは
ななかった。しかし、用語の違いを超えて連歌から仏語、仏語の連
歌への道を考えて見えると何らかの新しい知見が得られる可能性は十分
にあると思われる。

これら三つの可能性のうち、いずれか主たる原因であったのか、
俄には判断しがねるが、このような要因が複合的に合わさった結果、
それが実際の連歌作品に反映され、表２・１のような結果となっ
てあらわれたものとも推察される。

従来の連歌・仏語研究は、４や五の時期はあまり注目されてこ
なかった。しかし、用語の違いを超えて連歌から仏語、仏語の連
歌への道を考えて見ても何らかの新しい知見が得られる可能性は十分
にあると思われる。

２・３ 连想語彙ネットワーク図の変化

次に連想語彙ネットワーク図における時代変化を見てみよう。連
想語彙ネットワーク図および概念図を描くためには、ある程度抽
出仮数のばらつきを少なくし、かつネットワーク図および概念図
が描ける程度の量を確保しなければならない。そこで、二概念図作
(28)
表2-2 連歌・俳諧DBの時代区分と
連想語彙の割合

<table>
<thead>
<tr>
<th>連想語彙作成のための時代区分</th>
<th>DB内語彙数</th>
<th>DB外語彙数</th>
<th>調整後率 (%)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 + 2 言葉の残文まで</td>
<td>85689</td>
<td>1039</td>
<td>1.21</td>
</tr>
<tr>
<td>1550-1559年句集の録偽から残文まで</td>
<td>64437</td>
<td>869</td>
<td>1.35</td>
</tr>
<tr>
<td>月5-6句組の編集以後</td>
<td>45616</td>
<td>539</td>
<td>1.26</td>
</tr>
</tbody>
</table>

このための時代区分（表2-2）を設定した。このような時代区分をおのおのについて考察を行った。このため、概念図を実現するためには、変化することである。ここではネットワーク図作成の為に使用し

図2-4 1502年以前の連想語彙ネットワーク図
図2-5 1503〜1562年の連想語彙ネットワーク図

図2-6 1563年以降の連想語彙ネットワーク図
この解析の結果、いくつか個々の事象について変化が見られた。最も特徴的なものは、「ひとり」という単語の位置が特に重要である。そこで、図2-7の位置を図2-8に示した。図2-8では、これら語の変動を示す位置を図2-9に示した。

図2-7 「ひとり」の位置変化

1: 1502年以前  2: 1503〜1563年  3: 1564年以後

○：ひとり、△：ヤマ、●：ひと

この解析の結果、いくつか個々の事象について変化が見られた。最も特徴的なものは、「ひとり」という単語の位置が特に重要である。そこで、図2-7の位置を図2-8に示した。図2-8では、これら語の変動を示す位置を図2-9に示した。

図2-7 「ひとり」の位置変化

1: 1502年以前  2: 1503〜1563年  3: 1564年以後

○：ひとり、△：ヤマ、●：ひと
表2-3 連歌寄合を中心に「ほととぎす」の付合語（鎌倉・室町期）

<table>
<thead>
<tr>
<th>藤原流</th>
<th>近藤流</th>
<th>濱喜流</th>
<th>和田流</th>
<th>宍戸流</th>
<th>宮内流</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>成功年</td>
<td>成長年</td>
<td>成長年</td>
<td>成長年</td>
<td>成長年</td>
<td>成長年</td>
</tr>
<tr>
<td>5568</td>
<td>5569</td>
<td>5570</td>
<td>5571</td>
<td>5572</td>
<td>5573</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表2-4 連歌寄合を中心に「ほととぎす」の付合語（安土桃山・江戸期）

<table>
<thead>
<tr>
<th>番名</th>
<th>番名作法集</th>
<th>番名花集</th>
<th>番名集</th>
<th>番名集</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>成功年</td>
<td>成長年</td>
<td>成長年</td>
<td>成長年</td>
<td>成長年</td>
</tr>
<tr>
<td>5568</td>
<td>5569</td>
<td>5570</td>
<td>5571</td>
<td>5572</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(30)
表2-5 俳諧寄合書における「ほととぎす」の付合語（江戸期）

<table>
<thead>
<tr>
<th>付合語</th>
<th>常楽</th>
<th>神楽</th>
<th>神楽</th>
<th>神楽</th>
<th>神楽</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>東風系</td>
<td>常楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
</tr>
<tr>
<td>東風系</td>
<td>常楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
</tr>
<tr>
<td>東風系</td>
<td>常楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
</tr>
<tr>
<td>東風系</td>
<td>常楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
</tr>
<tr>
<td>東風系</td>
<td>常楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
</tr>
<tr>
<td>東風系</td>
<td>常楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
</tr>
<tr>
<td>東風系</td>
<td>常楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
</tr>
<tr>
<td>東風系</td>
<td>常楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
</tr>
<tr>
<td>東風系</td>
<td>常楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
</tr>
<tr>
<td>東風系</td>
<td>常楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
<td>神楽</td>
</tr>
</tbody>
</table>

なお、能楽における付合語は次のようにある。

表2-3からわかるのは、前期の寄合書とされる『連読集』は『ほどとぎす』の付合語に「やま」に関する語彙は見られない。

ただしこの寄合書は「ほどとぎす」の付合語に「やま」に関する語彙は見られない。}

なお、能楽における付合語は次のようにある。
0年以前に連歌にも流していた可能性はある。そしてその源流が「伝来和歌集」巻六「歌相弐」にある。「なき人のやなにかなよばれ、つると早く連歌の世界で付合となっていておらしかない。」残念ながら資料として二世紀（五〇〇年代）の寄合書が少ないのだから、正確にその時期を比定することはできないが、天正七年（一五七九）の寄合書をもつ細川幽斎（一五三四～一六〇〇）「連歌作法書」に、「時鳥の鳴るには」という付合語として「なき人ふる」が挙がっていること、そして「雑葉集」の成立が慶長八年（一六〇三）以前であることを考えると、「なき人」は「ほととぎす」となり、その付合語となっているものと思われる。

ところで、「に」との繋がりはもっとかくとして、寄合書において「ほととぎす」と「やま」の関係性が強まるのは、室町中期の寄合書においてである。文明四年（一四七二）の寄合書をもつ「藤原寄合集」に降ろしの連歌寄合集には、多くの山の名が付合語として列挙されている。特徴的なのは、そのほとんどが特定の山であるということである。いずれにせよ、鎌倉期にはあまり見られなかった「ほととぎす」と「やま」の連想関係が、室町期に定着し、安土桃山期を経て江戸期に至るまで多用されたであろうことは想像に難くない（表二・三・四参照）。この室町中期以降の「ほととぎす」と「やま」の連想関係の定着が②の時代以降の「ほととぎす」と「やま」の連想関係を強める要因であった可能性がある。

しかししながら、実際の抽出語彙に関しては、むしろ①の時代が最も多い。具体的な例（見出し語による付合例）と数字を挙げると、「わけるほどとぎす」→「ねざめのあかつぎのやま」の一例、「ことのほよいのやま」の一例、「ほたるにゆぐれ」の一例などである。これらの付合例は、①の時代に見いただされるに対し、②の時代では、例へば「ほたるのそら」→「ほととぎす」のみである。③の時代においては「ほたるのそら」→「ほととぎす」が直接付合となっている例は見られなかった。

一方、「ほととぎす」と「ひと」との連想関係は見出せなかった。という理由は、概念図の解析から得られた両者の接近関係というのではなく、「ほととぎす」と「ひと」との連想関係が成立し、強化されたからである。むしろ他の景物との組合せ、間接的な影響関係によって導かれたものと考えられる。
表 2-6: 「ほととぎす」が詰み込まれる位置

<table>
<thead>
<tr>
<th>歌集名</th>
<th>成立年（西暦）</th>
<th>夏の組合</th>
<th>夏以外の組合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>古今和歌集</td>
<td>905年</td>
<td>2.8%</td>
<td>1.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>俊風和歌集</td>
<td>855</td>
<td>2.0%</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>花著和歌集</td>
<td>1005年</td>
<td>2.0%</td>
<td>1.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>合唱和歌集</td>
<td>1087</td>
<td>2.3%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>鐵文和歌集(二度末)</td>
<td>1125</td>
<td>3.5%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>林戸和歌集</td>
<td>1151</td>
<td>1.9%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>高千穂和歌集</td>
<td>1178</td>
<td>2.2%</td>
<td>0.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>前賢和歌集</td>
<td>1205</td>
<td>1.9%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>新古今和歌集</td>
<td>1232</td>
<td>2.0%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1251</td>
<td>2.0%</td>
<td>0.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>錦絵和歌集</td>
<td>1265</td>
<td>1.9%</td>
<td>0.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1279</td>
<td>1.9%</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1302</td>
<td>2.6%</td>
<td>0.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1312</td>
<td>1.5%</td>
<td>0.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1320</td>
<td>2.8%</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1348</td>
<td>1.5%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1356</td>
<td>3.3%</td>
<td>0.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1359</td>
<td>2.8%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1364</td>
<td>2.0%</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1366</td>
<td>1.5%</td>
<td>0.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1389</td>
<td>2.0%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1381</td>
<td>2.5%</td>
<td>0.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1395</td>
<td>2.1%</td>
<td>1.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1399</td>
<td>3.8%</td>
<td>1.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1439</td>
<td>1.8%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1458</td>
<td>1.1%</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1502</td>
<td>2.6%</td>
<td>0.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>順義集</td>
<td>1503～1510</td>
<td>2.2%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>美玉集</td>
<td>1514</td>
<td>1.7%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>楊杉集</td>
<td>1575</td>
<td>2.7%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>景楽集</td>
<td>1677</td>
<td>3.1%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>周成集</td>
<td>1690</td>
<td>2.2%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

このようなイメージの源流は中国にあり、最も早い例として揚雄の『鶴』がある。

このようなイメージの源流は中国にあり、最も早い例として揚雄の『鶴』がある。

これらの鶴の発展の過程で、鶴が存在することが伝説である。伝説は、平安時代の初期にはすでにこのイメージが入っていたということを示す。

これは、鶴の在世においては、その映像が鳥となり、春から夏、秋から冬にこの世に飛来するという伝説である。これは、平安時代においてはすでにこのイメージが入っていたということを示す。

表 2-6: 「ほととぎす」が詰む位置

<table>
<thead>
<tr>
<th>歌集名</th>
<th>成立年</th>
<th>夏の組合</th>
<th>夏以外の組合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>古今和歌集</td>
<td>905年</td>
<td>2.8%</td>
<td>1.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>俊風和歌集</td>
<td>855</td>
<td>2.0%</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>花著和歌集</td>
<td>1005年</td>
<td>2.0%</td>
<td>1.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>合唱和歌集</td>
<td>1087</td>
<td>2.3%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>鐵文和歌集(二度末)</td>
<td>1125</td>
<td>3.5%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>林戸和歌集</td>
<td>1151</td>
<td>1.9%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>高千穂和歌集</td>
<td>1178</td>
<td>2.2%</td>
<td>0.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>前賢和歌集</td>
<td>1205</td>
<td>1.9%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>新古今和歌集</td>
<td>1232</td>
<td>2.0%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1251</td>
<td>2.0%</td>
<td>0.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>錦絵和歌集</td>
<td>1265</td>
<td>1.9%</td>
<td>0.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1279</td>
<td>1.9%</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1302</td>
<td>2.6%</td>
<td>0.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1312</td>
<td>1.5%</td>
<td>0.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1320</td>
<td>2.8%</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1348</td>
<td>1.5%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1356</td>
<td>3.3%</td>
<td>0.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1359</td>
<td>2.8%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1364</td>
<td>2.0%</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1366</td>
<td>1.5%</td>
<td>0.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1389</td>
<td>2.0%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1381</td>
<td>2.5%</td>
<td>0.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1395</td>
<td>2.1%</td>
<td>1.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1399</td>
<td>3.8%</td>
<td>1.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1439</td>
<td>1.8%</td>
<td>0.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1458</td>
<td>1.1%</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>新作和歌集</td>
<td>1502</td>
<td>2.6%</td>
<td>0.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>順義集</td>
<td>1503～1510</td>
<td>2.2%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>美玉集</td>
<td>1514</td>
<td>1.7%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>楊杉集</td>
<td>1575</td>
<td>2.7%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>景楽集</td>
<td>1677</td>
<td>3.1%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>周成集</td>
<td>1690</td>
<td>2.2%</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>
なき人のあるがゆかもほかどきさすかけてねののみな
とあって、「ほととぎす」が死ぬに山通る鳥というイメージがす
でにあったことがわかる。また、この「なき人」の歌は「古今和
歌集」巻二第二（哀歌）にある。「はやしとし」の歌は「万葉集」
で「ての山」に先述したように「拾遺和歌集」にあら伊勢の歌、
そして「やまとつなはしきや」の歌は「万葉集」第一〇巻（夏雑歌）にあ
る歌である。ただしこ、「国歌大観」などでは「やまとつなはしきや
らもほととぎすながなくこととなき人としもく」という歌の字
句になっている。
さらに、藤原顕昭（二〇三〇頃）二〇頃が、文治年間（一
一八五～一九〇）に著したところある歌学書『神中抄』には次
のような記述が見られる。

（35）
（36）
（3）
これらを鑑みると、一五〇〇年以前に取り入れられた「ほどとき
す」の死のイメージがそれ以前に増幅され、そして江戸時代になる
とそれが俳諧の寄せ書きへと流れ込んでいったのではないかと推察さ
されるとところである。

では、実際に俳諧・俳諧DBで事の実態を検証してみよう。まず
さが死のイメージをもっているのが明らかである句を、以下列記す
る前にある数字はDBに付けられた番号である。

○頼証院会千句（第九：何人『水の心』：四年九月）

2291：にこぶたども一艘ねぐる

2292：のちのよこのさらかなしだめのそら

2293：ないひとりねむらさし

424：なめるとさす

224：つれてかへらむ

2241：なめるとさす

2242：ちのよこのさらかなしだめのそら

2243：ないひとりねむらさし

2244：つれてかへらむ

○北畠家連歌（書院部：一四七〇年）
連歌・俳話DBより抽出した連歌語彙ネットワークの解析

241r： adipiflum - nomum - 孟らくものよう

241v： adipiflum - fl. - 孟らくものよう

黄絵『伊地知本（巻二・夏・四七八四）』
306： どうか写す - なかよしを - 一五〇一年

成立不詳・心敬以前（何路「こもろあらば」/ 留詠：「一四七五」

難波田千句（第八・何路「うるそるる」：「一四八二年」

葉守千句（第二・何路「しるやくと」：「一四八七年」

東山千句（第五・唐何「きのこひ」：「一五六八年」

那智筆『北野天満宮本（巻上：一五一一五年）』
38： わかよのなかそたのむかたな

伊勢千句（第一・何船「あさひかげ」：「一五三二年」

（39）
32. なたてつゆけきくさまもかみか
83. とときすよあつきになきすてて
84. なき心をふる－でそひかた

伊勢千句（第五、何人「ふかくないて」二五三年）

天文二年間百選「夢想」取り揃え。「あけぼのの」二五三年

五日句（第一、薄荷「あけぼのの」二五八年）

その他、成立年はわからないが、『諸家歳次連歌抄』に

945. ゆめなにけるよなきひのあと

この結果から、「ほどときす」に死のイメージがはっきりと表れ

実際には、一五〇〇年以前にも死のイメージを持つ句が少なくなく

始めるのは、一四九九年以降のことであることがわかる。そして、

945. ゆめなにけるよなきひのあと

この例が見られる。

この世のつまりは「もののよ」にいる鳥として「ほどときす」と「のちのよ」の関係で読まれたものが多かったことに気付く（例中例）。という

ことばは、連歌にそれまでの多いことに気付く（例中例）。という

イメージされていたと言えよう。しかしながら、これらの連歌に、
死のイメージはそれほど強烈に表現されていない。それに比べ、時代区分①、②に相当する時代の連歌には死のイメージが濃厚に表現されている。すなわち、③の時代に「ほどとぎす」に死のイメージが増幅、強化され、定着するようになっているものと思われる。これにより、『天若年間書架』や『名院遥香千句』などの例、死のイメージが顕著である。
以上のことから、連歌においては、ほどとぎすに死のイメージが付加され、増幅されていったのが②の時期、つまりは連歌節でさえも、仏事の死後の表現がわかるだろう。
では仏事ではどうだろう。連句（仏事系の連句）では、

○ 新続大功波集 (巻二：夏：大六六院)
指定年：大六六院
指定句：

○ 貴徳俳諧記 (百唱・いしまるやや：大六六院)
指定句：

付句なら、

○ 菖蒲三座連句 (三九巻)
指定句：

○ 新続大功波集 (巻五：賀：大六六院)
指定句：

○ などを

(41)
発句なら、
新続大楽波集（巻一四：夏発句上・一六六〇年）
382：もくくたにや、たふたひとあたの、ほととぎす
３８２：あふれてた、さんみやくさんばたいの、ほととぎす

〇 狛蓑（巻一：夏・一六九一年）
「しぼりは、あかつかてな」ほととぎす

〇 狛蓑（巻一：夏・一六九一年）
「しぼりは、あかつかてな」ほととぎす

〇 狛蓑（巻一：夏・一六九一年）
「しぼりは、あかつかてな」ほととぎす

以上をまとめて、「ほととぎす」は、その直接的な接近（付合語としての接近）や離反ではなく、単なる言葉の直接的な接近（付合語としての接近）から離反ではなく、単なる言葉の直接的な接近（付合語としての接近）から離反ではない。「ほととぎす」が死のイメージを伴ったために間接的に起こったものであったことが明らかになった。この事実は、それから離反のない、単なる言葉の直接的な接近（付合語としての接近）から離反ではない。「ほととぎす」が死のイメージを伴ったために間接的に起こったものであったことが明らかになった。この事実は、それから離反のない、単なる言葉の直接的な接近（付合語としての接近）から離反ではない。「ほととぎす」が死のイメージを伴ったために間接的に起こったものであったことが明らかになった。この事実は、それから離反のない、単なる言葉の直接的な接近（付合語としての接近）から離反ではない。「ほととぎす」が死のイメージを伴ったために間接的に起こったものであったことが明らかになった。この事実は、それから離反のない、単なる言葉の直接的な接近（付合語としての接近）から離反ではない。「ほととぎす」が死のイメージを伴ったために間接的に起こったものであったことが明らかになった。この事実は、それから離反のない、単なる言葉の直接的な接近（付合語としての接近）から離反ではない。「ほととぎす」が死のイメージを伴ったために間接的に起こったものであったことが明らかになった。この事実は、それから離反のない、単なる言葉の直接的な接近（付合語としての接近）から離反ではない。「ほととぎす」が死のイメージを伴ったために間接的に起こったものであったことが明らかになった。この事実は、それから離反のない、単なる言葉の直接的な接近（付合語としての接近）から離反ではない。「ほととぎす」が死のイメージを伴ったために間接的に起こったものであったことが明らかになった。この事実
連歌・俳諧 DB による抽出した連想語彙ネットワークの解析

度が高い連想語彙の上位２位の時代変化を調べたものであるが、1の時代では、「ほととぎす」は上位二位に入っている。ところが 2 の時代では、『ほととぎす』は上位二位に入っている。さらに 3 の時代以降は一例に「ほととぎす」を含む句数を調べたものの、ここででも 1 の時代が他の時代に比べ、「ほとんどとぎす」を含む句数が少ないとことがわかる。表 1-5 は和歌中「ほととぎす」を含む句数を調べたものだが、これらを一旦すると、和歌においては「ほとんどとぎす」が大体一定の量詠まれていた時代においては「ほとんどとぎす」が自体が寄与していないということが考えられる。

しかし、連想関係を深めるのが、種々の連想寄稿書が作られた室町中期以降（五〇〇年以降）であることを考えると、「ほとんどとぎす」の付合者がまだ定着しておらず、ある程度自由な「付け」がなされていなかった可能性が高いと考えられる。

図「ほとんどとぎす」の抽出率（C/A）

C：「ほとんどとぎす」の句数、A：DBの句数

図 2-8 「ほとんどとぎす」抽出率の時代変化
なかぬなら鳴くまで待とう時鳥
家康

この話は、『自然のことながら』後世（江戸時代後期）に作られ
たものである。

例えば、柳成鏡（一三七九一一八一一）の『鶯図』（一七二
頃一八四四年）巻一には、「連歌其心自然に観る」と題した
以下のような一文がある。

古物語にあるや、また人の作り事や、夫はしひれど、信長秀
吉、乍恐神君御参会の時、卯月のころ、いまで郭公を聞ずと
古語里出るに、信長

鳴ずは殺して仕まへ時鳥

とありしに秀吉

とありしに秀吉

鳴すとも鳴して聞ふ時鳥

となりしに秀吉

なかぬなら鳴ぬのもよし郭公

と鳴けるとや。

【終了】
連歌・俳題DBより抽出した連想集ネットワークの解析

どうのような構造になっているのか。そしてそれは、時代によってどう
どのように変化するのか。それについて、どんな実例があるのかを探っ
た。

まず、連想集ネットワークの全体像は、春と秋を両極におく季
節の軸で二分され、春（春歌）と秋（秋歌）の時間軸によって
二分された。

また、各時代での連想集の抽出率を比較した結果、経の時代
と、その後の時期に特徴が現れた。

経の活躍が活発な時代の抽出率
は非常に高いが、反対に経後の抽出率
は極端に低かった。この
背景には、付合の変化
あるいは連歌の簡略化と質的変化の影響
を考えられる。

そこで、ネットワーク図と概念図の時代変化をえた結果、「ほと
ど」と「大平」、「ひと」といった語彙の相対的な関係性に大きな
変化が見られた。具体的には、時代の下ると「ほと」と「大平」は「や
まさ」との連想関係を深め、「ひと」という語が町村初期を強
化したのではなく、「ほと」と「大平」という語が町村初期を強
化したのではなく、さらに、「ほと」と「大平」が連想集として抽出される例が、宗
の活躍期以後に急激に増えて、そして経後の急激な減少した。

（注）

1. Association for East Asian Linguistics 社のAdoWv 2.1 を用い、図化には、「Graph Menu」

2. 伊地知鉄男編『連歌集解説』（新編日本古典文学全集』六

3. 金子金治郎『続写』（続解日本古典文学全集』六

4. 畑木田守男編『二承集』（五五五年成立）に、経の言葉として

5. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

6. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

7. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

8. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

9. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

10. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

11. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

12. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

13. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

14. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

15. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

16. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

17. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

18. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

19. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

20. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

21. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

22. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

23. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

24. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

25. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

26. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

27. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

28. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

29. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

30. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

31. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

32. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

33. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

34. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

35. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

36. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

37. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

38. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

39. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

40. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

41. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

42. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

43. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

44. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六

45. 薬師寺光男『続写』（続解日本古典文学全集』六
連歌・俳諧DBより抽出した連想語彙ネットワークの解析

ここでは、他の書籍に見られない「ほどともさ」解釈が見られる。

山は「あしきの」という枕詞をもつことからも解釈される。佐藤弘はこの枕詞をもつことからも解釈される。「山中世界観」という。佐藤弘によると「起説文の解析から、山中時代の観念が日本で一般化することは、彼岸世界を縮小し、現在の自決化していく江戸時代以降の観念と考えられる。佐藤弘によると「起説文の解析から、中世では「地獄は近、院奥は遠い」という仏教本来の世界観が、かな

（ちのよのやま、「しのやま」という用例が多い。くこも説えられる。和歌や連歌の俳調でこの「やま」のイメージが中央省の精神を、講談社編集会、平成十八年四月、五一頁に載る。

次に「遙かに」という表現が連歌では見られないことがわかる。『原彰日録』における「おたおき」とは、『知研女子大学研究論収』第二号から第六号に翻刻があり、引用部分は第三号。里村倉体（一五〇。一四五。文尾）に依託された俳句『連

此では、たおさを使った場合では「ほどともさ」とは違う意味で付けるよう促している。当時このような意見が主流だったのか否かはわからないが、こうしての「たおさ」とはその詞を使った必然性から特別な

（51）
日本語のテキストです。
連想語彙用例辞典
連歌の発想 －連想語彙用例辞典と、そのネットワークの解析

連想語彙用例辞典

山田奨治・岩井茂樹 編著

國際日本文化研究センター
【凡例】
本辞書は、日文研連歌・俳諧データベースから抽出し、編集した連想語彙をもとに、文書成形ソフトpLaTeX2eを用いて版下を作成した。

【本辞書の構成】
＜目次＞見出し語と、前句見出し語の頁数を記したもの
＜本文＞見出し語（502項目を収録）、小見出し（①前句見出し語、②付句見出し語）、用例
＜索引＞小見出し索引

【見出し】
(1) 本文各項目の見出し語は、太字（ゴシック）で記した。
(2) 項目中には、つぎの二種類の小見出しをつけた。
  ①前句見出し語：連歌の前句として抽出した語
  ②付句見出し語：連歌の付句として抽出した語

【配列】
(1) 見出し語（太字）は五十音順に配列した。ただし、濁点のつくものは、清音が終了した後に配置した。
(2) 小見出しも見出し語と同様に配列した。

【用例】
各句の実例を、前句（上段）、付句（下段）の順に記した。さらに、付句の下に作品名、巻名、成立年代を記した。成立年代が全くわからないものについては、空白、もしくは「成立時不明」とした。

【表記】
(1) 見出し語、小見出し語、共に現代語、通用漢字、ならびに現代仮名づかいで表記し、古語は一切用いないようにした。
  例）あききぬ（用例）→あき（見出し語）、秋が来る（小見出し語）
(2) 小見出し語の上に読み仮名を小文字で記した。
(3) 小見出し語は、できる限り終止形とした。なお、現代語訳の都合で命令形や助詞が語尾となっている例も一部ある。
  例）はなをみて（用例）→花を見る（小見出し）
(4) 小見出し語に助動詞がある場合、現代語訳するか、あるいは現代語訳する必要が認められないものについては無視して割愛した。
  例１）ころもうつるむ（用例）→夜打つ（小見出し語）
  例２）おもははや（用例）→思いたた（小見出し語）
目 次

あお ................................................................. 55
  あおばのはなのあと（青葉の花の後） .......................... 55
  あおやぎ（青柳） ........................................... 55
  あおやぎのいと（青柳の糸） ................................. 55
  あおやぎのかげ（青柳の陰） ................................. 55
  なびくあおやぎ（舞く青柳） .................................. 55
あかしがた ........................................................... 55
  あかしがた（明石湯） ........................................ 55
  つきのあかしがた（月の明石湯） ............................... 56
あかつき ............................................................. 56
  あかつき（暁） ............................................... 56
  あかつきづき（暁月） .......................................... 56
  あかつきのそら（暁の空） ..................................... 56
あき ................................................................. 56
  あきかぜ（秋風） ............................................ 56
  あきかぜがふく（秋風が吹く） ................................ 59
  あきかぜのこえ（秋風の声） ................................ 59
  あきがくる（秋が来る） ...................................... 60
  あきくさ（秋草） ............................................. 60
  あきくる（秋来る） ............................................ 60
  あきさむい（秋寒い） ......................................... 60
  あきしがれ（秋時雨） ........................................ 60
  あきちかくなる（秋近くなる） ............................... 61
  あきにしぐれる（秋に時雨が） ............................... 61
  あきのおもかげ（秋の面影） ................................. 61
  あきのかわかぜ（秋の川風） ................................ 61
  あきのくれがた（秋の暮れ方） .............................. 61
  あきのさびしさ（秋の寂しさ） ............................... 61
  あきのさわみず（秋の沢水） ................................ 62
  あきのそら（秋の空） ........................................ 62
  あきのたまくら（秋の手枕） ................................ 62
  あきのつき（秋の月） ....................................... 62
  あきのはつかぜ（秋の初風） ................................ 62
  あきのほたる（秋の星） ..................................... 63
  あきのむらさめ（秋の朝雨） ................................ 63
  あきのやま（秋の山） ....................................... 63
  あきのよすがから（秋の夜すがら） .......................... 63
  あきのよなが（秋の夜長） ................................... 64
  あきのよなよな（秋の夜な夜な） ............................ 64
  あきのよのつき（秋の夜の月） ............................. 64
あきふける（秋更ける）…………………64
あきふけわたる（秋更け渡る）…………65
ういあき（憂い秋）……………………65
こずえのあき（桁の秋）…………………65
すごいあきかぜ（凄い秋風）……………65
すずしさにあきたつ（涼しさに秋立つ）65
ただあきのかぜ（ただ秋の風）…………65
とおやまのあき（遠山の秋）……………66
はつがかぜときのうはきいてあきふける（初風と今日は聞いて秋更ける）66
はるあきのいろ（春秋の色）……………66
ふくかぜのあきのつゆ（吹く風に秋の露）66
ふるさとのあき（古里の秋）……………66
みねのあきかぜ（峰の秋風）……………66
よわのあきかぜ（夜半の秋風）…………66
あく………………………………………67
あきないことのね（飽きない琴の音）67
あけぼの………………………………67
あけぼののくも（暗の雲）……………67
あけぼののそら（暗の空）……………67
あけぼののやま（暗の山）……………67
つゆのあけぼの（露の暗）……………68
にわのあけぼの（庭の暗）……………68
のべのあけぼの（野辺の暗）…………68
はるのあけぼの（春の暗）……………68
はるはあけぼの（春は暗）……………69
ゆきのあけぼの（雪の暗）……………69
あける…………………………………69
あけがたのそら（明け方の空）…………69
あけはてる（明け果てる）……………69
あけばなれる（明け離れる）…………69
あけやすいつき（明けやすい月）……69
あける（明ける）………………………70
あさけしずか（朝明け静か）…………70
たすまだれあける（玉簾あける）……70
ゆきのあさあけ（雪の朝明け）…………70
よがあける（夜が明ける）……………70
あさ…………………………………70
あさがすみ（朝霞）…………………70
あさくろうぐいす（朝来の鶴）…………71
あさけしずか（朝明け静か）…………71
あさひかげ（朝日影）…………………71
あさばらけ（朝ばらけ）………………71
あさまだき（朝まだき）………………72
あした（朝）…………………………72
かぜとあさがすみ（風と朝霞）………72
けさのはつゆき（今朝の初雪）………72
ゆきのあさあけ（雪の朝明け）………73
あさがお……………………………73
<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>頁碼</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>あさがおのいろ（朝顔の色）</td>
<td>73</td>
</tr>
<tr>
<td>あさがおのはな（朝顔の花）</td>
<td>73</td>
</tr>
<tr>
<td>しばむあさがお（探し朝顔）</td>
<td>73</td>
</tr>
<tr>
<td>そののあさがお（園の朝顔）</td>
<td>73</td>
</tr>
<tr>
<td>あさの</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>あさのさごろも（麻の狭衣）</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>あさのごろも</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>あさごろもうつ（麻衣打つ）</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>あし</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>あしあたくかげ（葉火焚く影）</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>あじけいない</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>あじけないよ（味気ない世）</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>あたらしい</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>にいたまくら（新手枕）</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>あだ</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>あだとかかりくる（徒と掛かり来る）</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>げにもあだしむ（げにも徒しむ）</td>
<td>75</td>
</tr>
<tr>
<td>あと</td>
<td>75</td>
</tr>
<tr>
<td>あおばのはなのあと（青葉の花の後）</td>
<td>75</td>
</tr>
<tr>
<td>あとをだにとう（後をだに訪う）</td>
<td>75</td>
</tr>
<tr>
<td>あめすぎたあとのはずけさ（雨過ぎた後の静けさ）</td>
<td>75</td>
</tr>
<tr>
<td>いにしえのあと（古の後）</td>
<td>75</td>
</tr>
<tr>
<td>うしろのやま（後ろの山）</td>
<td>75</td>
</tr>
<tr>
<td>きぬぎぬのあと（後朝の後）</td>
<td>75</td>
</tr>
<tr>
<td>ぐもどりのあと（雲雨の跡）</td>
<td>76</td>
</tr>
<tr>
<td>さみだれのあと（五月雨の後）</td>
<td>76</td>
</tr>
<tr>
<td>のちのよのみち（後の世の道）</td>
<td>76</td>
</tr>
<tr>
<td>のわきのあと（野分の後）</td>
<td>76</td>
</tr>
<tr>
<td>はるよりのち（春より後）</td>
<td>76</td>
</tr>
<tr>
<td>ふでのあと（筆の跡）</td>
<td>76</td>
</tr>
<tr>
<td>むらさめのはれゆくあとのはあらし（村雨の晴れゆく後は風）</td>
<td>76</td>
</tr>
<tr>
<td>ゆうだちのあと（夕立の後）</td>
<td>76</td>
</tr>
<tr>
<td>わかれじのあと（別れ路の跡）</td>
<td>77</td>
</tr>
<tr>
<td>あま</td>
<td>77</td>
</tr>
<tr>
<td>あまおぶね（海人小舟）</td>
<td>77</td>
</tr>
<tr>
<td>あまのつりぶね（海人の釣舟）</td>
<td>77</td>
</tr>
<tr>
<td>あまた</td>
<td>78</td>
</tr>
<tr>
<td>かずあまた（数あまた）</td>
<td>78</td>
</tr>
<tr>
<td>あまひこ</td>
<td>78</td>
</tr>
<tr>
<td>あまひこのこえ（天彦の声）</td>
<td>78</td>
</tr>
<tr>
<td>あめ</td>
<td>78</td>
</tr>
<tr>
<td>あめかすむくくれ（雨霧む暮れ）</td>
<td>78</td>
</tr>
<tr>
<td>あめがふる（雨がふる）</td>
<td>78</td>
</tr>
<tr>
<td>あめすぎたあとのはずけさ（雨過ぎた後の静けさ）</td>
<td>78</td>
</tr>
<tr>
<td>あめのうち（雨の内）</td>
<td>78</td>
</tr>
<tr>
<td>あめのくれ（雨の暮れ）</td>
<td>79</td>
</tr>
<tr>
<td>あめのこさら（雨残る空）</td>
<td>79</td>
</tr>
<tr>
<td>あめののどけさ（雨の長閑さ）</td>
<td>79</td>
</tr>
<tr>
<td>曲名</td>
<td>ページ</td>
</tr>
<tr>
<td>----------------------------------------------------------------------</td>
<td>--------</td>
</tr>
<tr>
<td>あめをまつ（雨を待つ）</td>
<td>79</td>
</tr>
<tr>
<td>こころをつくすあめのる（心を尽す雨の夜）</td>
<td>79</td>
</tr>
<tr>
<td>ながあめのそら（長雨の空）</td>
<td>79</td>
</tr>
<tr>
<td>やよいのあめ（弥生の雨）</td>
<td>79</td>
</tr>
<tr>
<td>あやめぐさ</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>あやめぐさ（菖蒲草）</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>あゆ</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>みずのさびあゆ（水の鰤鰤）</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>あらし</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>あらしひくやす（風吹く山）</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>ひとりなののはれゆくあとあらし（村雨の晴れゆく後は嵐）</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>ゆうあらし（夕嵐）</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>あらそう</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>こころあらそううた（心争う歌）</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>なみだあらそうごえ（涙争う声）</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>あらまし</td>
<td>81</td>
</tr>
<tr>
<td>あらまし（あらまし）</td>
<td>81</td>
</tr>
<tr>
<td>あらわれる</td>
<td>81</td>
</tr>
<tr>
<td>あらわす（現す）</td>
<td>81</td>
</tr>
<tr>
<td>あらわれる（現れる）</td>
<td>81</td>
</tr>
<tr>
<td>はなのこずえにあらわれる（花の梢に現れる）</td>
<td>81</td>
</tr>
<tr>
<td>ありあげ</td>
<td>81</td>
</tr>
<tr>
<td>ありあげ（有明）</td>
<td>81</td>
</tr>
<tr>
<td>ありあげのかげ（有明の影）</td>
<td>82</td>
</tr>
<tr>
<td>ありあげのそら（有明の空）</td>
<td>82</td>
</tr>
<tr>
<td>ありあげのつき（有明の月）</td>
<td>82</td>
</tr>
<tr>
<td>おぼろにのころありあげのつき（薄に残る有明の月）</td>
<td>83</td>
</tr>
<tr>
<td>つつきにありあげのそら（月に有明の空）</td>
<td>83</td>
</tr>
<tr>
<td>つつきはありあげ（月は有明）</td>
<td>84</td>
</tr>
<tr>
<td>のころありあげ（残る有明）</td>
<td>84</td>
</tr>
<tr>
<td>ある</td>
<td>84</td>
</tr>
<tr>
<td>あるかなきか（有るか無きか）</td>
<td>84</td>
</tr>
<tr>
<td>あるもの（あるもの）</td>
<td>84</td>
</tr>
<tr>
<td>ただありなしのちぎり（ただ有り無しの契り）</td>
<td>84</td>
</tr>
<tr>
<td>ひとりもある（人もある）</td>
<td>84</td>
</tr>
<tr>
<td>あわれ</td>
<td>85</td>
</tr>
<tr>
<td>あわれ（哀れ）</td>
<td>85</td>
</tr>
<tr>
<td>あわれしる（哀れ知る）</td>
<td>85</td>
</tr>
<tr>
<td>あわれである（哀れである）</td>
<td>85</td>
</tr>
<tr>
<td>ちょうどのあわれさ（蝶の哀れさ）</td>
<td>85</td>
</tr>
<tr>
<td>のべのあわれさ（野辺の哀れさ）</td>
<td>85</td>
</tr>
<tr>
<td>い</td>
<td>85</td>
</tr>
<tr>
<td>やまのいのみず（山の井の水）</td>
<td>85</td>
</tr>
<tr>
<td>いう</td>
<td>85</td>
</tr>
<tr>
<td>といいかくいい（といいかく言い）</td>
<td>85</td>
</tr>
<tr>
<td>いえ</td>
<td>86</td>
</tr>
<tr>
<td>かくれが（隠れ家）</td>
<td>86</td>
</tr>
<tr>
<td>かくれがのやま（隠れ家の山）</td>
<td>86</td>
</tr>
</tbody>
</table>
かれのくま（恐れの家）
やまのかれ（山の恐れ家）

いおり

くさのいお（草の庵）
しぶのいお（柴の庵）
たののいお（谷の庵）
みねのいお（峰の庵）
やまがつねのいお（山賊の庵）

いかが

いかが（如何）
いかにねて（如何に寝て）

いく

うつりもてゆく（移り持て行く）
ゆくほどとぎす（行く時鳥）

いくえ

いくえかすみ（幾重霞）
いくえとよらのたけのしたみち（幾重霧浦の竹の下道）

いけ

いけふる（池ふる）
いけみず（池水）

いさらい

いさらいのみず（いさら井の水）

いずち

とまりぶねおとしていずち（泊まり舟音していずち）
ほととぎすまくらのいずちすする（時鳥枕のいずち過ぎる）

いそぐ

いそがれる（急がれる）
いそぐ（急ぐ）
かえりをいそぐ（帰りを急ぐ）

いち

うめのひともと（梅の一枝）
おかべのはじひとむら（岡辺の槍の一群）
きくのひともと（菊の一枝）
くものひとむら（雲の一群）
けむりひとすじ（煙一筋）
さとのひとむら（里の一群）
たけのひとむら（竹の一群）
ただひととおり（ただ一通り）
とりのひとこえ（鳥の一声）
なかなかいちはすみよい（中々市は住み良い）
はなのひとと葦（花の一枝）
はなのひともと（花の一枝）
ひとしげれ（一時雨）
ひとすじ（一筋）
ひととおり（一通り）
ひとむら（一群）
ひとむらさぬ（一村雨）
ひとりねとかが（一人寝と影）
ひとりねる（一人寝る） .................................................. 92
ふとむらすすき（一畔薄） .............................................. 92
ほととぎすのひとこえ（時鳥の一声） ............................... 92
まつのひとむら（松の一群） ......................................... 92
まつのひともと（松の一本） ......................................... 92
みずのひとすじ（水の一筋） ......................................... 92
みちのひとすじ（道の一筋） ......................................... 92
いつ .............................................................. 94
いつかさて（何时かさて） ............................................. 94
いつわり ........................................................... 94
いつわり（为り） .................................................... 94
いと .............................................................. 94
あおやぎのいと（青柳の糸） .......................................... 94
いとう ............................................................ 94
よいといとう（世を厭う） ........................................... 94
いなおおせどり ....................................................... 94
いなおおせどり（稻負鳥） .......................................... 94
いなずま .......................................................... 95
いなずまのかげ（稻妻の陰） .......................................... 95
いにしえ .......................................................... 95
いにしえ（古） ...................................................... 95
いにしえのあと（古の後） .......................................... 95
いにしえのつき（古の月） .......................................... 95
いにしえのみや（古の宮） ........................................... 95
いにしえのゆめ（古の夢） ........................................... 95
いのち .......................................................... 95
いのちであってほしい（命であってほしい） ......................... 95
いのちにて（命にて） ............................................. 96
いのる .......................................................... 96
かみにたいのる（神にただ祈る） ..................................... 96
いま .............................................................. 96
むかしをいまの（昔を今の） ......................................... 96
いつも ........................................................... 96
いつもこいしくて（妹が恋しくて） .................................. 96
いつもこいつつ（妹に恋いつつ） .................................. 96
いりあい ......................................................... 97
いりあいのかね（入相の鐘） .......................................... 97
いる .............................................................. 98
いりひかげ（入り日影） ............................................. 98
つきのいりがた（月の入方） .......................................... 99
はるのいりひ（春の入日） .......................................... 99
いろ .............................................................. 99
あさおのいろ（朝顔の色） ........................................... 99
いろかわる（色変わる） ............................................. 99
いろかわるところ（色変わる場所） ................................ 99
いろづく（色付く） ................................................ 99
はなのいろ（花の色） ................................................. 100
はるあきのいろ（春秋の色） ........................................ 100
いろいろ ........................................... 100
  きぎのいろいろ（木々の色々） ......................... 100
  そでのいろいろ（袖の色々） .......................... 100
  のべのいろいろ（野辺の色々） ......................... 100
いわ .................................................. 100
  いわがね（岩が揺） ................................ 100
  いわがねのまつ（岩が揺の松） ......................... 101
  いわこすなみ（岩越す浪） ............................ 101
  くめのいわはし（久米の岩橋） ......................... 101
  たきのいわなみ（嶰の岩浪） .......................... 101
いわう .............................................. 101
  かえりにこまいわうこえ（帰りに駒祝う声） ........... 101
うい ............................................... 101
  うい（憂い） ...................................... 101
  ういあき（憂い秋） ................................ 102
  ういしごのはねがき（憂い鴨の羽巻き） .............. 102
  ういふゆこり（憂い冬霧り） .......................... 102
  うきをただなくさめる（憂きをただ慰める） .......... 102
  うくつらい（憂く辛い） ................................ 102
  たびはうい（旅は憂い） ................................ 103
  みるのもうい（見るのも憂い） .......................... 103
  われでなくなるのがうい（我でなくなるのが憂い） ....... 103
うえ ............................................... 103
  うえはつれない（上は途れない） ....................... 103
  おぎのうわかぜ（莅の上風） ........................ 103
  かすみのうちのみずのみなかみ（霧の内の水の水上） ... 104
  きりのうえ（霧の上） ................................ 104
  さくらのうえ（桜の上） ................................ 104
  つきのかわかみ（月の川上） ........................... 104
  なみだがわがそでのうえ（淚が我が袖の上） ........... 104
  なみのうえ（漣の上） ................................ 104
  はちすのうえ（葦の上） ................................ 105
  まくらのうえ（枕の上） ................................ 105
うえる .............................................. 105
  うえるた（植える田） ................................ 105
  はなうえる（花植える） ................................ 105
うく ............................................... 105
  こころうかれる（心浮かれる） ........................ 105
  たってうかれる（立って浮かれる） ..................... 105
  なみのうきふね（浪の浮舟） .......................... 106
  ゆめのうきはし（夢の浮橋） .......................... 106
うぐいす ........................................... 106
  あさくらうぐいす（朝来の鷺） ......................... 106
  うぐいす（鷺） ..................................... 106
  うぐいすがなく（鷺がなく） ................................ 108
  うぐいすのこえ（鷺の声） ............................ 108
  のべらくうぐいす（野辺近い鷺） ....................... 111
うける .............................................. 111
かけいにうけるみず（懸橋に受ける水）.................................................. 111
うすい................................................................................................. 111
うすけとり（薄煙）........................................................................... 111
うた....................................................................................................... 111
うたのしなじな（歌の品々）............................................................... 111
こころあらそううた（心争う歌）.......................................................... 111
うち....................................................................................................... 112
あめのうち（雨の内）....................................................................... 112
うちのゆき（内の雪）....................................................................... 112
かすみのうちのみずのみなかみ（露の内的水上）............................... 112
くさのとのうち（草の戸の內）............................................................. 112
さみだれのうち（五月雨の內）.............................................................. 112
しばとのうち（柴の戸の内）................................................................. 112
ただゆめのうち（ただ夢の内）............................................................. 112
ふるみやのうち（古宮の内）................................................................. 112
ゆきのうち（雪の内）....................................................................... 113
うつ....................................................................................................... 113
あさごろううつ（麻衣打つ）................................................................. 113
うちかえずた（打ち返す田）................................................................. 113
たけをうつこえ（竹を打つ声）.............................................................. 113
うつのやま.......................................................................................... 113
うつのやま（宇津の山）................................................................... 113
うつのやまごえ（宇津の山越え）.......................................................... 113
うつる................................................................................................... 114
うつりもてゆく（移り揺て行く）............................................................ 114
うつろう（移ろう）........................................................................... 114
こはぎうつろう（小萩移ろう）.............................................................. 114
そこでうつるが（袖の移り香）............................................................. 114
うのはな.............................................................................................. 115
うのはな（卵の花）........................................................................... 115
うみ....................................................................................................... 115
はるのうみつら（春の海面）................................................................. 115
うめ....................................................................................................... 115
うめさく（梅咲く）........................................................................... 115
うめにおう（梅句う）...................................................................... 115
うめにおうはる（梅句う頃）............................................................... 115
うめのか（梅の香）......................................................................... 115
うめのかがする（梅の香がする）........................................................ 116
うめのひとと（梅の一本）................................................................. 116
くれないのうめ（紅の梅）................................................................. 116
そこでうめのか（袖の梅の香）............................................................ 116
におうめのか（匂う梅の香）............................................................... 117
やどのうめ（宿の梅）..................................................................... 117
やどのうめのか（宿の梅の香）............................................................ 117
うら....................................................................................................... 117
しがのうらふね（志賀の浦舟）............................................................ 117
すまのうら（須磨の浦）.................................................................... 117
すまのうらなみ（須磨の浦濤）............................................................ 118
すみよしのうら（住吉の浦） .............................................. 118
なおすまのうら（なお須磨の浦） ........................................ 118
ふくなみのうらかぜ（吹く浪の浦風） .................................. 118
うらなう ................................................................. 118
みちのつじうら（道の辻占） ........................................... 118
うらむ ................................................................. 118
こころうらめしい（心腸めしい） ................................ ..... 118
つれたさをうらむ（連れたさを恨む） ................................ 119
ひとがうらめしい（人が恨めしい） .................................. 119
えだ ................................................................. 119
はなのひとえだ（花の一枝） .......................................... 119
おい ................................................................. 119
おいのゆくすえ（古い行く末） ....................................... 119
おうさかのせき ....................................................... 119
おうさかのせき（逢坂の関） ......................................... 119
こえるおうさかのせき（越える逢坂の関） ........................ 119
おうさかのやま ....................................................... 120
おうさかのやま（逢坂の山） ......................................... 120
こえるおうさかのやま（越える逢坂の山） ........................ 120
おおはら ....................................................... 120
おおはらまつり（大原祭り） ......................................... 120
お か ................................................................. 120
おかへのはじのひとむら（関辺の様の一群） ....................... 120
おき ................................................................. 120
おきのしひらみ（神の白滝） ........................................ 120
おきのつりぶね（神の釣舟） ........................................ 120
おきのなみ（神の滝） ............................................... 121
おきのふね（神の舟） ............................................... 121
おぎ ................................................................. 121
おぎにかぜ（吹に風） ................................................ 121
おぎのうわかぜ（吹の上風） ....................................... 121
おぐ ................................................................. 122
おぐやまのかげ（奥山の陰） ....................................... 122
みよしのおぐ（み吉野の奥） ...................................... 122
やまのおぐ（山の奥） ............................................... 122
おぐる ................................................................. 122
おぐる（送る） ...................................................... 122
そでふきおぐるかぜ（袖吹きおぐる風） ........................ 122
おぐるま ............................................................... 123
おぐるまのおと（小車の音） ....................................... 123
おし ................................................................. 123
おしむ（惜しむ） .................................................... 123
おしんではなをみる（惜しんで花を見る） ........................ 123
ちるのがおし（散るのが惜しい） .................................. 123
おそい ................................................................. 123
おそざくら（連桜） .................................................. 123
おだまき ............................................................... 123
しずのおだまき（静の芋舞） ....................................... 123
おちこち .................................................. 124
かすむおちこち（霧む遠近） .................................. 124
のべのおちこち（野辺の遠近） .................................. 124
おちる .................................................. 124
おちるあまつかり（落ちる天つ雁） .................................. 124
つきおちる（月落ちる） ...................................... 124
なみだおちる（波落ちる） ...................................... 124
むかってなみだおちる（向って波落ちる） ...................... 125
おと .................................................. 125
あきないことのね（鈍きない琴の音） .............................. 125
おぐるまのおと（小車の音） .................................... 125
かえるとりのね（帰り鳥の音） .................................... 125
かわおと（川音） ........................................... 125
きぬたのおと（砧の音） ........................................ 125
こないでおとする（未ないで音する） .............................. 125
さわみずのおと（沢水の音） ..................................... 125
しきのはねおと（鳴の羽音） ..................................... 126
しぐきむしのね（寒き虫の音） ................................... 126
ちかいかわおと（近い川音） ..................................... 126
つゆのおときにくね（露の音聞く庭） ............................... 126
とまりぶねおとしていずち（泊まり舟音していずち） .............. 126
はるのもののね（春の物の音） .................................. 126
みずのおと（水の音） .......................................... 127
むしのね（虫の音） .......................................... 127
よわのむしのね（夜半の虫の音） ................................ 127
おとずれる ................................................ 127
ひとのおとずれ（人の訪れ） .................................... 127
おとめ ................................................ 127
あまおとめ（天乙女） ........................................... 127
おとろえる ................................................ 128
おとろえる（衰える） .......................................... 128
おとわやま ................................................ 128
かぜのおとわやま（風の音羽山） ................................ 128
おなじ ................................................ 128
おなじこころ（同じ心） ........................................... 128
おのえ ................................................ 128
おのえのはなをみる（尾上の花を見る） ............................ 128
おぶね ................................................ 128
あまおぶね（海人小舟） ........................................... 128
おぼえる ................................................ 128
よぎむおぼえる（夜寒おぼえる） ................................ 128
おぼろ ................................................ 129
おぼろづくりよ（臥月夜） ........................................... 129
おぼろにことのありあけのつか（臥に残る有明の月） ............ 129
やまだおぼろ（山が臥） ......................................... 129
おみなえし ................................................ 129
おみなえし（女郎花） .......................................... 129
おもい ................................................ 129
きえるならきえるおもい（消えるなら消えるべき思い） ........................................... 129
おもう ......................................................................................................................... 130
おもいかえす（思い返す） ......................................................................................... 130
おもいたえる（思い新たる） ......................................................................................... 130
おもいのけむり（思いの煙） ......................................................................................... 130
おもうこととつき（思う事と月） ............................................................................... 130
おもうな（思うな） ...................................................................................................... 130
おもうひとのことは（思う人の言の葉） ................................................................... 130
おもうふるさと（思う古里） ......................................................................................... 130
なにおもう（何思う） ................................................................................................... 130
みをおもう（身を思う） ............................................................................................... 131
むかしをおもうみだ（昔を思う渡） ........................................................................... 131
むねのおもい（胸の思い） .......................................................................................... 131
ものおもうこと（物思う嘆） ....................................................................................... 131
もののがなし（物悲しく） ........................................................................................... 131
ものごと（物毎） .......................................................................................................... 132
ものさびしい（物寂しい） ............................................................................................ 132
おまかげ ......................................................................................................................... 132
あきのおまかげ（秋の映像） ....................................................................................... 132
おまかげ（映像） ......................................................................................................... 132
かたるばかりにむかうおまかげ（語るばかりに向う映像） ...................................... 132
そうはおまかげ（咲うは映像） .................................................................................. 132
ひとのおまかげ（人の映像） ...................................................................................... 132
ゆめのおまかげ（夢の映像） ....................................................................................... 133
おより ............................................................................................................................. 133
かぜのおりおり（風の折々） ....................................................................................... 133
おれる ............................................................................................................................. 133
くさはこらないゆきのしたおれ（草は残らない雪の下折） .................................. 133
おろか ............................................................................................................................. 133
おろかなこころ（愚かな心） ......................................................................................... 133
か ................................................................................................................................... 134
うめのか（梅の香） ..................................................................................................... 134
うめのかがする（梅の香がする） ............................................................................... 134
そでのうつりが（袖の香の香） .................................................................................... 134
そでのうめのか（袖の梅の香） .................................................................................... 135
におうめのか（句の梅の香） ....................................................................................... 135
はなうちかおる（花打ち香る） .................................................................................... 135
やどのうめのか（宿の梅の香） .................................................................................... 135
かえす ............................................................................................................................. 135
うちかえす（打ち返す田） ........................................................................................... 135
おもしかえす（思い返す） ........................................................................................... 136
かえる ............................................................................................................................. 136
かえりにこまいまうこえ（帰りに駕踏う声） ................................................................. 136
かえりをいそぐ（帰りを急ぐ） ..................................................................................... 136
かえる（帰り） ............................................................................................................... 136
かえるかがね（帰りの雨） ............................................................................................ 137
かえるかどのこえ（帰りの雨の声） ............................................................................. 137
かえるさ（帰りのさ） ..................................................................................................... 137
かえるさとぴと（帰る里人） ............................................. 137
かえるさのみち（帰るさの道） ............................................. 137
かえるとりのね（帰る鳥の音） ............................................. 137
かえるふるさと（帰る故里） ............................................. 138
すべてかえる（捨てて帰る） ............................................. 138
それかえる（誰帰る） ................................................... 138
はるかえる（春帰る） .................................................. 138
はるのかえるさ（春の帰るさ） ........................................... 138
ひとかえる（人帰る） ................................................... 138
みやこのつきにかえる（都の月に帰る） .............................. 139
かかる ................................................................. 139
あだとかかりくる（彼と掛かり来る） ................................. 139
かかる（掛かる） ....................................................... 139
かかるふじなみ（掛かる藤浪） ....................................... 139
かけはし（掛橋） ....................................................... 139
くもかかるみね（雲かかる峰） ....................................... 139
くものかけはし（雲の掛橋） .......................................... 140
そばのかけはし（傍の掛橋） .......................................... 140
みちのかけはし（道の掛橋） .......................................... 140
みねのかけはし（峰の掛橋） .......................................... 140
よばかりかかる（世ばかり掛かる） ................................. 140
かき ................................................................. 140
かきねづたい（垣根伝い） ............................................. 140
かきのもとつぼ（垣の本つ葉） ....................................... 140
かぎる ................................................................. 141
ゆうべかぎる（夕べ限る） ............................................. 141
かく ................................................................. 141
ういしきのはねがき（菱い唏の羽撮き） .............................. 141
かくもしこうさ（焼く菱塩草） ....................................... 141
しこのはねがき（菱の羽撮き） ....................................... 141
かくれる ............................................................... 141
かくれが（隠れ家） .................................................... 141
かくれがのやま（隠れ家の山） ....................................... 141
かくれがはない（隠れ家はない） ..................................... 142
やまのかくれが（山の隠れ家） ....................................... 142
かけい ................................................................. 142
かけいにうけるみず（懸崖に受ける水） .............................. 142
かげる ................................................................. 142
なつかけて（夏かけて） ................................................ 142
かげ ................................................................. 142
あおやぎのかげ（青鶴の陰） .......................................... 142
あさひかげ（朝日影） .................................................. 142
あしぼたかげ（朝火焚く影） .......................................... 143
ありあけのかげ（有明の影） .......................................... 143
いなずまのかげ（稲妻の陰） .......................................... 143
いりひかげ（入り日影） ................................................ 143
おくやまのかげ（奥山の陰） .......................................... 143
かげかすか（影かすか） ................................................ 143
かげくれる（影暮れる） ................................................. 143
かげたくなる（影高くなる） ......................................... 144
かすかなかげ（微かな影） .......................................... 144
かりねのつきかげ（仮想の月影） .................................. 144
さくらちるかげ（桜散る陰） ......................................... 144
つきかげすむ（月影漂む） ........................................... 144
ともしびのかげ（灯の影） ........................................... 144
ねやのつきかげ（闇の月影） ....................................... 145
のこるやまかげ（残る山影） ........................................ 145
はなのかげ（花の陰） ................................................ 145
はなのかげにやすらう（花の陰に安らう） ....................... 146
ひかりのかげ（光の影） ............................................. 146
ひとかげもしない（人影もしない） ................................ 146
ひとりねとかげ（一人寝と影） .................................... 146
みずかげのさびしさ（水影の寂しさ） ............................. 146
やまのかげ（山の陰） ................................................ 146
やまのしたかげ（山の下陰） ....................................... 147
よもぎののかげ（蓬生の影） ....................................... 147
かさなる ............................................................... 147
かさなるやま（重なる山） ........................................... 147
かしこい ............................................................... 147
かしこい（賢い） ..................................................... 147
かすか ................................................................. 148
かげかすか（影かすか） ............................................. 148
かすかなかげ（微かな影） ......................................... 148
かすみ ................................................................. 148
あさがすみ（朝霞） ................................................... 148
いくえすみ（晨霞） ................................................... 149
うちかすむ（うち霞む） .............................................. 149
かすみ（霞） ........................................................ 149
かすみくみよる（霞くみよる） ..................................... 149
かすみこめる（霞こめる） .......................................... 149
かすみつつ（霞みつつ） ............................................. 149
かすみにこもる（霞にこもる） ..................................... 150
かすみにたどるみち（霞にたどる道） ............................. 150
かすみのうちのみずのみなかみ（霞内の水の水上） ............. 150
かすみのそこ（霞の底） ............................................. 150
かすみのひま（霞のひま） .......................................... 150
かすみより（霞より） ............................................... 151
かすむ（霞む） ..................................................... 151
かすむおらこち（霞む遠近） ..................................... 151
かすむはるのとおやま（霞む春の遠山） ......................... 151
かすむひ（霞む日） ................................................ 151
かすむまもと（霞む山本） ........................................ 152
かすむゆうぐれ（霞む夕暮れ） .................................. 152
かぜとあさがすみ（風と朝霞） .................................... 152
つきがかすむ（月が霞む） ........................................... 152
つきがかすむる（月が霞む夜） .................................... 152
よこぐもかすむ（横雲霞む） .................................................. 152
かすむ .......................................................... 153
あめかすむくれ（雨霞む暮れ） ........................................... 153
かず .......................................................... 153
かずまた（数またた） ................................................. 153
かずならぬ（数ならぬ） ............................................. 153
かぜ .......................................................... 153
あきかぜ（秋風） .................................................. 153
あきかぜがふく（秋風が吹く） ....................................... 156
あきかぜのこえ（秋風の声） ......................................... 156
あきのかふかぜ（秋の川風） ......................................... 157
あきのはつかぜ（秋の初風） ......................................... 157
おぎにかぜ（萩に風） .............................................. 158
おぎのうかぜ（萩の上風） .......................................... 158
かぜがすましい（風が凄まじい） ...................................... 158
かぜがみにしめる（風が身にしめる） .................................. 158
かぜとあさがすみ（風と朝霞） ...................................... 159
かぜににおうたばな（風に匂う桜） .................................. 159
かぜにはなら（風に花散る） ....................................... 159
かぜのおとわやま（風の音羽山） ...................................... 159
かぜのおおろり（風の折々） ......................................... 159
かぜのしずけさ（風の静けさ） ....................................... 159
かぜのすずしさ（風の遅しさ） ....................................... 159
かぜのはげしさ（風の激しさ） ...................................... 160
かぜのまにまに（風のまにまに） ...................................... 160
かぜのむらさめ（風の村雨） ......................................... 160
かぜのゆくすえ（風の行末） ....................................... 160
かぜみえる（風見える） ............................................ 160
こがらしのかぜ（木枯しの風） ...................................... 160
すごいあきかぜ（凄い秋風） ....................................... 161
そこでふきおくるかぜ（袖吹きおくる風） ............................ 161
ただあきのかぜ（ただ秋の風） ...................................... 161
ただまつのかぜ（ただ松の風） ...................................... 161
つゆふくかぜ（露吹く風） .......................................... 161
のわきのかぜ（野分の風） .......................................... 161
はつのかぜとき（はつきてあきふける（初風と昨日は聞いて秋更ける） .......................... 162
はなのはるかぜ（花の春風） ....................................... 162
はなのはまかぜ（花の山風） ....................................... 162
はるかぜがふく（春風が吹く） ...................................... 162
ふくかぜのあきのつゆ（吹く風に秋の露） .......................... 162
ふくたみのうらかぜ（吹く浪の浦風） ................................. 162
まつかぜがふく（松風が吹く） ...................................... 162
まつかぜのこえ（松風の声） ....................................... 163
まつかぜ（松吹く風） ............................................. 163
みねのあきかぜ（峰の秋風） ....................................... 163
やまのまつかぜ（山の松風） ....................................... 163
よわのあきかぜ（夜半の秋風） ...................................... 164
かた .......................................................... 164
あきのくれた（秋の暮れ方）.............................................164
あけがたのそら（明けの空）.............................................164
おちかだのくも（遠方の雲）.............................................164
おちかたのやま（遠方の山）.............................................164
おちかたびとのそで（遠方人の袖）.................................164
おちのとおやま（遠方の遠山）...........................................165
かたもさだめない（方も定めない）.................................165
くものおちかた（雲の遠方）.............................................165
くれゆくかた（暮れゆく方）.............................................165
つきのいりがた（月の入方）.............................................165
はるのくれた（春の暮れ方）.............................................165
かたしく.................................................................165
かたしきのそで（片敷の袖）.............................................165
かたしく（片敷く）.......................................................166
しものかたしき（和の片敷）.............................................166
かたみ.................................................................166
かたみ（形見）...........................................................166
かたむく.................................................................166
かたむく（傾く）...........................................................166
つきがたむく（月が傾く）.................................................167
かたよる.................................................................167
かたより（片寄）...........................................................167
かたる.................................................................167
かたるばかりにむかうおもかげ（語るばかりに向う面影）..167
かつらぎ.................................................................167
かつらぎのやま（葛城の山）.............................................167
さくらのかつらぎのやま（桜の葛城の山）......................167
かえない.................................................................168
たびのかえない（旅の悲しみ）........................................168
たびはかえない（旅は悲哀）............................................168
ものがかえない（物悲しき）..........................................168
わかれるたびはかえない（別れ旅は悲哀）......................168
かね.................................................................168
いりあいのかね（入相の鐘）............................................168
かねなる（鐘鳴る）.......................................................170
かねごと.................................................................171
ひとのかねごと（人の隠言）.........................................171
かみ.................................................................171
かみにただいのる（空にただ祈る）.................................171
まつりするかみ（祭りする神）......................................171
みだれがみ（乱れ髪）................................................171
かも.................................................................171
かもひよし（賀茂日吉）................................................171
かや.................................................................172
あさじう（浅茅生）....................................................172
あさじうのつゆ（浅茅生の露）......................................172
から.................................................................172
からごろも（曙衣）....................................................172
かもこしぶね（唐土舟） .............................................. 172

かり ................................................................. 173
おちるあまつかり（落ちる天つ雁） .............................. 173
かえるかりがね（帰る雁） ....................................... 173
かえるかりのこえ（帰る雁の声） .................................. 173
かりなく（雁鳴く） ................................................ 173
かりのいくつら（雁の幾列） ....................................... 173
かりのこえ（雁の声） ............................................. 174
かりのこえごえ（雁の声々） ..................................... 174
かりのたまずさ（雁の玉奪） ..................................... 174
かりのひとこえ（雁の一声） ..................................... 174
かりのひとつら（雁の一列） ..................................... 174
とぶかりのつばさ（飛ぶ雁の翼） .................................. 174
はつかりのこえ（初雁の声） ..................................... 174
はるのかりがね（春の雁） ....................................... 175
わたるかりがね（渡る雁） ....................................... 175

かりそめ .......................................................... 175
かりそめ（仮初め） ................................................ 175

かりの .............................................................. 175
かりねのつきかげ（仮寝の月影） ................................. 175
かりねをする（仮寝をする） ....................................... 175
かりのよるのゆめ（仮の夜の夢） ................................ 175
かりふしのゆめ（仮臥の夢） ..................................... 176
かりまくら（仮枕） ............................................... 176
のにかりまくら（野に仮枕） ....................................... 176
のべのかりふし（野辺の仮臥） .................................... 176
ゆめのかりまくら（夢の仮枕） .................................... 176

かりる ............................................................... 177
やどをかる（宿を借りる） ......................................... 177

かれれる .......................................................... 177
かれたくさがもえでる（枯れた草が萌え出す） .................. 177
かれはなすすき（枯れ花薄） ..................................... 177
ふゆがれ（冬枯れ） ............................................... 177

かわ ................................................................. 177
あきのかかかこ（秋の川風） .................................... 177
あまのがわ（天の川） ............................................. 177
かわおと（川音） ................................................ 177
かわぞいのみち（川浴いの道） ................................... 178
かわぞいぶね（川浴い舟） ....................................... 178
かわつちのさと（川面の星） ..................................... 178
ちかいかわおと（近い川音） ..................................... 178
つきのかかかみ（月の川上） ..................................... 178
なみだがわ（涙河） ............................................... 178
よどのかわぶね（淀の川舟） ..................................... 179

かわす ............................................................. 179
かわすことのは（交わす音の葉） ................................ 179

かわず ............................................................. 179
かわずなく（雁鳴く） ............................................. 179
かわる

いちかわる（色変わる）

いちかわるころ（色変わる頃）

ひとのこころがかわる（人の心が変わる）

ひとのこころのかわるよのなか（人の心の変わる世の中）

かんなづき

かんなづき（神無月）

かんなび

かんなびのもり（神奈備の森）

がた

かたばかり（湯ばかり）

き

きぎのいろいろ（木々の色々）

このしたつゆ（木の下露）

このもとみち（木の下道）

なっことだち（夏木立）

はなのこのもと（花の木の下）

きえる

きえるけむり（消える煙）

きえるならきえるおもし（消えるなら消えるべき思い）

とおぎえ（道消え）

ゆききえる（雪消える）

きく

きくのひともと（菊の一本）

きくのもめずらしい（聞くのも珍しい）

きくほどとどす（聞く時鳥）

つゆのおときとにわ（露の音聞く庭）

はつかぜときのうはきいてあきふける（初風と昨日は聞いて秋更る）

ゆうつけどりをきく（木綿付け鳥を聞く）

きし

きしのやまぶき（岸の方吹）

きじ

きぎすなたつ（雁鳴き立つ）

きぬぎぬ

きぬぎぬ（後朝）

きぬぎぬのあと（後朝の後）

きぬぎぬのそで（後朝の袖）

きぬた

きぬたのおと（砧の音）

きのう

きのうのくも（昨日の雲）

はつかぜときのうはきいてあきふける（初風と昨日は聞いて秋更る）

きみ

きみのことは（君の言の葉）

きみがよ

きみがよ（君が代）

きょう

きょうごと（今日毎）
きょうばかり（今日ばかり） .................................................. 187
きよますわり ................................................................. 188
きよますわり（晴まわり） .................................................. 188
きり .............................................................................. 188
きりにしも（霧に霜） ...................................................... 188
きりのうえ（霧の上） ...................................................... 188
きりのこる（霧消る） ...................................................... 188
きりのしたみち（霧の下道） .......................................... 188
きりのまがき（霧の箱） .................................................. 188
きりはれのぼる（霧消え昇る） .......................................... 188
きりはれる（霧消える） .................................................. 189
ほかかなきり（広かな霧） ............................................... 189
きりぎりす ................................................................. 189
きりぎりす（蜂蜂） ...................................................... 189
なくきりぎりす（鳴く蜂蜂） .......................................... 189
きる .............................................................................. 190
うちきせたい（打ち着せたい） ......................................... 190
きわめる ................................................................. 190
たのしみをきわめる（楽しみを極める） .......................... 190
くさ ................................................................. 190
もずのくさぐき（鷲の草茎） ........................................... 190
くさ ................................................................. 191
あきくさ（秋草） ......................................................... 191
かくもしのおくさ（穂く藻塩草） ..................................... 191
かれたくさがもえる（枯れた草が萌え出る） ..................... 191
くさのいお（草の庵） .................................................. 191
くさのつゆ（草の露） .................................................. 191
くさのとのうち（草の戸の内） ...................................... 191
くさはのこらないゆきのしたおれ（草は残らない雪の下折） 191
くさはら（草原） ......................................................... 192
くさばのつゆ（草葉の露） ............................................. 192
くさまくら（草枕） ...................................................... 192
しのぶくさ（忍草） ...................................................... 192
つゆしごれのくさ（露時雨の草） ..................................... 193
もずくくさぐき（僅の草茎） ........................................... 193
もりのしたくさ（林の下草） ........................................... 193
わかくさまくら（若草枕） .............................................. 193
わすれとうくさはら（忘れ訪る草原） .............................. 193
わすれるなよ（忘れられるよ） ...................................... 193
くに ................................................................. 194
くににしたがう（国に従う） .......................................... 194
くむ ................................................................. 194
よくむさかずき（夜湧む杯） .......................................... 194
くめ ................................................................. 194
くめのいわはし（久米の岩橋） ..................................... 194
くも ................................................................. 194
けものかのくも（暗の雲） ............................................. 194
おちかたのくも（遠方の雲） .......................................... 194
きのうのくも（昨日の雲） 194
くもかかるみね（雲かかる峰） 195
くものおちかた（雲の遠方） 195
くもののかけはし（雲の掛橋） 195
くものたえま（雲の絶え間） 195
くものひともら（雲の一群） 195
たなびくよくものそら（棚引く横雲の空） 195
つきのむらくも（月の群雲） 195
なかぞらのくも（中空の雲） 195
みねのくも（峰の雲） 196
ゆうぐれのくも（夕暮れの雲） 196
よこくもかすむ（横雲霧む） 196
よこくものそら（横雲の空） 196
くもり 197
くもりのあと（雲鳥の跡） 197
くる 197
あきがくる（秋が来る） 197
あきくる（秋来る） 197
あさくらうぐいす（朝来る鴨） 197
あたかもうくてく（徒と掛かり来る） 197
こないでおとする（来ないで音する） 197
とおきた（遠く来た） 198
はるがくる（春来る） 198
くるしい 198
やまがくるしい（山が苦しい） 198
くるま 198
おぐるまのおと（小車の音） 198
くれ 199
あきのくれた（秋の暮れ方） 199
あめかすくくれ（雨霧む暮れ） 199
あめのくれ（雨の暮れ） 199
かげくれる（影暮れる） 199
かずむゆうくれ（霞む夕暮れ） 199
くれごとのそら（暮れごとの空） 199
くれゆかた（暮れゆく方） 200
くれる（暮れる） 200
はるのくれ（春の暮れ） 200
はるのくれた（春の暮れ方） 200
はるのゆうくれ（春の夕暮れ） 200
ひがえる（日が暮れる） 200
ひぐれにともなう（日暮れに伴う） 201
ぼたろうくれ（水訪う暮れ） 201
やどのゆうくれ（宿の夕暮れ） 201
ゆうぐれのくも（夕暮れの雲） 201
ゆうぐれのそら（夕暮れの空） 201
ゆうぐれのやま（夕暮れの山） 202
くれない 202
くれないのうめ（紅の梅） 202
そでのくれない（袖の紅）........................................... 203
けむり................................................................. 203
うすけむり（薄煙）............................................... 203
おもいのけむり（思いの煙）....................................... 203
きえるけむり（消える煙）......................................... 203
けむりひとすじ（煙一筋）......................................... 203
こいしい.............................................................. 203
いもがこいしくて（妹が恋しくて）.................................. 203
いもにこいつつ（妹に恋いつつ）.................................... 203
みやこがこいしい（都が恋しい）.................................. 204
こえ................................................................. 204
あきかぜのこえ（秋風の声）...................................... 204
あまひこのこえ（天彦の声）...................................... 204
うぐいすのこえ（雛の声）.......................................... 204
おじかなくこえ（牡鹿鳴く声）.................................... 206
かえりにこまいうわこえ（帰りに駒祝う声）...................... 207
かえるかのこえ（鴨の声）......................................... 207
かりのこえ（雁の声）............................................. 207
かりのこえごえ（雁の声々）...................................... 207
かりのひとこえ（雁の一聲）...................................... 207
こえする（声する）............................................... 207
こえのさむさ（声の寒さ）........................................ 207
さおじかのこえ（玄牡鹿の声）................................... 207
さるさけぶこえ（猿叫ぶ声）....................................... 208
すずむしのこえ（鈴虫の声）...................................... 208
せみのもろごえ（蝶の諸声）....................................... 209
たけをうつこえ（竹を打つ声）.................................... 209
ちどりなくこえ（千鳥鳴く声）................................... 209
とりのこえ（鳥の声）............................................. 209
とりのこえごえ（鳥の声々）...................................... 209
とりのなくこえ（鳥の鳴く声）................................... 209
とりのひとこえ（鳥の一聲）...................................... 210
なみだおらそうこえ（涙争う声）................................ 210
ねぐらのはるのとりのね（帰る春の鳥の声）.................... 210
はつかりのこえ（初春の声）...................................... 210
ひぐらしのこえ（蝶の声）........................................ 210
ほときすのひとこえ（時鳥の一聲）............................. 211
まつかぜのこえ（松風の声）..................................... 211
まつむしのこえ（松虫の声）..................................... 211
むしのこえ（虫の声）........................................... 211
むしのこえごえ（虫の声々）.................................... 212
こえる.............................................................. 212
いわすなみ（岩越す浪）.......................................... 212
うつのやまごえ（宇津の山越え）................................ 212
こえるおうさかのせき（越える逢坂の関）...................... 212
こえるおうさかのやま（越える逢坂の山）...................... 213
としこえる（年越れる）.......................................... 213
みずこえる（水越える）.......................................... 213
みねこえる（峰越える） ........................................ 213
こおり .......................................................... 213
こおりそめる（氷初める） ...................................... 213
そのこおり（袖の氷） .......................................... 213
つきがこおる（月が氷る） .................................... 213
こがらし ........................................................ 214
こがらしのかぜ（木枯しの風） ............................... 214
こころ .......................................................... 214
おなじこころ（同じ心） ...................................... 214
おろかなこころ（愚かな心） .................................. 214
かわるよのなか（変わる世の中） ............................ 214
こころあらそうた（心争う歌） ............................... 214
こころうかれる（心浮かれる） ............................... 215
こころうらめしい（心慣めしい） ............................ 215
こころがまどのうち（心窓の内） ............................. 215
こころづくし（心尽くし） ..................................... 215
こころである（心である） .................................... 215
こころではない（心ではない） ............................... 215
こころながくまで（心長く待て） ............................ 215
こころにて（心にて） ......................................... 216
こころをつくすあめのよる（心を尽す雨の夜） .......... 216
ひとのこころ（人の心） ...................................... 216
ひとのこころがわる（人の心が変わる） .................. 216
ひとのこころのかわるよのなか（人の心の変わる世の中） 216
ひとのこころのよのなか（人の心の世の中） ........... 219
こし .......................................................... 219
こしのしらゆき（越の白雪） ............................... 219
こずえ ........................................................ 219
こずえのあき（梢の秋） .................................... 219
はなのこずえにあらわれる（花の梢に現れる） ....... 219
こたえる ...................................................... 219
こたえようか（答えようか） ................................ 219
ちょう ......................................................... 220
ちょうという（胡蝶という） ............................... 220
ちょうのたとえ（胡蝶の喩え） ............................. 220
こと .......................................................... 220
あきないことのね（飽きない琴の音） .................... 220
ことのは ...................................................... 220
おもうひとことのは（思う人の言の葉） ............... 220
かわすことのは（交わす言の葉） .......................... 220
きみのことのは（君の言の葉） ............................ 220
ことのはがない（言の葉がない） ........................ 220
のりのことのは（法の言の葉） ............................ 221
やまとことのは（大和言の葉） ............................ 221
こぼれる ...................................................... 221
こぼれるたけのはのつゆ（零れる竹の葉の露） ....... 221
つゆのつきがこぼれる（露の月が零れる） ................ 221
こま .......................................................... 221
かえりにこまいうわこえ（帰りに駕誦う声）........................................... 221
こめる.......................................................... 221
かすみこめる（霞こめる）........................................... 221
かすみにこもる（霞にこもる）........................................... 222
こもる.......................................................... 222
ういふゆこもり（憂い冬霧り）........................................... 222
ふゆこもるころ（冬籓もる頃）........................................... 222
ころ........................................................... 222
いろいろこまる（色変わる頃）........................................... 222
さくらさくころ（桜咲く頃）........................................... 222
さみだれのころ（五月雨の頃）........................................... 223
しのにふるころ（霜にふる頃）........................................... 223
ふゆこもるころ（冬籵もる頃）........................................... 223
もののおもうころ（物思う頃）........................................... 223
ころも......................................................... 224
あさごもうつ（麻衣打つ）........................................... 224
あさのさごも（麻の狭衣）........................................... 224
からごも（唐衣）................................................ 224
すみのころもで（墨の衣手）........................................... 224
たつひのなつごも（たつ日の夏衣）........................................... 224
たびごもも（旅衣）................................................ 225
たびのころもで（旅の衣手）........................................... 225
ごと........................................................... 225
きょうごと（今日毎）........................................... 225
はなのはるごと（花の春毎）........................................... 225
もののごと（物毎）................................................ 225
さえずる....................................................... 225
とりさえずる（鳥が鳴る）........................................... 225
とりのさえずり（鳥の鳴り）........................................... 225
さえる........................................................ 226
つきさえる（月満える）........................................... 226
さかずき....................................................... 226
よるくむさかずき（夜深む杯）........................................... 226
さかり......................................................... 226
はなざかり（花盛り）........................................... 226
さく........................................................... 227
うめさく（梅咲く）........................................... 227
さくはるのはな（咲く春の花）........................................... 227
さくらさく（桜咲く）........................................... 227
さくらさくころ（桜咲く頃）........................................... 227
はなさく（花咲く）................................................ 227
さくら......................................................... 228
おそさくら（遅桜）........................................... 228
さくらさく（桜咲く）........................................... 228
さくらさくころ（桜咲く頃）........................................... 228
さくらちるかげ（桜散る陰）........................................... 228
さくらのうえ（桜の上）........................................... 228
さくらのかつらぎのやま（桜の側城の山）................................. 228
<table>
<thead>
<tr>
<th>ページ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>やまざくら（山桜）</td>
</tr>
<tr>
<td>さけぶ</td>
</tr>
<tr>
<td>さるさけぶこえ（猿叫ぶ声）</td>
</tr>
<tr>
<td>さす</td>
</tr>
<tr>
<td>つきさしいでる（月差し出る）</td>
</tr>
<tr>
<td>さそう</td>
</tr>
<tr>
<td>さそう（焼う）</td>
</tr>
<tr>
<td>さそわれる（煮われる）</td>
</tr>
<tr>
<td>さだめる</td>
</tr>
<tr>
<td>かたもさだめない（方も定めない）</td>
</tr>
<tr>
<td>さだめない（定めない）</td>
</tr>
<tr>
<td>まくらさだめない（枕定めない）</td>
</tr>
<tr>
<td>さと</td>
</tr>
<tr>
<td>かえるさとびと（鳴る里人）</td>
</tr>
<tr>
<td>かわつらのさと（川面の里）</td>
</tr>
<tr>
<td>さとはるかさ（里の遠かさ）</td>
</tr>
<tr>
<td>さとのひとむら（里の一様）</td>
</tr>
<tr>
<td>さとはなれたみち（里離れた道）</td>
</tr>
<tr>
<td>たがさ（誰が里）</td>
</tr>
<tr>
<td>ちかやまざと（近い山里）</td>
</tr>
<tr>
<td>はるのやまざと（春の山里）</td>
</tr>
<tr>
<td>やまざと（山里）</td>
</tr>
<tr>
<td>やまもとのさと（山本の里）</td>
</tr>
<tr>
<td>さびしい</td>
</tr>
<tr>
<td>あきのさびしさ（秋の寂しさ）</td>
</tr>
<tr>
<td>つきのさびしさ（月の寂しさ）</td>
</tr>
<tr>
<td>なおさびしい（なお寂しい）</td>
</tr>
<tr>
<td>なごりさびしい（名残り寂しい）</td>
</tr>
<tr>
<td>はるのさびしさ（春の寂しさ）</td>
</tr>
<tr>
<td>みずかげのさびしさ（水影の寂しさ）</td>
</tr>
<tr>
<td>ものさびしい（物寂しい）</td>
</tr>
<tr>
<td>さみだれ</td>
</tr>
<tr>
<td>さみだれ（五月雨）</td>
</tr>
<tr>
<td>さみだれのあと（五月雨の後）</td>
</tr>
<tr>
<td>さみだれのうち（五月雨の内）</td>
</tr>
<tr>
<td>さみだれのころ（五月雨の頃）</td>
</tr>
<tr>
<td>さみだれのつゆ（五月雨の露）</td>
</tr>
<tr>
<td>さむい</td>
</tr>
<tr>
<td>あきさむい（秋寒い）</td>
</tr>
<tr>
<td>こえのさむさ（声の寒さ）</td>
</tr>
<tr>
<td>さむいひ（寒い日）</td>
</tr>
<tr>
<td>ややさむいそで（やや寒い袖）</td>
</tr>
<tr>
<td>よぎむねぼえる（夜寒おぼえる）</td>
</tr>
<tr>
<td>さめる</td>
</tr>
<tr>
<td>ねざめする（眠覚める）</td>
</tr>
<tr>
<td>ねざめするよ（寝覚める夜）</td>
</tr>
<tr>
<td>ゆめさめる（夢覚める）</td>
</tr>
<tr>
<td>さやか</td>
</tr>
</tbody>
</table>
さやか（さやか） .......................... 235
さやかなほし（さやかな星） .................. 236
つきがさやか（月がさやか） ............ 236
つきのさやけさ（月のさやけさ） ..... 236
つきもさやか（月もさやか） .......... 237
さよのなかやま ........................... 237
つきのさよのなかやま（月の小夜の中山） .................................................................... 237
さる ............................................. 237
さるさけぶこえ（猿叫ぶ声） .......... 237
さわ ............................................. 237
あきのさわみず（秋の洪水） ....... 237
さわみずのおと（洪水の音） .......... 237
しか ............................................. 237
おじゃなくこえ（牡鹿鳴く声） ...... 237
おおじかのこのえ（牡鹿の声） ....... 238
しが ............................................. 238
しがのうらぶね（志賀の浦舟） ...... 238
しが ............................................. 239
ういしきのはねがき（憂い鶴の羽抜き） . 239
しがのはねおと（鶴の羽音） .......... 239
しがのはねがき（鶴の羽抜き） .......... 239
しく ............................................. 239
しくわふ（敷き耙ぶ） .................. 239
しくれ ........................................... 239
あきしぴれ（秋時雨） .................. 239
あきにしきれる（秋に時雨れる） .... 239
しごれる（時雨れる） ................. 239
つゆしきれのくさ（露時雨の草） ... 240
ひとしきれ（一時雨） ................... 240
ゆうしきれ（夕時雨） .................... 240
しげる ........................................... 240
しげきむしのね（絮き虫の音） .... 240
しそ ............................................. 240
しそのおだまき（蝦の芋繋） ......... 240
しせか ........................................... 240
あさけしほか（朝明け静か） ........ 240
あめすぎたあとのしほけさ（雨過ぎた後の静けさ） . 240
かぜのしほけさ（風の静けさ） ....... 241
しほか（静か） ......................... 241
した ............................................. 241
いくえよろのたけのしたみち（残重豊浦の竹の下道） . 241
きりのしたみち（露の下道） ......... 241
くさはのこちらのゆきのしたおれ（草は残らない雪の下道） . 242
このしたつゆ（木の下霧） .......... 242
このもとみち（木の下道） .......... 242
つきのもと（月の下） ................ 242
はぎのしたつゆ（萩の下霧） ....... 242
はなのこのもと（花の木の下） ....... 242
<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>頁碼</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>もりのしたくさ（森の下草）</td>
<td>243</td>
</tr>
<tr>
<td>やまのしたかげ（山の下陰）</td>
<td>243</td>
</tr>
<tr>
<td>やまのしたみち（山の下道）</td>
<td>243</td>
</tr>
<tr>
<td>したう</td>
<td>243</td>
</tr>
<tr>
<td>したわられる（慕われる）</td>
<td>243</td>
</tr>
<tr>
<td>したがう</td>
<td>243</td>
</tr>
<tr>
<td>くににしたがう（国に従う）</td>
<td>243</td>
</tr>
<tr>
<td>しな</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>うたのしなじな（歌の品々）</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>しの</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>しのにふるころ（篠にふる頃）</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>しののめ</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>よはしののめ（夜は東雲）</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>しのぶ</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>しのびかねる（忍びかねる）</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>しのぶくさ（忍草）</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>しぶ</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>しばのいお（柴の庵）</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>しばとのうち（柴の戸の内）</td>
<td>245</td>
</tr>
<tr>
<td>なられるしばびと（なされる柴人）</td>
<td>245</td>
</tr>
<tr>
<td>しぶむ</td>
<td>245</td>
</tr>
<tr>
<td>しぶむあさがお（暮む朝顏）</td>
<td>245</td>
</tr>
<tr>
<td>しめる</td>
<td>246</td>
</tr>
<tr>
<td>ところをしめる（所を占める）</td>
<td>246</td>
</tr>
<tr>
<td>しも</td>
<td>246</td>
</tr>
<tr>
<td>きりにし（霧に霜）</td>
<td>246</td>
</tr>
<tr>
<td>しもすまじいやま（霧廻まじい山）</td>
<td>246</td>
</tr>
<tr>
<td>しものかたき（霜の片敷）</td>
<td>246</td>
</tr>
<tr>
<td>つきにしも（月に霜）</td>
<td>246</td>
</tr>
<tr>
<td>ながつきのしも（長月の霜）</td>
<td>246</td>
</tr>
<tr>
<td>しらかわのせき</td>
<td>246</td>
</tr>
<tr>
<td>しらかわのせき（白河の関）</td>
<td>246</td>
</tr>
<tr>
<td>しる</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>あわれしる（哀れ知る）</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>しる（知る）</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>ほどがしられる（知が知られる）</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>しろ</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>おきのしらなみ（沖の白浪）</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>ここしらゆき（越の白雪）</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>しほつゆ（白露）</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>みねしらゆき（峰の白雪）</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>すえ</td>
<td>248</td>
</tr>
<tr>
<td>おやまだのすえ（小山田の末）</td>
<td>248</td>
</tr>
<tr>
<td>たけのすえすえ（竹の末々）</td>
<td>248</td>
</tr>
<tr>
<td>ながれのすえ（流れの末）</td>
<td>248</td>
</tr>
</tbody>
</table>
みずのすえみえる（水の末見える）........................................ 248
みちのすえ（道の末）...................................................... 248
すぎ................................................................. 249
すぎのむらだち（杉の群立ち）........................................ 248
すぎる................................................................. 249
あめすぎたあののしゅけさ（雨過ぎた後の静けさ）......................... 249
すぎるなたらめ（過ぎる村雨）.......................................... 249
はるすぎる（春過ぎる）................................................ 249
ほとんどすぎくらのいずらすぎる（時鷹枕のいず立ち過ぎる）............. 249
むらさめすぎる（村雨過ぎる）.......................................... 249
すごい................................................................. 249
すごいあきかぜ（凄い秋風）........................................... 249
すさまじい........................................................... 249
かぜがすさまじい（風が凄まじい）..................................... 249
しもすさまじいやま（霜凄まじい山）.................................... 250
すさまじいぞら（凄まじい空）.......................................... 250
すじ................................................................. 250
けむりひとすじ（煙一筋）.............................................. 250
ひとすじ（一筋）....................................................... 250
みずのひとすじ（水の一筋）.......................................... 250
みちのひとすじ（道の一筋）.......................................... 250
すすき................................................................. 251
かれはなすすき（枯れ花薄）.......................................... 251
はなすすき（花薄）..................................................... 251
ふとむらすすき（一群薄）.............................................. 251
すずしい........................................................... 251
かぜのすずしさ（風の涼しさ）........................................ 251
すずしい（涼しい）................................................... 251
すずしさにあきたつ（凉しさに秋立つ）................................ 251
つゆのすずしさ（露の涼しさ）........................................ 251
ゆうすずみ（夕涼み）................................................ 252
すずむし........................................................... 252
すずむしのこえ（鈴虫の声）........................................... 252
すだれ................................................................. 252
すだれをまけばゆき（簾をまけば雪）.................................. 252
たますだれ（玉簾）..................................................... 252
たますだれあける（玉簾あける）..................................... 252
すてる................................................................. 252
すててかえる（捨てて帰る）........................................... 252
すてるよのなか（捨てる世の中）..................................... 252
すま................................................................. 253
すまのうら（須磨の浦）............................................... 253
すまのうらなみ（須磨の潮満）....................................... 253
すまいと（須磨人）.................................................... 253
なおすまのうら（なお須磨の浦）..................................... 253
すみ................................................................. 254
すみぞめのそで（墨染の袖）........................................... 254
すみのころもで（墨の衣手）.......................................... 254
すみだがわ  .................................................. 254
すみだがわ（隅田川） .................................. 254

すみよし .................................................. 254
すみよし（住吉） ........................................ 254
すみよしのうら（住吉の浦） ................................ 254
すみよしのまつ（住吉の松） ................................ 254
すみよしのまつとたのむ（住吉の松と願む） .................. 255
すめるふるさと（住める古里） .............................. 255

すむ .................................................... 255
すみどころ（住み所） .................................... 255
つきかげすむ（月影遮む） ................................ 255
つきすむ（月消む） ....................................... 255
なかなかいちはすみよい（中々市は住み良い） ....... 256
みずはすむ（水は消む） .................................. 256

せみ .................................................... 256
せみのもろごえ（蝉の諸声） .............................. 256

そう ..................................................... 256
かわぞいのみち（川沿いの道） .............................. 256
かわぞいぶね（川沿い舟） ................................ 256
そうはおもかげ（添は面影） .................................. 256

どこ ..................................................... 257
かすみのそこ（霞の底） .................................. 257

おちかたびとのそで（遠方人の袖） ....................... 257
かたしきのそで（片敷の袖） .............................. 257
きぬぎぬのそで（後暦の袖） .............................. 257
すみぞめのそで（墨染の袖） ................................ 257
そこでつよく使い（袖が露っぱい） ......................... 258
そこでぬれる（袖濡れる） ................................ 258
そこでいろいろ（袖の色々） .............................. 258
そこでうつりが（袖の移り香） .............................. 258
そこでうめのか（袖の梅の香） .............................. 259
そこでくれない（袖の紅） ................................ 259
そこでこおり（袖の水） .................................. 259
そこでふきおくるかぜ（袖吹おくる風） .................... 259
そこでぬらす（袖を濡らす） ................................ 259
なみだがわがそこでうえ（涙が我が袖の上） .......... 260
まいのそで（舞の袖） ..................................... 260
ややさわいそで（やや寒い袖） .............................. 260

その ..................................................... 260
そのあさがお（朝の朝顔） ................................ 260

そのまま .................................................. 260
そのまま（そのまま） ...................................... 260

そば ..................................................... 261
そばのかけはし（傍の柵橋） ................................ 261

すみぞめのそで（墨染の袖） .............................. 261

そら ..................................................... 261
あかつきのそら（晩の空） .................................................. 261
あきのそら（秋の空） .................................................. 261
あけがたのそら（明け方の空） ...................................... 261
あけぼののそら（曙の空） .......................................... 262
あめのなるそら（雨降る空） ......................................... 262
ありあげのそら（有明の空） ......................................... 262
いねがてのそら（夜明けの空） ..................................... 262
くれごとのそら（朝暮れの空） ..................................... 262
すさまじいそら（凄まじい空） ....................................... 263
たなびくよこぐものそら（横越横雲の空） ....................... 263
たびのそら（旅の空） .................................................. 263
つきにありあげのそら（月夜有明の空） ....................... 263
なかぞら（中空） .................................................... 263
なかぞらのくも（中空の雲） ........................................ 263
ながめのそら（長雨の空） ........................................... 263
ふかいよりのそら（深夜の空） ...................................... 264
ほたるとぶそら（昼飛ぶ空） .......................................... 264
むらさめのそら（村雨の空） ........................................ 264
ゆうぐれのそら（夕暮れの空） ..................................... 264
ゆきのなかぞら（雪の中空） ........................................ 265
ゆくすえのそら（行く末の空） ....................................... 265
よこぐものそら（横越横雲の空） ................................ 265
た .......................................................... 265
うえるた（植えの田） ................................................ 265
うちかえすた（田返す田） ........................................... 265
おやまだのすえ（小山田の末） .................................... 266
おやまだのはら（小山田の原） ..................................... 266
たえだえ ........................................................ 266
みずのたえだえ（水の絶え絶え） ..................................... 266
みちたえだえ（道絶え絶え） ......................................... 266
たえま ........................................................ 266
くものたえま（雲の絶え間） ........................................ 266
たえる ........................................................ 266
おもいたえる（思い待てる） ........................................ 266
たかい ........................................................ 266
かげたかくなる（影高くなる） ..................................... 266
みねたかい（峰高い） ................................................ 267
たき ........................................................ 267
たきのいわかみ（高の岩出） ....................................... 267
たく ........................................................ 267
あしびたくかげ（霧焚く影） ........................................ 267
たけ ........................................................ 267
いくえとよらのたけのしたみち（幾重濃霧の竹の下道） .... 267
くれたけ（呉竹） .................................................. 267
こぼれるたけのはのつゆ（零れ竹の葉の露） .................. 267
たけうちなびく（竹打ち腰く） ..................................... 268
たけのすえすえ（竹の末々） ....................................... 268
たけのひとむら（竹の一帯） ....................................... 268
たけをうつこえ（竹を打つ声） ........................................... 268 
なびきあうたけ（藤むく竹） ........................................... 268 
たえる ................................................................. 268 
とじる (年長する) ..................................................... 268 
たそがれ ............................................................... 269 
ふじのたそがれ（藤の黄昏） ........................................... 269 
たちばな ............................................................... 269 
かぜににおうたちばな（風に匂う草） .................................. 269 
におうたちばな（匂う草） ............................................. 269 
のきのたちばな（軒の草） ............................................. 269 
たつ ................................................................. 269 
すぎのむらだち（杉の群立ち） ........................................... 269 
すずらにきたつ（鈴なりに秋立つ） .................................... 270 
たってうかれる（立って浮かれる） .................................... 270 
たつひのなつごろも（たつ日の夏衣） ................................... 270 
なつこだち（夏木立） .................................................. 270 
はるたつ（春立つ） ................................................... 270 
むらさめがたつ（村雨がたつ） ........................................... 270 
たとえる ............................................................... 270 
こちらのたとえ（胡蝶の喰え） ....................................... 270 
なににたとえよう（何に驚えよう） .................................... 271 
たどる ................................................................. 271 
かすみにたどるみち（霧にたどる道） .................................. 271 
たばた ................................................................. 271 
たなばた（七夕） ..................................................... 271 
たなびく ............................................................... 271 
たなびくよこものがそら（斜引く横雲の空） .......................... 271 
たに ................................................................. 271 
たのにいお（谷の庵） .................................................. 271 
たのしむ ............................................................... 271 
たのしきをきわめる（楽しみを極める） ................................ 271 
たのしむ（楽しむ） ................................................... 272 
たのむ ................................................................. 272 
すみよしのまつとたのむ（住吉の松と願む） .......................... 272 
なたのむ（何願む） ................................................... 272 
ひとだのみ（人願み） ................................................ 272 
みをたのむな（身を願むな） .......................................... 272 
たび ................................................................. 272 
いづるたびひと（出る旅人） .......................................... 272 
たびごろも（旅衣） ................................................... 273 
たびにある（旅にある） ............................................. 273 
たびのかなしさ（旅の悲しさ） ....................................... 273 
たびのこもで（旅の衣手） ............................................ 273 
たびのそら（旅の空） ................................................ 273 
たびはうい（旅は憂い） .............................................. 273 
たびはかなしい（旅は悲しい） ....................................... 273 
つきのたびのみち（月の旅の道） .................................... 274 
わかれるたびはかなしい（別れる旅は悲しい） ...................... 274
たましまがわ  ............................................................... 274
たましまがわ（玉島川） .................................................. 274
たまずさ  ................................................................. 274
かりのたまずさ（雁の玉章） ........................................... 274
たまぼこ  ................................................................. 274
たまぼこ（玉鈴） .......................................................... 274
たよる  ................................................................. 274
たつをたよるに（松を願に） ......................................... 274
だれ  ................................................................. 275
tagasato（誰が里） ...................................................... 275
darekakeru（誰帰る） .................................................. 275
darenaka（誰なのか） .................................................... 275
darenushureru（誰に忘れる） ....................................... 275
daretootouka（誰を訪おうか） ...................................... 275
daretomatsu（誰を待つ） .............................................. 275
daretomatsumuno（誰を松虫の鳴く） .............................. 276
ちかい  ................................................................. 276
akichikaraaru（秋近くなる） ........................................... 276
chikawawo（近い川音） ................................................ 276
chiaisamazato（近い山里） ........................................... 276
natorihaikoyoisu（野辺近い鴨） ................................... 276
yamatchai（山近い） ................................................... 276
ちぎり  ................................................................. 276
tatadararinoshiochigiri（ただ有り無しの契り） ............. 276
chigiri（契り） .......................................................... 277
yuugawonochigiri（夕顔の契り） .................................. 277
ちどり  ................................................................. 277
chidoranaka（千鳥鳴く） .............................................. 277
chidorinokoe（千鳥鳴く声） .......................................... 277
murachidori（群千鳥） ................................................ 277
ちょう  ................................................................. 278
choyohonekersen（蝶の顫れさ） .................................... 278
ちる  ................................................................. 278
kazeinahataru（風に花散る） .......................................... 278
sakurahorakage（桜散る陰） .......................................... 278
chirunoha（散る花） ................................................... 278
hanaruru（花散る） ..................................................... 278
つかえる  ............................................................... 279
tsuakebito（仕え人） .................................................. 279
つき  ................................................................. 279
akatsukizuki（曇月） ................................................... 279
akizukki（秋の月） .................................................... 279
akizuyouzuki（秋の夜の月） ......................................... 279
akeyasuizuki（明けやすい月） ....................................... 280
akakezuki（有明の月） ............................................... 280
imishienzuki（古の月） ............................................... 281
oborozukizuki（隠月夜） .............................................. 281
おぼろにのこるありあけのつき（霧に残る有明の月）.................................281
おもうこととつか（思の月と月）.......................................................281
かりねのつかかげ（仮装の月影）.....................................................282
たまくらのつか（手枕の月）.............................................................282
つきでやる（月出やる）.................................................................282
つきでる（月出る）...........................................................................282
つきおちる（月落ちる）......................................................................283
つきかけすむ（月影消む）.................................................................283
つきかけすむ（月が消む）.................................................................283
つきかけすむよる（月が消む夜）.........................................................283
つきがかたむく（月が傾く）...............................................................283
つきがこおる（月が混る）.................................................................283
つきがさやか（月がさやか）.................................................................284
つきがほのめく（月がほのめく）.........................................................284
つきさえる（月がしぼえる）...............................................................284
つきさしいでる（月差し出る）............................................................284
つきすむ（月消む）...........................................................................284
つきにありあけのそら（月に有明の空）................................................285
つきにしも（月に霜）........................................................................285
つきのあかしがた（月の明石潮）.........................................................285
つきのいろがた（月の入方）.................................................................285
つきのかわかみ（月の川上）...............................................................285
つきのさびしさ（月の寂しさ）............................................................285
つきのさやけさ（月のさやけさ）..........................................................286
つきのさよのなかやま（月の小夜の中山）..............................................286
つきのたびのみち（月の旅の道）........................................................286
つきのむらくも（月の群雲）..............................................................287
つきのもと（月の下）.......................................................................287
つきのゆくすえ（月の行く末）............................................................287
つきはありあけ（月は有明）..............................................................287
つきふける（月更ける）.................................................................287
つきまつ（月待つ）...........................................................................287
つきもさやか（月もさやか）...............................................................287
つきよなよな（月夜な夜な）...............................................................287
つきをみる（月を見る）...................................................................288
つゆのつつきがこぼれる（露の月が零れる）............................................288
なつのよのつつき（夏の夜の月）........................................................288
ねやのつつきかげ（闇の月影）...........................................................288
はるのよのつつき（春の夜の月）.........................................................288
ふるさとのつつき（古里の月）.............................................................288
みちよしのつつき（短夜の月）............................................................289
みやここのつつきにかえる（都の月に帰る）...........................................289
やまのはのつつき（山の端の月）.........................................................289
ゆうぐくよ（夕月夜）......................................................................289
よおのつつき（夜半の月）................................................................289
つく.................................................................
こころつくし（心尽くし）.................................290
こころをつくすあめのよる（心を尽くす雨の夜）........290
つじ.........................................................291
みちのつじうら（道の辻占）...............................291
つたう.....................................................291
かきねつたい（道根伝え）................................291
つたう（伝う）.............................................291
はまつたう（浜伝う）......................................291
つな.........................................................291
ふねのつなでなわ（舟の縄手繩）...........................291
つばさ.......................................................291
とぶかりのつばさ（飛ぶ雁の翼）...........................291
つゆ.........................................................292
あさじうのつゆ（洗茅生の霧）.............................292
くさのつゆ（草の霧）......................................292
くさぼのつゆ（草薬の霧）................................292
このしたつゆ（木の下霧）................................292
こぼれるたけのはのつゆ（零れる竹の葉の霧）.........292
さみだれのつゆ（五月雨の霧）.............................292
しらつゆ（白霧）............................................292
そこでつゆっぽい（袖が霧っぽい）..........................293
つゆがみだれる（霧が乱れる）...............................293
つゆしぶれのくさ（露時雨の草）...........................293
つゆにみだれる（霧に乱れる）.............................293
つゆのあけぼの（霧の曙）................................293
つゆのおときくにわ（露の音聞く庭）.....................294
つゆのすずさ（露の凉しさ）...............................294
つゆのたまくら（露の手枕）...............................294
つゆのつきがこぼれる（霧の月が零れる）................294
つゆのふるさと（露のふる里）.............................294
つゆのふるみち（露のふる道）.............................294
つゆふくかぜ（霧吹く風）.................................294
つゆもみだも（霧も湧も）.................................294
はぎのしたつゆ（秋の下露）..............................295
ふくかぜのあきのつゆ（吹く風に秋の露）..............295
つら.........................................................295
かわつちのさと（川面の里）...............................295
はるのうみつら（春の海面）...............................295
つらい.......................................................295
うくつらい（憂く辛い）....................................295
つり.........................................................295
あまのつりふね（海人の釣舟）.............................295
おきのつりふね（沖の釣舟）.............................295
つれない.....................................................296
うえはつれない（上は連れない）..........................296
つれない（連れない）......................................296
つれなさをうらむ（連れなさを恨む）.....................296
て.........................................................297
あきのたまくら（秋の手枕） ........................................ 297
にたまくら（新手枕） ........................................ 297
ふねのつなでなわ（舟の綱手絹） ........................................ 297
てら ........................................ 297
はるのやまでら（春の山寺） ........................................ 297
ふるでら（古寺） ........................................ 297
みねのふるでら（峰の古寺） ........................................ 297
てん ........................................ 298
あまおとめ（天乙女） ........................................ 298
あまのがわ（天の川） ........................................ 298
おたるあまっかり（落ちる天つ雁） ........................................ 298
でる ........................................ 298
いづるたびと（出る旅人） ........................................ 298
いづるふなびと（出る舟人） ........................................ 298
かれたくさがもえでる（枯れた草が萌え出る） ........................................ 298
つきいでやる（月出する） ........................................ 299
つきいでる（月出る） ........................................ 299
つきさいでる（月差し出る） ........................................ 299
と ........................................ 299
くさのどのうち（草の戸の内） ........................................ 299
しばのどのうち（柴の戸の内） ........................................ 299
とう ........................................ 300
あとをだにう（後をだに訪う） ........................................ 300
だれをとおうか（誰を訪おうか） ........................................ 300
とわかる（訪われる） ........................................ 300
ほたるとうくれ（蛻訪う暮れ） ........................................ 300
やどをとう（宿を訪う） ........................................ 300
わずれとうくさはら（忘れ訪う草原） ........................................ 301
とおい ........................................ 301
おちかたのくも（遠方の雲） ........................................ 301
おちかたのやま（遠方の山） ........................................ 301
おちかたびとのそで（遠方人の袖） ........................................ 301
おちのとおやま（遠方の遠山） ........................................ 301
かずむはるのとおやま（霞む春の遠山） ........................................ 301
くものおちかた（雲の遠方） ........................................ 302
とおきふるさと（遠き古里） ........................................ 302
とおきむさしの（遠き武蔵野） ........................................ 302
とおぎえ（遠消え） ........................................ 302
とおきた（遠く来た） ........................................ 302
とおやまのあき（遠山の秋） ........................................ 302
のがとおい（野が遠い） ........................................ 302
みやこがとおい（都が遠い） ........................................ 302
とおり ........................................ 303
ただひととおり（ただ一通り） ........................................ 303
ひととおり（一通り） ........................................ 303
ところ ........................................ 303
ところをしめる（所を占める） ........................................ 303
ところ
すみどこ（住み所） .......................... 303
ところどこ ................................. 303
ところどこ（所々） .......................... 303
とし ................................. 304
としこえる（年越える） ......................... 304
としたける（年長ける） .......................... 304
としこどのはな（年々の花） .......................... 304
となえる ................................. 304
ほどけとなえる（仏唱える） .......................... 304
とにかく ................................. 304
とにかく（とにかく） .......................... 304
とぶ ................................. 305
とぶかのつばさ（飛ぶ雁の翼） .......................... 305
とぶはたる（飛ぶ箏） .......................... 305
ほととぶそら（箏飛ぶ空） .......................... 305
みだれてとぶはたる（乱れて飛ぶ箏） .......................... 305
とまる ................................. 305
とまりぶね（泊まり舟） .......................... 305
とまりぶねおとしていずち（泊まり舟音していずち） .......................... 306
ともしび ................................. 306
ともしびのかげ（灯の影） .......................... 306
ともしびのもと（灯の下） .......................... 306
ともなう ................................. 306
はるのとも（春の伴い） .......................... 306
ひぐれにともなう（日暮れに伴う） .......................... 306
とううら ................................. 307
いくえとよらのたけのしたみち（幾重叠浦の竹の下道） .......................... 307
とり ................................. 307
かえるとおりのね（帰る鳥の音） ......................... 307
とりがさえずる（鳥が鶴る） .......................... 307
とりなく（鳥鳴く） .......................... 307
とりのこえ（鳥の声） .......................... 307
とりのこえごえ（鳥の声々） .......................... 307
とりのさえずり（鳥の鶴り） .......................... 308
とりのなくこえ（鳥の鳴く声） .......................... 308
とりのひとこえ（鳥の一声） .......................... 308
ねぐらのはるのとりのね（帰の春の鳥の声） .......................... 308
むらとりがねる（群鳥が寝る） .......................... 309
ない ................................. 309
あるかなきか（有るか無きか） .......................... 309
かくれがはない（隠れ家はない） .......................... 309
ただあらしあのちぎり（ただあり無しの契り） .......................... 309
なきものの（無き物） .......................... 309
ひとりかえもしない（人影もしない） .......................... 309
みやこともない（宮事もなない） .......................... 309
なか ................................. 310
すべてのなか（捨てる世の中） .......................... 310
なかぞら（中空） .......................... 310
なかぞらのくも（中空の雲）
ひとのところのかわるよのなか（人の心の変わる世の中）
ひとのところのよのなか（人の世の中）
ゆきのかぞら（雪の中空）
よのなか（世の中）

なかなか
なかなかいちすみよい（中々市は住み良い）

ながい
あきのよなが（秋の夜長）
こころながくまで（心長く待て）
ながあめのそら（長雨の空）
よがながい（夜が長い）
よにながらえる（世に長らえる）

ながつき
ながつきのしぐも（長月の霜）

ながめる
ながめる（眺める）

ながれる
ながれのすえ（流れの末）

ながれる（流れる）
ながれるみず（流れる水）

なく
うぐいすがなく（鶯が鳴く）
おじかなくこえ（麁鹿鳴く声）
かりなく（雁鳴く）
かわずなく（蛙鳴く）
きぎすなきたつ（蛙鳴き立つ）
だれをまつむしのなく（誰を松虫の鳴く）
ちどりなく（千鳥鳴く）
ちどりなくこえ（千鳥鳴く声）
とりなく（鳥鳴く）
とりのなくこえ（鳥の鳴く声）
なくきりぎるす（鳴く蟋蟀）
なくほととぎす（鳴く時鳥）
なけほととぎす（鳴く時鳥）
ほととぎすなく（時鳥鳴く）
まつむしがなく（松虫が鳴く）
むしなく（虫鳴く）

なぐさめる
うきをただなぐさめる（憂きをただ慰める）
うちがなぐさめる（うちが慰める）

なごり
なごり（名残り）
なごりさびしい（名残り寂しい）

なつ
たつきのなつごろも（たつ日の夏衣）
なつかけて（夏かけて）
なつこだち（夏木立）
なつのひ（夏の日） ........................................ 320
なつのよのつき（夏の夜の月） ........................................ 320
なでしこ .................................................. 321
なでしこ（撫子） ........................................ 321
なに .................................................... 321
なにおそう（何思う） ......................................... 321
なにたのむ（何頼む） ........................................ 321
なににたとえよう（何に譬えよう） ........................................ 321
なびく .................................................. 321
うなびく（打ち鷹く） ........................................ 321
たけうなびく（竹打ち鷹く） ....................................... 321
なびきあうたけ（靡き合う竹） .................................... 322
なびくあおやぎ（靡く青柳） ..................................... 322
なみ ..................................................... 322
いわこすなみ（岩越す浪） ....................................... 322
おきのしならなみ（神の白浪） .................................... 322
おきのなみ（神の浪） ......................................... 322
かかるふじなみ（掛かる藤浪） ..................................... 322
しがのうらぶね（志賀の浦舟） .................................... 323
すまずのうらなみ（須漕の浦浪） .................................... 323
たきのいわなみ（瀬の岩浪） ...................................... 323
なみのうえ（浪の上） ......................................... 323
なみのうきふね（浪の浮舟） ..................................... 323
なみのはにに（浪の間に間に） .................................... 324
ふくなみのうらかぜ（吹く浪の浦風） ........................................ 324
まつのふじなみ（松の藤浪） ...................................... 324
なみだ ................................................... 324
つゆもなみだも（露も淚も） ...................................... 324
なみだ（泪） .................................................. 324
なみだあらそうこうえ（泪争う声） .................................... 324
なみだおちる（泪落ちる） ........................................ 325
なみだかわ（淚河） ............................................ 325
なみだがうがそのうえ（泪が我が袖の上） ............................. 325
むかしこもみなみだ（昔を思う泪） .................................... 325
むかってなみおちる（向って淚落ちる） ........................................ 326
ならう .................................................... 326
よのならい（世の習い） .......................................... 326
なる ..................................................... 326
あきちかくなる（秋近くなる） ....................................... 326
かねなる（鐘鳴る） ............................................ 326
なる（なる） .................................................. 327
なれるしばびと（なれる柴人） ....................................... 327
われでなくなるのがうい（我でなくなるのが憂い） ......................... 328
なわ ..................................................... 328
ふねのつなでなわ（舟の繋手編） ..................................... 328
におう .................................................... 328
うめにおう（梅句う） ........................................... 328
うめにおうころ（梅句う頃） ...................................... 328
かぜににおうたちばな（風に匂う梅） ........................................ 328
におうめのか（匂う梅の香） ........................................ 328
におうたちばな（匂う梅） ........................................ 329
みずのにおうやまぶき（水に匂う山吹） ................................... 329
にしき .................................................. 329
もみじのにしき（紅葉の錦） ........................................ 329
にち .................................................. 329
あさひかげ（朝日影） ........................................ 329
いりひかげ（入り日影） ........................................ 329
かすむひ（霞む日） ........................................ 329
さむいひ（寒い日） ........................................ 330
たつひのなつごろも（たつ日の夏衣） ................................ 330
なつのひ（夏の日） ........................................ 330
はるのいりひ（春の入日） .................................... 330
ひがくれる（日が暮れる） .................................... 330
ひぐれにともなう（日暮れに伴う） ................................ 330
にわ .................................................. 331
つゆのおときにくわ（露の音聞く庭） ................................ 331
にわのあけぼの（庭の曙） ................................ .... 331
ぬれる .................................................. 331
そこでぬれる（袖濡れる） ................................ .... 331
そこでぬらす（袖を濡らす） ................................ .... 331
ね .................................................. 332
いわがね（岩の根） .................................... 332
いわがねのまつ（岩の根の松） ................................ 332
ねぐら .............................................. 332
ねぐらのはるのとりのね（春の鳥の声） .............................. 332
ねや .................................................. 332
ねやのつきかげ（闇の月影） ................................ .... 332
ねる .................................................. 332
いかにれて（如何に寝て） ................................ ..... 332
いねがてのそら（寝ねがての空） ................................ 332
うたたね（うたた寝） ..................................... 332
かりねのつきかげ（仮寝の月影） .................................. 333
かりねをする（仮寝をする） ..................................... 333
ねざめる（寝覚める） ..................................... 333
ねざめるよ（寝覚める夜） ..................................... 333
ひとりねとかげ（一人寝と影） .................................... 333
ひとりねる（一人寝る） ..................................... 333
むらどりがねる（群鳥が寝る） .................................... 333
の .................................................. 334
のがとおい（野が遠い） ..................................... 334
のにかかりまくら（野に仮枕） ..................................... 334
ののしたもえ（野の下薬） ..................................... 334
べちかいういす（野辺近い鷲） .................................... 334
べべのあけぼの（野辺の曙） .................................... 334
べべのあわれさ（野辺の衰れさ） .................................. 334
べべのいろい（野辺の色々） ..................................... 335
<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>頁碼</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>のべのおちこち（野辺の遠近）</td>
<td>335</td>
</tr>
<tr>
<td>のべのかりふし（野辺の仮隠）</td>
<td>335</td>
</tr>
<tr>
<td>のき</td>
<td>335</td>
</tr>
<tr>
<td>のきのたばか（軒の襟）</td>
<td>335</td>
</tr>
<tr>
<td>のこる</td>
<td>335</td>
</tr>
<tr>
<td>あめのこるそら（雨残る空）</td>
<td>335</td>
</tr>
<tr>
<td>おぼろのにこるありあげのつき（霧に残る有明の月）</td>
<td>336</td>
</tr>
<tr>
<td>きりのころ（霧残る）</td>
<td>336</td>
</tr>
<tr>
<td>ぐさはのこらないゆきのしたおれ（草は残らない雪の下折）</td>
<td>336</td>
</tr>
<tr>
<td>のこる（残る）</td>
<td>336</td>
</tr>
<tr>
<td>のこるありあげ（残る有明）</td>
<td>336</td>
</tr>
<tr>
<td>のこるやまかげ（残る山影）</td>
<td>336</td>
</tr>
<tr>
<td>のどか</td>
<td>337</td>
</tr>
<tr>
<td>あめののどけさ（雨の長闊）</td>
<td>337</td>
</tr>
<tr>
<td>のどか（長闊）</td>
<td>337</td>
</tr>
<tr>
<td>ひかりのどか（光長闊）</td>
<td>337</td>
</tr>
<tr>
<td>ののみや</td>
<td>337</td>
</tr>
<tr>
<td>ののみや（野々宮）</td>
<td>337</td>
</tr>
<tr>
<td>のぼる</td>
<td>337</td>
</tr>
<tr>
<td>きりはれのぼる（霧晴れ昇る）</td>
<td>337</td>
</tr>
<tr>
<td>のり</td>
<td>337</td>
</tr>
<tr>
<td>のりのことのは（法の宮の葉）</td>
<td>337</td>
</tr>
<tr>
<td>のわき</td>
<td>338</td>
</tr>
<tr>
<td>のわきのあと（野分の後）</td>
<td>338</td>
</tr>
<tr>
<td>のわきのかぜ（野分の風）</td>
<td>338</td>
</tr>
<tr>
<td>は</td>
<td>338</td>
</tr>
<tr>
<td>やまのはのつき（山の端の月）</td>
<td>338</td>
</tr>
<tr>
<td>はぎ</td>
<td>338</td>
</tr>
<tr>
<td>こはぎうつろう（小萩移ろう）</td>
<td>338</td>
</tr>
<tr>
<td>こはぎはら（小萩原）</td>
<td>338</td>
</tr>
<tr>
<td>はぎのしたつゆ（萩の下露）</td>
<td>339</td>
</tr>
<tr>
<td>はげしい</td>
<td>339</td>
</tr>
<tr>
<td>かぜのはげしさ（風の激しさ）</td>
<td>339</td>
</tr>
<tr>
<td>はこぶ</td>
<td>339</td>
</tr>
<tr>
<td>はこぶみつき（運ぶ寶）</td>
<td>339</td>
</tr>
<tr>
<td>はし</td>
<td>339</td>
</tr>
<tr>
<td>かけはし（掛橋）</td>
<td>339</td>
</tr>
<tr>
<td>くめのいはし（久米の岩橋）</td>
<td>339</td>
</tr>
<tr>
<td>くものかけはし（雲の掛橋）</td>
<td>340</td>
</tr>
<tr>
<td>そばのかけはし（傍の掛橋）</td>
<td>340</td>
</tr>
<tr>
<td>はしばしら（橋柱）</td>
<td>340</td>
</tr>
<tr>
<td>みちのかけはし（道の掛橋）</td>
<td>340</td>
</tr>
<tr>
<td>みねのかけはし（経の掛橋）</td>
<td>340</td>
</tr>
<tr>
<td>ゆめのうきたけはし（夢の浮橋）</td>
<td>340</td>
</tr>
<tr>
<td>はしら</td>
<td>341</td>
</tr>
<tr>
<td>はしばしら（橋柱）</td>
<td>341</td>
</tr>
<tr>
<td>はし</td>
<td>341</td>
</tr>
<tr>
<td>のかべのはしきのひとむら（間辺の橋の一端）</td>
<td>341</td>
</tr>
</tbody>
</table>
はじめる .......................................................... 341
こおりそめる（氷初める） ..................................... 341
はす ................................................................. 342
はちすのうえ（連の上） ....................................... 342
はつ ................................................................. 342
あきのはつかぜ（秋の初風） ............................... 342
けさのはつゆき（今朝の初雪） .............................. 343
はじめ（初め） .................................................. 343
はつかぜときのうはきいてあきふける（初風と昨日は聞いて秋更ける） ............................... 343
はつかりのこえ（初雁の声） ............................... 343
はつせかぜ ....................................................... 343
はつせかぜ（初風風） ......................................... 343
はつせまで ...................................................... 343
はつせまで（初風寺） ......................................... 343
はてる ............................................................. 344
あけはてる（明け果てる） ..................................... 344
よわりはてる（弱り果てる） .................................. 344
はな ................................................................. 344
あおぼのはなのあと（青葉の花の後） ...................... 344
あさがおのはな（朝顔の花） ............................... 344
おしんではなをみる（惜しんで花を見る） .................. 344
おのえのはなをみる（尾上の花を見る） ..................... 344
かぜにはなる（風に花散る） ............................... 345
かれはなすすき（枯れ花茎） ............................... 345
さくはなのはな（咲く春の花） ............................. 345
ちるはな（散る花） ............................................. 345
としみのはな（年々の花） .................................... 345
はなうえる（花挿える） ....................................... 345
はなうちかおる（花立ち香る） ............................. 346
はなさく（花咲く） ............................................. 346
はなさかり（花盛り） ......................................... 346
はなすすき（花茎） ............................................. 347
はなちろ（花散る） ............................................. 347
はなならで（花ならば） ....................................... 347
はなのいろ（花の色） ......................................... 347
はなのかげ（花の陰） ......................................... 347
はなのかげにやすらう（花の陰に安らう） ................. 348
はなのこずえにあらわれる（花の梢に現れる） ......... 348
はなのこのもと（花の木の下） ............................. 348
はなのはる（花の春） ......................................... 349
はなのはるかぜ（花の春風） ............................... 349
はなのはるごと（花の春常） ............................... 349
はなのひとえだ（花の一枝） ............................... 349
はなのひともと（花の一枝） ............................... 349
はなのやまかぜ（花の山風） ............................... 350
はなみえる（花見える） ....................................... 350
はなよもみじよ（花よ紅葉よ） ............................. 350
はるのはな（春の花） ......................................... 350
みよしのはな（み吉野の花） ........................................... 351
やまなしのはな（山梨の花） ........................................... 351
よしのがわのはな（吉野川の花） ..................................... 351
はなれる ............................................................... 351
あけはなれる（明け離れる） ......................................... 351
さとはなれたみち（里離れた道） ................................... 351
はね ................................................................. 352
ういしきのはながき（憂い鶴の羽抜き） ............................ 352
しきのはねおと（鶴の羽音） ......................................... 352
しきのはながき（鶴の羽抜き） ....................................... 352
はま ................................................................. 352
はまつう（浜伝う） .................................................. 352
はやい ............................................................... 352
あさまだき（朝まだき） ............................................... 352
はら ................................................................. 352
おやまだのはら（小山田の原） ...................................... 352
くさはら（草原） .................................................... 352
こはぎはら（小粂原） ................................................ 353
まさはら（真砂原） ................................................... 353
わすれとうくさはら（忘れ訪れた草原） .......................... 353
わすれるなよ（忘れるなよ） ......................................... 353
はらう ............................................................... 353
はらう（払う） ...................................................... 353
はる ................................................................. 354
かずはるのとおやま（霞む春の遠山） ............................ 354
さくはるのはな（咲く春の花） ...................................... 354
ねぐらのはるのとりのね（鴨の春の鳥の声） ..................... 354
はなのはる（花の春） ................................................ 354
はなのはるかぜ（花の春風） ........................................ 354
はなのはるごと（花の春毎） ........................................... 354
はるあきのいろ（秋の色） .......................................... 355
はるかえる（春戻る） ................................................. 355
はるかぜが吹く（春風が吹く） ...................................... 355
はるがくる（春が来る） .............................................. 355
はるすぐる（春過ぎる） .............................................. 355
はるたつ（春立つ） ................................................... 356
はるのあけぼの（春の曙） .......................................... 356
はるのいりひ（春の入日） ............................................. 356
はるのうみつら（春の海面） ....................................... 356
はるのかえるさ（春の戻るさ） ...................................... 356
はるのかなりがね（春の雁） ........................................... 357
はるのくれ（春の暮れ） .............................................. 357
はるのくれがた（春の暮れ方） ..................................... 357
はるのさびしさ（春の寂しさ） ..................................... 357
はるのともない（春の伴い） ........................................ 357
はるのはな（春の花） ................................................ 357
はるのはかり（春の光） .............................................. 358
はるのふるさと（春の古里） ......................................... 358
はるのものね（春の物の音） ........................................ 358
はるのやまざと（春の山里） ........................................ 358
はるのやまでら（春の山寺） ........................................ 359
はるのゆうぐれ（春の夕暮れ） .................................... 359
はるのよのつき（春の夜の月） .................................... 359
はるのよのゆめ（春の夜の夢） .................................... 359
はるはあけぼの（春は曙） ........................................ 359
はるよりのち（春より後） ........................................ 359
ふるきみやこのはる（古き国の春） ................................ 359
はるか .............................................................. 360
さとのはるかさ（里の遙かさ） ...................................... 360
はるばる ........................................................... 360
はるばる（遠々） ................................................ 360
はれる .............................................................. 360
きりはれるのぼる（霧晴れ昇る） .................................... 360
きりはれる（霧晴れる） ........................................... 360
はれるむらさめ（晴れる村雨） .................................... 360
みずはれる（水晴れる） ........................................... 360
むらさめのはれゆくあとはあらし（村雨の晴れゆく後は嵐） .... 360
ゆきがふりはれる（雪がふり降る） ................................ 361
ば ................................................................. 361
あおばのはなのあと（青葉の花の後） ................................ 361
かきのもとつば（垣の本つ葉） .................................... 361
くさばのつゆ（草葉の露） ........................................ 361
こぼれるだけのはのつゆ（零れる竹の葉の露） .................. 361
もみじば（紅葉葉） ............................................... 361
ひ ................................................................. 361
あしぴたくかげ（草火焚く影） .................................... 361
ひかり .............................................................. 362
はるのひかり（春の光） .......................................... 362
ひかりのかげ（光の影） .......................................... 362
ひかりのどか（光长関） .......................................... 362
ひぐらし ........................................................... 362
ひぐらしのこえ（蟻の声） ........................................ 362
ひだり .............................................................. 362
ひだりみぎ（左右） ............................................... 362
ひと .............................................................. 363
いつるたびびと（出る旅人） ...................................... 363
いつるふなびと（出る舟人） ...................................... 363
おちかたびとのそで（遠方人の袖） ................................ 363
おもうひとのこは（思ふ人の音の葉） ............................ 363
かえるさとびと（帰る里人） ...................................... 363
かわるよのなか（変わる世の中） ................................ 363
すまびと（須磨人） ............................................... 363
つかえびと（仕え人） ............................................ 363
なれるしばびと（なれる柴人） .................................... 364
ひとかえる（人帰る） ............................................. 364
ひとかげもない（人影もしない） ................................ 364
ひとがうらめしい（人が憎めしい） ................................. 364
ひとがたたれる（人が待たれる） ................................. 364
ひとだの（人頼み） ............................................. 364
ひとのおとすれ（人の訪れ） ..................................... 365
ひとのおもかげ（人の面影） .................................... 365
ひとのかねごと（人の破言） ..................................... 365
ひとのころ（人の心） ........................................... 365
ひとのころがたかる（人の心が変わる） ........................ 366
ひとのころがたかるよのなか（人の心の変わる世の中） ...... 366
ひとのころのよのがたか（人の心の世の中） ..................... 368
ひとある（人もある） ........................................... 369
ひとりねとかげ（一人ぼしと影） .................................. 369
ひとりねる（一人ぼし） .......................................... 369
ふるさとびと（古里人） ........................................... 369
わびびと（恋人） .................................................. 369
ひま ................................................................. 369
かすみのひま（霞のひま） ......................................... 369
ひややか ............................................................. 369
ひややか（冷ややか） ............................................. 369
みずひややか（水冷ややか） ....................................... 370
ひよし ............................................................... 370
かもひよし（賀茂日吉） ........................................... 370
ひらく ................................................................. 370
まどをひらく（窓を開く） ......................................... 370
ふかい ................................................................. 370
ふかいよのそら（深夜の空） ....................................... 370
やまふかいう（山深い） ............................................. 370
よがふかいう（夜が深い） ......................................... 370
ふく ................................................................. 371
あきかぜがふく（秋風が吹く） ..................................... 371
あらしけふくやま（風吹く山） ...................................... 371
そこでふきおくるかぜ（袖吹きおくる風） ......................... 371
つゆふかが（露吹く風） ........................................... 371
はるかぜがふく（春風が吹く） .................................... 372
ふくかぜのあきのつゆ（吹く風に秋の露） ........................ 372
ふくかふみのうらかぜ（吹く風の露） ....................... 372
まつかぜがふく（松風が吹く） .................................... 372
まつふくか（松風吹く風） ........................................ 372
ふける ................................................................. 373
あきふける（秋更ける） ........................................... 373
あきふくわたく（秋更け渡る） .................................... 373
つきふける（月更ける） .......................................... 373
はつかげときのうはくいてあきふける（初風と昨日は聞いて秋更ける） 373
よがふける（夜が更ける） ........................................ 374
ふじ ................................................................. 374
かかふじなみ（掛かる藤浪） ..................................... 374
ふじのたそがれ（藤の黄昏） ..................................... 374
まつのふじなみ（松の藤浪） ..................................... 374
ふす .................................................................................. 374

かりふしのゆめ（仮臥の夢） ........................................... 374
のべのかりふし（野辺の仮臥） ....................................... 375

ふで .................................................................................. 375

ふでのあと（筆の跡） ..................................................... 375

ふね .................................................................................. 375

あまおぶね（海人小舟） ............................................... 375
あまのおふね（海人の釣舟） ........................................... 375
いづるふなびと（出る舟人） .......................................... 376
おきのつりぶね（満の釣舟） ........................................... 376
おきのふね（満の舟） ................................................... 376
かわぞいぶね（川沿い舟） ............................................. 376
とまりふね（泊まり舟） .................................................. 376
とまりぶねおとしていすち（泊まり舟音していすち） .... 377
なみのうきふね（浪の浮舟） ......................................... 377
ふねのつなでなわ（舟の網手縄） .................................... 377
ふねひきのぼる（舟曳き上る） ........................................ 377
もろこしびぶね（唐土舟） .............................................. 377
よどのかわふね（淀の川舟） .......................................... 377
わたしひぶね（渡し舟） .................................................. 378

ふみ .................................................................................. 378

ふねのまきまき（文の巻々） .......................................... 378

ふゆ .................................................................................. 378

ういふゆごもり（憂い冬籠り） ....................................... 378
ふゆがれ（冬枯れ） ....................................................... 378
ふゆこもるころ（冬籠もる頃） ....................................... 378

ふる .................................................................................. 378

あめがふる（雨がふる） .................................................. 378
いけふる（池ふる） ......................................................... 379
しのふるころ（筍にふる頃） .......................................... 379
つゆのふるみち（霧のふる道） ....................................... 379
ふる（ふる） ................................................................. 379
ふるきみやこのはる（古き都の春） .............................. 379
ふるでら（古寺） .......................................................... 379
ふるみやのうち（古宮の内） ........................................... 380
みねのふるでら（峰の古寺） ........................................... 380
ゆきがふりはれる（雪がふり降る） .................................. 380

ふるさと ........................................................................... 380

おもうふるさと（思う古里） .......................................... 380
かえるふるさと（帰る古里） .......................................... 380
すめるふるさと（住める古里） ....................................... 381
つゆのふるさと（露のふる里） ....................................... 381
とおきふるさと（遠き古里） .......................................... 381
はるのふるさと（春の古里） ........................................... 381
ふるさと（古里） .......................................................... 381
ふるさとのあき（古里的秋） ......................................... 381
ふるさとのつき（古里の月） .......................................... 382
ふるさとひとと（古里人） .............................................. 382
<table>
<thead>
<tr>
<th>もし</th>
<th>382</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>はれたる</td>
<td>382</td>
</tr>
<tr>
<td>はれたる（陽たる）</td>
<td>382</td>
</tr>
<tr>
<td>たに</td>
<td>382</td>
</tr>
<tr>
<td>さやかなはし（さやかな星）</td>
<td>382</td>
</tr>
<tr>
<td>ほしをいただく（星を頂く）</td>
<td>382</td>
</tr>
<tr>
<td>はそい</td>
<td>383</td>
</tr>
<tr>
<td>みちがほそい（道が細い）</td>
<td>383</td>
</tr>
<tr>
<td>ほとる</td>
<td>383</td>
</tr>
<tr>
<td>あきのほたる（秋の星）</td>
<td>383</td>
</tr>
<tr>
<td>とぶほとる（飛ぶ星）</td>
<td>383</td>
</tr>
<tr>
<td>ほとるとうくれ（星訪う暮れ）</td>
<td>383</td>
</tr>
<tr>
<td>ほとるとぶそら（星飛ぶ空）</td>
<td>383</td>
</tr>
<tr>
<td>みだれてとぶほとる（乱れて飛ぶ星）</td>
<td>383</td>
</tr>
<tr>
<td>ほとけ</td>
<td>384</td>
</tr>
<tr>
<td>ほとけとなえる（仏唱える）</td>
<td>384</td>
</tr>
<tr>
<td>ほととぎす</td>
<td>384</td>
</tr>
<tr>
<td>きたほととぎす（聞く時鳥）</td>
<td>384</td>
</tr>
<tr>
<td>なくほととぎす（鳴く時鳥）</td>
<td>384</td>
</tr>
<tr>
<td>なけほととぎす（鳴け時鳥）</td>
<td>384</td>
</tr>
<tr>
<td>ほととぎす（時鳥）</td>
<td>385</td>
</tr>
<tr>
<td>ほととぎすなく（時鳥鳴く）</td>
<td>391</td>
</tr>
<tr>
<td>ほととぎすのひとこえ（時鳥の一声）</td>
<td>391</td>
</tr>
<tr>
<td>ほととぎすまくらのいずちすぎる（時鳥枕のいずち過ぎる）</td>
<td>391</td>
</tr>
<tr>
<td>まつほととぎす（待つ時鳥）</td>
<td>392</td>
</tr>
<tr>
<td>やまのはとどぎす（山の時鳥）</td>
<td>392</td>
</tr>
<tr>
<td>やくほととぎす（山時鳥）</td>
<td>395</td>
</tr>
<tr>
<td>やくほととぎす（行く時鳥）</td>
<td>395</td>
</tr>
<tr>
<td>わけるほととぎす（別ける時鳥）</td>
<td>395</td>
</tr>
<tr>
<td>ほど</td>
<td>395</td>
</tr>
<tr>
<td>ほどがしられる（程が知られる）</td>
<td>395</td>
</tr>
<tr>
<td>ほのか</td>
<td>395</td>
</tr>
<tr>
<td>つきのはのめく（月がほのめく）</td>
<td>395</td>
</tr>
<tr>
<td>ほのか（かか）</td>
<td>395</td>
</tr>
<tr>
<td>ほのかなさきり（かかしなさき）</td>
<td>396</td>
</tr>
<tr>
<td>まつむしのはのめく（松虫ほのめく）</td>
<td>396</td>
</tr>
<tr>
<td>ほん</td>
<td>396</td>
</tr>
<tr>
<td>うめのひとと（梅の一本）</td>
<td>396</td>
</tr>
<tr>
<td>きくのはひとと（菊の一本）</td>
<td>396</td>
</tr>
<tr>
<td>はなのひとと（花の一本）</td>
<td>396</td>
</tr>
<tr>
<td>まつのひとと（松の一本）</td>
<td>396</td>
</tr>
<tr>
<td>やまもとの（山本）</td>
<td>397</td>
</tr>
<tr>
<td>やまもとのさと（山本の里）</td>
<td>397</td>
</tr>
<tr>
<td>ま</td>
<td>397</td>
</tr>
<tr>
<td>かぜのまにまに（風のまにまに）</td>
<td>397</td>
</tr>
<tr>
<td>なみのまにまに（浪の間に間に）</td>
<td>397</td>
</tr>
<tr>
<td>まつあいだ（待つ間）</td>
<td>397</td>
</tr>
<tr>
<td>まい</td>
<td>398</td>
</tr>
<tr>
<td>まいのそで（舞の袖）</td>
<td>398</td>
</tr>
</tbody>
</table>
まえ ........................................................................................................... 398
まえわたり（前渡り） ........................................................................... 398
まがき ....................................................................................................... 398
きりのまがき（露の瓣） ...................................................................... 398
まき .......................................................................................................... 398
ふねのまきまき（文の巻々） .............................................................. 398
まぎれる .................................................................................................. 398
まぎれない（紛れない） ....................................................................... 398
まく ........................................................................................................... 398
すだれをまけばゆき（簾を垂けば雪） ................................................... 398
まくら ....................................................................................................... 398
あきのたまくら（秋の手枕） ................................................................ 399
かりまくら（仮枕） ............................................................................. 399
くさまくら（草枕） ............................................................................. 399
たまくらのつき（手枕の月） ................................................................. 399
つゆのたまくら（露の手枕） ............................................................... 400
にいたまくら（新手枕） ...................................................................... 400
のにかりまくら（野に仮枕） ................................................................ 400
ほとどさまざまなのいずらずぎる（時鳥枕のいずち過ぎる） ............... 400
まったくさだめない（枕定めない） ........................................................ 400
まくらのうえ（枕の上） ...................................................................... 400
まくらのゆめ（枕の夢） ..................................................................... 400
ゆめのにかりまくら（夢の仮枕） ........................................................ 401
わかくさまくら（若草枕） .................................................................. 401
まさご ...................................................................................................... 401
まさごはら（真砂原） ......................................................................... 401
まつ ........................................................................................................... 401
あめをまつ（雨を待つ） ..................................................................... 401
いわがねのまつ（岩が根の松） ............................................................ 401
こころながくまで（心長く待て） ........................................................... 402
すみよしのまつ（住吉の松） ............................................................... 402
すみよしのまつとみる（住吉の松と頼む） ........................................... 402
ただまつのかぜ（ただ松の風） ............................................................ 402
だれをまつ（誰を待つ） ..................................................................... 402
つきまつ（月待つ） ............................................................................. 402
ひとがまたれる（人が待たれる） .......................................................... 403
まつあいだ（待つ間） ......................................................................... 403
まつかぜがふく（松風が吹く） ............................................................. 403
まつかぜのこえ（松風の声） ................................................................. 403
まつのひとも（松の一様） .................................................................. 403
まつのひとも（松の一本） .................................................................. 404
まつのふじなみ（松の藤浪） ................................................................ 404
まつかぶかぜ（松吹く風） .................................................................. 404
まつほとときす（待つ時鳥） ............................................................... 404
まつみえる（松見える） .................................................................... 404
まつをたよりに（松を頼りに） ............................................................ 405
やまのまつかぜ（山の松風） .............................................................. 405
まつねし.................................................................................................. 405
<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>頁碼</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>それをまつむしのなく（鶏を松虫の鳴く）</td>
<td>405</td>
</tr>
<tr>
<td>まつむしのがなく（松虫が鳴く）</td>
<td>405</td>
</tr>
<tr>
<td>まつむしのこえ（松虫の声）</td>
<td>405</td>
</tr>
<tr>
<td>まつむしのほのめく（松虫ほのめく）</td>
<td>406</td>
</tr>
<tr>
<td>まつり</td>
<td>406</td>
</tr>
<tr>
<td>おおはらまつり（大原祭り）</td>
<td>406</td>
</tr>
<tr>
<td>まつりするかみ（祭りする神）</td>
<td>406</td>
</tr>
<tr>
<td>まど</td>
<td>406</td>
</tr>
<tr>
<td>こころがまどのうち（心が窓の内）</td>
<td>406</td>
</tr>
<tr>
<td>まどをひらく（窓を開く）</td>
<td>406</td>
</tr>
<tr>
<td>まどい</td>
<td>407</td>
</tr>
<tr>
<td>まどいする（円居する）</td>
<td>407</td>
</tr>
<tr>
<td>まぼろし</td>
<td>407</td>
</tr>
<tr>
<td>まぼろし（幻）</td>
<td>407</td>
</tr>
<tr>
<td>み</td>
<td>407</td>
</tr>
<tr>
<td>かぜがみにしめる（風が身にしめる）</td>
<td>407</td>
</tr>
<tr>
<td>みにしめる（身にしめる）</td>
<td>407</td>
</tr>
<tr>
<td>みのゆくえ（身の行方）</td>
<td>407</td>
</tr>
<tr>
<td>みをおもう（身を思う）</td>
<td>408</td>
</tr>
<tr>
<td>みをたのむな（身を願むな）</td>
<td>408</td>
</tr>
<tr>
<td>みぎ</td>
<td>408</td>
</tr>
<tr>
<td>ひだりみぎ（左右）</td>
<td>408</td>
</tr>
<tr>
<td>みじかい</td>
<td>408</td>
</tr>
<tr>
<td>みじかよのつき（短夜の月）</td>
<td>408</td>
</tr>
<tr>
<td>みじかよのゆめ（短夜の夢）</td>
<td>408</td>
</tr>
<tr>
<td>みず</td>
<td>409</td>
</tr>
<tr>
<td>あきのさわみず（秋の沢水）</td>
<td>409</td>
</tr>
<tr>
<td>いけみず（池水）</td>
<td>409</td>
</tr>
<tr>
<td>いさらがみず（いさら井の水）</td>
<td>409</td>
</tr>
<tr>
<td>かけいにうけるみず（隠れに受ける水）</td>
<td>409</td>
</tr>
<tr>
<td>かすみのうちのみずのみなかみ（霞の内の水の水上）</td>
<td>409</td>
</tr>
<tr>
<td>さわみずのおと（沢水の音）</td>
<td>409</td>
</tr>
<tr>
<td>ながれるみず（流れの水）</td>
<td>409</td>
</tr>
<tr>
<td>みずかげのさびしさ（水影の寂しさ）</td>
<td>410</td>
</tr>
<tr>
<td>みずこえる（水越える）</td>
<td>410</td>
</tr>
<tr>
<td>みににおうやまふき（水に匂う山吹）</td>
<td>410</td>
</tr>
<tr>
<td>みずのおと（水の音）</td>
<td>410</td>
</tr>
<tr>
<td>みずのさびあゆ（水の鰾鬚）</td>
<td>410</td>
</tr>
<tr>
<td>みずのすえみえる（水の末見える）</td>
<td>410</td>
</tr>
<tr>
<td>みずのたえだえ（水の絶え絶え）</td>
<td>410</td>
</tr>
<tr>
<td>みずのひとすじ（水の一筋）</td>
<td>411</td>
</tr>
<tr>
<td>みずはすむ（水は潜む）</td>
<td>411</td>
</tr>
<tr>
<td>みずはれる（水は熱れる）</td>
<td>411</td>
</tr>
<tr>
<td>みずはややか（水冷ややか）</td>
<td>411</td>
</tr>
<tr>
<td>やまのいのみず（山の井の水）</td>
<td>411</td>
</tr>
<tr>
<td>みだれる</td>
<td>411</td>
</tr>
<tr>
<td>つゆがみだれる（露が乱れる）</td>
<td>411</td>
</tr>
<tr>
<td>つゆにみだれる（露に乱れる）</td>
<td>411</td>
</tr>
</tbody>
</table>
みだれがみ（乱れ髪） ........................................ 412
みだれてとぶはたる（乱れて飛ぶ蝶） ........................ 412

みち .............................................................. 412
いくえとよらのたけのしたみち（幾重重疊の竹の下道） 412
かえるさのみち（帰るさの道） ............................... 412
かすみにたとるみち（霧にたとる道） ........................ 412
かわぞいのみち（川沿いの道） .............................. 412
きりのしたみち（霧の下道） ................................. 413
このもみち（木の下道） ...................................... 413
さとはなれたみち（里離れた道） ........................... 413
つきのかのみち（月の旅の道） ............................. 413
つゆのふるみち（露のふる道） ............................. 413
のちのよのみち（後世の道） ............................... 413
みちがぼそい（道が細い） ................................. 413
みちたえだえ（道絶え絶え） .................................. 413
みちである（道である） ..................................... 414
みちのかけはし（道の掛橋） ............................... 414
みちのすえ（道の末） ....................................... 414
みちのつじうら（道の辻占） ............................... 414
みちのひとすじ（道の一筋） ............................... 414
みちのやすらぎ（道の安らぎ） ............................. 415
やまのしたみち（山の下道） ............................... 415
わかれたのあと（別れ路の跡） ............................ 415

みつぎ ......................................................... 415
はこぶみつぎ（運ぶ貨） ..................................... 415

みね .............................................................. 416
くもかかるみね（雲かかる峰） ............................. 416
みねこえる（峰越える） ..................................... 416
みねたかい（峰高い） ........................................ 416
みねのあきかぜ（峰の秋風） ............................... 416
みねのいお（峰の雨） ....................................... 416
みねのかけはし（峰の掛橋） ............................... 416
みねのくも（峰の雲） ....................................... 416
みねのしらゆき（峰の白雪） .............................. 416
みねのふるでら（峰の古寺） .............................. 417
みねのゆき（峰の雪） ...................................... 417

みや .............................................................. 417
いにしえのみや（古の宮） ................................. 417
ふるみやのうち（古宮の内） ............................... 417

みやこ .......................................................... 417
ふるきみやここのはる（古き都の春） ..................... 417
みやこがこいしい（都が恋しい） .......................... 417
みやこがとおい（都が遠い） ............................... 418
みやこのつきにかえる（都の月に帰る） .................. 418

みやごと ....................................................... 418
みやごとない（宮事もない） .............................. 418

みる .............................................................. 418
おしんではなをみる（檐しんで花を見る） ............... 418
おのえのはなをみる（尾上の花を見る） ........................................ 418
かぜみえる（風見える） ...................................................... 418
つきをみる（月を見る） ...................................................... 418
はなみえる（花見える） ...................................................... 419
まつみえる（松見える） ...................................................... 419
みずのすえみえる（水の末見える） ........................................ 419
みるのもらい（見るのも憂い） ............................................. 419
むかう ................................................................. 419
かたるばかりにむかうおもかげ（語るばかりに向う面影） .................. 419
むかってなみだおちる（向って涙落ちる） .................................. 419
むかし ................................................................. 419
むかし（昔） ............................................................. 419
むかしをいまの（昔を今の） ............................................... 420
むかしをおもうなみだ（昔思う涙） ...................................... 420
むさしの ................................................................. 420
とおきむさしの（遠き武蔵野） ........................................... 420
むし ................................................................. 420
しじきむしのね（繁き虫の音） ........................................... 420
むしくく（虫鳴く） ......................................................... 420
むしのこえ（虫の声） ...................................................... 420
むしのこえごえ（虫の声々） .............................................. 421
よわのむしのね（夜半の虫の音） ....................................... 421
むしろ ................................................................. 422
さむしろ（さ箇） ......................................................... 422
さむしろのつき（さ箇の月） .............................................. 422
むね ................................................................. 422
むねのおもい（胸の思い） ............................................... 422
むらさめ ................................................................. 422
あきむらさめ（秋の村雨） ............................................... 422
かぜのむらさめ（風の村雨） .............................................. 422
すがるむらさめ（過ぎる村雨） ........................................... 422
はれるむらさめ（晴れる村雨） ........................................... 422
ひとむらさめ（一村雨） ................................................. 423
むらさめ（村雨） ......................................................... 423
むらさめがつつ（村雨がつ） ............................................... 423
むらさめすがる（村雨過ぎる） .......................................... 423
むらさめのそら（村雨の空） .............................................. 423
むらさめのはれゆくあとはあらし（村雨の晴れゆく後は嵐） ............... 424
むれ ................................................................. 424
うられる（打ち群れる） .................................................. 424
おかげのはじのひとむら（岡边の溝の一群） ................................. 424
くものひとむら（雲の一群） ............................................. 424
さとのひとむら（里の一群） ............................................. 424
すぎのもたら（杉の群立ち） ............................................. 424
たけのひとむら（竹の一群） ............................................. 424
つきのもらくも（月の群雲） ............................................. 425
ひとむら（一群） ......................................................... 425
ふとむらすすき（一群薄）
まつのひとむら（松の一群）
むらちどり（群千鳥）
むらどりがねね（群鳥が覆る）
めずらしい
きくのもめずらしい（聞くのも珍しい）
もえる
かれたくさがもえる（枯れた草が萌え出る）
もしお
かくもしおぐさ（播く藻塩草）
もず
もずのくさぐき（隠の草茎）
もつ
うつりもてゆく（移り持って行く）
もと
かきのもとつば（垣の本つ葉）
かすむやまもと（霞む山本）
もの
なきもの（無き物）
はるもののね（春の物の音）
もののあところ（物思ふ頃）
ものがなしき（物悲しき）
ものごと（物毎）
もののさびしい（物寂しい）
もみじ
はなよもみじよ（花よ紅葉よ）
もみじのにしき（紅葉の錦）
もみじば（紅葉葉）
もり
かんのびのもり（神奈備の森）
もりのしたくさ（森の下草）
やしろ
よきのみやしろ（与喜の御社）
やすらう
はなのかげにやすらう（花の陰に安らう）
みちやすらい（道の安らい）
やすらい（安らい）
やど
やどのうめ（宿の梅）
やどのうめのか（宿の梅の香）
やどのゆうぐれ（宿の夕暮れ）
やどをかる（宿を借りる）
やどをとる（宿を訪う）
やなぎ
あおやぎ（青柳）
あおやぎのいと（青柳の糸）
あおやぎのかげ（青柳の陰）
なびくあおやぎ（廉く青柳）
ヤマ

あきのやま（秋の山）
あけぼののやま（曙の山）
あらし吹くやま（風吹く山）
うしろのやま（後ろの山）
うつのやま（宇津の山）
うつのやまごえ（宇津の山越え）
おくやまのかげ（奥山の陰）
おちかたのやま（遠方の山）
おちのとおやま（遠方の遠山）
おやまだのすえ（小山田の末）
かくれがのやま（隠れ家の山）
かさなるやま（重なる山）
かすむはるのとおやま（霞む春の遠山）
かすむやまと（霞む山本）
かつらぎのやま（葛城の山）
さくらのかつらぎのやま（桜の葛城の山）
しもすまじいやま（霜漫まじい山）
ちかいやまま（近い山里）
とおやまとのあき（遠山の秋）
のころやまかげ（残る山影）
はなのやまかぜ（花の山風）
はるのやまと（春の山里）
はるのやまだら（春の山寺）
みよしのやま（み吉野の山）
やまがくるしい（山が苦しい）
やまざくら（山桜）
やまざと（山里）
やまちかい（山近い）
やまのいのみず（山の井の水）
やまでく（山の奥）
やまのかくれが（山の隠れ家）
やまのかげ（山の陰）
やまのしたかげ（山の下陰）
やまのしたみち（山の下道）
やまのはのつき（山の端の月）
やまのほととぎす（山の時鳥）
やまのまつかげ（山の松風）
やまぶかい（山深い）
やまほととぎす（山時鳥）
やまとと（山本）
やまもとのさと（山本の里）
ゆうぐれのやま（夕暮れの山）
やまおろし

やまおろし（山嵐）
やまがつ

やまがつ（山脈）
やまがつのいお（山麓の庵）…………………………………………………442
やまと……………………………………………………………………………442
やまとことのは（大和言の葉）……………………………………………442
やまなし…………………………………………………………………………442
やまなしのはな（山桜の花）………………………………………………442
やまぶき…………………………………………………………………………442
きしのやまぶき（岸の山吹）………………………………………………442
みずににおうやまぶき（水に匂う山吹）………………………………443
やよい……………………………………………………………………………443
やよいのあめ（弥生の雨）…………………………………………………443
ゆう……………………………………………………………………………443
かすむゆうぐれ（霞む夕暮れ）…………………………………………443
はるのゆうぐれ（春の夕暮れ）…………………………………………443
やどのゆうぐれ（宿の夕暮れ）…………………………………………443
ゆうあらし（夕嵐）…………………………………………………………443
ゆうぐれのくも（夕暮れの雲）……………………………………………444
ゆうぐれのそら（夕暮れの空）……………………………………………444
ゆうぐれのやま（夕暮れの山）……………………………………………445
ゆうしけれ（夕時雨）………………………………………………………445
ゆうすずみ（夕涼み）………………………………………………………445
ゆうづくよ（夕月夜）………………………………………………………445
ゆうべ（夕べ）………………………………………………………………445
ゆうべかぎる（夕べ限る）…………………………………………………445
ゆうまぐれ（夕まぐれ）……………………………………………………445
ゆうがお………………………………………………………………………446
ゆうがお（夕顔）………………………………………………………………446
ゆうがおのちぎり（夕顔の契り）…………………………………………446
ゆうだち………………………………………………………………………446
ゆうだち（夕立）……………………………………………………………446
ゆうだちのあとの（夕立の後）……………………………………………446
ゆうつけどり…………………………………………………………………447
ゆうつけどりをきく（木綿付け鳥を聞く）………………………………447
ゆき……………………………………………………………………………447
うちのゆき（内の雪）………………………………………………………447
くさはのこらないゆきのしたおれ（草は残らない雪の下折）……447
けさのはつゆき（今朝の初雪）…………………………………………447
こしのしらゆき（越の白雪）………………………………………………447
すだれをまけばゆき（簾を垂けば雪）……………………………………447
みねのしらゆき（峰の白雪）………………………………………………447
みねのゆき（峰の雪）………………………………………………………448
ゆきがふりはれる（雪がふり降れる）……………………………………448
ゆききまる（雪消える）…………………………………………………448
ゆきになる（雪になる）……………………………………………………448
ゆきのあけぼの（曇の曙）………………………………………………448
ゆきのあさあけ（雪の朝明け）……………………………………………448
ゆきのうち（雪の中）………………………………………………………449
ゆきのかなぞら（雪の中空）………………………………………………449
ゆくえ…………………………………………………………………………449
みのゆくえ（身の行方） ........................................... 449
ゆくすえ ......................................................... 449
おいのゆくすえ（老いの行く末） ................................ 449
かぜのゆくすえ（風の行末） .................................. 449
つきのゆくすえ（月の行く末） ................................ 449
ゆくすえのそら（行く末の空） ................................ 450
ゆめ .............................................................. 450
いにしえのゆめ（古の夢） ......................................... 450
かりよるのゆめ（仮の夜の夢） ................................ 450
かりふしのゆめ（仮眠の夢） .................................... 450
ただゆめのうち（ただ夢の内） .................................. 450
はるよのゆめ（春の夜の夢） .................................... 450
まくらのゆめ（枕の夢） ......................................... 450
みじかよのゆめ（短夜の夢） ..................................... 450
ゆめさめる（夢覚める） .......................................... 451
ゆめのうきはし（夢の浮橋） ..................................... 451
ゆめのおおかげ（夢の面影） .................................... 452
ゆめばかりまくら（夢の仮枕） ................................... 452
よるのゆめ（夜の夢） ........................................... 452
よう .............................................................. 452
あじけないよ（味気ない世） ..................................... 452
かわまるよのなか（変わる世の中） ............................... 452
すてるよのなか（捨てる世の中） ................................. 453
のちのよのみち（後の世の道） .................................. 453
ひとのこころのかえるよのなか（人の心の変わる世の中） .... 453
ひとのこころのよのなか（人の心の世の中） ................... 455
よにながらえる（世に長らえる） ................................ 456
よのなか（世の中） ............................................ 456
よのならい（世の習い） ....................................... 456
よばかりかかる（世ばかり掛かる） .............................. 456
よをいとう（世を厭う） ........................................ 456
よき .............................................................. 456
よきのみやしろ（与喜の御社） ................................... 456
よう .............................................................. 456
たなびくよこぐものそら（喘ぐく横雲の空） ...................... 456
よこぐもかすむ（横雲霞む） .................................... 457
よこぐものそら（横雲の空） .................................... 457
よしの ............................................................ 457
みよしのおく（み吉野の奥） .................................... 457
みよしののはな（み吉野の花） .................................. 457
みよしのやまと（み吉野の山） ................................ 457
よしのがわ ....................................................... 458
よしのがわのはな（吉野川の花） ................................ 458
よど .............................................................. 458
よどのかわね（湖の川舟） ....................................... 458
よぶこどり ....................................................... 458
よぶこどり（呼子島） .......................................... 458
よもぎ ............................................................ 458
よもぎう（蓬生） .................................................. 458
よもぎうのかげ（蓬生の影） ........................................ 458
よる ................................................................. 459
あきのすすがら（秋の夜すすがら） .................................. 459
あきのよなが（秋の夜長） ........................................ 459
あきのよなのが（秋の夜なのが） .................................. 459
あきのよのつき（秋の夜の月） ..................................... 459
おぼろづきよ（朦朧月夜） .......................................... 459
かりのよるのゆめ（仮の夜の夢） ................................... 460
こころをつくすあめのよる（心を尽くす雨の夜） .................... 460
つきがすむよる（月が霞む夜） ..................................... 460
つきよなのが（月夜な夜な） ....................................... 460
なつのよのつき（夏の夜の月） .................................... 460
ねぎめるよ（謎呪める夜） ........................................ 460
はるのよのつき（春の夜の月） .................................... 460
はるのよのゆめ（春の夜の夢） .................................... 460
ふかいよるのそれ（深い夜の空） .................................. 461
みじかよのつき（短夜の月） ....................................... 461
みじかよのゆめ（短夜の夢） ...................................... 461
ゆうづくよ（夕月夜） ............................................. 461
よがあける（夜が明ける） ......................................... 461
よがながい（夜が長い） ........................................... 461
よがあかい（夜が深い） .......................................... 462
よがあけ（夜が更ける） .......................................... 462
よざみおぼえる（夜寒おぼえる） .................................. 462
よはしののめ（夜は東雲） ........................................ 462
よもすがら（夜もすがら） ........................................ 462
よるむまさつぎ（夜払む杯） ..................................... 462
よるのゆめ（夜の夢） ............................................. 463
よわのあきかぜ（夜半の秋風） ................................... 463
よわのつき（夜半の月） .......................................... 463
よわのむしのね（夜半の虫の音） ................................ 463
よわる ............................................................... 463
よわりはてる（弱り果てる） ....................................... 463
れつ ................................................................. 464
かりのいくつら（雁の幾列） ...................................... 464
かりのひとつら（雁の一列） ..................................... 464
わかい ............................................................... 464
わかくさまくら（若草枕） .......................................... 464
わかれる ............................................................. 464
わかれじのあと（別れ路の跡） .................................... 464
わかれる（別れる） ............................................... 464
わかれるたびはかない（別れる旅は悲しい） ....................... 464
わけるとたず（別ける時鳥） ..................................... 465
わずれる ............................................................. 465
だれにわずれる（誰に忘れる） .................................... 465
わずれとううさはる（忘れ訪る草原） ............................ 465
わずれもしない（忘れもしない） ................................. 465
わたす ................................. 466
うちわたす（打ち渡す） .............. 466
わたる .................................. 466
あきふけわたる（秋更け渡る） .... 466
まえわたり（前渡り） .................. 466
わたしぶね（渡し舟） .................. 466
わたるかりがね（渡る雁） .......... 466
わびる ................................. 466
しきわぶ（散き扱ぶ） .................. 466
わびびと（杣人） ....................... 466
われ ..................................... 467
なみだがわがそでのうえ（涙我が袖の上） ...... 467
われでなくなるのがうい（我でなくなるのが憂い） 467
あお
青葉の花の後
→摺る藤浪
まつなたら－あをはのゆきや－はなのあと
こときのかたに－かかるふなしなみ
【看聞日記紙畢 500 巻】／山河（かけやする
も）／対永26(1419) 年10月25日
をしめとも－あをはになりぬ－はなのあと
まつにことさら－かかるふなしなみ
【看聞日記紙畢 500 巻】／山河（あつさな
ほ）／対永32(1425) 年6月6日

青柳
→葛嶺山
あをやきの－いとしつけき－あふみえて
こえむもいか　かつらきのやま
【天文年間百種 38 巻】／山河（つきやけ
さ）／天文21(1552) 年7月26日
あをやきの－ひかはふきぬる－かせもなし
よもはかすみの－かつらきのやま
【春夢草／香陵郎本】／巻／永正12(1516)
年、13年

あおさの花
青柳の枝
→打ち鳴える
たえぬをかけの－あをやきのいと
つゆから－あさゆふかすみ－うちはへて
【宮鶴千句】／山河（ことのはそ）／天文
20(1551) 年5月9日～11日
はるにやさらす－あをやきのいと
えのみつに－かすみのころも－うちはへて
【天文年間百種 34 巻】／何人（わすれて
は）／対文5(1473) 年2月1日

あおさの花
青柳
→花を見る
かせもかよはぬ－あをやきのかけ
けふもまた－なかきひくらし－はなをみて
【新撰築金策集／実隆本】／巻上／明応
4(1495) 年9月26日
しばしたたすむ－あをやきのかけ
あふにと－ところせかる－はなをみて
【宗長関係8種／老封／天理本／】

なびくあおさ

鹿く青柳
→霞む
かせよりさぎも－なひくあをやき
ありあけや－なかそちたく－かすむらむ
【看聞日記紙畢 500 巻】／何人（うめのな
の）／対永30(1423) 年5月27日
はるのしぶしに－なひくあをやき
かつらきや－くものよそに－かすむらむ
【看聞日記紙畢 500 巻】／唐何（いよとし
に）／対永31(1424) 年1月25日

あおさの花
青柳の枝
→川わき
のとかになひく－あをやきのいと
かはそひの－ふねのつなての－なかきひに
【看聞日記紙畢 500 巻】／唐何（いよはけ
ふ）／対永26(1419) 年2月25日

あおさの花
青柳
→髪に千鳥鳴く声
あおさの花

あかしがた

明石湧
→潮に千鳥鳴く声
あかつき

月の明石瀬

秋の絵

あき

曉

→庭の月影
しつたへの一ころもてかれぬ＝あきかせに
くもまそひゆく＝にはのつきかけ
【天文年間百鉢 38巻／朝何［またてき
く］／天文9(1540)年 4月 25日
あきかせに一つゆもたまらす＝ちるこする
あらはになりぬ＝にはのつきかけ
【文明十四年万方52巻／何路［ねしゃたれ］／文明 14(1482)年 7月 4日～9月
14日
→ 野辺の虫の音
さとはあれて＝うゑしまつふく＝あきかせに
かきねのくさは＝のへのむしのね
【乗幸千句／白何［こからしを］／長享
元(1487)年 10月 9日＜～11日＞
すすしさを＝もとむるてその＝あきかせに
いつれかいつれ＝のへのむしのね
【仏服千句／何人［くみわれ］／永禄
4(1561)年 5月 27日～29日

→ 剋雁の声
あきかせに＝いさよふたる＝ほのかにて
いつのねさめか＝はつかりのこゑ
【永正十花千句／何木［ひすたに］／
永正13(1516)年 3月 11日～14日
むさしのや＝さすらへきぬる＝あきかせに
みやこもさなな＝はつかりのこゑ
【永正年間百鉢 34巻／山何［たちはな
に］／永正 18(1521)年 5月 7日

→ 松虫の声
したつゆも＝くさかくれなき＝あきかせに
しをれはなにか＝まつむしのこゑ
【延徳年間百鉢 16巻／何路［うめかかの］／延徳 4(1492)年 1月 23日
あちきなく＝こぬひとりむる＝あきかせに
なはるさとの＝まつむしのこゑ
【成立不詳／宗長以前 15巻／名号［な
かはひと］／成立時不詳
さとはあれて＝ひとこととはね＝あきのかせ
ゆふくれかがし＝まつむしのこゑ
【称名院追善千句／何厳［さのかのやま］
／永禄 6(1563)年 12月 14日～18日
しもかれの＝くすはにかはる＝あきのかせ
かけはいつこの＝まつむしのこゑ
【天正年間百鉢 57巻／何船［もしひほ
さ］／天正7(1579)年 1月 13日

→ 山の端の色
つきしろも＝そらすみゆへ＝あきかせに
しくれてとほる＝やまのはのいろ
【元亀年間百鉢 6巻／何人［とめゆけは］
／元亀3(1572)年 9月 28日
あきかせに＝そらゆくも＝やきえぬらむ
みるみるかは＝やまのはのいろ
【天正四年万方70巻／何何［はなせけ
は］／天正4(1576)年 5月 6日～7月 19日

→ 古里のダベ
かれをきまっても＝あきかせのこゑ
ふるさとの＝ゆふへやつぎを＝またすらむ
【紫野千句／何木［はにしひる］／延文
2(1357)年以後＝応安 3年 6月以前
まつあるかたの＝あきかせのこゑ
ふるさとの＝一つゆのゆふへ＝うかるらむ
【文明十四年万方52巻／夢想［たにみ
ものの］／文明 14(1482)年 7月 4日～9月
14日

→ 後朝の後
もろともに＝きたさへかねし＝あきのかせ
あさつゆおもへ＝きぬきぬのあと
【東山千句／何何［つゆをいろ］／永正
15(1518)年 8月 10日～12日
ひとりねの＝まくらわしは＝あきのかせ
つきにかふねし＝きぬきぬのあと
【天正年間百鉢 57巻／□□［ともなし
に］／天正 18(1590)年 11月 21日
→衣打つ声
あきのかせーたけのはさふーそらかれて
ふしまをとみーこころもうつところ
【浅間千句】／何路 〔ゆかはたる〕／永正
11(1514) 年 5月 13日～19日

すすしまーつときまつほどのーあきのかせ
よびふけらしーこころもうつところ
【永禄石山千句】／三木中略 〔すすあまて〕
／永禄 7(1564) 年 5月 12日

→鷗の羽揚き
あきのかせーみやこのゆめをーさぞふよに
まくらさためぬーしきのはねかき
【天文年間百韻 38韻】／x x 〔かめにさす〕／天文 21(1552) 年 2月 20日
かたよりーおとしてかよふーあきのかせ
めすさいのーしきのはねかき
【慶長年間百韻 27韻】／□□ 〔さきつかむ〕／裏白／慶長 16(1614) 年 1月 3日

→露が寄れる
まつたかしーいはりのうへのーあきのかせ
くさのとほさーつゆそここはるる
【文安月句】／何人 〔おかもはり〕／文安 2(1445) 年 8月 15日
いまいくよーとはうつろふーあきのかせ
たもとならはーつゆそここはるる
【寛衡年千句】／山何 〔くもよみて〕／天文 16(1546) 年 8月 25日
ふるさーのーゆふへありけりーあきのかせ
むしのねしきーつゆそここはるる
【大永四年月並千二百韻】／□□ 〔はへつなよ〕／月並千二百韻／大永 4(1524) 年 3月 23日

→山から聞く波が瀬まじい
かけもやーゆふひをおくーあきのかせ
ふねからきくーなははすさまず
【宗徳追善千句】／何路 〔のこはらは〕／
永禄 4(1561) 年 9月 14日・15日

→山の涯の月
あきのかせーほのしたをきのーよびふけて
ゆふへまてるしぐーやまのはのつき
【永禄年間百韻 28韻】／追善 〔まれにとふ〕／永禄元(1558) 年 11月 5日
あきのあさち—あきのかせふく
くれぬれは—なくねもかはる—きりりす
【文明年間百韻 34 巻】／ｘｘ [あきふけぬ]／文明 12(1480) 年 9 月 28 日

→露のふる里

たちそめて—いくゆふくれの—あきのかせ
たひもさこそその一つゆのふるさと
【嵯峨千句】／何人 [さきてちる]／（元亀 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

→露のふる里

さびしきものと—あきかせそふく
あさはら—こところをそむる—つゆなながら
【専類関係 2 種】／秋／応仁元 (1467) 年
5 月 10 日

→露のふる里

とふかときけは—あきかせそふく
はなすき—ときめうふるしや—ふるふらむ
【文明年間百韻 34 巻】／ｘｘ [あきふけぬ]／文明 12(1480) 年 9 月 28 日

→露のふる里

むかしこひしみ—あきかせそふく
ひとすぬ—をのへのみやの—はなすき
【愚句老集】／秋／永正 17 年
このくれよりの－あきがせのこゑ
みにしみて－いくたのもりの－かけさびし

【宗長間８種】／老耳／天理本／

秋が来る

かれはをきふく－あきはきにけり
くれぬまは－たちかけかくす－つきいてて

【永正十花花句】／何田［はなにこひ］／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

くものゆきかひ－あきはきにけり
あさかほに－そらへみゆる－つきいてて

【享禄年間開園本 8 巻】／増田［ゆふたちの］
／享禄 5(1532) 年 6 月 8 日

秋風く

をきのかせふく－あきはきにけり
つきかげも－いろなるつゆ－はきさきて

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立 () 年末詳

なほふるさとの－あきはきにけり
うゑおきし－あさちましりに－はきさきて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／秋／永正
6(1509) 年以前

秋寒い

うらかれの－ささのいはりの－あきさむみ
tえやらすし－うつあさころ

【正倉院年間開園 9 巻】／何田［つきものば］／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

ねさめる－くさのいはりの－あきさむみ
tきのよるる－うつあさこら

【元和年間開園 24 巻】／何田［つきものばの］／
元和 6(1620) 年 8 月 23 日

秋時雨

あき

秋来る

あききぬと－かせもおとはの－みねこて
たきよりうへ－ひくらしてなく

【大永年間開園 14 巻】／何田［うめかか
や］／大永 3(1523) 年 1 月 9 日

あききぬと－おもひそむるや－いろならむ
あめうちそき－ひくらしてなく

【新撰天文秋波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

秋草

もききふに－あらぬはななる－あきのくさ
たくりきりす－ねをなっくしど

【文安開園句】／何田［はなにつき］／文
安 2(1445) 年 8 月 15 日

こころとや－つゆをもうくる－あきのくさ
たくりきりす－もののおもひそ

【三島千句】／何氏［はなにつき］／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

秋

あき

→鳴く蜂

よもきふに－あらぬはななる－あきのくさ
たくりきりす－ねをなっくしど

【文安開園句】／何田［はなにつき］／文
安 2(1445) 年 8 月 15 日

こころとや－つゆをもうくる－あきのくさ
たくりきりす－もののおもひそ

【三島千句】／何氏［はなにつき］／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

秋來る

あき

→蜘蛛が鳴く

あききぬと－かせもおとはの－みねこて
たきよりうへ－ひくらしてなく

【大永年間開園 14 巻】／何田［うめかか
や］／大永 3(1523) 年 1 月 9 日

あききぬと－おもひそむるや－いろならむ
あめうちそき－ひくらしてなく

【新撰天文秋波集／実隆本】／秋上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

→打つ陣

うらかれの－ささのいはりの－あきさむみ
tえやらすし－うつあさころ

【五倉一日句】／何田［つきものば］／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

ねさめる－くさのいはりの－あきさむみ
tきのよるる－うつあさこら

【元和年間開園 24 巻】／何田［つきものばの］／
元和 6(1620) 年 8 月 23 日

秋時雨

あき

→色付く

うらかれの－ささのいはりの－あきさむみ
tえやらすし－うつあさころ

【五倉一日句】／何田［つきものば］／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

ねさめる－くさのいはりの－あきさむみ
tきのよるる－うつあさこら

【元和年間開園 24 巻】／何田［つきものばの］／
元和 6(1620) 年 8 月 23 日

秋時雨

あき

→色付く
あきのしくれは—ぬるまるもまなし
よなよなの一生のこすまれは—いろつきて
【大神宮法華千句】／何人（つつきよ）
／長尾 2(1488) 年 7 月
あきのしくれは—たけのはのおと
しつかすむ—かきほのまくす—いろつきて
【称名院追善千句】／初何（たしたたなよ）
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

秋近く

→心細い花落る頃
おほつかな—あきもやちく—なりぬらむ
ころほそしな—はなつるころ
【心経関係 10 種】／智草内容編／本能寺本

くれそうき—あきもやちく—なりぬらむ
ころほそしな—はなつるころ
【阿頌千句】／山町（うくひすに）／文明
2(1470) 年正月 10～12 日

秋に時雨れる

→風に霧が寄れる
あきのそらーたかあかつきも—しるくらむ
のきはのかせに—つゆそこほるる
【文安雪千句】／花之方（ゆきふれば）／
文安 2(1445) 年 10 月 18 日
あきさむき—はれてもまだや—しるくらむ
かせのたばた—つゆそこほるる
【天文四月梅千句】／何時（つたあたの）
／天文 24(1555) 年正月 7 日

秋の面影

→暮れの花薄
とめおかはや—あきのおもかけ
ふゆくれば—つゆもかれたの—はすすきた
【願尾第四／早稲田大学本／冬／永正 6.7
年

いろなるつゆや—あきのおもかけ
はすすきた—たかそてとく—のはくれて
【雲草／大阪天満宮文庫本／冬／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前
秋の初風
→月出する
にしよりむかふーあきのはつかせ
かみのますーかをかきよくーついてて
【文亀年間百題４冊】／橘何 [まつこえし]
文亀 2(1506) 年 6 月 10 日

秋の手枕
→花箇
かたはらされしーあきのたまくら
ましるのーくすはかれのーはなすすき
【文亀年間百題４冊】／何人 [つねなた]
文亀 2(1506) 年 6 月 10 日
秋に紅く

たびたせさらも—あきのはつかせ
かへらさの—やまちしまた—むしなきて
【永正年間百錦 34巻】／山荷 [まちしや]
永正12(1515)年11月11日

ふきたへくる—あきのはつかせ
このさとも—さかなからへの—むしなきて
【成立不詳・宗長以前15巻】／伊木人 [やまみつわ]／成立時不詳

誘う

こするよりこそ—あきのはつかせ
ひくらし—まつむしのねや—さそふらむ
【住吉壇句】／白町 [あられのみ]／大永
元(1521)年11月1日～14日

またこぬくれの—あきのはつかせ
したはちる—やなきやかりを—さそふらむ
【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

七夕

けふめつらしき—あきのはつかせ
たなはの—いかにまちみし—くれならむ
【大永四年年譜全二百錦】／□□ [のの]
名／月経二百錦／大永4(1524)年4月
23日

またそてぬらす—あきのはつかせ
たなはの—まとのほのうらみ—いかはかり
【新撰論献集／実隆本】／秋上／明応
4(1495)年9月26日

秋の村雨

うらまったひるる—あきのむらさめ
ぬれとほる—わかひころも一つゆうし
【文安年間百錦 9巻】／山荷 [はなはひ]
文安5(1448)年2月5日

やまのかけく—あきのむらさめ
ふりてすむ—いはりののきの一つゆうし
【文明十四年万句52巻】／山荷 [あきか
せに]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

秋の山

うるわしきあふるふ
おもひには—みわかぬものを—あきのやま
ひほんかせぬ—とはのふるみや
【文明十四年万句52巻】／伊木人 [やまい
かに]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

むしそなく—まことによこれ—あきのやま
みよやくるな—とはのふるみや
【文明十四年万句52巻】／何町 [あさう
みに]／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

秋の夜すがら

—寝られる
このはまたちる－あきのよすから
ねられめや－まくらにちかく－うつころも
【文安頃千句４巻】／朝何【すあとはき】

よひのまふくる－あきのよすから
ねられめや－のわきやまかせ－ふきそひて
【文明十五年千句１１巻】／二字返音【は
なははの】／文明 15(1483) 年＊月＊日～
3月2日

秋の夜長
→蜂蜂

はしみにあかぬ－あきのよかさ
ききすてて－たれかいをぬる－きりきりす
【大永年間百頃 １４巻】／何人【つきやふ
ね】／大永 2(1522) 年 8月

おもひをつくず－あきのよかさ
きりきりす－にぬかくねに－まけむやは
【弘治年間百頃 ８巻】／何人【うめひとき】
／裏白／弘治3(1557) 年1月3日

秋の夜の夜な
→草枕

つきまつころの－あきのよかさ
ふるさと－そとなつゆけ－くさまくら
【天文年間百頃 ２８巻】／××【しばそな
く】／天文 24(1555) 年9月19日

おもひをつく－あきのよかさ
ゆめにゆられ－むゆらむものを－くさまくら
【瓶草／大阪天満宮文庫本／頒／永正
2(1505) 年8月23日以後同3年3月以前

秋の夜の月
→身にしみる

ひとのかたみの－あきのよのつき
しもやよふ－かれののすぎき－みにしみて
【表佐千句】／何衣【よるやあめ】／文明
8(1476) 年3月6日＜～8日＞

あくかれてゆく－あきのよのつき
ものをおふ－みちのかせは－みにしみて
【天保年間百頃 １巻】／朝何【すあときはき】
／天保 5(1834) 年9月9日～21日

秋の夜の月
→身にしみる

はなすすき－かれゆくしもに－あきふけて
のにはおしなじ－よわるむしのの
【鏡詠会刊千句】／山何【あさもはる】／
室徳元(1449) 年8月19日～21日

はなすすき－かれゆくしもに－あきふけて
のにはおしなじ－よいわるむしのの
秋更け渡る

あきふけわたる－きりのうみつち
ゆふなみ－まつのはこしに－かりなきて
【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

あきふけわたる－つゆのむらくも
かりなきて－よはいねかでの－たまくらに
【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

さぎも

うきことも－われとしるべき－あきなるに
うゑすはきかし－をきのうはかせ
【文和千句】／何人【なはたかく】／文和 5 年

あき
【文明年間百題 34 巻】／何人【よくはつ
き】／文和 18(1486) 年 2 月 6 日

→表打つ音

がきやいま－こからなきて－ふけぬらむ
のるかたなく－ころもうつおと
【宮子千句】／山何【ことのはや】／天文
20(1551) 年 5 月 9 日～11 日

くさまくら－うかれとあきや－ふけぬらむ
みにしむかせに－ころもうつおと
【文明年間百題 34 巻】／x X【つよくかか
せ】／文和 12(1480) 年 8 月

→有明の月

→新しきの秋

→鹿の声

→野のうつ松

とふかひなや－すこきあきかせ
くれぬて－かけたのむの－ひとつまつ
【竹林抄／新古典文学大系本】／語／文和
8(1476) 年 5 月頃

ふきとしほくは－すこきあきかせ
かるるの－ひとともとすき－ひとつまつ
【心鏡関係 10 員】／能舟内能歌合／天理本

→鶯の声

さすしきにあきたつ

深しさに秋立つ

→鶯の声

すすしくも－ゆふびのくもに－ありたて
こすあしこる－ひらしのこえ
【永禄元年春千句】／□□【あだりまで】
／永禄元 (1558) 年 3 月 23 日～25 日

すすしこの－けふよりしるき－あきたて
やまはくもまの－ひらしのこえ
【文明年間百題 38 巻】／x X【したみつ
も】／文和 24(1555) 年 9 月 2 日

→雁鳴く
たのしはあとは—ただあきのかせ
ひとふての—たよりをまては—かりなきて
【大永三年月並千三編著】／□□（さつか
せや）／月並千三編著／大永 3(1523) 年 6
月 23 日
をののゆふへは—ただあきのかせ
のこるひも—いろいこいねに—かりなきて
【老筆／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年
夏頃

とおやまの秋

遠山の秋

→紀伊後

いまつきにみる—とはやまのは
きのうみや—ふねをきりまに—こきいたし
【文明十四年万句5.2句】／何木（さつのは
つゆ）／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9月
14 日
なかめわひぬる—とはやまのは
きのうみや—たまつしまつ—きりこめて
【専順関係2種】／秋／応仁元 (1467) 年
5 月 10 日

初風と昨日は聞いて秋更ける

→人は残らない紅葉
はつかせと—きのふはききし—あきふって
ひとのはこらす—もろきもみちは
【三島千句】／何人（しろします）／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日
はつかせと—きのふはききし—あきふって
ひとのはこらす—もろきもみちは
【老筆／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年
夏頃

春秋の色

→移ろう
みしはしはしの—はるあきのいろ
やまふきの—つゆはもみちに—うつろひて
【美濃千句】／何馬（つまやしるす）／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日
けにはかなしや—はるあきのいろ
ひとはたと—ときなるかたに—うつろひて

【骨科関係2種】／心敬専順点宗抵付句

吹く風に秋の露

→鶴の声
かせはまた—ふかねになつも—あきのつゆ
せみにましや—ひくらしのこる
【平松文庫本千句】／□□（なてしこの）

まつにふく—かせのしたのは—あきのつゆ
またかうすき—ひくらしのこる
【大永三年月並千三編著】／□□（しきれ
のあめ）／月並千三編著／大永 3(1523) 年
10 月 23 日

古里の秋

→形見
とへはなみたの—ふるさとのあき
つきをのみ—ここらみしよの—かたのみにて
【大永三年月並千三編著】／□□（うめか
かや）／月並千三編著／大永 3(1523) 年 2
月 23 日

いつかへりこむ—ふるさとのあき
わずれしの—つきののみひとの—かたのみにて
【静楽秋秋詠集／実藤本】／恋下／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

峰の秋風

→鶴鳴
つきさやかなる—みねのあきかせ
かきつね—みたれぬくもに—かりなきて
【天文廿年梅千句】／何木（つみそへよ）
／天文 24(1555) 年正月 7 日

たもとふきすく—みねのあきかせ
さよもを—よさむのつきに—かりなきて
【壁草／大阪天満宮文庫本／】秋／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同年 3 月以前

夜半の秋風

→草吹
すかにさしよいほのはあきかせ
あくるまのはなのおそきくさまくら
あけぼの

あけぼの

うららかな朝日に出かけよう

あけぼのの一日

うららかな朝日に出かけよう
庭の曙

→秋の水

つきはかりあるーはあのあけぼの
きりはれてーいけどみわたるーあきのみつ

→横桝

ふるさとさひしーあけぼののやま
よくもにーをちかたひとやーわかるらむ

野辺の曙

→鷹の声

ことしもとなきーへのあのあけぼの
うくひすーこゑはかりしてーふかきよに

春の曙

→鷹

おくつゆふかきーはるのあけぼの
うくひすー一つはさのこるーゆきおおて

露の曙

→草枕

いったらふしー一つゆのあけぼの
さくらうらーゼあきふかせにつゆめみす

→霞む夜

いまいくかはーはるのあけぼの
うくひすーかへるふるすやーたとるらむ

にわのおけぼの
あける

明け方の空
→月は揺らぎ

あめずくろよの－あけかたのそら
つきはなほ－おちですすき－たまくらに
【明応年間百題 227】／何人 [ふきすてよ]／明応7(1498)年間 10月6日

いそくのまくらの－あけかたのそら
つきはなほ－たがふくまままに－かけすみて
【大永三年月並千三百題】／□□ [はるはた]／月並千三百題／大永3(1523)年間
3月23日

明け集てる

→如何なる

あけはつるまで－いねかにてして
おもふこと－かすはふみにも－いかならむ
【室町千句】／何人 [ゆふへより]／天文20(1551)年5月9日～11日

あけはつるまで－ゆめはみえこす
わするなよ－わすれはせしも－いかならむ
【元亀年間百題 6巻】／何人 [あきかせの]
／元亀3(1572)年7月13日

明け離れる

→鶴が鳴き交わす空

たえたらに－どのかはきり－あけはなれ
おりゐるかりの－なきはそろら
【称名院追善千句】／何人 [かねのこゑ]
／永禄6(1563)年12月14日～18日

つきてしも－したふわかれの－あけはなれ
たものかりの－なきはそろら
【天正年間百題 57巻】／□□ [いるそてに]／天正18(1590)年1月7日

明けやすい月

→逢う後朝に愛

あけやすい－つきてのゆくへの－をしまれて
まれにあふよの－きぬきぬはうし
明ける
→仮穂の野辺

うぐひすの一こゑするつきや→あけぬらむ
かりねののへの→ゆめのゆくする

【大脳三年月並千三百部】／□□【はると
ふく】／月並千三百部／大脳 3(1523) 年 1
月 23 日

やまさむみ→いくしれして→あけぬらむ
かりねののへの→つきのこるそら

【弘治三年月齢八冊】／何船／【にほへむめ】
／弘治元 (1556) 年 11 月 20 日

朝明け静か
→玉薫

あさけしかつに→かせわたるみゆ
ともしびの→けけはよくふいか→たすたれ

【大脳四年月並千二百部】／□□【わけく
らし】／月並千二百部／大脳 4(1524) 年 7
月 23 日

あさけしかつに→きぬるうぐひす
たすたれ→けけはそのもの→うちかすみ

【天文三年月齢三冊】／何船／【はととき
す】／天文 24(1555) 年 4 月 10 日

あさ

朝霞
→雲に有明の月

たなひけは→はやきえそむる→あさかすみ
よこくもをしき→ありあけのつき

【飯盛千冊】／何船／【ありあけや】／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日

やまはかり→なほふるゆきの→あさかすみ
こほりはくもに→ありあけのつき

【直徳以前月齢 7 巻】／何人／【けふいくか
か】／千句第五／永禄 2(1382) 年 1 月 22 日

かせゆく→ふきくるのへの→あさかすみ
くもちにのこる→ありあけのつき

【文明十五年千冊 1 巻】／何船／【かけた
かし】／文明 15(1453) 年 5 月 2 日～3 月 2
日
あさ

朝明け静か

あさけしかつ

朝日影

あさひかげ

朝ぼらけ

あさぼらけ

朝来る鳥

あさけるしゅうか

→馬

かはじみの－あめになるへき－あさかすみ

たにの－といふる－うくひすのこゑ

【看聞いて記録 5 卷】／山作 [あまはれ

て]／応永 30(1423) 年 5 月 25 日

あさかすみ－ひとよのほどに－はるみて

ここをさぞふ－うくひすのこゑ

【永禄年間百詠 28 卷】／何人 [つきたなか

ら]／永禄 5(1562) 年 8 月 11 日

→月が残る

あさかすみ－うちいつるみつに－はぜをて

ふなちをとほみ－ときそのこれる

【文明年間百詠 34 卷】／何人 [きねや

し]／文明 14(1482) 年 2 月 2 日

あさかすみ－のととなるのに－うちいてて

たびゆそてに－ときそのこれる

【文治十二年千句 8 卷】／何人 [ひとはさ

へ]／文治 12(1480) 年 4 月 10 日～*日

→残る月影

かりのなく－しぼひのうらの－あさかすみ

なみにうかひで－のころつきかけ

【諸尊法派 3 卷】／近代 [あきまと]と

／建武 4(1337) 年 6 月 29 日

あさかすみ－のにもやまにも－いろはえて

ゆくそらとほし－のころつきかけ

【文明年間百詠 34 卷】／何木 [うめかか

を]／文明 15(1483) 年 2 月 19 日

朝来る鸚

あさけしかつ

あさけしかつに－きぬるうくひす

たますたれ－まけはそともの－うちかすみ

【天文年間百詠 38 卷】／何路 [ほとと

す]／天文 24(1555) 年 4 月 10 日

あさとあくれは－きぬるうくひす

たますたれ－ひま のたこうに－ひのさして

【永禄年間百詠 28 卷】／□□ [きぬにう

め]／永禄 5(1562) 年 2 月 1 日
あきはせにーくもたちまよふーあさはらけ
たのもにちかくーかりのなくこえ
【文明十四年句句52番】【阿部【ほとと
きす】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→晴う別れ路
なかみれはーことのはもなきーあさはらけ
かとまっていてーしたふかかれち
【文明十四年句句52番】【阿部【ゆくみ
つの】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

いとさへーこころうかるるーあさはらけ
たもをひかへーしたふかかれち
【天正四年句句70番】【阿部【ちりとの
み】／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→海人の釣舟
つきはなほーやすらふるはのーあさはらけ
うらかくれゆくーあまのつりふね
【庚午句句103番】【阿部【されそ】／阿部
元(1487)年10月9日～9月11日

わずらめやーなはのはゆふへーあさはらけ
なとまよふらむーあまのつりふね
【庚庚第一／統群書類従本】／阿部／明治2
年

→帰る雁
かずみさへーいわつくなのはーあさはらけ
かくはいくつぞーへるかりかね
【春鶴日記紙後50番】【阿部【まきもみ
む】／応永19(1412)年1月14日

あさはらくーかずみをかれてーふくかせに
をふねいれはーかべるかありかね
【庚庚第三／統群書類従本】／阿部／文亀元
(1501)年3月18日

→勿と響えよう
なにはかたーおほのつきのーあさはらけ
みやこのけしきーなりにたしとへむ

→朝

朝まだき

→道の遠げさ
きえぬるかーしもずくもるーあさまたき
おきいてゆくーみちのはるけさ
【阿越句句112番】【阿部【はるもきて】／文明
2(1470)年正月10〜12日

いちのもーいそくやあきのーあさまたき
きりのへてのーみちのはるけさ
【元和句句24番】【阿部【としこし
に】／元和6(1620)年12月5日

→春風が煩い
よもはなにーいこまのやまのーあしたかな
はるかせゆるくーわたるなにはえ
【寛文句句22番】【阿部【としのな
に】／寛文12(1672)年3月16日

はなのかにーゆきものこのるーあしたかな
はるかせゆるくーかすむとほやま
【庚庚第四／早稲田大学本】／阿部／永正6、7
年

風と朝霞

→をのる日影
あさかすみーふきとくかせのーなほさえて
いつるひかけのーとりのさへつり
【享徳句句12番】【阿部【はきにつゆ】／
享徳2(1453)年8月11日〜13日

かせたてーはるのよろしーあさかすみ
いつるひかけのおそやまのは
【天正四年句句70番】【阿部【さいしの
たえて】／天正4(1576)年5月6日〜7月
19日

けさのはつゆき

今朝の初雪
朝顔の花

あさがお

朝顔の色

野分する

はかさなみするーあさかほのいろ
ひきかふーまかきたわわにーのわきして
【慶長年間百領 27 巻】／□□ [ひめおき]
【慶長 4(1599) 年 3 月 25 日】
あさの
麻の狭衣
→山躑
たけのはわくる－あさのさころも
やまかつの－つまきのはやし－ふゆかれて
【邦智叢／北野天満宮本／永正十二年／】
うつつちたかき－あさのさころも
やまかつの－そのはるみち－あとみえて
【論書４種／宗牧／】

あさのごろも
麻衣打つ
→人は訪い来ない
うらみをも－うちそへかまし－あさころも
あさまきまして－ひととはひとこす
【成立不詳・宗祇以前１５巻／山何［め
つらしき］／成立時不詳
あさころも－うつなることの－ふくるように
かはるころか－ひととはひとこす
【文明十四年万方丁５２巻／後樂［あさか
はや］／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日】

あし
薫火焚く影
→飛ぶ蝶
おなしみなどの－あしひたたかけ
うちみたれ－くるかたより－とふばたる
【天正年間百編 5 7 巻／山何［あをやさ
の］／天正 3(1575) 年 2 月 2 日
はなれこまに－あしひたたかけ
とふばたる－ゆくかたもなく－さよふけて
【壁蔵／大阪天満宮文庫本／夏／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

あじけない
味気ない世
→鎖み置く
わかきもしらす－あちきなのよや
あとへ－たのめおきても－いかならむ
【難波田千句／□□［みつのおもに］／
文明 14(1482) 年 10 月前後
なれこしとし－あちきなのよや
しかはかり－たのめおきても－わするらむ
【大永四年月並千二百帳／□□［うくひ
の］／月並千二百帳／大永 4(1524) 年 2
月 23 日】

あたらし
新火枕
→鵞交わす
にひとたくらは－ゆめかうつつか
はちかはす－なかこそのちは－しのはれめ
【伊予千句／御河［すさしは］／天文
6(1537) 年 5 月 22 日
にひとたくらは－あくるたひたひ
はちかはす－こころふかさを－うらみわひ
【文治一年千句／三字中略［くもらさぬ］
／天正 9(1581) 年 11 月 19 日】

あた
従と掛かり来る
→玉の絵の末
あたなりと－おもひしながらも－かかりきて
いのらはちよも－たまをのすえ
【天文年間百編 3 8 巻／山何［つきやけ
さ］／天文 21(1552) 年 7 月 26 日
ちかひたた－あしたりながら－かかりきて
ひとひとひの－たまをのすえ
【弘治年間百編 8 巻／何人［ときはなる］
／弘治 3(1557) 年 8 月 28 日】
あと

げにもあだしま
げにも従しむ
→百春

かみたれすくる—あとのしつけさ
くもきえて—つきたたちのほる—やまのはに
【下草／金子木／雑上／延徳4(1492)年頃】

いにしのあと

古の後

→るる

たたみつくさの—いにしのあと
をかのの—みちやのなかに—なりぬらむ
【文安年間百帳9巻】／何路［さぎきよし］
／文安4(1447)年8月15日

かすむはかのの—いにしのあと
いつのちり—つもりてやまと—なりぬらむ
【国慶第一／続群書類従本】／雑／長享2年

あおばのはなのあと

青葉の花の後

→懸ける風浪

まつなでて—あをはのゆきや—はなのあと
ことののかたに—かかるふなにみ
【看板日記紙番50巻】／山河［かなやくも］／応永26(1419)年10月25日

をしめても—あをはなりぬ—はなのあと
まつにことさら—かかるふなにみ
【看板日記紙番50巻】／山河［あつさなほ］／応永32(1426)年6月25日

うしろのやま

後ろの山

→南は長閑

うしろのやまの—かせのはけさ
たびのそらみ—みなみにゆけは—のときにて
【国慶第四／早稲田大学本】／雑下／永正6、7年

うしろのやまの—あらしみからし
ふゆのひも—みぬのみなみは—のときにて
【宗長関係8種】／老耳／天理本／

後朝の後

→経見

ひときうちぬる—きぬきぬのあと
なみたのみ—ひかたきそての—かたみにて
【昭和文母道教千句】／二世反音［かけたかき］／天文24(1555)年3月26日～晦日

おもかけとまれ—きぬきぬのあと
たまくらをおのかものなる—かたみにて
【集百句之連歌／天理本】／集百句之連歌／不明

なみたにむかふ—きぬきぬのあと
なくさぬめ—ものからつきて—かたみにて

あと

さんぎたあととしげぎけ

雨過ぎた後の静けさ

→山の端

あめふるはるる—あとのしつけさ
きえやられて—くもはかせまつ—やまのはに
【永原千句】／何路［はるのそらは］／明応9(1500)年7月17日

あと

さんぎたあととしげぎけ

雨過ぎた後の静けさ

→山の端

あめふるはるる—あとのしつけさ
きえやられて—くもはかせまつ—やまのはに
【永原千句】／何路［はるのそらは］／明応9(1500)年7月17日
雲鳥の跡
→続編の水
ゆくかたきゆる－くもとりのあと
かけあく－あやおるみつの一かすみ日に
【天正四年方冊 70巻】／何物 [きくやい]
かに] ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日－7月
19日
かへはいつこくもとりのあと
かすみつつあやおるみつの一しろきのに
【老集／吉川本】／春／文明 13(1481) 年
夏頃

五月雨の後
→軒轅頑
なみはなきぬる－さみたれのあと
あしのやの一きはまはらに－かたふきて
【寛永年間編 15巻】／□□ [しきけきの]
／裏白／寛永 10(1633) 年 1月 3日
あやめかるる－さみたれのあと
ふるさののきははまて－かたふきて
【国書第二／続群書類従本】／鏡／明応
4(1495) 年早春

後の世の道
→太和歌
いかさまならむ－のちののみち
かすずに－かはりもてきぬ－やまとうた
【成立不詳・心敬以前 14巻】／何船 [ちりしえぬ] ／成立時不詳
くらきそらみ－のちののみち
たたとし－これよりさきの－やまとうた
【宗仰関係 9種】／宗仰句／静嘉堂文庫本の

野分の後
→虫の声
のわきのあと－まつののつれさ
なきたゆる－なかにゆふへの－むしのこゑ
【平政文庫本千句】／□□ [なきをたつ]

のわきのあと－くれわたるには
ほのかに－なきこそいふれ－むしのこゑ
【慶長年間編 27巻】／□□ [はるさめの]
慶長 9(1604) 年 10 月 6日

はるよりの美
春より後
→長き日
はるよりのの－うくひすのごゑ
おふらも－つれつれはなほ－なかきひに
【続編千句】／花之何 [うめかは] ／(元亀 4) 天正元 (1573) 年正月 9日－11日
はるよりのの－とももこそあれ
たかこや－むかしいはの－なかきひに
【天正四年方冊 70巻】／何何 [はつ hariのは]
／天正 4(1576) 年 5月 6日－7月 19日

筆の跡
→霞む未のそほ舟
たるりくる－さくらのみかは－ふてのあと
かすみにかたす－あけのそほふね
【天文廿年梅千句】／何船 [つじにうめ]
／天文 24(1555) 年正月 7日
くらへより－こすきのはなに－ふてのあと
かすむみきりの－あけのそほふね
【毎利千句】／白何 [うすゆきの] ／文禄
3(1594) 年 5月 12日－16日

雨の晴れゆく後は風
→日に渡る舟の寒さ
むらさめの－はれゆくあとは－ふくをあらし
ゆふびにわたる－ふねのさむけさ
【大永年間編 14巻】／何何 [ちあきをも]
／大永 5(1525) 年 9月 21日
むらさめの－はれゆくあとは－ゆふうあらし
いりひをわたる－ふねのさむけさ
【宗仰関係 8種】／老耳／天理本の

行くものあと
夕立の後

【老集／吉川本】／念少／文明 13(1481) 年
夏頃
あま

→急ぐ

ひままたのこる－ゆふたちのあと
こぬあきを－ひくらしのねや－いそくらむ
【慶長年間百巻 27巻】／□□ [よつのとき]／翁白／慶長 18(1613) 年 1 月 3 日

いつもひきよき－ゆふたちのあと
□□□を－くれぬ□□□と－や－いそくらむ
【天正四年万句 70巻】／山何 [みかつきの]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→雲の流絹えにはのめく

ひとほりせし－ゆふたちのあと
ひのかけは－くものとたえに－ほのめきて
【嵯峨千句】／何人 [さきててる]／(天亀 4) 天正元(1573) 年正月 9 日～11 日

ふりめくりたる－ゆふたちのあと
むらくもの－たえまのひかり－ほのめきて
【慶長年間百巻 27巻】／□□ [はるにまと]／翁白／慶長 6(1601) 年 1 月 3 日

別れ路の跡

→遠影

あくかれいつる－わたれちのあと
おもたけに－わかたまししほや－つれぬらむ
【難波田半千句】／□□ [あけほのを]／文 明 14(1482) 年 10 月前後

くもこそかみ－わたれちのあと
ゆふへには－あめともなれる－おもたけに
【難波田半千句】／□□ [にしきにて]／文 明 14(1482) 年 10 月前後

→海人の釣舟

はなれこしまに－あまのつりふね
うなはらや－くものもはれたる－あさぼらけ
【聖観千句】／何人 [おにそなく]／明応 3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

うらっとひる－あまのつりふね
やまかすむ－きまのはまつの－あさぼらけ
【天正四年万句 70巻】／何人 [うのはにの]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→潮ぼらげ

おきにかかれ－あまのつりふね
そこもしほなみにいりひや－しぶるらむ
【宮島千句】／何人 [ほかえやは]／天文 20(1551) 年 5 月 9 日～11 日

ゆふへにいて－あまのつりふね
たかさとの－うらわのなみに－ししくらむ
【時夏稿／北野天満宮本】／永正十四年／

→松立てる

かつかつうかふ－あまのつりふね
まったてる－そのかくれや－さとななるむ
【成立不詳・宗業以前 8巻】／山何 [ひとこゑや]／成立時不詳

はるもしほらら－あまのつりふね
まったてる－かけにふちえの－うらさひて
【老蔵／毛利本】／雑華／(文明 17(1485)年 7 月 23 日頃)
あまた

かずあまた

→如何ばかり

かすをあまたの－ふみもはかなし
いかはかり－さてもあたる－ひとならむ
【永正十九年句】／何日 [とおさなき] ／明応
永正 13(1516) 年 3 月 11 日〜14 日

かすをあまたの－おもひくるしも
をくるまの－しのはしかき－いかはかり
【天正四年句句 70 番】／何日 [しかのね]
は]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日〜7 月 19 日

あまひこ

天彦の声

→時鳥

いふことおくる－あまひこのこと
ほとときす－なくとくるを－なへてきけ
【宝徳四年句句】／何鳥 [あくるよは] ／宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

たれかこたへそ－あまひこのこと
ほとときす－またきくもりを－すきやれて
【享保二年句句】／何日 [はさにてつ] ／享保 2(1453) 年 8 月 11 日〜13 日

あめ

あらかすむれ

雨霞む暮れ

→春風

まさるみきはや－あめかすむくれ
はるかせの－ふねのはつつきも－ちげるし
【天正年間百題 57 番】／何日 [あをやき
は]／天正 13(1585) 年 1 月 28 日

をのへのくもに－あめかすむくれ
はるかせの－よわるにときは－かねのこゑ
【永正年間百題 1 番】／何日 [こゑとほく]
／永正元 (1505) 年 12 月 10 日

→時鳥

ふるのをほとみ－あめかすむくれ
さたかにも－いつかはなかむ－ほとときす
【永原千句】／何日 [おとそなき] ／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

ふちかをりつつ－あめかすむくれ
はつこゑや－やよびならなの一－ほとときす
【平松文庫末千句】／□□ [おちはして]

雨がふる

→三輪崎

やりとりかなや－あめそふりくる
うちくもり－いひひをゑすに－みわかさき
【文明十四年句句 52 番】／二字反音 [は
はなみな]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日〜
9月 14 日

はつせのかはヘ－あめそふりくる
みわかさき－おつるあるしの－のをすきて
【専経関係 2 種】／□／応元 (1467) 年
5 月 10 日

雨過ぎた後の静けさ

→山の端

あめふりはるる－あとのしつけさ
さいやれて－くもはかせまつ－やまのはに
【永原千句】／何日 [はるのそらは] ／明
応 9(1500) 年 7 月 17 日

さみたれすくる－あとのしつけさ
くもきえて－つきたちのほる－やまのはに
【下草／金子本】／雄上／延徳 4(1492) 年頃

雨の内

→山時鳥

つれつれは－なほまざりゆく－あめのうち
おとつれすて－やまほとときす
【元和年間百題 24 番】／□□ [ととし
に]／元和 6(1620) 年 12 月 5 日

しかたに－うちかたへ－あめのうち
くもきえて－まとの－やまほとときす
【宗経関係 8 種】／老耳／天理本／
雨の昔

雨の雨
→「雨時鳥」

あめのくれ
あめのくれ－あしたのくもに－うかれてきて
はつねをくや－やまとときす

【天正四年万行70 万】／白河 [はつねるや]／天正4(1576)年5月6日－7月19日

われそるか－みねのいのりの－あめのくれ
やまとときす－おとつれてゆけ

【新撰国名拾聞録／実隆本】／夏／明応
4(1498)年9月26日

雨の雨

雨を待つ
→「雨時鳥」

みなつきのそらの－あめやまとらむ
ときすきて－やすらふこゑの－ほとときす

【大永年間年書 14 巻】／白河 [あさきをも]／大永5(1525)年9月21日

雨を待つ
→「雨時鳥」

のみつきのそらの－あめやまとらむ
ときすくて－やすらふこゑの－ほとときす

【大永年間年書 14 巻】／白河 [あさきをも]／大永5(1525)年9月21日

雨を待つ
→「雨時鳥」

のみつきのそらの－あめやまとらむ
ときすくて－やすらふこゑの－ほとときす

【大永年間年書 14 巻】／白河 [あさきをも]／大永5(1525)年9月21日
あやめぐさ
薬用植物
→山時鳥
をりふれからにしあとの－あやめぐさ
かけたにとめよ－やまほとときす
【吉野多句】／何人 [ちかしてう] ／天文
20(1551) 年 5 月 9 日～11 日
ふくやとの－のきはににほふ－あやめぐさ
かなほねをそへよ－やまほとときす
【新撮薬材抄集／実隆本】／夏／明治
4(1495) 年 9 月 26 日

あゆ
みずのさびあゆ
水の嬉�本场比赛
→柳陰
つわきひかるや－みつのさびあゆ
えたかはす－もみちはいかに－やなきかけ
【応永年間百題 7 巻】／□□ [x x はさて]
／応永 24(1417) 年 3 月 16 日
みすくくれの－みつのさびあゆ
ちるとみて－そてにいらつく－やなきかけ
【文安年間百題 9 巻】／何船 [ときはなる]
／文安元 (1444) 年 10 月 12 日

あらし
あらしこく山
→大井川原
のとがにすは－あらしこくやま
おほあかは－かすめるみつの－たえたえに
【享禄年間百題 8 巻】／何人 [かちこともある]
／享禄 3(1530) 年 1 月 28 日
はなとにゆけは－あらしこくやま
おほあかは－かすみのそことに－おとはして
【文安明千句 4 巻】／何路 [やへひと]
あらそう
心争う歌
→驚の声
ここあらそふ－うたのくちくち
はるされは－うくひすかはつ－こゑこゑに
【初瀬千句】／何衣 [しけるとも] ／享徳
元・2(1452) 年 4 月
ここあらそふ－うたのかちまけ
こゑこゑに－なくうくひすを－こにいれて
【文明十四年万句 5 巻】／乗何 [あけて
みむ] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

あらそう
心争う歌
→驚の声
なみたあらそふ－さをしかのこゑ
つつきにいま－そそれはわゆる－かりなきて
ありあけ

【明応年間百選 22 巻】／何人 [あきのいろに]／明応 9(1500)年7月11日

さきそめし－はなはしきに－あらはれて
にほひえならぬ－そののうめかか

【元和年間百選 24 巻】／□□ [よかれせぬ]/元和 6(1620)年10月8日

花の梢に現れる

→花の梢に現れる

くもまより－はなのこするの－あらはれて
まつにふちさく－ふるてらのみち

【永禄年間百選 28 巻】／何路 [きえしこの]/永禄 7(1564)年1月22日

すきむらの－こするははなに－あらはれて
おくにそつくく－ふるてらのみち

【天正年間百選 57 巻】／□□ [ことのは]/天正 13(1585)年1月4日

ありあけ

有明

ありあけの－いるやのはも－おほろにて
こゑもかすかに－かへるかりかね

【看聞日記紙尾 50 巻】／何人 [まつかえに]/応永 29(1422)年3月28日

ありあけの－なこりやなほも－うすかすみ
こしちはほくか－かへるかりかね

【看聞日記紙尾 50 巻】／山伺 [あめはれで]/応永30(1423)年5月25日

→連れない仲に錦木

ありあけ

【宝徳四年千句】／何人 [はなはまの]／宝徳 4(1452)年3月12日

あらましの－はとこそさそへ－やまのおく
はつほどときす－すくむらさめ

【応仁年間百選 6 巻】／□□ [ゆきのをる]/応仁 2(1469)年12月

ありあけ

→衣打つ声

かせながら－まつのひまする－ありあけに
ほののをの－こもうつこゑ

【棟守千句】／山伺 [みねとほき]／長享 元(1487)年10月9日<～11日>

よもすか－きははこのころ－ありあけに
たたたくらの－ころもうつこゑ

【明応年間百選 22 巻】／何路 [こそたちし]/応明 6(1497)年1月1日

ありあけ

現れる

→庭の梅の香

したもえの－くさのはつかに－あらはれて
ふゆかわねかぬ－そののうめかか

【明応年間百選 22 巻】／何人 [あきのいろに]/明応 9(1500)年7月11日

ありあけ

→初時鳥

あらましの－するはひとつも－ことたて
まつよそあく－はつほどときす

【宝徳四年千句】／何人 [はなはまの]／宝徳 4(1452)年3月12日

あらましの－はとこそさそへ－やまのおく
はつほどときす－すくむらさめ

【応仁年間百選 6 巻】／□□ [ゆきのをる]/応仁 2(1469)年12月

ありあけ

→やめの声

うめはまつ－のひみにはるを－あらはして
むすほふたる－うくひすのはこゑ

【永禄年間百選 28 巻】／懐旧 [はつゆきの]/永禄 6(1563)年11月18日

こころのみ－ささきたうたに－あらはして
かすむやまの－うくひすのはこゑ

【白髪鳥／北野天満宮本】／永正十二年／

ありあけ

→帰る鶴

ありあけの－いるやのはも－おほろにて
こゑもかすかに－かへるかりかね

【看聞日記紙尾 50 巻】／何人 [まつかえに]/応永 29(1422)年3月28日

ありあけの－なこりやなほも－うすかすみ
こしちはほくか－かへるかりかね

【看聞日記紙尾 50 巻】／山伺 [あめはれて]/応永30(1423)年5月25日

ありあけ

→連れない仲に錦木
ありあけの一つきのかすむは－ならひにてつれなきかに－たつらにしきい
【看聞日記紙背50巻】／唐何［いやとしに］／応永31(1424)年1月25日
ありあけの－くもにひはびて－おぼろよにつれなきかに－そふはにしきい
【看聞日記紙背50巻】／山何［せくみつのが］／応永31(1424)年6月25日

ありあけのつち

→夜深い道
ありあけの－□□□□□□を－おきいてて
はなにたびたつ－みちそよふかき
【文安年間百番9巻】／周人［なましゅなみ］／文安4(1447)年8月19日
ありあけの一つきのころのに－むしなきてこころやすらふ－みちそよふかき
【文明年間百番34巻】／周人［あきかせも］／文明17(1485)年8月30日

ありあけの月

有明の月
ありあけの一つきなつきも－すめるよに
なはあきはかり－うきものはなし
【太神宮法楽千句】／山何［のははなに］／長禄2(1488)年7月
ありあけの一つきなこりと－かへる災りこひよりかに－うきものはなし
【看聞日記紙背50巻】／山何［あつきなほ］／応永32(1425)年間6月25日

ありあけのつち

→秋の夜
ありあけのあとに－ありあけのかけ
ききしより－かねさやかる－あきのよいに
【永禄千句】／千何［ひととはれ］／明応9(1500)年7月17日
ふねゆくつきや－ありあけのかけ
すすしかを－ともなふまの－あきのよいに
【弘治三年春雪千句】／周人［ゆきにうめ］／弘治3(1557)年正月7日～9日

有明の空

ありあけの夜

→秋の風
つきなみこりの－ありあけのそら
いつまゝか－きいてうらみむ－あきのかせ
【表佐千句】／薄何［ゆきでみむ］／文明8(1476)年3月6日＜～8日＞
さたかのこる－ありあけのそら
なほふくや－よふねのすゑの－あきてのかせ
【文明年間百番34巻】／□□[したつゆは]／文明12(1480)年7月4日

ありあけのつち

→草枕
ねぬよほたる－ありあけのそら
くさまくら－うかれとあきや－ふぬねむ
【文明年間百番34巻】／三木[つつきをかせ]／文明12(1480)年8月
つきにねしのは－ありあけのそら
くさまくら－いくよともなき－あきくて
【那智塚／北野天満宮本】／永正十三年／

ありあけの月

有明の月
ありあけの一つきなつきも－すめるよに
なはあきはかり－うきものはなし
【太神宮法楽千句】／山何[のははなに]／長禄2(1488)年7月
ありあけの一つきなこりと－かへる災りこひよりかに－うきものはなし
【看聞日記紙背50巻】／山何[あつきなほ]／応永32(1425)年間6月25日

ありあけの通り

→帰る雁
ありあけの一つきやあらぬと－かすむよに
きけはくもを－かへるかりかね
【永禄年間百番4巻】／山何［おいまつは］／万安巻／永禄9(1437)年3月21日
ありあけの一つきはかすみに－ほのみえて
ゆめもまくらに－かへらかりかね
【園塵第三／統書類從本】／春／文亀元(1501)年3月18日

ありあけの通り

→雁の声
かすみながらも－ありあけのつき
よもすから－かへるやとほき－かりのこゑ
【文明十二年千句8巻】／何木[なましるし]／文明12(1480)年4月10日～＊日
あかつきかの－ありあけのつき
なかめやる－くももはつかの－かりのこゑ
【天正四年万句70巻】／玉何［まちはらも］／天正4(1576)年5月6日～7月19日
ありあげ

→秋更る

かなめをしたふ－ありあげのつき
ほとときす－なさつるゑさは－とぼさかり
【平松文庫木千句】／〇〇[ゆきはみちの]

ふるきみやこの－ありあげのつき
ほとときす－なさめかたるふーよはふけて
【文明年間四句 decrease in 34卷／何路(やまかせに)／文明15(1483)年3月2日

→武蔵野と草枕

はなのくも冬に－ありあげのつき
むさしのや－しのきしくさに－まくらして
【元亀二年句】／朝何[あたにちる]/
元亀2(1571)年3月5日

たひねいよの－ありあげのつき
むさしのや－わけもつくさぬ－くさまくら
【天正年間二句 decrease in 57卷／何垣(ゆくそてに)／天正11(1583)年関1月1日

→風吹る

みれはみにしむ－ありあげのつき
あかつきの－あらしにゆめの－さめてのち
【文明十四年句 decrease in 52卷／二子反音(はなみな)/文明14(1482)年7月4日～
9月14日

みよとやのこる－ありあげのつき
あかつきの－かねよりのちも－よはなかし
【蔵書安集／広島大学本／秋下／文和5(1356)年冬～翌年の春

→晴れ

いるかけいそく－ありあげのつき
ふくかせに－たかねはなるる－あきのくも
【天正四年句 decrease in 70卷／何色(ちるはなも)/天正4(1576)年5月6日～7月19日

またもあはなむ－ありあげのつき
うちやまの－あかつきはし－あきのくも
【下草／龍谷大学本／秋／延徳2(1490)
年～3年春頃

→山越る

つゆもたらさぬ－ありあげのつき
くもはけさ－しくるるあのの－やまでて
【文明十四年句 decrease in 52卷／夢想(そのし
なも)/文明14(1482)年7月4日～9月
14日

たもとにかすむ－ありあげのつき
とりのこあ－はなのにひに－やまでて
【悉句老集／春／永正17年

おぼろにこまあげあげのつき
隠に残る有明の月

→四無し小舟の音

おぼろのこる－ありあげのつき
はそえこく－たななしをふね－おとすみて
【心歌関係10種／心集／静嘉堂文庫本

おぼろにこる－ありあげのつき
はるのの－たななしをふね－おとすけて
【論集4種／宗長

つきにありあげのそら
月に有明の空
ある

あるもの

ただ有り無しの契り

人もある
あわれ

哀れ

一往故の身

いまははと一やつすかたもーあはれにて
さすらふるみのーはてしらす

【永禄元年考三首】の
【永禄元（1558）】の

すべてなほつしくよもはーあはれにて
さすらふるみのーはと甚はかな

【天文年間考三首】の
【天正 20（1592）年 1月 3日】

哀れなる

一冬の後

あはれしれーひとひひとひの一わかよはひ
かへらぬみちやーいのにへのあと

【長尾年間考三首】の
【長尾 3（1489）年 5月 1日】

よはたれも一つひにはのへのーあはれしれ
つくりかきしーいのにへのあと

【大永三年月並千三首】の
【大永 3（1523）年 3月 23日】

あわれである

一秋の上風

つきにたにーめてしこあきそーあはれなれ
のきはにたかきーをのうのうかせ

【国繁千句】の
【国繁（1479）年 11月 20日＜28日＞

あきすべてにーちかくなるこそーあはれなれ
はしこのなねのーをのうのうかせ

【天正四年万句 70首】の
【白明日つゆやいの】

妹の哀れさ

一打ち交わす

ほかよりきたるーをふのあはれさ
はるかせの一ふくのまにまにーうちかすみ

【長尾千句】の
【白明日つゆやいの】

い

山の井の水

一水の下

むすぶはつきぬーやまのみのみつ
このもとにーひととふつたつのーこけのいよ

【成立不詳】の
【花之何ふゆのいろ】

むすこけふかしーやまののみつ
すすしさはーさりのかわのはーこのもとに

【草草／大阪天満宮文庫本】の
【永正 2（1505）年 8月 23日以後同 3年 3月以前】

いう

と言いかく言い

一妹

といひかくいひーなみたもろなる
なかたちのーとかはあらしをーうちかすみ

【成立不詳】の
【きのいろ】の

といひかくいひーあはしとやる
なかたちのーへたつるかともよみふよに
【建立不詳・宗長以前 15 巻】/ X X [さ
みたれや] / 建立時不詳

→隠の内
といひかいくひーあらましきのろ
うふたつるあきのちくさのまませのうち
【伊勢千句】/ 貞应 [しかそなく] / 大永
2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

といひかいくひーくらすならはし
あらしのみうらむ□はなのまませのうち
【天文四年文華 70 卷】/ 何尚 [とふどり
の] / 天文 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

いえ
隠れ家
→み吉野の奥
かくれかをいなほかかれるとふるゆきに
くもはいくへそみよしののお
【応徳四日記書 50 卷】/ 何物 [きみとう
め] / 広永 29(1422) 年 2 月 25 日

かくれかをよのうきとてやーたつぬらむ
さとのおくなるみよしののおく
【応徳四日記書 50 卷】/ 何船 [ゆきにみ
て] / 広永 32(1426) 年 11 月 25 日

隠れ家の山
→埋もれる
はてはひとりのかくれかのやま
ふみわけしいはのかけちのうつもれて
【建立不詳・宗長以前 15 卷】/ 何木 [た
ますたれ] / 建立時不詳

はなみかてらの一かくれかのやま
みよしやふかきかすみにうつもれて
【天文四年文華 70 卷】/ 何頼 [かくす
し] / 天文 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→捨ててから
くもはいくへそかくれかのやま
すてしよりみはしたひくらひともなし
【難波十句】/ □□ [うめかかの] / 文
明 14(1482) 年 10 月前後

ひととひこぬかくれかのやま
すてしよりこののほかにみをなし
【新撰花絹草集・実隆本】/ 雅五 / 明応
4(1495) 年 9 月 26 日

→み吉野
おくかおくなるかくれかのやま
みよしのはみねのかけちもたえはって
【太玄宮法楽千句】/ 初何 [ほのめくは]
/ 長享 2(1488) 年 7 月

けふりもみえぬかくれかのやま
みよしのはさくらにくるるよいのはつき
【國慶第三純群書類従本】/ 毒 / 武亀元
(1501) 年 3 月 18 日

隠れ家はない
→み吉野の奥
たたあらましにかくれかはなし
みよしのはまたみねおくをたつねはや
・【応徳四日記書 50 卷】/ 何路 [ふりかっ
け] / 広永 29(1422) 年【1】3 月 15 日

うきよのほかのかくれかはなし
みよしののおくもやはにとほるらむ
【応徳四日記書 50 卷】/ 何何 [あすはさ
け] / 広永 31(1424) 年 2 月 25 日

やまのかくれか
山の隠れ家
→ならす
むすひかへたるやすのかくれか
のかれてゆゆめのうきよとなりぬらむ
【紫野句】/ 何木 [はししきる] / 延文
2(1357) 年後-応安 3 年 6 月以前

あらましきかきやすのかくれか
つれなきやののちのさけとなりぬらむ
【天文四年文華 70 卷】/ 何何 [やまとは
み] / 天文 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日
今昔の巻

草の庵

→山時鳥

さみたれの一つゆうもる－くさのいほ
いててやきかむ－やまほとときす
【熊野千句】／山垣 [おとなしき] ／文正
元 (1466) 年 3 月以前

ふくかせの－たえももあれな－くさのいほ
くもにまきる－やまほとときす
【表佐千句】／何路 [みなかみの] ／文明
8(1476) 年 3 月 6 日＜～8 日＞

よいさのみ－なかしのもそ－くさのいほ
はなのあとふ－やまほとときす
【合点之句／神宮文庫本】／雄／文明
9(1541) 年 12 月 25 日

禪の庵

→古の夢

しばのいま

はのいほ－たのむけかとや－たつねらむ
いとふもしらぬ－いにしへのゆめ
【表佐千句】／何路 [しこてると] ／長尊
元 (1487) 年 10 月 9 日＜～11 日＞

とひくるを－いとふはかりの－しはのいほ
わすれむとする－いにしへのゆめ
【弘治三年春雪千句】／山何 [はなそも] ／弘治 3(1557) 年正月 8 日～9 日

→花の散る頃

うしぐとみは－たれかはとはひ－しはのいほ
まつふくかせに－はなのてるところ
【天文年間百詠 38 巻】／何路 [あきよたた] ／天文 12(1543) 年 8 月 19 日

やまかせも－ふかはふかた－しはのいほ
ありあけのつきに－はなのてるところ
【宗祇関係 2 種】／心教寺順牡丹宗祇付句／

谷の庵

→住む峰の宮古

ふくかせの－つまちかぬる－たにのいほ
すまはやあきの－みねのふるてら
【阿越千句】／二之反音 [はるみても] ／文明 2(1470) 年正月 10 日～12 日

ちりてても－ひはとはほめや－たにのいほ
みれはつすみ－みねのふるてら
【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476) 年 5 月頃

مشاهد

→松風の声

みねのいほ－このののちも－すみあかて
さひしぃならふ－まつかせのこゑ
【長寿年間百詠 6 巻】／何人 [ゆきながら]
／長尊 2(1488) 年 1 月 22 日

しつけさは－ひとりかうへの－みねのいほ
ともとたのむも－まつくせのこゑ
【永正年間百詠 3 4 巻】／何路 [はやのみのに] ／永正 12(1515) 年 11 月 10 日

やまかせのいほ

→好立つ憶える

ひもゆふかせの－やまかせのいほ
ころかへら－ましまはのけふり－てそへて
【永禄年間百詠 2 8 巻】／何船 [みのこすや] ／永禄 2(1559) 年 7 月 16 日

かすみのおくの－やまかせのいほ
ほどかにも－はたやけふり－てそへて
【那智塵／北野天満宮本】／永正十三年 /

いかが

→秋の夕暮れ

いかが

→秋の夕暮れ

いかが

→秋の夕暮れ

いかが

如何

いかが

如何
いく

移り持て行く
→起き出でる

うつりもてゆく－あきのかなしさ
いまこむ－なくさめつも－おきいでて
【文禄年間百選 12 巻】／高行 [たかを行]
文禄 2(1593) 年 5 月 27 日

うつりもてゆく－そてのつつきかけ
つゆをしく－かりねのへ－おきいでて
【文明十四年本方 5 2 巻】／山井 [つゆや
けさ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

いくえ

幾重霞

→鶴の響き

いくへかすみの－つつくやまやま
はるのや－かねのひひきも－あらさらむ
【称名院追提千句】／久人 [さく人造]
永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

かすかのは－いくへかすみの－しけからし
かねのひひきも－たかかすかかなり
【天正年間百選 7 巻】／□□ [なつやま
は]／天正 17(1589) 年 4 月 26 日

いくえよそののうちからした

幾重繚摺の竹の下道

→また月ある雪の晴れる

いくへとよらの－たけのしたみち
にしにまた－つつきあるゆきの－けさはてて
【竹林抄／新古文学大系本】／冬／文明
8(1476) 年 5 月頃

いくへとよらの－たけのしたけ
あめにまた－つつきあるゆきの－よるはして
【心境関係 10 巻】／心正集／静嘉堂文庫本

いけ

池ぶる

→天の香具山

いけぶりて－ほのかにうつる－よはのつつき
あきいくあきそ－あまのかくやま
【成立不詳・宗祇以前 15 巻】／何人 [み
つさむし]／成立時不詳

なかむらむ－みきりははるの－いけぶりて
みやちたえせぬ－あまのかくやま
【永正年間百選 34 巻】／何人 [みやまき
に]／永正 14(1517) 年 3 月 22 日

行く時鳥

→空

まつたれをわき－ゆくほとときす
いつこはは－さみたれそめぬ－そらならむ
【宮島千句】／白行 [ゆふへより]／天文
20(1551) 年 5 月 9 日～11 日

おとつれて－ゆくほとときす
ねさめはた－たれもひとしあし－そらならむ
【弘治三年春雪千句】／何木 [はななれて]
弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

いけ

池ぶる

→水解け行く
いけみつの一つきかけあらふーやなきかな
こほりとけゆく－なみのあさかせ

【皆で千句】／山口介【いけみつの】／（元
亀 4）天文元（1573）年正月9日～11日

いけみつの－ささなみさそふーばるのかせ
いはまはもの－こほりとけゆく

【慶長七年百選 27巻】／□□ はるさめ
も〕／慶長 9(1604) 年 10 月 6 日

いさら

いさら井の水

→萌える夜

こほりのひまの－いさらあのみつ
かはおとの－あめかときけは－あくるよね

【天文二四年梅千句】／何木【つみそへよ】
／天文 24(1555) 年正月7日

かすみにむせるふ－いさらあのみつ
うくすの－こぶするなれ－あくるよね

【大永四年月並二千鈔】／□□ うのは
なの］／月並二千鈔／大永4(1524) 年 4
月 23 日

いずち

泊まり舟音していずち

→豚の国の人

とまりふね－おとしていつち－わたるらむ
たれたいなラぬ－にくくのにひと

【東山千句】／一字難頭【つきみつつ】／
永正 15(1518) 年 8 月 10 日～12日

とまりふね－おとしていつち－わかるらむ
あはれのたびや－にくくのにひと

【宗教関係 8 種】／黄庫院／善陵部本／

かえりをいそら

→柴持人

ごくもかる－やまだゆふへを－いそくらむ
しばもつひと－やすむかけはし

【表佐千句】／何人【はなそもく】／文明
8(1476) 年 3 月 6 日<－8 日>

すゑかけて－かへるいちや－いそくらむ
しばもつひとの－つるるこゑ

【文明年間百選 34巻】／□□ はたつゆ
は］／文明 12(1480) 年 7 月 4 日
いち

梅の一本

さきそめにけむうめのひとと
うくひすのうちはふきくるそのうち
【五絵一十二句】／何木（とのうちに）
／天正9(1581)年11月19日

やつれてにほふうめのひとと
うくひすの一いくはるとなきこそおいて
【大永三年月並百三十集】／□□（やまい
くへ）／月並百三十集／大永3(1523)年8月
23日

こしききなかのうめのひとと
うくひすのうちはふきたるこあすなり
【天正四年百巻57巻】／初町（はるたち
て）／裏日／天正12(1584)年1月3日

雲の一群

→夕日隠れ

を変えいるこきーはしのひとと
つゆやうほふふひかくれにほのころるる
【出陣千句】／何和（はなさかり）／永正
元(1504)年10月25日～27日

をかへになひくーはしのひとと
うすきりのふふひかくれにもすなきて
【応仁年間百巻6巻】／何人（つきのかき）
／応仁2(1468)年1月1日

をかへになひくーはしのひとと
うすきりのふふひかくれにもすなきて
【雲草／伊地知本】／秋／文明6(1474)年
2月以前

菊の一本

→山人

しものそこなるーきくのひとと
やまひとのすむあとのおにーたつねまし
【天文十一年断簡句】／□□（つけのこせ）
／天文20(1551)年6月10日～12日

ちくさしほれてーきくのひととも
やまひとのすみかはこことーもののふるく
【長禄三年千句1巻】／何鳥（ふかふるく
る）／長禄3(1459)年12月2日～5日

はやしりそむるーきくのひとと
やまひとのすまみいかなるごこらなむ
【天正四年万句70巻】／朝何（なみす
る）／天正4(1576)年5月6日～7月19日

くものひとと

→捨てる時鳥

ゆかたいたつーくものひとと
ほとときすーのこれらのはなをーとひじて
【天文年間百巻38巻】／何路（あきよた
た）／天文12(1543)年8月19日

うかふしたーくもののひとと
なきすつるーあしたはるるーほとときす
【天文年間百巻57巻】／□□（ことのは
も）／天文13(1585)年1月4日

煙一筋

→誰かが積えた松残る

かせふきはらふけふりひととすち
たれうふてーまつのしるしのーのころるむ
【文明十四年万句52巻】／何興（かるひ
とは）／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

とほさとをのーふりひととすち
たかうふてーまつはかりはーのころるむ
【文明十四年万句52巻】／何色（はるな
つを）／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

里の一群

→草枕

とびょうやとのーさとのひとと
くさくらーつきをよすかにーこよひねむ
【文明十二年千句8巻】／夢想（うしことし
の）／文明12(1480)年4月10日～4月
14日

うちけふりたるーさとのひとと
くさくらーつつきをしらすーあくるのに
竹の一群

→片岡野辺
たくひのかけはたけのひとむら
つつじさくくたかたのへのあめのうち

【天下年間百館3 8巻】／何人／【やこころに】／天文4(1535)年5月1日
はつかれのぬりのひとつこふ
またれつるねさめのそらやあけぬらむ

→時鳥
しはしなくさむとひとりのひとつこふ
ねさては－それかあらぬか－ほとときす

【天下年間百館7 0巻】／何船／【やかきよの】／天文4(1576)年5月6日～7月19日
こふのはるけひとりのひとつこふ
むかしにふたたちは［ててらの一ほとときす

【案永第四／早稲田大学／】／夏／永正6、7年
なかかたいしはすみよい
中々市は住み良い

→三輪の杉群
ましかりの－なかかたいちは－すみよきに
たちならひたる－みわのすきむら

【案永御記紙背5 0巻】／山何／【なたかけよ】／応永26(1419)年3月29日
やまよりも－なかかたいちは－すみよきに
たれたつねこむ－みわのすきむら

【案永御記紙背5 0巻】／唐何／【あすはさけ】／応永31(1424)年2月25日
はなのがひとつ

→山桜
をるをはゆるせーはなのひとえた
ひとをこそととまるせきの－やまさくら

【文和千句】／手何／【はにしける】／文和5年
このかけものの－はなのひとえた
やまさくらさ－をもゆるすさ－をりもとて

【専頒関係2種】／春／応仁元(1467)年
5月10日
はなのがひとつ

花の一枝

→山桜
をるをはゆるせーはなのひとえた
ひとをこそととまるせきの－やまさくら

【文和千句】／手何／【はにしける】／文和5年
このかけものの－はなのひとえた
やまさくらさ－をもゆるすさ－をりもとて

【専頒関係2種】／春／応仁元(1467)年
5月10日
はなのがひとつ

花の一本
ひとときの雨

→水の静寂

ゆめよりもは～あととあるささの～ひとしくれ
ことしみまは～このはちはるおと
【秋津東千句】／宇宿顕（わかはより）
／天文 15(1546) 年 8 月 25 日

ふるもたたーかせのまかひの～ひとしこれ
まくらのうへは～このはちはるおと
【弘治三年春雪千句】／何喜（ななくさの）
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

ひとときの雨

→煙吹きやる風

ひとすちの～かはみつりよくーあらはれて
けふりふきやるーさとのあさかせ
【大原野十花千句】／石部（けふこそは）
／元亀 2(1571) 年 2 月 5 日～7 日

ひとすちの～かすれのすくにーはしみて
けふりふきやるーをちのあかせ
【永禄年間百詠 2 8 巻】／何親（ひきうる）／ಾ-status / 永禄 5(1562) 年 1 月 3 日

ひとときの雨

→通り

ひとときーひとすちをるーみないかは
くれかかりたるーみちのかたかた
【羽柴千句】／何人（すくにゆく）／天文
6(1578) 年 5 月 18・19 日

ひとときの雨

→風くる竹

ひとむらの一本のすじるーはれわたり
よきってつつーなひくくれたけ
【毛利千句】／山道（きののかは）／文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

ひとむらの雨につけるーをとどめ
かのはかたはーなはびくくれたけ
【文禄年間百詠 5 7 巻】／何木（うくひすの）／文禄 11(1583) 年間 1 月 8 日

ひとときの雨

→喰く時鳥

ひとむらさめの一つのこるやま
かへりなくーよばにはきつるーほとときす
【庆长年間百詠 1 5 巻】／何親（はるをうる）／慶長 2(1621) 年 1 月 3 日

ひとむらさめのいすくをちかた
つゆのまーやとりにきなけーほとときす
【天正四年頃句 7 0 巻】／竹何（まつほと
や）／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

ひとときの雨

→人寝と影

→片まで

ひとしきもんむーまきつたるかけ
はなにはぶーやちのこけーーかたしつきて
【新撰花枝波集・実隆本】／春上/新応
4(1495) 年 9 月 26 日

ひとしきもんむー一つきほしきかけ
むしのねーよわるあらしーーかたしつきて
【壁草／大阪大天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前
かせみにしかめぬひとひとりかもねむ
いつはりにかたなをのみうらみわひ
【天文年間百編 38 巻】／山何［なりかは］／天文 19(1550) 年 6 月 16 日
まちよわりつつひとひとりかもぬむ
ちかひにかはるところをうらみわひ
【寛文年間百編 22 巻】／□□［きゆるものと］／寛文 12(1672) 年 8 月 11 日

→群薄

松の一枝
→美濃の小山
あきをふるやのまつのはひとと
つゆやもるみののをやまのふはせき
【享徳二年朝歌】／半何［なのはよと］／享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日
たちるはさひしまつのはひとと
さきのけのみののをやまのゆきのくれ
【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明 8(1476) 年 5 月頃

→水の一筋

松の一枝
→庵

こそくはかりのみつのはひとち
ふりにけるあとやなみなのとききならむ
【大永四年月廿三日点箋】／□□[しきやひぬ]／月廿三日點箋／大永 4(1524) 年 9 月 23 日
みなかみしらぬみつのはひとち
そてやわたうきおとてなのとききならむ
【名所拾集／静嘉堂文庫本】／炎下／大永前後

→道の一筋

松の一枝
→火焙

たなかにつくくみつのはひとち
はなれこま－いはふかたにしゆきつれて
【元亀年間百編 6 巻】／何人[はなのときも]／元亀 4(1573) 年 6 月 6 日
さとはみえぬみちのひとち
つなながらいつくよりかははなれこま
【文禄年間百編 12 巻】／□□［あつまやの］／文禄 2(1593) 年 5 月 6 日

→行き連れる
たいかにつつく－みちのひとすち
はなれこまーいはふかたにしゆきつれて
【元亀間簡百巻 6 卷】／何人 [はなのときも]／元亀 4(1573) 年 6 月 6 日

かよふをのへの－みちのひとすち
このかたは－たきさしはとりゆきつれて
【文明十五年 ECC. 11 卷】／何路 [ひのもものを]／文明 15(1483) 年 9 月 2 日

いつ

いつかさて－ものいひかはす－ときはみむ
またはちへる－つゆのたまくら
【慶長間簡百巻 27 卷】／□□ [ひのもものを]／慶長 4(1599) 年 3 月 25 日

いつかさて－うちきせはやの－からころも
またはちへる－なかのあやなさ
【慶長間簡百巻 27 卷】／□□ [ひのもものを]／慶長 4(1599) 年 5 月 10 日

いった

いつわり

いつわり

いつはりの－ちかひをかみや－たたるらむ
たたあやまる－ことのはのすゑ
【難波田千句】／□□ [みつのおもに]／文 13(1673) 年 10 月前後

いつはりの－なきなかったふ－ゆくなみた
わたれすうれし－ことのはのすゑ
【寛文間簡百巻 22 卷】／□□ [つきたあらぬ]／寛文 13(1673) 年 7 月 19 日

いと

あおやぎのいと

青柳の矢

いと

かせうなひき－いなおほせとり
なかぬかひゆ－きみかことや－いつみえむ
【宗長造善千句】／片何 [やませくら]／
(享禄 5) 天文元 (1532) 年 3 月 25 日

いなおおせどり

いなおおせどり

ひねるへびる

ちぬしやびる

ことばのせのせ

首选の矢

ことばのせのせ

かせうなひき－いなおほせとり
なかぬかひゆ－きみかことや－いつみえむ
【宗長造善千句】／片何 [やませくら]／
(享禄 5) 天文元 (1532) 年 3 月 25 日
いのち

こひちをさそふーいなおはせとり
なかめわひぬーかりはきぬともーつたへはや

【墨壁／東光記念文庫本】／恋上／永正 8(1512) 年 11 月 3 日～永正 9 年

いなずま
稻妻の陰

ほのめきわたるーいなつまのかけ
よひのまにーいつるつきこそーかすかしなれ

【文安年間千句】／朝何［ひかりをも］／文安 2(1445) 年 8 月 15 日

それたのめるーいなつまのかけ
さりともとーうちなかなかーよひのまに

【延德年間百句 16 巻】／薄何［いろにこの］／千句第四／延徳元(1490) 年 12 月 26 日

いにしえ

いにしえ

ー山風が吹く

いにしえのーたちたちかなしきーゆめさめて
みはならはしのーやまかせそふく

【大永三年月並三千編】／□□ [はるっとふく]／月並三千編／大永 3(1523) 年 1 月 23 日

いにしえのーよしののみやをーきてとへは
おいのはなにーやまかせそふく

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明 8(1476) 年 5 月頃

いにしめのあと

古の後

たたみつくきのーいにしへのあと
をかのへのーみちののなかにーなりぬらむ

【文安年間百句 9 巻】／道路［つききよし］／文安 4(1447) 年 8 月 15 日

かすむはかりのーいにしへのあと
いつのちりーつもりてやまとーなりぬらむ

【国慶第一／統群書類従本】／雑／長享 2 年

いにしめのつく

古の月

ー美い秋

みしはいつそのーいにしへのつき
うきあきにーよのことわりもーおほえす

【享徳二年千句】／唐何［こころひく］／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

おもかはたたーいしへのつき
とほからぬーよのはとたえーうきあきに

【下草／龍谷大学本】／忠下／延徳 2(1490)
年～3 年春頃

いにしめのゆめ

古の夢

ー花散る

はるのこころはーいにしへのみや
をかのへのーなきさのさくらーはなさきて

【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)

たまをみかけるーいにしへのみや
よしのなるーたきつかはつらーはなさきて

【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／(大永
前後)

いにしめのゆめ

古の夢

ー小夜枕

わかれしまのーいにしへのゆめ
さよまくらーかねよりのちはーまとろまと

【永原千句】／何木［おとそなき］／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

みるもくやしきーいにしへのゆめ
つきひとりーかはちぬあきのーさよまくら

【天文十八年梅千句】／唐何［ゆげはうめ］
／天文 18(1549) 年正月 11 日

いのち

いのちであってほしい

ー法の道
いま

妹が恋しくて

妹に恋いつつ

命にて

～横む同じ世

わすれしの－なさけにかかる－いのちにて
するのちきりを－たのむおなしよ

【関閲記題記録箇 5 0 巻】／何船／おちはま
te]／応永 25(1418) 年 10 月 25 日

またといふ－ことばははかりを－いのちにて
よもわすれしと－たのむおなしよ

【関閲記題記録箇 5 0 巻】／唐何／あすはさ
け]／応永 31(1424) 年 2 月 25 日

こひわひぬ－あぶをかきりの－いのちにて
せめてはすむを－たのむおなしよ

【関閲記題記録箇 5 0 巻】／何月／うめさく
ら]／応永 32(1425) 年 8 月 25 日

いのる

神にただ祈る

～結ぶ契り

かみはた－いのるにこそは－かひもあれ
むすぶちきりの－ゆくへたかはし

【天文廿四年梅千句】／何垣／あさきりに]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

かみもた－いのるにこそは－はひきれ
むすぶちきりの－すゑはしられ

【天文廿四年万句 0 巻】／何船／ときはき
も]／天文 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

いま

妹を今の時鳥

むかしをいまの－おもかげのゆめ
おもひいてて－ふるきやこの－ほとときす

【住吉千句】／山何／そめさらは／大永
元(1521) 年 11 月 1 日～14 日

むかしをいまの－ここるとやせむ
わすれぬも－なつはきてなく－ほとときす

【天正四年万句 7 0 巻】／花何／うくひす
の]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

いも

妹が恋しくて

～枕に片敷く

いつもひしらに－みるゆめもなし
よるなみを－いそまくらに－かたしつきて

【浅間千句】／何木／したふとや]／永正
11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

いつもひしらに－かりふしぎのそら
つきやる－ももほのまくら－かたしつきて

【天文年間千句 3 8 巻】／何船／あさかほ
に]／天文 12(1543) 年 7 月 29 日
入相の鏡
→うち時雨
かたやまさひし－いりあひのかね
わくるの－あきのひすく－うちしくれ
【成立不詳・宗長以前15巻】／名号【な
かほと】／成立不明
ふもとにつく－いりあひのかね
まつたてる－をのへはかりの－うちしくれ
【文禄二年十月10巻】／和木【うすきり
や】／文禄2(1593)年4月8日～10日

→問さず
はなはちるらむ－いりあひのかね
しつかなる－はるのふるてら－かとさして
【太神宮法楽千句】／潮何【つゆにたに】
／長宗3(1488)年7月
きりにこもれる－いりあひのかね
あきのひも－なるためのところ－かとさして
【平松文庫本千句】／□□【ふゆはつき】

→帰る
さとはぞなたの－いりあひのかね
ちばはて－はなにはなとや－かへるらむ
【紫野千句】／何屋【すぎたかく】／延文
2(1357)年以降・応安3年6月以前
かすみにさひ－いりあひのかね
なくとりの－をのへや□□て－かへるらむ
【天正五年五月17巻】／□□【かすみけ
り】／天正10(1582)年3月1日

→花の障
こころをつく－いりあひのかね
やまふかみ－かへりもやらぬ－はなのかけ
【文禄五年町二千句】／何路【やまかせ
に】／文禄15(1483)年3月2日
おなしみねこす－いりあひのかね
あすまで－おもひかげきや－はなのかけ

→逢う
たけひとむらの－いりあひのかね
おとろきし－とりやねくらに－まえふらむ
【長谷川長福集】／□□【やまのはの】
／長宗3(1489)年8月2日
のへにひひく－いりあひのかね
かりひとや－つねなるぬかたに－まよふらむ
【天正四年万偈700巻】／竹何【まつほと
や】／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→山深い
くもよりをの－いりあひのかね
くさのとに－ひとともおとせぬ－やまふかみ
【河越千句】／潮何【うめのとに】／文明
2(1470)年正月10～12日
こころをつく－いりあひのかね
やまふかみ－かへりもやらぬ－はなのかげ
【文明五年万偈300巻】／何路【やまかせ
に】／文明15(1483)年3月2日

→わからない
とぼくそここゆ－いりあひのかね
かすかなる－すみかやたれと－わかさらむ
【伊予千句】／何路【さみたれの】／天文
5(1537)年5月22日
ひとりのみく－いりあひのかね
ちきりおく－ころとひとや－わかさらむ
【大永四年并千二百句】／□□【ゆた
ちは】／月並千二百句／大永4(1524)年6
月23日

→おらまし
そこときぬ－いりあひのかね
あらましの－ゆくすをわに－さためはや
【太神宮法楽千句】／薄何【まきのはや】
／長宗2(1488)年7月
はるのあはは－いりあひのかね
あらましの－いまはつきぬる－おいかみに
【薬政政集／広島大学本】／雛／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

→思いやり
みをおとろうず～りりあひのかね
きくことのうからぬよもば～もははや
【成立不詳・宗朝以前 6 巻】／何人 [みつ
まり]／成立時不詳
けふまたきつり～りりあひのかね
みのうへに～くるのはひと～おもははや
【薬政政集／広島大学本】／雛／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

→見える
はるのはやしの～りりあひのかね
やまかすむ～ふもとにすきの～かとみて
【表作古句】／何船 [はなやちる]／文明
8(1476) 年 3 月 6 日＜8 日>
はしよりおくの～りりあひのかね
まつけふる～ゆきのやまもと～かとみて
【園庭第四／早稻田大学本】／冬／永正 6,7
年

→続く
なかそらとほき～りりあひのかね
まつののは～おくやいかに一つつくらむ
【絵作古句】／二方 [かげた
かき]／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～毎日
やまとほからぬ～りりあひのかね
かすみにや～すゑののては一つつくらむ
【行助第六 4 種 1】／行助句／伊地本／

→初瀬寺
またあはれそふ～りりあひのかね
こもりは～なにいのるらむ～はつせてら
【因幡句句】／薄荷 [かさはらちゅ]／文明
7(1475) 年 11 月 26 日＜28 日>
ちかきをのへの～りりあひのかね
はつせてらもろこしにたに～あふかすや
【辻智筆／北野天満宮本】／永正十三年／

→初瀬山
たひねはつく～りりあひのかね
はつせやま～もにはなさく～かけわけて
【名所句句】／静嘉堂文庫本／春／（大永
前後）
たひねはつく～りりあひのかね
はつせやま～もにはなさく～かけわけて
【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476) 年 5 月頃
けふまたきつ～りりあひのかね
はつせやま～はるけはのは～おくにきて
【諸家月次通歌抄】／諸家月次通歌抄／成
立 ( ) 年末詳

→春なる
はなはこすゑの～りりあひのかね
ひとかへる～あとはしつけき～はるならむ
【天文年間百舎 8 卷】／山舟 [なくやい
つれ]／天文 24(1555) 年 5 月 14 日
かすむゆふへの～りりあひのかね
あすはたか～いののちのうの～はるならむ
【雪華／伊地知本】／春／文明 6(1474) 年
,2 月以前

→日が暮れる
いそくこころや～りりあひのかね
とまりをも～されぬうるの～ひはくれて
【天文四月方句 7 卷 1】／何何 [ゆふかは
の]／天文 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日
あかつきききし～りりあひのかね
ほとときす～ゆくへわすれぬ～ひはくれて
【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476) 年 5 月頃

いる

入り日影

→里人に人婦る見ゆ
うつろかか～まつのはこしの～りりひかけ
すゑののさとに～ひとかへるみゆ
色変わら

→松虫の声

いろかはる－ころをたにした－おもひくさちりしまや－まつむしのこゑ

【成立不詳・宗祇以前15巻】／何人（はつはな）／成立時不詳

いろかはる－のへにこてふ－ゆめやうき
みしあとはた－まつむしのこゑ

【永正年間物語27巻】／何人（いろはふちの）／永正8（1511）年4月6日

色変わらる頃

→花咲

みとりなるのも－いろかはるところ
さはみつに－くさのむらむら－はなさきて

【三嶋千句】／何人（とおりのねは）／文明3（1471）年3月21日～23日

このもとまでも－いろかはるところ
ひとしほぬ－こくさはれに－はなさきて

【明応年間物語22巻】／何人（うつろはて）／明応3（1494）年10月30日

色付く

→露と今朝の初霜

あきののた－かりはしこかく－いろつきて
ゆふへのつゆよ－けさのはつしも

【天文2年和千句】／花之何（かみかきの）／天文24（1555）年正月7日

かせおる－とはたいまはた－いろつきて
つゆにかたる－けさのはつしも

【幾学類文庫本千句】／何人（ちらははな）／永禄6（1563）年11月18日以前

いろ

朝顔の色

→野分する

はかなさみする－あさきぼのいろ
ひきかふ－まきかたわわに－のわきして

【慶長年間物語27巻】／何人（ひめおきし）／慶長4（1599）年3月25日

ははははかりの－あさきぼのいろ
たけなびく－そのふのうちも－のわきして

【成立不詳・宗舘以前15巻】／何人（しもおきし）／成立時不詳

月の入道

→秋の空

かけなむとする－つきののりかた
やまのはに－くもひきわたす－あきのそら

【平德三年平句】／何人（つつきたか）／平德2（1453）年8月11日～13日

ひかりをもる－つきののりかた
なかめすや－おもはなくとも－あきのそら

【永正年間物語8巻】／何人（はるのいろ）／永正5（1512）年1月18日

春の入日

→絶え絶え

はるののりひの－かけかすなり
たえたえに－かねのひひきの－きこえて

【称名院直之吉句】／一字霧隠（くもはれて）／永禄6（1563）年12月14日～18日

はるののりひの－まつにかかれる
かへりみぬ－あとはかすみの－たえたえに

【永禄年間物語28巻】／何人（ひきうるる）／裏白／永禄5（1562）年1月3日

いろ
つゆふかき－くさもこするも－いろつきて
なほこのころは－ころもうつこゑ
【文安頃千问句4卷】／丘何 [はなのなか]

→鶏の声

きりのほる－そものこすゑ－いろつきて
さひしきのころ－ひくらしのこゑ
【明応年間百問22卷】／何人 [たますたれ]／明応5(1496)年6月7日

つゆにはや－みねのくすはも－いろつきて
あきものかなし－ひくらしのこゑ
【文亀年間百問4卷】／何人 [きえしの]／文亀2(1502)年8月6日

花の色

→鷙の声

あをはより－あらはれぞむる－はなのいろ
したもてゆく－うくひすのこゑ
【羽柴千句】／朝町 [よもにふく]／天正6(1578)年5月18・19日

いままはなば－あをはにこのころ－はなのいろ
みきりになまる－うくひすのこゑ
【永禄年間百問28卷】／□□ [つゆはそてに]／永禄4(1561)年9月19日

さかりそと－みれははつろふ－はなのいろ
みきりをよの－うくひすのこゑ
【文亀年間百問12卷】／□□ [けさのまに]／文亀2(1593)年1月14日

春秋の色

→移ろう

みしはしはしの－はるあきのいろ
やまふきの－つゆはもみに－うつろびて
【美濃千句】／何馬 [まつやしほ]／文明4(1473)年12月16日～21日

けにはかなしや－はるあきのいろ
ひとはた－ときなるかたに－うつるびて
【宗祇関係2種】／心敬寺頌点宗祇付句

いろいろ

きざのいんいろ

木々の色々

→秋暮れる

しもおくころの－ききのいろいろ
たちのほる－きりのやまもと－あきくて
【明応年間百問22卷】／何路 [こそたちし]／明応6(1497)年1月1日

まつはみきをの－ききのいろいろ
ありあげの－一つねきかけも－あきくて
【天正四年方句70卷】／何船 [なかきよの]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

袖の色々

→月に帰る

あきはもみちの－そてのいろいろ
たけかりや－つきてありては－かへららむ
【永禄年間百問4卷】／山何 [おいまつは]／万葉句論／永禄9(1437)年3月21日

つゆはらふの－そてのいろいろ
はきかれを－つぎにやをりも－かへららむ
【慶長年間百問27卷】／□□ [はるにまつ]／長白／慶長6(1601)年1月3日

野辺の色々

→唐衣

ちくさをしき－のへのいろいろ
せめてみは－いつれともなし－からこも
【東山千句】／佛山 [つゆをいろ]／永正15(1518)年8月10日～12日

それでもさから－のへのいろいろ
からこも－きりのしつつに－しをれきて
【石山四時千句】／初何 [くれてなば]／天文24(1555)年8月15日～19日

いわ

岩が根

→橋の一筋
いわう

はかねに－をかはのかなみの一つにらあて
あさしもふかき－はしのひとすち

【三島千句】／初何（やまとほく）／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

たまきも－かしでたてる－いはかねに
まつはのへふす－はしのひとすち

【三島千句】／初何（うむかかに）／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

岩根の松

→箱の舟に日暮れ

しつえなみる－いはかねのまつ
あらいそのふねひきつなぐ－ひはくれて

【弘治三年春雪千句】／何木（はななたて）
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

ひとりかせふく－いはかねのまつ
いそたひ－あまのふねふさす－ひはくれて

【月村抜句／書陵郎本】／永正十四年

満の岩浪

→瀬羽川

こうにるるや－たきのいはなみ
おとはかは－おとはかりして－くるるに

【聖慶千句】／初何（きのふより）／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

かすみかくれ－たきのいはなみ
やまとはく－なかれてたる－おとはかは

【寛正年間百首 1 卷】／何人（けふこす
は）／寛正 3(1462) 年 2 月 27 日

いわう

かえりにこまいりふこえ
帰りに駆択う声

→都人

ひくれてかへる－こまいはふこえ
あふさかを－つぎもゆるや－みやこひと

【大永年間百首 14 卷】／何人（ゆきのう
ちに）／大永 5(1525) 年 1 月 25 日

たかへるさそ－こまいはふこえ
みやこひと－うちむけふの－せきむかへ

【戦軍／大阪天満宮文庫本】／逸／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

うい

変

→明けの鳥の声々

こころなきも－さそなはるには－うかるらむ
あくろよいそく－とりのこゑこゑ

【永禄元年花千句】／□□（ふらぬまも）
／永禄元 (1558) 年 3 月 23 日～25 日

またもなき－われやして－うかるらむ
あくろをつくる－とりのこゑこゑ

【文安頃千句 4 卷】／二重法音（はなをりて）

→塩染の袖
うい

【元和年間百首 24 巻】/ □□[あさねあさな]/ 元和 8(1622)年 2月 29日
うきはまくらの－しきのはねかき
すむつきに－おとろくゆめは－はなしなや
【寛永年間百首 15 巻】/ □□[とよとしの]/ 裏白/ 寛永 20(1643)年 1月 3日

愛い冬寝り
－朝の朝
うきふゆこもり－いつかかかるらむ
しつかなる－なはのうみの－あさなあさな
【伊勢千句】/ 山何[みるめか] / 大永 2(1522)年 8月 4日～8月 19日
うきふゆこもり－なといそくらむ
ふかかせも－またさむからぬ－あさなあさな
【天正四年万句70巻】/ 何物[きくやとい]
【天正4(1576)年 5月 6日～7月 19日

愛きをただ寛める
－筆の跡
うきをたた－すれかたみに－なくさめよ
それさへたゆる－ひとぶてのあと
【集守千句】/ 低何[いはほにも] / 長享 元(1487)年 10月 9日＜11日＞
うきをたた－ここところは－しーなくさめてしへのこす－ひとぶてのあと
【天文年間百首 38 巻】/ 朝何[またてきく] / 天文 9(1540)年 4月 25日

愛くつよい
－花の山風
うくつらき－ほとこそてて－たのみなれて
きそひそめに－しーはのやまかせ
【東山千句】/ 何草[つきになり] / 永正 15(1518)年 8月 10日～12日
うくつらき－ちきりならすや－ゆめになせ
うらむもはかな－はのやまかせ
【壁草／大阪天満宮文庫本】/ 春/ 永正 2(1505)年 8月 23日以後同 3年 3月以前

愛い鴨の羽舞き
－春
かそふるもうき－しきのはねかき
あきなれて－かよふこころの－はかなしや
【養波波州千句】/ □□[みつのおもに]/ 文明 14(1482)年 10月前後
あさきえに－いのるちきりや－うかるらむ
ひとつはかなふ－すみそめのそこ
【文明十四年万句52巻】/ 夢想[そのし
なも]/ 文明 14(1482)年 7月 4日～9月 14日

→後の世の道
たひのとも－わかれむことは－うきものを
たれかのれると－のちのよのみち
【文明十四年万句52巻】/ 何船[みつと
りか]/ 文明 14(1482)年 7月 4日～9月 14日

ふるさとの－わかれはたれも－うきものを
しらすかわみの－のちのよのみち
【亜 desar/ おじょう大本/ 雑四/ 文和 5(1356)年 冬～翌年の春

愛い秋
→植えないから聞かない秋の上風
うきこは－ここにたえぬ－あきなるに
うふすはきかしをきのうはかせ
【文和千句】/ 何人[なはたかく]/ 文和 5年

うきことも－われとしてるへき－あきなるに
うふすはきかしをきのうはかせ
【養波波州千句/ おじょう大本/ 雑四/ 文和 5(1356)年 冬～翌年の春

愛い鴨の羽舞き
－春
旅は憂い
→袖が露っぽい

たひそうき－こころはあきに－ときかね
やとなきあまり－そしてはつゆけし
【紫野千句／和路【あふちきく】／延文
2(1357) 年以後／応安 3 年 6 月以前

たひそうき－くさのまくらを－ゆふまくれ
はらふとなく－そしてつゆけし
【太神宮法楽千句／和路【ふきかす】／
長享 2(1488) 年 7 月

見るのも憂い
→紅葉散る頃

さもあらぬ－なきなにして－みるもうし
あらしのやまの－もみちるころ
【延徳三年発百賀 16 番】／何人【まつみよ
と】／延徳 4(1492) 年 2 月 8 日

なかなかに－ふたつのかは－みるもうし
みむろたったの－もみちるころ
【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476) 年 5 月頃

我でなくなるのが憂い
→古の戸の夕風

うしやかわにも－あらすなりゆく
はなをふく－こけのとはその－ゆふあられ
【春夢草／書陵部本】／春／永正 12(1516)
年、13 年

うしやかわにも－あらすなりゆく
こけのとの－はなにふきたつ－ゆふあられ
【論書 4 種】／宗教／

うえ

うえはつれなき－まつのしたつゆ
ひさきちる－はまちのしらす－いよつきて

【文安年間発書 9 番】／山河【なははる】
／文安 5(1448) 年 2 月 5 日

うへはつれなき－あらがそと
なみよする－いはねのこくさ－いよつきて
【大永三年月並千三百縁】／□□【あらた
の】／月並千三百縁／大永 3(1523) 年 12
月 23 日

秋の上風
→秋の夜

そよともすれは－をきのうはかせ
さらぬたに－ねさめかちる－あきのよに
【春秋挽歌／広島大学本】／秋／文和
5(1536) 年冬～翌年の春

たまくらやり－をきのうはかせ
つきしろく－むすはぬゆめの－あきのよに
【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

→古里

ゆめにうらむる－をきのうはかせ
みしはみな－ふるさとひとの－あともうし
【長享三年発百賀 6 番】／何人【ゆきなから】
／長享 2(1488) 年 1 月 22 日

カリもなくなり－をきのうはかせ
たかさきと－ふるさとひとの－またのらむ
【天文年間発書 38 番】／何船【あさかほ
に】／天文 12(1543) 年 7 月 29 日

→思う

ひとおとせす－をきのうはかせ
あきやきて－わふるさと－おなもふらむ
【歴史／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

そてをそはふる－をきのうはかせ
いかては－さてもは ACCESS おなもふらむ
【構造真／北野天満宮本】／永正十二年／

→古里

そふるるうらみ－をきのうはかせ
ひまもなく－のきはすはふるるさとに
すくらうへの－やまのはのつき
はるふかき－ふもとのさとに－かねなりて
【三島千句】／初何 [うろしき]／文明
3(1471)年 3月 21日～23日

すくらうへの－あげほののいろ
かすみより－よしののみたけ－かねなりて
【応仁年間百韻 6 巻】／何人 [つきのあき]
／応仁 2(1468)年 1月 1日

月の川上
→鐘の音

かけはしとほき－つきのかはかみ
かねのおと－くるもなみの－まかひにて
【永禄年間百韻 28 巻】／何人 [ふちかえや]／永禄 7(1564)年 3月 15日

さやかにうふる－つつきのかはかみ
きりはるる－ゆふへのそらの－かねのおと
【天正年間百韻 5 巻】／何路 [たちそひて]／天正 6(1578)年 1月 3日

露の上

かすみのうちの－みつのみなかみ
こととはむ－いつくかはるの－みなたとは
【天文年間百韻 38 巻】／何人 [はなのいろ]／天文 14(1545)年 2月 25日

かすみにおふる－つつのみなかみ
はるくるる－うちのしはふね－こととはむ
【助光関係 4 巻】／助光集句／鬼頭部本／
文正元 (1466)年 (7月 16日)

桜の上

きりのうへなる－たかまとのみや
ゆふまくへ－ろはあつさや－しらさらむ
【大原野十花句】／初何 [こからしを]／
元亀2(1571)年 2月 5日～7日

きりのうへなる－やまのしつけさ
ひとこゑの－かねよりあきの－ゆふまくれ
【平松文庫本句】／□□ [かきおこせ]／

すくらうへの－やまのはのつき
はるふかき－ふもとのさとに－かねなりて
【三島千句】／初何 [うろしき]／文明
3(1471)年 3月 21日～23日

すくらうへの－あげほののいろ
かすみより－よしののみたけ－かねなりて
【応仁年間百韻 6 巻】／何人 [つきのあき]
／応仁 2(1468)年 1月 1日

月の川上
→鐘の音

かけはしとほき－つつきのかはかみ
かねのおと－くるもなみの－まかひにて
【永禄年間百韻 28 巻】／何人 [ふちかえや]／永禄 7(1564)年 3月 15日

さやかにうふる－つつきのかはかみ
きりはるる－ゆふへのそらの－かねのおと
【天正年間百韻 5 巻】／何路 [たちそひて]／天正 6(1578)年 1月 3日
うく

→ 薩の内

まちのうへなる→あまのかへしま

【伊庭千句】／何文 [たかはるの]／大永
4(1524)年 3月 17日～21日

まつらのやまそなみのうへなる

【文明年間百巻 3 4巻】／井原 [みつみぬし]/
千町第二／文寛 17(1485) 6月 26日

はちすのうえ

→ 蟻

はちすのうへの→たのみたかふな

ひくらしの→こゑにすすしき→いけのおも

【五よし千句】／薄何 [あけのはの]／天正
9(1581) 11月 19日

はちすのうへの→一つゆみたるな

ひくらしの→なくゆふかせに一つきいてて

【草草／乙地知本】／秋／文明 6(1474) 年
2月以前

まくろのうえ

→ 本の上

かむれば→まくらのうへの→みのぐも
かねにおちる→つるのさやけさ

【長楽文庫文庫千句】／何と [よははに]/
文禄 6(1563) 11月 18日以前

おきそふや→まくらのうへの→あきのしも

いたまもの→いる→つるのさやけさ

【慶長年間百巻 2 7巻】／何と [はなちれ
は]／慶長 4(1599) 年間 3月 21日

うる

→ 薩の上

かすめるのへ→たちそうかるる

【延徳年間百巻 1 6巻】／何文 [こののへ
の]／延徳 2(1490) 3月 8日

そたたく→ひはりやもを→さそふらむ

【明応年間百巻 2 2巻】／何路 [こそたら
し]／明応 6(1497) 1月 1日

かすめるのへ→たちそうかるる

ものあり→ひなもやこころも→さそふらむ

うるたに→よそのかけひを→せきいれて

はれぐくある→さみたれのそら

【看日記記南国 5 0巻】／何人 [ことのは
に]／応永 31(1424) 9月 27日

花植える

→若木の桜

うきよにも→いののちをしき→はなうあて

【看日記記南国 5 0巻】／薄何 [ひそをし
き]／応永 30(1423) 3月 29日

すみひとの→よかたりになる→はなうあて

【看日記記南国 5 0巻】／矢何 [まつかね
に]／応永 32(1425) 3月 25日

うく

心浮かれる

→ 植る

ここうこうかるる→ゆきのあけの

かくれつる→ひとはいつくに→かへるらむ

【文明年間千句 5 2巻】／薄何 [かせの
ほり]／文明 14(1482) 7月 4日～9月
14日

ゆめのあとに→ここうこうかるる

よびのまの→ひとをあたねに→かへるらむ

【心証文書 1 0種】／和田内親敬／天理本

立って浮かれる

→ 誘う

かすめるのへ→たちそうかるる

ものあり→ひなもやこころも→さそふらむ

【延徳年間百巻 1 6巻】／何文 [こののへ
の]／延徳 2(1490) 3月 8日

そたたく→ひはりやもを→さそふらむ
うぐいす

朝来の鶯

→御自分の

をたにかけよ—ゆめのうきはし
みゆきせし—あとはしたふも—とまきよに
【明応年間百選 22 巻】／山川 [ほとんど
す】／明応 9(1500) 年 4 月 9 日

あとのところな—ゆめのうきはし
みゆきせし—そのにこしき—ふるてらに
【国慶第四／早稲田大学本】／雑子／永正
6、7 年

→流河

つくやまくるの—ゆめのうきはし
とこのうへの—うたかつやみの—なみたかは
【元亀年間百選 6 巻】／何人 [はなのは
も]／元亀 4(1573) 年 6 月 6 日

はかなくかよふ—ゆめのうきはし
わたるせは—いつなるるまむ—なみたかは

→春の夜

とたえかかるる—ゆめのうきはし
ねぬるまの—ほとはみしかき—はるのに
【永禄石山千句】／何人 [つきやかる]／
永禄 7(1564) 年 5 月 12 日

たえはてけりな—ゆめのうきはし
いとはやも—あげなむるとする—はるのに
【慶長年間百選 20 巻】／□□ [なかつ
き]／慶長 2(1661) 年 9 月

→蜂に分かれる

たちつゆのまの—ゆめのうきはし
つきいれは—みねにおかれる—よるのくも
【美濃千句】／何草 [いつくにて]／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

うぐいす

→玉藻

あさけしつかに—きぬるうぐいす
たすたれ—まけはそもの—うちかすみ
【天文年間百選 8 巻】／何路 [ほとと
す]／天文 24(1555) 年 4 月 10 日

あさとあくれは—きぬるうぐいす
たすたれ—ひまののからに—ひのさして
【永禄年間百選 28 巻】／□□ [きぬにう
め]／永禄 5(1562) 年 2 月 1 日

→朝明け長閑

うぐいすの—こにすたれを—まきあけて
ゆきはれわたる—あさけのとけしか
【慶長年間百選 27 巻】／□□ [ねふかき
や]／慶長 4(1599) 年 2 月 8 日

うぐいすの—さへつるみきり—あめすきて
たけのそよきも—あさけのとけしか
うぐいす

【寛永間百鎖・5巻】／□□【かみのま
す】／裏白／寛永12(1635)年1月3日

→有明の月

うぐいすのーこゑもうつろひーはおちて
つゆかすむよのーありあげのつき

【永原千句】／何人【みわたせは】／明応
9(1500)年7月17日

うぐいすのー□□□□いつるーたのにとに
みつほのかなるーありあげのつき

【天文年間百鎖・38巻】／何木【しこるる
か】／天文19(1550)年8月25日

→霞む暦

うぐいすのーこゑはたれーすきやらむ
たひねのそろはーかすむあげほの

【伊勢千句】／何路【けふみるや】／大永
2(1522)年4月8日〜8日

うぐいすのーうちはふきるーそののうち
まかきのつきのーかすむあげほの

【五言十句句】／何木【としのうちに】
／天正9(1581)年11月19日

うぐいすのーちきりもふかきーうめかえに
ゆきまほのほーかすむあげほの

【天文四万句70巻】／何色【ちるはな
も】／天文4(1576)年5月6日〜7月19日

→園の群竹

うぐいすのーすみかにならすーあさなあさな
ことしかあしーそののむらたけ

【京都千句】／何路【ききやけさ】／天文
20(1551)年5月9日〜11日

うぐいすのーこゑはかすまぬーあさとかな
はるのよせこーそののむらたけ

【天文四万句70巻】／花何【うぐいすの
の】／天正4(1576)年5月6日〜7月19日

→谷の戸の山

うぐいすのーねもうらかにーほころびて
あさひにむかふーたのにのとのやま

【天正四年句700巻】／青何【ゆくみつ
に】／天正4(1576)年5月6日〜7月19日

うぐいすのーきのふけふかにーすをいてて
たまさりやらぬーたのにのとのやま

【天文四万句70巻】／竹何【まつほと
や】／天正4(1576)年5月6日〜7月19日

→残る暦

うぐいすのーまかにこむるーこゑはして
おきおみてみればーのころあげほの

【崇長善善千句】／山何【こはるるや】／
（享禄5）天文元(1532)年3月25日

うぐいすのーこころしらるるーうめさきて
つきかすみにーのころあげほの

【羽柴千句】／薄何【たちはなの】／天正
6(1578)年5月18・19日

→光長関

うぐいすのーこゑにちはさとのーはるたつて
そともにうつるーひかりのとけし

【慶長年間百鎖27巻】／□□【まつやな
ほ】／裏白／慶長10(1605)年1月3日

うぐいすのーかきほのゆきをーはらひきて
にはあさけのーひかりのとけし

【寛永間百鎖15巻】／□□【ふのはるる
を】／裏白／寛永8(1631)年1月3日

→花を待つ

うぐいすはーかきねのたけのーはつ□にて
うすきかすみにーはなそまたるる

【尊厳法書3巻】／手何【むすふにん】
／建武4(1337)年6月23日

うぐいすはーのたかなるのにーなきそめて
なかきひかけにーはなそまたるる

【文明年間百鎖34巻】／□□【はたはり
や】／文明14(1482)年9月

→道の迫きさ

うぐいすのーこゑはとやまの一かけさえて
のへにうつれるーみちのはるけさ
一雪はふりつつ

うくひすの一つゆふむのへはくれそて
いそくやとりのーみちのはるけさ

【文明天年間百題34巻】／何路【やまかせ
に】／文明天年間百題34巻 3月2日

一鴉が鳴く

晴け方

ねぐらもるくーうくひすそなく
つきかすむーにひたまくらのーあけかたのに

【李徳二年句】／何路【くまもなき】／
李徳二年句 3月11日～13日

一時鳥

はねならはしのーうくひすそなく
さそれはむーはるをちさとのーあけかたのに

【池田句】／唐何【はなにあけて】／永
正7年（1510）年春以前＜永正5年春＞

またふるゆきーうくひすそなく
たけあめるとほどはまたきーあけかたのに

【永正年間百題35巻】／山家【ひとめさ
へ】／永正8年（1511）年11月3日

一花と朝ばらけ

あはれをそへてーうくひすそなく
あかすねーつきとはなとのーあさほうけ

【永禄元年句】／□□【さそふなよ】／
永禄元年（1558）年3月23日～25日

一谷の声

うくひすの中にきーーうくひすのこゑ
たなのはーあけてもおきーひのひかり

【永正年間百題57巻】／□□【ともなし
に】／永正18年（1590）年11月21日

一谷の声

うくひすの中にきーーうくひすのこゑ
たなのはーあけてもおきーひのひかり
うぐいす

【文禄年間百餘 12 卷】／□□【けさのまに】／文禄 2(1593) 年 1 月 14 日

→朝ばけ

かけ口みやまの－うくひすのこゑ
あさはらけ－かずむかだより－しもとけて
【元亀二年千句】／方路【はなにつきに】
／元亀(1571) 年 3 月 5 日

はかせもゆるき－うくひすのこゑ
こすのとは－さえさえはる－あさばけ
【天文年間百餘 38 卷】／何人【うつせょに】／天文 21(1552) 年 2 月 23 日

→霞む朝までき

よそにうつろふ－うくひすのこゑ
なかめわひぬ－かすむのかみの－あさまたち
【永正年間百餘 34 卷】／白何【さきたれや】
／千句第五／永正 15(1518) 年 5 月 14 日

ほのかにきぬる－うくひすのこゑ
やまのはの－かすみよふかき－あさまたち
【大永四年月正千二百鈔】／□□【ゆふたちは】／月正千二百鈔／大永 4(1524) 年 6 月 23 日

いつくかねくら－うくひすのこゑ
あさまたき－けふのさちか－かすむらむ
【文明十五年千句 11 卷】／二字返音【はなはの】／文明 15(1483) 年 *月 *日～
３月 2 日

→霞む

なれてひさしき－うくひすのこゑ
くれたけの－かげつひろに－うちかすみ
【文亀廿四年千句】／何木【つみそへよ】
／文亀 24(1555) 年正月 7 日

いまこそなけな－うくひすのこゑ
すゑなひく－ひとむたらけの－うちかすみ
【文明十四年句 5 2 卷】／二字反音【まつうきて】／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～
９月 14 日

かきねをしたふ－うくひすのこゑ
のきはさへ－はるけきみね－うちかすみ
【天正四年句 7 0 卷】／何路【やまかはも】／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7月 19 日

→秋に梅咲く

すのうちなく－うくひすのこゑ
まつにはふ－みなみのえた－うめさきて
【至徳以前百餘 7 卷】／何所【ちりねるか】
／至徳 4(1387) 年以前

かすみならす－うくひすのこゑ
しもはかつ きえしかたえた－うめさきて
【天文年間百餘 38 卷】／何人【こよひまつ】／天文 20(1551) 年 9 月 12 日

やとからさひし－うくひすのこゑ
あさちふに－ひともとたてる－うめさきて
【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476) 年 5 月頃

→霞みつつ

わかやとはぬ－うくひすのこゑ
かすみつつ－ありあげのころ－やまにて
【聖親千句】／初何【きのふより】／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

いつちこつたふ－うくひすのこゑ
かすみつつ－しものしつくの－おとはして
【成立不詳・宗徳以前 15 卷】／何人【やまみつば】／成立時不詳

→霞む野

うめかかれたや－うくひすのこゑ
なくさめ－あれたるむらも－かすむのに
【明応年間百餘 22 卷】／何人【たますたれ】／明応 5(1496) 年 6 月 7 日

うめかかとる－うくひすのこゑ
しもかふかき－あげたとはみ－かすむのに
【天文年間百餘 38 卷】／何船【あさかほに】／天文 12(1543) 年 7 月 29 日

→霞む

はるまたさむき－うくひすのこゑ
たにのとや－けきはかりに－かすむらむ
うぐいす

【伊予千句】／山河［やとりとへ］／天文6(1537)年5月22日

いくつかねくらーうくひすのこゑ
あさまたきーけふのきちくーかすむらむ

【文明十五年句百11巻】／二字讃音［は
なはほの］／文明15(1483)年*月*日～
3月2日

のこりおはかるーうくひすのこゑ
のへやなほーくれゆくままにーかすむらむ

【文禄二年句百10巻】／山河［まつとし
る］／文禄2(1593)年4月8日～10日

→そんとなく降る

やなきやうきねーうくひすのこゑ
そことなくーかすみなたびーあくるよに

【文禄年間百錦38巻】／朝何［ままたき
く］／天文9(1540)年4月25日

はねうちかはずーうくひすのこゑ
そことなくーかすむのもせーむらすすめ

【天文四句万句70巻】／初何［そくてち
か］／天文4(1576)年5月6日～7月19日

→水絶え絶え

やまかけたふーうくひすのこゑ
たけをゆくーさとのかけみつーたえたえに

【熊野句百】／何船［のとがなる］／文正
元(1466)年3月以前

のきはにちかきーうくひすのこゑ
こほりつーくーほのはやみつーたえたえに

【弘治三年春雪句百】／何木［はななれて］
／弘治3(1557)年正月7日～9日

→春残る

ききてやすらふーうくひすのこゑ
あけほのやーはるゆくひとにーのころらむ

【秋津洲千句】／唐何［うめかかの］／天
文15(1546)年8月25日

はなちるさのーうくひすのこゑ
はるやたーたけひとむらにーのころらむ

【天文四年句万70巻】／何風［ふちなみ
に］／天文4(1576)年5月6日～7月19日

→時鳥

したひもてゆくーうくひすのこゑ
きかはやまーよひとすのーほとときす

【羽柴千句】／朝何［よもにふく］／天文
6(1578)年5月18・19日

またほのかなるーうくひすのこゑ
なつきでもーいかにつれなさーほとときす

【文禄年間百錦12巻】／□□［おかたけ
を］／文禄2(1593)年5月20日

なかぬほとまつーうくひすのこゑ
なつちかきーみやまのさとのーほとときす

【天文四句万句70巻】／何鳥［かせにし
るき］／天文4(1576)年5月6日～7月
19日

→雪消える

けさのちかきーうくひすのこゑ
やまかすむーかけにきのふーゆききて

【美濃千句】／何船［ひとうつつ］／文明
4(1473)年12月16日～21日

かりねやまはーうくひすのこゑ
はらひゆーたもとにはるのーゆききて

【天文四句万句24巻】／何人［むえつく］
／天文24(1555)年正月7日

かすみのうのーうくひすのこゑ
ありあげのーつにつにうちろーゆききて

【文禄年間百錦38巻】／何人［かせみえ
て］／千句第四／天文13(1545)年閏11月
25日

→夜半の月

かすむあしたのーうくひすのこゑ
のとかもーねやのとをしきーよはのつき

【天文四句万句】／山河［うなひき］
／天文24(1555)年正月7日

あくれはちかきーうくひすのこゑ
まきのとのーそもはうすきーよはのつき
うすい

【天正年間百韻 57 韻】／何木 [ひとつつ] ／裏白／天正 18(1590) 年 1 月 3 日

→春の野

たれすきかての－うくひすのこえ
はるのに－こころもみゆる－ごまとて
【永正年間百韻 34 韻】／何木 [うらかせの] ／永正 14(1517) 年 6 月

たつねてゆかむ－うくひすのこえ
たれとなく－いへゆかしき－はるのに
【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正 2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

野辺近い鶯

→雪の竹の末々

のへちかき－やとのうくひす－ねをたえて
ゆきをれふかき－たけのすふすす
【永禄年間百韻 28 韻】／何木 [うたふよの] ／永禄 5(1563) 年 12 月 9 日

のへちかき－にはのうくひす－こゑそひて
ゆきのとけゆく－たけのすふすす
【天正年間百韻 57 韻】／何木 [いろもかも] ／裏白／天正 14(1586) 年 1 月 3 日

うける

懸壺に受ける水

→ここかしこ

かけひにうくる－みつのまにまに
ここかしこ－いのはさまも－ううるたに
【夜叉千句】／□□ ［ちりうせぬ］／
かけひにうくる－おほかはののみつ
ここかしこ－なかれのすゑが－いせのうみ
【天正四年方詠 70 韻】／下何 [むらさきの] ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日〜7 月 19 日

うた

うたのしならな
歌の品々

→花の木の下

あはれにも－うたのしなしな－よみかはし
しるもしらぬも－はなのもと
【慶長年間百韻 27 韻】／□□ ［はるもこそ］／裏白／慶長 13(1608) 年 1 月 3 日

すちかへす－うたのしなしな－たたならす
いつれとめつる－はなのもと
【元和年間百韻 24 韻】／□□ ［さほひめや］／元和 6(1620) 年 1 月 24 日

心争う歌

心争うの歌

→驚の声々

こころあらそふ－うたのくちち
はるされは－うくひすかはつ－こゑこゑ
【初瀬千句】／何木 [はりけるとら] ／元和元・2(1452) 年、4 月

こころあらそふ－うたのかたちまけ
こゑこゑに－なくうひすを－こにいれて
【文明十四年方詠 52 韻】／何木 ［あけてのみむ］／文明 14(1482) 年 7 月 4 日〜9 月 14 日
うち

雨の内

一山時鳥

つれつれは一なほまさりゆく一あめのうち
おとつれてしへやまほとときす

【元和年間百選 24 巻】/ 月日 [としとしに] / 元和 6(1620) 年 12 月 5 日

しつかに一うちがらへへーあめのうち
くもあるまとの一やまほとときす

【宗長関係 8 種】/ 老耳/ 天理本 /

内の雪

一銀の浮舟

もるともに一ひともわけりーうちのゆき
よるへはいつくーなみのうきふね

【春間日記紙背 50 卷】/ 月日 [うのはな
の] / 応永 30(1423) 年 4 月 4 日

あとみするーしのひかよのーうちのゆき
ことにくいるーなみのうきふね

【春間日記紙背 50 卷】/ 月日 [かみにう
め] / 応永 31(1424) 年 2 月 25 日

さすやのうちのみずのみなみ

霞の内の水の水上

一言問う

かすみのうちのーみつのみなみ
こととはむーいつくかはるーみつのときは

【天文年間百選 38 卷】/ 月日 [はなのい
ろ] / 天文 14(1545) 年 2 月 25 日

かすみにおつるーみつのみなみ
はるくるーうちのしはふねーこととはむ

【行助関係 4 種】/ 行助句集/ 書陵郡本 /
文正元 (1466) 年 (7 月 16 日)

くさのとみうち

草の戸の内

一待ちびる

ひとりねつらしーくさのとのうち
うちすさかーこころもかたきーまちわひて

【新撰苑続詞集/ 実隆本】/ 志下/ 明応
4(1495) 年 9 月 26 日

うち

五月雨の内

→時鳥

かけはしいつこーさみたれのうち
ひこくるは一むをもとたるーほとときす

【永禄年間百選 28 卷】/ 月日 [あとふ
を] / 永禄 3(1560) 年 11 月 9 日

とふひとまれの一さみたれのうち
ゆめにしーおとつれてなけーほとときす

【文禄二年千句 10 卷】/ 月日 [あめかし
た] / 文禄 2(1593) 年 4 月 8 日~10 日

柴の戸の内

一思う

すめはのとけいーしはのとのうち
ならはしのーみをなとつらくーおもふるむ

【三島千句】/ 月日 [とりのねは] / 文明
3(1471) 年 3 月 21 日~23 日

なほたちかへーしのはのとのうち
みをすてはーいつくもとならーおもふるむ

【展慶第四/ 早稲田大学本】/ 志下/ 永正
6, 7 年

ただ夢の内

→まどろむ

おとつれぬるやーたゆめのうち
つきよしーとはまちつるもーまどろみて

【永禄年間百選 28 卷】/ 月日 [ひきう
る] / 裏/ 永禄 5(1562) 年 1 月 3 日

ひかりのかけはーたゆめのうち
ともしひのーふくろもしらすーまどろみて

【行助関係 4 種】/ 行助句集/ 書陵郡本 /

古宮の内

→燕

すがたとしてふるみやのうち
つはくらめーいるのきーひまし

【壁草/ 大阪天満宮文庫本】/ 志下/ 永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後 3 年 3 月以前
うつのやま

ある日あるとき

うつのやまあひみるひとも—なみたてれて
ふゆはかくれぬ—つたのしたみち

【文明十四年万精52巻】／和何【ゆきなんち】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

宇津の山越え

つきましたまようふ—うつのやまこえ
しもはらふみのゆつて—あきのかせ

【延徳年間百錦1巻】／和何【さけはさく】／千曲第三／延徳4(1492)年3月3日

宇津の山越え

打ち返す笛

うわばやし

うわばやし—すたのものがなれ—あめはれて
をりをえかほ—かはつなくなり

【天文十七年千文句】／和人【みしろは】／天文18(1549)年正月11日

うわばやし—そのあたは—さびしきに
ときもずれず—かはつなくなり
うつる

うつるもてゆく

→ 起き出てる

うつりもてゆく--あきのかなしさ
いまこむと--なくさめつつも--おきいてて
【文禄大間百載 2 卷】/ 田所 [たさかはま]
文禄 2 (1593) 年 5 月 27 日

うつりもてゆく--そてのつきかけ
つゆをしく--かりののへを--おきいてて
【文明十四年間四巻 2 卷】/ 戸田 [とゆやくせさ]
文明 14 (1482) 年 7 月 4 日-9 月 14 日

うつる

→ 明の月

ひのかけは--かたへのやまに--うつろひて
けさまだすすし--ありけののき
【弘治三年春陽千句】/ 何田 [とくひひの]
弘治 3 (1557) 年正月 7 日-9 日

さまさまの--あきのくさきも--うつろひて
こころふかは--ありけののき
【春夢草/ 菅原佐本】/ 秋 / 永正 12 (1516)年 / 13 年

うつる

→ 秋の風

ここはうつろふ--いねかでのこる
しをするよ--みにいまよりの--あきのかせ
【延徳間年三冊 1 卷】/ 夢想 [むよしふ]
延徳 2 (1490) 年 9 月

ここはうつろふ--ふるるあのには
とふひとも--あらぬすみかの--あきのかせ
【天文間年三冊 5 卷】/ 何方 [わけかへ]
天文 9 (1581) 年 4 月 1 日

うつる

→ 袖の移り香

のこりもふかき--そてのうつりか
ふきずして--のののま--るすげくさ

【元亀三年春冊】/ 未木 [たきなみの]
元亀 3 (1574) 年 3 月 5 日

なにはかなしや--そてのうつりか
あやめくさ--かるよとは--あげまさら

【始元年十冊】/ 田所 [たさかはま]
天文 4 (1576) 年 5 月 6 日-7 月 19 日

→ お面

これぞかたみの--そてのうつりか
おもかけは--てにもたまるす--またきえて
【美濃千冊】/ 何草 [いくつにて]
文明 4(1473) 年 12 月 16 日-21 日

わかれしみみか--そてのうつりか
おもかけは--かなかかたちき--なこりにて
【天文間年百載 3 卷】/ 何人 [にはへかつ]
天文 13 (1544) 年 1 月 29 日

わすれむものか--そてのうつりか
おもかけば--くれしみものころ--きくのあき
【天文間年百載 5 卷】/ 何船 [みちみち]
天文 13 (1585) 年 5 月 27 日

→ 形見

また□□□□□--そてのうつりか
ありあけは--あふ□□□□の--かたみにて
【春風間年記番 5 卷】/ 何方 [なつかげ]
応永 26 (1419) 年 3 月 29 日

きゆるものを--そてのうつりか
たまくらは--みはなたれぬ--かたみにて
【天文間年百載 3 卷】/ □□ [しかそなく]
天文 24 (1555) 年 9 月 19 日

→ 傘

ともにやとまる--そてのうつりか
たちはは--むかしのつまの--ゆかりにて
【春風間年記番 5 卷】/ 何人 [まちかし]
応永 32 (1425) 年 6 月 25 日

ちきりはかなき--そてのうつりか
たちはは--かけたにみえす--くつのに
【天文間年百載 7 卷】/ 何方 [まつなか]
天文 4 (1576) 年 5 月 6 日-7 月 19 日
うのはな

卯の花

→多摩川の浪

うのはなのはかれるかきはやったわむらを
ゆふかけちかしたまかははのなみ

【称名院流年数総句】／何人 [せめてなし]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

うのはなのはかれるかきはやったわむらを
ゆふかけちかしたまかははのなみ

【称名院流年数総句】／何人 [せめてなし]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

うみ

春の海面

→長鬱

かりもかへるなはるのうみつら
のとかかるなしごのをちにやまをみて

【文明年間百額 34 巻】／何人 [やまはつ
き]／文明 18(1486) 年 2 月 6 日

まつみえわたるはるのうみつら
のとかかるなみうかはぬふねもなし

【文明年間百額 22 巻】／何人 [やまはゆ
き]／文応 7(1498) 年 11 月 4 日

うめ

梅咲く

→驚の声

いつはともがわかりにまちしうめさきて
ほかにきぬるうくひすのこゑ

【大永四年月並両百額】／□[ゆふた
ちば]／月並両百額／大永 4(1524) 年 6
月 23 日

わかなつむのがなつかしみうめさきて
ふりにしあとにうくひすのこゑ

【成立不詳・宗兼以前 8 巻】／山何 [ひと
こゑや]／成立時不詳

梅の香

→驚の声

うめかかのうめすゑにをしきたもとかな
きてやすらふうくひすのこゑ

【秋津州の句】／唐何 [うめかかの]／天
文 15(1546) 年 8 月 25 日

うめかかのうめすゑふきとけあさあらし
ゆきにこぼれるうくひすのこゑ
春を知る

梅の香する

→ 日影

袖の梅の香

うめのひとも

梅の一本

紅の梅

うめ

【例解不詳・奈良以前 15 巻】／何人 [う

めかかの] ／成立時不詳

うめかかや—うたたけのはかに—にはねらむ

ににはにりくる—うくひすのこゑ

【実年間古二 の 20 巻】／何船 [ときな

ま] ／実年 6(1465) 年 12 月 14 日

うめかかや—そのよのそてに—のこるらむ

わけのたがした—うくひすのこゑ

【心証関係 10 卷】／芝草內岩橋／本能寺本

→ 春を知る

うめかかの—まへわたりする—たますたれ

よふかくおきて—はるそらるる

【天文年間古陸 3 8 卷】／x x [ちりうせ

ぬ] ／天文 19(1550) 年 2 月 17 日

うめかかの—そてよりほかに—うつりきて

かすみのおくも—はるそらるる

【天文年間古陸 3 8 卷】／何木 [しるるる

か] ／天文 19(1550) 年 8 月 25 日


to をらまほしき—うめかかそする

そこなく—かすむあけほの—おきいてて

【明応年間古陸 2 2 卷】／何船 [はなそは

る] ／明応 2(1493) 年 3 月 25 日

たちえはかすむ—うめかかそする

はるのよは—またあけぶより—おきいてて

【天文年間古陸 5 7 卷】／□□ [きわく

や] ／天文 18(1590) 年 10 月 8 日

しはののきはも—うめかかそする

ひかけさす—ゆきやしつくに—のこらむ

【伊勢十事】／何所 [たかための] ／大水

2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

とほそひらけは—うめかかそする

ひかけさす—のきはのつらら—けさとして

【永禄年間古陸 2 8 卷】／何人 [つきなか

ら] ／永禄 5(1562) 年 8 月 11 日

さきそめにけむ—うめののひとと

うくひすの—うちはふくくる—そののうち

【五引きし日千句】／何木 [としのうちに]

/ 天正 9(1581) 年 11 月 19 日

やつれてにほふ—うめののひとと

うくひすの—いくはるとなき—ところおいて

【大水三年月並千三百面】／□□ [やまいい

くへ] ／月並千三百面／大水 3(1523) 年 8

月 23 日

こしききなかの—うめののひとと

うくひすの—うちはふきたる—ところすなり

【天文年間古陸 5 7 卷】／初河 [はるたち

て] ／暮白／天正 12(1584) 年 1 月 3 日

しろきかのの—くれなあのうめ

うくひすの—しもにあさひを—まちとりて

【大原野たか千句】／何船 [ときつつ]

/ 元亀 2(1571) 年 2 月 5 日～7 日

あかぬかなめや—くれなあのうめ

うくひすの—みきりはなれす—こゑはして

【元和年間古陸 2 4 卷】／□□ [やかった

の] ／元和 16(1620) 年 8 月 23 日

ゆきをやそむる—くれなあのうめ

うくひすの—のきはのみねに—なきそめて

【文明十四年万句 5 2 卷】／何木 [たまや

とる] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月

14 日

かすみもあへん—そてのうめかか

うくひすの—こゑもゆくゆく—とほきのに

【天文年間古陸 3 8 卷】／何人 [みれはみ

し] ／天文 13(1545) 年 12 月 25 日
もるかたは－そとへのうめかか
うくひすの－そともにうつる－こゑすなり
【永禄年間日記14巻】／丁鶴／長禄3(1560)年11月9日

句うぬ梅の香
→朝ばけ

とへとやつけし－ほふめかか
はるとし－あらてゆきふる－あさはばけ
【大永年間日記14巻】／丁鶴／長禄6(1526)年9月13日

宿の梅
→軒の後の声

ひとやいつ－はるのとひくる－やとのうめ
けさのきちかき－うくひすのこゑ
【長慶日記】／丁鶴／長慶4(1473)年12月16日～21日

ますのうぬ梅の香
→京

かこふにもるる－やとのうめかか
うくひすの－のへよりのへに－なきいてて
【五輪一日千句】／丁鶴／天正9(1581)年11月19日

宿の梅の香
→朝

なきひとしたヘ－やとのうめかか
うくひすの－なくねもたれを－しのふらむ
【大永三年春月並千三百額】／丁鶴／大永3(1523)年1月23日

うら
志賀の浦
→神宮

よくあかたの－しかのうらふね
かみまつり－もほすての－いさなひに
【天文十五年春日句】／丁鶴／天文15(1546)年正月11日

なみたにかすむ－しかのうらふね
たひとに－あくるやけの－かみまつり
【天智開府後4年】／丁鶴／天智開府後4年

須磨の浦
→浪此処許

ようすから－ときのかけのみ－すまのうら
なみここととに－□□□□□□のなる
【日記紀記當春50巻】／丁鶴／応永19(1414)年1月14日

うみつらの－かすみそめたる－すまのうら
なみここととに－おきしことき
【日記紀紀當春50巻】／丁鶴／応永30(1423)年3月29日

ほとかし－いぐたのはせ－すまのうら
なみここととに－よすととまやか
【文安十日句4巻】／丁鶴／文安3(1425)年

→妻訪う千鳥しば鳴

すまのうら－わひつおくる－あけくれに
つまとふちより－かせにしはなく
【弘治年間日記8巻】／丁鶴／弘治2(1556)年3月24日
すまのうらやあかつきかたのそろのつき
つまとふちとり一りきりにしはなく
【元亀三年間百巻6巻】/ 何人/【はなのはときも】/ 元亀4(1573)年6月6日

須磨の浦浪
→塩屋焼く煙
ふ年輕にあらきすまのうらは
もしひやくけふりにうみもかきれて
【景祐年千句/】/ 何人/【つきましたた】/ 文明8(1476)年3月6日〜8日

みのうきふしにすまのうらは
もしひやくけふりはあさなゆふなにて
【天正年間百巻5巻7巻/】/ 何路/【かすむよの】/ 天正6(1578)年2月18日

→淡路浦

ふねさとむるすまのうらは
あはちかたうしこのむかふせとみて
【宝徳四年千句/】/ 何人/【はなそころ】/ 宝徳4(1452)年3月12日

つきをみるよすまのうらは
あはちかたせとのあきかせみにみて
【永禄波波/広島大学本/】/ 秋上/ 文和5(1536)年冬〜翌年の春

住吉の浦
→淡路島

なみにはるたつすみよしのうら
あさみとりすみにうかふあはちしま
【大永四年月並千二百巻/】/ 何人/【そとしも】/ 月並千二百巻/ 大永4(1524)年10月23日

あくれはかすむすみよしのうら
つきもたたみるるはときあはちしま
【慶長年間百巻27巻/】/ 何人/【いなさまも】/ 慶長9(1604)年7月6日

なお須磨の浦
→友千鳥

うくともたへつたはすまのうら
うりをりつたえすことへつともちとり
【飯盛千句/】/ 何人/【かけすむし】/ 永禄4(1561)年5月27日〜29日

なれぬまほつもなはすまのうら
きくたもつへたたさそのともちとり
【天正9(1581)年11月19日

吹く風の浦風
→鳥の鳴き立つ
ふきまとはせるとみなのうらかせ
さよふかきうきねのとりの一なきたて
【大永三年月並千二百巻/】/ 何人/【はなにつき】/ 月並千二百巻/ 大永3(1523)年3月23日

ふきこそかはれるとみなのうらかせ
なかそにまざこのちとりなきたて
【元和年間百巻2巻4巻/】/ 何人/【まつふくや】/ 元和8(1622)年10月29日

うらなう
道の辻占
→待ち往びる
ききもさめぬめちのつしうら
はるかなるひとかへさをまちわひで
【永禄石山千句/】/ 何人/【わくらのは】/ 永禄7(1564)年5月12日

こひにまよへるめちのつしうら
まちわひてわれとはやとつもふみに
【文安頃千句4巻/】/ 何人/【なをおりて】/

うらむ
心悶みしい
→遠れなく見る
おもひたえよのこころうらめし
つれくはみえものからとにかくに
おい

老いの行く末

〜森林の下草〜

あるにまかする—おいのゆくすゑ
たねさへに—もりのしくさ—よもかれし
【寛正年間百題 20 巻】/ 何人【いはかね
に】/ 寛正 2(1461) 年 9 月 23 日

たのむもある—おいのゆくすゑ
ふゆかれた—もりのしくさ—はるまちて
【新撰英文渡集／実隆本】/ 冬 / 明応
4(1495) 年 9 月 26 日

おうさかのせき

〜嶺坂の関〜

きのふえにし—あふさかのせき
ひとこゑを—みやこのそらの—ほとんどき
【毛利千句】/ 何作【みとておもふ】/ 文
禄 3(1594) 年 5 月 12 日〜16 日

こよひかたむる—あふさかのせき
つきになく—おとはのやまの—ほとんどき
【名所句集／静嘉堂文庫本】/ 夏 / (大永
前後)

越える嶺坂の関

〜未熟れる〜

いつこえつらむ—あふさかのせき
しきくなる—なけきにくかみ—こかれて
【佐々木千句】/ 何作【つはかゆ】/ 大永
元 (1521) 年 11 月 1 日〜14 日

けふかそむる—あふさかのせき
すきのはに—いりひのかけの—こかれて
【文明十四年万仏記 52 卷】/ 何作【みと
tリか】/ 文明 14(1482) 年 7 月 4 日〜9 月
14 日

〜嶺坂の関〜

えだ

花の一枝

〜山桜〜

をするはゆるせーはなのひとえた
ひとをこそふとむるせきの—やまさくら
【文和千句】/ 何作【はにしかる】/ 文和
5 年

このかけものの—はなのひとえた
やまさくらしてをゆるすさーをりもたて
【専修関係 2 種】/ 壬 / 応仁元 (1467) 年
5 月 10 日

〜連なるを恨む〜

専義なやを畏め

〜春の月〜

つれにきを—さのみはかて—うらむらむ
あはてこよひも—ありあけのつきて
【文和千句】/ 何作【やまかせに】/ 文和
2(1470) 年正月 10 〜12 日

つれにきを—まつてつれにきや—うらむらむ
まつののはさはる—ありあけのつきて
【国唐第一／続群書類従本】/ 秋 / 長壽 2
年

人が恥めしい

〜詠〜

ふりはへてこぬ—ひとはうらめし
いつかたの—たよりにわれを—とひつらむ
【萱草／伊地知本】/ 風 / 文明 6(1474) 年
2 月以前

うはさかりぬる—ひとはうらめし
おはつかぬ—たかここにて—とひつらむ
【下野／龍谷大学本】/ 恋下 / 延徳 2(1490)
年〜3 年春頃
おうさかのやま
逢坂の山
→真葛

またもたのむ−あふさかのやま
さねかけつら−さねしぶきはに−なくさまで
【国産第二編／早稲田大学／左／永正 6、7
年

なはかりにやる−あふさかのやま
ちきりしは−いつかさぬこむ−さねかつら
【合点之書／神宮文庫本／鶴／天文
9(1541)年12月25日

越える逢坂の山
→部の春霞

こゆるぞつらき−あふさかのやま
へつなよ−かへりみやこの−はるすみ
【文安雪句句／何観『はほつもれ』／文
安2(1445)年10月18日

こゆるなこりや−あふさかのやま
みやこより−あらたまりゆく−はるすみ
【弘治三年春雪句句／何木『はなたれて』
／弘治3(1557)年正月7日〜9日

おおはら
おおはらつき
大原祭り
→春の宮人

おほらや−まつりのそと−あまたにて
みゆきことなる−はるのみやひと
【慶長年間百帳27巻】／□□『はるもこ
そ』／謹白／慶長13(1608)年1月3日

おほらや−あかみのもつりも−ちかつきて
はなをりかさす−はるのみやひと
【天正四年万帳70巻】／山口『みかつき
の』／天正4(1576)年5月6日〜7月19日

おか
岡邊の壇の一群
→夕日隠れ

をかへるこき−はのひとか
つゆやなほ−ゆふひかくれに−のころるむ
【出陣千句】／何観『はなさかり』／永正
元(1504)年10月25日〜27日

をかへにすひく−はのひとむら
うすきりの−ゆふひかくれに−もすなきて
【応仁年間百帳6巻】／何人『つきのあき』
／応仁2(1468)年1月1日

をかへにすひく−はのひとむら
うすきりの−ゆふひかくれに−もすなきて
【豊島／伊地知本／秋／文明6(1474)年
2月以前

おき
沖の白浪
→立山の秋

かせにまかずる−おきつしらなみ
たったやま−みねこのはに−あきくて
【壁草／大阪天満宮文庫本／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

しきれつはれつ−おきつしらなみ
たったやま−あきふかくなる−ほとみえて
【宗長関係8種】／壬生宛／書陵部本／

沖の釣舟
→波の上

かすみはかりの−おきのつりふね
やまのはは−ほのかにたにも−なみのうへ
【永正十花千句】／何木『かすたに』／
永正13(1516)年3月11日〜14日

のとかにうかふ−おきのつりふね
あけほのの一つをひたせる−なみのうへ
【慶長年間百帳27巻】／何人『わかさ
の』／慶長4(1599)年1月22日
おき

かずみにかふがーおきのつるふね
とふるもーそれあらぬかーなみのうへ
【天正四年万巻70巻】／字蔵録（わかくさ）／天正4(1576)年5月6日〜7月19日

沖の浪

→立田の山

はるかにもーからくそみゆるーおきつなみ
たったのやまのーよはのかよひち
【永正十花千句】／何人［かせのみみ］／
永正13(1516)年3月11日〜4月14日

ひとにさてーいかかたらむーおきつなみ
たったのやまのーあきのいろ
【老集／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃

おきのみね

沖の舟

→浦の朝明け

おきつぶねーのとけさみなーここきえて
つきになきるーうらのあさあげ
【太神宮楽楽千句】／薄何［まきのはや］
／長享2(1488)年7月

おきつぶねーつをともとやーいてぬらむ
あきかせさむきーうらのあさあげ
【文明十四年万巻52巻】／薄何［かるひとは］／文明14(1482)年7月4日〜9月14日

おき

かずみに風

→物思ふ項

をきにかせーほのかにしのふーゆふまれ
つきにもみえしーものもふるこ
【和越千句】／白何［はるかにし］／文明
2(1470)年正月10〜12日

をきにかせーくややはたさくくーはやなりて
つゆもかみのーものをもふるこ
【太神宮楽楽千句】／白何［つゆながら］
／長享2(1488)年7月

おきのうかふがー

→秋の夜

そよともすれはーをきのうはかせ
さらぬたーねさめかならーあきのよい
【葛松波集／広島大学本】／秋／文和
5(1536)年冬〜翌年の春

たまくらをかやーをきのうはかせ
つきしきくーむすはぬゆめのーあきのよい
【合点之句／神宮文庫本】／秋／文
9(1541)年12月25日

→古里

ゆめにうるむーをきのうはかせ
みしはみなーふるさとひとのーあつもうし
【長享年間百録6巻】／何人［ゆきながら］
／長享2(1488)年1月22日

かりもくなりーをきのうはかせ
たかあきとーふるさとひとのーまたるらむ
【天文年間百録38巻】／何人［あきかほに］／天文12(1543)年7月29日

→思う

ひとはおとせすーをきのうはかせ
あきやきてーわかふるさとーおもふらむ
【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

そてをそはらふーをきのうはかせ
いかてかはーさてもたぬをーおもふらむ
【那智箋／北野天満宮本】／永正十二年

→古里

そふらやうらみーをきのうはかせ
ひまもしくーのきはくすはふーふるさとに
【永正年間百録34巻】／何路［あきにかせ］／永正8(1511)年7月14日

おもひたゆまぬーをきのうはかせ
もとあらのーこはきうつろふーふるさとに
【合点之句／神宮文庫本】／独吟百録／天
文9(1541)年12月25日
おく

奥山の隠
→打折破けて
こころのほかの－おくやまのかけ
まつのとに－はたはぬゆきもうちとけて
【秋津洲千句】／何人 [しかのねに]／天文 15(1546) 年 8 月 25 日
さらといではまた－おくやまのかけ
うちとけて－なかぬみやこのほとつす
【濃重第一／神類備圖従本】／夏／長享 2 年

み吉野の奥
→影を取る
くもはいくへそ－みよしののおく
たつねつる－はなになやすらふ－かけくて
【看間日記紙背 50 卷】／何物 [かみとう め]／応永 29(1422) 年 2 月 25 日
さとのほかなる－みよしののおく
かへらじよ－たつねるはなの－かけくて
【看間日記紙背 50 卷】／何船 [ゆきにみ て]／応永 32(1426) 年 11 月 25 日

→花を見る
みをすつへくは－みよしののおく
わかやと－たつねのみこし－はなをみて
【壁草／書陵部本】／春／永正 9 年

おくる

山の奥
→峰の松風
すみわひぬ－いつらとしぶる－やまのおく
ともときく－みねのまつかせ
【延徳年間百題 16 卷】／夢想 [もののお はて]／延徳元 (1489) 年 9 月 27 日
やまのおく－さひしくても－いてはせし
こころすてふけ－みねのまつかせ
【大永年間百題 1 卷】／何路 [いつのよう]／大永 5(1525) 年 4 月 15 日

おくる

送る
→春の霧
いくくにを－すくるもつきや－おくるらむ
きたにたびたつ－はるのかりかね
【享徳二年千句】／何何 [ここもひく]／ 享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日
ふるさとに－とけとふみや－おくるらむ
なこりになきぬ－はるのかりかね
【文明十四年万句 52 卷】／何何 [つきひ とつ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9月 14 日

袖を取る風
→玉鋏
いりにしほとの－みよしののおく
しるへする－あさへたゆる－はなをみて
【壁草／書陵部本】／春／永正 9 年

そてふきおくる－みねのこからし
たまほこの－すゑはゆふも－さえさえて
おぐるま
おぐるまの音
→夕顔
めくらすみちのをくるまのとき
ゆふかほのはなのかきほにさとくきて
【享徳二年旬詠／何人【つきたたか】／享徳2(1453)年8月11日～13日】
わかれをつくるをくるまのとき
ゆふかほのはやととりそめのちきりにて
【看日日記紙背545卷／何家【まつしひら】／応永31(1424)年3月18日】
おしき
偽しむ
→秋の初風
をしむともいつへともしらずはるくれて
なみたをいそくときあきのはつかせ
【文明年間年記34卷／何路【やまかせに】／文明15(1483)年3月2日】
をしむともきぬきぬさそなあまつかり
つきはこのころあきのはつかせ
【享禄年間百討8卷／通善【あきのこゑ】／享禄5(1532)年7月29日】
おしけみって花を見る
→袖の梅の音
みなひとのをしむによらぬはなをみて
をりてかへはそとのでうめかか
【貞応记文5巻／何路【しをりきに】／永禄4(1561)年5月27日～29日】
おそい
→松の藤浪
したふとやはさきへのはなのそそぐら
なつをかけたるまつのはないなみ
【渡間千文／何木【したふとや】／永正11(1514)年5月13日～19日】
やよらべきのこるもさびしおそぐら
はるらやかべよまつのはないなみ
【看日日記紙背545卷／山何【やよらべきのこるもさびし】／応永31(1424)年3月18日】
おそぐらなほこたかてはまをしぃ
なまちたるまつのはないなみ
【文安年間百討1卷／夢想【おそぐら】／文安2(1445)年3月18日】
おだまき
→さきら
いかにおもひへしつのをたまき
いにしへのなみたにまざるあきはきぬ
おちこち

霞む遠近

→急ぐ雁

あさとあくれは—かすむむをちこち
はるのよを—いくつらかりの—いそくらむ

【大永四年四月長二兼言】／何色［うめの
はな］／月并及二兼言／大永 4(1524) 年 1
月 23 日

わくるのはらの—かすむむをちこち
あさかりや—とりのにてして—いそくらむ

【元和四年観念 2 四巻】／□□［まつふく
や］／元和 8(1622) 年 10 月 29 日

野辺の遠近

→現れる

いろになりたる—のへのをちこち
たちはへは—まつさへはなに—あらはれて

【天正四年観念 5 七巻】／初代［はるたち
dて］／義表現／天正 12(1584) 年 1 月 3 日

かすむたものとの—ののをちこち
たまほこの—みちはゆきなに—あらはれて

【天正四年観念 5 七巻】／□□［けふひく
や］／天正 12(1584) 年 1 月 10 日

おちる

落ちる天つ雁

→月の出潮

あまつかり—ふかるるかせに—なきおちて
あしはくらき—つりのいてしば

【三間日記病怪 5 9 巻】／何母［あきかせ
の］／応弘 15(1408) 年 7 月 23 日

やまもときは—いりえにおつる—あまつかり
ゆふひにかふつ—つりのいてしば

【成否不詳・宗長以以前 5 巻】／□□［ち
らねより］／成否不詳

月落ちる

→秋の初霜

かきりある—とりもなくなく—つきおちて
そ中にみちゆく—あきのはつしも

【文安雪千句】／朝何［ゆきさそへ］／文
安 2(1445) 年 10 月 18 日

ひきつける—とやまのくもに—つきおちて
めくるのくはに—あきのはつしも

【伊予千句】／何人［たちはのは］／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

かけきよき—まさこののへに—つきおちて
ややさむからし—あきのはつしも

【天文十八年梅千句】／何峰［しつくさへ］
／天文 18(1549) 年正月 11 日

なきだおちる

→入らぬ

ゆふへのくもに—なみたおおけり
なかったなよ—そらにはおもふ—ひとつもなし

【新撰雑談集／実隆木】／慣中／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

あはれをしるる—なみたおおけり
ことわりを—うらむにうき—ひとつもなし

【長観・北野天謡宮本】／永正十三年／

→古箏

しあのものから—なみたおおけり
とふひとも—おもかけはる—ふるさとに

【弘治三年春雪千句】／薄何［そらにうし］
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

なこいかなく—なみたおおけり
ふるさとに—たまたかれぬる—ゆめさめて

【園表第三／続群書類従本】／辻下／文亀
元 (1501) 年 3 月 18 日
おと

力きない琴の音
→松風の月

なほゆふかけに～あかぬことのね
まつかせの－さそははつきは－おそからし
【秋津洲千句】／詩話【まつなくを】／天文 15(1546)年 8月 25日

あまたのうちに－あかぬことのね
まつかせの－ふきすさひたる－よのはつき
【文禄年間風景 1・2巻】／□□【はなのいらや】／文禄 4(1595)年 1月 30日

かわれをつくる－をくるまのおと
ゆふかほの－やかりそめの－ちきりにて
【新撰日記考定／室隆本】／おと／明応 4(1495)年 9月 26日

かえる鳥の音

かすみのうちに－かへるとりのね
まよひゆる－はるのやまちの－くれわたり
【文楽年間風景 5・7巻】／詩話【まつひともものこり】／畏日／文楽 14(1586)年 1月 3日

かふト
川音

→月のさやけ

かはおとも－はるのはへのさは－かきくも
いりえくるる－つきのにやけさ
【法式音楽千句】／玉河【あきとほし】／長享 2(1488)年 7月

かはおとも－はるのにかせの－ふきおくり
せせにうつふおつかのさやけさ
【慶長年間風景 2・7巻】／□□【ねふかき
や】／慶長 4(1599)年 2月 8日

きぬたのおと
品の音

きぬたのおとは－むらのをもちこ
たまほこの－ゆるへもわかす－くれそめて
【破城千句】／初河【はなのこと】／（元亀 4)天正元(1573)年正月 9日～11日

きぬたのおとは－かせのまにに
たまほこの－ゆるへやきりの－へつらむ
【元亀年間風景 6巻】／詩話【むさしのも】／元亀 3(1572)年 3月 18日

来ないで音する

→驚
こすおとする－つゆのあをやき
うくひすの－はねうちはふき－あめすきてて
【永正十花千句】／何船 [ねぬるよを] ／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日
こすおとする－かせのとかなり
うくひすの－はさにもろき－はなちみて
【天文年間百編 13 巻】／山何 [つきやけ
さ] ／天文 21(1552) 年 7 月 26 日

近い川音

ふねたくすうふしん
きけはさむけき－さはみつのおと
ふねたくす－ふしみのつつきの－ふくくるも
【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476) 年 5 月頃
きけはさむけき－さはみつのおと
ふねたくす－ふしみのつつきの－ふくくるも
【心敬関係 10 種】／心敬僧都百句／岩瀬
文庫／文明 7(1475) 年 4 月 16 日以前
きけはさむけき－さはみつのおと
ふねたくす－ふしみのつつきの－ふくくるも
【名所句集／静嘉堂文庫本】／秋／（大永
前後）
つきもさひしき－さはみつのおと
ふねたくす－ひもふしみの－えをふけて
【心敬関係 10 種】／吾妻遅光祐／天理本
／

露の音聞く庭

つゆのおときく－にはのゆふか
たまれたの－きりのなこりや－はれさらむ
【伊勢千句】／何人 [ふかくいりて] ／大
永 2(1522) 年 8 月 4 日～8 日
つゆのおときく－にはのしたをき
たまられたの－そものときり－かたよりて
【天正年間百編 57 巻】／何船 [すまし
は] ／天正 13(1585) 年間 8 月 12 日

とまりふねおとしていはず

波まり舟音していずち

たっかたしるき－しきのはねおと
あかつきに－なりにけらし－あきのしみ
【名所句集】／〇〇 [つきのいも] ／
とほさかりぬ－しきのはねおと
よなよなに－つきてふりしく－あきのしみ
【慶長年間百編 27 巻】／〇〇 [あとをす
音に] ／裏白／慶長 15(1610) 年 1 月 3 日

春の物の音

ほるのものがお

ねぶしくすみの

しばしこない

うつばの月
おとずれる

→飘走の夜の月

ひくてもゆかしはるのものね

あけのをる－あられはりの－つきの光に

【住吉千百】／何田（このはたち）／大永

元（1521）年 11 月 1 日～14 日

しらへうらならぬ－はるのものは

しぜつさや－あられはりの－よはのつき

【元和年間百題 24 巻】／口口（そらにみつ）／元和 8（1622）年 10 月 19 日

水の音

→何処にある

うつみつる－たけはかけひの－みつのおと

いしまのこけは－つくるなるらむ

【天正年間百題 57 巻】／何人（ときはい

ま）／天正 16（1582）年 5 月 24 日

とめよはは－くりふれはまる－みつのおと

いつなるらむ－たきつですかいかみ

【慶長年間百題 27 巻】／口口（さきっか

む）／若白（慶長 19（1614）年 1 月 3 日

虫の音

→衣手の露

うたたねの－はしははちから－むしのねに

おほえしはる－ところもてのつゆ

【称名院周遊千句】／初何（しぶなよ

）／永禄 6（1633）年 12 月 14 日～18 日

むしのねに－むかしのあとの－こととひて

わけいるのへの－ころもてのつゆ

【緒崎千句】／花之何（うめかかは）／（元

亀）天正元（1573）年正月 9 日～11 日

気の秋

むしのねも－みだるつゆの－しぶきのに

とへははみたの－ふるさとのあき

【大永三年月並千三百題】／口口（うめか

かや）／月並千三百題／大永 3（1523）年 2

月 23 日

むしのねも－きえわたるよ－ありあげに

あはれなそへそ－ふるさとのあき

夜半の虫の音

→月に破綻

をさきかとの－よはのむしのね

ねられしな－つねにかふく－かれまくら

【寛永年間百題 20 巻】／何人（うめおおく

る）／寛永 6（1646）年 1 月 16 日

ところためぬ－よはのむしのね

さやかな－つねをみるみる－かれまくら

【大永年間百題 14 巻】／何人（ちあきを

も）／大永 5（1525）年 9 月 21 日

おとずれる

ひとのとる

人の訪れる

→琴散歩

いまはおもはし－ひととのおとれ

さくらるる－やまだかさなる－おくにして

【東山千句】／何色（しかのねは）／永正

15（1518）年 8 月 10 日～12 日

きのふはあり－ひととのおとれ

さくらるる－はるのやまさと－くれやられて

【新撰冨政歌集／実隆本】／春下／明応

4（1495）年 9 月 26 日

おとめ

天ご女

→雲の通い路

いかにして－あかるをとめむ－あまをとめ

かせはしらしくーものかよひと

【文明年間百題 3 4 巻】／何木（うめかか

を）／文明 15（1483）年 2 月 19 日

あらはれし－そのよはさそな－あまをとめ

あとにとはい－くものかよひと

【明応年間百題 22 巻】／何船（やなきふ

く）／明応 9（1500）年 7 月 6 日
おとろえる
衰える
→犬つっこ女子
あさかほのとのつなし間らびこおとろへて
さかりはとなりあまつをとめこ
【紫野千句】／何木「はにしめる」／延文
2(1357)年以後応安3年6月以前
つきははやめきのしくれにーおとろへて
みはたつゆのーあまつをとめこ
【成立不詳・宗期以前6巻】／唐何「なた
しこの」／成立不詳

おとわやま
風の音羽山
→逢阪の関
こののはふくーあらしのかせのーおとはやま
こえすはたれにーあふさかのせき
【鎮詣院会千句】／何田「さきくはせ」／
宝徳元(1449)年8月19日~21日
あたたにーふきくるかせのーおとはやま
あさびにむかふーあふさかのせき
【五営一白千句】／何田「いそなみ」／
天正9(1581)年11月19日
つきにふるーしつれやかせのーおとはやま
ちらぬもみにーあふさかのせき
【成立不詳・宗期以前15巻】／名所「つ
きにふる」／存疑／成立不詳

おなじ
筒じや
→まじや
おなしこころにーたのむはかなさ
よしやとてーまつすはひとりのーとひやせむ
【基佐集／静嘉堂文庫本】／恋／永正
6(1509)年以前
おなしこころにーおまはぬそうき
よしやとてーうらみすふれはーゆふまれく
【基佐集／静嘉堂文庫本】／恋／永正
6(1509)年以前

おのえ
尾上の花を見る
→霞に舞る
あすはみむーをのへのはなのーいかならむ
かすみにくるーたかまとのみや
【慶長六年百詠27巻】／□□「ゆきにし
も」／室白／慶長9(1604)年1月3日
くもとみしーをのへのはなのーあまともなし
かすみにくるーかねのさひしさ
【慶長六年百詠27巻】／□□「うめかか
は」／室白／慶長11(1606)年1月3日

おぶね
海人小舟
→荒磯の浪
うらかけてーはるかによるのーあまをふね
もしはひさひしーあらいそのなみ
【永正六年百詠34巻】／何船「かへるか
り」／永正16(1519)年2月19日
あけくれをーうきてのみこそーあまをふね
よるとかへるとーあらいそのなみ
【大永六年百詠4巻】／山何「いよまし
に」／大永5(1525)年1月17日
→わかつに見える神の島
なみのうへにーなかきひくらすーあまをふね
わつかにみゆるーおくつしまやま
【池田千句】／何人「はるのはな」／永正
7(1510)年春以前永正5年春
ゆふまれはーつてにといつーあまをふね
わつかにみゆるーおくのとほと
【嘉吉六年百詠1巻】／何木「たののはに」
／嘉吉3(1443)年10月23日

おぼえる
夜寒おぼえる
→唐衣
おみなえし

よさむおほるへひとのかたちひ
あはれみてはるるなかのへからも
【綾峨千句】／何木（ちへにみし）／（元
亀 4）天正元（1573）年正月 9 日～11 日
よさむおほるへかせのたえたえ
をちこにういちけてけりなへからも
【永禄年間百韻 28 巻】／懐田（はつゆきの）／永禄 6（1563）年 11 月 18 日

おぼろ

闇月夜

一長間の枕

おぼろつきにゆくそろもなき
のとかるよまくらやゆめをしたふるむ
【綾峨千句】／□□（みつのおもに）／
文明 14（1482）年 10 月前後
おぼろつきにうししくあきもやは
のとかなるまくらもとてあかしはて
【慶長年間百韻 27 巻】／□□（もじみは
え）／慶長 4（1599）年 6 月 18 日

時鳥の声

おぼろつきにゆめをのこして
ほとときすはるのまくらのひととこに
【細川亡友追千句】／何木（おとろけと）
／天文 24（1555）年 3 月 26 日～暦日
おぼろつきにうけのこるやま
ほとときすそれかいまやとこあすきて
【成立不詳・崇徳以前 5 巻】／何船（き
たにる）／成立時不詳

おもい

消えるなら消えるべき思い

一秋近く飛ぶ蜜

きえはきゆへきおもひならはや
みるもうしみをあきちかくへとふたる
【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8（1476）年 5 月頃
きえはきゆへきおもひならはや
はかなくも一みをあきちかくへとふたる
【論語 4 巻】／宗長／
おもう
思い返す
～小夜衣と夢

おもひかへは一なにをうらみむ
かたしを一ゆめやはしらぬ一さよろも

【延徳年間百撰 16 巻】／何路【かすみさへ】／延徳 4(1491) 年 1 月 22 日

おもひかへは一うきもののこらし
さよろも一ゆめをせめたのーちきりにて

【新撰死群波集／実隆本】／恋中／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

思い耐える
～連れない

おもひたえよーひとのこころか
つれなくは一やましいといはーとふもうし

【壁草／大東急記念文庫本】／恋上／永正
8(1512) 年 11 月 3 日～永正 9 年

おもひたえよーのーこころらめし
つれなくは一とみなえものからーとにかくに

【老萩／毛利本】／恋下／（文明 17(1485)
年 7 月 23 日頃）

思いの燃
～秋の暮れ

おもひのけふりーそれとたにみよ
ふねとるーひとのしほやのーあきのくれ

【老葉／書陵部宗証筆本】／秋／

おもひのけふりーふしはかりかは
つきさひーむろのやしほの一あきのくれ

【名所訳集／静嘉堂文庫本】／秋／（大永
前後）

思い事と月
～秋の又橘立

おもふことーなくてやつにーむかふらむ
あきにもあかぬーあまのはしたて

【寛永年間百撰 20 巻】／唐附【せみのはの】／寛永 4(1686) 年 6 月 23 日

おもふことーそれともわかぬーつきをみて
いつくのあきかーあまのはしたて

【大永三年年名並千三百撰】／□□（やまい
くへ）／月並千三百撰／大永 3(1523) 年 8
月 23 日

思い出
～心である

うきみともーよにしまかせてーおもふなよ
たたなにこともーこころなかりけり

【永禄年間百撰 28 巻】／何路【きえしその】／永禄 7(1564) 年 1 月 22 日

たりぬへーことをしさのみーおもふなよ
かたもよやしーこころなかりけり

【太慶第一／続群書類従本】／恋／長享 2
年

思い出人のの言葉
～彼のみ一人袖を撫でる

おもふてふーひとのことはーたののみなや
われのむひとりーそてはぬらしつ

【元禄波集／広島大学本】／恋上／文和
5(1536) 年冬一翌年の春

おもふてふーひとのことはーことならは
われのむひとりーそてはぬらさり

【元禄波集／広島大学本】／恋下／文和
5(1536) 年冬一翌年の春

思う古里
～旅の空

ふなちにいとーおもふふるさと
なくさめとーつきはさけびーたびのそら

【聖朝千句】／何木【きえぬか】／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

かへらむのみをーおもふふるさと
やとりをーたためぬまのーたびのそら

【文禄三年句撰 10 巻】／何船【あめかし
た】／文禄 3(1593) 年 4 月 8 日～10 日

何思
～世の中
くさのいぼりにーなにおもふらむ
ようのかにーかつつらふかそーはかなけれ
【崇徳法應風名】／何路『のところは』／
永禄 6(1561) 年 9 月 14 日・15 日

としれてのちをーなにおもふらむ
けさみしーゆふへははかるーよのなかに
【文明年間百頃 34 卷】／□□『ゆきのかけ』／文明 5(1473) 年 12 月 5 日

胸の思い
→我が夢

むねのおもひそーとふにきえぬる
わかみたーかさねておもつーいかかせむ
【弘治三年春雪風名】／何木『はなられて』
弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

わかみたーいくへのいろをーからこころも
【成立不詳・崇徳以降前 6 卷】／何人『みつつ
たまり』／成立時不詳

身を思う
→み吉野の美

あればあるーみともいつまてーおもふらむ
たえはやあとーみよしのおく
【浅間風名】／何何『たすたれ』／永正 11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

すつるみもーはるはみやこやーおもふらむ
かすめはとひーみよしのおく
【文明年間百頃 34 卷】／何船『かせかか
ぬ』／文明 9(1477) 年 1 月 22 日

物思う頃
→如何なる

ここくたけてーものもふころ
ひたすふひゆだてはむもーいかならぬ
【巻渡田風名】／□□『つげのごを』／文
明 14(1482) 年 10 月前後

つゆのみたれにーものもふころ
よしやとのーゆふへよあきよーいかならむ
【永正年間百頃 34 卷】／何人『みちすあ
れや』／永正 2(1505) 年 1 月 1 日

昔思うの
→秋は悲しい

むかしおもふーなみたにつきやーくもるらむ
いとねさめのーあきそかかなし
【成立不詳・崇徳以前 5 卷】／□□『またたま』／成立時不詳

むかしおもふーなみたもつゆもーそてのうへ
ひとのころのーあきそかかなし
【文徳年間百頃 1 2 卷】／□□『けさのま
に』／文徳 2(1593) 年 1 月 14 日

→草の庵

むかしおもふーこよびはなみたーもよほどて
くさのいぼりのーあふのさしひさ
【初編風名】／何人『なつやまに』／享徳
元・2(1452) 年、4 月

むかしおもふーなみたにかすむーよはのつき
くさのいぼりのーゆふくれのはる
【文明十四年風名 5 2 卷】／何木『あきの
ひも』／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

→春月

もののかなしきのーしもはらふこゑ
ねさめるとーあかつきつさのくさのいほ
【毛利風名】／何田『まなりも』／文徳
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

ふももにはーもののかなしきのーなき立てて
あかつきつさのーいつのさやけさ
ものこと

→春秋の空
ものごとこころのもとまるとしただけ
ゆくすえいかに―はるあきのそら

【文禄二年丁口 10 巻】／山形 [まつとし
る]／文禄 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日

物毎

→春秋の空
ものごとこころのもとまるとしただけ
ゆくすえいかに―はるあきのそら

【文禄二年丁口 10 巻】／山形 [まつとし
る]／文禄 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日

【文禄三年丁口 11 巻】／増田 [ますっちる
や]／文禄 3(1459) 年 12 月 2 日～5 日

ものまじしい

→声が聞こえる
つねならぬ―もしごのかけ―ものさびし
のりのふみよむ―をこそきこふる

【文禄三年丁口 11 巻】／増田 [ますっちる
や]／文禄 3(1459) 年 12 月 2 日～5 日

おもかげ

→秋の面影

【文禄三年丁口 11 巻】／増田 [ますっちる
や]／文禄 3(1459) 年 12 月 2 日～5 日

【文禄三年丁口 11 巻】／増田 [ますっちる
や]／文禄 3(1459) 年 12 月 2 日～5 日
おりおり

〜秋更新〜

つきにみよいの〜ひととのおもかけ
のこりなく〜よいきすかの上〜あきふけて
【永正十花千句】／何路 [ゆくつきも] ／
永正13年 3月11日〜14日

ぬきおくきぬの〜ひととのおもかけ
つきすめる〜よこのうらかぜ〜あきふけて
【春草／伊地知本】／秋 / 文明6(1474)年
2月以前

つきにみよいの〜ひととのおもかけ
のこれなく〜あさきすかの〜あきふけて
【那智薫／北野天満宮本】／永正13年／

〜歌める〜

まつとははるや〜ひととのおもかけ
うきをたた〜ここよとしはし〜なくさきて
【天文年間百部 38卷】／朝阿 [たまでき]
天文9年(1540) 四月25日

わずれむとすれば〜ひととのおもかけ
あはぬまも〜ありつるみと〜なくさきて
【老楽／吉川本】／春下／文明13(1481)年
夏頃

〜遠〜

わずれもやらぬ〜ひととのおもかけ
うらみをは〜いはぬにもしあ〜なみたにて
【着聞日記紙背500卷】／唐阿 [としひり
て] ／応永 24(1417)年 11月23日

あさきからの〜ひととのおもかけ
つゆはた〜ゆふへのおとす〜なみたにて
【竹林抄／新古典文学大系本】／秋 / 文明
8(1476)年 5月頃

おりおり

〜風の折々〜

ーなる

このしたつゆは〜かせのをりをり
しかのねや〜こはきかいろと〜なりぬらむ
【紹巴父方善千句】／何人 [なきあとは]
天文24(1555)年 3月26日〜晦日

たもをしびる〜かせのをりをり
おとつれも〜いまやうらみと〜なりぬらむ
【天正四年万句700番】／初何 [そてちか
か] ／天正4(1576)年 5月6日〜7月19日

おれる

くさはのところぬ〜ゆきのしたをれ
のわきせし〜にはのつきかけ〜よるさえて
【新撰五行泊集／実隆本】／秋下／明応
4(1495)年 9月26日

くさはのところぬ〜ゆきのしたをれ
のわきせし〜にはをしかに〜つきふけて
【下草／金子本】／秋 / 近徳 4(1492)年頃

おろか

〜おろかに〜

愚かな心

〜思い初め〜

おろかなる〜こころのすえも〜いかにせむ
おもはぬものを〜おもひそめつつ
【紹巴父方善千句】／何船 [すみそめの]
天文24(1555)年 3月26日〜晦日

おろかなる〜こころよりこそ〜まよひつけ
つれなきひとを〜おもひそめつつ
【義雄泊集／広島大学本】／恋上／文和
5(1536)年冬〜翌年の春

おゆめのこけ

〜夢の面影〜

〜床の上の〜

うつつはかりの〜ゆめのかおかげ
まくらかも〜あかてまたの〜とこのうへ
【称名院弘善千句】／何路 [いかるたの]
永禄6(1563)年 12月14日〜18日

つきをなこりの〜ゆめのかおかげ
ふたりねしあとすさまきし〜とこのうへ
【毛利千句】／初何 [よともとに] ／文禄
3(1594)年 5月12日〜16日
か

梅の香

→鶯の声

うめかかの一こすえにをしき一たもとかな
ききてやすらふーくひすのこゑ

【秋津多千句】／唐何 [うめかかの] ／天文 15(1546) 年 8 月 25 日

うめかかの一かすみふきとけ一あさあらし
ゆきにこほれる一うくひすのこゑ

【成立不詳・宗検以前 15 番】／何人 [う
めかかの] ／成立時不詳

うめかかやーすたれのほかにーにはふらむ
にはにいくりーうくひすのこゑ

【文正年間百韻 20 番】／何船 [とりぬ
む] ／文正 6(1466) 年 12 月 14 日

うめかかやーそのよのそこでーのころらむ
あけぼのしたーふーくひすのこゑ

【心歌関係 10 番】／芝草内岩橋／本能寺本

→春を知る

うめかかの一まへわりたりするーたますたれ
よふかおきてーはるそはるるる

【天文年間百韻 38 番】／xx [ちりうせ
ぬ] ／天文 19(1550) 年 2 月 17 日

うめかかの一そてよりほかにーうつりきて
かすみのおくもーはるそらるるる

【天文年間百韻 38 番】／何木 [しくるる
か] ／天文 19(1550) 年 8 月 25 日

梅の香がする

→起き出でる

たをらまほしきーうめかかそる
そことなくーかすむあけはおきいてて

【明応年間百韻 22 番】／何船 [はなそは
る] ／明応 2(1493) 年 3 月 25 日

たちえはかすむーうめかかそる
はるのはーまたあけぬよりーおきいてて

【文正年間百韻 57 番】／何船 [みちのち
ら] ／文正 15(1585) 年 5 月 27 日

かののきはもーうめかかそる
ひかけすーゆきやしつくにーのころらむ

【伊勢千句】／薄何 [たかための] ／大永
2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

とほそひらはーうめかかそる
ひかけすーのきはてのむらせ一けさとけて

【春禄年間百韻 28 番】／何人 [つきなか
ら] ／春禄 5(1562) 年 8 月 11 日

袖の移り香

→菖蒲草

のこりもふかきーそてのうつりか
ふきすでしーきのふのつまのーあやめくさ

【元亀二年千句】／何木 [たきなみの] ／
元亀 2(1571) 年 3 月 5 日

なにはかなしやーそてのうつりか
あやめくさーかくるよのはーあられまさり

【春間千句】／□□ [ときもよ] ／

→面影

これもかたみのーそてのうつりか
おもかけはーてにたまらすーまたきえて

【美濃千句】／何草 [いくにて] ／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

わかれしみかーそてのうつりか
おもかけはーかなかつらきーなこりにて

【天文年間百韻 38 番】／何人 [にほへか
つ] ／天文 13(1544) 年 1 月 29 日

わずれむものかーそてのうつりか
おもかけはーくしてものころーきのあき

【文正年間百韻 57 番】／何船 [みちのち
ら] ／文正 15(1585) 年 5 月 27 日

→形見

また□□□□□ーそてのうつりか
ありあけはーあふ□□□□□ーかたみにて
かえす

【看聞日記掲載 50 巻】／山河（なかかけよ）／応永 26(1419) 年 3 月 29 日

きゆるもをやそってのうつりか
たまくらは伴はをいたれぬかたみにて
【天文年間百録 38 巻】／××（しなけな
く）／天文 24(1555) 年 9 月 19 日

→ 梅

ともにやとまるそってのうつりか
たちははなをむかしのつまのゆかりにて
【看聞日記掲載 50 巻】／何人（まちゅ
かし）／応永 32(1425) 年 6 月 25 日

ちくりはかさなきそってのうつりか
たちははなをかけたにみえずくつるのに
【天正四年万脈 70 巻】／玉阿（まつはら
も）／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→ 番

かすみもあへぬそってのうめかか
うくひすのそこゑもゆくゆく－とほきのに
【天文年間百録 38 巻】／何人（みれはみ
し）／天文 13(1545) 年 12 月 25 日

もるかたちはそってのうめかか
うくひすのそとこにうつるこそすなり
【文禄年間百録 28 巻】／何船（ととふ
を）／文禄 3(1560) 年 11 月 9 日

→ 朝ばけ

とへとやつけしにほふうめかか
はるとしみあらてゆきふる－あさばけ
【文禄年間百録 14 巻】／何人（あきのつ
き）／文禄 5(1526) 年 9 月 13 日

こすくふかせに－にほふうめかか
いとさへこころうかる－あさばけ
【天正四年万脈 70 巻】／何路（ちととの
み）／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→ 木隠れる

はなうちかをりとりのなくこゑ
さくうめにうすみかのかたけの一かれて
【文明十四年万脈 52 巻】／初何（をるそ
くて）／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

はなうちかをりのはかすみつつ
ゆふくよくうめさくやまにーこかれて
【合点之句／神宮文庫本】／奉／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

宿の梅の香

→ 番

かこふにもるる－やとのうめかか
うくひすののへよりのへにーなきいてて
【五吟一日千句】／何舟（はなをさへ）／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

たえかれぬ－やとのうめかか
うくひすのーこそするつきやーあけぬらむ
【文禄三年月並千三録】／□□（はると
ふく）／月並千三録／文禄 3(1523) 年 1
月 23 日

なきひとしたへーやとのうめかか
うくひすのーなくねたをれーしのふらむ
【享禄年間百録 8 巻】／追参／あきのこゑ
／享禄 5(1532) 年 7 月 29 日

つほみにこる－やとのうめかか
うくひすのーかきほのゆきをーはらひきて
【寛永年間百録 15 巻】／□□（ののはる
を）／尾白／寛永 8(1631) 年 1 月 3 日

かえす

打ち返す田

→ 墨鳴く

うちかへずたのものなかれーあめはれて
をりをえかほにーかはつなくなり
【天文十八年広千句】／何人（みしろは
）／天文 18(1549) 年正月 11 日

花打ち香る
うちかへすこそのあらたはさひしきにときもわずゐせすかはつなくなり
【天文三四年髙千句】花之井【みかきの】天文24(1555)年正月7日

思い返す
→小夜衣と夢
おもひかへはなにをうらみむ
かたしくをゆめやしらぬさよころも
【延徳年間百錐16巻】何路【すみさへ】延徳4(1492)年1月22日
おもひかへはうきものこらし
さよろもゆめをされてのちきりにて
【新撰西原集/実隆本】恋中/明応4(1495)年9月26日

かえる
→帰に駒祝う声
→都人
ひくれてかへるこそまはふかを
あふさかを一つもこゆるやみやこひと
【大永年間百錐14巻】何人/【ゆきのうちに】大永5(1525)年1月25日
たかかへるさそもまはふかを
みやこひとうちむれはふのせきむかへ
【壁草/大阪天満宮文庫本】旅/永正2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

帰りを急ぐ
→極勢人
くもかへるやややゆふへをいそくらむ
しばもつひとのやすむかけはし
【表佐千句】何れ/【はなぞくも】文明8(1476)年3月6日<8日>
すらかへてかへるいちぢやいそくらむ
しばもつひとの一つまるようこ
【文明年間百錐34巻】/□□/【したつゆは】文明12(1480)年7月4日

帰る
→入相の郷
いくとかへましはおりへかへるらむ
いりあひのかなねのあのかさとさと
【伊勢千句】何田/【かすやてる】大永2(1522)年8月4日~8日
いほにすむひとやはやしにかへるらむ
いりあひのかなねのこるふでたら
【至徳以前百錐7巻】何所/【ちりぬか】至徳4(1387)年以前

→浦浪の音
よどまりのふねやほどなくかへるらむ
つきをもよするうらなみのおと
【至徳以前百錐7巻】何木/【みかきの】至徳4(1387)年以前
むかしややおもひいつるにかへるらむ
あとはなにはのうらなみのおと
【天文年間百錐38巻】何人/【うつせよいに】天文21(1552)年2月23日

→大淀の浪
まつのいろいくむかしにかへるらむ
うらさひしはおはよとのなみ
【宝徳四年千句】何船/【いそそふ】宝徳4(1452)年3月12日
わかみにやうらみはまたもかへるらむ
ままってふれはおはよとのなみ
【伊予千句】何路/【さみたれの】天文6(1537)年5月22日

→絶え絶え
なくとりもはるくれぬとやかへるらむ
たえたえになるのへのいとゆふ
【太神宮楽華千句】初何/【ほのめはく】長享2(1488)年7月
うくひすの一もとのためにやかへるらむ
なつやまちそえたえたえになる
【文安年間百錐9巻】山何/【はなはひも】文安5(1448)年2月5日
かえる

帰る雁
→現れる

かすはいくつぞーかへるかりかね
とはやまは－ゆきのころに－あられはて
【潮鏡記紙本50巻】／山川[ちよもみむ]／応永19(1412)年1月14日
こゑにしられて－かへるかりかね
とぼうの－ほにゆくふねは－あられはて
【潮鏡記紙本50巻】／何路[あききては]／応永27(1420)年7月25日

→古里

こゑはかりして－かへるかりかね
ふるさとは－たれすみすぎて－あられぬるむ
【潮鏡記紙本50巻】／何路[ゆきはなし]／応永25(1419)年12月22日
おのかひとつれ－かへるかりかね
ふるさとは－たかれここにも－あるものを
【新編潮鏡記集／広島大学文】／藤原／文和5(1356)年冬～翌年の春

→山桜

またはるそとや－かへるかりかね
ゆきかとよ－こしがしらねの－やまさくら
【潮鏡記紙本50巻】／唐何[いやとしに]／応永31(1424)年1月25日
こころつよくも－かへるかりかね
ちるまてる－たなかみさりしやまさくら
【新編潮鏡記集／実隆本】／雑／明応4(1495)年9月26日

帰る雁の声
→哀れを言う

ひとつらや－かへりおくくる－かりのこゑ
あはれをいは－わわたびのそて
【兼佐千句】／何年[はなはいる]／文明8(1476)年3月6日＜8日>
かへるさや－きぬにかはる－かりのこゑ
あはれをいは－はるのしののめ


帰る里人
→方

でのへを－ほみ－かへるさとひと
かねのこゑ－つゆきこえぬ－かたならむ
【出撰千句】／初何[けふたつや]／永正元(1504)年10月25日～27日
ふねひきすぎて－かへるさとひと
くれそむる－すみやふしみの－かたならむ
【元和年間百題24巻】／□□[えそすきぬ]／元和8(1622)年4月13日

帰る里人の道
→なる

あさたかひとの－かへるさのみち
かきくもり－そらやゆきにも－なりつらむ
【天文十八年検千句】／何船[つきにうめ]／天文18(1559)年正月11日
かすみこめたる－かへるさのみち
なみなや－おほろつきよと－なりつらむ
【文明十四年万句52巻】／山何[つゆやけさ]／文明14(1482)年7月4日～9月14日

帰る鳥の音
→暮れ渡る

かすみのうちに－かへるとりのね
まよひゆく－はるのやまちの－くれわたり
帰る古里

やとりさためすーかへるとりのね
てふとふーまかきのにのへーくれわたたり

【延徳年間百題 16 番】／何人 [うめいつこ]
／延徳元 (1489) 年 9 月 27 日

みちさへいつこーかへるふるさと
たまさかのーひとのゆききもーはるくて

【大水年間百題 14 番】／名号 [なつころも]
／大水 8(1528) 年 4 月 12 日

春の帰るさ

のくれやまくれーかへるふるさと
たひころもーはなのにしきをーかけにきて

【宗鄭関係 9 番】／宗鄭句／静嘉堂文庫

春の帰るさ

ひをするまにーかへるふるさと
はるさめにーぬれぬれかりのーたひころも

【出雲大社両宮文庫本】／春／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後開 3 年 3 月以前

捨てて帰る

→遠方の一村

さすふねもーつなきすててやーかへるらむ
ましはのみちはーをちのひとむら

【五時一日千句】／薄荷 [あけほのの] /
／天正 9(1581) 年 11 月 19 日

人帰る

→野辺の一村

ひとかへるーたけのしたみちーくれやって
たのもにつくーのへのひとむら

【永禄石山千句】／何路 [ときはきも] /
／永禄 7(1564) 年 5 月 12 日

誰帰る

→春暮れ

よもきになりぬーかへるふるさと
みつこしーはなの四四四ーはるくて

【延徳年間百題 16 番】／何人 [うめいつこ]
／延徳元 (1489) 年 9 月 27 日

春帰る

としとしのーはるはいつくにーかへるらむ
わかはのくすーのかかるるもれき

【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476) 年 5 月頃

はるはさてーいくとしとしかーかへるらむ
わかはのくすーのかかるるもれき

【専問関係 2 番】／法眼専問選歌／赤木文
庫本／応仁元 (1467) 年 5 月 10 日

かえる

→人帰る

わかいへいへにーたれかへるらむ
やまさくらーちるのものはーひともなし

【初詣十句】／何人 [なつやまに]／享徳
元・2(1452) 年 4 月

たれかへるらむーまつかけのさと
みちのへーかせはおとしてーひともなし

【文明年間百題 34 番】／何人 [よるはつき]
／文明 18(1486) 年 2 月 6 日
かかる

【天文年間百錦 38 巻】／山何 ［なややい
つけ］／天文 24(1555) 年 5 月 14 日

みやこのつきにおある
都の月に帰る

→草枕

みやこのつきに－たれかへるらむ
しらぬのに－ひとりつゆけき－くさまくら
【応仁年間百錦 6 巻】／x x ［そてにみな]／
応仁 2(1468) 年 10 月 22 日

みやこのつきに－われやかへるらむ
ゆめもみを－さそひてさめね－くさまくら
【宗長関係 8 種】／兼津宅／書陵祁本

かるる

徒と掛かり来る

→玉の緒の末

あたなりと－おもひながらも－かかりきて
いのらはちよも－たまのをのする
【天文年間百錦 38 巻】／山何 ［つきやけ
さ］／天文 21(1552) 年 7 月 26 日

ちかひとた－あたよながら－かかりきて
ひとひとひの－たまのをのする
【弘治年間百錦 8 巻】／何人 ［ときはなる]／
弘治 3(1557) 年 8 月 28 日

掛かる

→玉の緒の末

わかここ－ちちになれとや－かかるらむ
たえなむものの－たまのをのする
【天文十八年梅千句】／春何 ［ゆけほうめ]／
天文 18(1549) 年正月 11 日

かきりつったの－いなせに－かかるらむ
はかかりける－たまのをのする
【天文年間百錦 57 巻】／初何 ［すすしみ
を］／天文 2(1574) 年 6 月 10 日

掛かる藤浪

→田子の長き日

よそのこすゑに－かかるふちなみ
たこのうら－あひのみはも－なかききに
【看管日記紙背 50 巻】／何人 ［うめのな
の］／応永 30(1423) 年 5 月 27 日

まつにことさら－かかけるふちなみ
ひまもなき－たこのしほくみ－なかききに
【看管日記紙背 50 巻】／山何 ［あつさな
ほ］／応永 32(1425) 年閲 6 月 25 日

→霞む三笠山

あをはのころに－かかるふちなみ
あけにやり－かすみのひまに－みかざやま
【看管日記紙背 50 巻】／何人 ［はのひ
も］／応永 27(1420) 年閲 1 月 13 日

まつほのほのと－かかるふちなみ
かすみては－なはみねたかし－みかざやま
【看管日記紙背 50 巻】／何船 ［ことはな
に］／応永 31(1424) 年 9 月 27 日

掛橋

→松の一本

かけはしの－くちでなかはは－たえけらし
よこたはりたる－まつのひととも
【天文年間百錦 57 巻】／何垣 ［ゆくそて
に］／天文 11(1583) 年閲 1 月 1 日

かけはしの－ああ□□□かせの－ふきおくり
ここにかたふく－まつのひととも
【天文四年万句 70 巻】／一字露鍾 ［やま
のにに］／天文 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

雲かるる峰

→花盛り

みるかちより－くもかるるみね
はなさかり－かすみはるれは－あらはれて
【文禄年間百錦 12 巻】／□□ ［かなかつ
みし］／文禄 2(1593) 年 1 月 8 日

きゆるとみしも－くもかるるみね
かつらき－きさつつきへの－はなさかり
【文禄年間百錦 12 巻】／□□ ［うめかえ
や］／文禄 4(1595) 年 7 月 21 日
雲の掛橋

あきかせわたる－くものかけはし
かささきの－はさもはかす－あまのかは
【看関日記紙背 50巻】／何人／はなのはち／応永 27(1420) 年 1月 13 日

みるもすさましい－くものかけはし
かささきの－やまひとこゆる－ゆふしもに
【宗畑関係 2種】／宗畑百曲／大園本／

傍の掛橋

－霧はただ

たえたえなれや－そはのかけはし
しもはた－すふかうへ－あさほらけ
【永禄元年花千句】／□□［おりままに］
／永禄元 (1558) 年 3月 23日～25日

くちてあやうき－そばのかけはし
しもはた－ふるかうへ－かさなりて
【永禄元年花千句】／□□［たののこす］
／永禄元 (1558) 年 3月 23日～25日

道の掛橋

－雪の角

とほくみえぬ－みちのかけはし
とひよるも－ひとけまられる－てらのかと
【天正年間百額 5巻】／□□［まつなちぬ］
／天正 17(1589) 年 1月 4日

ゆきとけはつる－みちのかけはし
とひよるも－おくるものふかき－てらのかと
【慶長年間百額 2巻】／□□［ちりてきへ］／慶長 4(1599) 年 6月 18日

訪い寄る

とほくみえぬ－みちのかけはし
とひよるも－ひとけまられる－てらのかと
【天正年間百額 5巻】／□□［まつなちぬ］／天正 17(1589) 年 1月 4日

ゆきとけはつる－みちのかけはし
とひよるも－おくるものふかき－てらのかと

かき

かきねつたひの－をたのさひさ
かはそひ－しものしははしぶ－えてたえに
【節守千句】／何船／うゑうゑ／長享元 (1487) 年 10月 9日以下

かきねつたひと－みつみとりなり
もうるつる－かけのししく－たえに
【天文年間百額 3巻】／夢夢／ちりてなほ／天文 10(1541) 年 3月

かきのものとっぽ

垣の本葉
かくる

かく

かますの羽挿き

かく

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる

かえる
かけい
懸垂に受ける水
→ここかし
かけひにうくる—みつのまにに
ここかししぎいのはままも—うるるたに
【紙宮千句】／□□【ちうけぬ】／
かけひにうくる—おほかはのみつ
ここかししぎなれのすゑか—いせのうみ
【天正四年方句70巻】／下何［むらさきの］／天正4(1576)年5月6日～7月19日

かける
夏かけて
→岸の隅の花
なつかせて—ふちさくかはへ—ままたもみむ
なみにあらすな—きしごのはな
【熊野千句】／近田［おそさくら］／文正元(1466)年3月以前
さかりすくる—みでのやまふき—なつかせて
はやほろふる—きしごのはな
【寛文年間筆記2巻】／□□【つかしおもぶ】／寛文10(1670)年2月7日

かげ
青柳の陰
→花を見る
かせもかよはぬ—あをやきのかけ
けふもまた—なかきひくらし—はなをみて
【新撰花紙状集／実隆本】／春上／明応4(1495)年9月26日
しかしたりすむ—あをやきのかけ
あふひに—ととろせかはる—はなをみて
【宗長関係8種】／老耳／天理本／

朝日影
→海人の釣舟
かげ

をちかたのーまつにいさよふーあさひかけ
さしてそつるーあまのつりふね

【永正年間百選 34 巻】 何人（つきたはな
を）  永正 2(1505) 年 9 月 13 日

あさひかけーみつにみるるーうつろひて
ゆふしほまでのーあまのつりふね

【宗長関係書 8 種】  何人  天理本

火炎く影

→飛ぶ蜜

おなしみなとのーあしひたくかけ
うちみたれーるるかたよりーとふたたる

【天正年間百選 57 巻】  何人（あおやき
の）  天正 3(1575) 年 2 月 2 日

はなれこしまにーあしひたくかけ
とふたたるーゆくかたもなくーたよつて

【笠草／大阪天満宮文庫本】  夏／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

ありあけの影

→秋の影

あらしのあとーありあけのかけ
ききしよーかねさやかるーあきのよしに

【永正千句】  千何（ひととせは）  明応
9(1500) 年 7 月 17 日

ふねゆくつきやーありあけのかけ
すすしけーともなふさまのーあきのよしに

【弘治三年春雪千句】  千何（ゆきにうめ）
弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

きなすの影

→春の間

ほのめきわたるーいなつまのかけ
よびのまにーいつるつきこそーかすかね

【文安千句】  朝何（ひかりをも）  文
安 2(1445) 年 8 月 15 日

そたのめなるーいなつまのかけ
さりともーうちねなかったるーよひのまに

【延徳年間百選 16 巻】  千何（いろにこ
の）  千句第四／延徳元(1490) 年 12 月
26 日

入り日影

→里に入る見る

うつろふかーまつのはこしのーいりひかけ
すなみのさとにーひとかへるみゆ

【三島千句】  三島千句（いさよかせ）
文永 3(1471) 年 3 月 21 日～3 日

くれたけのーみとりのうへのーいりひかけ
たなかのさとにーひとかへるみゆ

【永正年間百選 34 巻】  何人（うらかせ
の）  永正 14(1517) 年 6 月

おくやまの影

→秋に解けて

ここらのほかのーおくやまのかけ
まつのときにーはらはねゆきもーうちとけて

【秋津洲千句】  千何（したのねに）  天
文 15(1546) 年 8 月 25 日

さりとはまーおくやまのかけ
うちとけてーなかぬみやこのーほとときす

【園僧第一／続続編附従本】  夏／長享 2
年

影かすか

→絶えず

はるのいりひのーかすかすかかなり
たえたえにーかねのひひきのーきこえて

【持名院定善千句】  一部（いもれ
て）  永禄 15(1653) 年 12 月 14 日～18 日

よをまつつきのーかすかすかかなり
たえたえにーたたひくきのーうすくもり

【天正年間百選 57 巻】  何人（たちそび
て）  天正 6(1578) 年 1 月 3 日

影暮れる

→五月の頃

はなれそのーまつはひときのーかけくて
なかれもふかしーみたれのこころ

【弘治三年春雪千句】  千舟（いきてたに）
弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日
ゆくみは－やまもともとに－かけくて
こりしくものの－さみてのころ

【享禄年間百館 8 巻／何人 [あさかすみ]
享禄 5(1532) 年 1 月 3 日

影高くなる
→凝ふ雲

しければやまそ－かけたかくなる
なつのより－くものうへまで－とふばたる
【熊野千句】／河池 [なみししぶ]／文正
元 (1466) 年 3 月以前

さはへのくさそ－かけたかくなる
ひとつつつ－やとりにいて－とふばたる
【国慶第／続群書類従本】／夏／長享 2

微かな影
→凝ふ雲

ともすひかりの－かすかなるかけ
あきかせや－くもはるかに－とふばたる
【大永四年月並千二百籍】／□□ [ゆふた
ちは]／月並千二百籍／大永 4(1524) 年 6
月 23 日

おぼろのつきの－かすかなるかけ
ひとつつつ－そににみてや－とふばたる
【文禄年間百館 2 4 巻】／□□ [むかしに
や]／文禄 5(1619) 年 7 月 24 日

仮寝の月影
→花打ち香る

かけすむ－かりねのつきの－あくるよに
はなうちをり－とりのなくこゑ
【文明十四年万句 5 2 巻／初何 [をるそ
てに]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9
月 14 日

かりねのつきの－かけさむきそら
わくるの－はなうちをり－すゑくて
【文禄年間万句 7 0 巻／何馬 [ふるつも
る]／文禄 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

かすかなりげる－もししのかけ
つねふねや－をのしもねを－めくるらむ
【慶長年間百館 2 7 巻／□□ [はるもこ
そ]／裏白／慶長 13(1608) 年 1 月 3 日

→秋萩と夕枕

つきてそまとの－ともししのかけ
あききぬと－はたるすくなき－ゆふまくれ
【延徳年間百館 1 6 巻／何節 [はるすき
ぬ]／延徳 4(1492) 年 4 月 8 日

きりのうちかる－ともししのかけ
あききさに－はたるのこる－ゆふまくれ
かげ

【文明十四年万句52巻】/何路 [あさうみに] /文明14(1482)年7月4日〜9月14日

闇の月影

→鮫鯨

ほのかたひし一ねやのつきたけ
うちしりり〜いまはあなたか一きりります
【伊勢千句】/三字中略 [うめさきて] /大永2(1522)年8月4日〜8日

よひすきぬらし一ねやのつきたけ
かたしきいの〜たもとにちかき一きりります
【大永三年月並千三百罫】/□□ [うめかかや] /月並千三百罫/大永3(1523)年2月23日

のこらやまげ

残る山影

→懐る

おほみのにしひ一ころやまかけ
みそれしだ一あととやくもは一かへるらむ
【永正年間百罫34巻】/何路 [うちなひき] /永正13(1516)年1月

ほのほのつきたの一ころやまかけ
のにてしこやまをこめ一かへるらむ
【天正四年万句70巻】/花鶴 [うくひの] /天正4(1576)年5月6日〜7月19日

花の陰

→鷹鷹山吹

ちるあとも一みずはうらみむ〜はのかけ
さくらのみやは一つつしだやまふき
【池田千句】/何路 [おぞくとく] /永正7(1510)年春前より永正5年春>

やまさと〜さもこそならめ〜はのかけ
みちもせきに一つつしだやまふき
【享禄年間百罫8巻】/懐田 [ゆふたちの] /享禄5(1532)年6月8日

→鳥の鯨

さきぬへき〜ころもちかつく〜はのかけ
かこふみきりの〜とりのさへつり
【元和年間百罫24巻】/□□ [かせにつつもり] /元和7(1622)年11月28日

このめさへ一またみえやらぬ〜はのかけ
はるのしるへ〜のとりのさへつり
【天正四年万句70巻】/何路 [いそふや] /天正4(1576)年5月6日〜7月19日

→鳥の一声

ひとかへる〜あとしかかる〜はのかけ
かすむゆふへの〜とりのひとこゑ
【石山四吟千句】/荷師 [ききやふね] /天文24(1555)年8月15日〜19日

ちるまでて〜おもふやまれの〜はのかけ
かへりつくして〜とりのひとこゑ
【享禄年間百罫8巻】/何路 [はるのいろ] /

→春の杯

くれぬれは一そてをかたく〜はのかけ
かへさわるる〜はるのさかつき
【慶長年間百罫27巻】/□□ [ねかきや]/慶長4(1599)年2月8日

いつれにか一まくらをからむ〜はのかけ
こころうかるる〜はるのさかつき
【寛永年間百罫15巻】/□□ [ききはみな] /

→山腹む春

ひとよを〜あかされてかへる〜はのかけ
まきたつみちに〜やまかすむくれ
【文明年間百罫34巻】/□□ [あきふけぬ] /文明12(1480)年9月28日

かりねして〜いろみほしき〜はのかけ
うちはたすのに〜やまかすむくれ
【明応年間百罫22巻】/何路 [つゆやにほひ] /明応5(1496)年8月5日

→み吉野の春

ゆきそふる〜それぞれきえなむ〜はのかけ
やまかせさひし〜みよしのはる
花の陰に安らう

かげ

→春の帰るさ

みるままにやすらふきのの—はなのかけ
おもねはほら。はるのかへるさ

【宝徳四年十月】／井田 [はなそころ]／
宝德 4(1452) 年 3 月 12 日

やすらへはときこそうつれ—はなのかけ
かねのつけこす—はるのかへるさ

【寛正六年十月】／井田 [ひととせに]／
寛正 5(1465) 年 12 月 9 日

光の影

→飛ぶ蝶

ひかりのかけをあはれとやみむ
いにしへのいかなるたまそ—とふぼたる

【文安元十年】／花之助 [ゆきふれは]／
文安 2(1445) 年 10 月 18 日

ひかりのかけををしもつてはや
くれわたるまあとよりをちに—とふぼたる

【成立不詳・他未訪】／井田 [こともの]／成立時不詳

人影もしない

→なる

まつとはすれ—ひとかけもす
たのめしや—そのゆふへに—なりぬらむ

【文安元十年】／花之助 [ゆきふれは]／
文安 2(1445) 年 10 月 18 日

まはきまともの一ひとかけもす
いつすみて—とほさをのと—なりぬらむ

【下草／東山御文庫本】／井田／明応
5(1496) 年 11 月 18 日
かさなる

→松風が吹く

そこなきーかねもすささしーやまのかけ
こえむをのへはーまつかせそふく

【三島千句】／朝闻 [やまとはく] ／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

つきもたーこころつくしのーやまのかけ
このはしくれてーまつかせそふく

【難波田千句】／□□ [はるのよ] ／文
明 14(1482) 年 10 月前後

すまれすはーたちもかへらむーやまのかけ
たきのひひきもーまつかせそふく

【蝦巴亡父追善千句】／何顔 [おとろけと] ／文
天 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

けふもまたーとるいるひのーやまのかけ
みちくらしによーまつかせそふく

【成立不詳・宗長以前 / 5 輯】／何船 [し
もしき] ／成立時不詳

→道の掛橋

のるこまをーしはしひかるーやまのかけ
すれるあやふきーみちのかけはし

【永禄年間百題 28 輯】／何船 [ひきう
る] ／裏白／永禄 5(1562) 年 1 月 3 日

あきふてーたれもかよはぬーやまのかけ
さとなれなるーみちのかけはし

【天正年間百題 5 7 輯】／□□ [あさなか
き] ／天正 15(1587) 年 1 月 3 日

かさなる

重なる山

→峰の雲

かさなるやまのーみちはとほくて
かくれるはーいつこらましーみねのくも

【諸尊法師頌 3 輯】／旧何 [あさまと] ／
建武 4(1337) 年 6 月 29 日

かさなるやまのーおくそしきつ
みよしのにーいるあとかせーみねのくも

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立 ( ) 年未詳

かしこい

賢い

→世が治まる

かしこいはーひとのこころのーかかみにて
うちまかするにーよそをさされ

【称名院追善千句】／一字龍顕 [くはれ
て] ／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日
かしこきはいかにたえせぬのりならぬ
とはきかたまて－よこそをされ

【慶長年間百巻 27巻】／□□ [かなつまち]／慶長 9(1604)年 7月 6日

かしこきもーなののみのころはーゆめなれや
むかしをしのふーことのはのみち

【表征句句】／何方 [よくやあめ]／文明
8(1476)年 3月 6日 < 8日>

かしこきもーえらぶときにやーいてぬらむ
ことのはのみちーいろいろになる

【明応年間百巻 22巻】／何人 [くもはれ
て]／明応 5(1496)年 8月 22日

かすか
影かすか

→絶え絶え
はるのいりひとのーかけかすかなり
たええてーかねのひひきのーきこえきて

【名称院覆善句句】／一字雑録 [くもはれ
て]／永禄 6(1563)年 12月 14日 ～ 18日

よをまつつきのーかけかすかなり
たええてーたなひくきのーうすくもり

【天正年間百巻 5巻】／何路 [たぢそひ
て]／天正 6(1578)年 1月 3日

かすみ

朝霞
→雲に有明の月
たなひけはーはやさえそるーあさかすみ
よこくもをしきーありあげのつき

【飯盛千句】／舟船 [ありあげや]／永禄
4(1561)年 5月 27日 ～ 29日

やまはりかーなふるゆきのーあさかすみ
こほりはくもーありあげのつき

【至徳以前百巻 7巻】／何人 [けふいくか]
千句四月／永禄 2(1382)年 1月 22日

かせゆるくーぶきるのへのーあさかすみ
くもみにのるーありあげのつき

【文明十五年句句 11巻】／何舟 [かべた
かし]／文明 15(1483)年 4月 10日 ～ 3月 2
日

かはかみのーあめになるべきーあさかすみ
たのにといつるーくひすのこゑ

【看聞日記記録 50巻】／山町 [あめはれ
て]／応永 30(1423)年 5月 25日

あさかすみーひとよのほどにーはるめて
ここをさそふーくひすのこゑ

【永禄年間百巻 28巻】／何人 [つきなか
ち]／永禄 5(1562)年 8月 11日

→月が残る
あさかすみーうついたるみつにーはれそめて
ふなりをとほーつきそのこれ

【文明十二年月記 34巻】／何人 [きえねよ
し]／文明 14(1482)年 2月 2日

あさかすみーのとかかるのにーうついてて
たひゆくそてーに一つそのこれ

【文明十二年月記 8巻】／何人 [ひとはさ
へ]／文明 12(1480)年 4月 10日 ～ 10日

→残る月影
かすみ

かりのなくし、しほのうらのあさあすみ
なみにうかびて、こころつきて

【新修愛知県史3巻】／旧所（あきまつと）
／扶桑（1467）年6月29日

あさあすみのにあり、やまにも一緒のはら
ゆくぞらと、はらのこころつきて

【文明年間百巻3巻】／旧所（うめか）
／文明15（1483）年2月19日

霞くみよる

→長さ日

いちのかべは、かすみくみよる
なかきひも、くくれたと、みわのさと

【慶長年間百巻2巻】／地方（ちひろあら）
／慶長4（1599）年5月10日

かすみくみよる
かすみくみ、かすみのさくらと

【慶長年間百巻2巻】／地方（よととき）
／裏白（慶長18（1613））年1月3日

霞こめる

→観東のない

やまちゆくゆく、かすみこめたり
おぼつか、くれぬかたのよふることり

【天文年間百巻3巻】／地方（くくなもの）
／天文24（1555）年正月7日

はなにさくら、かすみこめたり

【天文年間百巻3巻】／地方（したみつち）
／天文24（1555）年9月2日

→呉子島

やまちゆくゆく、かすみこめたり
おぼつか、くれぬかたのよふることり

【天文年間百巻3巻】／地方（くくなもの）
／天文24（1555）年正月7日

はなにさくら、かすみこめたり

【天文年間百巻3巻】／地方（したみつち）
／天文24（1555）年9月2日

→春の遠山

かすみより、つつきのゆふかけ、ほのかにて
ふなちにむかふ、はるのとはやま

【文華千句】／地方（かすみさ）／文明
4（1473）年12月16日～21日

かすみより、おきつしらなみ、うちでて
くもにあたる、はるのとはやま

【明応年間百巻2巻】／地方（あきのい
ろに）／明応9（1500）年7月11日

かすみつつ

【文華千句】／地方（かすみさ）／文明
4（1473）年12月16日～21日

かすみより、おきつしらなみ、うちでて
くもにあたる、はるのとはやま

【明応年間百巻2巻】／地方（あきのい
ろに）／明応9（1500）年7月11日
かすみ

霞にたどる道

かすみにたたるーいはのかけみち
よふことーなたてころーしるべへよう
【集事千句】／白井【ことらしを】／長享元（1487）年10月9日＜～11日＞
かすみにたどるーみちをちこち
よふことーこまるかたにひはくせて
【天文十八年梅千句】／青问【ゆけはうめ】
／天文18（1549）年正月11日

霞の内の水の水上

かすみのうしのみつのみなかみ
こととはむーいつくはるーみなかは
【天文年間百髪38番】／何人【はなのいろ】／天文14（1545）年2月25日
かすみにおけるーみつのみなかみ
はるくるーうちのはふねーこととはむ
【県行関係4種】／行助集／倉田本／
文正元（1466）年7月16日

かすみのそ

霞の底

かすみにくく

やまかくれーかすみのそこのーみちわけて
とくるこひにーかはつなくなり
【文明十二年千句8番】／宇都 rencontrer【わかはこ】／文明12（1480）年4月10日～

きこえつーかすみのそこのーみつのおと
かはつなくなりーはるふかきころ
【文明十四年千句52番】／山科【あきかせに】／文明14（1482）年7月4日～9月

かすみのひま

かすみにこもるーさとはふにき
うくひすのーつまとふへのーゆきのうち
【文安九千句】／何田【はなのもつ】／文安2（1445）年8月15日
かすみにこもるーかけのふるてら
うくひすのーのきはにきるーこきすなり
【成立不詳・崇安以前8番】／山闻【かせやる】／成立不詳

かすみにこもるーてらのさしいり
はるもたーけぶくれぬーかねのおと
【天正年間百髪57番】／□□【にふひくや】／天正12（1584）年1月10日
かすみにこもるーみねのまっかせ
かねのおとーほのかにはるのーひおおちて
【慶長年間百髪27番】／□□【ひめおさし】／慶長4（1599）年3月25日

かすみにこもるーみきりさひも
やまちかきーしつくのにるーはるのあめ
【天正年間百髪57番】／□□【すたれまげ】／天正15（1587）年1月10日
かすみにこもるーおくのふるてら
つねよりもーともしほしめるーはるのあめ
【元和年間百髪24番】／□□【ちのはるを】／寛永／元和4（1618）年1月3日

かすみのひまのーあささけのやま
はるあささーのかせやしもにーくもるらむ
かすみ

【永正年間百韻4巻】／山野 (くちてけり)／
永正12(1440)年10月16日
かすみのひまの一なかそらのゆき
はるあさきひかけやさずもうすからむ
【天正年間百韻57巻】／□□【ひきのこせ】／天正19(1591)年1月3日

霞より

かすみよう
一隠の白淡
かすみよりいつくのかねの一きゆらむ
くものひきかたきのしだより
【常陽千句】／何物 (きたさかの)／延文
2(1357)年以後応安3年6月以前
かすみより一へにみえたるやまさくら
を取りぬはなたたきのしだより
【麝香渡集／広島大学本】／春下／文和
5(1536)年冬〜翌年の春

霞む

一隠る隠淡
かすむらむ一はるのかはかせーやまおろし
ゆのひきより一おつるたきなみ
【天文十八年梅千句】／山野 (うめさけは)
／天文18(1549)年正月11日
はなのきや一それとしるしに一かすむらむ
おとさえはるに一おつるたきなみ
【天文廿四年梅千句】／何廸 (あさきりに)
／天文24(1555)年正月7日

一隠る隠
ありあげーなかそらたかくーかすまらむ
くもはるかに一かへるかやりう
【看聞日記紙枝50巻】／何人 (うめのな)
の／応永30(1423)年5月27日
こころさへーたなびかれてやーかすむらむ
みおくるままにーかへるかやりう
【成立不詳】(成順以前8巻)／朝何 (なひくよや)／成立不詳

一春風が吹く

霞む遠近

一隠る隠
あさとあくれーかすむをちち
はるのよーいつくらかのーいそくらむ
【大永四年五月正二千録】／何色 (うめのはな)／
月月正二千録／大永4(1524)年1月23日
わくるのはらのーかすむをちち
あさかりやーとりののにてーいそくらむ
【元和年間百韻24巻】／□□【まつふくや】／元和8(1622)年10月29日

霞む春の遠山

一隠る遠
かすみくれのーはるのとはやま
ありあげーのうちくもかけのーかりなきて
【看聞日記紙枝50巻】／山野 [まっそひて]／応永26(1419)年2月6日
かすみにこころーはるとのはやま
ありあげーののひかりのーさえかはり
【天正四年万方70巻】／何別 (かせにしるき)／天正4(1576)年5月6日〜7月
19日

霞む日

一隠る隠
かすむびーとしのこえぬーほをみて
ふりかさぬれーゆきのむらき
【素佐千句】／何年 (はないる)／文明
8(1476)年3月6日〜8日
はしたかのーをこしのとたちーかすむびに
いこまかたののーゆきのむらき

一雪の伝説

かすみ

【永正年間百韻1巻】／何人 [こえとほく]／
永正元(1505)年12月10日
みわたしーそらはいつよりーかすむらむ
やなきつるくーはるかせふ
【壁草／大阪天満宮文庫本】／雑上／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

かすみ

【親当関係 2 種】/ 親当句集/赤木文庫本

霞む山本

→水無瀬川

くるるまくさは－かすむやまのもと
ところせき－わたしかねたる－みなせかは

【平松文庫本千句】/ 咲いのよの

あらしののす－かすむやまのもと
ゆきてしま－とははやるの－みなせかは

【天文年間百類 38 冊】/ 月木 [やまかけ
て]/ 天文 21(1552)年 3月 11日

みれはほのかに－かすむやまのもと
はるのも－ありあげたる－みなせかは

【永禄年間百類 28 冊】/ 月人 [つつきか
ら]/ 永禄 5(1562)年 8月 11日

そこともみえす－かすむやまのもと
ほのかに－ありあげのこだる－みなせかは

【慶長年間百類 27 冊】/ 月人 [ののひし
て]/ 慶長 6(1601)年 1月 26日

月が霞む

→残る

さかののてらの－つきそかすめる
のとかるる－あらしのくもやーのころらむ

【初稿千句】/ 月木 [うのはな]/ 享徳
元・2(1452) 年 / 4月

あさとあくは－つきそかすめる
かやりたく－ねやにけふりやーのころらむ

【宗祇関係 2 種】/ 心専専願点宗祇付句 /

月が霞む夜

→雲居を掃う雁

ありあげの－つきやあられと－かすむよに
きせはくもみを－かへらるかりに

【永享年間百類 4 冊】/ 月和 [おまつは]
→万年玉頒 / 永享 9(1437)年 3月 21日

つきかけは－みえみえすみ－かすむよに
くもあたしたとり－かへらるかりに

【成立不詳・宗祇以前 6 冊】/ 〜 [うめな
れや]/ 成立不詳

横霞霧

→夢の浮橋

よこくもの－わかるるかたや－かすむらむ
よるちるは－るの－ゆめのうきはし

【熊野千句】/ 月路 [かさなるや]/ 文正
元(1466)年 3月以前

よこくもの－のこれるも－かすむに
さめてそばも－ゆめのうきはし

【文明十二年千句 8 冊】/ 月何 [まつにつす
る]/ 文明 12(1480)年 4月 10日～9日

風と朝霞

→出る日影

あさかすみ－ふきとくかせの－なほさえて
いつるひかけの－とるのさへつり

【享徳二年千句】/ 月木 [はきにつゆ]/ 享徳
2(1453)年 8月 11日～13日
かすむ

雨霧む暮れ

→春風

まさるみきはや－あめかすむくれ
はるかせの－ふねのはつきも－くちけらし

【天文年間百雑 57巻】／何人 [あおるやき
は] ／天文 13 (1585) 年 1 月 28 日

をのへのくもに－あめかすむくれ
はるかせの－よわるにほとき－かねのこゑ
【天文年間百雑 1巻】／何人 [こづのはく]
／永元 (1505) 年 12 月 10 日

→時鳥

ふるのをとほみ－あめかすむくれ
さたかに－いつかはなかむ－ほときす
【永原千句】／何木 [おとそなき] ／明応
9 (1500) 年 7 月 17 日

ふちかをりつつ－あめかすむくれ
はつところや－よびかなながら－ほときす
【平松文康本千句】／□□ [おちはして]

かず

数あたま

→如何ばかり

かずをあたまの－ふみもはかなし
いかはかり－さてもあたなる－ひとならむ
【永正十花千句】／唐何 [いろきえぬ]
／永正 13 (1516) 年 3 月 11 日～14 日

かずをあたまの－おもひくろしも
をくるまの－しずのはしかき－いかはかり
【天文四年万句 70巻】／何人 [しかのね
は] ／天文 4 (1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

数ならぬ

→秋の夕暮れ

かすならぬ－ちのうらみも－すておたた
そのかみよりの あきのゆふくれ

【毬波田千句】／□□ [あくるよを] ／文
明 14 (1482) 年 10 月頃後

かすならぬ－みのはいつとても－とれぬや
うらみはてそ－あきのゆふくれ
【成立不詳・宗祇以前 15巻】／何船 [は
なそあをは] ／成立時不明

→春が来た

かすならぬ－みのしろころも－そてぬれて
なきかみきくも－はるはきにけり
【聖観千句】／初何 [きのもるや] ／明応
3 (1494) 年 2 月 10 日～12 日

かすならぬ－かねにさける－うめのはな
ひととおとかす－はるはきにけり
【明応年間百雑 2 2巻】／何人 [くもはれ
て] ／明応 5 (1496) 年 8 月 22 日

かぜ

秋風

→衣打つ

しもよふ－とふさをのの－あきかせに
たれをりはて－ところもうつらむ
【太神宮楽楽千句】／山町 [ののははに]
／長享 2 (1488) 年 7 月

ひまみゆる－ねやのとほその－あきかせに
たかきたへの－ころもうつらむ
【大永四年月並千二百目】／□□ [そよと
しも] ／月並千二百目／大永 4 (1524) 年 10
月 23 日

→庭の月影

しつたへの－ころもてかれぬ－あきかせに
くもまそひゆく－にはのつきかけ
【天文年間百雑 3 8巻】／朝何 [またてき
く] ／天文 9 (1540) 年 4 月 25 日

あきかせに－つゆもたまらす－ちるこすゑ
あらなりぬ－ねにのはのつきけ
【文明四年万句 5 2巻】／何路 [ねしや
たれ] ／文明 14 (1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日
→野辺の虫の音
さとはあれてうふしまつふくーあきかせに
かきねのくさはーのへのむしのね
【篠原千句】／白木 [こうらをし] ／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日～11 日>
すすしさをーもとるそてのーあきかせに
いつれかいつれーのへのむしのね
【飯盛千句】／何人 [くみわすれ] ／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日

→初鶴の声
あきかせにーいさよほたるーほのかにて
いつのねさめかーはつかりのこゑ
【永正八年一品】／何木 [ひかたに] ／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日
むさしのやーさすらへきぬるーあきかせに
みやこもそなーはつかりのこゑ
【永正八年百首 34 巻】／山河 [たちはな
に] ／永正 18(1521) 年 5 月 7 日

→松虫の声
したつゆもーくさかくれなきーあきかせに
しれはなにかーまつむしのこゑ
【延徳八年百首 16 巻】／何路 [うめかか
の] ／延徳 4(1492) 年 1 月 23 日
あちきなくーこぬひとりうむーあきかせに
はふるさとのーまつむしのこゑ
【成立不詳・宗政前明 15 巻】／名号 [な
かふひと] ／成立時不詳
さとはあれてーひとこそとはねーあきのかせ
ゆふくれかまつむしのこゑ
【名宮院造善千句】／何路 [さかのやま]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日
しもかれてーくすはにかはるーあきのかせ
かけはいつこのーまつむしのこゑ
【天正八年百首 57 巻】／何船 [もしきく
さ] ／天正 7(1579) 年 1 月 13 日

→山の端の色

つくしろもーそらすみぬへきーあきかせに
しくれてつはるーやまのはのいろいろ
【元亀三年百首 6 巻】／何人 [ときめやけ]
／元亀 3(1572) 年 9 月 28 日
あきかせにーそらゆくもーやきえぬらむ
みるみるかはるーやまのはのいろいろ
【天正四年万首 70 巻】／唐何 [はなさけ
は] ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→古里の夕べ
かれをきまでもーあきかせのこゑ
ふるさとのーゆふへやつきをーまたすらむ
【紫野千句】／何木 [はにしきる] ／延文
2(1357) 年以後 応安 3 年 7 月以前
まつあるかたのーあきかせのこゑ
ふるさとのーゆふへやーうちかるらむ
【文明四年万首 52 巻】／夢想 [たにみ
つの] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

→後朝の後
もろともにーきくへかなしーあきのかせ
あさつゆおへーきぬきぬのあと
【東山千句】／薄何 [ゆふをいろ] ／永正
15(1518) 年 8 月 10 日～12 日
ひとりねーまくらわひしきーあきのかせ
つきにかねせーきぬきぬのあと
【天正八年百首 57 巻】／□□ [もとなし
に] ／天正 18(1590) 年 11 月 21 日

→衣打つ声
あきのかせーたけのはすふーそらふけて
ふしみをほみーころもうつこゑ
【慶元千句】／何路 [ゆくはたる] ／永正
11(1514) 年 5 月 13 日～19 日
すすしさもーきつまつほどのーあきのかせ
よびふけらしーころもうつこゑ
【永禄石山千句】／三宅学 [さこあまて]
／永禄 7(1564) 年 5 月 12 日
かぜ

一鷹の羽振る
あきのかせ－みやこのゆめを－さそふよみ
まくらさためぬ－しきのはねかき
【天文年間四編 38巻】／×× [かめにさす]／天文 21(1552)年 2月 20日
かたよっておとしてかよふ－あきのかせ
めますいはの－しきのはねかき
【慶長年間四編 2巻】／□□ [さきつかむ]／裏日／慶長 19(1614)年 1月 3日

一雪が寄れる
まったかし－いほりのう－の－あきのかせ
くさのとほは－つゆそこほるる
【文安月句千句】／何人 [おもかはり]／文安 2(1445)年 8月 15日
いまいよく－ははつうるふ－あきのかせ
たもとならば－つゆそこほるる
【秋津洲月句千句】／山町 [くもよまて]／天文 15(1546)年 8月 25日
ふるさの－つゆふへなりけり－あきのかせ
むしのねけし－つゆそこほるる
【大永四年年月並千二百冠】／□□ [へたつ
なよ]／月並千二百冠／大永 4(1524)年 3月 23日

一鷹から聞く江が眠るしい
かけもやや－つゆふひをおくる－あきのかせ
ふねからかく－なみはすさまし
【宗牧追善千句】／何路 [のころなは]／永禄 4(1561)年 9月 14日・15日
ゆめかへる－かりねのとこの－あきのかせ
ふねにきよの－なみはすさまし
【成立不詳・心敬以前14巻】／何人 [こ
のもとの]／成立時不詳

一鷹の声
ここよりや－たちていみの－あきのかせ
てるみなっくの－ひくらしのこゑ
【歳末千句】／山何 [ここよりや]／永正
11(1514)年 5月 13日～19日

すすしさや－やすらふままの－あきのかせ
またかけのころ－ひくらしのこゑ
【大永三年年月並千二百冠】／□□ [はなに
つき]／月並千二百冠／大永 3(1523)年 3月 23日
あつきは－かけよるつうの－あきのかせ
ころもてうす－ひくらしのこゑ
【延徳年間四編 16巻】／何人 [うすゆき
に]／延徳 3(1491)年 10月 20日
あきかせに－ひとむらさめの－そらはれて
やまちをゆけは－ひくらしのこゑ
【還有第四／早稲田大学本】／秋／永正 6、7
年

一枕にはわ
うたたねの－つうふけねはな－あきのかせ
まくらのいつこ－たきむしのね
【大永三年年月並千二百冠】／□□ [はると
ふく]／月並千二百冠／大永 3(1523)年 1月 23日
よひよひの－そてにしらる－あきのかせ
まくらのいつこ－ころもうつらむ
【大永四年年月並千二百冠】／□□ [としな
みの]／月並千二百冠／大永 4(1524)年 12
月 23日

一山の颪の月
あきのかせ－ほのしたをきの－よひふけて
ゆふへまたれし－やまのはつ
【永禄年間四編 28巻】／追善 [まれにと
ふ]／永禄元 (1558)年 11月 5日
たにははに－ほたるみたる－あきのかせ
くもやへたるしき－やまのはつ
【天正年間四編 57巻】／□□ [なつやま
は]／天正 17(1589)年 4月 26日

一さきどうにこ
きけはまだ－みねよりおつ－あきのかせ
みたるこのは－さをしかのこゑ
【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立 () 年末詳
秋風吹く

tokubee

秋風の声

tokubee


dsyoji

身にしみる

dsyoji
かぜ

このくれよりの－あきのあつさのこゑ
みにしみて－いくたのもりの－かけさひし
【宗長関係8種】／老耳／天理本／

秋の川風

→霧わたる

まよふやふ立ち－あきのかはかせ
きりわたる－やまとつつき－かすかにて
【永正年間百領34巻】／何人／ゆふつくよ／永正13(1516)年7月8日

なみにかけたつ－あきのはかせ
きりわたる－すゑののすき－むらむらに
【天文年間百領38巻】／何人／つきによると／天文5(1536)年6月15日

あきのはかせ

→月出る

にしよりむかふ－あきのはかせ
かみのま－かをかきよく－つきていて
【宝徳四年千頌】／何人／でそふ／宝徳4(1452)年3月12日

あかつきのき－あきのはかせ
きよからむ－かけのめかす－つきていて
【永正年間百領34巻】／何路／ひとはいさ／永正17(1520)年2月4日

ふなににおふ－あきのはかせ
くまもなく－なきたるまに－つきていて
【天文年間百領38巻】／朝方／またたきく／天文9(1540)年4月25日

→あふる

ふくとしもなき－あきのはかせ
ふくるまて－のころあつさに－はしらして
【慶長年間百領27巻】／□□／はるにまつ／裏白／慶長6(1601)年1月3日

おもし分けき－あきのはかせ
しはしたて－のころあつさに－はしらして
【慶長年間百領27巻】／□□／はるもこそ／裏白／慶長13(1608)年1月3日

→虫鳴く

たひつそらも－あきのはかせ
かへるさの－やまついさまはた－むしなきて
【永正年間百領34巻】／山何／まちこしだ／永正12(1515)年11月11日

ふきったへくる－あきのはかせ
このさとも－さなのからの－むしなきて
【成立不詳／宗長以前15巻】／何人／やまみつは／成立時不詳

→誘う

こすよりこそ－あきのはかせ
ひくらしに－まつむしのねや－さそふらむ
【住直千頌】／白何／あらねのみ／大永元(1521)年11月1日～14日

またこぬくれの－あきのはかせ
したはちる－やなぎかやを－さそふらむ
【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明8(1476)年5月頃

→夏

けふめつらしき－あきのはかせ
たなはたの－いかにまちみし－くれならむ
【大永四年月並千二百頌】／□□／うのはな／月並千二百頌／大永4(1524)年4月23日

またそつぬらす－あきのはかせ
たなはたの－まはほのうらみ－いかはかり
【新撰英仏選集／実隆本】／秋上／明応4(1495)年9月26日

→残る暑さに臨居する

→楽より

たえたえなり－あきのはかせ
ひとはより－のちはきことに－ちるをみて
【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明8(1476)年5月頃

このよをもふ－あきのはかせ
ひとはより－からきはおひの－ゆくへにて
【竹林抄／新古典文学大系本】／韓子／文明8(1476)年5月頃
かぜ

おさにうかぜ

→物語う頃

をきにかせーほのかにしのふーゆふまくれ
つきにもみえしーものおもふころ
【河越千句】／白何 [はるかせに] ／文明
2(1470)年正月 10~12 日

をきにかせーややはたさむくーはやなりて
つゆもわかみの一ものおもふころ
【太神宮法楽千句】／白何 [つゆながら]
／長孝 2(1468)年 7 月

かぜ

→古里

そふるやうらみーをきのうはかせ
ひまもなくーのきはくずはふーふるさとに
【永正年間百錦 34 卷】／何路 [あきにかせ]
／永正 8(1511)年 7 月 14 日

おもひたゆめぬーをきのうはかせ
もとあらのーこはきうつろふーふるさとに
【合点之句／神宮文庫本】／独吟百錦／天
文 9(1541)年 12 月 25 日

かぜ

→夕まくれ

そよのこととーをきのうはかせ
なかめつつーたちつつわふるーゆふまくれ
【伊予千句】／御何 [すすしきは] ／天文
6(1537)年 5 月 22 日

みもあへぬつゆにーをきのうはかせ
むらさめのーくもまにつきのーゆふまくれ
【那智騷／北野天満宮本】／永正十四年

かぜ

→風

風が凄まじい

→秋

いたまみえたるーかせはすさまじ
こえちかきーまくらのつきてーきりきり
【天文廿四年秋千句】／何船 [つきにうめ]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

よるのほそそのーかせはすさまじ
きりきりすーなきよるとこをーしきわびて
【諸家月次連歌抄／諸家月次連歌抄／成
立（）未詳

かぜ

→風

風が身にしみる

→秋

ひとはおとせすーをきのうはかせ
あきやきてーわかつるさとーおもふらむ
【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

そてをそはらふーをきのうはかせ
いかかはーさてもとはぬをーおもふらむ

【三島千句】／何木 [やまださに] ／文明
3(1471)年 3 月 21 日～23 日

よふかきやまのーかせそみにしむ
しくれぬーねさめはいかにーあきのそら
かぜ

風と朝霞

→出る日影

あさかすみふきとかせの－なほさえて
いつもひかけの－とりのきへつり

【和徳二年四月／司衛につゆ／
和徳 2(1453)年 8月 11日～13日
かせたて－はるのよしるし－あさかすみ
いつもひかけの－おぞやまほのは

【天平四年四月／三次中略／かせたて／
天平 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

風に吊る橋

→玉巻

かせのいつくかーにはふたちはな
ふききよを－しろてまきつる－たますたれ

【天文廿四年四月／山野 [みちひき]
天文 24(1555)年正月 7日
つゆるかせに－にはふたちはな
たますたれのきはのつきにーまきあけて

【新撰風致政集／文隆本／秋野／明応
4(1495)年 9月 26日

風に花散る

→春の夢

かせはなほーあをはにのはるーはならして
はるのゆめこそーことにつながれ

【看聞日記紙背 50巻／司衛 [のちゆり]
応永 28(1421)年 2月 25日
いつもふくーまつかせつらきーはならして
はるのゆめこそーやわたしめたぬれ

【成立不詳・崇祇以前 15巻 ／□□ [あら
らしにも]／存疑／成立時不詳

風の音羽山

→連彼の関

このはふくーあらしのかせの－おとはやま
こえはたれに－あふさかのせき

【鳥飼院会千句／河田 [あきくさは]
宝徳元(1449)年 8月 19日～21日

あたたかにふくさるかせの－おとはやま
あさひむかふーあふさかのせき

【五吟四月千句／何路 [いそのがた]
天正 9(1581)年 11月 19日
つきふるーしくれやかせの－おとはやま
ちるぬもみちに－あふさかのせき

【成立不詳・崇祇以前 15巻 ／名所 [つ
きふる]／存疑／成立時不詳

風の折々

→なる

このしたつゆはかせのをりをり
しかのねやーはきかいろーとおりぬらむ

【新撰風致政集／文隆本／秋野／明応
4(1495)年 9月 26日

風の静けさ

→切う

ふきまよひゆくーかせのしつけさ
うめのはなーたかさとまてかーにはふらむ

【大永三年五月並千三百籠／□□ [はなに
つき]／月並千三百籠／大永 3(1523)年 3
月 23日
すたれにふるーかせのしつけさ
ことのねもーたからもてにーにはふらむ

【大永三年五月並千三百籠／□□ [おた
まの]／月並千三百籠／大永 3(1523)年 12
月 23日

かせのすすしさ
風の涼しさ

→安らう

せつふくおくるーかせのすすしさ
たまほこのーゆくへにしはしーやらびに

【天正年間百戦 57巻 ／□□ [うめかえ
の]／嘉隆／天正 19(1591)年 1 月 3日

かぜ
かぜ

【元亀二年千句】／何袋・（ふるさとと）／元亀 2(1571) 年 3 月 5 日

つゆのたまちる－かせのまにまに

【文久元年直百選 22 首】／何人・（さそおる）／文久 13(1873) 年 7 月 28 日

風の村雨

→時雨

ふきおくらる－かせのむらさめ

【出陣千句】／何木・（しもなかた）／永正 元 (1504) 年 10 月 25 日～27 日

あっとよりふれる－かせのむらさめ

【塚草/続群書類従本】／夏／永正 3(1506) 年 3 月頃

風の行末

→植え置く

いかにてきもふるかせのゆくすゑ

【天正年間直百選 5 7 首】／何人・（おかくさ）／天正 11(1583) 年 1 月 10 日

のとかかりぬ－かせのゆくすゑ

【文禄二年直千句 10 首】／何木・（うすきりや）／文禄 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日

風見える

→初雁の声

はなすきり－なひくはかりに－かせみえて

【明応年間直百選 22 首】／何人・（ひかしほぶ）／本朝/明応5(1496) 年 1 月 9 日

むらさめに一つゆきふみたす－かせみえて

【新撰英語述集/実隆本】／秋上／明応 4(1495) 年 9 月 26 日

木枯しの風
かぜ

→秋の風
ふきもたゆまぬーこからしのかせ
ふえのねは－さそはれかへーをちこに
【天文廿四季歌千句】／何木 [つみそへよ]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

→壞凪く
たのめしあとは－たたあきのかせ
ひとふてのーたよりをまては－かきなきて
【大永三年月並千三百歌】／□□ [まつかせや]／月並千三百歌／大永 3(1523) 年 6
月 23 日

→秋の風
ただ松の風

→初時雨
ふりたるみは－たたまつのかせ
さひしあは－かみなきつきの－はつしくれ
【阿越千句】／何能 [やまかせに]／文明
2(1470) 年正月 10～12 日

→夏頃
あきのまくらは－たたまつのかせ
さをしかのーなくねにしるき－はつしくれ
【大永四年月並千二百歌】／□□ [けふひくや]／月並千二百歌／大永 4(1524) 年 5
月 23 日

→露吹く風

→虫鳴く
つゆふかは－にしよりぞたつ
みやきのーはなださかりは－むしなきて
【宝徳四年千句】／何能 [はなはもは]／
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

→夏頃
つゆふかは－すすのかりいほ
なつころもーひもくれたかたは－むしなきて
【永正年間百首詩 34 巻】／何能 [あひにあ
ひぬ]／永正 10(1513) 年 2 月 16 日

→夏頃
野分の風

→秋の風

→秋の風
すてふきおくる風

→夏
すてふきおくる－みねのかからし
たまほこのーすゑはゆふもーささえさて
【天文廿四季歌千句】／×× [あひにさす]／天文 21(1552) 年 2 月 20 日

→朱のぞの舟
のはなのはなかぜ
花の春風
→山桜

花の山風
→春になる

のはなのはなかぜ
花の春風
→山桜

うらみははてしーはなのやまかせ くれてもーまほうとまれぬーはるなれや
【大水三年月並千三百館】／□□ [ひとこ えや]／月並千三百館／大水 3(1523)年 4月 23日

はるかぜがふく
春風が吹く
→霞む

あしたのはらにーはるかせそふく
さしのはるーひもほのかにやーかすむらむ
【集守千句】／朝何 [しぐかげて]／長享元 (1487)年 10月 9日＜11日＞

かれしはやしもーはるかせさかふく
やまはけさーいくしもよにかーかすむらむ
【長享年間百顛 6 巻】／何人 [ゆきながら]
／長享 2(1488)年 1月 22日

吹く風に秋の露
→蝶の声

かせはまたーふかぬにつもーあきのつゆせみにましるやーひくらしのこえ
【平松文庫文千句】／□□ [なてしのこ]

まつにふくーかせのしたはのーあきのつゆ またかえうすきーひくらしのこえ
【大水三年月並千三百館】／□□ [しきれのあめ]／月並千三百館／大水 3(1523)年 10月 23日

吹く風に秋の露
→蝶の声

ふきまはれーなみのうらかせ
さよふかきーうきねのとりのーなきたちで
【大水三年月並千三百館】／□□ [はなに つき]／月並千三百館／大水 3(1523)年 3月 23日

ふきそかはれーなみのうらかせ
なかそにーまさこのちとりーなきたちで
【元和年間百顛 24 巻】／□□ [まつふくや]／元和 8(1622)年 10月 29日

まつすがくはく
松風が吹く
かぜ

→雲吹く

こえむをのへはーまつかせそふく
くれわたるーそらにひとむらーくもうきて
【三島千句】／朝倉 [やまとはく] ／文明 3(1471) 年 3月 21 日～23 日

→花散る

さひしきややまーまつかせのこゑ
みはすをーまちあへぬまのーはならちて
【天文年間百談 38 巻】／何木 [あすのな
たけ] ／天文 17(1548) 年 8月 14 日

→嘘

こえくるみねはーまつかせそふく
むらさめのーなごりにしはーくもうきて
【成立不詳・心経以前 14 巻】／何船 [はるはた] ／成立時不詳

松吹く風

→散る花

みちくるしょほーまつかせそふく
とまりてーふねやこころのーうかるらむ
【成立不詳・宗楽以前 15 巻】／何船 [しもさき] ／成立時不詳

こころもしらすーまつかせそふく
ゆふくれやーこけのしたにもーうかるらむ
【荘華／伊地知本】／錆／文明 6(1474) 年
2月以前

→願

あらうみきははーまつかせそふく
あまをふねーなとこのきをーたのむらむ
【三島千句】／山河 [うくひすの] ／文明 3(1471) 年 3月 21 日～23 日

蜂の秋風

→雁鳴く

こころもしらすーまつかせそふく
ふけいつるーつきはくもをーたのむらむ
【下草／金子本】／秋／延徳 4(1492) 年頃

まつかせのこゑ

松風の声

→月を見る

しつこころなさーまつかせのこゑ
つゆふかきーこはきがへのーつきをみて
【文安月千句】／何船 [つさはなを] ／文
安 2(1445) 年 8月 15 日

さやのまつかせ

→月を見る

つゆふかきーこはきがへのーつきをみて
【文安月千句】／何船 [つさはなを] ／文
安 2(1445) 年 8月 15 日

山の松風

→風の席

ふるさとよりのーやまのまつかせ
なかなかにーかこふそやさきーしはのいほ
【天神宮歌謡千句】／何人 [しかのねを] ／
長禄 2(1488) 年 7月

なれてもさひしきややまのまつかせ
たれきてかーこころとめむーしはのいほ
かた

秋の暮れ方
→初時雨

やまかけすこき→あきのくれかた
ふるよりもあほとんどみえける→はつれしく
【延徳間年度本 16 卷】／山何（ふきのこぬ）／延徳 2(1490) 年 9 月 20 日
をしまぬもやは→あきのくれかた
つゆはかり→さとひずわふる→はつれしく
【天文間年度本 3.8 卷】／何人（つきによる）／天文 5(1536) 年 6 月 15 日

明け方の空
→月は猶

あめすくるの→あけかたのそら
つきはなほ→おちてすすき→たまくらに
【応享/数知後本】／順／応享 6(1474) 年
2 月以前

→草枕

ふるさよりの→やまのまっつかせ
なかなかに→かこふそやすき→しはのいほと
【大神宮法楽千句】／何人（しかのねを）
／長享 2(1488) 年 7 月
なれつつすめる→やまのまっつかせ
なかなかに→こけのころもは→さむからて
【園慶第一／格群番略従本】／順／長享 2

夜半の秋風
→草枕

すからにさびし→ははのあきかせ
あくる→ははのにおそき→さまくら
【宮島千句】／山何（ことのはや）／天文
20(1551) 年 5 月 9 日～11 日
すさしおくる→よはのあきかせ
くさまくら→しきもさためぬ→いろにして
【五吟→日千句】／何人（はなをさへ）／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

かた

【明応年間四集 22 卷】／何人（ふきすて
よ）／明応 7(1498) 年間 10 月 6 日
いそのまくらの→あけかたのそら
つきはなほ→かたふくまに→かけすみて
【大永三年月並千集】／何人（はるは
た）／月並千本集／大永 3(1523) 年間
3 月 23 日

遠方の雲
→鳥鳴く

つきはほのめく→をちかたのくも
しくれせし→みねよりいつる→りなきて
【飯盛千句】／××（かけすし）／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日
ゆきをもよほす→をちかたのくも
そこなく→すはるののあした→りなきて
【明応年間四集 22 卷】／何人（あさかす
み）／明応 4(1495) 年 1 月 6 日

→一群

かはなみしろく→をちかたのくも
ひとむらの→たけのはわけの→よはあけて
【称名院追番千句】／何人（としのを）
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

くるるいろるる→をちかたのくも
ひとむらの→ははさらへて→とふかす
【永禄年間四集 28 卷】／何人（あちたま
の）／裏白／永禄 10(1567) 年 1 月 3 日

遠方の山

→わたの原

つきのひかりに→をちこちのやま
あけわたる→きのたえもの→わたのはら
【綿巴亡父追番千句】／何人（はなのかに）
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日
かねはかすみの→をちこちのやま
わたのはら→いづくのかたに→とまりふね
【五吟→日千句】／何人（としのにうち）
／天正 9(1581) 年 11 月 19 日

遠方人の袖
かたしく

→前

をちかたひとのぞいてほのかなり
よこくもやわかれしゆめをおくるらむ
【大永四年四月並千二百鯨一 UNDER】に【わけくる
らし】四月並千二百鯨一【大永 4(1524) 年 7
月 23 日
をちかたひとのぞいてまらさ
ほとときすなれもたひとやおくるらむ
【司馬騷／北野天満宮本】／永正十三年

おちのとおやま
遠方の遠山

→雁鳴く

みつけすみのぞをちのとほやま
わかれしもおなしゆくのぞひちなきて
【歌百首之絵巻千句文】／何人（【すみのぞの】
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～4月
あすやこえましをちのとほやま
わたしかぬふかきせうらにひちなきて
【心斎関係第10種】／吾藤／赤水文庫本／
文明 3(1471) 年秋
かたもまだんな
方も定めない

→葉

ふきかふかせは一かたもたます
とふばたるひつぎなきやみをしるしのへな
【嘉永三年四月元朝敬一】／何人（【したのはに】
／嘉吉 3(1443) 年 10 月 23 日
おくるふねは一かたもたます
もしもばくうはよけをしるしのへな
【享徳四年四月元朝敬二】／何路（【さくふちの】
／享徳 2(1453) 年 3 月 15 日

雲の遠方

→時雨れる

ゆふひみすく一しくものをちかた
いくたびか一つさまつしきの一しくるらむ
【応仁四年四月元朝敬一】／何人（【ときはきの】
／応仁元 (1467) 年 10 月 17 日
つきたかたく一しくものをちかた
わかれゆく一ぞしにやつゆの一しくるらむ
【応永三年四月元朝敬三】／何人（【ときはきの】
／応永三 (1473) 年 10 月 23 日

かたしく

→前

くもれゆく方

→帰る

くもれゆかたの一はるのしらくも
とりのねや一ほのかになりて一かへるらむ
【永禄三年四月元朝敬一】／山河（【ゆふかほ
に】／永禄 2(1559) 年 5 月 20 日
くもれゆかたの一やまきはのまち
つきにしもまちはてや一かへるらむ
【文禄三年四月元朝敬一】／何人（【はるのさ
の】／文禄 2(1593) 年 1 月 10 日

月の入方

→秋の空

あけなむとする一つきのきゆかた
やまのはに一よくもひきわたす一あきのそら
【享徳三年四月元朝敬二】／何人（【つつきたか】
／享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日
ひかりをさるの一つきのきゆかた
なかめすや一おもひなくとも一あきのそら
【享禄五年四月元朝敬一】／何船（【はるのい】
／享禄 5(1532) 年 1 月 18 日

春の葬方

→雁鳴く

やよいのするの一はるのくれかた
ものがふかきまつのひまひま一ふちさきて
【文禄三年四月元朝敬三】／何人（【はるのする】
／文禄 3(1593) 年 1 月 21 日
はなをつくす一はるのくれかた
やまふきの一ひとつかきねに一ふちさきて
【文禄三年四月元朝敬四】／何人（【はるのする】
／文禄 3(1593) 年 1 月 21 日

かたしく

→夜の月

片敷の袖

→前

をつたひとつかたの
いくたびか一つさまつしきの一しくるらむ
【応仁四年四月元朝敬一】／何人（【ときはきの】
／応仁元 (1467) 年 10 月 17 日
つきたかたく一しくものをちかた
わかれゆく一ぞしにやつゆの一しくるらむ
【応永三年四月元朝敬三】／何人（【ときはきの】
／応永三 (1473) 年 10 月 23 日
かたむく

かたむく

かたむく

かたむく

かたむく

かたむく

かたむく

かたむく

かたむく
かたる

くちにける－やなきもつつき－かたふきて
はるさへさひし－ふるみやのうち

【慶長年間百験 27 巻】／□□ [ゆきにし
も]／裏白／慶長9(1604) 年 1 月 3 日

づきがかたたく

月が傾く

－古里に秋の風

むかしかかりに－つきそかたふく
ふるさとを－とへはをきふく－あきのかせ

【文明年間百験 34 巻】／何船 [かへと
て]／文明 18(1486) 年 3 月 27 日

たひねのまくら－つきそかたふく
ふるさとに－なみたたへよ－あきのかせ

【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明
8(1476) 年 5 月頃

→秋の夜

つきかたふきぬ－たれをまつらむ
たのめねと－ひとりはねしの－あきのよに

【集守千句】／一字霊操 [よやさむき]／
長享元(1487) 年 10 月 9 日＜～11 日＞

かくれてくもに－つきかたふきぬ
あふきをも－おきすれぬぬ－あきのよに

【天文十八年梅千句】／青町 [ゆけはうめ]／
天文 18(1549) 年正月 11 日

かたる

かたるばかりにむかおおもかげ
語るばかりに向う面影

→それでない声

かたるはかりに－むかふおもかげ
それならぬ－こゑもむつまし－みことり

【老集／吉川本】／旅／文明 13(1481) 年
夏頃

かたるはかりに－むかふおもかげ
それならぬ－こゑもうらめし－ほとときす

【論叢4種】／宗長／

かつらぎ

かつらぎのやま

葛城の山

→絶え絶え

ちるややなきの－かつらぎのやま
かはそひの－みちのいははし－たえたえに

【和棚千句】／何路 [おおさくら]／享徳
元・2(1452) 年、4 月

はなおそけなる－かつらぎのやま
まつたかく－かかれるふちの－たえたえに

【諸家月次連歌抄】／諸家月次連歌抄／成
立 () 年末詳

かたよる

桜の葛城の山

→朝霞立つ

おくもざくらの－かたつらきのやま
あさかすみ－たったやはばく－へたつらむ

【毛利千句】／何田 [やまもと]／文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

さくらさくる－かたつらきのやま
あさかすみ－たったやはに－なりぬらむ

【書巻第二／統観書類従本】／巻／明応
4(1495) 年早春
かなしい

旅の悲しさ
→時鳥

ふもとにはーものがなしきのにーなきすべて
あかつきつみのーいしろのさやけさ

【文禄三年二月十日】／山河 [まつのしる]
文禄 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日

別れる旅は悲しい

→逢う人

ふかれゆくゆくーたひとのかなしさ
あふひとりーたひとみになこりーうちなきて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／恋下／遠正
2(1500) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

けふふかれしもーたひとのかなしさ
あふひとりーまだふるさとのーなこりにて

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

かね

入相の鐘

→うち時雨

かたやまさひしーいりあひのかね
おくるのーあきのひうすくーうちしくれ

【成立不詳・宗長以前 15 年】／名号 [なかはひと]／成立時不詳

ふもとにくるーいりあひのかね
まったれてーをのへばかりのーうちしくれ

【文禄三年二月十日】／何木 [うすきりや]／文禄 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日

→門立

はなはちるらむーいりあひのかね
しかたなーはるのふるてらーかたさして

【太神宮楽楽本千巻】／朝何 [つゆにたに]
長享 2(1488) 年 7 月

きりにこもれるーいりあひのかね
あきのひもーななめにのころーかたさして

【平松文庫本千巻】／□□ [ふゆはつき]

→帰る
さとはそなたの一般あひのかね
けれはてて一はならばなつや一かへるらむ
【井原千家】／井原（すきたかく）／延文
2(1357)年以後・応安 3年 6月以前
かずみにさびし一あとあひのかね
なくとりの一をのへや一かへるらむ
【天正年間百帳 57巻】／x x [かすみけり]／天正 10(1582)年 3月 1日

→花の陰

こころをつく一一般あひのかね
やまふかみ一かへりもやるぬーはなのがけ
【文明年間百帳 34巻】／井原 [やまかせに]／文明 15(1483)年 3月 2日
おなしみねこず一一般あひのかね
あすまてとーおもひかきやーはなのかけ
【成立不詳·宗範以前 8巻】／何処 [とこなつ]／成立時不同

→迷う

たけひとむらの一一般あひのかね
おとろきし一とりやねくらにーまよふらむ
【長享年間百帳 6巻】／x x [やまのはの]／長享 3(1489)年 8月 2日
のへにひくー一般あひのかね
かりひとやーつねならぬかたにーまよふらむ
【天正四年万帳 70巻】／竹何 [まつほぼや]／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

→山深い

くもよりをもの一一般あひのかね
くさのとにーひとり人もおとせぬーやまふかみ
【河越千家】／朝何 [うめにそに]／文明
2(1470)年正月 10～12日
こころをつく一一般あひのかね
やまふかみーかへりもやるぬーはなのかけ
【文明年間百帳 34巻】／何路 [やまかせに]／文明 15(1483)年 3月 2日

→わからない

とぼくそきこゆー一般あひのかね
かすかなるーすみかやたれーとーわかさらむ
【伊予千家】／伊路 [さとゆたれの]／文明
6(1537)年 5月 22日
ひとりのみきー一般あひのかね
ちきてくーところとひとやーわかさらむ
【大水四年豊千二百帳】／x x [ゆぶたちは]／月盛千二百帳／大水 4(1524)年 6月 23日

→あらまし

こそときかぬー一般あひのかね
あらましのーゆくすゑをたにーさためはや
【太神宮楽千家】／薄何 [まきのはや]／
長享 2(1488)年 7月
はるのあへはー一般あひのかね
あらましのーいはつきぬーおいかみに
【鬼政政集／広島大学／】／鎌四／文和
5(1356)年冬～翌年の春

→思いたい

みをおとろかすー一般あひのかね
きくことのーうからぬよともーおもははや
【成立不詳·宗範以前 6巻】／何処 [みつたまり]／成立時不同
けふまきじくー一般あひのかね
みのうへーくるるよはひとーおもははや
【鬼政政集／広島大学／】／鎌五／文和
5(1356)年冬～翌年の春

→所見える

はるのはやしのー一般あひのかね
やまかすむーふもとにすきのーかとみて
【表千家】／何船 [はなうちる]／文明
8(1476)年 3月 6日〜8日
はしよりおくの一一般あひのかね
まつけふるーゆきのやまもーかとみて
【鬼政政集／早稲田大学／】／冬／永正 6. 7
年

→わからない
なかつらときはいりあひのかね
まつのはのおくやいかに一つつくらむ
【紹巴久追香千句】／二字反音／かれた
かき／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日
やまとはからぬ－いりあひのかね
かすみにや－すゑののては－一つつくらむ
【行徳関係 4 種】／行徳句／伊地本

初瀬寺

またあはれそぶ－いりあひのかね
こもれは－なにいののらむ－はつせじら
【四幅句集】／薄所／かきはらち／文明
7(1475) 年 11 月 26 日＜〜28 日＞

ちかきをへの－いりあひのかね
はつせじら－もろこしにたに－あふやすや
【源氏／北野天満宮本】／永正十三年

初瀬山

たひねはいくつ－いりあひのかね
はつせやまよもにはなさく－かけわけではない
【名所集／静嘉堂文庫本】／春／（大永
前後）

たひねはいくつ－いりあひのかね
はつせやまよもにはなさく－かけわけではない
【竹林抄／新典文大系本／春／文明
8(1476) 年 5 月頃

けふもまたきく－いりあひのかね
はつせやま－るけきはの－おくにきて
【諸家月次連歌抄／諸家月次連歌抄／成
立（）年未詳

春になる

はなはこすゑの－いりあひのかね
ひとかへる－あとはしぶけい－はるならむ
【天文年間百巻 3 8 巻】／山河／たくやい
つれ／天文 24(1555) 年 5 月 14 日

かすむゆふへの－いりあひのかね
あすはたか－いののうちの－はるならむ

日が春れる

いそくこころや－いりあひのかね
とまりを－たさめぬうらの－はくれて
【天正四年四句 7 卷】／初何／ゆかのほ
の／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

あかつきさき－いりあひのかね
ほとときす－ゆくはれぬ－はくれて
【竹林抄／新典文大系本／夏／文明
8(1476) 年 5 月頃

錐鳴る

鐘の空

はるふかき－ふもとのさとに－かねなりて
しらぬふねゆく－あかつきのそら
【三島句集】／初何／うつろかの／文明
3(1471) 年 3 月 21 日〜32 日

かたやまの－ゆかへのあめに－かねなりて
つきまいてむ－あかつきのそら
【美濃千句／山河／けふみはす】／文明
4(1473) 年 12 月 16 日〜21 日

杉の麓立ち

くれわたる－みねよりおくに－かねなりて
いちかさひしき－すきのむらたち
【弘治年間百巻 8 巻】／xx ［をのこす］
／弘治 2(1556) 年 9 月 10 日

かはかみは－くもあまるらか－かねなりで
あらしにあれる－すきのむらたち
【成立不詳・宗賢以前 8 巻】／何人／あを
やきや／成立時不詳

月が降く

やまふかく－すむひとしるき－かねなりて
よをおとろけと－つきてかたぶく
【明応年間百巻 2 2 卷】／何人／あさかす
み／明応 4(1495) 年 1 月 6 日
かみ

神にたたけ祈る

かみはたたけのるにこそはーかみもあれ
むすぶちきりのーゆくへたかはし
【天文廿四年万句 5 卷】／橘谷 [あさきに]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

かみもたたえてのるにこそはーななひきれ
むすぶちきりのーすゐはしれす
【天正四年万句 7 卷】／何防 [ときはきも]
／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

祭りする神

あつりせしーひもくれゆけはーかみささて
みちはのこれるーもりのかくれ
【永禄年間百儲 2 卷】／追善 [まれにと
ふ]／永禄元 (1558) 年 11 月 5 日

まつりせしーおとはいくかそーかみのまへ
くさうちしれるーもりのかくれ
【文明十四年万句 5 卷】／何紙 [つゆは
けさ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

乱れ髪

たはつけしーすとともあらぬーみたれかみ
つゆにぬれぬるーあをやきのいと
【文禄年間百儲 1 卷】／□□ [はなさけ
と]／文禄 2(1593) 年 2 月 18 日

かきやるはーつれなきかけのーみたれかみ
いるかとのーあをやきのいと
【慶長第四／早稲田大学本】／卷／永正 6.7

かも

賀茂日吉

あつりけつ

→ 奥 住
かもひよしみやこにちかきーやまとして あふひかじろは—まつりにそとる
【宝徳四年両句】／二文反切 [はなにかけ]
／宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日
□□さけふーかみかき□□しーかもひよし あふひかじろは—おなしき□□□□
【応永年間両句 7 巻】／□□ [ x x はずせ]
／応永 24(1417) 年 3 月 16 日

かや

浅茅生

→驚の声

はるきても—たちたにいてぬ—あさちがに とふをなさけの うくひすのこゑ
【伊豆両句】／何草 [はるはけふ]／大永 4(1524) 年 3 月 17 日—21 日
あさちふにーいととふるさと—はるくて なものやおとす—うくひすのこゑ
【響草／大阪天満宮文庫本】／春／永正 2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

浅茅生の露

→耐えない

しのにこぼるーさあちふのつゆ かせをいたみーたひなるそたやーたへさらむ
【大永三年月曆千三百編】／□□ [ひと あや] ／月曆千三百編／大永 3(1523) 年 4 月 23 日
そたにくくるーあさちふのつゆ くすのはのーうらみにわれやーたへさらむ
【大永三年月曆千三百編】／□□ [あたまの] ／月曆千三百編／大永 3(1523) 年 12 月 23 日

から

深衣

→袖の移り香

かさねてもーわなしきひとのーからころも わすれむものかーそてのうつりか

【天正年間両句 5 7 巻】／何詩 [みちち を]
／天正 13(1585) 年 5 月 27 日
けふこそとーかへてうれしきーからころも わかははのなのーそてのうつりか
【天正四年万句 7 0 巻】／二文反切 [かせやいる]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日—7 月 19 日

→夜が更ける

かすかのやーそのかみひとのーからころも さかきはうたふーよはふけにけり
【兼野両句】／片向 [かせとよ]／延文 2(1557) 年以後応安 3 年 6 月以前
からころもーたちかわれにしぶしづのもと しみつにあきのーよふけにけり
【天文年間両句 3 8 巻】／山何 [のきてお ふる]／天文 19(1550) 年 4 月 24 日

→秋の蓉生の重

からころもーそてとふつきの一□□□□□ あきはたさひしえもきふのやと
【文安年間両句 9 巻】／山何 [あきのいろ]
／文安 4(1447) 年 9 月 6 日
わかんみたーいくへのいろをーからころも あきはむしくーよもきふのやと
【成立不詳・宗塚以前 6 巻】／何人 [みつ たまり]／成立時不詳

唐土舟

→松浦啓

もろこしじねのーなみのはけしさ かへるひをーさらにはいときとーまつろかた
【天正四年万句 7 0 巻】／二文反切 [かせやいる]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日—7 月 19 日
もろこしじねのーあとさきのうさ いさりひにーゆふやみふかきーまつろかた
【春夢草／書陵部本】／雑／永正 12(1516) 年、13 年
かり

falling

November

Although it rains—when the rain stops—
I still collect the falling leaves.

【読者日記簿 50 巻】／長谷川 [あきせの]／広書 31(1424) 年 1 月 25 日

かえるのかえぬ

renewed

褪色

October

老いること

falling leaves

扶桑

November

falling leaves

【読者日記簿 50 巻】／長谷川 [あきせの]／広書 31(1424) 年 1 月 25 日

かいのここと

falling leaves

 enquen

April

宇宙

【読者日記簿 50 巻】／長谷川 [あきせの]／広書 31(1424) 年 1 月 25 日

かいめいかりのここ

falling leaves

割る葉の声

falling leaves

【読者日記簿 50 巻】／長谷川 [あきせの]／広書 31(1424) 年 1 月 25 日
【大永三年月並千二百句】／□□（うめかかや）／月並千二百句／大永 3(1523) 年 2
月 23 日

つはさみたれしからのいくつら
はるはると—たものすゑの—いろつきて
【慶長年間百首 27 巻】／□□（つゆにみを）／慶長 9(1604) 年 6 月 28 日

かりのひところ
雁の声

→霞こめる

やまたかみ—きたにたなひく—からのかえ
はるのふもとは—かすみこめつつ
【太神宮楽楽万句】／何人（しかのねを）／長享 2(1488) 年 7 月

なこりいや—おはよとのなみに—からのかえ
かすみこめつつうらのつりふね
【成立不詳 神楽以前 8 巻】／□□（つゆを）／成立時不詳

かりのこえこと
雁の声々

→移ろう

くもまにおる—からのかえ
あきののた—ほのかにつきも—うつろびて
【新撰花舞法集/実隆本】／秋上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

おはれさきたつ—からのかえ
すゑのつゆ—とあらのここは—うつろびて
【老集／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年 7 月

かりのたまざき
雁の玉章

→隔つ古里

たかおとつれそ—からのかたまつさ
ふるさとの—そらをはきや—へつたらむ
【文安雪千句】／何船（かせにとふ）／文安
2(1445) 年 10 月 18 日

かりにねたのむ—からのかたまつさ
ふるさは—いくくもたちを—へつたらむ
【池田千句】／何 x （ゆきそちる）／永正
7(1510) 年春以前／永正 5 年春

かりのひところ
雁の一聲

→秋更るる

なこりもさむき—からのかところ
それなく—よばのけしこも—あきふて
【文亀年間百首 4 巻】／何人（きえのや）／文亀 2(1502) 年 8 月 6 日

まくらおとろく—からのかところ
いなむしろ一つゆきさあへす—あきふて
【大永四年月並千二百句】／何色（うめの
はな）／月並千二百句／大永 4(1524) 年 1
月 23 日

かりのひところ
雁の一列

→そことない

あとはかすめる—からのかひとつら
そことなく—なかなかのにころ—はるのうみ
【明応年間百首 22 巻】／何人（あきのに
ろ）／明応 9(1520) 年 7 月 11 日

ゆくあとしたふ—からのかひとつら
そことなく—きりのうなはら—ふねうけて
【弘治年間百首 8 巻】／何人（うめひとつら
と）／弘治 3(1557) 年 1 月 3 日

とふかりのつりつば
飛ぶ雁の翼

→明け渡る空

とふかりの一つはさやつきを—かけつらむ
なみのうへより—あけわたるそら
【紹巴父追仙千句】／何人（なきあとは）／文
文 24(1555) 年 3 月 26 日～毎日

とふかりの一つはさもつゆに—しをるらむ
よさむのつきの—あけわたるそら
【文明十四年日付 5 2 巻】／何木（まつは
みとり）／文明 14(1482) 年 7 月 14 日～9
月 14 日

初雁の声

→海人小舟

たたひとつらの—はつかりのかえ
ゆふくれは一つにといする—あまをふね
春の雁

→此方彼方

ともまちつれぬ−はるのかりかね
ちきりしは−こなたかなたに−なりはてて

春の雁

→長夜

ねさめのまくら−わたるかりかね
あかつきと−おもひでたにも−なかきよに

春の雁

→入相の蝶

かりそめの−やうちたのむ−たびのちに
なれぬるつに−いりあひのかね

春の雁

→日暮れ

かりそめの−やとりにゆきの−ふりそびて
かりはののの−ひこそれぬぬ

春の雁

→仮寝

かけあずむ−かねのつきの−あくるよに
はなうちかをり−とりのなくこゑ

春の雁

→深海

そってうしけれ−かねをやせむ
ひとかへる−あとにもいまつ−ふかきよに

春の雁

→朝の雲

はかなしな−かにみたし−よくのゆめ
あしたのくもの−あともとまらす

春の雁

→花打ちの

かけあずむ−かねのつきの−あくるよに
はなうちかをり−とりのなくこゑ
かりの

【成立不詳・宗期以前6巻】／何人 [みつたまり] ／成立時不詳

はかなしやーのかみのさとーかりまくら
いふきおろしーかたしきのゆめ

【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／水正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

野辺の仮枕

→旅枕

ゆめちをたるとーへのかりふし
たひまくらーふかきもしらすーいつするに

【住吉千句】／何田 [このはちる] ／大永元 (1521)年11月1日～14日

ねられぬときはーへのかりふし
たひまくらーゆめさへとひやーたえつらむ

【成立不詳・宗期以前15巻】／何船 [きりのはに] ／成立時不詳

→旅の空

ところさためぬーへのかりふし
うきものとーいひしへまことーたひのそら

【明応年間童百2巻】／十三仏名号 [なかつきも] ／明応4(1495)年9月30日

みやこわすれぬーへのかりふし
たちしよーとちかたまなくーたひのそら

【宗期関係2巻】／宗期連歌合／静嘉堂文庫本/

夢の仮枕

→月に幾度

ならはすはーみえましゆめかーかりまくら
つきにくいたびーかけしへふるさと

【成立不詳・宗期以前15巻】／何路 [みねかし] ／成立時不詳

みしゆめーのちもよなかきーかりまくら
つくらいたびーとこのやまかせ

【天和年間童百2巻】／□□ [おいしいみに] ／天和2(1682)年4月3日

→武蔵野の原

ゆめちにもーゆきつつおなさーかりまくら
またみぬかたやーむさしのはら

野に仮枕

→片敷の夢

かりまくらーすそののかたにーかへなまし
いかにねてかはーかたしきのゆめ

【五言千句】／初町 [やまもいさ] ／
天正9(1581)年11月19日
かりる
宿を借る
→村借
せきのこたなにーやとやからまし
むらさめのーおとのはさとにーたちよりて
【行助関係4種】／行助句集／書陵部本／

かれる
枯れた草が萌えるる
→　
ふゆかれしーみちのしはくさーもえいてて
のへのかすみにーこまいはふこえ
【聖書千句】／夜明（のころひに）／明応
3(1494)年 2月 10日～12日

かわ
秋の川風
→　
またふやふなちーあきのかはかせ
きりわたるーやまもとつつきーかすかにて
【永正年間物語3巻】／何人（ゆふつくよ）／永正 13(1516)年 7月 8日

天の川
→　
けふとるーならひはかりのーあまのかは
ふくにおとるーあきのはつかせ
【泉学館文庫千句】／△（ちからはかな）／永禄 6(1563)年 11月 18日以前

枯れ花薄
→　
はなずきーかれゆくしもーあきふけて
のにはおしなにーよわるむしのね
【願証院千句】／山何（あさもよひ）／宝徳元（1449）年 8月 19日～21日

つきのるーかれののすきのーはなすすき
ほのかになりぬーよわるむしのね
【国楽千句】／薄何（かきはらふ）／文明
7(1475)年 11月 26日～28日
つつきのさきら
→月のさやけぎ
かはおとも－おほひのさとは－かきくもり
いりえにくる－つつきのさやけぎ
【大神宮楽千句看了】／近何 [あきとほし]／
長享 2(1488) 年 7 月
かはおとも－はるかにかせの－つぶねく
いりえにうつろふ－つつきのさやけぎ
【慶長年間百題 27 巻】／目々 [ねふかき]／
慶長 4(1599) 年 2 月 8 日

川沿いの道

→曇り
みつうちけふる－かはそひのみち
あかつきの－つつきのるえに－つぶねき
【阿越千句看了】／近二反音 [はるみても]／
文明 2(1470) 年正月 10～12 日
かすかにこのころ－かはそひのみち
あかつきの－やまにかかれる－よのはつつき
【文明年間百題 3 4 巻】／近木 [うめかか
を]／文明 15(1483) 年 2 月 19 日

→薄氷舟
くたれはあさき－かはそひのみち
はやせに－おとさせてその－わたしふね
【成立不詳・宗長以前 1 5 巻】／砂やつた／存疑／成立時不詳
つくともあるき－かはそひのみち
くれぬれは－ひとりふたりの－わたしふね
【天正年間百題 5 7 巻】／近人 [みれはみ
し]／天正 12(1584) 年 9 月 13 日

川沿い舟

→岸の見竹
さしいつる－かはそひふねに－かせふきぬ
すゑうしなひく－きしのくれたけ
【永禄千句看了】／何句 [たかそめし]／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

月の川上

→鐘の音
かけはしとほき－つつきのはかみ
かねのおどくるもまなみの－まかひにて
【永禄年間百題 2 8 巻】／近人 [ふちかえ
や]／永禄 7(1564) 年 3 月 15 日
さやかにうつる－つつきのはかみ
きりはるる－ゆふへのそらの－かねのおと
【天正年間百題 5 7 巻】／近路 [たちそひ
て]／天正 6(1578) 年 1 月 3 日

後の里

→水上の紅葉散る
かけをたに－うつさむせせの－なみたかは
などみなかみの－もみちちるも
かわす

【成立不詳・崇禎以前6巻】／唐何［にてしの］／成立不詳

【新撰文政文集／実隆本】／夏／明応4(1495)年9月26日

ことわりなれやーかはすところのは
うくひすにーしたしきこゑのーほとて
【國語第四／卒稲田大学本】／夏／永正6、7年

かわす

蛙鳴く

→鷺

をりをえかはにーかはつなくなり
うくひすのーコーゑよりはるやーさそふらむ
【天文十八年梅千句】／何人［みしろは］／天文18(1549)年正月11日

おのかつまとふーかはつなくなり
うくひすのーあめうちそそくーはなにて
【大永四年月並二千百韻】／□□（としなみの）／大永4(1524)年12月23日

→五月雨

ときもわすれすーかはつなくなり
さみたれはーはれてもおなしえーにはたつみ
【天文廿四年梅千句】／花之何［かみかきの］／天文24(1555)年正月7日

かはつなくなりーをたのまちまち
さみたれはーさかひもみえすーみちとほより
【崇徳進藤千句】／x x くもろなよる／永禄4(1561)年9月14日・15日

ふりたまいたしますーかはつなくなり
さみたれはーなこりつさせぬーにはたつみ
【永享年間百韻4巻】／山何［くちてけり］／水亭12(1440)年10月16日

→庭水

ときもわすれすーかはつなくなり
さみたれはーはれてもおなしえーにはたつみ
【天文廿四年梅千句】／花之何［かみかきの］／天文24(1555)年正月7日

ふりたまいにーかはつなくなり
さみたれはーなこりつさせぬーにはたつみ
【永享年間百韻4巻】／山何［くちてけり］／水亭12(1440)年10月16日

かわす

交わす言の葉

→時雨

きくやいかにーとーかはすことは
しろしらすーかりねのやまのーほとたす
かわる

色変わる
→松虫の声

いろいろあるところをたんにしれよもひくさ
ちきりしまやまつましのこゑ

【成立不明・宗祇以前15巻】/何人 [は
つはなや] /成立不明

いろいろあるへにこてふるゆめうゆき
みしあとはたまつましのこゑ

【永正年間百悪34巻】/何木 [いろいろは
ちの] /永正8(1511)年4月6日

色変わらぬ頃
→花咲く

みとりなるのも一いろいろあるところ
さはみつにいくさのむらむらへはなさきて

【三島千句】/何船 [とりのねは] /文明
3(1471)年3月21日～23日

このもとまでも一いろいろあるところ
ひとしほれぬこくさははれへはなさきて

【応応年間百悪22巻】/何路 [うつろは
て] /応応3(1494)年10月30日

人の心が変わる
→海棠

ひとのこころの一かはるやすよ
うみやまの一ときみてあかすしますのうら

【文明十四年万句52巻】/山河 [あきの
はな] /文明14(1482)年7月4日～9月
14日

ひとのこころの一かはるようのなか
うみやまの一あるところも一たひなれや

【応応宗祇百句付】/応応宗祇百句付/応
仁2(1468)年5月下旬

人の心の変わる世の中
→秋の暮れ

ひとのこころの一かはるようのなか
やまさを一うかれいてめや一あきのくれ

【応応宗祇百句付】/応応宗祇百句付/応
仁2(1468)年5月下旬

→秋が来る

ひとのこころの一かはるようのなか
うつせみの一はやまるしに一あきはきて

【応応宗祇百句付】/応応宗祇百句付/応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるようのなか
かしらぬーひとしほみたて一あきはきて

【応応宗祇百句付】/応応宗祇百句付/応
仁2(1468)年5月下旬

→かれ

ひとのこころの一かはるようのなか
よもきぶ一かれぬあうじゃ一あはれて

【応応宗祇百句付】/応応宗祇百句付/応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるようのなか
なきあとはーにくかりしたてーあはれて

【応応宗祇百句付】/応応宗祇百句付/応
仁2(1468)年5月下旬

→色見える

ひとのこころの一かはるようのなか
まちをしむーはなにはとなき一いろみえて

【応応宗祇百句付】/応応宗祇百句付/応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるようのなか
たけはそのこをおもふともーいろみえて

【応応宗祇百句付】/応応宗祇百句付/応
仁2(1468)年5月下旬

→変身の時

ひとのこころの一かはるようのなか
うきみさへーときにやあふともーはるたち

【応応宗祇百句付】/応応宗祇百句付/応
仁2(1468)年5月下旬
かわる

→衰える

ひとのこころの－かはるよのなか
そのいへは－のこれとみちの－おとろへて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2 (1468) 年 5 月下旬

→月を見る

ひとのこころの－かはるよのなか
よつのとき－いつれまざると－つきをみて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2 (1468) 年 5 月下旬

→とりどり

ひとのこころの－かはるよのなか
さむきひは－みつにいるてふ－とりどりに
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応
仁 2 (1468) 年 5 月下旬

→夢い羽根を並べる島部山

ひとのこころの－かはるよのなか
はかなしや－はねをならへ－とりどりへやま
【薫草／伊地知本】／応／文明 6 (1474) 年
2 月以前

→花咲く

ひとのこころの－かはるよのなか
のへをわけ－やまをたとる－はなさきて
かわる

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
みやまきを一たちはらになす一はなさきて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

→花もない

ひとのこころの一かはるよのなか
うれへある一はなかめつる一はなまなし
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
うたのみちへまることをうるへはなまなし
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

→羽根を並べる鳥郡山

ひとのこころの一かはるよのなか
とりへやまへはねをならへしするたへて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
はなないやへはねをならへしへとりへやま
【豊岡／伊地知本】／戸／文明 6(1474) 年
2 月以前

→一つ

ひとのこころの一かはるよのなか
つきたたへみやもならやもーひとつにて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
こをもふーみちのみたれもーひとつにて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

→時風

ひとのこころの一かはるよのなか
ほとときすーはなさきこをーなくさめて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
またしもーなさきやまのーほとときす
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
ほとときすーかへるやまのーともならて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

→身を知らない

ひとのこころの一かはるよのなか
うれしがもーうきもゆめなるーみをしらて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
ときを食べーはなもそるへきーみをしらて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

→身を知る

ひとのこころの一かはるよのなか
みをしればごれとさめむーやもなし
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
みをしればーいはむうらみもーなきものを
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

→我が上

ひとのこころの一かはるよのなか
かわゆへーおもはてたれをーそるらむ
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
かわゆへーほしのひとのーあきもかな
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬
かんなづき
神無月
→九重の内
かなみつき一はるふかせの一けしきにて
さひしさらぬ一こここのへのうち
【永正年間百領 34 巻】／何人【つきはな
を】／永正 2(1505) 年 9 月 13 日
わずれてはあきかとおもふ一かなみつき
かせたさえぬ一こここのへのうち
【成立不詳・宗政以前 15 巻】／何路【は
なおそし】／成立時不詳

かんなび
神奈備の森
→秋の三案山
もういちりしく一かなひのもの
あきふけて一つきもしくる一みむろやま
【名所句集／静岡県文庫本】／秋／【大水
前後】
みつつさきゆく一かなひのもの
あきのいろ一いたるやたた一みむろやま
【成立不詳・心政以前 14 巻】／何何【し
たみつに】／成立時不詳

かた
湯ばかり
→宮の内
かたはかりなる一にはのおはしま
みやのうち一ひけもあらす一ものさひし
【天正年間百類 57 巻】／□□【きわく
や】／天正 18(1590) 年 10 月 8 日

すめるもさはとはかたはかりなる
かにたに一たちいてまうき一みやのうち
【元和年間百類 24 巻】／□□【うくひす
のにの】／裏白／元和 9(1623) 年 1 月 3 日

き
さこのいろいろ
木々の色々
→秋暮れる
しもおくころの一きののいろいろ
たちのはるーきりのやまもと一あきくて
【明応年間百類 22 巻】／何路【ことたち
し】／明応 6(1497) 年 1 月 1 日
まつはさをの一きののいろいろ
ありあげの一つれなきかけも一あきくて
【天正四年万句 60 巻】／何船【かなきよ
の】／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

このしたつや
木の下露
→ダズ
このしたつゆに一をるひめゆり
なつのひは一やまのすそのを一ゆふへにて
【成立不詳・宗政以前 6 巻】／何何【なて
しこの】／成立時不詳
このしたつゆにーくさをふしたる
みやぎのの一はじはなくーゆふへにて
【重刻広集／広島大学本】／秋下／文和
5(1536) 年 3 月 26 日

このもとみこ
木の下道
→片敷く
ゆふへすすしきーこのもとのみち
しつかなるーかせのさゆりはーかたして
【宗政歳合万句句】／何何【ちるらねぬ】／
永禄 4(1561) 年 9 月 14 日・15 日
あくるもははしーこのもとのみち
さよころもーはなるにはびにてーかたして
【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

なしこだか
夏木立
→山時島
しらかしの一ゆきまやみネの一なつこたち
くもよりつける一やまほときす
【永禄石山万句句】／初何【しらかしの】／
永禄 7(1564) 年 5 月 12 日
花の木の下

→驚

いそくこころの一はあのこのもと
うくひすの一はるおとろかすねになきて

【岩棟千句】／千何 [あくるはを]／天正
6(1578)年 5月 18・19日

いろいろそぷーはあのこのもと
うくひすの一はかせをみるもののとかにて

【天正四年万句70巻】／河合 [はるきさめ
に]／天正4(1576)年 5月 6日～7月 19日

→驚の声

たっかへるるまはあのこのもと
ふるさともーはるのみひのーおとはして

【襲営千句】／河合 [のこるひに]／明応
3(1494)年 2月 10日～12日

やまちひくるーはあのこのもと
さくらちーみねのあらしのーおとはして

【宗長関係8種】／興津宛／書陵部本

→驚の声

たっかへるるまはあのこのもと
ふるさともーはるのみひのーおとはして

【襲営千句】／河合 [のこるひに]／明応
3(1494)年 2月 10日～12日

雪消る

→驚の声

たっかへるるまはあのこのもと
ふるさともーはるのみひのーおとはして

【襲営千句】／河合 [のこるひに]／明応
3(1494)年 2月 10日～12日

やまさくちーさけはきやをーあくかれて

【壁木／大阪天満宮文庫本】／河合 [よ
しやかず]／永禄
4(1561)年 8月 23日以後同 3 年 3月以前

きえる

消える風

→驚の声

きえむけふりの一はてもはかなや
もしべくむーうらにとしけるーさすらへに

【伊勢千句】／河合 [そめてはす]／大永
2(1522)年 8月 4日～8日

きえむけふりのーゆくへをそまつ
もしべくむーそてさへつさをーたのむよに

【明応年間百題22巻】／何人 [かきりさ
へ]／明応8(1499)年 3月 20日

消えるなら消えるべき思い

→身を軽ぶってうふるや

きえはきゆへーおもひならはや
みるもうしーみをあきちかくーとふばたる

【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476)年 5月頃

きえはきゆへーおもひならはや
はかなくもーみをあきちかくーとふばたる

【論書4種】／宗長／

遠消え

→松の一畑

いそやまもーしばひへのあとはーとほきえに
くもそかへるーはまてひとむら

【飯盛千句】／河合 [のこるまる]／永禄
4(1561)年 8月 27日～29日

かけさくくーいさりひきえてーとほきえに
しもにふるふるーはまてひとむら

【文亀年間百題4巻】／何人 [たをるなど]
／文亀2(1502)年 4月 25日
きく

菊の一本
→山人

しものそこなるーきくのひととも
やまひとのーずむあといかにーたつねまし
【天文廿年千句】／□□ [つげのこせ]
／天文 20(1551) 年 6 月 10 日～12 日

ちくさをれてーきくのひととも
やまひとのーずむかことはことーものふるく
【長禄三年千句 11 巻】／河島 [ふかふる]
／長禄 3(1459) 年 12 月 2 日～5 日

はやちりぞむーきくのひととも
やまひとのーずむかいればーころならむ
【天正四年万句 70 巻】／朝何 [なみよす
る]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

聞くのも珍しい
→時鳥

きくもめつらしーこのみやことり
ほとときすーけさはおとはの一やまこえて
【竹林抄／新古文学大系本】／夏／文明 8(1476) 年 5 月頃

まれのみゆきはーきくもめつらし
ゆふかせてーかみまつるよの一ととこす
【芳草／伊地知本】／夏／文明 6(1474) 年
2 月以前

聞く時鳥
→有明の空

ききあへぬーゆめのたたちの一ほとときす
のこるほなきーありだけのそら
【文安元年千句】／河島 [なにててて]／文
安 2(1445) 年 8 月 15 日

さみたれにーまいたつきかむーほとときす
ねぬよほふるーありだけのそら
【文明五年百句 34 巻】／x x [つげをか
せ]／文明 12(1480) 年 8 月

つゆのおときくに
露の音聞く庭
→玉亀の霧

つゆのおときーにはのゆふかけ
たまたれのーきりのなこりやーはれさらむ
【伊勢千句】／河人 [ふかきゆてて]／大
永 2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

つゆのおときーにはのしたをき
たまたれのーそものきりの一かたよりて
【天正五年百句 57 巻】／何名 [すますみ
は]／天正 13(1585) 年間 8 月 12 日

初風と昨日は聞いて秋更る
→人は残らない紅葉

はつかせとーきのふはききしーあきふて
ひとはのころすーもろきもみちは
【三島千句】／河人 [しひらす]／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

はつかせとーきのふはききしーあきふて
ひとはのころすーもみちるかけ
【老集／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年
夏頃

木綿付け鳥を聞く
→海女

ゆふつけとりをーうらみてそこく
いましはしーうちもねぬへーふかきよに
【乗々千句】／河路 [しろるやと]／長久
元(1487) 年 10 月 9 日＜〜11 日＞

ゆふつけとりをーなごりにそこく
ゆめひのーあとはかもなくーふかきよに
【住吉千句】／河人 [つげはふゆ]／大永
元(1521) 年 11 月 1 日〜14 日
きし

岸の山吹

→鷹鳴く

ここでふとひかふきしのやまふき
かはつくなりのはるのみつたにとおりて
【文安月千句】／朝何 [ひかりをむ]／文安 2(1445) 年 8 月 15 日

かつうちふるきしのやまふき
かはつくなりさとののはつらすきやらて
【永正十花千句】／何木 [ひかふきに]／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

はるをのこせるきしのやまふき
かはつくなりさふきへもうれみつさびて
【成立不詳・宗政以前 15 卷】／何路 [あ
ひにあ]／成立時不詳

きし

雛鳴き立つ

→鷹づるる

ききすなきたつこゑのさひしさ
あらしぶくかすみのすゑにこまとて
【天文廿四年梅千句】／何木 [つみそへよ]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

ききすなきたつありあげのつきた
さくらかりはなのしたはにこまとて
【大永四年花并千二百題】／□□ [しもや
ひぬ]／月并千二百題／大永 4(1524) 年 9
月 23 日

きぬきぬ

後朝

→春の月

きぬきぬの一艘そはつゆにうちぬれて
みれはみにしむありあげのつきた
【文明十四年歌文 5 卷】／二字反音 [は
なはな]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9
月 14 日

きぬきぬのえなみをたてもかたみとや
なみたをのこすありあげのつきた
【黒板覚連／広島大学本／ stato／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

→袖の移り香

きぬきぬのえなみを的というおび
のこよりもかきそってのうつりか
【元亀二年句】／何木 [たきなみの]／
元亀 2(1571) 年 3 月 5 日

きぬきぬのえおもかけのほるけさのつきた
ともにやとまるそってのうつりか
【看聞日記歌什 5 卷】／何人 [まつうちか
し]／応永 32(1425) 年 6 月 25 日

きぬきぬのえおもかけすむあさはらけ
きゆるををしやそってのうつりか
【天文年間目錄 3 卷】／xx [しかそな
く]／天文 24(1555) 年 9 月 19 日

きぬきぬのあと

後朝の後

→花瓣

ひとりうちぬるきぬきぬのあと
なみたのみへかたきそってのかたみにて
【紹巴亡父追惜千句】／二字反音 [かれた
かき]／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

おもかけとまれきぬきぬのあと
たまくらをおおかもなるかたみにて
【集百句之連歌／天理本】／【集百句之連歌
／不明

なみたにむかふきぬきぬのあと
なくさみぬものかからついてかたみにて
【老集／吉川本】／恋下／文明 13(1481) 年
夏頃

きぬきぬのあと

後朝の袖

→花葉

なみたにむせふきぬきぬのそで
しのめのそらきりわたりつきておちて
【黒板覚連／山何 [あさもよび]／
宝徳元(1449) 年 8 月 19 日～21 日

ぬれにそるるきぬきぬのそで
しのめのそらしもあめのうふりって
【近習軒／北野天満宮本／永正十四年／
きぬた

砧の音

→玉錦の行方

きぬたのおとは—むらのをちちお
たまほこの—ゆくへもわずかすく—くれそつめて

【柳隠十句】／初句 [はなのこと] ／元
亀 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

きぬたのおとは—かせのまにまに
たまほこの—ゆくへやきりの—へたつらむ

【元亀三年百選 6 巻】／仲党 [むさしのも]
／元亀 3(1572) 年 3 月 18 日

きのう

昨日の霞

→朝ばらけ

きのふのくもを—わくるむさしきの
かりねせし—かややのゆきの—あさはらけ

【昼草／伊地知本】／冬／文明 6(1474) 年
2 月以前

きのふのくもを—またたなかなる
はるといへ—かすみたにせぬ—あさはらけ

【基佐集／静嘉堂文庫本】／春／文正
6(1509) 年以前

初風と昨日は聞いて秋更げる

→人は残らない紅葉

はつかせと—きのふはききし—あきふけて
ひとはのこらす—もろもみちたは

【三豊千句】／何人 [しるしらす] ／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

はつかせと—きのふはききし—あきふけて
ひとはのこらす—もみちるかけ

【老集／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年
夏頃

きみ

君の言の葉

→僕

しらぬかれの—きみかことのは
いつもりの—なきはなみたに—あらはれて

【辛酉二年千句】／何玉 [くらからぬ]
辛酉 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

みになほたのめ—きみかことのは
いつもりの—すゑをはかはき—いのちにて

【竹林抄／新古典文学大系本】／句上／文
明 8(1476) 年 5 月頃

きみがよ

君が代

→逢う

ことのはの—みちさかえたる—きみかよに
あふかさらめや—をさまれるとき

【寒間千句】／何木 [したふとや] ／文正
11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

ひらけこし—みそらのまの—きみかよに
すめるところを—あふかさらめや

【文正三年百選 34 巻】／何人 [すすしづ
や] ／文正 7(1510) 年 7 月 5 日

きょう

今日毎

→入相の鐘

けふことの—ゆふへはるを—さそふらむ
さとつつきなる—いりあひのかね

【紫野千句】／何人 [しつけるの] ／延文
2(1357) 年以後・応安 3 年 6 月以前

けふことの—しおれやあきを—おくららむ
みにしむころの—いりあひのかね

【文正十花千句】／何袋 [つよいゆき] ／文
正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

今日ばかり
きよまわり

清まわり

→野々宮の道

ひかすをや－さためおたる－きよまはりいるかたふかき－ののみやのみち
【玉吟－日千句】／山何［むかしやは］／
天正9(1581)年11月19日

かりそめと－おもふほふる－きよまはりわけいりにたる－ののみやのみち
【毛利千句】／白何［すゆきの］／文禄3(1594)年5月12日－16日

きり

霧に霜

→月は出ても暗い

きりにしも－こきたびひぬ－ふねのうへつきはいてても－くらきやまかげ
【天正年間百詠57巻】／□□［ゆふつゆも］／天正16(1588)年8月10日

きりにしも－ゆふへのひとりへたたりてつきはいてても－またくらきそら
【寛永年間百詠15巻】／□□［ゆきなから］／寛永21(1644)年1月3日

霧の上

→夕まぐれ

きりのうへなる－たかまとののみやゆふまくれ－ろはあつさや－しらさらむ

【大原野十花千句】／初何［こからしを］／
元亀2(1571)年2月5日－7日

きりのうへなる－やまのしつけさひこまるの－かねよりあきの－ゆふまくれ
【平松文庫百句】／□□［かきおこせ］／

霧降る

→月広か

あきのしも－きりのまかきに－のころらむやまをそもの－つきほのかなり
【天文年間百詠3巻】／何人［さくぶりの］／天文18(1549)年3月24日

のおせし－そともにきりや－のころらむたけのはし－のりきほのかなり
【慶長年間百詠27巻】／□□［あらしにのも］／慶長5(1600)年1月3日

霧の下道

→音がする

まさらそてみぬ－きりのしたみちたれとしも－わかすつまつ－おとはして
【伊勢千句】／三寺中略［うめさきて］／
大永2(1522)年8月4日－8日

あふもなき－きりのしたみちさとときは－みやまにたきの－おとはして
【心敬関係10種】／心敬僧都百句／岩瀬文庫本／

霧の離

→明け離れる

きりのまかきの－ひまそひにけりのきちかき－やまはみるる－あけはなれ
【文禄年間百詠2巻】／□□［あつやまの］／文禄2(1593)年5月6日

きりのまかきの－あらはなりけりみつつる－かたのつつきの－あけはなれ
【元和年間百詠24巻】／□□［むかしにや］／元和5(1619)年7月24日
きりぎりす

朝日

きりはれのほる－なかのかけはし
かすかなる－のわきせしよの－あさひかけ
【出頭千句】／朝日／【きなりやは】／永正 元（1504）年 10 月 25 日～27 日

霧晴れる

－筋白い

かりのこす－すすをこめし－きりはれて
ひとすちろし－しもふむみち
【弘治三年春雪千句】／初河／【けさみねは】／弘治 3（1557）年正月 7 日～9 日

あすかは－はまへつたひの－きりはれて
ひとすちろし－いつきのかはみつ
【天正年間百題 57 題】／何人／【ときはいま】／天正 10（1582）年 5 月 24 日

残る大和桜子

きりぎりす－しもにかかりし－ねもかれて
いつかとのころ－やまとなてしほ
【池田千句】／何田／【をとめこと】／永正 7（1510）年春以前＜永正 5 年春＞

きりぎりす－しめかくれに－かたよりて
のわきのにころ－やまとなてしほ
【俵草／書陵部本】／秋／永正 9 年

きりぎりす

朝日

あはれたた－こそたえたえの－きりぎりす
さひさいかに－あさちふのおく
【慶長年間百題 27 題】／□□／【よつのもとき】／嘉政／慶長 18（1613）年 1 月 3 日

ヶ月のさき

かなしけに－はひいててなく－きりぎりす
いねかてなる－つきのさむしろ
【宮長千句】／何舟／【さきすかす】／天文 20（1551）年 5 月 9 日～11 日

のわきたつ－かせをかなむ－きりぎりす
しきわびにたる－つじのさむしろ
【寛永年間百題 15 題】／□□／【まことにこまつ】／寛永／寛永 19（1642）年 1 月 3 日

さりともの－ゆめちもはかな－きりぎりす
ものわひしに－つじのさむしろ
【月村拔句／書陵部本】／永正十三年／

霧の世中

われなたて－あきをうらむ－きりぎりす
おもひやひとつ－つゆのよのなか
【泰佐千句】／何船／【はなやちる】／文明 8（1476）年 3 月 6 日＜8 日＞

すみかたき－かへたたのみそ－きりぎりす
いつつてくさの－つゆのよのなか
【老集／書陵部宗訳集本】／秋／

残る大和桜子

きりぎりす－しもにかかりし－ねもかれて
いつかとのころ－やまとなてしほ
【池田千句】／何田／【をとめこと】／永正 7（1510）年春以前＜永正 5 年春＞

きりぎりす－しめかくれに－かたよりて
のわきのにころ－やまとなてしほ
【俵草／書陵部本】／秋／永正 9 年

きりぎりす

朝日

きりぎりす－なれかなくねに－まけむやは
たへてをする－あさちふのおく
【弘治年間百題 8 題】／何人／【うめひとき】／嘉正／弘治 3（1557）年 1 月 3 日

きりぎりす－なれかなくねに－まけむやは
たへてをする－あさちふのおく
【弘治年間百題 8 題】／何人／【うめひとき】／嘉正／弘治 3（1557）年 1 月 3 日

鳴く蛙蛙

－明かし果てる

あきふけり－なくきりぎりす
ならふる－みをなけきつつ－あかしはて
【元和年間百選第24巻】／□□［ちほのはるを］／裏白／元和4(1618)年1月3日

ゆかにちかよりーなくきりきりす
ものおもふーまくらならなからにーあかし日常

【元和年間百選第24巻】／□□［としとしに］／元和6(1620)年12月5日

*きる

打ち着せたい

→遠方人

おもふにしーうちきせはやのーからころも
をちかたひとのーてつやつゆけき

【天正年間百選第57巻】／何人［ゆくそてに］／天正11(1583)年間1月1日

うちきせはやのーきぬたあやなき
あきさへもーをちかたひとのーてつたたて

【慶長年間百選第27巻】／□□［はるにまつ］／裏白／慶長6(1601)年1月3日

*きわめる

楽しみを極める

→仮のこの世

たのしみをーきはめよとのみーとくるのりに
かりのこのよはーすみもはびめや

【慶長年間百選第6巻】／何人［ししるきに］／永禄4(1561)年5月27日〜29日

たのしみをーきはむろくにはーたのもしや
かりのこのよはーとももかくも

【文明四年歌万万52巻】／二子音／はなはみな／文明14(1482)年7月4日〜9月14日

*くき

鶴の草茎

→国宝

しもしにあたなきーもすのくさくさ
ちりにつきーきりにかせふーはしもみち

【寛永／絵図書類従本】／秋／永永3(1506)年3月頃

ちりきはかなやーもすのくさくさ
はしもみちーかたえのにころーかせたち

【宗長関係8種】／老耳／天理本／
くさ

秋草

→鳴く蟬

よもきふに－あらぬはなある－あきのくさ
なくきてりす－ねをなつくしくそ
【文安月句】／何田【ほしのなも】／文安
2(1445)年8月15日

ここらとや一つゆをもうる－あきのくさ
なくきてりす－ものなおもひそ
【三島千句】／何衣【はなにつき】／文明
3(1471)年3月21日－23日

摘く藻塩草

→海の汀に松の花落る

かくてふるは－たたもしほば
みつうみ－みきはにまつの－はおちて
【論書4種】／宗長／
かきあつるは－たたもしほば
にほのうみ－みきはにまつの－はおちて
【論書4種】／宗牧／

枯れた草が萌え出す

→鶴祝う声

ふゆかれし－みちのしばくさ－もえいてて
のへのかすみに－こまいはふこゑ
【聖毘句】／何田【のころひる】／明応
3(1494)年2月10日－12日

こそかれし－くさはつゆけ－もえいてて
のはさままたき－こまいはふこゑ
【明応年間百話22巻】／何水【あけはの
を】／明応8(1499)年2月19日

草の庵

→山時鳥

さみたれの－一つゆにうるる－くさのいほ
いててやきかふ－やまほとときは
【雄野千句】／山何【おとなしの】／文正
元(1466)年3月以前

草の露

→虫の鳴く声

つきかけに－はなのやとすくさのつゆ
かせいとふらし－むしのなくこゑ
【成立不詳・心敬以前14巻】／何船【は
るはまた】／成立時不詳

ゆふきの－かけはばことの－くさのつゆ
おもひのあるか－むしのなくこゑ
【文明十五年句111巻】／何乗【たきな
みや】／文明15(1483)年8月8日－3月
2日

くさの上のうち

草の戸の内

→待ち花びる

ひとりねつらし－くさののうち
うちすさふ－ころもかたき－まちわびて
【新撰薫断集／実隆本】／恋下／明応
4(1495)年8月26日

すみかるるや－くさののうち
すてしみも－いまはのゆふへ－まちわびて
【壁草／大阪天満宮文庫本】／雅下／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

くさは残らない雪の下折

→野分する庭に月

くさはのこらぬ－ゆきのしたをれ
のわきせし－にはのつつきかへ－よるさえて
【新撰薫断集／実隆本】／秋下／明応
4(1495)年9月26日

くさはのこらぬ－ゆきのしたをれ
のわきせし－にはをしかに－つきてふへて
くさ

くさまくら－かれのにそてを－しきわびて
きけはあらしの－しもをふくそら
【文明年間百選 34 巻】／□□ [はなにくら]／文明 14(1482) 年 2 月 27 日

→長き夜の夢
さらしなや－つゆげきさとの－くさまくら
われをはすつ－かなきよのゆめ
【阿弥陀寺】／何者 [ひそさんき]／文明
2(1470) 年正月 10～12 日

わかやとは－はるかにあきの－くさまくら
かよふやいかか－なかきよのゆめ
【客島寺】／仏師 [はるといへは]／天文 20(1551) 年 5 月 9 日～11 日

→古里の夢
たゆすも－あらしひくよの－くさまくら
いつもはまし－ふるさとのゆめ
【永正年間百選 34 巻】／仏師 [ちりてわか]／永正 2(1505) 年 8 月 22 日

くさまぐら－むすひかねて－あさかすみ
なこははかぬ－ふるさとのゆめ
【永正年間百選 34 巻】／□□ [なっこら]
も／永正 7(1510) 年 4 月 1 日

→夢の面影
あふひとり－あらのはらの－くさまくら
つきをなこりの－ゆめのおもかけ
【毛利寺】／仏師 [よとともに]／永正
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

さきたつや－あたつきちかき－くさまくら
したふもあはれ－ゆめのおもかけ
【天正年間百選 5 7 巻】／仏師 [もしほくさり]
／天正 7(1579) 年 1 月 13 日

→古里軒端
はるあきに－かれはもゆる－しのふくさ
ふるきのきはの－ゆきのむらぎ
【横手／北野天満宮本】／永正十四年／
ものおもふこころひとつのしのふくさ
ふるきのきはのあきのさひしさ
【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

露時雨の草
→渡る雁

つゆしくれーよものがくさきの一いろつきて
たのもにちくくーわたるからかね
【看聞日記紙背 50 巻】／片何 [すくれて
も]／応永 26(1419) 年 9 月 25 日

いつもすのくさぎ
鶴の草茎
→端紅葉

しもにあたまきーもすのくさくさき
ちりにけりーきりにかせふくーはしもみち
【棠草／秋風書類從本】／秋／永正 3(1506)
年 3 月頃

ちきりはかなやーもすのくさくさき
はしもみちーかえにのこるーかせたて
【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

森の下草
→散れ駒

うらかれわかるーよりものしにくさ
つなかるーしつかたなれのーはなれこま
【雑草千句】／何 модель [しのすけ]／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日〈～11 日〉

かけふかなるーよりものしにくさ
たつねえきーあもつなののーはなれこま
【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476) 年 5 月頃

若草枕
→秋更け

わかくさまくらーうつらふすこゑ
ところすきーたひにしあれはーあきふけて
【靑野千句】／何様 [はれてたに]／延文
2(1357) 年以後・応安 3 年 6 月以前

わかくさまくらーつきやつさみ
いたつらにーあきすおばくーあきふけて
【長亭年間百題 6 巻】／何人 [ゆきながら]
／長享 2(1488) 年 1 月 22 日

忘れ訪う草原
→古里

わすれるなよーとはほたるきーくさのはら
たよりはかれにーかかるふるさと
【太神宮法楽千句】／山何 [のははなに]
／長享 2(1488) 年 7 月

わすれすもーとほきあとふーくさのはら
なれこしたそーかかるふるさと
【永正十花千句】／字を反音 [こままなて]
／永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

忘れるなよ
→別れである

はなはまだーなれしをわれもーわするなよ
はるこころなきーわかれならすや
【靑野千句】／何目 [いつももむ]／延文
2(1357) 年以後・応安 3 年 6 月以前

なくさまふーひにもうきよーわするなよ
そふともつひのーわかれならすや
【永正十花千句】／何路 [ゆくつきも]／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

→程は雲居

わすれるなよーたひねにかすむーよはのつき
ほほはくもみのーはつほとときす
【難波庭千句】／□□ [あけはのを]／文
明 14(1482) 年 10 月前後

とほくなるーやとのわかれもーわするなよ
ほほはくもみのーふるさのやま
【雑秋波集／広島大学本】／鷹旗／文和
5(1356) 年冬〜翌年の春

くさ
くに
国に従う
→太和言の葉
きみかよにえひすのくにもいったかひて
こころやはらくやまとことのは
【成立不詳・心経以前14巻】／何草［よ
におはふ］／成立時不詳
くにもたたみちあるよりしたかひて
よるつよまでのやまとことのは
【天正年間百巻57巻】／くく［はなさか
り］／天正6(1578)年3月10日

くも
曙の雲
→後朝の面影をしたう
なつものこちらぬあけほののくも
きぬきぬのおもかけをなほしたひひ
【天正年間百巻57巻】／方□［うらうせ
ぬ］／天正17(1589)年4月2日
ひきすぐにたるあけほののくも
きぬきぬのおもかけしたふよさまくら
【文禄年間百巻12巻】／方□［うめかえ
や］／文禄4(1595)年7月21日

くむ
夜波む杯
→月の下
よさむわせてくめるさかつき
もろともになかめあせるときのもと
【毛利千句】／初何［よい非常に］／文禄
3(1594)年5月12日～16日
よるはすからにくめるさかつき
あくるをしらってともなふときのもと
【平松文庫本千句】／方□［とくるのよのもと

くめ
久米の岩橋
→ただ一言
てらにたれくぬめのいはしつつくらむ
たたひとこもすくにをしよ
【享徳二年千句】／唐何［こころひく］／
享徳2(1453)年8月11日～13日
わたしもてぬくぬめのいはし
つきみへてたたひとこもおもはぬに
【看聞日記紙背50巻】／唐何［いやとし
に］／応永31(1424)年1月25日

くも
暗の雲
→鳥鳴く
つきはほのめくをちかたのくも
しくれせしみよりいつるとりなきて
【飯盛千句】／くく［かけすすし］／永禄
4(1561)年5月27日～29日
ゆきをもよぼすちかたのくも
ところなくすゑののあととりなきて
【明応年間百巻22巻】／何人［あさかす
み］／明応4(1495)年1月6日

くも
→一群
かはなみしろきをちかたのくも
ひとむらのたけのはわけのよはあけて
【称名院道善千句】／何木［としみことの］
／永禄6(1563)年12月14日～18日
くるいるるるるをちかたのくも
ひとむらの一つはさならへてつぶからす
【永禄年間百巻28巻】／何路［あらたま
の］／嘉文／永禄10(1567)年1月3日

昨日の雲
→朝ぼらけ
きのふのくもをわくるむささの
かりねせしかややのゆきのあさぼらけ
【置草／伊地知本】／冬／文明6(1474)年
2月以前
雲の道方
→寒雨の時雨

ゆふびみえすくくものをとちかた
いくたひか一つきまつあきのとしこるらむ
【応仁年間頃6巻】／何人 [ときはきを]
／応仁元 (1467) 年 10 月 17 日

つきもかたふくくものをとちかた
われゆくとそこでやつゆのとしこるらむ
【新撰英検集実隆本】／恋上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

雲の旅橋
→雨

あきかせわたるくものをかけはし
かささきの一つはさもかはすあまのかは
【春日日記箱根第5巻】／何人 [はなのはら]
／応永 27(1420) 年間 1 月 13 日

みるもすましまるくものかけはし
かささきのやまとひこゆるゆふしもに
【宗穂関係2種】／宗穂百句／太田本

雲の絶え間
→霧の嵐

くものたえまにほのくるやま
ふきおくるみねのあらしのとしこくれ
【天文年間頃38巻】／何木 [やまかけ
て]／天文 21(1552) 年 3 月 11 日

ゆくかたつちくものをひととむら
ほとときすのこれるはなをとひとすてて
【天文年間頃38巻】／何路 [あきよたた]
／天文 12(1543) 年 8 月 19 日

うかふあしたくものをひととむら
なきすするーあしたはるるーほとときす
【天文年間頃28巻】／何路 [ことのは
も]／天文 13(1545) 年 1 月 4 日

月の静音
→夜に鶴鳴く

はるくれかたの一つきのむらくも
かへるよのあまひとかくれーかりなきて
【月村村句／香破郎本】／永正十四年／

あきふかわるた一つきのむらくも
かりなきてーよはいねかてのーたまくらに
【合点之句／神宮文庫本】／雑／天文
9(1541) 年 12 月 25 日
わかやまのはのーゆふくれのくも
こころとやーなくねをしまぬーほとときす
【大永四年五月廿三百頃】／□□ [へつたん
なよ]／月並千二百頃／大永 4(1524) 年 3
月 23 日

→峰越える

それもともなるーゆふくれのそら
くもにけふーはなちりはつるーみねこえて
【長野年間百傾 6 巻】／何何 [ゆきながら]
／長野 2(1488) 年 1 月 22 日

すすきやまのーゆふくれのそら
かせさそふーひとむらさめのーみねこえて
【成立不詳・宗祇以前 15 巻】／何何 [き
tにみる]／成立時不詳

→夢の浮橋

よこくものーわからるかたやーかすむらむ
よるちはなのーゆめのうきはし
【熊野千句】／何何 [かさなるや]／文正
・元 (1466) 年 3 月以前

よこくものーのこれをやよもーかすむるひに
さめてそなほもーゆめのうきはし
【文徳十二年千句 8 巻】／何何 [まつりす
る]／文明 12(1480) 年 4 月 10 日～* 日

→春の夜

かすみのまよふーよこくものそら
はるのよーゆめのわかれはーたとたとし
【文徳十四年方句 5 2 巻】／手何 [はふつ
たに]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

ひきわかれてゆくーよこくものそら
はるのよー一つにひとすちーかりとひて
【論書 4 種】／宗長／
くる

秋が来る

一月出る

かせはをきふく－あきはきにけり
くれぬまは－またかけかくす－つきたいてて
【永正十花千句】／何田 [はにこひ] ／永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

くものゆきかひ－あきはきにけり
あさかほに－そらへみゆる－つきたいてて
【享禄年間百題 8 巻】／僧田 [ゆふたちの]
／享禄 5(1532) 年 6 月 8 日

朝来る鴨

→玉薬

あさけしほかに－きぬるうくひす
たますたれ－まけはそとのも－うちかすみ
【天文年間百題 3 8 巻】／何路 [ほときす] ／天文 24(1555) 年 4 月 10 日

あさとあくれは－きぬるうくひす
たますたれ－ひま□のととに－ひのさして
【永禄年間百題 2 8 巻】／□□ [ゆきにうめ] ／永禄 5(1562) 年 2 月 1 日

徒と掛かり来る

→玉の緒の末

あたなりと－おもひなからも－かかりきて
いのらはちも－たまのをのすゑ
【天文年間百題 3 8 巻】／山何 [つきやけさ] ／天文 21(1552) 年 7 月 26 日

ちかひた－あたしょから－かかりきて
ひとひひとの－たまのをのすゑ
【弘治年間百題 8 巻】／何人 [ときはなる] ／弘治 3(1557) 年 8 月 28 日

くもどり

雲鳥の跡

→縁巻の水

ゆくかたきゆる－くもとりのあと
かけあをく－あやおるみつの－かすむひに
【天正四年方句 70 巻】／何物 [きくやいかに] ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

かへるはいつこーむとりのあと
かすみつつ－あやおるみつの－しろきのに
【老集／吉川本】／春／文明 13(1481) 年
夏頃

秋来る

→婦が鳴く

あききぬと－かせもおとはの－みねこえて
たきよりうへ－ひくらしそなく
【大永年間百題 1 4 巻】／何船 [うめかかや] ／大永 3(1523) 年 1 月 9 日

あききぬと－おもひそむるや－いろならむ
あめうちそそき－ひくらしそなく
【新撰英秋改集／実隆本】／秋／明応 4(1495) 年 9 月 26 日
くるま

→うらはる

このあけはほのの－はるはきにけり

まきのを－いてぬにはの－うちかすみ

【成立不詳・心敬以前 14 卷】／何仏 [またしかし] ／成立時不詳

かけひのすゑに－はるはきにけり

くれたけの－ひとよあくれは－うちかすみ

【国産第一／続続続編従本】／春／長栄 2

→梅吹く

このさとまでも－はるはきにけり

ひとしほぬ－やはるまかきも－うめさきて

【国産第一／続続続編従本】／春／長栄 2

こころうれしき－はるはきにけり

あびにあふ－にひまくらかに－うめさきて

【論語 4 種】／宗長／

くるしい

山が苦しい

→老の坂

ちかきかよびも－やまぞくるしき

こしをおし－てをひくほとの－おいのさか

【同様千句】／同路 [ひそさむき] ／文明

2(1470) 年正月 10～12 日

こえてまたある－やまぞくるしき

かさなれる－としにかむかふ－おいのさか

【文明十四年方句 5 冊】／山何 [ことたるは] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月

14 日

くるま

小車の音

→夕顔

めくらすみちの－をくるまのおと

ゆふかほのは－なのさ合いにさくとみて
くれ

秋の雨がつも

→初秋雨

やまかけずきさ—あきのくれた

ふるよりも—あとはみえる—はつしくれ

【延徳年間本冊１６巻】／山出 [あきよこ

をしまぬやは—あきのくれた

つゆはかり—さとひなふる—はつしくれ

【天文年間本冊２６巻】／山出 [あきによ

雨降む雨

→春風

まさるみはや—あめかすむくれ

はるかせの—ふねのはつきも—くち颜らし

【天文年間本冊２６巻】／山出 [あきやき

のへのくもに—あめかすむくれ

はるかせの—よべるにとほき—かねのこえ

【永正年間本冊１巻】／山出 [かさとほく]

→時雨

ふるのをとほみ—あめかすむくれ

さきたかにも—いつはかはかなむ—ほとき

【永正年間本冊１巻】／山出 [おとそなた]／永正

ふちかをりつつ—あめかすむくれ

はつこゑや—よびはかななりに—ほとき

【平松文庫本千冊】／山出 [おちはし]／永正

あめのくれ

雨の暮れ

→山時鳥

あめのくれ—あしたのくもに—うかれてきて

はつねをきくや—やまほととき

【天正四年万冊７巻】／山応 [はつはる

をしまぬやは—あきのくれた

やまほととき—おとつれてゆけ

【新撰幽秘集／盛除本】／山応 [あきかすみ]

→五月雨の頃

はなれその—まつはひとの—かけられて

なかれもふかし—さみたれのころ

【弘治三年春雪千冊】／山応 [さえてたに]

ゆくつは—やまもととくに—かけられて

吹くしくもの—さみたれのこの

【承禄年間本冊８巻】／山応 [あきかすみ]

→春の出

あけぼののみか—かすむゆふくれ

いりあひの—かねにわのへの—つじいてて

【池田千冊】／山出 [おそとく]／永正

つまきのみちの—かすむゆふくれ

しっかりさんまかきのそとも—つじいてて

【大永四年月並千冊】／山出 [すみや

ひぬ]／月並千冊／大永 4(1524) 年 9

→時雨

くれことのそら

→時雨

ふるきをしのふくれことのそら

ほときすーあれたるさを—かくれやらて

【永正十三巻千冊】／山出 [けふぞうな]／永正
春の暮れ

→月出る

まるさとりはしははるのゆふれ
とけわたるみきはごぼるついてて
【延徳年間時御曲11巻】/ 名人/ つかさそ
延徳7(1379)年1月13日

このふむやまのいはるのゆふれ
しかなるいはおのおおゆりついてて
【合点之句/神宮文庫本】/春/天文
9(1541)年12月25日

春の暮れ

→ふる雪

ゆくふねとめよへしこくれぬれ
ふるゆきにやまもかくるるみちのすゑ
【延徳年間時御曲11巻】/名人/ つかさそ
延徳4(1492)年4月8日

かはせさむみへしこくれぬれ
ふるゆきに一つまきこをのたにみち
【大永年間時御曲11巻】/名人/ ちあきを
大永5(1525)年9月21日

春の暮れ

→香の花

ものふかきーたけよりおくにへはくれて
とよらのにしのへはふるれ
【延徳年間時御曲11巻】/名人/ みたれけ
延徳4(1492)年8月19日〜21日

みちのへの一へきかたたーもへはくれて
とほそきここへすいへいのあいのすゑ
【伊予千句/四路/ みたれの】/天文
6(1537)年5月22日
くれ

→吹く風
つきたついつる→ひはくれにけり
きりはるる→おきついまそき→ふかけに
【享保二年句】／何人 『つきたたか』／
享保 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

はれみくもりみ→ひはくれにけり
たけのはの→おきふすのは→ふかけに
【因緣句】／何船 『そのやゆき』／文明
7(1475) 年 11 月 26 日～28 日

日暮れに伴う
→歌う声々
くるるひに→かへるきこりの→とまなひて
ふしもひとつに→うたふこゑこゑ
【因緣句】／何木 『ゆきともる』／文明
7(1475) 年 11 月 26 日～28 日

くるひとの→ひのくるるまで→とまないて
むかひてつきに→うたふこゑこゑ
【文明十四年万句 5 2 卷】／初何 『はるそ
てに』／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

蝋訪う暮れ
→月はまだ
かはかみより→やたるとふくれ
つきはまだ→いてぬひかりの→みねこえて
【永禄年間百錦 28 卷】／何路 『なつくさ
の』／永禄 9(1566) 年 5 月 9 日

たもののはらに→はたるとふくれ
つきはまた→おそき→やまの→あめ●●
【寛永年間百錦 15 卷】／何船 『まつにこ
まつ』／寛永 17(1640) 年 1 月 3 日

宿の夕暮れ
→花の陰
くさかれるをかの一→とのゆふくれ
たちよむ→こまっかゆく→はなのかけ
【竹林抄 『新古典文学大系本』】／春／文明
8(1476) 年 5 月頃

あらざひしき→やとのゆふくれ
たかためか→ゆきをはらはむ→はなのかけ
【今年間百錦 2 卷】／春／応仁元 (1467) 年 5 月 10 日

夕暮れの雲
→時雨ける
をのへのにる→ゆふくれのくも
やまさとや→はるるともなく→しくるらむ
【延徳年間百錦 16 卷】／何人 『はなやあ
らぬ』／延徳 2(1490) 年 2 月 25 日

へたつるかたの→ゆふくれのくも
やまとりの→をのへのまつや→しくるらむ
【大永三年月並千二百錦】／何人 『はなく
つき』／月並千二百錦／大永 3(1523) 年 3 月 23 日

→時鳥
なかめこそやれ→ゆふくれのくも
きのふかも→なきつつきさし→ほとときす
【天文十八年梅句】／何人 『しきくさへ』
天文 18(1549) 年正月 11 日

わかやまのは→ゆふくれのくも
ところと→やなくねをしむぬ→ほとときす
【大永四年月並千二百錦】／何人 『へたつ
なよ』／月並千二百錦／大永 4(1524) 年 3 月 23 日

→峰越える
それもともなる→ゆふくれのそら
くもにけふ→はならちはつる→みねこえて
【長享年間百錦 6 卷】／何人 『ゆきながら』
長享 2(1488) 年 1 月 22 日

すすきやまのは→ゆふくれのそら
かせさふ→ひととむらきの→みねこえて
【成立未詳・宗祇以前 15 卷】／何船 [き
たにみる]／成立時不明

夕暮れの空
→なる
やまずみゆかき—ゆかくめのそら
いつしかも—まなくしれに—あたりぬらむ
【永年元年百選34巻】／何路／【あきのかせ】／永正8(1511)年7月14日
つつくむかふゆかくめのそら
きえにくは—いつれよくもと—なりぬらむ
【園庭第三／続群書類従本】／野上／文亀元(1501)年3月18日

→時鳥

あつきひしのく—ゆかくめのそら
ひとをも—まれになりたる—ほどときす
【永禄元年刊千句】／【さそふなよ】／永禄元(1558)年3月23日～25日
そこなはの々のゆかくめのそら
ほとときす—あしこしのひに—なききすぎて
【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明8(1476)年5月頃
うらみをかくる—ゆかくめのそら
ほとときす—またせぬてたまひとところに
【壁草／大阪天満宮文庫本】／野上／永正2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

→山里

なくさめかねつ—ゆかくめのそら
やまさはと—ことわりよりも—さひしれて
【竹林抄／新古典文学大系本】／野上／文明8(1476)年5月頃
あしたのかすみ—ゆかくめのそら
やまさはと—はなのはひに—ひとりのこり
【論書4種】／宗永／

→我が心

なかめわひぬる—ゆかくめのそら
さらとも—おもひなれそ—わかこころ
【竹林抄／新古典文学大系本】／恋下／文明8(1476)年5月頃
おもひなけそ—ゆかくめのそら
こひしこも—たかなすこと—わかこころ

くれない

くすの梅

→贈

しぐきかのちの—くれなおのうめ
うくひすの—しもにあさひを—まちとりて
【大原野へ千句】／何路／【ひとどつつ】／元亀2(1571)年2月5日～7日
あかぬかめや—くれなおのうめ
うくひすの—みきは—はなせず—こそはして
【元和年間百選24巻】／【やっかはの】／元和6(1620)年8月23日
ゆきをやそむる—くれなおのうめ
うくひすの—のきのきはのめに—なきさて
【文明十年万句5巻】／何路／【たまやとり】／文明14(1482)年7月4日～9月14日
けむり
薄煙
→秋の一本
うすけふりーもささへしきたのにおく
こけふむいのは～まつのひととも
【博越時分下・白和・はるかにし・文永
2(1470)年正月10〜12日
のへのくれーたけもなひけるーうすけふり
たかずむのきそーまつのひととも
【文明十四年万方5号2号・応国・ほどと
きす】文永14(1480)年7月4日〜9月
14日
思いの煙
→秋の暮れ
おもひのけふりーもそとたにみよ
ふねとむるーなたのしややーあきのくれ
【老著・書房郎栄之筆本】秋
おもひのけふりーふしはかりかは
つきふふーふしのはぞーあきのくれ
【名所句集・静嘉堂文庫本】秋（文永
前後）
消える煙
→朝雲

きえむけふりのーはてもはかなや
もしかむーうちにとしきるーさよらへに
【伊勢四万・白衣・さめてはず】文永
2(1522)年8月4日〜8日
きえむけふりのーゆくへをそまつ
もしかむーそとおへきをーたのむよに
【明応四万年五号2号・若人・かきりさ
へ】明応8(1499)年3月20日

こしいし
妹が恋して
いもこひしらにーみるゆめもなし
よるなみをーいそのもくらにーかたしきて
【浅間時分下・白木・さしたやと】文永
11(1514)年8月13日〜19日
いもこひしらにーかりふしのそら
つきやとーもしほのまくらーかたしきて
【天文四万年五号3号・白船・あかかほ
に】天文12(1543)年7月29日

妹に恋いつつ

消える煙

のやまもつらーいにこひつつ
くさまくらーよるはゆめちもーいくわかれ
【成立不詳・宗長以前 15 巻】／xx [さ
みたれや]／成立不詳

いもにこひつつ－そこでさえゆく
くさらくゆふしもはらひ－たれとねむ
【那智倉／北野天満宮本】／永正十二年／

都が厳しい

→鳴く時鳥

むかしになら的－みやこひしも
つきそむ－なきてきつらむ－ほどとときす
【享禄年間百錦 8 巻】／何時 [はるのひろ]
／享禄 5(1532) 年 1 月 18 日

いやとぼくなり－みやこひしも
なきすて－くさくのまくるの－ほどとときす
【天文年間百錦 38 巻】／何人 [にほがか
つ]／天文 13(1544) 年 1 月 29 日

こえ

おきやせのこえ
秋風の声

→影差しい

やなぎにたかき－あきかせのこゑ
かけさひし－かりなきわたる－ゆふつくよ
【三島十千 / 何衣 [はなにつき]／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

このくれよりの－あきかせのこゑ
みにみて－いくたのもりの－かけさひし
【宗長関係 8 巻】／老耳／天理本／

→身にしめる

なみたすむる－あきかせのこゑ
ものおよへ－うくものはただも－みにしみて
【巻渡田千句】／□□ [あくろを]／文
明 14(1482) 年 10 月前後

このくれよりの－あきかせのこゑ
みにみて－いくたのもりの－かけさひし
【宗長関係 8 巻】／老耳／天理本／

天彦の声

→時鳥
いつくかねくら－うくひすのこゑ
あさまたき－けふのちちかく－かすむらむ
【文明十五年九月廿一日】／二未返音 [は
なばほの]／文明 15(1483) 年 9 月 21 日

→うづたたむ

なれてひさしき－うくひすのこゑ
くれたけの－かけもちひろに－うちかすみ
【天文廿四年六月十六日】／二未返音 [は
なばほの]／天文 24(1555) 年 6 月 16 日

いまこそなけな－うくひすのこゑ
すゑなひく－ひとむたらけの－うちかすみ
【文明十四年四月廿四日】／二未返音 [ま
つうき]／文明 14(1482) 年 4 月 4 日～ 9 月 14 日

かきねをした－うくひすのこゑ
のきはせ－はるけきみねに－うちかすみ
【天文四年四月廿日】／二未返音 [は
なばほの]／天文 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→うつにやく馬

すのうちになく－うくひすのこゑ
まつにはふ－みなみのえたに－うめなさて
【天文以前百篇 7 巻】／二未 [ちりぬるか]
／天文 4(1387) 年以前

かすみにならば－うくひすのこゑ
しもはかつ－えきかえた－のうめなさて
【天文年間百篇 3 巻】／二未 [こよひま
つ]／天文 20(1551) 年 9 月 12 日

やとからさひし－うくひすのこゑ
あさちふに－ひとともたてる－うめなさて
【竹林抄／新古典文学大系本】／明／天文
8(1476) 年 5 月頃

→うつにつ

わかやととはぬ－うくひすのこゑ
かすみつつ－ありあげのころ－やまにねて
【聖螺千句】／初何 [きのふより]／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

いつちこった－うくひすのこゑ
かすみつつ－しものしつくの－おとはして
【成立不詳・宗像長前 1 巻】／二未 [や
まみつは]／成立時不詳

→霞む野

うめかかなれや－うくひすのこゑ
なくさめと－あれたるむらも－かすむのに
【明応年間百篇 2 巻】／二未 [たますた
れ]／明応 5(1496) 年 6 月 7 日

うめかとむる－うくひすのこゑ
しもふかき－あかたとほひ－かすむのに
【天文年間百篇 3 巻】／二未 [あさかほ
に]／天文 12(1543) 年 7 月 29 日

→霞台

はるまたさむき－うくひすのこゑ
たにのと－やけしきはかりに－かすむらむ
【伊予千句】／山何 [やとりけ]／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

いつくかねくら－うくひすのこゑ
あさまたき－けふのちちかく－かすむらむ
【文明十五年四月廿一日】／二未返音 [は
なばほの]／文明 15(1483) 年 9 月 21 日

→ことなく霞む

やなきうきね－うくひすのこゑ
そこなく－かすみなひき－あくるように
【天文年間百篇 3 巻】／朝何 [たまだけ
く]／天文 9(1540) 年 4 月 25 日

はねうちかは－うくひすのこゑ
そこなく－かすむのもせの－むらすすめ
【文明四年四月廿四日】／初何 [そくち
か]／天文 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日
かれねのやまはうくひすのこゑ
はらひゆーたもとはなるのゆききえて
【天文二年三月千句】/ 何別 [うめつく]
天文 24(1555) 年正月 7 日
かすみのうちのうくひすのこゑ
ありあげの一きにうちるるゆききえて
【天文三年三月千句】/ 何別 [かげみえ]
天文 13(1545) 年閏 11 月 25 日

→夜半の月
かすむあしたのうくひすのこゑ
のとかのもーねやのとをしけよいはのつき
【天文二年四月千句】/ 何別 [うらかせ]
天文 24(1555) 年正月 7 日
あくれはちかきうくひすのこゑ
まきののーそともはうすきよいはのつき
【天文四年五月千句】/ 何別 [ひとつつ]
裏白 / 天文 18(1590) 年 1 月 3 日

→春の野
たれすきてのうくひすのこゑ
はるののにーころもみゆるーこまとて
【天文三年五月千句】/ 何別 [うらかせ]
天文 13(1545) 年 6 月
たつねてゆかむうくひすのこゑ
たれなくーいへゆかきーはるのに
【壁紙 / 大阪文書文庫】/ 春 / 天文 2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

鹿鳴の声
→快眠された月
あかつきさひしーをしかなくこゑ
ねさむれはつぎすむあきのーころからしに
【経華父度春千句】/ 何別 [かげたかき]
天文 24(1555) 年 3 月 26 日〜毎日
かすかりけりーをしかなくこゑ
ねさむれはつぎはありあげの一まくらにて
【大日一月千句】/ 何別 [はなさへ]
天文 9(1581) 年 11 月 19 日
かえ

帰りに駒祝う声
→都人

ひくれてかへる－こまいはふこるあ
あふさかを一つもゆるや－みやこひと
【大永年間百駒四十巻／作人 [ゆきのうちに]／大永 5(1525)年 1月25日

たかかへるささ－こまいはふこるみやこひとり－うちむけふのがせきむかへ
【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

帰る雁の声
→哀れを言う

ひとつや－かへりおくるる－かのこゑあ
あはれをいはは－わがたびのそて
【表幸千句／作人 [はなにいる]／文明
8(1476)年3月6日＜～8日＞

かへるさや－きぬにかはる－かのこゑあ
あはれをいはは－はるのしののめ
【皇學館文庫本千句】／□□ [ちばははな]
／永禄 6(1563)年11月18日以前

かのこゑ

雁の声
→霞こめる

やまたかみ－きたにたなびく－かのこゑはるのふもとは－かすみこめつつ
【大神宮楽楽句千句】／作人 [しかねを]
／長享 2(1488)年7月

かこりもや－おほよのなみに－かのこゑかすみこめつつ－うらのつりふね
【成立不詳・宗厳以前8巻】／□□ [つゆはそての]／成立時不明

かのこゑ

雁の声々
→移ろう

くもまおおる－かのこゑあ
あきのの－ほのかにつきも－うつるびて
【新撰兼歌集／実隆本】／秋上／明応
4(1495)年9月26日

おくれさきたつ－かのこゑあ
すゑのつゆ－もあらのこゑき－うつるびて
【老集／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃

かのひこゑ

雁の一声
→秋更る

なこりもさむき－かのひこゑ
それとなく－よはのけしみも－あきふけて
【文亀年間百駒4巻／作人 [きえしの]／文亀 2(1502)年8月6日

まくるおとろく－かのひこゑ
いなむしろ－つゆしきあへす－あきふけて
【文亀四月並千二百駒】／作人 [うめの
はな]／月並千二百駒／大永 4(1524)年1月23日

かのこゑ

声する
→雲い捨てる

のをとばみて－つきてにすかるの－ことゑすなり
かこひすてたる－つゆのふるあと
【五吟一日千句】／作人 [いそなみ]／
天正9(1581)年11月19日

あさほらけ－さへつるの－ことゑすなり
かこひすてたる－しこかははしろ
【天正年間百駒57巻】／作人 [かはらめや]
／天正 18(1590)年1月9日

かのこゑ

声の寒さ
→秋の風

とわたるかの－ことゑのさわけさ
ふけにけり－しよのもつきに－あきのかせ
【明応年間百駒22巻】／作人 [たすたれ]／明応 5(1496)年6月7日

あさはむとり－ことゑのさむけさ
ぬさらしき－たびつてきの－あきのかせ
【心歌関係10種】／芝草内連歌合／松平
文庫本

かのひこゑ

さし鹿の声
→如何はかり
ちしばとこまる－さをしかのこゑ
ささのはの－みやまはおくも－いかはかり
【永正年間百名詩 34 卷】／經文（しげなさ
めて）／永正 4(1507) 年 11 月 3 日
さそふかつきに－さをしかのこゑ
おきいてむ－やまののつゆの－いかはかり
【永正年間百名詩 34 卷】／何人（すすしさ
や）／1510(1510) 年 8 月 9 日

→月の小夜更ける

ふもにたくる－さをしかのこゑ
tきのころ－くもにあらしの－さよふけて
【月名雑記】／何船（やまかせに）／文明
2(1470) 年正月 10～12 日
あなるみねの－さをしかのこゑ
tきははや－いるさのやまの－さよふけて
【文永三年月並千三百篇】／□□（ことる
なよ）／月並千三百篇／文永 3(1523) 年 7
月 23 日

→露落ちる

みやまのあきの－さをしかのこゑ
わけまふふみちはきりふる－つゆおちて
【石山四時記】／何木（おくつゆの）／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日
かりほにちかき－さをしかのこゑ
もるをたの－いなはしとつゆおちて
【称名寺連歌 3 卷】／□□（つきはあき）
／正徳元 (1332) 年 9 月 13 夜

→なる

わかゆふへまつ－さをしかのこゑ
くもそある－つよりつきに－なりぬらむ
【文安雪千句】／初町（ふりしける）／文
安 2(1445) 年 10 月 18 日
ふけくつつきに－さをしかのこゑ
くさまくら－いつよさむに－なりぬらむ
【浅間千句】／唐町（はなといはば）／永
正 11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

→野が違い

をりしりかほの－さをしかのこゑ
かりすべて－ひとのこらぬ－をとほみ
【出陣千句】／何木（しめなから）／永正
元(1504) 年 10 月 25 日～27 日
まちけるやのは－さをしかのこゑ
たたりの－あかしかねたる－をとほみ
【天正四年方句 70 卷】／何船（とふとり
の）／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→秋寒い

きりのうちなる－さをしかのこゑ
むらすすき－みたれあひてや－ちりぬらむ
【飯盛千句】／何船（ありあかや）／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日
ふしどしらる－さをしかのこゑ
あれわたる－たなかはしきを－むらすすき
【文禄年間百名詩 12 卷】／□□（あめのひ
の）／文禄 2(1593) 年 5 月

猿叫ぶ声

→鍾虫の声

ちびれやこうこ

鈴虫の声

→振延える

たつおふるの－すずむしのこゑ
つきにはと－ちりしかたに－ふりはへて
【享徳二年句】／何人（つきたたか）／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日
すすきやもとの－すずむしのこゑ
ふりはへて－ゆくやたもとの－かせならし
【永禄元年花千句】／□□（たきなみも）
／永禄元 (1558) 年 3 月 23 日～25 日
蝉の諸声

→唐表

やまやさつきの→せみのもろこえ
すすしさは→たあきかせの→からまで

【永正十一年詔書】／に字の言葉【こままねて】／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

さよのしくれか→せみのもろこえ
からこるも→もつもも→もうちぬれて

【文永十四年五月詠句】／何木 [あきの
ひも]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

竹を打つ声

→夜更ける

あられときとき→たけをうつこえ
ねぬとりよ→あなかよもは→ふけぬらむ

【伊豆国の歌】／に字の言葉【ちりやすき】／
大永 4(1524) 年 3 月 17 日～21 日

ゆふへのあめの→たけをうつこえ
いつのまに→あられふるよの→ふけぬらむ

【竹林抄／新古典文学大系1】／冬／文明
8(1476) 年 5 月頃

千鳥鳴く声

→思いかねる

ゆくかたをなみ→ちとりなくこえ
おもひかね→たつぬるみちに→さよふけて

【三島千詠】／説解 [なんてよの]／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

よふねにきくは→ちとりなくこえ
おもひかね→いおぬねたひを→しるままに

【道徳以前百詠 7 巻】／何木 [かみかきの]／
道徳 4(1387) 年以前

とりのこえ

→雨の名残

とりのこえ→のきはにかすむ→あさほらけ
あめのなこり→ひはのとかかり

【文永年間百詠 5 巻】／□□ [すたまれ
け]／文永 15(1587) 年 1 月 10 日

鳥の声

→暮れる

さるかたしらぬ→とりのこえこえ
くれぬれは→あたりのやまも→きりこめて

【文永年間百詠 3 巻】／説解 [ほっとき
す]／文永 24(1555) 年 4 月 10 日

ねくらもむる→とりのこえこえ
くれぬれは→つきになるかと→よをまちて

【文永十四年五月詠句】／山何 [なほさ
こそ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

→月落ちる

またいつはの→とりのこえこえ
あふさかや→せきちこゆれは→ときおちて

【文永年間百詠 3 巻】／何木 [あさかほ
に]／文永 12(1543) 年 7 月 29 日

あくるをつくる→とりのこえこえ
たちささき→からすなくよの→ときおちて

【文安年間千詠 4 巻】／に字の言葉 [はなをりて]

→野が遠い

あけわたるよの→とりのこえこえ
かります→つきにおきゆく→のをとほと

【石山寺詠句】／説解 [もろひの]／
文永 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

かへるささふ→とりのこえこえ
あめはるる→あとはひのさす→のをとほと

【永禄年間百詠 2 巻】／何木 [いへはえ
に]／永禄 6(1563) 年 2 月 23 日

とりのこくこえ

→鴨の啣

よなさかいつら→とりのこくこえ
せきのとき→もみちむしを→しきてすて
【文禄年間回題 12 卷】□□□ [たかにはも] / 文禄 2(1593) 年 5 月 27 日

いつくのそらそーとりのなくごふ
せきのとのーまつあわけたるーゆきはれてて
【諸家別伝抄】/ 諸家月次連歌抄 / 成
立 () 年末詳

鳥の一声
→時鳥

はるかにすくるーとりのひとつね
しづかなるーよはのけしきやーあのねるま
【天文年間回題 38 卷】/ 何人 [なやここに] / 天文 4(1535) 年 5 月 1 日

はつかになりぬーとりのひとつね
またれつるーなさめのそらやーあのねるま
【天文年間回題 38 卷】/ 何路 [ささかほの] / 天文 10(1541) 年 7 月 29 日

→海人小舟

初雁の声

はふゆくもーはつかりのこゑ
なかめやるーうみへしつけきーあまをふね
【弘治年間回題 5 番】/ X X [のりのこえ] / 弘治 2(1556) 年 9 月 10 日

→山の陰

蛹の声

なみたあらそふーさをしかのこゑ
つきにいまーさはれわたるーかりなきて
【明応年間回題 22 卷】/ 何人 [としにありて] / 明応 9(1500) 年 7 月 7 日

なみたあらそふーむしのこゑこゑ
こはきはらーうつろゆふーへーかりなきて
【文禄三年月並千三編】/ □□ [はるをまつ] / 月並千三編 / 文禄 3(1523) 年 11 月 23 日

→夕月夜

はやしらつゆにーひくらしのこゑ
ゆふつくよーあきかせかぬーやまもなし
【文原年間回題】/ 何色 [うつろはぬ] / 明応 9(1500) 年 7 月 17 日

ややものさひーひくらしのこゑ
やまのはーげまたかけうすきーゆふつくよ
時鳥の声
～春の驚～
かへるさを～いまひとかゑの～ほどときす
なこりやをしむへ～はるのうくひす
【宮城学問文庫千句】／□□（はなにいそき）／永禄 5(1563)年 11月 18日以前
ほとんどす～ひとえをさへ～またせきて
かもさへつりは～はるのうくひす
【永禄年間百韻 28巻】／何師（ににおかへる）／永禄 4(1561)年 3月 22日

松風の声
～秋の夜～
したくさかる～まつむしのこゑ
ににしおふ～あらしのやまの～くれわた
【文安頃千句 4巻】／朝何（すゐとほき）

松虫の声
～秋更ける～
むしこえ～のころまかきの～はおちて
こさゑうつろひ～あきはふけり
【永正年間百韻 34巻】／近徳（なけくか）／永正 8(1511)年 1月 21日
【葉宿千句】／何路 [しるくやと] ／長華
元 (1487) 年 10 月 9 日＜～11日＞

つねてても～あかすよぼそき～むしのこゑ
あさなあさにん～あきはふけり
【成立不詳・心敬以前 14 巻】／何路 [しろたへの] ／成立時不詳

一露が乱れる

むしのこゑ～きけはいまはた～をりはて
ゆふくれふかき～つゆそみたる
【大永三年月並千三百編】／□□ [あらた
まの]／月並千三百編／大水 3(1523) 年 12
月 23 日

みちのへに～なきよわりる～むしのこゑ
ゆけはもすそに～つゆそみたる
【文明十四年句末 52 巻】／編何 [つきひ
とつ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

→群薄

かれのにも～なほかたのむ～むしのこゑ
ひとむらすすき～ちりなくせし
【三島千句】／何路 [なへてよの] ／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

わびしきは～かれのこりたる～むしのこゑ
ひとむらすすき～うちなひくけ
【元和～8 千句】／何路 [いのすみ] ／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

むしのこゑこゑ
虫の声々
→小萩原

なみたあらそふ～むしのこゑこゑ
こはきはら～つるふゆふへ～かりなきて
【大永三年月並千三百編】／□□ [はるを
まつ]／月並千三百編／大水 3(1523) 年 11
月 23 日

あきのゆふへの～むしのこゑこゑ
あかすも～なかまるはなの～こはきはら
【天正年間百額 57 巻】／何人 [わかくさ
も]／天正 11(1583) 年 1 月 10 日

→吹く風

つゆもあたなる～むしのこゑこゑ
かりまくら～よさむのつきを～ふくかせに
【永禄年間百額 28 巻】／□□ [ゆきにう
め]／永禄 5(1562) 年 2 月 1 日

あきはすゑのの～むしのこゑこゑ
しもかれの～をはなくすはな～ふくかせに
【宗傾関係 2 編】／宗傾百句／太田本／

こえる
岩越す浪

→眼落ちる

いはこすなみは～まつのあらしか
ちるをみる～やまにはなの～たきおおて
【毎秋波集／広島大学本】／春下／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

いはこすなみは～かはせそふく
あらざその～うへなるやまに～たきおおて
【老集／吉川本】／雑上／文明 13(1481) 年
夏頃

字津の山越

→秋の風

つきにももよふ～うつのやまこえ
しもはふ みちのゆくして～あきのこせ
【延徳年間百額 16 巻】／初何 [さけはさ
く]／千葉第三／延徳 4(1492) 年 3 月 3 日

あはれはおなせ～うつのやまこえ
ふるさとの～ゆふへなりけり～あきのこせ
【大永四年月並千二百編】／□□ [へたつ
よ]／月並千二百編／大水 4(1524) 年 3
月 23 日

越える逢坂の関

→木賜れる

いつこえつらむ～あふさかのせき
しけくなる～なせきにわかみ～ここかくて
【住吉千句】／何木 [つきはつゆ] ／大永
元 (1521) 年 11 月 1 日～14 日
このおり

越える逢坂の山

→都の春風

こゆるそらきーあふさかのやま
へたつなよーかへりみやこのーはるかすみ

【文安元年春句】／／両路 [なほつれ]／文安 2(1445) 年 10 月 18 日

こゆるなこりやーあふさかのやま
みやこよりーあたまりゆくーはるかすみ

【弘治三年春句】／／河木 [はなられた]／弘治 3(1557) 年正月 7 日~9 日

年越える

→寒む踏

きのふよりーかせさへよわるーとしこえて
いりあひのかねのーかずむあけの

【和歌千句】／／河船 [やまかせに]／文 2(1470) 年正月 10~12 日

たかさともーけふあらたまるーとしこえて
やまのあさまのーかずむあけの

【紫野千句】／／河人 [さきでちる]／（元 龟 4）天正元 (1573) 年正月 9 日~11 日

水越える

→渡の浮橋

のをめくるーゆおのかはきしーみつこえて
うへにゆきふるーなみのうきしは

【紫野千句】／／河物 [しにくさの]／延文
2(1357) 年以後・応安 3 年 6 月以前

さみだれにーはへのなかれーみつこえて
ふめはあやふきーなみのうきしは

【国崎千句】／／山何 [ふるゆきは]／文 7(1475) 年 11 月 26 日〜28 日

このおり

越初める

→越ふる

あらしよりまつーこほりそめけり
ころもてにーしげつははかりーしもふりて

【文安四年春句】／／山何 [うかなひき]／文 2(1446) 年正月 7 日

いはねやとたりーこほりそめけり
うちわたすーまへのたなはしーしもふりて

【安政年間句】／／河人 [くもはれ]／安政 5(1496) 年 8 月 22 日

のぞむこおる

→知らな

そのこほりはーわれそくらしき
よかれしやーわふるまくらもーしらさらむ

【文安年間句】／／山何 [たちはなに]／文 18(1521) 年 5 月 7 日

そのこほりはーいつとてまし
ものおふーここころはるもーしらさらむ

【平成写眼句】／／河船 [なひきそはむ]／平成 10(1882) 年 1 月 5 日

月が氷る

→虫の音

ちはらかつゆのーつきそこほるる
むしのねをーたもとにかくるーよはけって

【和歌千句】／／河船 [やまかせに]／文 2(1470) 年正月 10~12 日
みならからつゆの一つきそこはるる
むしのねを～まそてにえらふへよはふてて
【弘治年間百選 8 巻】／何人 [うのはなの]
／弘治 2(1556) 年 4 月 27 日

→夜が更ける

ちはらかつゆの一つきそこはるる
むしのねを～たもとにかくるよはふてて
【何越千句】／何船 [やまとせに] ／文明 2(1470) 年正月 10～12 日

みならからつゆの一つきそこはるる
むしのねを～まそてにえらふへよはふてて
【弘治年間百選 8 巻】／何人 [うのはなの]
／弘治 2(1556) 年 4 月 27 日

こがらし

木枯しの風

一笛の音

ふきもたゆまぬ～こからしのかせ
ふえのねは～さそはれかへる～ちここと
【天文廿四年梅千句】／何木 [つうそへよ]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

ろじにふきいる～こからしのかせ
ふえのねは～とめもあへぬ～をくるまに
【天文年間百選 38 巻】／何人 [ゆふかけ]
／天文 11(1542) 年 5 月 7 日

→山の秋暮れる

ひとりさひしき～こからしのかせ
よにとほく～こもるみやまの一ひきれて
【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明 8(1476) 年 5 月頃

いといはけしき～こからしのかせ
しれゆく～ふかくさやまに～あきれてて
【老集／吉川本】／秋／文明 13(1481) 年
夏頃

ここのにこらしめ

同じ心

→よしえ

おなしここに～たのむはかなさ
よしやとて～またすはひとの～とひやせむ
【基佐集／静嘉堂文庫本】／恋／永正 6(1509) 年以前

おなしここに～おもはぬそうき
よしやとて～うらみつれは～ゆふまくれ
【基佐集／静嘉堂文庫本】／恋／永正 6(1509) 年以前

かわれるよのなか

変わる世の中

→夏衣

ひとのこころの～かはるよのなか
なつころも～はるのはなぞめ～ぬきすてて
【雛桜祭百句付／雛桜祭百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下
さめておうちに～かはるよのなか
なつこも～ついたちきたるる～よはあって
【新続大筑波検／夏／万治 3(1660) 年正月

ここにならしあうた

心争う歌

→驚の声々

ここらからうたのちくちく
はるされは～うくひずかはつ～こらえねに
【初瀬千句】／何人 [しけるとも] ／享德元2(1452) 年 4 月
ここほあらそふーうたのかちまけ
こふろさにーなしくひすをーこにいれて

【文明十四年方句52巻】／国司／[かせのり／文明14(1482)年7月9日～9月14日]

心浮かれる
→燈の音

ここほつくしのーふなていそくな
なみのおとーとまやにちかきーまくらして

【天正三年百錦57巻】／□□／[ともなしに／天正18(1590)年11月21日]

こふろつくしのーおきつぶつなと
なみのおーつきにあれゆくーあきはてて

【信楽／北野天満宮本／永正十四年／

ここほあらなかい
→はかった

ひとさわかすもーこころなりけり
しらさむーことをはいかてーかこつらむ

【太音千歌千句】／何木／[いつぞめし]／長享2(1488)年7月

たのぬはかなきーこころなりけり
さけはるーはなとはたれかーしらさるむ

【東山千句】／何路／[のあきせし]／永正15(1518)年8月10日〜12日

ここほあらなない
→はかった

おもひたえよーこころうらめし
つれなくーみえぬものからーときにかくに

【老集／毛利本】／若下／(文明17(1485)
年7月23日頃)

ここほますけせのーこころうらめし
つれなくーたれあさかほのーなもみむ

【国慶第四／早稲田大学本】／秋／永正6,7

ここほあらまどのうち

心が窓の内

→火の影

しつかねれーこころをしむーまどのうち
かせふくよるーともしみひのかけ

【文正三年百錦20巻】／何人／[はなか
く／文正3(1462)年1月25日

いつおもひーたえむこころそーまどのうち
かかってはまつーともしみひのかけ

【合点之句／神宮文庫本】／冬／天文
9(1541)年12月25日

ここほつくし
→燈の音

ここほつくしのーふなていそくな
なみのおとーとまやにちかきーまくらして

【天正三年百錦57巻】／□□／[ともなしに／天正18(1590)年11月21日]

こふろつくしのーおきつぶつなと
なみのおーつきにあれゆくーあきはてて

【信楽／北野天満宮本／永正十四年／

ここほあらなかい
→はかった

ひとさわかすもーこころなりけり
しらさむーことをはいかてーかこつらむ

【太音千歌千句】／何木／[いつぞめし]／長享2(1488)年7月

たのぬはかなきーこころなりけり
さけはるーはなとはたれかーしらさるむ

【東山千句】／何路／[のあきせし]／永正15(1518)年8月10日〜12日

ここほあらなない
→はかった

おもひたえよーこころうらめし
つれなくーみえぬものからーときにかくに

【老集／毛利本】／若下／(文明17(1485)
年7月23日頃)

ここほますけせのーこころうらめし
つれなくーたれあさかほのーなもみむ

【国慶第四／早稲田大学本】／秋／永正6,7

ここほあらまどのうち

心が窓の内

→火の影

しつかねれーこころをしむーまどのうち
かせふくよるーともしみひのかけ

【文正三年百錦20巻】／何人／[はなか
く／文正3(1462)年1月25日

いつおもひーたえむこころそーまどのうち
かかってはまつーともしみひのかけ

【合点之句／神宮文庫本】／冬／天文
9(1541)年12月25日

ここほつくし
→燈の音

ここほつくしのーふなていそくな
なみのおとーとまやにちかきーまくらして

【天正三年百錦57巻】／□□／[ともなしに／天正18(1590)年11月21日]

こふろつくしのーおきつぶつなと
なみのおーつきにあれゆくーあきはてて

【信楽／北野天満宮本／永正十四年／

ここほあらなかい
→はかった

ひとさわかすもーこころなりけり
しらさむーことをはいかてーかこつらむ

【太音千歌千句】／何木／[いつぞめし]／長享2(1488)年7月

たのぬはかなきーこころなりけり
さけはるーはなとはたれかーしらさるむ

【東山千句】／何路／[のあきせし]／永正15(1518)年8月10日〜12日

ここほあらなない
→はかった

おもひたえよーこころうらめし
つれなくーみえぬものからーときにかくに

【老集／毛利本】／若下／(文明17(1485)
年7月23日頃)

ここほますけせのーこころうらめし
つれなくーたれあさかほのーなもみむ

【国慶第四／早稲田大学本】／秋／永正6,7

ここほあらまどのうち

心が窓の内

→火の影

しつかねれーこころをしむーまどのうち
かせふくよるーともしみひのかけ

【文正三年百錦20巻】／何人／[はなか
く／文正3(1462)年1月25日

いつおもひーたえむこころそーまどのうち
かかってはまつーともしみひのかけ

【合点之句／神宮文庫本】／冬／天文
9(1541)年12月25日

ここほつくし
→燈の音

ここほつくしのーふなていそくな
なみのおとーとまやにちかきーまくらして

【天正三年百錦57巻】／□□／[ともなしに／天正18(1590)年11月21日]

こふろつくしのーおきつぶつなと
なみのおーつきにあれゆくーあきはてて

【信楽／北野天満宮本／永正十四年／
ここにて
心にて

→渦う朝露

かへるべきみやこの是るをここにて
かりのなみたやかずむあさつゆ

【天正四年四月１０日】／竹原 [うちらな
く]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日

はかなきはひとよをちけるここにて
すみれさくのにかずむあさつゆ

【国宝第三／続刊よりの錄】／春／文亀元
(1501) 年 3 月 18 日

ここにつくすあめのよう
心を尽す雨の夜

→身が老いた時雨

ねられぬここにつくすあめのよ
まうちに一休みにへき一はほとときす

【心歌関係 10 種】／芝原内通歌合／天理本

まつにここをつくすあめのよ
つれなきに一休みにへき一はほとときす

【心歌関係 10 種】／吾妻道光《／天理本

ひとのここ
人の心

→波落ちる

たびのやと一かすはまれるひとのここ
なさけのなきに一なみたおちけり

【文明十四年四月 5 月 ２日】／前野 [はふっ
taに]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

たまさかに一ちきりおきつるひとのここ
かたみのふみに一なみたおちけり

【文明十四年四月 5 月 ２日】／前野 [たま
よとる]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

→ Mei

ひとのここの一あやしつつあ
はかなくも一すきにしもの一おもはれて

【天正年間百題 5 ７号】／何木 [へふかへ
よ]／天正 9(1581) 年 4 月 1 日

ひとのここの一かはるよのなか
はかなくも一おとろふるをは一ともにせて

【専順宗祗百句付／専順宗祗百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのここが大なる
人の心が変わる

→海山

ひとのここの一かはるよさよ
うみやまの一つきみてあかす一すまのうら

【文明十四年四月 5 月 ２日】／山伺 [あきの
はな]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

ひとのここの一かはるよのなか
うみやまの一あるところも一たびなれや

【専順宗祗百句付／専順宗祗百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのここがさらなるものなか
人の心が変わる世の中

→秋の暮れ

ひとのここの一かはるよのなか
やまさとも一うかけててあや一あきのくれ

【専順宗祗百句付／専順宗祗百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのここの一かはるよのなか
いまをなほ一へやよしのの一あきのくれ

【専順宗祗百句付／専順宗祗百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→秋が来

ひとのここの一かはるよのなか
うつせみの一はやおろしに一あきはきて

【専順宗祗百句付／専順宗祗百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのここの一かはるよのなか
しらすの一ひとつなみに一あきはきて

【専順宗祗百句付／専順宗祗百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬
ここ

→綴れる

ひとのこころの一かはるよのなか
よもきふを一かれぬあるしは一あはれにて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
なきあとは一にくかりしたに一あはれにて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

→色見える

ひとのこころの一かはるよのなか
まちをしむーはなにほたなきーいるみえて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
たけはその一こをおもふとも一いるみえて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

→憂い身の時

ひとのこころの一かはるよのなか
うきみさへーときにやあふとーはるたて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
うきみさへーいまはのときやーをしからむ
【薫草／伊地知本】／雑／文明6(1474)年2月以前

→暇する

ひとのこころの一かはるよのなか
そのいへは一のこれとみちのーおとろへて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
あかむればーかみのしるしはーおとろへて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

→旅

ひとのこころの一かはるよのなか
うきにあひーなさけをみるもーたひなれや
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
うみやまのーなあるところもーたひなれや
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

→契り

ひとのこころの一かはるよのなか
なへてうきーあきなとほしの一ちきるらむ
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
むかしれーはなよりまつをーちきるらむ
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

→月を見る

ひとのこころの一かはるよのなか
よつのもきーいつれまさらとーつきをみて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
すさまとーいひしほずの一つきをみて
【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬
ひのこころの一かはるよのなか
とりへやまははねをならへし—とりとりに
【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬】

ひのこころの一かはるよのなか
はかなしやしははねをならへし—とりへやま
【重草／伊地知本】／文9(1474)年2月以前

ひのこころの一かはるよのなか
はかなしやしははをもならへし—とりへやま
【老集／書陵部詩集本】／応

ひのこころの一かはるよのなか
つきはたとみやもわらやも—ひとつにて
【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬】

ひのこころの一かはるよのなか
こをおもふみちのみたれも—ひとつにて
【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬】

ひのこころの一かはるよのなか
ほとときす—かへるやまちは—ともならて
【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬】

ひのこころの一かはるよのなか
うれらる—みはなかめ—れは—はなもなし
【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬】

ひのこころの一かはるよのなか
うたのちま—まををうるは—はなもなし
【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応仁2(1468)年5月下旬】
こそ--------

【専集所収百句付】／専集所収百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→身を知る
ひとのこころの－かはるよのなか
みをしれは－われとさためむ－やともなし

【専集所収百句付】／専集所収百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→我が上
ひとのこころの－かはるよのなか
わかうへに－おもはてたれを－そしるるむ

【専集所収百句付】／専集所収百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの－かはるよのなか
わかうへに－ほのひとよの－ありもかな

【専集所収百句付】／専集所収百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

人のかの世の中

→花を消む
ひとのこころの－あたしよのなか
はなをたれ－うつろふものと－うらむらむ

竹林抄／新古典文学大系本／春／文明
8(1476) 年 5 月頃

ひとのこころの－かはるよのなか
なつやまと－みなすをはなや－うらむらむ

【専集所収百句付】／専集所収百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

こたえる
答えようか

→言の葉にする

やっぱとのうきをとへかし－こたえてしま
まつかせをわか－ことのはにせむ

【伊勢千句】／三中短／【うめさきて】／
大永 2(1522) 年 8 月 4 日〜8 日

なにゆゑと－とはれはいかかーこたえてしま
ぬるぞてをや－ことのはにせむ

【河越／北野天満宮本】／永正十三年／
ことのは

首の行前の葉の

→私のみ一人袖を濡らす

おもふてふひとのことは一日のみなや
われのみひとりーそではぬらく

【兼秋政集／広島大学本／】令下／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

おもふてふひとのことは一日のみなや
われのみひとりーそではぬらく

【兼秋政集／広島大学本／】令下／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

交わす言の葉

→月日

きくやいかにーかはすことは
しるさすーかにねのやまのーほときす

【新撰英仏辞集／実隆本／】夏／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

ことわりなれやーかはすことは
うくひすにーしたしきこゑのーほときす

【播磨国第四／早稲田大学本／】夏／永正 6、7

君の言の葉

→偽り

しらぬかくれのーきみかことのは
いつはりのーなきはなみたにーあらはれて

【幸徳二年千句／】何玉 [くらからぬ] ／
幸徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

みになものーきみかことのは
いつはりのーすゑをはかさきーのちにて

【竹林抄／新古典文学大系本／】恋上／文
明 8(1476) 年 5 月頃

言の葉がない

→遥む玉津島

はるをうれしとーことのはそなき
たまつしまーかすみやそにてーつむらむ

【専籍関係 2 種／】春／応仁元 (1467) 年
5 月 10 日
ことの末尾へ—ことのはそなき
あけぼのや—かすむしもひの—たまつしま
【雑草／伊地知本】／春／文明 6(1474) 年
2 月以前

法の言の葉
—駄止める
たまたまあへる—のりのことは
まとめて—おなややたれ—たひのとも
【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明
8(1476) 年 5 月頃

みみにもふれよ—のりのことは
わたりえぬ—こたかりはに—こまとめて
【基鶴集／静嘉堂文庫本】／秋／永正
6(1509) 年以前

大和言の葉
—層士
みちこそたかき—やまとことは
もろしの—ふみをよろつの—うへにみて
【延徳年間百鎖 1 巖】／何船 [さよかせ
ち]／延徳 2(1490) 年 7 月 23 日

いのらはいたれ—やまとことは
もろしの—たひのひとたつ—あさゆふに
【老集／吉川本】／旅／文明 13(1481) 年
夏頃

こぼれる

零れる竹の葉の露
—片敷の枕
こほれてたふ—たけのはのつゆ
かたしきの—まくらのうへ—あきのかせ
【弘治三年春雪句句】／何船 [さえてたに]
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

こほれきにけり—たけのはのつゆ
かたしきの—そてもまくらも—ひやかに
【元和年間百鎖 24 巖】／□□ [くにくに
の]／元和 6(1620) 年 9 月 15 日

こぼれる月の名

かいま

帰りに駄祝う声
—都人
ひくれてかへる—こまいはふこゑ
あふさかを一つもこゆるや—みやこひと
【大永年間百鎖 1 4 巖】／何人 [ゆきのう
ちに]／大永 5(1525) 年 1 月 25 日

たかへるさそ—こまいはふこゑ
みやこひと—うじむふけふの—せきむかへ
【壁草／大阪天満宮文庫本】／旅／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 月 3 月以前

こめる

霞こめる
—厳冬

やまちゆくゆく—かすみこめたり
おほつかな—くれぬるかたの—よふことり
【天文十四年秋葉句句】／二色反音 [くれな
みの]／天文 24(1555) 年正月 7 日

はなにさくらも—かすみこめたり
よふことより—けらへはせもし—おほつかな
【天文年間百鎖 3 8 巖】／□□ [しまみつ
も]／天文 24(1555) 年 9 月 2 日

—喰子島

やまちゆくゆく—かすみこめたり
おほつかな—くれぬるかたの—よふことり
こもる

愛い冬雪り
→朝な朝な

うきふゆこもりーいつかかかるらむ
しつかなるーなにはのうみーあさなあさな

【伊勢千句】／山何［みるめかね］／大永
2(1522) 年 8 月 4 日〜8 日

うきふゆこもりーなといそぐらむ
ふかせもーまたさむからぬーあさなあさな

【天文四十四年四句漢 70 卷】／何物［きくやい
かに］／天正 4(1576) 年 5 月 6 日〜7 月
19 日

冬雪もる頃
→梅が春をつ

ゆきよりさきとーふゆもるころ
はなにかつーつほめるうめのーはるまて

【住吉千句】／白何［あられのみ］／大永
元 (1521) 年 11 月 1 日〜14 日

かせもあたらすーふゆもるころ
かめにさすーはなのうめかえーはるまて

【成立不詳・心敬以前 14 卷】／何枝［ま
たしから］／成立時不詳

ころ

色変る頃
→桜咲く

みとりなるのもーいろはるころ
さはみつにーくさのむらむらーはなさきて

【三島千句】／舟船［とりのねは］／文明
3(1471) 年 3 月 21 日〜23 日

このもとまでもーいろはるころ
ひとしほれーこくさはれにーはなさきて

【明応年間百首 2 册】／和詠 [うつろは
て] ／明応 3(1494) 年 10 月 30 日

桜咲く頃
→霞む
五月の頃

田に植えならない

なにはわたるの－さみたれのころ
ひとかたは－ひろきたのもを－つまややったら

【毛利千句】／初和（よととともに）／文禄 3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

みきはまされる－さみたれのころ
すくととき－さとのふかたは－うつようやて

【寛永年間百題 15 卷】／□□（ゆきとけ
て）／襄右／寛永 3(1626) 年 1 月 3 日

時鳥

おはももかわぬ－さみたれのころ
ほとときす－おとはのみねを－こえすてて

【浪関千句】／何人（すすきし）／永正
11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

うらのとまやの－さみたれのころ
ほとときす－おのかのりそ－かすかにて

【宗長追題千句】／何色（うくひふの）／
(草稿 5) 天文元 (1532) 年 3 月 25 日

つれつれののみの－さみたれのころ
ねさめして－きくはむかしの－ほとんどす

【天正四年万句 70 卷】／何風（うちなみ
に）／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

冬暮る頃

梅が春待つ

ゆきよりさきと－ふゆもくるころ
はなにかつ－つほるむがめの－はるまちて

【住吉千句】／白何（あられのみ）／大永
元 (1521) 年 11 月 1 日～14 日

かせもあたらす－ふゆもくるころ
かめにさす－はなのあめかえ－はるまちて

【成立不詳・心経以前 14 卷】／何程／ま
たしかし／成立時不詳

物思う頃

如何なる

こころくたけて－もおもふころ
ひとはうし－ゆきてはむも－いかならむ

【難波千句】／□□（あけほの）／文
明 14(1482) 年 10 月前後

つゆのみたれに－ものもふこる
よしえの－ゆふへよかきよいいかならむ

【寛永年間百題 34 卷】／何人（みちあ
れや）／寛永 2(1505) 年 1 月 1 日

誰が愛い

つゆもかみかの－ものもふこる
あちきなや－たれゆきそらも－うかるるま

[日文原文]
【太神宮法楽千句】／白河 [つゆからち]
／長春 2(1488) 年 7 月

なみたすそに一ものおもふるこ
ちきらすよーたれにゆふへの一うかららむ
【竹林抄／新古典文学大系本】／壇上／文
明 8(1476) 年 5 月頃

こもも
あきかけうつ
麻衣打つ
一人は折り束ない

うらみをもーうちそへかましーあさころも
あさましきまでーひととははひこす
【成立不詳・崇禄以前 15 番】／山何【め
つらき】／成立時不明
あさころもーうつなるこぼのーふくるよに
かはるこぼるかーひととははひこす
【文華十四年万方 52 番】／阿綾【あさか
はや】／文華 14(1462) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

あきのまもも
麻の狭衣

→山脇

たけのはわくるーあさのさころも
やまかつのーつまきのはやしーふゆかれて
【智賢院／北野天満宮本】／永正十二年/

うつつちかたーあさのさころも
やまかつのーのなるふるみーあとみえて
【論行 4 種】／宗牧 /

唐衣

→袖の移り香

かさねてもーむなしひひとのーからこそ
わかるらむのもーそてのうつりか
【文華年間万方 57 番】／何枝【みちみち
を】／文華 13(1585) 年 5 月 27 日

けふこそーかへでうれしーからこそ
わかるののはなーそてのうつりか
【文華四年万方 70 番】／二字仏音【かせ
やいろ】／文華 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

→夜が更ける

かすかのやーそのかみひひとのーからこそ
さかははうたふーよはふけにけり
【紫野千句】／片何【かせかとよ】／延文
2(1357) 年以後・応安 3 年 6 月以前

からこそーたちかわくにしーつつきのもと
しみつにあきのーよはふけにけり
【文華年間万方 3 8 番】／山何【のきお
ふる】／文華 19(1550) 年 4 月 24 日

→秋の蓬生の里

からこそーそてとふつきの一ー□□□□
あきはたさひしーよもきふのやと
【文安年間万方 9 番】／山何【あきのいろ】
／文安 4(1447) 年 9 月 6 日

かはなみたーいくへのいろをーからこそ
あきはむしなくーよもきふのやと
【成立不詳・崇禄以前 6 番】／何人【みっ
たまり】／成立時不明

里の衣手

→形見

こそとみよすみのところも
そのままのーふてのあとこそーかたみなら
【文和千句】／何物【さみたれは】／文和 5
年

やつれいとはしーすみのところも
わかれてのーみたたにこそーかたみなら
【弘治年間万方 8 番】／何人【ときはなる】
／弘治 3(1557) 年 8 月 28 日

たつ日の夏衣

→山時鳥

つゆそおくーたちでいくかの一なつっこも
たひにはつれよーやまもとときは
【池田千句】／何路【はははしるや】／永
正 7(1510) 年春以前<永正 5 年春>

なつっこもーたちかふるひかすーほもなし
うへなくときはやまもとときは
さえずる

【大永年間百領 4 巻】／名号 [なっこも]／大永 8(1528)年 4月12日

たびごも

旅の手始め

うゑおきて－たまたるはなの－はることに
わかやとはね－うくひすのこゑ

【森頼千】／初何 [きのふより]／明応 3(1494)年 2月 10日～12日

ほともなく－うつろはなの－はることに
みをあくからず－うくひすのこゑ

【根府電／北野天満宮】／永正十四年

ものごと

－春秋の空

ものことに－こころのもとる－として
ゆくするに一はるあきのそら

【三島千】／何船 [とりのねは]／文明 3(1471)年 3月 21日～23日

ものを－みやこをこふる－かたあなか
おくるもつらし－はるあきのそら

【文明年間百領 34 巻】／□□ [ゆきのかけ]／文明 5(1473)年 12月 5日

さえずる

鳥が鳴る

→返し置く

いまをはるとや－とりのさへつる
かへしく－なはしをたに－ひとはなし

【文明十四年間万領 52 巻】／何船 [あきの
いろ]／文明 14(1482)年 7月 4日～9月
14日

とりのさへつる－のへのあさあけ
かへしく－たつらにたみの－かけもなし

【文明十四年間万領 52 巻】／王何 [ゆきな
は]／文明 14(1482)年 7月 4日～9月
14日

鳥の鳴り

→霞

ふるすわかなく－とりのさへつる
かすみこそきみかめくみの－そらならめ

【天文十八年間千】／何袋 [かそうみを]／
天文 18(1549)年正月 11日

ごと

今日毎

→入相の鰻

けふことの－ゆふへやはるを－さそふらむ
さとつつきなる－いりあひのかね

【紫野千】／何人 [しげる者の]／延文
2(1357)年以後応安 3年 6月以前

けふことの－しくれやおきを－おくるらむ
みにしむころの－いりあひのかね

【永正十八編千】／何袋 [つきをゆき]／
永正 13(1516)年 3月 11日～14日

花の春毎

→鶴の声
あつまりきぬる－とりのさへつり
かずみこそーひろきめくの－まかきなれ
【天正年間百編 57 巻】／□□ [いるそてに]／天正 18(1590)年 1月 7日

→谷の戸の驚

ふるすなからや－とりのさへつり
うくひすの－くるとしほる－たにのとに
【寛文年間百編 22 巻】／□□ [しほきるの]／寛文 11(1671)年 9月 29日

はるのしるへの－とりのさへつり
たにのとに－のころくひすーなつかけて
【天正四年万句 70 首】／何頼 [いろそゆ]／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

→日の影

こゑつむけなる－とりのさへつり
ひのかけの－めぐるもうとき－たにかくれ
【元和年間百編 4 巻】／□□ [あさなあさな]／元和 8(1622)年 2月 29日

きくもたへなる－とりのさへつり
ひのかけの－うつるかきほは－うらかに
【寛永年間百編 15 巻】／□□ [あさひかけ]／寛永 11(1634)年 1月 3日

さえる

月照える

→千鳥鳴ぐ声

おほそに－こよびひみたる－つきさえて
ゆふしはさびしーちとりなくこゑ
【出陣千句】／薄野 [ちきりや]／永正元(1504)年 10月 25日～27日

かはみつの－とともにこぼれる－つきさえて
よふねにさくは－ちとりなくこゑ
【至徳以前百編 7 巻】／何木 [かみかきの]
／至徳 4(1387)年以以前

さかずき

夜泊る杯
→月の下

よさむかずれて－くめるさかつき
もろともに－なかめあかせる－つきのもと
【毛利千句】／初町 [よともに]／文禄3(1594)年 5月 12日～16日

よるはすからに－くめるさかつき
あくぐを－しらてともなふ－つきのもと
【平松文庫本千句】／□□ [ふくるの]

さかり

花盛り

→鶴の声

うちむれて－ひとのなかむる－はなさかり
いったくのさとそ－くひすのこゑ
【聖顕千句】／何人 [つつきなたし]／明応3(1494)年 2月 10日～12日

おくやま－にえいてもあらぬ－はなさかり
ひとにけちきき－くひすのこゑ
【文亀年間百編 4 巻】／何人 [うつるはぬ]
／文亀 3(1503)年 7月 25日

をしめとも－さきみたれた－はなさかり
ことずにたかき－くひすのこゑ
【文明十四年万句 52 首】／山河 [つゆやけさ]／文明 14(1482)年 7月 4日～9月 14日

→揺らす羅漢
さく
→春の桜群

くももきを－うつつはかりの－はなさかり
せきのとあくる－はるのすきむら
【弘治三年春雪千句】／初何［けさみれば］／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

いはかねの－こけにこたかき－はなさかり
かたはらさひし－はるのすきむら
【曹草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

さく

梅咲く

→鸞の声

いつもども－はかくにまらし－うめさきて
ほのかにきぬる－うくひすのこゑ
【大永四年正月後百錦】／時々【ゆふた
ち】／月後千二百錦／大永 4(1524) 年 6
月 23 日

はかなくつむ－のをなつかしみ－うめさきて
ふりにしけると－うくひすのこゑ
【成立不詳・崇禎以前 8 巻】／山行【ひと
こゑや】／成立時不詳

咲く春の花

→春と初の梅の枝

ちれはさく－ちきりもはかな－はるのはな
さくにかはす－やとのうめかえ
【大永四年正月後百錦】／時々【けふひ
くや】／月後千二百錦／大永 4(1524) 年 5
月 23 日

さくことも－ちらむためかは－はるのはな
さくらはのもめく－やとのうめかえ
【崇禎三年／挿経著略從本】／春／文亀元
(1501) 年 3 月 18 日

桜咲く

→春雨の空

さくらさく－こすゑのくもを－ふくかせに
ほのくれわたる－はるさめのそら
【成立不詳・崇禎以前 15 巻】／何船【き
りのはに】／成立時不詳

さくらさく－このまのゆふひ－かすかにて
けふはれけりな－はるさめのそら
【崇禎關係 8 巻】／老耳／天理本

桜咲く頃

→霞む

をちちかけて－さくらさくころ
もろしきの－よしのもはるや－かすむらむ
【崇禎改訳文庫本千本】／時々【くにみってて
や】／崇禎 6(1653) 年 11 月 18 日以前

よはみなそらを－さくらさくころ
あさなあさな－うすくもるひや－かすむらむ
【永正年間百錦 4 巻】／何船【かへるか
り】／永正 16(1519) 年 2 月 19 日

花咲く

→薄霞

さくへくも－みゆるよかはのは－はなさきて
うすきかすみは－つきすそみよき
【崇禎改訳文庫本千本】／何船【いねぬ
や】／崇禎 3(1451) 年 8 月 15 日

おくやまも－よそめけきの－はなさきて
うすきかすみは－つたもしなし
【文明十二年正月八巻】／一字霧頭【わか
はもて】／文明 12(1480) 年 4 月 10 日～

咲く

→鸞が鳴く

くれたけの－はやしつつきに－はなさきて
ねくらさためす－うくひそそなく
【崇禎改訳文庫本千本】／何船【かふみさ
へ】／崇禎 4(1492) 年 1 月 22 日

はるやまの－みねのいはりに－はなさきて
たにをかわよ－うくひそそなく
【崇禎關係 9 巻】／崇禎改訳文庫本／
小松天満宮本／

桜咲く

→松に藤の黄昏
さくら

桜

篠崎

さくら

桜の藤娘

→桜の藤娘

したふとや→ささきかへるはなし→おそさくら
なつをかけたる→まつのふちなみ

【桜間記】／河内［さくらは］／永正
11(1514)年 5月 13日～19日

やよやよび→のこるもひさし→おそさくら
はるちよかけよ→まつのふちなみ

【春闇日記補背 50巻】／山内［やよやよび］／応永 31(1424)年 3月 18日

おそさくら→はたたかくて→はもあをし
はなまちえたる→まつのふちなみ

【文安年間記録 1巻】／夢想［おそさくら］
／文安 2(1446)年 3月 18日

桜咲く

→春雨の井

さくらさくら→こすゑのくもを→ふくかせに
ほのくれわたる→はるさめのそら

【成立不詳・宮城以前 15巻】／何處［紀
りのはるる］／成立不詳

さくらさくら→このまゆふひ→かすかにて
けふれけりな→はるさめのそら

【宗家関係 8種】／老耳／天理本／

桜咲く頃

→桜咲く

をちこかけて→さくらさくら
もろこしの→よしのもはるや→かすむらむ

【永禄館文庫木千卷】／円珍［いろみえて］
／永禄 6(1563)年 11月 18日以前

よはみなそらを→さくらさくら
あさなあさな→うすくもるひや→かすむらむ

【永正年間記録 34巻】／何處［かへるか
り］／永正 16(1519)年 2月 19日

桜散る際

→春さかがる

なこりもとめす→さくらまつるの
はるさまが—いはなみはやき→よしのかさ

【永正年間記録 34巻】／何處［つははな
を］／永正 2(1505)年 9月 13日

ひはらさひしく→さくらまつるの
はるさまが—なはふるゆきの→さええて

【文正四月方正 70巻】／夕何［はるさめ
に］／文正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

さくらの上

→桜の下

さくらかうの→春

桜咲く

→桜の花

さくらさくら→のまふが大→ふくかせに
ほのくれわたる→はるさめのそら

【成立不詳・宮城以前 15巻】／何處［き
りのはるる］／成立不詳

さくらさくら→このまゆふひ→かすかにて
けふれけりな→はるさめのそら

【宗家関係 8種】／老耳／天理本／

桜咲く頃

→桜咲く

をちこかけて→さくらさくら
もろこしの→よしのもはるや→かすむらむ

【永禄館文庫木千卷】／円珍［いろみえて］
／永禄 6(1563)年 11月 18日以前

よはみなそらを→さくらさくら
あさなあさな→うすくもるひや→かすむらむ

【永正年間記録 34巻】／何處［かへるか
り］／永正 16(1519)年 2月 19日

桜散る際

→春さかがる

なこりもとめす→さくらまつるの
はるさまが—いはなみはやき→よしのかさ

【永正年間記録 34巻】／何處［つははな
を］／永正 2(1505)年 9月 13日

ひはらさひしく→さくらまつるの
はるさまが—なはふるゆきの→さええて

【文正四月方正 70巻】／夕何［はるさめ
に］／文正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

さくらの上

→桜の下

さくらかうの→春

桜咲く

→桜の花

さくらさくら→のまふが大→ふくかせに
ほのくれわたる→はるさめのそら

【成立不詳・宮城以前 15巻】／何處［き
りのはるる］／成立不詳

さくらさくら→このまゆふひ→かすかにて
けふれけりな→はるさめのそら

【宗家関係 8種】／老耳／天理本／

桜咲く頃

→桜咲く

をちこかけて→さくらさくら
もろこしの→よしのもはるや→かすむらむ

【永禄館文庫木千卷】／円珍［いろみえて］
／永禄 6(1563)年 11月 18日以前

よはみなそらを→さくらさくら
あさなあさな→うすくもるひや→かすむらむ

【永正年間記録 34巻】／何處［かへるか
り］／永正 16(1519)年 2月 19日

桜散る際

→春さかがる

なこりもとめす→さくらまつるの
はるさまが—いはなみはやき→よしのかさ

【永正年間記録 34巻】／何處［つははな
を］／永正 2(1505)年 9月 13日

ひはらさひしく→さくらまつるの
はるさまが—なはふるゆきの→さええて

【文正四月方正 70巻】／夕何［はるさめ
に］／文正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

さくらの上

→桜の下

さくらかうの→春

桜咲く

→桜の花

さくらさくら→のまふが大→ふくかせに
ほのくれわたる→はるさめのそら

【成立不詳・宮城以前 15巻】／何處［き
りのはるる］／成立不詳

さくらさくら→このまゆふひ→かすかにて
けふれけりな→はるさめのそら

【宗家関係 8種】／老耳／天理本／
さす
月差し出る
→秋風
つきさしいつる－ふねのしらなみ
あきかせ－あまのいさりひ－よるきえて
【隠守千句】／新井［いはしもつ］／永享
元 (1487) 年 10 月 9 日＜～11 日＞
つきさしいつる－をちかたのやま
あきかせ－のひゆくよは－やすからで
【延徳年間百詠 16 巻】／内職［さけはさく］／千曲第三／延徳 4 (1492) 年 3 月 3 日

さそう
誘う
→心浮かれる
つきそうき－ひときをいそくに－そそふらむ
こころうかるる－やまさとのあき
【文明年間百詠 34 巻】／何木［きのふより］／文明 6 (1474) 年 1 月 5 日
ゆくみつの－みをいつくとか－さそふらむ
こころうかるる－くれことのそら
【延徳年間百詠 16 巻】／何木［まつみよと］／延徳 4 (1492) 年 2 月 8 日

→道の方々
あらかりし－あめやあくたを－そそふらむ
はらひよむる－みちのかたかた
【天正年間百詠 57 巻】／何木［けふかへよ］／天正 9 (1581) 年 4 月 1 日
くさかりや－ここころころに－そそふらむ
かのをかこえの－みちのかたかた
【文禄年間百詠 25 巻】／新井［うめさきって］／文禄 2 (1593) 年 2 月 12 日

さけぶ
猿叫ぶ声
→秋寒い
つきはさやかに－さるさけふこゑ
あきさむき－いりえのふねに－めははさめて
【慶長千句】／山何［けふみすは］／文明
4 (1473) 年 12 月 16 日～21 日
やまかけはふく－さるさけふこゑ
あきさむき－みねのしびしは－ふきかせに
【應禎筆／北野天満宮本】／永正十二年／
さと

書き方

かたもまでもない

方を定めない

ふきかふかせはかたもさたす

とふはたる一つさきやまをしるへにて

【嘉永三年秋篠本】／何田 [かたをさたす]
／嘉永 3(1443) 年 10 月 23 日

おくるるふねはかたもさたす

もしばたくうははほけをしるへにて

【道徳五品集本】／何田 [さくふの]
／道徳 2(1453) 年 3 月 15 日

定めない

かたもまでもない

写る世の中

さたまなきししくれもをりはしるものを

ひとのこころのもかはるよのなか

【新修宗経品集】／新修宗経品集／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

さたまなきうきよにふまくもすくきて

ふちせあすかのまかはるよのなか

【名所句集静嘉堂文庫本】／恋上／(大
永前後)
かずみわけゆく－さとののはるけさ
すきわたし－かへはるくる－をたのはら
【慶長年間百録 27巻】／□□［はるのこもそ］／裏白／慶長 13(1608)年 1月 3日

さとのひとら
里の一群

→草鞋

とひよるやとの－さとのひとむら
くさまくち－つきをよすかに－こよひねむ
【文明十二年四月 8巻】／夢想［うむしまるるの］／文明 12(1480)年 4月 10日～6月

うけふりたる－さとのひとむら
くさまくち－たつきもしたら－あくるのに
【文明十一年万八百 52巻】／何船［なつとおむか］／文明 14(1482)年 7月 4日～9月 14日

さとうられたもの
里離れた道

→重なる

さとはなれなる－まつかけのみち
おはなほ－つるるかうへに－かさなりて
【師範院道連善十句】／何船［さかのやま］／永禄 6(1563)年 12月 14日～18日

さとはなれなる－みちのたえたえ
かひする－まくさはみどり－かさなりて
【文禄年間百録 12巻】／□□［かなつか
みし］／文禄 2(1593)年 1月 8日

さとうられたもの
里離れた道

→春の山里

春の山里

→春

さくらのきを－はるのやまさと
うくひすの－こゑはかずみの－のきはにて
【太政宮殿楽千句】／長行［おきとほし］／永禄 2(1488)年 7月

やかてもぐへよう－はるのやまさと
うくひすの－ふるすのたにの－ゆききえて
【東山千句】／何路［のうたけし］／永正
15(1518)年 8月 10日～12月

→山里

山里

→春

やざさの－はるをさひしく－なしはてて
かすめるかねに－あかつきのあめ
【長行年間百録 6巻】／何路［さみたれは］／長行 3(1489)年 5月 11日

やざさの－かせひややかに－めはさめて
はなよふかき－あかつきのあめ
【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541)年 12月 25日

→山本の里

山本の里

→春

やまもとのさと

→春

たかさとまでか－しくれゆくらむ
かみなつき－ありあけたの－ねさめて
【大永三年月並千三百録】／□□［はなにつき］／月並千三百録／大永 3(1523)年 3月 23日

はかはすみの－やまもとのさと
かけはは－のきはのみねに－よこたばり
さびしい

秋の寂しさ

→朝露

ふるきみしりの→あきのさびしさ
あさきりに→のわきのこすゑ→うちしをれ

【延徳年間頃 16 6】／山町 [ふきもこぬ]／延徳 2 (1490) 9 月 20 日

みつもかれての→あきのさびしさ
やまかつの→へゆくさのはの→あさきりに

【天文年間頃 3 8】／何人 [つきによる]／天文 5 (1536) 6 月 15 日

→露の内

まつをとなりの→あきのさびしさ
ゆふまくれ→さとなきやまの→きりのうち

【太神宮楽楽千句】／薄荷 [まきのはや]／長享 2 (1488) 7 月

なはにはあたりの→あきのさびしさ
いりあひの→こゑへしめる→きりのうち

【元和年間頃 2 4】／□□ [はなにして]／元和 8 (1622) 3 月 19 日

→夕までれ

わかものかほの→あきのさびしさ
たれもこそ→なかめゆふらめ→ゆふまくれ

【熊野千句】／何等 [かさなるや]／文正 元 (1466) 3 月以前

まつをとなりの→あきのさびしさ
ゆふまくれ→さとなきやまの→きりのうち

【太神宮楽楽千句】／薄荷 [まきのはや]／長享 2 (1488) 7 月

月の寂しさ

→映る

ほのかにすめる→つさのさびしさ
あきのよも→いくねさめにか→うつるらむ

【大永四年年記中の千本編】／□□ [へたつなよ]／月月千二百編／大永 4 (1524) 3 月 23 日

まつむしの→なくねにさよ→うつるらむ

【天正四年年記中的千本編】／何木 [さくはなの]／天正 4 (1576) 5 月 6 日～7 月 19 日

→秋の空

あかつきかき→つさのさびしさ
あきのそら→くもはいつくに→わかるらむ

【文明年間頃 3 4 】／何船 [ことのはの]／文明 8 (1476) 4 月 23 日

すみたかはらの→つさのさびしさ
あきのそら→ひとりかもねむ→よはもうし

【髙崎滝／北野天満宮本】／永正十三年／

なお寂しい

→山の奥

かせのおとこそ→なほさびしきれ
あさちふの→やどりにかはる→やまのおく

【因幡千句】／初何 [ゆきはなほ]／文明 7 (1475) 11 月 26 日～28 日

まつひとりこそ→なほさびしきれ
すまれむ→おもひしことよ→やまのおく

【聖明天千句】／二上法音 [よにひとき]／
明応 3 (1494) 2 月 10 日～12 日

名残り寂しい

→雪に

なこりさびしき→ひとりのところ
はるきても→一つれなきはなの→ふゆこもり

【伊予千句】／山何 [やととへ]／天文 6 (1537) 5 月 22 日

かれのはらそ→なこりさびしき
くさの→とすむかけにする→ふゆこもり
春の寂しさ
→花咲く
やとからなれや－はるのさびしさ
にうつむけこけにひともと－はなさきて
【宗祗類関 3 種】／心銘専顔宗祗付句／
あめふりすさふ－はるのさびしさ
やまふかみ－くもゆくみねの－はなさきて
【宗祗類関 8 種】／老耳／天理本／

水影の寂しさ
→帰る
かはへのみつの－かけのさびしさ
うちむれて－みそきせしも－かへらるむ
【天文年間百録 38 編】／介介も／天文 24(1555) 年 9 月 2 日
いたみのしみつ－かけのさびしさ
ゆふれや－すすみしだも－かへらるむ
【宗祗類関 8 種】／老耳／天理本／

物寂しい
→声が聞こえる
つねならぬ－ともしひのかけ－ものさびし
のりのふみよむ－ことそきこゆる
【実録句句文】／□□／くれかたき／
ねくすおよ－あまよのこころ－ものさびし
なくふくろふの－ここそきこゆる
【長禄三年句句文 11 編】／何田／まつちる
や／長禄 3(1459) 年 12 月 2 日－5 日

さみだれ

五月雨
→鳴く時鳥
たまほこの－みちやすからぬ－さみたれに
なくひとりきす－なにとすくらむ
【延德年間百録 16 編】／何人／延德 4(1492) 年 2 月 8 日

さみたれに－かけひのみつは－おともなし
のきはをちかみ－なくほとときす
【天正四年万方 70 編】／何鳥／さみたれ
に／天正 4(1576) 年 5 月 6 日－7 月 19 日

→雲に鳴く時鳥
さみたれの－はれしまられて－うちいてて
くもあるたか－なくほとときす
【宗祗類関 3 種】／方町／はるのひに／
（考理 5）／天文元(1532) 年 3 月 25 日

さみたれの－ふるさのはつきの－ところさか
しくまじゃとや－なくほとときす
【諸録法紙気 3 編】／何何／てきまねと／
（陳式 4)／天文 1377 年 6 月 29 日

→山時鳥
さみたれの－かなきくもるる－くさのいほ
いててやきかむ－やまほとときす
【熊野句句文】／方町／おとなのに／文正
元(1466) 年 3 月以前

さみたれの－ふるののねさめ－おもひやれ
わかさうとき－やまほとときす
【成立不詳・宗祗以前 6 編】／何人／みつ
たまり／成立不詳

五月雨の後
→軒轅風く

さみたれのあと
なみはなきぬ－さみたれのあと
あしのの－のさしてはらに－かたふきて
【寛永年間百録 15 編】／□□／しつかさ
の／抄白／寛永 10(1633) 年 1 月 3 日

あやめなから－さみたれのあと
ふるさの－のさてはにはて－かたふきて
【園亀第二／権銘句類従本】／雑／明応
4(1495) 年早春

五月雨の内
→時鳥
かけはしえつこ－さみたれのうち
ひところは－くもにとわたる－ほとときす
五月雨の頃
→田に植えやらない

なにはたりの－さみたれのところ
ひとたびは－ひろきたのもを－うゑやらでて
【毛利町刊】／群を（よとともに）／文禄
3(1594)年 5 月 12 日－16 日

みきはまさるる－さみたれのころ
すあとはき－さとのふかたは－うゑやらでて
【寛永年間百髪 15 巻】／□□ [ゆきとけ]
て／裏白／寛永 3(1626)年 1 月 3 日

→時鳥

おはしおかぬ－さみたれのところ
ほとときす－おとはのみねを－こへててて
【残聞刊】／群を（すすきを）／永正
11(1514)年 5 月 13 日－19 日

うらのもやの－さみたれのところ
ほとときす－おかなやも－かすかにて
【宗長追奉刊】／群を（うくすの）／
（倉禄） 5 天文元 (1532) 年 3 月 25 日

ふるきのきはの－さみたれのところ
ほとときす－たけはくさ－なもつらし
【長享年間百髪 6 巻】／群を（おかみつご）
／長享 2(1488) 年 1 月 1 日

→観覧の時鳥

いもせのかはの－さみたれのところ
ねさめして－がれもたひよそ－ほときす
【文明十四年刊 5 2 巻】／群を（よいひつ
ろく）／文明 14(1482) 年 7 月 4 日－9 月
14 日

つけつれののみの－さみたれのところ
ねさめして－きはむかしの－ほときす

さむい
→秋の風

とわたるかの－こゑのさむけさ
ふけにけり－しもよのつきに－あきのかせ
【明応年間百髪 22 巻】／群を（たすまた
れ）／明応 5(1496) 年 6 月 7 日

ささはすの－こゑのさむけさ
ぬさらし－たひたつぎの－あきのかせ
【応光関係 10 庫】／草草内通歌合／松平
文庫本／

寒い日
→族の衣手
さやか

さやかの空

かわいい雨-あさなるあさなの-さむきびに
かさねまほしえ-たひのころもて
【妻験千字】／新子 [ほとときす] ／永正
14(1514) 年 5 月 13 日～19 日

さむきに-かはてやこまの-なつむらむ
あらしをしのく-たひのころもて
【妻験千字新】／新子 [なれてこ
し] ／永文 10(1670) 年 2 月 27 日

やや寒い袖

→秋の霜

かりねのゆめも-ややむききでて
おけは-た-ときめまかへる-あきのも
【大和国花の千句】／月比 [つきはたに]
／元亀 2(1571) 年 2 月 5 日～7 日

はまへたとれは-ややむききで
ときなほ-まさこもしろき-あきのも
【延宝年間叢書 3 卷】／□□ [おいかせの]
／延宝 2(1674) 年 8 月 14 日

夜寒おぼえる

→唐衣

よさむおぼれる-ひとのかたひら
あはれみて-とあるるなのかの-からこもも
【妻験千句】／月比 [ち～にみし] ／元
亀 4(1573) 年正月 9 日～11 日

よさむおぼれる-かせのたえ
をちこに-ういちゅげりなし-からこもも
【延宝年間叢書 2 卷】／書旧 [はつゆき
の] ／延宝 6(1563) 年 11 月 18 日

さやか

さやか

→秋風の空

ひたはみ-なれるよのつつきの-さやかにて
ひとりそむかふ-あきかせのそら
【妻験千句】／月比 [きえぬるか] ／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

しもはる-ふ-こそこつありの-さやかにて
たつなきわる-あきかせのそら
【延宝年間叢書 2 卷】／□□ [しもや
ひぬ] ／月並千二百篇／延宝 4(1524) 年 9
月 23 日
さやかの庭

さやかなる－はしやまよひを－てらすらむ
つかさつかさに－ももしきのには
【石山四経全唐】／「三好・きやふね」／文徳 24(1555) 年 8 月 15 日～9 日

さやかなる－はしのひかりの－おくすもり
はるあらたまる－ももしきのには
【慶長年間百罰 27 巻】／「あらしに も」／裏白／慶長 5(1600) 年 1 月 3 日

月のさやけさ

月のさやけさ

かつむらふの－つきさやけき
やじみつに－まかとみえし－きはれて
【因幡千句】／「馬路・たけにこく」／文明 7(1475) 年 11 月 26 日＜〜28 日＞

てらすくもふの－つきさやけき
きはれて－かすこみゆれ－あまつかり
【応保年間百罰 6 巻】／「人の・ときはきを」／応審 1(1467) 年 10 月 17 日

月のさやけさ

とさからぬゆきか－つきのさやけさ
あきのかせ－たけのはすさぶ－そらふて
【浅間千句】／「ゆくはるた」／文徳 11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

くもよりうへの－つきのさやけさ
ひととき－ふきすぐるや－あきのかせ
さわ

【天正四年万町のもの】／山田［やまとほ
み］／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

なかそらになる－つきのさやけさ
あきはいま～わさたちかりかねなきのでって

【宮頃編集 2巻】／宮頃通信合／静嘉堂文
庫本／

月もさやか

→晴方

はるのよ一つきもさやけき－みねのいほ
あかつききたの－かせのさひしさ

【天正四年万町のもの】／山田［やまとほ
み］／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

しもよそみつの一つもさやけき
ふねよはふ－あかつきかたの－よとのさと

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年 5月頃

さよのなかやま

月の小夜の中山

→秋更ける

みるみるつつきは－さよのなかやま
たひころも－あらしをそに－あきふけて

【大永年間百物語 14巻】／何人［ゆきのう
ちに］／大永 5(1525)年 1月 25日

つきもなこりの－さよのなかやま
うらかれの－みねのしほくさ－あきふけて

【延宝年間百物語 3巻】／□□［おきかせの］
／延宝 2(1674)年 8月 14日

さる

猿叫ぶ声

→秋寒い

つさはさやかに－さるさけふこゑ
あきさむき－いりゑのふねに－めはさめて

【兼濃千屯】／山田［けふみゆうは］／文明
4(1473)年 12月 16日～21日

やまかけふくく－さるさけふこゑ
あきさむき－みねのしほひこは－ふくかせに

【新海閣／北野天満宮本】／永正十二年／

しか

牡鹿鳴く声

→後覚れば月

あかつきさひし－をしかなくこゑ
ねさくふは－一つすむあきの－こからしに

【紹巴亡友通書千巻】／二字反音［かけた
かき］／天正 24(1556)年 3月 26日～暦日
かすかなりけり一をしかなくこゑ
ねさむれは一つはありあげの一まくらにて
【五百一十千句】／何舟／はなをさへ／
天正9(1581)年11月19日

さと鹿の声

→如何ばかり

ちしはところむる一さをしかのこゑ
ささのはの一みやまはおくも一いかはかり
【永正年間百雑34巻】／藤文／しもにさ
て／永正4(1507)年11月3日

さそふかつきに一さをしかのこゑ
おきいてむ一やまちのつゆの一いかはかり
【永正年間百雑34巻】／何人／すすしさ
や／1510(1510)年8月9日

→月の小夜更ける

ふもとにくたる一さをしかのこゑ
つきのころ一くもにあらしの一さよゆけで
【丙越千句】／何船／やまかせに／文明
2(1470)年正月10～12日

あとなるみねの一さをしかのこゑ
つきははや一いるさのやまの一さよゆけで
【大永三年月並千百雑】／□□□□／もる
なよ／月並千百雑／大永3(1523)年7
月23日

→露落ちる

みやまのあきの一さをしかのこゑ
わけよふ一みちはきりふり一つゆおちで
【石山四時千句】／何骨／おくつゆの／
天文24(1555)年8月15日～19日

かゐほにちかき一さをしかのこゑ
もるをたの一はしとろに一つゆおちで
【称名寺連歌3巻】／xx／つきはあき
／正慶元(1332)年9月13夜

→はる

わかゆふへまつ一さをしかのこゑ
くもそある一いつよりつきに一なりぬらむ

【文安二千句】／初何／ふしぶけ／
安2(1445)年10月18日

ふけゆっくり一さをしかのこゑ
くさまくち一いくよさむきに一なりぬらむ
【文安二千句】／初何／はなをさへ／
正11(1514)年5月13日～19日

→野が遠い

をりしりかほの一さをしかのこゑ
かりてて一ひともののうらぬの一をとほみ
【出陣千句】／何木／しもから／
永正元(1504)年10月25日～27日

まらるるよはの一さをしかのこゑ
をたよりの一あかしかねたるの一をとほみ
【文安四年万句70巻】／何船／とふとり
の／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→群薄

きりのうちなる一さをしかのこゑ
むらすくさ一みたれあひてや一ちりぬらむ
【飯盛千句】／何船／ありあげや／永禄
4(1561)年5月27日～29日

ふしとしらるる一さをしかのこゑ
あれわたる一たなかはしき一むらすすき
【文安年間百雑12巻】／□□□□／あめのは
の／文禄2(1593)年5月

しが

志賀の浦舟

→神祭

よもあげかたの一しかのうらふね
かみまつり一もよほそての一いさなびに
【天文十八年千巻句】／山舟／おめかさは
／天文18(1549)年正月11日

なみたにかすむ一しかのうらふね
たひひとに一あくろやけふの一かみまつり
【行助関係4種／行助連歌／天理本／
しぐれ

秋時雨
→色付く

あきのしにくれは－ぬれるまもなし
よなよなの－一つのこするまは－いろつきて
【太政官法書千句】／何処 [いつぞめし]
／長徳 2(1486) 年 7 月

あきのしにくれは－たけのはのと
しっかすむ－かきほのまくす－いろつきて
【称名院追修千句】／初野 [したふなお]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

秋に時雨れる

→風に露が零れる

あきのそら－たかあかつきも－しるくらむ
のきはのかせに－一つゆそちばる
【文安抄千句】／花之介 [ゆきふれは]/
文安 2(1445) 年 10 月 18 日

あきさむき－はれてきも－しるくらむ
かせのたびは－一つゆそちばる
【天文四庫抄千句】／何処 [たぶあなるの]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

時雨れる

→想う畑

つゆゆなは－くさのまぐらに－しるくらむ
たひなるひとを－おもふふるさと
【長徳年間百領 6 巻】／×× [やまはのば]
／長徳 3(1479) 年 8 月 2 日

なかめやる－そらよりあきや－しるくらむ
はつかりかねに－おもふふるさと

しぐれ

秋時雨
→色付く

あきのしにくれは－ぬれるまもなし
よなよなの－一つのこするまは－いろつきて
【太政官法書千句】／何処 [いつぞめし]
／長徳 2(1486) 年 7 月

あきのしにくれは－たけのはのと
しっかすむ－かきほのまくす－いろつきて
【称名院追修千句】／初野 [したふなお]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

秋に時雨れる

→風に露が零れる

あきのそら－たかあかつきも－しるくらむ
のきはのかせに－一つゆそちばる
【文安抄千句】／花之介 [ゆきふれは]/
文安 2(1445) 年 10 月 18 日

あきさむき－はれてきも－しるくらむ
かせのたびは－一つゆそちばる
【天文四庫抄千句】／何処 [たぶあなるの]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

時雨れる

→想う畑

つゆゆなは－くさのまぐらに－しるくらむ
たひなるひとを－おもふふるさと
【長徳年間百領 6 巻】／×× [やまはのば]
／長徳 3(1479) 年 8 月 2 日

なかめやる－そらよりあきや－しるくらむ
はつかりかねに－おもふふるさと

しぐれ

秋時雨
→色付く

あきのしにくれは－ぬれるまもなし
よなよなの－一つのこするまは－いろつきて
【太政官法書千句】／何処 [いつぞめし]
／長徳 2(1486) 年 7 月

あきのしにくれは－たけのはのと
しっかすむ－かきほのまくす－いろつきて
【称名院追修千句】／初野 [したふなお]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

秋に時雨れる

→風に露が零れる

あきのそら－たかあかつきも－しるくらむ
のきはのかせに－一つゆそちばる
【文安抄千句】／花之介 [ゆきふれは]/
文安 2(1445) 年 10 月 18 日

あきさむき－はれてきも－しるくらむ
かせのたびは－一つゆそちばる
【天文四庫抄千句】／何処 [たぶあなるの]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

時雨れる

→想う畑

つゆゆなは－くさのまぐらに－しるくらむ
たひなるひとを－おもふふるさと
【長徳年間百領 6 巻】／×× [やまはのば]
／長徳 3(1479) 年 8 月 2 日

なかめやる－そらよりあきや－しるくらむ
はつかりかねに－おもふふるさと
露時雨の草

→渡る雁

つゆしくれよもののくさきの一ろつきて
たのもにちかくはわたるかりかね

【春開日記紙背 5 巻】/山本 とよとし

かのうちにも一しぶきむしのね
みえこしも一ゆめとほさらなるよはのつき

【大原野花千句】/中棲 かをりきて

かせやややむき一しぶきむしのね
やるとれはすみやはあらすよはのつき

【宗長関係 8 巻】/古耳/天理本

しず

→ いにせ

いかにおおひを一しぶのをたまき
いにしへの一なみにまさらる一あきはきぬ

【聖順千句】/初何 きのふより/明応

はかのすちや一しぶのをたまき
いにしへの一ゆゑうきかみやみがのすき

【華智蔵/北野天満宮本】/永正四十四年

永正 14(1517) 年冬

しずか

朝明け静か

→ さと

あさけしつかに一かせわたるみゆ
ともしの一かけはよぶかき一たますたれ

【大永四年月並 informational】/□□(わけくらし)/月並二千五百/永大 4(1524) 年 7

あさけしつかに一きぬるうくひず
たますたれ一まけはそとのうちかすみ

【天文年間百説 3 巻】/何路 ほとときす

あめすたがたとしずか

雨過ぎた後の静けさ

→ さと

あめふりはるる一あのしつけさ
さえてよろ一くもはかせまつ一やまのはに
した

【永禄石千句】／何隲（はるのひさし）／後
応9(1500)年7月17日

さみたれすくら－あとのしつけさ
くもきえて－せきだのはる－やまのはに

【下草／金子本】／拝上／延徳4(1492)年頃

風の静けさ

→毎

ふきまよひゆく－かせのしつけさ
うめのはな－たかさと亭かにほふらむ

【大永三年月並千三百頌】／□□（はなに
つき）／月並千三百頌／大永3(1523)年3
月23日

すれにふるる－かせのしつけさ
ことのねも－たかころもてににほふらむ

【大永三年月並千三百頌】／□□（あらた
まの）／月並千三百頌／大永3(1523)年12
月23日

しずか

→浮いて渡る湖

しつかるる－はるのいそは－ふねさして
うきてかもめの－ねむるゆふなみ

【永禄石千句】／何隲（ときさき）／後
永禄7(1564)年5月12日

しつかるる－しかつのあきの－うらのなみ
うきてかもめの－ねむるかたはら

【平松文庫毛千句】／□□（くれてゆく）

→水の深さ

しつかるる－ゆふへやあきを－ふかむらむ
いはになかるる－みつのすすしこ

【東山千句】／藤原（つゆをい）／永正
15(1518)年8月10日～12日

しつかるる－なかれをとほみ－ふねさして
なかめをうつす－みつのすすしこ

【大永三年月並千三百頌】／□□（はると
ふく）／月並千三百頌／大永3(1523)年1
月23日

→懐深い

くもかかる－みねのいはは－しつかるに
あかつきふかき－さるのひとこ

【三島千句】／御所（はるとほし）／文明
3(1471)年3月21日～23日

しのふまに－はやねやとの－しつかるに
あかつきふかき－をきのはのつゆ

【石山四時千句】／初刻（うれてたな）／
天文24(1555)年8月15日～19日

→明け離れる

かちをたえ－つなきしみねの－しつかるに
あけはなれても－のちぞゆめむる

【永禄年間百百句275卷】／僧日（はつゆき
の）／永禄6(1563)年11月18日

おくつゆも－るのみきは－しつかるに
あけはなれても－かすみるのさら

【慶長年間百百句277卷】／□□（よつのと
き）／裏日／慶長18(1613)年1月3日

した

幾重の津浦の竹の下道

→また月ある雪の晴れる

いくへとよらの－たけのしたみたち
にしにまた－つぎあるゆきの－けさはれて

【竹林抄／新古典文学大系編】／冬／文明
8(1476)年5月頃

いくへとよらの－たけのしたかげ
あめにまた－つぎあるゆきの－よるはれて

【心徳関係10種】／心王集／静嘉堂文庫本

→雨の下道

→音がする

ましるそてみぬ－きりのしたみたち
たれとしも－かすつきまつ－おとはして

【伊勢千句】／三字中略（うめさきて）／
大永2(1522)年8月4日～8日
あふひとつもなききのしたみち
さとときはみやまにたきの－おとはして
【心敬関係10種／心敬僧都百句／岩橋文庫／
そのときはないいぬのしたみち
草は残らない雪の下折
→野分する庭に月

くさのはのちぬ－ゆきのしたれ
のわきせし－にのはつきかけ－よるさえて
【新撰実苑波集／実隆本／秋下／明応
4(1495)年9月26日

くさのはのちぬ－ゆきのしたれ
のわきせし－にのはつきかけ－よるさえて
【下草／金子本／秋／延徳4(1492)年頃

このしたつゆ

このしたつゆに－かをるひめゆり
なつのは－やまのすそのを－ゆふへにて
【成立不詳／宗経以前6巻／唐何［なて
しほの］／成立不詳

このしたつゆに－くさそふれたる
みやきのの－あきはしかなく－ゆふへにて
【英苑波集／広島大学本／秋下／文和
5(1556)年3月26日

このもみじ

→片散く

ゆふへすすき－このもとのみち
しつかなる－かせのさゆり－はかたしきて
【宗経堂善千句】／山何［ちるちるぬ］／
永禄4(1561)年9月14日－15日

あくくもしれ－このもとのみち
さよろも－にのはのにひに－かたしきて
【合点之句／神宮文庫本／春／天文
9(1541)年12月25日

このもみじ

→散歩のאר

しずひよ－とはそしきけ－ときのもと
ゆきかへりての－ころもてのつゆ

【紹巴丸父追善千句】／二子反音［かげた
かき］／天文24(1555)年3月26日－晦日

あくくをも－しれるともふときのもと
いつのまにか－ころもてのつゆ
【平松文庫本千句】／□□［ふくるの］

のほるはかの－はきのしたつゆ
うすきの－まきののゆふへ－いつかみむ
【永正年間百調44巻】／山何［まちこし
や］／永正12(1515)年11月11日

花の木の下

→驚

いそくこそろの－はなのこのもと
うくひすの－はるおとろかす－ねになきて
【羽柴千句】／何何［あくるよを］／天正
6(1578)年5月18－19日

いろいろそふ－はなのこのもと
うくひすの－はかせをみるも－のかにて
【天正四番方句70巻】／何何［はるさめ
に］／天正4(1576)年5月6日－7月19日

→音がする

たかへるらむ－はなのこのもと
ふるさとも－はるのみひと－おとはして
【聖観千句】／何田［のころもに］／明応
3(1494)年2月10日－12日

やまちひくる－はなのこのもと
さくらる－みねのあらしの－おとはして
【宗経関係8種／興神院／書陵部本／

→山桜
たちもはなれぬ~はなのこのもと
おもかげに~なはもむかひの~やまさくら
【行助関係 4 種】／行助連歌／天理本／

しるすらぬあふー~はなのこのもと
やまさくら~さけはみやこを~あくかれて
【草華／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 月 3 月以前

もみのしゅき

森の下草
→放れ駒

うらかれわたる~もりのしゅき
つなかるる~しつかたなれの~はなれこま
【集守千句】／何路（しくるやと）／長享
元（1487）年 10 月 9 日～11 日>

かけふかなる~もりのしゅき
たつねへき~あおもたなつのの~はなれこま
【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476) 年 5 月頃

やまのしゅげ

山の下隣
→そよく秋風

ましはわけゆく~やまのしゅげ
ながらはに~そよきもてくる~あきのかせ
【文安月千句】／何水（つきぬは）／文安
2(1445) 年 8 月 15 日

いろいろすしき~やまのしゅげ
うちたも~そよきてたる~あきのかせ
【絹巴亡父追養千句】／何船（なみぞめの）
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～図日

やまのしゅげ

山の下隣
→時鳥

むらさめすぐる~やまのしゅげ
まちてみよーなかてはあらし~とひとつき
【文明年間百節 34 巻】／何人（ゆきのや
ま）／文明 14(1482) 年 1 月 16 日

とふにならはぬ~やまのしゅげ
たちたく~たびのゆくての~とひとつき
【永正年間百観 34 巻】／何人（みやまき
に）／永正 14(1517) 年 3 月 22 日

したう

慕われる
→鳳

このはるも一こそみはなの~したのはれて
をしめやなこり~かへるかりかけ
【看聞日記紹 50 巻】／何人（まっちか
し）／応永 32(1425) 年 6 月 25 日

むかしより～ひとになこりを~したのはれて
おのかこころと~かへるかりけ
【見聞語集／広島大学本】／春上／文和
5(1556) 年冬～翌年の春

したがう

国に従う
→大和言の集

きみかよに～えひすのくにも～したかひて
ここちはくく～やまとことのは
しな
歌の品々
→花の木の下
あはれにもうたのしなしなよみかはししるもらぬも－はなのこのもと
【慶長年間百評語 27 巻】／□□□／慶長13(1608)年1月3日
すちかへすうたのしなしなたたならすいつれとめつる－はなのこのもと
【元和年間百評語 24 巻】／□□□／元和6(1620)年1月24日

しの

しのにみころ
⇒ かにふる頃
⇒ 花が早春い
あしやのゆきの－しのにふるころ
たくひにも－わかこもを通して－ひかたくて
【文安雪句】／何田（あとそある）／文安2(1445)年10月18日
ひとむらしくれ－しのにふるころ
おりかくる－くものころも－ひかたくて
【初頭千句】／何水（もうのはなの）／享徳元·2(1452)年，4月

しののめ

夜は東雲
⇒ 別れる
よはしのめに－しくれてそゆく
わかれての－そてのけしきを－ひとみよ

しのぶ

忍びかねる
⇒ 過ぎる夕暮れ
しのひかね－なたはひあつと－たのむらむつれなきに－みするゆふくれ
【宗教通善句本】／山経（ちるのるな）／永禄4(1561)年9月14日－15日
しのひかね－われとわかるや－もらすらむはとときすて－すくゆふくれ
【心経関係3種】／心玉集／静嘉堂文庫本

しのは

⇒ 古き隠岐
はるあきに－かれてはもゆる－しのふくさふるきのきはの－ゆきのむらまき
【那智戸／北野海満語本】／永正十四年
もののおもふ－こころひとつの－しのふくさふるきのきはの－あきのさひしこ
【宗徳関係8種】／老耳／天理本

しば

柴の庵
⇒ 古の夢
しばのいお

しば

⇒ 古の夢
しばのは－たのむかとや－たつねらむいとふしらぬ－いにしへのゆめ
【兼常千句】／何路（しきるのるや）／長享元·1487年10月9日＜11日＞
とひくらを－いとふはかりの－しばのはほわすれむとする－いにしへのゆめ
しみる

【弘治三年春雪千句】／山口 [はなそとも]
／弘治 3(1557) 年正月 7 〜 9 日

→花の散る頃
うしとみはなれかははむーしはのはいほ
まつふくかせにーはなのちるある
【天文年間百題 38 巻】／阿部 [あきよた
t]／天文 12(1543) 年 8 月 19 日

→秋の空
なみたしれてーかせそみにしむ
なほさりとーおもふなひとのーあきのそら
【三月千句】／何木 [やまかせに] ／文明
3(1471) 年 3 月 21 日〜 23 日

→秋の空
なみたしれてーかせそみにしむ
なほさりとーおもふなひとのーあきのそら
【三月千句】／何木 [やまかせに] ／文明
3(1471) 年 3 月 21 日〜 23 日
しめる
所を占める
→静か
くれてうつらそーとこをしめるたる
ひとかへる－あののつつきかけ－しかしかにて
【文明十四年方文52巻】／二子反音 [つつき]／文明14(1482)年7月4日～
9月14日
いけのかはつそーとこをしめるたる
ひとすまぬ－こやのはるさめ－しかしかにて
【唐草／伊加知本】／巻／文明6(1474)年
2月以前

しも
霧に霧
→月は出でても暗い
きりにしも－こきまよひぬる－ふねのうへ
つつきはいてても－くらさきやまかけ
【天正年間並不57巻】／□□ [ゆつゆ
も]／天正16(1588)年8月10日
きりにしも－ゆふへのひかり－へたたりて
つつきはいてても－またくらきそら
【寛永年間年記15巻】／□□ [ゆきなか
ら]／裏白／寛永21(1644)年1月3日
塩漬まじい山
→松現れる
しもすさましく－からすなくやま
かはきりに－ふもとのまつは－あらばれて
【寛治千句】／何路 [あまあけは]／長
享元(1487)年10月9日～11日
しもすさましく－まよふやまと
けふりより－いろなきまつの－あらばれて
【元和年間年記24巻】／□□ [うくひす
の]／裏白／元和9(1623)年1月3日
霧の片敷
→月を見る

かせもいとはぬ－しものかたき
さめすは－とゆめちふけゆく－つつきをみて
【天文廿四年年記千巻】／何人 [うめつつく]／
天文24(1555)年正月7日
おくつつつみき－しものかたき
くさまくら－そてにくちゆく－つつきをみて
【那智図／北野天満宮本】／永正十二年

月に霧
→近い霧
つきにしも－いそきてこゆる－やまたかみ
くものいつち－ちかきかりかね
【五時－日記千巻】／何路 [いそのなみ]／
天正9(1581)年11月19日
つきにしも－さはたのすぐの－みつつおちて
きりのひまより－ちかきかりかね
【慶長年間年記27巻】／□□ [うめかか
は]／裏白／慶長11(1606)年1月3日

長月の霧
→春
あらはしょけき－なかつつきのしも
ありあげ－ころもうつよの－そらさせて
【瑞草千句】／何心 [つずにさえ]／文明
4(1473)年12月16日～21日
かしらそろしき－なかつつきのしも
ありあげ－なくやぼかすの－やまからす
【宗関関係9種】／宗関発句付句抜書／
小松天満宮本

しらかわのせき
白河の関
→道の奥
とぼくもきぬる－しらかばのせき
おとにのみきつつけふそーみちのおく
【大永年間年記14巻】／何路 [はさまつ
の]／大永4(1524)年5月1日
こえしをしのふるしらかはのせき
みるふみや－なほつきめを－みちのおく
しろ

【月村菅町／書籍部部】／永正十四年

ころしほのふりしらかのはせき
いしふみやーなはつるきめーみちのおく

【宗義関係 2 種】／宗義連歌合／静嘉堂文庫

しる

哀れなる

→古の後

あしれれ－ひとひひとひの－わかよはひかへらみちや－いにしへのあと

【長幸年間百帳 2 卷】／何路〔さみたれは〕／長幸 3(1489) 年 5 月 11 日

よはたれも－つひにはの－あしれれつくりみかきし－いにしへのあと

【大永三年年並千三百帳】／何路「はなにつき」／月並千三百帳／大永 3(1523) 年 3

しる

知る

→鴨う時鳥

すきぬも－みしかきねとは－しるらめやわれこそねには－なくほととに

【伊庭千句】／何船〔やまむね〕／大永 4(1524) 年 3 月 17 日－21 日

もののおつるかゆふくれを－しるらめやなくほとときす－なくさめてゆけ

【竹林撰／新古典文学大系本】／夏／文明

8(1476) 年 5 月頃

しる

程が知られる

→言いしばかりに秋

さひしこなれぬーほとそしたらる
つきたたーいひしばかりに－あきくて

【宗長連遍千句】／何色〔うくひのす〕／
（享禄 5）天文元(1532) 年 3 月 25 日

はるにつれなき－ほとそしたらる
このくれと－いひしばかりに－あきかけて

【心歌関係 10 種】／芝草内通歌合／天理本

しる

沖の白浪

→立田山の秋

かせにまかする－おきつらしなみ
たったやま－みのこのはに－あきくて

【斐草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

しくれつはつれ－おきつらしなみ
たったやま－あきふかくる－ほとみえて

【宗長関係 8 種】／壬生谷／書籍部部

しる

越の白雪

→帰る穂

はるふかまで－こしのしらゆき
ありあけの－つるきもなこり－かへるばかり

【看聞日記紙勝 5 卷】／山何〔あつさな
ほ〕／応永 32(1425) 年 6 月 25 日

きゆるひもなき－こしのしらゆき
かへりかり－いったかこえて－またはこむ

【享禄年間百帳 8 卷】／白何〔あさまどり〕
／享禄 3(1530) 年 3 月 2 日

しる

白露

→面影ばかり

くれてより－あふきのいろも－しらつゆに
おもかけはかり－あさかほのはな

【弘治三年春雪千句】／何人〔ゆきにうめ」
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

うつしものを－つきてくもらぬ－しらつゆに
おもかけはかり－のこすいにしへ

【天文年間百帳 3 8 卷】／何人〔かすむよ
は〕／天文 23(1554) 年 3 月 26 日

しる

峰の白雪

→残る

のはしもかれる－みのねのしらゆき
さとふりぬ－たかかよびちの－のこらむ

【柴野千句】／何路〔あちさく〕／延文
2(1357) 年以後・応安 3 年 6 月以前
それとはかりの－みねのしらゆき
いつおきて－かれののしもは－のころらむ
【常転千句】／山戸 [ゆふたは]／文正
2(1557)年以後・応安 3 年 6 月以前

ふりそめけりな－みねのしらゆき
まったかく－しくれのくもや－のころらむ
【熊野千句】／末色 [なみしほけし]／文正
元 (1466) 年 3 月以前

すえ

小山田の末

→寄枯れ

かへしたてる－をやまのすゑ
しもかれの－くすはにかはる－あきのかせ
【天正年間百選 57 巻】／何松 [もしほく
さ]／天正 7(1579) 年 1 月 13 日

かりのこしぬる－をやまのすゑ
しほかれの－ひとむらすき－ほのかにて
【天正年間百選 58 巻】／□□ [あさなあ
さな]／天正 15(1587) 年 1 月 3 日。

竹の末々

→微か

ゆきをれふかき－たけのすゑすゑ
かすかにも－しほけふらせて－ひともなし
【永禄年間百選 28 巻】／何松 [うたゆよ
の]／永禄 5(1563) 年 12 月 9 日

ふくかせしるき－たけのすゑすゑ
かすかにも－みちあるかたや－さとなりむ
【文禄年間百選 12 巻】／□□ [はなのい
ろや]／文禄 4(1595) 年 1 月 30 日

すぎ

杉の群立ち

→末に散る花

うろくつは－なかれのすゑの－かたよりに
たのものはらの－ひかりさやけし
【元和年間百選 24 巻】／□□ [やかほ
の]／元和 6(1620) 年 8 月 23 日

水の末見える

→春の末の笑

たききり－みつをむすひし－すゑみえて
やまくれかなる－はしのひとすち
【秋津洲千句】／何木 [ひとさかり]／天
文 15(1546) 年 8 月 25 日

こはりとく－みつをつつみの－すゑみえて
たえたえくる－はしのひとすち
【元亀年間百選 6 巻】／何松 [むさしのも]
元亀 3(1572) 年 3 月 18 日

道の末

→立ち安らう

なつこも－はるはるきぬる－みちのすゑ
みつゆくはして－たちそやらふ
【天文年間百選 38 巻】／何人 [さくふち
の]／天文 18(1549) 年 3 月 24 日

くれかかる－ものみくるの－みちのすゑ
やとりすめす－たちそやらら
【天正四年万句 70 巻】／何鳥 [まつむし
の]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7月 19 日

流れの末

→田の面の原

たちさくく－なかれのすゑの－むらちとり
たのものはらの－いりひさむけ
【天正年間百選 57 巻】／何路 [かすむよ
の]／天正 6(1578) 年 2 月 18 日
すぎる
雨過ぎた後の静けさ
→山の端

あめふりはるるーあとのはつけさ
きえやつてーくもはかせまつーやまのはに
【永平寺町】／何船（はののそちは）／明
応9(1500)年7月17日

さみたれすくるーあとのはつけさ
くもきえてーつきたてのはるーやまのはに
【下見／金子本】／雑文／延徳4(1492)年頃

過ぎる村雨
→時雨

くもるとすれはーすくるむらさめ
したふともーいちはやいかてーほとととさ
【長楽年間百選6巻】／但何（はるくさは）
／長楽2(1488)年4月

むらくもとぼくーすくるむらさめ
ひとこゑのーほかにはきかぬーほとととさ
【天正四年万石10巻】／三字中略（かせたて）／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

春過ぎる
→日の長い

おのつからーはれしきろのーはるすきて
まつひとすこすーひそなかれ
【紫野町】／山何（やぶたは）／延文
2(1557)年以後-安3年6月以前

はなにわかーこそろしきのーはるすきて
のとくにくらすーひそなかれ
【宗関学院8種】／老耳／天理本／

すごい

凄い秋風
→野のひと松

とふかひなしやーすここきあきかせ
くれぬとてーかけたのむののひとつまつ
【竹林抄／新古典文学大系本】／波／文明
8(1476)年5月頃

ふときゅふくはーすここきあきかせ
かるるののひとともすすきーひとつまつ
【心栄関係10種】／芝草内道歌合／天理本

すさまじい

風が凄まじい
→蟻鋸

いたまみえたるーかせはすさまし
こあちかきーまくらのつきてーきりきりす
【天文四十五日千句】／何船（つきにうめ）
／天文24(1555)年正月7日

よるのとほそのーかせはすさまし
きりりすーなきよるとこをーしきわびて
霧蒙まじい山
→松規勒

しもすさましくーからすなくやま
かはりにーふぶとのまつはーあらはてて

【編集者】／所伊 [うあし有は]／長
幸元 (1487) 年 10 月 9 日〜11 日>

しもすさましくーよよゆやまもと
けふりよりーろよなまつのーあらはてて

【元和六年間百題 24 巻】／□□ [くうひす]
の／裏白／元和 9(1623) 年 1 月 3 日

すじ

霧蒙まじい空
→旅

ふけゆくままにーささましきそら
たひころもーかさねまはしきーきねたにて

【篹集千句】／花之例 [うめかかば]／元
亀 4 天正元 (1573) 年正月 9 日〜11 日

しもふるはかりーすさましきそら
たひころもーたかうつとにーいそくらむ

【大永三年月並百題】／□□ [うめか
かや]／月並百題／大永 3(1523) 年 2
月 23 日

すじ

燃一筋

かせふきはらふーけふりひとすち
たれか名てーまつのしるしのーのこるるむ

【文明十四年万句 52 巻】／編 [かるひ
とは]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日〜9 月
14 日

とほさとをのーけふりひとすち
たかうあてーまつはかりかはーのこるるむ

【文明十四年万句 52 巻】／色 [はるな
つを]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日〜9 月
14 日

すじ

一筋

→大僊

ひとすちのーかはみつしろくーあらはてて
けふりふきやるーさとのあさかせ

【大原野十花千句】／所伊 [けふこせは]
／元亀 2(1571) 年 2 月 5 日〜7 日

ひとすちーなかせするにーはしみえて
けふりふきやるーをののかはかせ

【永禄五年間百題 28 巻】／所伊 [ひきう
る]／裏白／永禄 5(1562) 年 1 月 3 日

すじ

水の一筋

→雲

そっくはかりのーみつのがひとすち
ふりにけるーあとやなみのーたきならむ

【大永四年月並二百題】／□□ [しや
ひぬ]／月並二百題／大永 4(1524) 年 9
月 23 日

みなかみしらぬーみつのがひとすち
そてやたーうきおとしのーたきならむ

【名所句集／靜嘉堂文庫本】／恋下／（大
永前後）

すじ

道の一筋

→駕騎

たなかにつくーみちのがひとすち
はなれこまーいはふかたにしーゆきつれて

【永禄五年間百題 6 巻】／何人 [はなのとき
も]／元亀 4(1573) 年 6 月 6 日

さとみえぬーみちのがひとすち
つなからーいつくよりかはーはなれこま

【文禄五年間百題 1 2 巻】／□□ [あつまや
の]／文禄 2(1593) 年 5 月 6 日

すじ

→行き連れる

たなかにつくーみちのがひとすち
はなれこまーいはふかたにしーゆきつれて

【永禄五年間百題 6 巻】／何人 [はなのとき
も]／元亀 4(1573) 年 6 月 6 日

かよふをのへのーみちのがひとすち
このかはーたきこほろとりーゆきつれて

【文明十五年万句 11 巻】／所伊 [ひめも
の]／文明 15(1483) 年 9 月 23 日〜3 月 2
日
すずしい

風の涼しさ
→安らう

すすき

枯れ花穂
→朝の太陽の背

はなすすきーかくれゆくしもーあきふけて
のにはおしなちーよるるむしのね

【錦訳院会千句】／山河 [あきもより] ／ 宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日 ー 21 日

つきのころーかくれののすゑのーはなすすき
ほかにうふーよるるむしのね

【因縁千句】／薄何 [かきはらぶ] ／文明 7(1475) 年 11 月 26 日 \( \sim 28 \) 日>

花穂
→霞の声

ほのめくやーたかたくらのーはなすすき
ふけゆくまでにーまつむしのこゑ

【天正年間番風 38 巻】／何船 [あきほ
に] ／天文 12(1543) 年 7 月 29 日

ひととやーかくれののうちのーはなすすき
したはにすたくーまつむしのこゑ

【永禄年間番風 28 巻】／何船 [たちな
せ] ／永禄元 (1558) 年 7 月 18 日

←群薄

→春の山田

ひとむらすすきーそってふるるかけ
しもよふりーやまたのおしねーかりすぎて

【永禄年間番風 34 巻】／何船 [はやみの
に] ／永禄 12(1515) 年 11 月 10 日

ひとむらすすきーひとみかけせす
しもよふりーやまたのおのこへーかたぶきて

【合点之句／神宮文庫本】／冬／天文 9(1541) 年 12 月 25 日

すすき

そでふきおくるーかせのすすき
たまほこのーゆくへにしはしーやすらひて

【天正年間番風 57 巻】／□□ [うめかえ
の] ／嘉久／天正 19(1591) 年 1 月 3 日

たたかはらのーかせのすすき
みそきるーみつのはとりにーやすらひて

【文明十六年千句 11 巻】／三字中略 [か
たいとし] ／文明 15(1483) 年 9 月 25 日

←細の声

すすしくもーくさはにむすふー一つゆらりて
みるみるかつーほたるとひかふ

【天正年間番風 38 巻】／山河 [ふむあと
も] ／天文 13(1544) 年 10 月 15 日

すすしくもーまとのくれたけーうちそよき
ほたるとひかふーかけすかなり

【慶長年間番風 27 巻】／□□ [ひめのおき
し] ／慶長 4(1599) 年 3 月 25 日

←露の声

すすしくもーゆふひのくもーにーあきたちて
こすゑしらるーひくらしのこゑ

【永禄元年花箏千句】／□□ [あだままで]
／永禄元 (1558) 年 3 月 23 日 ー 25 日

すすきのーけふよりしろきーあきたちて
やまはくものもーひくらしのこゑ

【天正年間番風 38 巻】／□□ [使みつ
も] ／天文 24(1555) 年 9 月 2 日

つゆのすすき

露の涼しさ
→道立

おくるのはるのーつゆのすすき
ゆふたちのーくもはかへーおみねこえて

【天正年間番風 57 巻】／何船 [みちみち
を] ／天正 13(1585) 年 5 月 27 日

ちりなきにはのーつゆのすすき
ゆふたちのーあとのやまみつーいはこえて
すずむし
鈴虫の声
→厳延える
たちぬうているの－すずむしのこちら
つきにはと－ちきりしかたに－ふりはへて
【享德二年千句】／桐方 [つきとたか]／
享德 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日
すずきかもとの－すずむしのこちら
ふりはへて－ゆくやまともとの－かせならし
【永禄元年花千句】／□□ [たかなみも]
永禄元 (1558) 年 3 月 23 日～25 日
すだれ
檻を巻けば雪
→夜もすながら
すたれをまけは－ゆきしろきやま
よくすから－れしくつつきの－けさすみて
【弘治年間百曲 8 巻】／桐方 [たくそてに]
弘治 2(1557) 年 12 月 2 日
すたれをまけは－けさのうすゆき
よくすから－あらしをそてに－かたきて
【成立不詳・宗篤以前 8 巻】／桐方 [なひ
くよや]／成立時不詳
すてる
→静かな灯の影
くれかかる－ひまほのかなる－たすますたれ
しほかにみゆる－ともしきのかけ
【大永四年月並千二百曲】／何色 [うめの
はな]／月並千二百曲／大永 4(1524) 年 1
月 23 日
あめそく－かすみのつゆの－たすますたれ
しほかにあく－ともしきのかけ
【天文年間百曲 34 巻】／桐方 [みれはみ
し]／天文 13(1545) 年 12 月 25 日
すてる世の中
→佗ぬれば思う
なほいかならむ－すつるよのなか
わひぬれは－おもひしこの－まさらゐに
すま

須磨の浦
→波流桟橋

よもすから一つのかけのみすまのうら
なみここものに一□□□□□なる
【七間記紙背50巻】/山河[ちょもみ
む] /応永19(1412)年1月14日

うみつらの一かすみぞめたるすまのうら
なみここものに一ちきしことき
【七間記紙背50巻】/唐河[ひそをし
き] /応永30(1423)年3月29日

ほとちかしきいったるかれはせすまのうら
なみここものに一よするとまやか
【文安頃前倒4巻】/何路[やへひと
へ]

→妻訪う小島しば鳴く

すまのうらやわひつつおくる一あけくれに
つまつふちとり一かせにしばなく
【弘治年間前倒8巻】/何路[ゆくみつや]
/弘治2(1556)年3月24日

すまのうらやあかつきかたの一そらのつき
つまつふちとり一きりにしばなく
【元亀年間前倒6巻】/何人[はなのとき
も] /元亀4(1573)年6月6日

すまのうらら

須磨の浦

→波流桟橋

ふなちにあらきすまのうらなみ
もしほやく一けふりにみも一ひきくれて
【表作千句】/唐河[つきたた]/文明
8(1476)年3月6日＜～8日＞

みのうきふしにすまのうらなみ
もしほやく一けふりはあさなゆななにて
【天正年間前倒57巻】/何路[かすむよ
の] /天正6(1578)年2月18日

ふねさしをとるすまのうらなみ
あはちかたとうしのむかふせをみて
【宝徳四年前倒】/何人[はなそころ] /
宝徳4(1452)年3月12日

つきをみるよすまのうらなみ
あはちかたせとのあきかせをみにみて
【嘉永改第/広島大学本】/秋上/文和
5(1356)年冬～翌年の春

すまひと

→波流桟橋

すまひとの一よかたりになる一はなまね
わかのさくら一はるしおどしき
【七間記紙背50巻】/山河[まつかね
に] /応永32(1425)年3月25日

すまひとの一うあけるはなに一なくさきて
わかのさくら一さかりいつつころ
【七間記紙背50巻】/何路[ひととせ
に] /応永32(1426)年12月11日

なお須磨の浦

→友千鳥

うくともたへて一はなすまのうら
をりをりはたえすこととへともちとり
【飯盛千句】/x x[かけすたし]/永禄
4(1561)年5月27日～29日

なれなむもへちますまのうら
きくたにへへたてさそなのへ一のもちとり
【五合一日千句】/何貨[さくはのな] /
天正9(1581)年11月19日
すみ
墨染の袖
→藤の暮れ
いろをすつる－すみのせのそ
やとりかせ－えぐちのさとの－あめのくれ
【藤原田平也】／□□『ゆかはるに』／文
明14(1482)年10月前後
つゆなるこほれぞ－すみのせのそ
すみかとも－こかけをたのむ－あめのくれ
【明応年間百編72巻】／何木［やまはゆ
き］／明応7(1498)年11月4日
→藤の庵
よしはくとも－すみのせのそ
かくすみも－いくほとならむ－しはのいほ
【延徳年間百編16巻】／何船［さよかせ
も］／延徳2(1490)年7月23日
あれはやまと－すみのせのそ
はなにみ－むしぶにたる－しはのいほ
【成立不詳・宗長以前15巻】／初何［た
てながら］／成立時不詳

→涙
うきよにやは－すみのせのそ
いまはみに－ののきのなきも－なみたにて
【崇教政／広島大学】／高谷／文和
5(1356)年冬～翌年の春
ここらなすの－すみのせのそ
こはるも－おはえぬもの－なみたにて
【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541)年12月25日

すみだがわ
隅田川
→越える井関
ふねとむる－なみのまかひの－すみたかは
こゆるあせの－みつろきくれ
【亀年文庫本千句】／□□『きてかへる』／文
禄6(1563)年11月18日以前
なくといも－はのはるし－すみたかは
こゆるあせの－なみののとけさ
【永禄年間百編28巻】／何船［あととふ
を］／永禄3(1560)年11月9日

すみよし
住吉
→言の葉の遺
すみよしの－かみにいのひとを－かけおきて
すなほやらのは－ことののはみち
【天正年間百編57巻】／□□『すみようと
も］／天正11(1583)年間1月27日
すみよしの－にはのまっかせ－ものさひて
かみもうくらむ－ことののはみち
【文明十四年万句52巻】／何国［ほとと
きす］／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

すみよしのうら
住吉の浦
→彼路島

すみよしのまつ
住吉の松

なみにはるつ－すみよしのうら
あさみとり－かすみにうかふ－あちはしま
【大永四年月並千二実績】／□□『そよと
しも］／月並千二実績／大永4(1524)年10
月23日
あくれはかすむ－すみよしのうら
つきもた－みるありとほき－あちはしま
【慶長年間百編27巻】／□□『いなつま
も］／慶長9(1604)年7月6日
すむ

いのうえぬこ

→旭の八幡山

かけとちきるや－すみよしのまつ
みつかきの－びさしくなりぬ－やはたやま
【伊豆国名】／三宅国名／ちりやすき／大正4(1524)年3月17日～21日
おひやかはる－すみよしのまつ
かみかきに－すきのかたかき－やはたやま
【成立不詳・心歌以前14巻】／阿部［かすみはる］／成立時不詳

すみよしのまつとたのむ
→征伐が藤浦

すみよしの－まつとたのめし－かひもなく
なにたなみ－のそてぬらすらむ
【続秋波集／広島大学本】／恋中／文和5(1356)年冬～翌年の春
すみよしの－まつとたのめし－ほかにまた
なにたなみ－のそてぬらすらむ
【続秋波集／広島大学本】／恋中／文和5(1356)年冬～翌年の春

住むる古里

→思ふ

なほあらましと－すめるるふるさと
たひゆくや－あををいかに－おもふらむ
【歌集歌名】／唐何［つきはた］／文明8(1476)年3月6日＜～8日>
あはれかくても－すれるるふるさと
つれもなき－わかみやまつも－おもふらむ
【大正四四年月並十八巻／序／【そよとし】／月並十八巻／大正4(1524)年10月23日

すむ

住み所

→鶴の声

ひをてつ－のやまをはるは－すみところ
よさびのすみの－うくひすのこゑ
→衣がつらは

つきさする

→鶴の声

月影澄む

→藤寒袖

ふりにける－のでのつきたの－かけすみて
あかつきおきの－つうさむきそこで
【文和三年春雪千句】／阿部［なくしのの］／弘治14(1557)年正月7日～9月

つゆしもの－つうさむきを－つきたすみて
かれるのあさち－あきかせそく
【文和三年春雪千句】／阿部［なくしのの］／弘治14(1557)年正月7日～9月

住むる古里

→秋風が吹く

かみよより－たましまかはの－つきたすみて
かきりもなみに－あきかせそく
【文和三年春雪千句】／阿部［なくしのの］／弘治14(1557)年正月7日～9月

すむ

→天つ雁

かけもみに－さしやと COOKIE と－つきたすみて
ねぬめもさるる－あまつかりかね
【文和三年春雪千句】／阿部［つゆかけて］／永正7(1510)年春以前＜永正5年春＞

おほねに－かたへよふかき－つきたすみて
まくらにちかし－あまつかりかね
【文和三年春雪千句】／阿部［つゆかけて］／永正7(1510)年春以前＜永正5年春＞
よう
川沿いの道

みつつうけふるーかつはそひのみち
あかつきのーつげるこねにふねなさ

【時刻手本】／「むろもも」／
文明 2(1470) 年 10 月 10~12 日

かすかにのこるーかつはそひのみち
あかつきのーやまにかくれるーよのはつ

【文明五年年譜 34 巻】／何木 [あめかか
を]／文明 15(1483) 年 2 月 19 日

→渡し舟

くたれはあさきーかつはそひのみ
はやきにーおとさえてそのーわたしほね

【成立不詳・室町以前 15 巻】／×× [は
るやつ]／存疑 / 成立不詳

つつくともなきーかつはそひのみ
くれぬれはーひとりふたりのーわたしほね

【文明五年年譜 5 巻】／何人 [みれはみ
し]／天正 12(1584) 年 9 月 13 日

かぜぞいふせ
川沿い舟

→岸の真竹

さらいつるーかつはしほぶねにふるふきぬ
すおうなびはまひときのにくれた

【水原手本】／「たかぞれし」／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

なみもなきーかつはしほぶねにーさをとりて
をのえてきたむーきのにくれた

【文明四年年譜 52 巻】／「はるな
つを」／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

せみ

蝉の語声

→唐衣

やまやさつきのーせみのもろもた
すすしさはーたあきかせのーからこも

【永正十四年手本】／「二色反音 [ここながべて]
／永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

さよのしくえがーせみのもろもた
からこもーまつもそももーうちぬれ

【文明四年手本 52 巻】／何木 [あきの
ひも]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

そ
川沿いの道

→続

なかよしはすむよし

中々市は住み良い

→三輪の杉

みちのりのーなかよしはすむよしに
たちらはひたるーみもちのすきむら

【山田世記記事 50 卷】／山何 [つしつ
に]／応永 26(1419) 年 3 月 29 日

水は澄む

→明け方

あかくてみなせのーみつはむき
あけたこのーたきよりうへーつきてよ

【室山四時手本】／「ついてやふね」／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

くもにいはまのーみつはむき
あけたこのーつきてにてぬるーそとめえて

【慶長五年手本 27 卷】／□□ [たふこと
に]／慶長 8(1603) 年 1 月 3 日

ことさらにーおもはすらむーつきてすみで
ひびきはわかるーころをみつこ

【活字手本】／「字餘逸」 [いもはふひは]
／永正 11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

やまかせのーふきそぶはのーつきてすみで
いくさとさとのーころをみつこ

【天正五年年譜 5 卷】／何路 [いもか
も]／隠没 / 天正 14(1586) 年 1 月 3 日

なかよしはすむよし
そこで

それはいかつかそふはおもかげ
はなのあと一かせよりゆきをふきたためて
【天正年間百領57巻】／初町［すすしさを］／天正2(1574)年6月10日

後朝の袖

なみなたにむせふきぬきぬのそて
しののめの一そらきりわたり一ときおちて
【舘芸院会千句】／山町［あさもよひり］／室德元(1449)年8月19日～21日

ぬれにそぬるるきぬきぬのそて
しののめの一ころらしだぬめのふり立てて
【庵智聰／北野天満宮本】／永正十四年

墨染の袖

あおのくち

一雨の暮れ

いろかをする一すみそめのそて
ようりかせ一えくちのさとの一あめのくれ
【観読四千句】／□□［ゆからはに］／文明14(1482)年10月前後

つゆなこほれぞすみそめのそて
すみかとしも一こかけをたのむ一あめのくれ
【明応年間百領22巻】／何木［やまはゆき］／明応7(1498)年11月4日

そこで

遠方人の袖

送る

をちかたひとの一そてほのかなり
よこくもや一わかれしゆめをおくるらむ
【大永四年月並千二百韻】／□□［わけくらし］／月並千二百韻／大永4(1524)年7月23日

をちかたひとの一そてのむらさめ
ほとときすーなれもたひとや一おくるらむ
【庵智聰／北野天満宮本】／永正十三年

片敷の袖

夜明の月

をれすはひとり一かたきのそて
さくともものうつなばらぬひふーよはのつき
【秋津洲千句】／唐町［うめかかの］／天文15(1546)年8月25日

かへはなほーおほなけならぬーよはのつき
【重矩度／広島大学本】／朝玉／文和5(1536)年冬～翌年の春
ここはるすの－すみそめのそて
こほるるも－おほえぬものは－なみたにて
【合点之句／神宮文庫本／忠／天文
9(1541)年12月25日

袖が露っぽい

→寒い

のをわけごろも－そてつそゆけ
いとなほ－あきそふたひや－うかるらむ
【日閲日記紙背50巻／何路／うののはなの／応永30(1423)年4月4日
ここつぐかの－そてつそゆけ
いくたひか－かのひとゆゑに－うかるらむ
【文明十四年万巻52巻／何人／ちくさみな／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→物思い

たえぬくれに－そてつそゆけ
いかにとも－とふひとあれな－ものおもひ
【熊野千句／何路／かさなるや／文正
元(1466)年3月以前
くさをわけゆく－そてつそゆけ
しのひちは－こころをつくす－ものおもひ
【文明十四年万巻52巻／何寺／きりうすみ／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→物思う

はらふおなしえ－そてつそゆけさ
ものおくふ－こころをいつち－やりてねむ
【出陣千句／何木／しもから／永正
元(1504)年10月25日～27日
こひするのみか－そてつそゆけさ
ものおふ－われやはつきに－はちらるむ
【伊予千句／唐何／うつせの／天文
6(1537)年5月22日

袖の移り香

→菖蒲草

のこりもふかき－そてのうつりか
ふきすしこ－ひのふのつま－あやめくさ
【元亀二年千句／何木／たきなみの／元亀2(1571)年3月5日
なにはかじや－そてのうつりか
あやめくさ－かくるよとは－あれまさり
【歌名千句／□□／ときもも／
＜袖の香＞
かすみもあへぬーぞ的うめかか
うくひすのこゑもゆくゆくーとほとのに
【天文年間百編 38巻】／何人 [みれはみし]／天文 13(1545) 年12月25日

＜袖の紅＞
みせはやふかきーぞてのくれなる
たっかはーあきのなこりにーおりたちて
【永正年間百編 34巻】／何船 [うなひき]／永正 13(1516) 年1月
なみだのいろはーぞてのくれなる
なにゆふにーかかるうきなのーたっかは
【英知演集／広島大学本】／恵下／文和5(1506)年冬・翌年の春
みせはやふかきーぞてのくれなる
たっかはーあきのかきりにーおりたちて
【節管集／北野天満宮本】／永正十三年／

＜袖の氷＞
ぞのこおり
みてるこほりはーわれそくるし
よかれしやーわふるまくらもーしらさるむ
【永正年間百編 34巻】／山何 [たちはなに]／永正 18(1521)年5月7日
そのここちはーいつとてもを
もののおふーこころやるもーしらさるむ
【天文年間百編 57巻】／何船 [なひそはむ]／天文 10(1582)年1月5日

＜袖吹きおくる風＞
とま
とふきおくるーみねのこからし
たまほこのーすまはゆふしもーさえさえて
【天文年間百編 38巻】／×× [かめにさす]／天文 21(1552)年2月20日
とふきおくるーかせのすすしさ
たまほこのーゆくへにはしはいすらびて
【天文年間百編 57巻】／×× [うめかえの]／裏白／天文 19(1591)年1月3日
袖を濡らす

→立ち別れ

ゆめにみてもーそてぬらしきり
なこりさへーゆゆしきはがりーたちわれ

【出陣千句】／薄利 [ちきさきや] ／永正
元 (1504) 年 10 月 25 日～27 日

ゆふへのかすみーそてぬらしきり
まくらるーあしたのくもにーたちわれ

【伊勢千句】／三木中略 [うめさきて] ／
大永 2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

→秋の首とも

よのなかとにーあるかすならすーそてぬれて
いつをかきりそーくさのかりいほ

【文明年間百経 3 巻】／何人 [のるはつ
き] ／文明 18(1486) 年 2 月 6 日

なかなかのーなさけおもへーそてぬれて
ゆきにやとかずーくさのかりいほ

【文明十四年方冊丸2 卷】／夢想 [そのし
なる] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

なみだがねがまうのう

→思う

つゆかもみなもーーかわそてのうへ
ひとしれぬーみにはなにをかーおおふらむ

【文安年間百経 9 巻】／山何 [ふたひの]
／文安 5(1448) 年 11 月 12 日

いつもみなーーかわそてのうへ
とふひとやーこよひはかりーおもふらむ

【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

そのままた

→ただ面影

みにつるーたひのなみのーそのままた
たおおかけはーあとふるさと

【文和千句】／何木 [なにるし] ／文和5
年

そのままにーしきもすたるーしとねにて
たおおかけはーありあげのゆめ

【元禄年間百経 28 巻】／何路 [なつくさ
の] ／元禄 9(1666) 年 5 月 9 日
そば

【永禄五年花千句】／□□[じゆうにげん]

くちてあやうき－そのはかけはし
しもはたた－ふるかふ―への－あさはらけ
【永禄元年花千句】／□□[みるまに]

るかをする－すみそめのそで
やとりかせ－えくちのさとの－あめのくれ
【難波田千句】／□□[ゆくはるに]／文

うきよにやなほ－すみそめのそで
いまはみに－のそみのなき－なみたにて
【大永三年月並千三百句】／□□[はるは
たた]／月並千三百句／大永3(1523) 年間
3月23日

そら

【養政書／広島大学本】／篤五／文和
5(1536) 年冬＝翌年の春

 preocupación

【天正四年万句700】／山河[みかつき
の]／天正4(1566)年5月6日～7月19日

次めゆめしたふ－あめつつきのそら
くさくら－またうきみちに－おきいて
【行助関係4種】／行助句／伊地本／

もくのそら

【養政書／広島大学本】／篤五／文和
5(1536)年冬＝翌年の春

 preocupación

【天正四年万句700】／山河[みかつき
の]／天正4(1566)年5月6日～7月19日

次めゆめしたふ－あめつつきのそら
くさくら－またうきみちに－おきいて
【行助関係4種】／行助句／伊地本／
あけぼの空

曇の空

→別れを急ぐ

よここものこるとあけぼののそら
うたてなと--とでものわかれ--いそくらむ
【応永間間編集9巻】　片路　【やまみつのの】
　応永15(1408)年3月11日

うちかすみたる--あけぼののそら
いつくにと--わかれをさても--いそくらむ
【文明十四年万万冊52巻】　夢想　【たみみつのの】
　文明14(1482)年7月4日～9月14日

有明の空

→秋の風

つきもなごりの--ありあけのそら
いつままで--ききてうらみむ--あきのかせ
【表里本千両】　薄何　【ゆきもみむ】
　文明8(1476)年3月6日＜→8日＞

さたかのこる--ありあけのそら
なほふくや--よふねのすゑの--あきのかせ
【文明年間間編34巻】　の一　【たったゆう】
　文明12(1480)年7月4日

→草枕

ねぬよほどふる--ありあけのそら
くさまくら--うかれとあきや--ふけぬらむ
【文明年間間編34巻】　x x　【つきをかせ】
　文明12(1480)年8月

つきにねしのは--ありあけのそら
くさまくら--いくよくもなき--あきくれて
【新戸重／北野天満宮本】　永正十三年/

寝ねがての空

→月を枕に

おしえかたの--いねかでのそら
しのは--いみやまのつくを--まくらにて
【成立不詳・心教以大14巻】　片路　【はるはた】
　成立時不詳

さってもよは--いねかでのそら
たのめしは--うつろふつきを--まくらにて
【合点之内／神宮大谷本】　あい　天文
　9(1541)年12月25日

あけぼのそら

雨残る空

→時鳥

てるひもなつの--あめのこるそら
ほとときす--ゆくゆくわかぬ--こあききて

→時鳥
まずまじい空

→旅

ふるさとしのふるさと
ほときすーあたってさをかれるや

【永正十花千句】／山野（けふぞみな）／
永正13（1516）年3月11日～4月

いつかとまつは－くれことのそら
ほときすーあやめひくひも－はやすくて

【盤浦／大阪天満宮文庫本】／春／永正2（1505）年8月23日以後（1年3月以前）

さつまにさきの空

→旅

つ tires 平

ふけゆくさまに－すさまきそら
たぴこもーかねまぼしききぬなにて

【橘崎千句】／花之何（うめかは）／（元
亀4）天正元（1573）年正月9日～11日

しもふるはかり－すさまきそら
たぴこもーたつつさとにーいそくらむ

【大永三年月並千二百錦／□□（うめか
かや）／月並千二百錦／大永3（1523）年2
月23日

すびくよここのく

→月残る

やまにたなびく－よここのそら
つきのよたーむくとみて－のこるるむ

【常野千句】／何木（はにしのる）／延文
2（1537）年以後応安3年6月以前

みねにたなびく－よここのそら
つきやまた－かすみかくれに－のこるるむ

【文明十二年千句8錦】／何田（あめのよ
は）／文明12（1480）年4月10日～*日

たびのそら

→空

はながれ

なくさつと－ときはさやけき－たびのそら
くさのまくらの－あかつきのつゆ

【聖徳千句】／何木（きめぬるか）／延応
3（1494）年2月10日～12日

かへるさの－あとははかる－たびのそら
くさのまくらの－よよなよなのつき

【大永三年月並千二百錦】／□□（はるを
まつ）／月並千二百錦／大永3（1523）年11
月23日

つきにありあげのそら
かへるるる－おりあげのそら

【成立不詳／宗祇以前15錦】／何は
そあそは／成立時不明

つきはきりまに－ありあげのそら
あきちかきーをのかはおとーよをこめて

【天文年間錦3錦】／何船（あさかほ
に）／天文12（1543）年7月29日

中空

→秋の桜

なかそらに－くるのはつきの－ほのかにて
ふきたちげか－あきのはつかせ

【毛利千句】／何船（みてもおふ）／文
禄3（1594）年5月12日～16日

ゆくつるは－おなしみやこの－なかそらに
ふなちおも－ふ－あきのはつかせ

【天文年間錦3錦】／朝何（たまてき
く）／天文9（1540）年4月25日

中空の雲

→見おぼれるする

はつあきなれや－なかそらのくも
ふしさの－きりよりうへに－みえかくれ

【文明十四年万句52錦】／山何（なほさ
こそ）／文明14（1482）年7月4日～9月
14日

こころさわかり－なかそらのくも
ふるさとに－おかつくやまの－みえかくれ

【竹林抄／新古典文系本】／旅／文明
8（1476）年5月頃

長雨の空

→時雨
ふりみぶらすみ－なかあめのそら
ほとときす－つきになこうや－いつならむ
【永正年間百選34巻】／山岡「とふひとや」／永正18(1521)年8月

なほはれかた－なかあめのそら
ほとときす－わかたたかひに－ききわひて
【下草／金子本】／夏／延德4(1492)年頃

夕暮れの空

かへすもまつも－ふかきよのそら
をくるまの－つきさへにほふ－ありあげに
【永正年間百選34巻】／何色「うかみてぬ」／永正6(1509)年間8月29日

ととのなくねは－ふかきよのそら
あふさかや－すきのはしろき－ありあげに
【永禄年間百選28巻】／何人「つきなのち」／永禄5(1562)年8月11日

時雨

たとるみちをや－はたるとふそら
うすものの－そでにおほゆる－あきのきて
【天文廿四年梅菊句】／二文反音「くれなゐの」／天文24(1555)年正月7日

かせのよるる－はたるとふそら
あしかきの－すまひはかなき－あきのきて
【永正年間百選34巻】／何船「うちなひき」／永正13(1516)年1月

時雨

たたくはかりの－むらさめのそら
やまのはの－くもにりひの－かたわけで
【天文正年間百選57巻】／追悼（としをふる）／天文8(1577)年9月22日

なこりしはしの－むらさめのそら
やまのはの－きりまにうすき－よのはのつきて
【慶長年間百選27巻】／□□「ちりてさへ」／慶長4(1599)年6月18日

時雨

すすしくなりぬ－むらさめのそら
ほとときす－あきまつころや－かへるらむ
【助行関係4種】／助行連歌／天理本

すくらものはやき－むらはめのそら
ほとときす－いつれのくもに－やとるらむ
【粋風関係2種】／夏／応仁4(1467)年5月10日

時雨

やますみふかき－ゆふくれのそら
いつしかも－まなくしれぬに－なりぬらむ
【永正年間百選34巻】／何路「あきにかせ」／永正8(1511)年7月14日

つくつくむかふ－ゆふくれのそら
きえにしは－いつれのくもと－なりぬらむ
【園慶第三／純情書巻従本】／雉下／文亀元(1501)年3月18日

時雨

あつきひしのく－ゆふくれのそら
ひとこゑも－まれたりたる－ほとときす
【永禄年間花千句】／□□「さそふなよ」／永禄元(1558)年3月23日－25日

そこなははの－ゆふくれのそら
ほとときす－あしのしのひに－なきすぎて
【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明8(1476)年5月頃

時雨

うらみをかくる－ゆふくれのそら
ほとときす－またせても－ひとこゑに
【箋草／大阪天満宮文庫本】／雉上／永正2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

時雨

なくさめかねつ－ゆふくれのそら
やまさとは－ことわりよりも－さひしくて
【竹林抄／新古典文学大系本】／雉上／文明8(1476)年5月頃
あしたのかすみ－ゆふくれのそら
やまさとは－はなのにほに－とりのこえ
【論書４種】／宗長／

→帰が心

なかめわひぬる－ゆふくれのそら
さりともと－おもひなれなれ－わかこころ
【竹林抄／新古典文学大系本】／宮下／文明 8(1476) 年 5 月頃

おもひなつけそ－ゆふくれのそら
こひしせも－たかなること－そ－わかこころ
【北畠家延歌合／書陵部本／北畠家延歌合／文明 2(1470) 年正月 6 日

雪の中空

→ふきと吹く

くれわたりる－ゆきのなかそら
ふきとふく－あらしのおとは－しかかにて
【時慶歌句】／後人／〔すくにゆく〕／天正 6(1578) 年 5 月 18・19 日

のはちりきゆる－ゆきのなかそら
ふきとふく－かせよりのみの－あさつひ
【天正年間百帳 57 巻】／xx／（わけゆかは）／天正 4(1576) 年 8 月 19 日

行く末の空

→帰るさ

こたへかたしや－ゆくすゑのそら
ことのはも－おおよはぬはなの－かへるさに
【集古千句】／唐何／（したとれを）／長楽元(1487) 年 10 月 9 日（と11 日

おもへはやすき－ゆくすゑのそら
かへるさに－なるをのふなら－やまみえて
【大永四年月は千二百帳】／□□／（かけきゆる）／月は千二百帳／大永 4(1524) 年 8 月 23 日

→帰え歓く

□□□□□□□－ゆくすゑのそら
とくおそき－はなをかすかす－うゑおきて
【天正四年万句 70 卷】／何鳥／（はつしもは）／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

まかひやせまし－ゆくすゑのそら
しらゆきの－ほぼをとつなを－うゑおきて
【基佐集／静嘉堂文庫本】／春／永正
6(1509) 年以前

横雲の空

→春の夜

かすみのまよふ－よこくものそら
はるのよ－ゆめのわかれば－たとたとき
【文明十四年万句 52 卷】／手何／（はふたに）／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月 14 日

ひきわかれゆく－よこくものそら
はるのよ－うきにひとすち－かりとひて
【論書４種】／宗長／

た

植える田

→晴れた五月の空

さなへとり－みつせきいで－うるたに
いつをはれまそ－さみたれのそら
【看聞記記録 50 卷】／何人／（はなのひも）／応永 27(1420) 年間 1 月 13 日

うるたに－よそのかげを－せきいで
はれてもある－さみたれのそら
【看聞記記録 50 卷】／何人／（ことのはに）／応永 31(1424) 年 9 月 27 日

打ち返す国

→蛙鳴く

うちかへ－たもののなかれ－あめはれて
をりをえかぼに－かはつなくなり
【天文十八年月千句】／何人／（みしいろは）／天文 8(1539) 年正月 11 日

うちかへ－こそのあらは－さひしきに
ときもすれず－かはつなくなり
たかえ

雲の絶え間
→崖の風

くものたえまに→ほのくるるやま
ふきおくる→みぬあのあらしの→はつしきれ
【天文年間百冊 3 番】/ 何木 [やまかけ
て] / 天文 21(1552) 年 3 月 11 日

疲れむる→くものたえまに→つつきみえて
みぬあのあらしの→むかふしはのと
【竹林抄/新古典文学系系本】/ 雑上/ 文
明 8(1476) 年 5 月頃

たえ

思い耐える
→連れない

おもひたえよ→ひとのこころか
つけくれば→やましといへ→とふもうし
【藤原/大東急記念文庫本】/ 愛下/ 永正
8(1512) 年 11 月 3 日～永正 9 年

おもひたえよ→ごころもらめし
つけくれば→みえぬものから→うにかくに
【老集/毛利本】/ 愛下/ (文明 17(1485)
年 7 月 23 日頃)

たかい

影高くなる
→飛ぶ蝶

しゃのはやまそ→かけたがる
なつのより→くものうへまて→とふばたる
たけ

【熊野千句】/ 何何 / 魚正
元 (1466) 年 3 月以前
さはへのくくそおかけたかたくなる
ひとつつつやとりにおいてとふほとる
【面書第一/ 洲熊書類従本】 / 夏 / 長享 2 年

【面書第三/ 洲熊書類従本】 / 夏 / 長享 2 年
みねかつい
→さ鴉鵄の声

みねかついへねたるときのさきふて
つまやいつくのさをしかのこえ
【宗長追裏千句】/ 初何 [みやいづ] /
(末抹) 5 天文元 (1532) 年 3 月 25 日
かたをかのへのむかひのみねかつい
あけはなれてもさをしかのこえ
【元亀年間百歌 6 卷】 / 何人 [はななのときも] / 元亀 4 (1573) 年 6 月 6 日

たき

【染の岩浪・草】

ここさにちるやたきのいはなみ
おてはかはつおとはかがいいしてくるるに
【聖詠千句】 / 初何 [きのふより] / 明応
(3)1494) 年 2 月 10 日～12 日
かすみかくるにたきのいはなみ
やまほくひなかれいてたるおとはかは
【寬正年間百歌 20 卷】 / 何人 [はふこす]
は / 宽正 3 (1462) 年 2 月 27 日

たく

【あしびたくかげ・草火焚く影】

おなしみなとのあしびたくかげ
うちみたれくらるかたよりとふほとる
【天正年間百歌 5 7 卷】 / 山何 [あをやきの]
/ 天正 3 (1575) 年 2 月 2 日
はなれこしまにあしびたくかげ
とふほとるゆくかたもくさよふけて
【壁草 / 大阪天満宮文庫本】 / 夏 / 魚正
2 (1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

たけ

いくえとよらのたけのしたみち
にしにまたつさきあるゆきのさきはれて
【竹林抄 / 新古典文学大系本】 / 冬 / 文明
8 (1476) 年 5 月頃
いくえとよらのたけのしたかげ
あめにまたつさきあるゆきのよるはれて
【心経関係 100 種】 / 心王集 / 静嘉堂文庫本

葵竹

→雪の下簡

くれたけにいくえひあられみたるらむ
けさこそつるもゆきのしたいほ
【池田千句】 / 何何 [おぞくとく] / 魚正
7 (1510) 年春以前 < 魚正 5 年春>
をりふしもすきゆくとしのくれたけに
いてむかたなきゆきのしたいほ
【弘治三年春雪千句】 / 何何 [はなならって] /
弘治 3 (1557) 年正月 7 日～9 日
をしめともふゆもほとなくくれたけに
つどりけりなゆきのしたいほ
【至徳以前百歌 7 卷】 / 何何 [はななりて]
/ 存疑 / 至徳 4 (1387) 年以前

たく

→風のこご

くれたけのよのはあらにあめはさめて
かねもきこゆるととりのこゑこゑ
【文明年間百歌 34 卷】 / 何何 [つよとなほ] / 明治 14 (1842) 年 9 月 20 日
くれたけのはややかせのさわくらむ
やとりすめぬとりのこゑ
【元和年間百歌 24 卷】 / 何何 [のとみつ] / 元和 8 (1822) 年 10 月 19 日

寄る竹の葉の露

→片敷の枕
竹打ち腰く
→飛ば

たけうちなびく－をちのかはきり
とふばたる－ここにかしことく－くれそめて
【右司四時十二句／何人（うえふかはし）／
天文24(1555)年8月15日～19日

たけうちなびく－かけのすすしさ
ほかのにも－かせきのまにまに－とふばたる
【天文年間百選57巻／初完（はるたちて）／嘉永12(1854)年1月3日

竹の末々
→倉

ゆきをれふかき－たけのすさする
かすかにも－しけふらせて－ひとまわし
【文禄年間百選28巻／何船（うふかよの）／文禄5(1563)年12月9日

ふくかせきる－たけのすさする
かすかにも－みちあるかたや－さとならむ
【文禄年間百選12巻／□□（はなのいろや）／文禄4(1595)年1月30日

竹の一層
→片岡朝太

たくひのかけは－たけのひとむら
つつしまる－かたをかのへ－あめのうち
【天文廿四年梅相方／何木（つみそへよ）／
天文24(1555)年正月7日

いほのすさひ－たけのひとむら
ゆくひとも－かたをかのへ－ふゆかれに
【春日草／萱浦部本／ نفس／永正12(1516)
年、13年

たげる
→山本

なひくやかせの－たけのひとむら
やまもとの－つゆのしたみち－くされて
【文明年間百選34巻／何人（ advisan）／
文明元4(1492)年3月20日

かすみになびく－たけのひとむら
やまもとの－はるのあさかは－ゆきはれて
【老集／吉川本／春／文明13(1481)年
夏頃

竹を打つ声
→夜が変わる

あられときとき－たけをうつこと
ねぬとりよ－あかまよはも－ふけぬらむ
【伊庭千句／三井中略（うわきやき）／
大永4(1524)年3月17日～21日

ゆふへのあめの－たけをうつこと
いつのまに－あられふるよの－ふけぬらむ
【竹林抄／新古今文学大系本／冬／文明
8(1476)年5月頃

繙き合う竹
→絵

なひきあひる－たけのすさする
つつきうつる－のもやさとに－つつくらむ
【天文年間百選57巻／何人（かわくさも）／天文11(1583)年1月10日

なひきあひる－たけのむらむら
まっただる－けふりやたえす－つつくらむ
【天文年間百選57巻／□□（ゆふたちの）／天文17(1589)年6月16日

たける
→年長

→夢を現む

いにしへを－おもひわすれす－としたて
ゆめもつつつ－おなしかりのよ
【春日記集／山吉（さんぎょう）／
天正26(1549)年2月6日
たそがれ

藤の黄昏

→春の時鳥

おぼつかなきはふらのたそがれ
はるてや－しのひねならし－ほとときす
【称名院追善千句】／何elyn [さかのやま]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

まつのこすゑのふらのたそがれ
はるこそーはつねまるれーほとときす
【毛利千句】／宇喜多[なつのひのも]／
文禄 3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

たちばな

風に呑う橋

→玉藻

かせのいくかーにほふたちはな
ふかきよもーしらってまきつるーたますたれ
【天文十一年甲子句】／手何 [うちなひき]
／天文 24(1555) 年正月 7 日

つゆちらのかせににほふたちはな
たますたれーのきはのつきてまきあけて
【新撰萬枚拾集／実隆本】／秋下／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

たつ

杉の群立ち

→東に散る花

いちかさひきーすきのむらたち
かすかるーこけちのすきはーちろははなに
【弘治年間百髪 8 卷】／×× [をりのこす]／
弘治 2(1556) 年 9 月 10 日

あらしにあくるーすきのむらたち
さきかくすーこけちふわられてーちろははなに
【成立不詳・宗乗以前 8 卷】／何人 [あをやきや]／
成立時不詳
たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる

たとえる
たなびく

何に響えよう
→吹く風

かかるうちみを－なににたとへむ
あつきの－ころものすそを－ふくかせに
【土佐治中千逸】／八路 [はなばかし] ／土佐 4(1452) 年 3 月 12 日

よのなかを－なににたとへむ
ふくかせに－ときぎさためぬ－あまのつりふね
【土佐治中千逸／広島大学本】／編体／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

たどる

霞にたどる道
→呼子島

かすみにたると－いはのかけみち
よふことり－なきてこころの－しるへせよ
【集東千逸】／白華 [ことかし] ／長楽
元 (1487) 年 10 月 9 日＜11 日＞

かすみにたると－みちのをちここ
よふことり－こゑするたかに－ひはくて
【天文十八年梅千悦】／青何 [ゆけはうめ]
天文 18(1549) 年正月 11 日

たなばた

七夕
→有明の空

たなばたの－ままれのひとよも－よよはへぬ
まちえしあきの－ありありのそら
【熊野千逸】／何人 [よろつとせつ] ／文正
元 (1466) 年 3 月以前

たなばたの－いとなりけなる－はきのつゆ
かりなくつは－ありありのそら
【天文年間百璧 38 卷】／何人 [はのはいろも] ／天文 14(1545) 年 2 月 25 日

たに

谷の庵
→住む峰の古寺

ふくるよに－つきまちかぬる－たにのいほ
すのはやあきの－みねのふるてら
【和歌千逸】／二月反音 [はるみつも] ／文正
2(1417) 年正月 10～11 日

ちりても－ひときははゑや－たにのいほ
みれはつきすむ－みねのふるてら
【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文正
8(1476) 年 5 月頃

たのしむ

楽しみを極める
→仮のこの世

たのしみを－さはめよとのみ－とくのりに
かりのこのよは－すみもわひめや
【賀盛千逸】／八路 [しげるきに] ／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日

たのしみを－きはむろくには－たのもしや
かりのこのよは－ともくかくにも
【文明十四年万巻 52 卷】／二月反音 [は
なはみな] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～
9 月 14 日
たのむ

すみよしのまつとたのむ
住吉の松と頼む
→徳橋が袖蔭らず

すみよしのまつとたのめしもかひとつ
なにあるのみのそでぬらすらむ
【是枝批集／広島大学本】／恋上／文和
5(1536) 年冬～翌年の春

けふりたつ＝あきのかまとは＝たのしみて
かりをさめたる＝さとのとみきた
【看聞日記巻5巻】／山町[ちよもみ
む]／応永19(1412)年1月14日

たび

いかだ

いのち

すみよしの　まつとたのめしもかひとつ
なにあるのみのそでぬらすらむ
【是枝批集／広島大学本】／恋上／文和
5(1536) 年冬～翌年の春

たび

いのち

すみよしの　まつとたのめしもかひとつ
なにあるのみのそでぬらすらむ
【是枝批集／広島大学本】／恋中／文和
5(1536) 年冬～翌年の春

女

あさかほのへ

わかれのつゆに～なにたのむらむ
あさかほのへなにもみをは～おとろかて
【明応年間書籠2巻】／何人[たまた
れ]／明応5(1496)年6月7日

はかなきこころ～なにたのむらむ
あさかほのへなに□□□のうちみたれ
【永禄年間書籠2巻】／□□[ゆきにう
め]／永禄5(1562)年2月1日

たび

いのち

すみよしの　まつとたのめしもかひとつ
なにあるのみのそでぬらすらむ
【是枝批集／広島大学本】／恋上／文和
5(1536) 年冬～翌年の春

人はとん

けふりたつ～あきのかまとは～たのしみて
かりをさめたる～さとのとみきた
【看聞日記巻5巻】／山町[ちよもみ
む]／応永19(1412)年1月14日

みたび

いろもあへす～いのちたびひと
かれらくら～かゆややまちに～さそふるむ
【宽正年間書籠2巻】／唐何[せみのは
の]／寬正4(1463)年6月23日

たび
たび

旅衣

→野は遠か

たびころも－たちやすらはむ－かけもなしのるこまなつむ－のはるかなり
【天文年間百錦 38 巻】／四路 [ひとこえ]
天文 14(1545) 年 5 月 8 日

旅にある

→草枕

たびにきあれ－やとりとらなる
いひさす－あさちかもとの－くさまくら
【伊庭千句】／山何 [たまたれの] ／大永 4(1524) 年 3 月 17 日～21 日

旅の悲しさ

→時鳥

なくさめかねつ－たひのかなかし
ほとときす－まちのうへに－なさきてて
【観応院会千句】／四路 [みたけり] ／宝徳 14(1449) 年 8 月 19 日～21 日

旅の衣手

→星もな

しくれそるる－たひのはもて
めにかべて－いそくこかれ－さともなし
【聖聨千句】／山何 [ぬるとりの] ／明応 3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

旅の空

→草の枕

なくとまめ－とつははやけき－たびのそら
くさのまくらの－あつつきのつゆ
【聖聨千句】／四路 [きえぬるか] ／明応 3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

旅は憂い

→袖が落ちば

たびそうき－ここはあきに－とまふね
やとなきありと－そのはつゆけ
【碧野千句】／四路 [あふちさく] ／延文 2(1357) 年以後・応安 3 年 6 月以前

旅は悲しい

→星もな

あらましにさへ－たひそかなし
くさまくしよいをおきては－いかかねむ
【佳足千句】／四路 [つつきめは] ／大永元(1521) 年 11 月 1 日～14 日

旅はあまり

→星もな

みやこにはにす－たひそかなし
くさまくら－とふらふつは－ありながら
【文明十四年万句 52 巻】／夢想 [その他]
文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月 14 日

旅は

→仮枕
たまはずさ

雁の玉章

→隔っ古里

たかおとつれそーかりのたまつさ
ふるさとのーそらをはきりやーへつらむ

【文安八品】／南船／【みせとふ】／文安
2(1445)年10月18日

かりねにたのむーかりのたまつさ
ふるさはーいくらもうちをへへつらむ

【池田元千】／何帳／【ゆきそちる】／文安
7(1510)年春以前＜永正5年春＞

たまほこ

玉締

→袖の色々

たまほこのーたさかれときをーゆきすぎて
あやめもわかぬへーそでのいろいろ

【細川元造千石】／南船／【みつのあわの】／文安
24(1555)年3月26日～晦日

たまほこのーゆくへわかぬへいはくれて
かすみにかはすへーそでのいろいろ

【大永三年月并千三百蔵】／何帳／【こはる
なよ】／月并千三百蔵／大永3(1523)年7
月23日

たよる

松を頼に

→立ち返る

まつをたよりにーすめるしはのと
たちかへるーやとははしらのーくちのこり

【天正元間百鎖57卷】／何帳／【うくひす
も】／天正14(1586)年1月4日

まつをたよりにーかこふはしかき
たちかへるーはるもこもろーわかやかに

【文安十花間百鎖52卷】／二寸反音／ま
つうきて》／文安14(1482)年7月4日～
9月14日
だれ

誰か里

→鶴原

うめのはな－たかさとまでか一にはふらむ
ありあけたの一－はるのよのつき

【文明年間百錦3・4巻】／方何（かせにた
ちし）／文明18(1486)年9月30日

こひしきことを－たれにわすれむ
つらしとて－まただいつかたに－うつらまし

【延徳三年間百錦1・6巻】／何路（かけす
し）／延徳4(1492)年6月1日

だれをとおうか

誰を訪おうか

→草の原

たれをかとはむ－しらぬゆふくれ
さきたたれ－はなものあはれめ－くさのはら

【乗守千句】／博何（いはもに）／長享
元（1487）年10月9日＜～11日＞

たれをかとはむ－あはれとみし
ちりきも－えやてなへての－くさのはら

【明応千錦2・2巻】／何人（かきりさ
へ）／明応8(1499)年3月20日

きえなむつゆを－たれにとはまし
よのつねの－あはれをたのむ－くさのはら

【延徳千錦8巻】／何舟（はるのいち）
／延徳5(1532)年1月18日

あきになるかと－たれにとはまし
つををた－すむひとなれや－くさのはら

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃

だれなのか

誰なのか

→心であればなあ

おろそかの－すまひもゆかし－たれならむ
きよきをまなぶ－ことよりもかな

【永原千句】／薄何（ふきところ）／明応
9(1500)年7月17日

よにすみて－しをれぬってよ－たれならむ
うきにつれなし－ここらもとかな

【壁草／大阪天満宮文庫本】／雑／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

だれをつづ

誰を待つ

→ダベ

たまゆらのよに－たれをまつらむ
いのちそ－ものおもはする－ゆふへなれ

【宝徳四千年千句】／唐何（さらはなや）／
宝徳4(1452)年3月12日

をきふくかせに－たれをまつらむ
うきあきも－きみこそしらむ－ゆふへなれ

【老集／倉廵邸崇語筆本】／恋下/

だれにむすする

誰に忘れる

→幸い

おもひそへ－されたれにわすれむ
つらしとて－うつるならひは－しらぬよに

はるゆくまでに－たれをまつらむ
みをつくす－こゑのかなしき－よふことり

→駒子島
ちかい
あまらちくる
秋近くなる
へきわい花落ちる頃
おほつかな－あきやちかく－なりぬらむ
こころはそしな－はなおつるところ
【心斎関係10種】／芝草内藤稿／本能寺本／
くれそき－あきやちかく－なりぬらむ
こころはそしな－はなおつるころ
【和歌千句】／山何［くうひすの］／文明
2(3170)年正月10～12日

ちかいかわうち
近い川音
へきしさ
なみたかかれや－ちかきかはおと
すすしさは－またぬにうかふ－あきのくも
【石仏吟千句】／薄何［うつつみの］／
天文24(1555)年8月15日～19日
あめのうちより－ちかきかはおと
すすしさは－なつのほかる－やなきかけ
【成立不詳・宗長以前15巻】／□□［ちらぬより］／成立時不詳

ちぎり
ただあしっかりのちぎり
ただ有り無しの契り
へきしかり
たたありなしのちぎり
あめつちも－うらみのうど－かたちにて
【永禄年間百錦8巻】／薄田［ゆふたちの］
／永禄5(1532)年6月8日
はなのあるし－たれをまつらむ
こえくれは－なほはなふかく－よふことり
【下草／鶴谷大学本】／春／延徳2(1490)
年3年春頃
れをつまむしのなく
誰を松虫の鳴く
へきり人も風の山の秋の暮れ
あかつきたれを－たちみむしのなく
とふひととも－あらしのやまの－あきのくれ
【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年5月頃
いまはたれをか－たちみむしのなく
とつひととも－あらしのやまの－あきのくれ
【駅行関係4種】／駅行句／伊地本／

近い山里
へきいやる
めますかねの－ちかきやまささと
おもひる－みやこのつきに－まくらして
【表佐千句】／何衣［よるやあめ］／文明
8(1476)年3月6日＜～8日＞
ゆきのつまきの－ちかきやまささと
おもひる－ひなのはすびの－ふゆこもり
【明応年間百錦22巻】／何人［ふきすて
よ］／明応7(1498)年間10月6日

野辺近い鷺
へきの竹の末々
のへちかき－やとのうくひす－ねをたえて
ゆきをふかき－たけのすゑする
【永禄年間百錦8巻】／何船［うつたよ
の］／永禄5(1563)年12月9日
のへちかき－にはのうくひす－こゑそひて
ゆきのけゆく－たけのすゑする
【天正年間百錦5巻】／何路［いもらか
も］／裏白／天正14(1586)年1月3日

山近い
へきのいおり
やまちかき－よしののさとは－かせさえて
はなまちとほに－おもふつはる
【美濃千句】／何心［つゆにきま］／文明
4(1473)年12月16日～21日
やまちかき－いほのきたまと－ひきとて
はなまちとほに－おくるつれつれ
【寛文年間百錦2巻】／□□［つさやあ
らぬ］／寛文13(1673)年7月19日
ちどり

午鳥鳴く

→うら時雨れる

かせにたたよふちとりくなり
いくらひもあざさめのまらうちしきく

【天文三四年梅雨千句】／何路／とりのねも
／天文 24(1555)年正月7日

ゆけきになればちとりくなり
ふるさとのさほのかはらのうちしくれ

【壁草／古陵部本】／冬／永正9年

→帰る

つきまつなみにちとりくなり
あととめゆめやよのまにかへるらむ

【表佐千句】／何路／はにかすひぬ／文明
8(1476)年3月6日～8日

きけははるかにてちとりくなり
ふきらすあらしやまとにかへるらむ

【大永四年月扇千二百箇】／□□／しみやひぬ／月扇千二百箇／大永4(1524)年9月23日

午鳥鳴く声

→思いかねる

ゆくかたをなみちとりなくこゑ
おもひかねたつぬるみちにさよふけて

【三島千句】／何路／なへてよの／文明
3(1471)年3月21日～23日

よふねにきくはちとりなくこゑ
おもひかねいもぬねたひをしるまことに

【至徳以前百箇】／何路／かいさきの
／至徳4(1387)年以前

群千鳥

→黄昏時の末

ゆくかたはいつこなるらむひらちとり
ゆふかけさむきまさこちのすゑ

【羽柴千句】／何路／あくのよを／天正
6(1578)年5月18・19日

新たに

→人の面影

またこぬはゆめにまらぬちきりにて
これになくさむひととのおもけ

【応永年間百詩7巻】／□□・[x xはせて]/
／応永24(1417)年3月16日

はかなきにちなしもはぬはちきりにて
とことばにそふひととのおもけ

【永正年間百詩34巻】／何人／つきはな
を／永正2(1505)年9月13日

→夢の面影

かりそにめをこののちきりにて
さむれはしつゆめのおもけ

【宝徳四年千句】／何路／はなにほふ
／宝徳4(1452)年3月12日

うらかたもたたのむもあただちきりにて
みここんにちはゆめのおもけ

【羽柴千句】／山何／なきめくる／天正
6(1578)年5月18・19日

夕顔の契り

→黄昏時

ゆふかはほのやともちきなるちきりにて
たそかれときさひととはまるとる

【閲閲日記紙夜50巻】／唐何／いわに
に／応永31(1424)年1月25日

ゆふかほの一はははちきりのちしるへにて
たそかれときそころうかるる

【閲閲日記紙夜50巻】／何物／いふれみむ
を／応永32(1425)年9月17日
ちょう
蝶の哀れさ
→打ち交わす

【慶長年間百領域 27 巻】/ 慶長4(1599)年 5月2日
かたかたにーなきたってゆくーむらちとり
おくしもふかきーまさこちのすゑ

【慶長年間百領域 27 巻】/ びょうことに
/ 萬部/ 慶長 8(1603)年 1月3日

ちる
風に花散る
→春の夢

【大永年間百領域 14 巻】/ 何人 [つぎはな
/ 大永 3(1563)年 4月 1日

散るのは
→驚の声

【大永年間百領域 14 巻】/ 何人 [つぎはな
/ 大永 2(1522)年 8月

桜散る際
→春ながら

【永正年間百領域 34 巻】/ 何人 [つぎはな
/ 永正 2(1505)年 9月13日

ひらはひししくーさくらるちるかけ
はるからーなほふるゆきのーささえ立て

【天正四年万国 70 巻】/ 何人 [はるさめ
/ 天正 4(1576)年 5月6日〜7月19日

散るのが惜しい
→鶴鳴く

うすはなすすきーちららくもをし
うつらなくーかたやまくてーさむきひに

【長寿年間百領域 6 巻】/ 何人 [ゆきながら
/ 長寿 2(1488)年 1月22日

なみるをはなーちららくもをし
うつらなくーのへのふるみちーまかやこむ

【大永年間百領域 14 巻】/ 何人 [つぎはな
/ 大永 2(1522)年 8月

ちるはな
→驚の声

ちるはなのーなみのしぐたさーかせみえて
やなきやうきねーうくひすのこゑ

【大永年間百領域 14 巻】/ 何人 [つぎはな
/ 大永 2(1522)年 8月

和歌に花散る
→春の夢

かせはなほーあをはにのこるーなはりて
はるのゆめこそーことにおたなれ

【日 /.日記/紙背 50 巻】/ 何船 [のちやゆ
/ 応永 28(1421)年 2月25日

いつもふくーまつかせつりきーはなりて
はるのゆめこそーやかてきめぬれ

【成立不詳・宗祇以前 15 巻】/ x x [あ
らしにも] / 存信/ 成立時不詳

花散る
つき

→春の暮れ方

のはぬもみれはすすれしはなかりて
ふるさとさびしはるのくれかった
【美濃千句】 あけ しかくつつ 文明
4(1473) 年 12 月 16 日〜21 日

したもえのくさののいろともはなかりて
のもをみゆくはるのくれかった
【天正四年万句 70 巻】 あけ しばにまつ
天正 4(1576) 年 5 月 6 日〜7 月 19 日

→春の音

あげかせのここらはするはなかりて
とりさへかへるはるのさびしさ
【三島千句】 あけ はなにつき 文明
3(1471) 年 3 月 21 日〜23 日

うゑよのはしるひともなきはなかりて
ふるののおくのはるのさびしさ
【室町千句】 あけ きさこすか 天文
20(1551) 年 5 月 9 日〜11 日

つかえる

仕える

→家々の風

あふきできみにいくやを一つかへひと
いやさかえゆく いへいへのかせ
【鶴野千句】 あけ とるはなに 文正
元 14(1466) 年 3 月以前

かりそののせいとまもなみの一つかへひと
はまれあるこそいへいへのかせ
【永禄元年華句】 あけ みるまちに
永禄元(1558) 年 3 月 23 日〜25 日

→お前のくふう

あさかえがしけは あきのつき
はらびもあへぬ そとのおゆけ
【天正年間百観 57 巻】 あけ まつな
天正 17(1589) 年 1 月 4 日

しららつーすみかもなりいるあきのつき
むかしみさり そとのおゆけ
【文明十四年万句 52 巻】 あけ みす
文明 14(1482) 年 7 月 4 日〜9 月
14 日

→身にしみる

ひとのかたみのあきのよのつ
しもまたよふかれののすきさ みにしみて
【表佐千句】 あけ よるやあめ 文明
8(1476) 年 3 月 6 日〜8 日

あくかれてゆくあきのよのつ
ものおふ ものののかはなみにしみて
【薬尊法資 3 巻】 あけ 무수에 문
建武 4(1337) 年 6 月 23 日

→野分

あさかやを あきのよのつ
かこはれ一つすのたよりも あきのつ
【文亀年間百観 4 巻】 あけ きえのよ
文亀 2(1502) 年 8 月 6 日
明けやすい月
→請う後朝は夏い
あけやすき一つのゆくへの→をしまれて
まれにあふよの→きぬきぬはうし
【毛利文集】／何田 [やまとと]／文禄
3(1594)年 5月 12日～16日
あけやすき一つのばかりべき→おきいてて
あふひとからの→きぬきぬはうし
【延宝年間百題3巻】／□□ [おいかせの]
／延宝 2(1674)年 8月 14日

有明の月
→憂いものはなは
ありあげの一っれなきつつきも→すめるるよに
なほはきはかり→うきものはなは
【太宗宮法楽千句】／山河 [のはなに]
／長享 2(1488)年 7月
ありあげの一っきなこりと→かへるかり
こひよりほかに→うきものはなは
【看聞日記巻6巻】／山河 [あっさな
は]／応永 32(1425)年間 6月 25日

→帰る雁
ありあげの一っきやあらぬと→かすむよに
きけはくもむを→かへるかれりな
【永享年間百題4巻】／山河 [おいまつは]
／万巻巻頭／永享 9(1437)年 3月 21日
ありあげの一っきはかすみに→ほのみえて
ゆめもまくらに→かへるかれりな
【慶應第三／続群書類従本】／春／文亀元
(1501)年 3月 18日

→雁の声
かすみながらも→ありあげのつつき
よもすかに→かへるやとほき→かりのこゑ
【文明十二年句句8巻】／阿波 [なもしる
し]／文明 12(1480)年 4月 10日～8日

→秋の葉
いるかけいそく→ありあげのつつき
ふくかせに→たかねはなるる→あきのくも
【天正四年句句7巻】／阿波 [ちるはな
も]／天正 4(1576)年 5月 6日～7月 19日

付き
→時鳥
なかめをしたふ→ありあげのつつき
ほときす→なきつるこゑは→とはさかり
【平松文庫本千句】／□□ [ゆきはみのり]
→ふるきみやこの→ありあげのつつき
ほときす→なきめかたらふ→はふて
【文明年間百題34巻】／何田 [やまかせ
に]／文明 15(1485)年 3月 2日

→武蔵野と草枕
はなのがくもまに→ありあげのつつき
むさしのや→しのきしくさに→まくらして
【元亀二年千句】／朝顔 [あたにちる]
／元亀 2(1571)年 3月 5日
たひねいくよの→ありあげのつつき
むさしのや→わけもつくさね→さまくら
【天文年間百題57巻】／何田 [ゆとそ
に]／天文 11(1583)年間 1月 1日

→眺
みれはみにしむ→ありあげのつつき
あかつきの一→あらしにゆめの→さめてのち
【文明十四年句句52巻】／江村反音 [は
なはみな]／文明 14(1482)年 7月 4日～
9月 14日
みよとやのこる→ありあげのつつき
あかつきの一→かねよりのちも→よはなく
【文政年間百題／広島大学本】／秋下／文和
5(1536)年冬～翌年の春
またあはなmu－ありあげのつ
うちやまの－あかつきさひ一あきのくも
【下巻／剣谷大学本／秋／延徳 2(1490)
年－3年春頃

→秋の風

こはよさむの－ありあげのつ
さねこむと－いひしなからに－あきふけて
【弘治三年春変千句／何木 [はならて]
／弘治 3(1557)年正月 7日～9日
たもとおつる－ありあげのつ
やまもなき－へのかりふし－あきふけて
【基成／静嘉堂文庫本／慈／永正
6(1509)年以前

→風吹る

むしのねほそき－ありあげのつ
ふきとほす－かへのすきまの－かせさせて
【石山四吟千句／三字中略／あさかほの
／天文 24(1555)年 8月15日～19日
みつのおうるる－ありあげのつ
よこのすみ－よころのあきの－かせさせて
【行助関係4種／行助句集／書陵部本／

→山越える

つゆもらさぬ－ありあげのつ
くもはせさ－しくるあきの－やまこえて
【文明四年万字52卷／夢想 [そのし
なも]／文明 14(1482)年 7月4日～9月
14日
たもとにかすむ－ありあげのつ
とりのこす－はなのにほに－やまこえて
【愚句老集／春／永正 17年

→月

みはけはた－いにしへのつ
とほからゆ－ゆほのはとたえも－うきあきに
【下巻／剣谷大学本／春下／延徳 2(1490)
・年－3年春頃

→長野納衣

おほろつきよに－ゆくそらも
のとかる－まくらやゆめを－したふらむ
【難波田千句／□□ [みつのおもに]
／文明 14(1482)年 10月前後
おほろつきよに－しろあきもや
のとかる－まくらもとて－あかしば
【慶長年間百選 27巻／□□ [ちりできる]
～】／慶長 4(1599)年 6月18日

→時鳥の声

おほろつきよの－ゆめをのこして
ほとつき－はるのまくらの－ひとこまるに
【紹巴と太政官書千句／何木 [おとろけ]
／天文 24(1555)年 3月26日～略日
おほろつきよ－あけのこるやま
ほとつき－それかいまやと－こゑすきて
【成立不詳・宗経以前15巻／何船 [き
たにみる]／成立時不詳

→月に残る有明の月

おほろし小舟の音

おほろのこる－ありあげのつ
ほそこく－たななしをふね－おとすみて
【心経関係10種／心経集／静嘉堂文庫本
おほろのこる－ありあげのつ
はるのよ－たななしをふね－おとくけて
【論語4種／宗経

→秋の天橋立

おもふこと－なくてやつきに－むかふらむ
あきにもあかぬ－あまのはしたて
おもふこと—それもとわかぬ—つきてみて いつくのあきか—あまのはしたて
【大永三年五月並千三百軸】／□□／いえい くへ／月並千三百軸／大永 3(1523) 年 8 月 23 日

仮寝の月影

—花打ち香る
かけふくむ—かりねのつきの—あくるよにはなうちかをり—とりのなくこゑ
【文明十四年四月 5 月 2 卷】／初鶴／とる事をに／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月 14 日

かりねのつきの—かけさむきそら わくるのの—はなうちかをり—すくふくれて
【正徳四年二月 7 月 5 卷】／何風／つりむもる／正徳 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

手枕の月

—夢見るる
なみたにかかる—たまくらのつき もののうかる—をののかりねに—ゆめさめて
【半徳二年十一月 12 月 6 卷】／手何／なはみよと／半徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

かたみかはるな—たまくらのつき いにしべへの—たまたかなし—ゆめさめて
【大永三年五月並千三百軸】／□□／はるとふく／月並千三百軸／大永 3(1523) 年 1 月 23 日

月出る

—春の村雨
かけはそく—ゆふへのそらに—つきいてて ひややかふる—あきのむらさめ
【聖德三年四月 3 月 4 卷】／何何／つねなまし／明応 3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

かせわたる—くもののはやしに—つきいてて いろもすきの—あきのむらさめ
【天文年間百軸 3 8 卷】／何何／はなをおきて／天文 20(1551) 年 3 月 26 日

風波る
かけやとす—一つゆのをつぬる—つきいてての ほうすきに—かせわたるなり
【石山四箏千句】／薄間／うつうの／天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

ますらをかへしけのゆ kode つきいてて ものすさまき—かせわたるなり
【大永四年五月並千二百軸】／□□／ゆふた ちは／月並千二百軸／大永 4(1524) 年 6 月 23 日

—真砂巻の末
ふきわくる—まつはのかけに—つきいてて はしやすらふ—まさちのすゑ
【天文年間百軸 3 8 卷】／何何／しくるる か／天文 19(1550) 年 8 月 25 日

くれぬれは みきはにしろ—つくいてて なみのつゆる—まさちのすゑ
【文明十四年四月 5 月 2 卷】／何何／はつあきの／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月 14 日

月出る

—枝垂の隠
つっきにこそ—しきりしものを—いてやられて よびふけかたの—いなつまのかけ
【宗長道舎千句】／夕何／はるのひに／（半徳 5）天文元(1532) 年 3 月 25 日

みねたかみ—まちまつつきの—いてやられて いくたひくも—いなつまのかけ
【伊予日記】／□□／いふく—はまかせの／応永 15(1408) 年 7 月 23 日
ふけてのちにやまち□□□は一ついてて
かねきくまで□－よこそなかれ
【看開日記紙背の表卷】／山位（かせやく
も）／応永 26(1419) 年 10 月 25 日

月落ちる
→秋の初霜

かきりある一つもなくな一つおちて
そらにみながらき－あきのはつしも
【文安年抄】／朝倉（ゆきさそへ）／文
安 2(1445) 年 10 月 18 日

ひきする－とやまのくもに一つおちて
めくるのきばに－あきのはつしも
【伊豆千句】／何人（たちはなは）／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

かけきよき－まできのうへに一つおちて
ややすむからじ－あきのはつしも
【天文十八年抄】／何時（しつしゅきへ）／
天文 18(1549) 年正月 11 日

月影give
→高瀬い袖

ふりに入もあるてらのつきの－かけすみて
あかつきおきの一つゆさむきて
【元和年抄】／□□□（そらにみ
つ）／元和 8(1622) 年 10 月 19 日

やとりる一つはゆへに－かけすみて
むしのねみつ－一つゆさむきて
【新撰撰秋抄集／実隆本】／秋上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

月が露む
→残る

さかののてらの一つそかすめる
のとるなる－あらしのくもや－のこるるむ
【初刻千句】／何水（うのはの）／享徳
元・2(1452) 年、4 月

あさとあくれは一つそかすめる
かやりたく－ねやにけふりや－のこるるむ
【宗祇関係第2種】／心敬宗頭点宗祇付句／

月が露む
→雲居を帰る

ありあげの一つきやあらね－かすむよに
きけはくもを－かへるからかな
【永享年抄】／山位（おいまつは）
／万万年抄／永享 9(1437) 年 3 月 21 日

つきかけは－つむめみえすみ－かすむよに
くもみたうじ－かへるからかな
【成立不詳・宗祇以前抄】／××（うめ
ねや）／成立不詳

月が露く
→古里に秋の風

むかしかたり－一つそかたふく
ふるさを－一つすき－あきのかな
【文楽年抄】／何船（かへれと
て）／文明 18(1486) 年 3 月 27 日

たひねのまる－一つずかたふく
ふるさとに－なみたてる－よ－あきのかな
【竹林抄／新古典文学大系本】／展／文明
8(1476) 年 5 月頃

月が露む
→秋の夜

つきかたふきぬ－たれをまつらむ
たのめねと－ひとりはねしの－あきののに
【集抄千句】／一字篤顕（よやさむき）／
長享元(1487) 年 10 月 9 日＜11 日＞

かくれてくもに－一つかたふきぬ
あふきを－おきわされぬ－あきののに
【天文十八年抄】／青何（ゆけはうめ）／
天文 18(1549) 年正月 11 日

月が露む
→霜の音

ちはらかつゆの一つさぼるる
むしのねを－たもとにかくる－よはふけて
【河越千句】／何船（やまかせに）／文明
2(1470) 年正月 10～12 日

みながらつゆの－一つさぼるる
むしのねを－ままでにえらふ－よはふけて
月差し出る

→秋風

つきさしいつる～ふねのしらなみ
あきかせに～あまのいさりひ～よるぎて
【歌辞千句】／薬所 [いはほどに] ／長楽
元 (1487) 10 月 9 日 <～11 日 >

つきさしいつる～をかしたのやま
あきかせに～しのひゆくよは～やすからて
【延徳年間百賀 1 6 卷】／初何 [さけはさく] ／千句第三／延徳 4(1492) 3 月 3 日

月澄む

→秋風が吹く

かみよより～たしましかはの～つきすみて
かきりもぬみに～あきかせそふく
【弘治三年春雪千句】／何衣 [くさきのし] ／弘治
5(1558) 年正月 7 日～9 日

つゆもしの～ふね□□□やは～つきすみて
かれるのあちそ～あきかせそふく
【文明年間百賀 3 4 卷】／× × [あきふけぬ] ／文明 12(1480) 9 月 28 日

→天つ鷲

かけもみに～さしやとほる～つきすみて
ねぬめもさるむ～あまつかりかね
【池田千句】／薬所 [つゆかけて] ／永正
7(1510) 年春以前＜永正 5 年春＞

おほろけに～かたへよふき～つきすみて
まくらにちかし～あまつかりかね
【天文十八年梅千句】／薬所 [ゆけはうめ] ／
天文 16(1549) 年正月 11 日

月差し出る

→秋風

つきさしいつる～ふねのしらなみ
あきかせに～あまのいさりひ～よるぎて
【歌辞千句】／薬所 [いはほどに] ／長楽
元 (1487) 10 月 9 日 <～11 日 >

つきさしいつる～をかしたのやま
あきかせに～しのひゆくよは～やすからて
【延徳年間百賀 1 6 卷】／初何 [さけはさく] ／千句第三／延徳 4(1492) 3 月 3 日

月澄む

→秋風が吹く

かみよより～たしましかはの～つきすみて
かきりもぬみに～あきかせそふく
【弘治三年春雪千句】／何衣 [くさきのし] ／弘治
5(1558) 年正月 7 日～9 日

つゆもしの～ふね□□□やは～つきすみて
かれるのあちそ～あきかせそふく
【文明年間百賀 3 4 卷】／× × [あきふけぬ] ／文明 12(1480) 9 月 28 日

→天つ鷲

かけもみに～さしやとほる～つきすみて
ねぬめもさるむ～あまつかりかね
【池田千句】／薬所 [つゆかけて] ／永正
7(1510) 年春以前＜永正 5 年春＞

おほろけに～かたへよふき～つきすみて
まくらにちかし～あまつかりかね
【天文十八年梅千句】／薬所 [ゆけはうめ] ／
天文 16(1549) 年正月 11 日

月差し出る

→秋風

つきさしいつる～ふねのしらなみ
あきかせに～あまのいさりひ～よるぎて
【歌辞千句】／薬所 [いはほどに] ／長楽
元 (1487) 10 月 9 日 <～11 日 >

つきさしいつる～をかしたのやま
あきかせに～しのひゆくよは～やすからて
【延徳年間百賀 1 6 卷】／初何 [さけはさく] ／千句第三／延徳 4(1492) 3 月 3 日

月澄む

→秋風が吹く

かみよより～たしましかはの～つきすみて
かきりもぬみに～あきかせそふく
【弘治三年春雪千句】／何衣 [くさきのし] ／弘治
5(1558) 年正月 7 日～9 日

つゆもしの～ふね□□□やは～つきすみて
かれるのあちそ～あきかせそふく
【文明年間百賀 3 4 卷】／× × [あきふけぬ] ／文明 12(1480) 9 月 28 日

→天つ鷲

かけもみに～さしやとほる～つきすみて
ねぬめもさるむ～あまつかりかね
【池田千句】／薬所 [つゆかけて] ／永正
7(1510) 年春以前＜永正 5 年春＞

おほろけに～かたへよふき～つきすみて
まくらにちかし～あまつかりかね
【天文十八年梅千句】／薬所 [ゆけはうめ] ／
天文 16(1549) 年正月 11 日

月差し出る

→秋風

つきさしいつる～ふねのしらなみ
あきかせに～あまのいさりひ～よるぎて
【歌辞千句】／薬所 [いはほどに] ／長楽
元 (1487) 10 月 9 日 <～11 日 >

つきさしいつる～をかしたのやま
あきかせに～しのひゆくよは～やすからて
【延徳年間百賀 1 6 卷】／初何 [さけはさく] ／千句第三／延徳 4(1492) 3 月 3 日

月澄む

→秋風が吹く

かみよより～たしましかはの～つきすみて
かきりもぬみに～あきかせそふく
【弘治三年春雪千句】／何衣 [くさきのし] ／弘治
5(1558) 年正月 7 日～9 日

つゆもしの～ふね□□□やは～つきすみて
かれるのあちそ～あきかせそふく
【文明年間百賀 3 4 卷】／× × [あきふけぬ] ／文明 12(1480) 9 月 28 日

→天つ鷲

かけもみに～さしやとほる～つきすみて
ねぬめもさるむ～あまつかりかね
【池田千句】／薬所 [つゆかけて] ／永正
7(1510) 年春以前＜永正 5 年春＞

おほろけに～かたへよふき～つきすみて
まくらにちかし～あまつかりかね
【天文十八年梅千句】／薬所 [ゆけはうめ] ／
天文 16(1549) 年正月 11 日

月差し出る

→秋風

つきさしいつる～ふねのしらなみ
あきかせに～あまのいさりひ～よるぎて
【歌辞千句】／薬所 [いはほどに] ／長楽
元 (1487) 10 月 9 日 <～11 日 >

つきさしいつる～をかしたのやま
あきかせに～しのひゆくよは～やすからて
【延徳年間百賀 1 6 卷】／初何 [さけはさく] ／千句第三／延徳 4(1492) 3 月 3 日

月澄む

→秋風が吹く

かみよより～たしましかはの～つきすみて
かきりもぬみに～あきかせそふく
【弘治三年春雪千句】／何衣 [くさきのし] ／弘治
5(1558) 年正月 7 日～9 日

つゆもしの～ふね□□□やは～つきすみて
かれるのあちそ～あきかせそふく
【文明年間百賀 3 4 卷】／× × [あきふけぬ] ／文明 12(1480) 9 月 28 日

→天つ鷲

かけもみに～さしやとほる～つきすみて
ねぬめもさるむ～あまつかりかね
【池田千句】／薬所 [つゆかけて] ／永正
7(1510) 年春以前＜永正 5 年春＞

おほろけに～かたへよふき～つきすみて
まくらにちかし～あまつかりかね
【天文十八年梅千句】／薬所 [ゆけはうめ] ／
天文 16(1549) 年正月 11 日
月に有明の空
→夜をこめる

つきにかすみの－ありあけのそら
かへらかり－おもひたつ□□□－よをこめて
【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船（はなそあをは）／成立時不詳

つきはきまりに－ありあけのそら
あきちかきをおとよをこめて
【天文年間百帳38巻】／何船（あきかほに）／天文12(1543)年7月29日

月に霜
→近い雁

つきにしも－いそぜてこゆる－やまたかみ
くもるのいつち－ちかきかきかね
【五音一日百句】／何路（いそなま）／
天文9(1581)年11月19日

つきにしも－はたのすゑの－みつおちて
きりのひまより－ちかきかきかね
【慶長年間百帳27巻】／□□□（うめかかは）／裏賀／慶長11(1606)年1月3日

月の明石瀬
→備前の秋

すまより－よはほつに－あかしかた
をかへのあきの－すこきしはのや
【看聞日記紙背50巻】／山町（まっそひて）／応永26(1419)年2月6日

ゆふきりも－はれゆくつしの一あかしかた
をかへのあきの一うらそさひしき
【看聞日記紙背50巻】／何略（のははの）／応永30(1423)年4月4日

月の入方
→秋の空

あけなむとする－つきののりかた
やまのはに－もひかわたす－あきのそら
【永禄二年百帳】／何人（つきたたか）／
永禄2(1563)年8月11日～13日

ひかりをさる－つきののりかた
なかめすや－おもひなくとも－あきのそら
【永禄年間百帳8巻】／何船（はるのいぢ）／
永禄5(1532)年1月18日

月の川上
→鷹の舞

かけはしとばき－つきのかはかみ
かねのおと－くろもなみの－まかびへて
【永禄年間百帳27巻】／何人（ふちかえや）／
永禄7(1564)年3月15日

さやかにうつる－つきのかはかみ
きりはるる－ゆふへののそら－がねのおと
【天正年間百帳57巻】／何路（たちそびて）／
天正6(1578)年1月3日

月の寂しき
→映る

ほのかにすめる－つきのさひしき
あきのよも－いくねさめにか－うつるらむ
【大永四年月並千二百帳】／□□□（へつたなよ）／月並千二百帳／大永4(1524)年3月23日

□もににまさら－つきのさひしき
まつむしの一くねにさよや－うつるらむ
【天正四年万帳70巻】／何木（さくのはの）／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→秋の空

あかつきかかき－つきのさひしき
あきのそらくも－はつくに－かかららむ
【文亀年間百帳34巻】／何船（ことのはの）／文亀8(1476)年4月23日
月のさやけさ

→秋の風

ときならぬゆきか一つのさやけさ
あきのかせせたのはすさふそらふでて

【浅間十句】／何路（ゆくはたる）／永正 11(1514)年 5 月 13 日～19 日

くもよりうへの一つのさやけさ
ひととありふきですくるやあきのかせ

【天文廿年梅花句】／花之何（かみゆき の）／天文 24(1555)年正月 7 日

いしのおもても一つのさやけさ
あけわたるかかみのみやあきのかせ

【大永三年月並千三百録】／□□（つゆも をし）／月並千三百録／大永 3(1523)年 9 月 23 日

→冷やかさ

よひよひことの一つのさやけさ
うたたねのつゆのかたきさひややかに

【永正年間百録 34 卷】／山河（たこなた
に）／永正 15(1518)年 4 月 23 日

なみよりいっつ一つのさやけさ
とふたたるをまつかげのひややかに

【延宝年間百録 28 卷】／何船（ふくやい
cに）／延宝 5(1562)年 3 月 7 日

→更にかくる

のきにもりいる一つのさやけさ
いなつまのかかけしまらふかふかふけて

【延宝年間百録 57 卷】／何船（なはしきの）／延宝 3(1575)年 3 月 8 日

いたまもりいる一つのさやけさ
ゆめをたにむすはねよのはつふかふけて

【慶長年間百録 27 卷】／□□（はなれ
ば）／慶長 4(1599)年間 3 月 21 日

昼

→秋の風

しかたにむかふ一つのさやけさ
とふにもはやもむふにあきふけて

【徳川光忠集／徳川】／文安／明応
4(1495)年 9 月 26 日

よかなるのち一つのさやけさ
なみのおとゑやたかさまのあきふけて

【戸倉／戸倉部本】／秋／永正 9 年

→鳴き初める

きりのうへなる一つのさやけさ
むしのねもいまひとしになきぞして

【天文四年万句 7 卷】／薄野（やまといぼ
み）／天文 4(1576)年 5 月 6 日～7 月 19 日

なかそらなる一つのさやけさ
あきはいまわさせたかおなきぞとて

【宗風関係 2 卷】／宗風関歌合／静嘉堂文
庫本／

月の小夜の中山

→秋の風

みるるつきはさよのなかやま
たひこもあらしをそにしてあきふけて

【大永年間百録 1 卷】／何人（ゆきのう
ちに）／大永 5(1525)年 1 月 25 日

つきもなこりのさよのなかやま
うらかされのみちのしはくさあきふけて

【延宝年間百録 3 卷】／□□（おきふかての）
／延宝 2(1674)年 8 月 14 日

→後の世の秋

つきならばいさてゆかむたびのみち
まよふなかけくのちのあき

【文明十四年万句 52 卷】／花何（みたす
なよ）／文明 14(1482)年 7 月 4 日～9 月
14 日

はれよくもつ一つのすたよりたびのみち
おもふもつらしのちのあき
月の行事

→夜に雅高く

はるくまれた一つのむらも
かへるよのーあまとひかくれーかりなきて
【村松町文庫／賢陵邦本】/永正四年

がくふわれた一つのむらも
かりなきて よはねかてのーたまくらに
【合点之句／神宮文庫本】/雑/天文
9(1541)年 12月25日

月の下

→衣手の露

しのひよるーとほそしきけ一つのものと
ゆきかへりてのーころもてのつゆ
【紹巴に欠書著千句／二字反音【かたた
かき】/天文24(1555)年 3月26日〜晦日

あくらをーしらてとなふ一つのものと
いつのまにかはーころもてのつゆ
【平松文庫本千句／□□□【ふくるよの】

月の行く末

→時雨れる

なみにかたふく一つのゆくすゑ
をしかなくーあほのはのやまやーししくるむ
【大永年間百撰14巻／何人【ゆきのう
ちに】/大永5(1525)年 1月25日

あかつきかたの一つのゆくすゑ
つゆすむきーまくらのうへやーししくるむ
【天正年間百撰57巻／何路【とふひと
の】/天正14(1586)年 3月19日

月は有明

→時雨

くもりしままの一つはありあげ
ほとときすーいまひとはーつれなくて
【壁草／大阪天満宮文庫本】/夏/永正
2(1505)年 8月23日以後同 3年 3月以前

またとへかしの一つはありあげ
ほとときすーゆめちをすきてーさむるよに
【合点之句／神宮文庫本】/夏/天文
9(1541)年 12月25日

月更げる

→袖の露け

たれならす一つみるよはやーふけぬらむ
なくさめかぬるーそしてのつゆけ
【大永年間百撰14巻／山町【うめやな
き】/大永7(1527)年 1月19日

かたるまの一つはいつしかーふけぬらむ
みえしきごもーそしてのつゆけ
【天文年間百撰38巻／何木【しぶる
か】/天文19(1550)年 8月25日

月待つ

→変る世の中

いててたにー一つのもの□□□□一つきまちで
さためなやけにーかはるよのなか
【看開日記紙背50巻／何船【ことはな
に】/応永31(1424)年 9月27日

ともしするーやまにはいとつ一つきまちて
ひとのこころの一かはるよのなか
【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年 5月下旬

月もさやか

→晩方

はるよの一つもさやけきーみぬのいほ
あかつきかたの一かせのさひしぐさ
【天正四年方句70巻／何馬【あをやき
の】/天正4(1576)年 5月6日〜7月19日

しもよそつ一つもさやけき
ふねよはふーあかつかたの一によどのさと
【竹林抄／新古典文学大系本】/旅/文明
8(1476)年 5月頃

月夜な夜

→さ蓮の露
月の影

→秋風

たのむよに－またふけはてぬ－つきをみて
とふかときけは－あきかせそくふく
【文明年間百選 34 卷／何路 [あさなげに]／文明 8(1476) 年 1 月 11 日】

あらましのに－いたつらしに－つきをみて
ちきりしものを－あきかせそく
【老集／吉川本】／恋上／文明 13(1481) 年 夏頃

露の月が時々廻る

→虫の宮に夜が更ける

ちはらかつつゆの－つきそこはる
むしのねを－たもとにかる－よはふけて
【河越千句／何船 [やまかせに]／文明 2(1470) 年正月 10～12 日】

みながらつつゆの－つきそこはる
むしのねを－まそにてえらか－よはふけて
【弘治年間百選 8 卷／何人 [うのはの]／弘治 2(1556) 年 4 月 27 日】

夏の夜の月

→時鳥

ことかはすまも－なつのよのとき
きくもたつ－それかあらぬか－ほどときす
【天正年間百選 5 卷／山河 [かせつけは]／天正 2(1574) 年 5 月 8 日】

なかめあかれる－なつのよのとき
ほとときす－はひところに－まてろまて
【紫慶「郁群華音抄」／夏／文亀元 (1501) 年 3 月 18 日】
ゆくへなほうきふるさとのつき
なくむしもそれしともをやめたふらむ
【文明十四年万暦5月2日】／山内（うきのはな）／文明14(1482)年7月4日～9月14日

短夜の月
→時鳥
ありあげになるみしかよのつき
ほとときすなほしのひねのつれなくて
【広望四年万暦6月2日】／山内（みにしむは）／
寛永4(1627)年3月12日
ここをすますみしかよのつき
ほとときすまたるそに～かねなりて
【天正四年万暦20日】／何心（やまかけや）／
天正4(1576)年5月6日～7月19日

都の月に帰る
→草枕
みやこのつきたためかへるるむ
しひぬのに～ひとりつゆけきにくさまくら
【応仁四年万暦6日】／山内（せにみな）／
応仁2(1468)年10月22日
みやこのつきたためかへるむ
ゆめもみをさそってさめねにくさまくら
【寛永四年万暦8月】／長谷（のぞき）／
寛永4(1637)年5月16日

山の端の月
→秋風
くれてまちとる～やまのはのつき
あきかせに～ふふねこたふる～からのおと
【元禄万暦16日】／山内（うくひふに）／文明
2(1470)年正月10日～12日
しはしはのこれ～やまのはのつき
あきかせに～つゆのいのちもをしまれて
【聖徳千句】／何人（つきならし）／明応
3(1494)年2月10日～12日

うきをはての～やまのはのつき
あきかせに～ふふねといへと～まとろまで
【伊勢千句】／三木中略（ちりすき）／
大永4(1524)年3月17日～21日

→秋風
ねさめにむかふ～やまのはのつき
みをすてむ～ほともいまほの～あきふけて
【三木千句】／何路（なへてのよ）／文明
3(1471)年3月21日～23日
まつひとさへそ～やまのはのつき
さととふき～しまのはのいほりに～あきふけて
【長享万暦6日】／何路（さみたれば）／
長享3(1489)年5月11日
いるかけのこる～やまのはのつき
いねかての～しまのはのへそと～あきふけて
【大永万暦14月】／山内（よしぇつ
ゆ）／大永3(1523)年9月2日
いてしはいの～やまのはのつき
たびころも～さむさおほゆる～あきふけて
【慶長万暦27日】／山内（つのかう
へに）／裏白／慶長17(1612)年1月3日

夕月夜
→観東
まつくかへ～みえてすくなき～ゆふつゆよ
おほつかなや～あきのぐるみち
【嘉吉万暦1日】／何木（たけのはに）／
嘉吉3(1443)年10月23日
かすみけり～さしてたにもと～ゆふつうよ
おほつかなや～なによぶことり
【永正万暦34日】／山内（つなこ
も）／永正7(1510)年4月1日

夜半の月
→秋風の空
くもはれて～たまりけりな～よほのはのつ
しくれつさく～あきかせのそら
【称名院追善千句】／一宇藤延（くもはれ
て）／永禄6(1563)年12月14日～18日
つくす

色付く

→露と今朝の初霜

あきのたの→かたりもちかく→いろつきて
ゆふへのつゆよ一けさのはつしも

【天文二四年四月二十七日】／花之何 [かみかきの] ／永禄 12(1569) 年 5 月 7 日

→衣着

【清算四五月】／花之何 [かみかきの] ／永禄 12(1569) 年 5 月 7 日

→衣名

【大正四年五月】／花之何 [かみかきの] ／永禄 12(1569) 年 5 月 7 日

→衣の着

【大正四年五月】／花之何 [かみかきの] ／永禄 12(1569) 年 5 月 7 日

→衣の着

【大正四年五月】／花之何 [かみかきの] ／永禄 12(1569) 年 5 月 7 日

→衣の着

【大正四年五月】／花之何 [かみかきの] ／永禄 12(1569) 年 5 月 7 日
つな

---

まつにこころをつくすあめのよ
つれなきにーみもおいぬへきーほとときす
【心経関係 10 種】／吾妻辺云拾／天理本

浜伝う

【成立不詳・心敬以前 14 巻】／何人（このもとの）／成立時不詳

やまかけのーみちとやゆきをつったうらむ
くもにつつけるーそのはのかけはし
【文安頃年間 4 巻】／朝何（するとき）

---

つじ

道の辻占

→待ち伏せる

ききもさためぬーみちのつじうら
はるかなるーたびのかへをーまちわびて
【元禄石刊千句】／客何（わくらはの）／
元禄 7(1654) 年 5 月 12 日

こびにまよへーみちのつじうら
まちわびてーわれとははやーおふみに
【文安頃年間 4 巻】／二子返音（はなをりて）

---

つたう

垣根伝い

→絶え絶え

かきねたひのーをたのさひしさ
かはそひのーしものしはしーたえたえに
【奨作千句】／何朝（みあふらは）／長
享元 (1487) 年 10 月 9 日＜～11 日＞

かきねたひのーみみつとりなり
もりいるーかけひのしつくーたえたえに
【天文年間頃刊 38 巻】／夢想（ちりてな
ほ）／天文 10(1541) 年 3 月

伝う

→傍の掛橋

あっぎひはーあせもそををやーつたふらむ
やすきかたなきーそのはのかけはし
【成立不詳・心敬以前 14 巻】／何人（このもとの）／成立時不詳

なみのおーかはるやあきのーはまったひ
きりにみたれてーかへるつりふね
【毛利刊句】／何人（せににむ）／文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

はまったひーゆふしこときにーなりけらし
かせにつつつーかへるつりふね
【元和年間頃刊 24 巻】／□□（くにくにくの）／
元和 6(1620) 年 9 月 15 日

---

つな

舟の綱手縄

→塩釜の浦

ふねにすむーあまのしわさの一つなてなは
なみもたなならぬーしばかまのうら
【大永年間頃刊 14 巻】／何朝（うめかか
や）／大永 3(1523) 年 1 月 9 日

あさはらけーいそくやふねの一つなてなは
あまそかひなきーしばかまのうら
【錦麗第二／続群書類従本】／雑／明応
4(1495) 年早春

つばさ

飛ぶ雁の翼

→明け渡る空

とふかりのつばさ
とふかりの一つはやつかをーかけつらむ
なみのうへよりーあけわたるそら
【綴ば亡父逝書千句】／何人（なきあとは）
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～毎日
とふかりの一つさまつゆにしをるらむ
よさむのつつきのあけわたるそら
【文明十四年四月五日】／何木／つまはみとり／文明14(1482)年7月4日～9月14日

つゆ

あまつこのつゆ

浅茅生の露

→耐えなれない

しのにこはるあさちふのつゆ
かせをいたみひとひなるそをやふたへさらむ
【大永三年月と千三百篇】／□□／ひとこえや／月と千三百篇／大永3(1523)年4月23日

そこでくるるあさちふのつゆ
くすのはのうらみにくれれやたへさらむ
【大永三年月と千三百篇】／□□／あらたまの／月と千三百篇／大永3(1523)年12月23日

草の露

→虫の鳴き声

つつきかけにはなやとかすくさのつゆ
かせといふらしむしのなくれ
【成立不詳・心敬以前14巻】／何木／はるはた／成立時不詳

ゆふつきのかけはことのくさのつゆ
おもひのあるかむしのなくれ
【文明十五年千句１1巻】／何木／たきなみや／文明15(1483)年4月20日～3月2日

草葉の露

→化野

くさのつゆもおななくみたか
あたしのやおくれさきたちいろつきて
【晩秋千句】／何木／こぬあきや／水接4(1561)年5月27日～29日

くさのつゆもかせにみたれぬ
あたしのやあたれまきそことそでぬれて

このしたつゆにかをるひめゆり
なつのひはあやまのすそのをゆふべにて
【成立不詳・心敬以前6巻】／何木／なたしこの／成立時不詳

このしたつゆにささぶしたる
みやきのあきはしかからゆふべにて
【美秋波集／広島大学／】／秋下／文和5(1536)年3月26日

雫れる竹の葉の露

→片散の枕

こほれてつたふたけのはのつゆ
かたきのまくらのうへのあきのかせ
【弘治三年春雪千句】／何木／きえてたに／弘治3(1557)年正月7日～9日

こほれきのけりつたけのはのつゆ
かたきのそてもまくらもひやかに
【元和年間百選24巻】／□□／くににくの／元和6(1620)年9月15日

五月雨の露

→時鳥

こほるるあともさみたれのつゆ
なきはすなみたやしきけどとときす
【元貞二年春句】／何木／たきなみや／元貞2(1571)年3月5日

もすもすともさみたれのつゆ
ほときすつみなさまのかけにきて
【成立不詳・心敬以前14巻】／何木／まつやし／成立時不詳

白露

→面影はかばる

くれてよりあふきのいろもしらつゆに
おもかけはかりあさかほのはな
つゆ

【弘治三年春雪千句】/ 作人
【弘治3(1557)年正月7日〜9日
うつしゑの一つきはくらぬーしらつゆに
おおかけはとりーのこそいにしへ

【天文年間百題33巻】/ 作人
【天文23(1554)年3月26日

つゆが露っぽい

→憂い

のつゆけもろーれてつゆけい
いととなーあきそふたびやーうかるらむ

【看日記帖紙55巻】/ 作路
【応永30(1423)年4月4日
ここくつしのーれてつゆけい
いくたひかーかのひとやつやーうかるらむ

【文暦十四年方書52巻】/ 作歴
【応永14(1482)年7月4日〜9月14日

→物思い

たえぬくやれーこれつるふい
いかにともーとふこよとあれるーものもひ

【熊野千句】/ 作路
【文正元(1466)年3月以前
くさをわけゆくーれてつゆけい
しのひらはーこころをつくすーものもひ

【文暦十四年方書52巻】/ 作歴
【応永14(1482)年7月4日〜9月14日

→物想

はらぶもおなしけーろてつゆけい
ものおもふーこころをいつつーやるておむ

【出陣千句】/ 作木
【応永15(1504)年10月25日〜27日
こひするのみかーろてつゆけい
ものおもふーわれやつそもーはちらむ

【伊予千句】/ 作木
【天文6(1537)年5月22日

居に乱れる

→飛ぶ箋

つゆにみたるーあしのひとむら
くれぬれはーきるひまふまーとふばたる

【応永千句】/ 作路
【ときもよも
ねにこそかれないーつゆにみたるる
したともをーふののきにーとふばたる

【心歌関係1000種】/ 作関都百句
【文庫本

露の雪

→草枕

いたつらくのーつゆのあけほの
くさくもーあきふかせーいゆめもみす

【成立不詳・心歌以前14巻】/ 作船
【まつかせは】/ 作成立時不明
さくらうへのーつゆのあけほの
くさくもーはるのありにーすきかてに

【天文年間百題33巻】/ 作人
【天文5(1536)年6月15日

つゆがみられる

露が乱れる
露の音聞く庭
→玉vecuの霧
つゆのおとこく－にはのゆふかげ
たまたれの－きりのなこりや－はれさるむ
【伊勢千句／何人 [かくくいりて]／大永 2(1522) 年 8月 4日～8日】

つゆのおとこく－にはのしたをき
たまたれの－そとものきりの－かたよりて
【天正年間御冊 57 巻】／何船 [すましんか]／天正 13(1585) 年間 8月 12日

露の涼しさ
→夕立
わくのやまの－つゆのすすしさ
ゆふたの－くもはかたへの－みねこえて
【天正年間御冊 57 巻】／何船 [みちみちを]／天正 13(1585) 年 5月 27日

ちなりきにはの－つゆのすすしさ
ゆふたの－あとのやまみつ－いはこえて
【西慶三／続類書畑編本】／夏／明応 4(1495) 年春

露の手枕
→女郎花
おきあかためる－つゆのたまくら
なつかしあ－やとるのの－をみなへし
【文安雪千句】／頌町 [ゆきさそへ]／文安 2(1445) 年 10月 18日

くられはいと－つゆのたまくら
をみなへし－まねくをはなに－うおみたれ
【天文十八年梅千句】／何船 [ふきよわら]／天文 18(1549) 年正月 11日

露の月が降る
→虫の音に枝が更むる
ちばらつゆの－きさきそこはるる
むしのねを－たもとにかくる－よはふかけて
【文安雪千句】／何船 [やまかせに]／文明 2(1470) 年正月 10～12日

つゆ
みながらつゆの－きさきそこはるる
むしのねを－まそてにえらふ－よはふかけて
【弘治年間御冊 8 巻】／何人 [うののはな]／弘治 2(1566) 年 4月 27日

露のふる里
→秋風
かたるにおつる－つゆのふるさ
あきかせの－ならのかはに－そよめきて
【太神宮法楽千句】／何船 [とこうにや]／長享 2(1488) 年 7月

たひねそその－つゆのふるさ
あきかせの－ふきいてねは－うつころも
【毛利千句】／初月 [よとともに]／文禄 3(1594) 年 5月 12日～16日

露のふる道
→秋の月
わけはやたる－つゆのふるみち
ひたちはいさ－みしはわすれぬ－よはのとき
【永正年間御冊 34 巻】／何船 [うちなひき]／永正 13(1516) 年 1月

ぬれてみせの－つゆのふるみち
しらきくに－うつろひふくる－よはのとき
【天文年間御冊 8 巻】／何人 [にほへかつ]／天文 13(1544) 年 1月 29日

露吹く風
→虫鳴く
つゆふかせは－にしみよそたつ
みやきのの－はなのさかりは－むしなきて
【宝德四年千句】／何衣 [はなのもも]／宝德 4(1452) 年 3月 12日

つゆふかせは－すすのありほ
なつころも－ひくくれたは－むしなきて
【永正年間御冊 34 巻】／何衣 [あひにあひぬ]／永正 10(1513) 年 2月 16日

露も淚も
→悲哀
つらい

つゆもなみたも－そてのみそしる
のはいまた－いろそみえね－おもひくさ
【派宮千句】／□□ [ちうせぬ] ／
つゆもなみたも－たれをうらみむ
ころより－ねをさすものそ－おもひくさ
【宮澤第一／続群書類従本】／恋／長興 2

北部のうつる

－長閑

うらかれてゆく－はきのしたつゆ
うすきのに－まかきのこち－むらむらに
【泉院文庫文集千句】／□□ [はなにいそき] ／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前

のほるはかりの－はきのしたつゆ
うすきのに－まかきのゆふへ－いとかみむ
【永正年間百題 34 巻】／山何［まちこしや］／永正 12(1515) 年 11 月 11 日

うくかざのあののつぬ

－海風の風

吹く風に秋の露

かせはまた－ふかぬになつも－あきのつゆ
せみにましるや－ひらしのこゑ
【平松文庫文集千句】／□□ [なてしこの] ／

まつにふく－かせのしたはの－あきのつゆ
またかけすき－ひらしのこゑ
【大永三年月並千三百総】／□□ [しくれのあめ] ／月並千三百総／大永 3(1523) 年 10 月 23 日

つら

川面の里

－潮が

ありともしらぬ－かはつらのさと
はるかに－ふねよはよよの－こたへして
【永正＋花千句】／何田 [はなにこひ] ／永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

きをきるの－かはつらのさと
はるかに－おもひたせる－はしはしら
【絹巴亡父論千千句】／初向 [たまれの] ／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日

春の海面

うるおうつる

－長閑

かりもかかるな－はるのうみつち
のとかなる－しほひのをちに－やまをみて
【文明年間千文書 34 巻】／何田 [よるはつ]
きくきん/文明 18(1486) 年 2 月 6 日

まつみえわたる－はるのうみつち
のとかなる－なみにうかはぬ－ふねもなし
【明応年間千文書 22 巻】／何田 [やまはゆき] ／明応 7(1498) 年 11 月 4 日

つらい

愛く幸い

－花の山風

うくつらき－ほそこせめて－たのみなれ
きそひにし－はなのやまかせ
【東山千句】／何田 [つつきにかかり] ／永正 15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

うくつらき－ちきりならすや－ゆめにせな
うらむはかな－はなのやまかせ
【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正 2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

つり

海人の釣舟

－朝ぼらけ

はなれこしまに－あまのつりふね
うなはらや－くもはたれたる－あさほらけ
【帳爾千句】／何田 [ねにそなく] ／明応 3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

うらたたひをする－あまのつりふね
やまかすむ－みきはのまつの－あさほらけ
つれない

上はつれない

→巻

うへはつれなき—まつのしたつゆ
ひさきる—はちのしらす—いろつきて
【文安四年四月廿番部】／山木（はなはひ）
／文安 5(1448)年 2月 5日

うへはつれなき—あらびそのまつ
なみよする—いはねのこくさ—いろつきて
【大永三年八月廿番部】／山木（はなはひ）
／大永 3(1523)年 12月 23日

連れない

→鳴く山時鳥

つれなきに—なとつれなくて—すくさまして
まつにはなかぬ—やまほどときす
【文安四年四月廿番部】／山木（はなはひ）
／文安 4(1547)年 5月 6日～7月 19日

つれなきに—まつはまっかせは—きくもうし
やまほどときす—みねこえてぬけ
【下草／続群書類従本】／夏／不明

→有明の月

つれなきも—つみののよるへ—と—なりやせむ
あかつきかたの—ありあげのとき
【文安四年四月廿番部】／玉何（たまはら
も）／文安 4(1547)年 5月 6日～7月 19日

つれなきも—まつされなきや—うらむらむ
まつののはさはる—ありあげのとき
【国産第一／続群書類従本】／秋／長享 2

連れなさを恨む

→有明の月

つれなきを—さのみはいかて—うらむらむ
あはてこよびも—ありあげのとき
【間詰四月】／山木（まつはら
も）／文安 2(1470)年正月 10～12 日

つれなきも—まつされなきや—うらむらむ
まつののはさはる—ありあげのとき
【国産第一／続群書類従本】／秋／長享 2

【文安四年四月廿番部】／山木（はなはひ）
／文安 4(1547)年 5月 6日～7月 19日

連れない

→松立てる

かつつうかふ—あまのつりふね
まったてる—いそのかくれや—さたならむ
【成立不詳・宗家以前８巻】／山何（ひと
こねや）／成立不詳

はるもしらし—あまのつりふね
まったてる—かけにふちえの—うらさびて
【老著／毛利何】／伊上／（文明 17(1485)
年 7月 23日頃）

連れない

→浪の上

かすみはかりの—おきのつりふね
やまのは—ほのかにたにも—なみのうへ
【永正十花千句】／何何（ひかすたに）／
永正 13(1516)年 3月 11日～14 日

のとちになかふ—おきのつりふね
あけほのの—つきをひたせる—なみのうへ
【慶長年間百顧 27巻】／何何（わかくさ
の）／慶長 4(1599)年 1月 22日

かすみにうかふ—おきのつりふね
とふりも—それがあらぬか—なみのうへ
【文安四年四月廿番部】／安楽院・大関（わか
くさ）／文安 4(1547)年 5月 6日～7月
19 日

連れない

→浪に時雨れる

おきにかかれる—あまのつりふね
そこときに—なみにいりひや—しるくるらむ
【宮島句千】／何何（はなはひ）／天文
20(1551)年 5月 9日～11 日

ゆふへにいてし—あまのつりふね
たかさとの—うらわのなにに—しるくるらむ
【那智毬／北野天徳宮本】／永正十四年／
てら
春の山寺
→如月の別れを訪う

かねさたかなる－はるのやまてら
きさらぎの－わかれの－を－とひてて
【鎌倉文書】／何人 [さきてちる] ／（元
亀3(1503) 年正月 9 日～11 日
かねさたかなる－はるのやまてら
きさらぎの－わかれをたれ－とひてて
【寛永文書15巻】／□ □ ［とよとし
の］／裏白／寛永 20(1643) 年 1 月 3 日

古寺
→灯の下
ふるてらの－たのむはやの－かけふかみ
かりねますます－ともしびのもと
【阿蘇文書】／初町 [ゆぶっくよ] ／文明
2(1470) 年正月 10～12 日
かたれはむ－ともなみたの－ふるてらに
ほどときすつ－ともしびのもと
【行政関係4種】／行政句集／大阪天満宮本

舟の絹手縁
→塩釜の浦
ふねにすむ－あまのしわさの－つなてはな
なみもたたならぬ－しほかまのうち
【大永年間文書14巻】／何船 [うめかか
や] ／大永3(1523) 年 1 月 9 日
あさほらけ－いそくやふねの－つなてはな
あまぞかひなき－しほかまのうち
【国慶第二／続続著類従文】／鈴／明応
4(1494) 年早春

しきみにとほき－はるのやまてら
きさらぎの－わかれのには－とひてて
【鎌倉文書】／何人 [さきてちる] ／（元
亀4(1573) 年正月 9 日～11 日

手枕
→舟交わす
にひたまくは－ゆめかうつつか
はちかはす－なかこそのは－しのはれめ
【伊予文書】／御所 [すすしきは] ／天文
6(1537) 年 5 月 22 日
にひたまくは－あくるたひたひ
はちかはす－ここころふかさを－うらみわび
【五明衣日文書】／三字中略 [くもらきぬ]
／天正9(1581) 年 11 月 19 日

舟の絹手縁
→塩釜の浦
ふねにすむ－あまのしわさの－つなてはな
なみもたたならぬ－しほかまのうち
【大永年間文書14巻】／何船 [うめかか
や] ／大永3(1523) 年 1 月 9 日
あさほらけ－いそくやふねの－つなてはな
あまぞかひなき－しほかまのうち
【国慶第二／続続著類従文】／鈴／明応
4(1494) 年早春
てん
天乙女

→雲の通り路

いかにして—あかををとめむ—あまをとめ
かせはしらし—ものかよびち
【文明年間百選 3 4 巻】／何木［うめかか
を］／文明 15(1483) 年 2 月 19 日
あはれし—そのよささな—あまをとめ
あとたにとはき—もののかよびち
【明応年間百選 2 2 巻】／何船［やなきふ
く］／明応 9(1500) 年 7 月 6 日

天の川

→吹く秋の初風

けふとるも—ならひはかりの—あまのかは
ふくおとろく—あきのはつかせ
【皇學館文庫本千句】／□□［ちらははな］
／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前
かよびけむ—うきききいしか—あまのかは
ふき立てる—あきのはつかせ
【成立不詳・宗廟以前 1 5 巻】／何人［や
まみつは］／成立時不詳

落ちる天つ雁

→月の出潮

あまつかり—ふかるるかせに—なきおちて
あしまはくらき—つさののいてしも
【紫開日記穂背 5 0 巻】／何船［あきかせ
の］／応永 15(1408) 年 7 月 23 日

でる

出る旅人

→仮枕

まつるみあへ—いっつるたひひと
かりくら—かねややまちに—さそふるむ
【寛正年間百選 2 0 巻】／唐何［せのみは
の］／寛正 4(1463) 年 6 月 23 日
やすらふねへを—いっつるたひひと
かりくら—むすへはつきの—おつるに
【老集／吉川本］／旅／文明 13(1481) 年
夏頃

出る舟人

→明け渡る

みなののはるに—いっつるふなひと
あけわたる—うらのかすみに—なみこえて
【宗廟関係 9 巻】／百番通歌／赤木文庫本
／享徳 2(1) 年 8 月 13 日以後・寛正 6 年 3
月以前
ここよとむる—いっつるふなひと
あけわたる—いりえのゆきの—とまやかた
【宗廟関係 2 巻】／冬／応仁元 (1467) 年
5 月 10 日

枯れた草が萌え出す

→駒狩う声

ふゆかれし—みちのしはくさ—えいてて
のへのかすみに—こまいはふこ後
【紫開年記】／何田［のところひに］／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日
こそかれし—くさはつゆけ—えいてて
のはあきたき—こまいはふこ後
【明応年間百選 2 2 巻】／何水［あけばの
を］／明応 8(1499) 年 2 月 19 日
月出
→稲妻の陰
つににそちきりしものを一いてやられて
よびふけかたのいなつまのかけ
【宗長造千句】／夕何（はるのひに）／
（平禄 5）天文元（1532）年 3 月 25 日
みねたかみ－まちまつなつきの－いてやられて
いくたひくもにいなつまのかけ
【伊千千句】／x x ［いつはとは］／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

月出
→秋の村間
かけはそく－ゆふへのそらに－つきいてて
ひややかにふる－あきのむらさめ
【聖鶴千句】／何人（つさらかし）／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日
かれたる－くものはやしに－つきいてて
いろもことなるの－あきのむらさめ
【天文年間百題 38 巻 ／何何（はなをお
きて）／天文 20(1551) 年 3 月 26 日

月出
→秋風
かけやとす－つゆをたつねる－つきいてて
のはうすぎりに－かせわたるなり
【石山清吟千句】／薄何（うつときの）／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日
ますらをか一しみけのゆくへ－つきいてて
ものすさまじき－かせわたるなり
【大永四年月並千二百題】／□□（ゆふた
ちは）／月並千二百題／大永 4(1524) 年 6
月 23 日

月出
→真砂路の末
ふきわくる－まつのはかせに－つきいてて
しはやすらふ－まさここのすゑ
【天文年間百題 38 巻 ／何何（しこる
か）／天文 19(1550) 年 8 月 25 日
くれぬれは－みきはにしろく－つきいてて
なみのつゆち－まさここのすゑ

月出
→夜が長い
ゆふやまの－いろあるくもに－つきいてて
しかくころは－よこそなかけ
【春日日記百題 50 巻 ／何何（あきかせ
の）／応永 15(1408) 年 7 月 23 日
ふけてのち－やまち□□□は－つきいてて
かねきくまで□□よこさらけ
【春日日記百題 50 巻 ／山何（かせやく
も）／応永 26(1419) 年 10 月 25 日

月差し出す
→秋風
つきさしいつる－ふねのしらなみ
あきかせに－あまのいざりひよりよくきて
【葉守千句 ／薄何（いはにも）／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日〈～11 日〉

月差し出す
→秋風
つきさしいつる－丑かたのやま
あきかせに－しのひゆくよは－やすからて
【延徳年間百題 16 巻 ／初何（さけはさ
く）／千句第三／延徳 4(1492) 年 3 月 3 日

と

草の花の内
→待し待びる
ひとりねらいしあくさののうち
うちすふ－こもやかしぃ－まちわいて
【新撰花伝抄集／実隆木／応永／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

草の花の内
→待し待びる
すみかさるや－くさののうち
すてしみも－いまのゆふへ－まちわいて
【壁草／大原天満宮文庫本／篠下／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

柴の花の内
→思ふ
すなはのとけき－しはのとのうち
ならはしの－みをなつらく－おもふらむ
【三島千屈】／何船／（とりのね）／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

南詰ちかへ－しはのとのうち
みをすれて－いつくもなると－おもふらむ
【国彌第四／早稲田大学本】／雑下／永正
6． 7 年

よう
前を行かぬ訪

→雪と花の降

またれしものを－あををたにとへ
やまさとの－ゆきをかきの－はなのかけ
【成立不詳・心斎以前14番】／何船／は
るはたま）／成立時不詳

あすやはあらむ－あををたにとへ
ゆきそふる－それもきえなむ－はなのかけ
【長年間百年6番】／何木／（ゆかつつの）
／長年 2(1488) 年 1 月 1 日

誰を訪ねうか

→草の原

たれをかとはむ－しらぬゆふくれ
さきたたは－はなまははれめ－くさのはら
【普守千句】／薄何／（いはほにも）／長享
元 (1467) 年 10 月 9 日＜11 日＞

たれをかとはむ－あはれともみし
ちきりても－えやはなへの－くさのはら
【明応年間百年22番】／何人／（かきりさ
へ）／明応 8(1499) 年 3 月 20 日

きえなむ－ゆをたれにはとまし
よのつねの－あはれをたのむ－くさのはら
【永禄年間百年8番】／何船／（はるのいり）
／永禄 5(1532) 年 1 月 18 日

あきになるか－たれにはとまし
つきをたた－すむひとならや－くさのはら
【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476) 年 5 月頃
とおい

遠方の雲
→鳥鳴く

おちたのちのやま

遠方の山
→わたの原
雲の遠方
→時雨
ゆふひみえすく－くもをちかた
いくたひか－つちまつあきの－しろくらむ
【適用年間百鮮6巻】／何人／ときはきを
／応仁元(1467)年10月17日
つきたかたふく－くもをちかた
わかれたゆく－そてにやゆの－しろくらむ
【新撰箑求文集／実隆本】／恋上／明応
4(1495)年9月26日
遠き古里
→織紅
さていくひかす－はきふるさと
たひころも－せきちかさる－あつまかた
【増開日記辨別50巻】／何蕃／ひととせ
／応永32(1426)年12月11日
かへらむほの－ほきふるさと
あめののの－いそしてゆかむ－たひころも
【成立不詳・心敬以前14巻】／朝伺／し
たみつに／成立時不詳
遠き武蔵野
→草枕
ゆけともいまた－とはくすさの
くさまくら－ゆめもみながら－あはれにて
【天文十八年禁中句】／何蕃／しつくさへ
／天文18(1549)年正月11日
わけてもすゑの－とはくすさの
おのつから－やとかるかやの－くさまくら
【増開日記辨別50巻】／何人／まちかか
し／応永32(1426)年6月25日
遠消え
→松の一精
いそやまも－しぐばのあとは－とききに
くもそかかれ－まつのひとむら
【飯盛千句】／初何／このまもの／永禄
4(1561)年5月27日～29日
かけさむく－いさりひきえて－とききに
しもふかれる－まつのひとむら
【文亀年間百鮮4巻】／何衣／たをるなど／文亀2(1502)年4月25日
遠く来た
→沖の舟
かへりみすれは－とほくきにけり
ほともへす－こきもてるる－おきつね
【大永年間百鮮14巻】／何人／ゆきのう
ちに／大永5(1525)年1月25日
ひなかかころは－とほくきにけり
くるてまて－つなてうちは－へ－おきつね
【建草／続編書類従本】／旅／永正3(1506)
年3月頃
遠山の秋
→紀伊海
いまつきにみる－ほやまのあき
きのうみや－ふねをきりまに－こきにたした
【文明十四年方句52巻】／何木／はやの
つゆ／文明14(1482)年7月4日～9月
14日
なかめわひぬる－ほやまのあき
きのうみや－たまつしまつ－ときりこまと
【専順関係2種】／秋／応仁元(1467)年
5月10日
野が遠い
→安らぎ
ゆくゆくくらす－のこそとほけり
ほとはた－むかひのさとに－やすらひに
【慶元千句】／山何／こことや／永正
11(1514)年5月13日～19日
けしみもはるの－のこそとほけり
やすらに－なかきひくらし－あかさらむ
【天文廿年断簡千句】／□□／やまかせや
／天文20(1551)年6月10日～12日
とこ

ー入相の職
のをとほひわけくらしてのたひまくらさとはありとやよりゐのひのかね
【永禄八年甲子記28巻】／何如／ひきうる／裏白／永禄5(1562)年1月3日
のをとほひよくかみちのやすらひにかへさつをつくるよりゐのひのかね
【文禄二年壬午記10巻】／何如／はなにあくる／文禄2(1593)年4月8日～10日

みやこが遠い
ー朝日香風
みやこをとほひわけぬれぬみちあすかかせたつねてゐかむろそてもなし
【表後の記】／薄何／ゆきてみむ／文禄8(1476)年3月6日＜～8日＞
みやこをとほひすむるわびさあすかかせいたつにゐのみめのひとり
【永正十年丙申記】／初何／はなはたた／永正13(1516)年3月11日～14日

とおり
ただ一通り
ーなる
ただひととほりーわたるかりかね
ありあけやーときのよかすにーなりぬらむ
【寛弘日記書百50巻】／山何／とよとしを／応永32(1426)年12月6日
たたひととほりーしらむよこくも
しかれつるーあとやゆきけにーなりぬらむ
【応永六年甲子記7巻】／何何／ちよままでと／応永15(1408)年3月21日

ひととしこー
ー通り
ー道の方々
ひととほりーそこはとるきーみなせかは
くれかかりたるーみちのかたたた
【羽柴千句】／何人／すくにゆく／天正6(1578)年5月18・19日

ところ
所を占める
ー静か
くれどれつらそーとここをしめたる
ひとかへーあとのときかげーしつかにて
【文明四十年丙子記5巻】／二泉反音／まつうきて／文明14(1482)年7月4日～9月14日
いけのかはつぞーとここをしめたる
ひとすまぬこやはるさめーしつかにて
【重覆／伊地知本】／春／文明6(1474)年2月以前

ところ
住み所
ー鶴の声
ひをへつつーのやまをはるはすみところ
やひのすめのーうくひすのこゑ
【慶長七年丙子記7巻】／誠貞／のみそこの／慶長4(1599)年5月2日
みよしのやへはなをよすかのすみところ
ともとこねられーうくひすのこゑ
【慶長七年丙子記7巻】／□□／のみのう
へに／裏白／慶長17(1612)年1月3日

ところどころ
ところどころ所々
ー分かつつ
ところどころのまこもかるあると
なかれにやーむらのさかひをわけつらむ
【元亀三年甲子記6巻】／何人／はなのときも／元亀4(1573)年6月6日
ところところのひとにあひつつ
ぬるかうののゆめにもみをやーわかつらむ
【兼秋流筆／広島大学／】／高村／文和
5(1356)年冬～翌年の春

→鳴き出る
ところところにうめれきのえた
やまからすーくものそこよりなきいてて
【松本武道善抄千句】／初作［したふなよ］
／永禄 6(1563)年 12 月 14 日～18 日

ところところになれるうめその
しろたへのゆきにうくひすーなきいてて
【大原野十花千句】／二宇之宮／つゆなら
て】／元亀 2(1571)年 2 月 5 日～7 日

→掛橋
ところところのしもしろきいろ
かけはしのくちたるかたはーこすなみに
【天正年間百錦 5 7 巻】／何路／とふひと
の】／天正 14(1586)年 3 月 19 日

ところところのこけのはかね
かけはしのとたえもみにーうちわたし
【天正年間百錦 5 7 巻】／□□／ききわく
や】／天正 18(1590)年 10 月 8 日

とし

年越える

→歳の暮
きのふよりーかせさへよろーとしこえて
いりあひのかねのーかすむあのはの
【関越千句】／何船／やまかせに／文明
2(1470)年正月 10～12 日

たかさもーけふあらたまるーとしこえて
やまのあさまのーかすむあのはの
【関東山千句】／何人／さたてちる】／（元
亀 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

といふべきは

→夢も現む

いにしをーおもひわすれーとしたけて
ゆめもうつつもーおなしかりのよ
【関関日記紙抄 5 0 巻】／山河／まっそひ
て】／異永 26(1419) 年 2 月 6 日

つゆのみーおもはぬほとにーとしたけて
ゆめもうつつもーあらましのうろ
【関関日記紙抄 5 0 巻】／片何／しおい
と】／異永 31(1424)年 10 月 26 日

とししのものが

年々の花

→ふる山桜
みしにかはらぬーとししのはな
すゑもばほーいくよをふるのーやまさくら
【関関日記紙抄千句】／何人／えたわけの】／
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日～21 日

あかれぬものをーとししのはな
みやすてふーふるきほのーやまさくら
【関関日記紙抄千句】／何路／みかみの】／文明
8(1476)年 3 月 6 日～8 日

となる

仏唱える

→織りざる
よをしろひとやーほけとなふる
こもりぬーむすふもなつのーものならし
【関関日記紙抄千句】／□□／たきいつこ】
／永禄 6(1563)年 11 月 18 日以前

ほけとなふるーみこそふりぬれ
ひとりしれぬーかたやまでらにーこもりぬて
【関関日記紙抄千句】／行進遊歌／天理本

とにかく

ととにかく

→明かし春来る
あらましのーところひとつをーとにかく
うちまとろまでーあかしらしく
【関関日記紙抄千句】／薄何／つゆをいろ】／異永
15(1518) 年 8 月 10 日～12 日
とまる

泊まり舟
→沖の白浪

うらかせも－あまけありとや－とまりふね
いくしばあひの－おきつらしさな

【永禄年間百錦28巻】／何船 [たちならせ]／永禄元 (1558) 年 7 月 18 日
よこてえて－ときいそして－とまりふね
かたへりふる－おきつらしさな

【文禄年間百錦12巻】／□□ [おかなつみし]／文禄2 (1593) 年 1 月 8 日

とまるとてほたる－つゆにみたれて－くるるのに
ひともかけする－みつのすすしさ
【葉守千句】／初何 [わかくさを]／長保
元 (1487) 年 10 月 9 日＜〜11日＞
かたきの－てにみたれて－とふばる
なかなかおとも－みつのすすしさ
【石山四吟千句】／貢何 [つきやふね]／
天文 (1555) 年 8 月 15 日〜19 日

とふるる－つゆにみたれて－くるるのに
ひともかけする－みつのすすしさ
【葉守千句】／初何 [わかくさを]／長保
元 (1487) 年 10 月 9 日＜〜11日＞
かたきの－てにみたれて－とふばる
なかなかおとも－みつのすすしさ
【石山四吟千句】／貢何 [つきやふね]／
天文 (1555) 年 8 月 15 日〜19 日

とふるる－つゆにみたれて－くるるのに
ひともかけする－みつのすすしさ
【葉守千句】／初何 [わかくさを]／長保
元 (1487) 年 10 月 9 日＜〜11日＞
かたきの－てにみたれて－とふばる
なかなかおとも－みつのすすしさ
【石山四吟千句】／貢何 [つきやふね]／
天文 (1555) 年 8 月 15 日〜19 日

とふるる－つゆにみたれて－くるるのに
ひともかけする－みつのすすしさ
【葉守千句】／初何 [わかくさを]／長保
元 (1487) 年 10 月 9 日＜〜11日＞
かたきの－てにみたれて－とふばる
なかなかおとも－みつのすすしさ
【石山四吟千句】／貢何 [つきやふね]／
天文 (1555) 年 8 月 15 日〜19 日

とふるる－つゆにみたれて－くるるのに
ひともかけする－みつのすすしさ
【葉守千句】／初何 [わかくさを]／長保
元 (1487) 年 10 月 9 日＜〜11日＞
かたきの－てにみたれて－とふばる
なかなかおとも－みつのすすしさ
【石山四吟千句】／貢何 [つきやふね]／
天文 (1555) 年 8 月 15 日〜19 日

とふるる－つゆにみたれて－くるるのに
ひともかけする－みつのすすしさ
【葉守千句】／初何 [わかくさを]／長保
元 (1487) 年 10 月 9 日＜〜11日＞
かたきの－てにみたれて－とふばる
なかなかおとも－みつのすすしさ
【石山四吟千句】／財何 [つきやふね]／
天文 (1555) 年 8 月 15 日〜19 日
ともしび
灯の影
→釣舟

ときのうちにるーともしびのかけ
あきくさにーぼたるのこるーゆふまくれ
【文明十四年方名52巻】/何野/【あきう
みに】/文明14(1482)年7月4日〜9月
14日

ともしびのもと
灯の下

よくもおほえぬーともしびのもと
つりふねのーうらふくかせにーひとりきて
【文徳年間頃22巻】/何野/【つゆやに
ほひ】/文徳5(1496)年8月5日
こころをよするーともしびのもと
つりふねのーふけてさひしきーなみのうへ
【文徳年間頃8巻】/追善/【あきのこゑ】
/文徳5(1532)年7月29日

ともなう
春の伴い
→夕顔

おくれつつうきーはるのともなひ
ことのはにーあらそふあさーゆふかすみ
【文徳年間頃28巻】/山野/【かきつば
た】/文徳10(1567)年4月28日
かたみにうときーはるのともなひ
てふとりのーがととりへつるーゆふかすみ
【文徳年間頃12巻】/□/【うめかえ
や】/文徳4(1595)年7月21日

日暮れに伴う
→歌の声々

くるるひにーかへるきこりのーともなひて
ふしみひとつにーうたふこえこゑ
【因幡千曲】/何野/【ゆきとふる】/文明
7(1475)年11月26日<br>28日

くるひとのーひのくるまでーともなひて
むかひてつきにーうたふこえこゑ
【文明十四年方名52巻】/何野/【あきの
にてに】/文明14(1482)年7月4日〜9月
14日
とり

とろうら
幾重豊浦の竹の下道
→ままた月ある雪の晴れる

いくへとよらの－たけのしたみち
にしにまた－つあるゆきの－けさはれて
【竹林所／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476)年5月頃

いくへとよらの－たけのしたかげ
あめにまた－つあるゆきの－よるはれて
【心斎関係１０種】／心斎集／静嘉堂文庫

とり

帰る鳥の音

→暮れ渡る

かすみのうちに－かへるとりのね
まよひゆく－はるのやまちの－くれわれたり
【天正年間百詩57巻】／何路〔いろもか
も〕／裏白／天正14(1586)年1月3日

やとりさためす－かへるとりのね
coteふとふーまかきののへの－くれわれたり
【慶長年間百詩27巻】／□□〔あらしに
も〕／裏白／慶長5(1600)年1月3日

とりが帰る
→返し行く

いまをはると－や－とりのさへつる
かへしおく－なはしろたに－ひとはなし
【文明十四年方書52巻】／何路〔あきの
いろ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

とりのさへつる－のへのあさあげ
かへしおく－たつらにたみの－かげもなし
【文明十四年方書52巻】／何路〔ゆきな
らは〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

とりのこゑ
→片岡の道

あはゆきを－□□□□はちふーとりなきて
あさまたきゆく－かたをかのみち
【天正年間百詩28巻】／□□〔ゆきにう
め〕／天正5(1562)年2月1日

くれわたる－たのもつつきに－とりなきて
ひかりほのめく－かたをかのみち
【天正年間百詩57巻】／□□〔うめかえ
の〕／裏白／天正19(1591)年1月3日

とりのこゑ 暮れる

ところのこゑ
→雨の名残

とりのこゑ－のきはにかすむ－あさほらけ
あめのなこゑの－ひはのとたかいり
【天正年間百詩57巻】／□□〔たれま
け〕／天正15(1587)年1月10日

しらくもかへはなかあらぬか－とりのこゑ
あめのなこゑの－ちかたのはる
【天正四年方書70巻】／何路〔さみたれ
に〕／天正4(1576)年5月6日～7月19日

とりのこゑ 暮れる

ところのこゑ
→暮れる

さらのかたしらぬ－とりのこゑ
くれぬれば－あたるのやまも－きりこめて
【天文年間百詩38巻】／何路〔ほととき
す〕／天文24(1555)年4月10日

ねくらもむる－とりのこゑ
くれぬれは－つきになるか－よをまちて
【文明十四年方書52巻】／何路〔なほさ
こそ〕／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

とりのこゑ・月落ちる

までいつかはの－とりのこゑ
あふさかや－せきちこゆれは－つきおちで
【天文年間百詩38巻】／何路〔あさかほ
に〕／天文12(1543)年7月29日

あくるをつくる－とりのこゑ
たちさわきーからすなくよの－つきおちで
とり

せきのと－みちむしろを－しきすてて
文禄四年百額百２２巻／何船／（なさかとこに）／文禄4(1597)年5月1日

はつくなじぬ－とりのひこゑ
文禄四年百額百３巻／何船／（なさかほの）／天草10(1541)年7月29日

むかしやおふ－たちはなたる－ほとときす
文禄第四／早稲田大学本／夏／永正6.7年

はつしらしたま－ととりのひこゑ
ことなるめからる－とりのひこゑ
文禄四年万句70卷／何船／（なさきよの）／天草4(1576)年5月6日～7月19日

はるかにすくる－と Proper Date
文禄四年万句2巻／何船／（なさきくの）／文禄11(1671)年9月29日

しはしなくさむ－と Proper Date
文禄四年万句3巻／何船／（なさかとこに）／文禄4(1597)年5月1日

はるかにすくる－と Proper Date
ただありなしのちぎり

→内なる

ただありなしのちぎり

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる

たもつほほのかくすけ

→内なる
なか

【文明十四年万句52巻】/山田【なほさ
こそ】/文明14(1482)年7月4日〜9月
14日

このころさかすけーなかそらのくも
ふるさとにちかつくやまの一一みえかれ
【竹林抄/新古典文学大系本／編/文明
8(1476)年5月頃

ひとのこころのかわるる人のなか
人の心の変わる世の中

→秋の暮れ

ひとのこころの一かはるよのなか
やまさををうかけててやーあきのくれ
【専順宗祇百句付】/専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
いまをなほーとヘやよしのはーあきのくれ
【専順宗祇百句付】/専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

→秋が来る

ひとのこころの一かはるよのなか
うつせみのはやまおろしにーあきはきて
【専順宗祇百句付】/専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
しるすねーひとつなみたにーあきはきて
【専順宗祇百句付】/専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

→秋

ひとのこころの一かはるよのなか
もきふーーかかれあるしはーあはれにて
【専順宗祇百句付】/専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
なきあはーにくかしたりにーあはれにて
【専順宗祇百句付】/専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬
ひとのこころの一かはるよのなか
まちをしむへはにほとなさきーいろみえて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
たけはその－ここをおもしふともーいろみえて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

→憂い身の時

ひとのこころの一かはるよのなか
うきみさへーときにやあふとーはるたて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
うきみさへーいまはのときやーをしからむ
【重草／伊地知本】／雑／文明 6(1474) 年
2月以前

→憂える

ひとのこころの一かはるよのなか
そのいへーのこれとみちのーおとへて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
あかぬれは かみのしるしはーおとへて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

→月を見る

ひとのこころの一かはるよのなか
よつのときーいつれまざるとーつきをみて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
すさまとーいひししはすのーつきをみて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

→とりどり

ひとのこころの一かはるよのなか
ききわひぬーしくれこのはにーそてぬて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
おいかみはーかなかつむにもーそてぬて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

→旅

→懐い羽根を並べる鳥部山
ひとのこころの一かはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーときへやま

【重草／伊地知本】／恋／文明 6(1474) 年
2月以前

ひとのこころの一かはるよのなか
はかなしやーはもをならへしーときへやま

【老集／書陵郡宗談著本】／旅／

→花咲く

ひとのこころの一かはるよのなか
のへをわけーやまちをたとるーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
みやまきをーかたはらになすーはなさきて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

→花もない

ひとのこころの一かはるよのなか
うれへあるーみはなかめるーはなものを

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
うたのみちーまことをうるーはなもなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

→羽根を並べる鳥部山

ひとのこころの一かはるよのなか
とりへやまーはねをならへしーするたてで

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりへやま

【重草／伊地知本】／恋／文明 6(1474)年
2月以前

→一つ

ひとのこころの一かはるよのなか
つきはたたーみやもわらやもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
こをおふーみちのみたれもーひとつにて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

→時鳥

ひとのこころの一かはるよのなか
ほときすーはなまきころーなくさめて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
またよいーなきやうまちーはほときす

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
ほときすーかへーやまちーはともよって

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

→身を知らない

ひとのこころの一かはるよのなか
うれしさもーうきもゆめならーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
ときをえーなはおぼそるへきーみをしらて

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

→身を知る

ひとのこころの一かはるよのなか
みをしれはーわれとさためむーやともなし

【専順宗祇百句付】／専順宗祇百句付／応仁 2(1468)年5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
みをしれはーいはむらみーなきものを
なかなか

【専門辞典百句付】/ 専門辞典百句付/応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→もが上

ひとのごころの一かはるよのなか
わかうへとおもはてたれを－そるうちむ
【専門辞典百句付】/ 専門辞典百句付/応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのごころの一かはるよのなか
わかうへと－ほしのひとよの－あきもかな
【専門辞典百句付】/ 専門辞典百句付/応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

人の心の世の中
→花を懸む

ひとのごころの一あたしえのなか
はなねあり－うつろふものと－うらむらむ
【竹林抄／新古典文学大系本】/ 新/文明
8(1476) 年 5 月頃

ひとのごころの一かはるよのなか
なつやまと－みなすをはなや－うらむらむ
【専門辞典百句付】/ 専門辞典百句付/応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

雪の中空
→ふさと吹く

くれわたりる－ゆきのなかそう
ふきとふく－あらしのおと－しゅかにて
【羽衣千句】/ 何人 [すくにゆく] / 天正
6(1578) 年 5 月 19 日

のはちりきるゆ－ゆきのなかそう
ふきとふく－かせよりの－あさつとひ
【天正年間百顧 5 7 巻】/ x おけるゆか
は] / 天正 4(1576) 年 8 月 19 日

世の中
→もが上

たのむこと－あればなほうき－よいなかに
おいてやひとりは－みをやすくせむ
【延徳年間百顧 1 6 巻】/ 何人 [うすゆき
に] / 延徳 3(1491) 年 10 月 20 日

をくるまの－くるしくめくる－よいなかに
うやいっかは－みをやすくせむ
【延徳年間百顧 1 6 巻】/ 初仲 [さけはさ
く] / 千局第三/延徳 4(1492) 年 3 月 3 日

なかなか

なかなかはかすかよ
中々市は住み良し
→三輪の杉

ましはりの－なかなかいちは－すみよきに
たちながらひたる－みわのすきむら
【観聞日記書付 5 0 巻】/ 山町 [ななしかけ
よ] / 応永 26(1419) 年 3 月 29 日

やまよりも－なかなかいちは－すみよきに
たれつつねこむ－みわのすきむら
【観聞日記書付 5 0 巻】/ 唐町 [あすはさ
け] / 応永 31(1424) 年 2 月 25 日

ながい

秋の夜長
→蜂

はしらにあかね－あきのよなかさ
ききすてて－たれたいをぬる－きりきりす
【大永年間百顧 1 4 巻】/ 何人 [つやふ
ね] / 大永 2(1522) 年 8 月

おもひをつくす－あきのよなかさ
きりきりす－ねかたくねに－まけむやは
【弘治年間百顧 8 巻】/ 何人 [うめひとき
時] / 裏白弘治 3(1557) 年 1 月 3 日

ここにかくまで

心長く待て
→綿引く渡し舟

ここにかくも－われにまてとや
わたしうね－むかひにつなを－ひきすてて
【新撰蒐録波集／実隆本】/ 藤原信／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

ここにかくも－ひとをこそまて
くるまて－なひきはふる－わたしうね
ながつき

長月の霜

→有明

あらしはけしきーなかなかのしぐも
ありあけにこころもうつよーそらぞて
【美濃千句】／何心【つゆにさけ】／文明4(1473)年12月16日〜21日

かしらそろしきーなかなかのしぐも
ありあけになくやよかのーやまからす
【宗廟関係・9種】／宗廟発句並付句抄書／小松家備宮本／

ながめる

眺める

→廃廃亀山

あかしかたーふねのゆくへのーなかめして
なみにうかへーあはちしまやま
【天正年間百句３４句】／□□【ゆつゆも】／天正16(1588)年8月10日

ゆきになるーなにはわたしのーなかめして
たなびくくもやーあはちしまやま
【寛文年間百句２２句】／□□【くらきも】／寛文12(1672)年8月23日

ながれる

ながれのつぼ

流れの末

→田の面の原

たちさくわーなかなかのすまるーむらちとり
たのはらのーいりひさむけし
【天正年間百句３４句】／何路【かすみのす】／天正6(1578)年2月18日

うろくつはーなかなかのすまるーかたよりに
たのはらのーひかりさやけし
【元和年間百句２４句】／□□【やつかほの】／元和6(1620)年8月23日

世に長らえる

→花の一束

あるはみなーなきよかなしきーなかなかから
えたももききのーはのひとと
【永禄元年花千句】／□□【さそふなよ】
／永禄元(1558)年3月23日〜25日

あたなりしーよはけふのみのーなかなかから
くちきのこるーはのひとと
【天文四年万句70句】／何路【うすきりに】／天文4(1576)年5月6日〜7月19日

ゆめいくたびのーよそなさかかれ
こひそうきーあきはものをかはーおもひわひ
【前閲日記語背50句】／山何【ちよもみむ】／応永19(1412)年1月14日

ひとりはなつもーよそなさかかれ
おもひわひーみしかきこころーいかかせむ
【文明年間百句34句】／何人【ゆきのやま】／文明14(1482)年1月16日

→月を見る

はつしもふれるーよそなさかかれ
まといすすーかりねのへの一つきをみて
【燕野千句】／何田【おさくら】／文正元(1466)年3月以前

ねさめののちもーよそなさかかれ
ふるさとにーをはずてやまの一つきをみて
【新撰萬句波波／実隆本】／秋上／明応4(1495)年9月26日

夜が長い

→思い返して
なく

うぐひすのなく－こゑのしつけさ
うちにひく－のほはかすみの－あきはらげ
【天正年間百選・57冊】／今井「かすむやの」／天正6(1578年)2月18日

きけはかすかに－うくひすのなく
かけひろき－たけのはやしの－あきはらげ
【元和年間百選・24冊】／とも「とけゆけは」／巻1「元和4(1622年)1月3日」

→時鳥

なかもへらて－うぐひすのなく
はつこゑを－いつしかとまつ－ほとときす
【天正年間百選・57冊】／とき「かみかきの」／天正17(1589年)5月24日

ゆくをやしつ－うぐひすのなく
ほどとき－すをたつこゑも－きかまほし
【春雲草／書陵旧本】／秋／永正 12(1516)

年、13年

杜鵑狩く声

→寝覚ならば月

あかつきさひしきをしかなくこゑ
ねさむれは一つきすむあきの一きからしに
【相巴亡父追善千句】／二三反音（かけた
かき）／天文 24(1555)年3月26日～晦日

かすかにけりーをしかなくこゑ
ねさむれは一つはありあけの一まくらにて
【五音一日千句】／舟舟（はなをさへ）／
天正 9(1581)年11月19日

雁鳴

→秋が更ける

くもまよりーほのめくつきにーかきなきて
そらもみにしむーあきはふけり
【成立不詳・宗祖以前15巻】／何人（は
つばはな）／成立時不詳

あらしのみーふくやときけはーかきなきて
をのへのまつもーあきはふけり
【壁草／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

→伏見の夢

つきうつるーまくらのをちにーかきなきて
ふしみのゆめそーなこりつゆけき
【成立不詳・宗祖以前8巻】／何木（とこ
なつに）／成立時不詳

みつしろいーたのものうへーかきなきて
ふしみのゆめそーつきにあとなき
【春雲草／書陵旧本】／秋／永正 12(1516)

年、13年

蛙鳴く

→騒

をりをえかほにーかはつなくなり
うくひすのーこゑよりはるやーさそふらむ
【天文十八年梅千句】／何人（みしいちは
／天文 18(1549)年正月11日

→五月雨

ときもわずれすーかはつなくなり
さみたればーはれてもおなしえーにはたつみ
【天文廿四年梅千句】／花之何（かみかきの）
／天文 24(1555)年正月7日

かはつなくーをのまちまち
さみたればーさかひも目えすーみちとほみ
【宗牧追善千句】／ × ×（くもなよ）／
永禄 4(1561)年9月14日・15日

ふりたるいけにーかはつなくなり
さみたればーなこりつきせぬーにはたつみ
【永享年間百葉4巻】／山何（くちてけり）
／永享 12(1440)年10月16日

→廃水

ときもわずれす かはつなくなり
さみたればーはれてもおなしえーにはたつみ
【天文廿四年梅千句】／花之何（かみかきの）
／天文 24(1555)年正月7日

ふりたるいけにーかはつなくなり
さみたればーなこりつきせぬーにはたつみ
【永享年間百葉4巻】／山何（くちてけり）
／永享 12(1440)年10月16日

雉鳴き立つ

→騒止める

ききすなきたつーこゑのさひし
あらしふーかふみのすさにーこまとなって
【天文廿四年梅千句】／何木（みしいちよ）
／天文 24(1555)年正月7日

ききすなきたつーありあけのつ
さくらよりーはのしたはにーこまとなって
【大永四年月並二千帳】／□□（しもや
ひぬ）／月並二千帳／大永 4(1524)年9
月23日
鳥の鳴く声

→関の声

よなかさいつらとりのなくこえ

【天正年間百亀抄】／□ □ [かつたは

せきとのももちむしろをしきてて

文禄元年文禄 2 年 5 月 27 日

いつもかぞときとりのなくこえ

【諸家月次通詣抄】／諸家月次通詣抄／成

立 () 年未詳

なくきりきりすこえやそらむ

【三島千句】／何路 [なへてよ] ／文明

3 (1471) 年 3 月 21 日～23 日

よふねにきくはちとりにくこえ

【初頭千句】／何路 [ほととす] ／享徳

元・2 (1452) 年 4 月

千鳥鳴く声

→思いかねる

ゆくかたをなみちとりにくこえ

【三島千句】／何路 [なへてよ] ／文明

3 (1471) 年 3 月 21 日～23 日

よふねにきくはちとりにくこえ

おもひかねーいもねぬたをしるままに

→暮れつ方

なくきりきりすこえやそらむ

なかつきのーなかきおもひーくれつかた

【三島千句】／何路 [なへてよ] ／文明

3 (1471) 年 3 月 21 日～23 日

ゆくかたをなみちとりにくこえ

【三島千句】／何路 [なへてよ] ／文明

3 (1471) 年 3 月 21 日～23 日

千鳥鳴く

→うち時雨れる

かせにたよふーちとりくなり

【文禄四年義千閣】／何路 [とおのねむ] ／文

文禄 2 (1555) 年正月 7 日

ゆけきになれば一ちとりくなり

【享禄三万篤文集】／文禄 3 (1556) 年 2 月 1 日

ふるさとのーさほのかばのはうちしくれ

→帰る

つきまつなみにーちとりくなり

【東野授話】／何路 [はなやち] ／文明

5 (1476) 年 3 月 6 日～8 日

きけははるかにーちとりくなり

【大永四月月仏百十二編】／□ □ [しみや

ひぬ] ／月仏百二十編／大永 4 (1524) 年 9

月 23 日

ちどりにくこえ

→晩かしごてる

あきふけりとーなくきりきりす

【元和元年長鑑】／□ □ [ちひとは

るを] ／薬師／元和 1 (1615) 年 3 月 1 日

ゆかにちかよりーなくきりきりす

【元和元年長鑑】／□ □ [としとし

に] ／元和 2 (1616) 年 12 月 5 日

千鳥鳴く

→片岡の道

あはゆきをー□ □ □ はらふーとりなきて

あさまたきゆくーかたをかのみち

【永禄年間百亀抄】／□ □ [ゆきにう

め] ／永禄 5 (1562) 年 2 月 1 日

くれわたるーたのもつつきーとりなきて

ひかりほのめくーかたをかのみち

【天正年間百亀抄】／□ □ [うめかえ

の] ／褒白／天正 19 (1591) 年 1 月 3 日

千鳥鳴く

→思い出る

ゆくかたをなみーちとりにくこえ

【三島千句】／何路 [なへてよ] ／文明

3 (1471) 年 3 月 21 日～23 日

よふねにきくはーちとりにくこえ

おもひかねーいもねぬたをーしるままに

→思い出る

ゆくかたをなみーちとりにくこえ

【三島千句】／何路 [なへてよ] ／文明

3 (1471) 年 3 月 21 日～23 日

よふねにきくはーちとりにくこえ

おもひかねーいもねぬたをーしるままに

→思い出る

ゆくかたをなみーちとりにくこえ

【三島千句】／何路 [なへてよ] ／文明

3 (1471) 年 3 月 21 日～23 日

よふねにきくはーちとりにくこえ

おもひかねーいもねぬたをーしるままに

→思い出る

ゆくかたをなみーちとりにくこえ

【三島千句】／何路 [なへてよ] ／文明

3 (1471) 年 3 月 21 日～23 日

よふねにきくはーちとりにくこえ

おもひかねーいもねぬたをーしるままに

→思い出る

ゆくかたをなみーちとりにくこえ

【三島千句】／何路 [なへてよ] ／文明

3 (1471) 年 3 月 21 日～23 日

よふねにきくはーちとりにくこえ

おもひかねーいもねぬたをーしるままに
こゑよわりつつーなくきよりす
ふゆされはーいとものうきーくれつつかた
【永禄年間百科に28卷】／□□ ［はきにうめ］／永禄 5(1562)年 2月 1日

→身に限らない

けなけやなけーふてのなこもののーきよりす
おもひにしてはーみにもかきらし
【観閲千句】／唐何 ［はなといは］／永正 11(1514)年 5月 13日〜19日

つひにねぬーよすかなくなりーきよりす
あきのつるさはーみにもかきらし
【文明十二年千句8卷】／何人 ［ひとはさへ］／文明 12(1480)年 4月 10日〜4日

→年に満たぬ

なけやなけーよしほれふともーきよりす
みみにみちたるーせもののもろこえ
【第盛千句】／何衣 ［つきいてて］／永禄 4(1561)年 5月 27日〜29日

ねなくはーおもひあはれはやーきよりす
みみにみちたるーかせそにしむ
【至徳以前百首7卷】／何路 ［ゆきませの］／至徳 4(1387)年以前

鳴く時鳥

→春の月

やまよりやまにーなくほとときす
ありあげのーつきはくもまにーかけみて
【天正年間百科に57卷】／何路 ［かすむよの］／天正 6(1578)年 2月 18日

くさのまくらにーなくほとときす
ありあげのーつきをなこりのーよはのゆめ
【天正年間百科に57卷】／□□ ［ともなしに］／天正 18(1590)年 11月 21日

→月は春明

ほとときすーはなのなかはにーきてもなけ
つきはありあげのーおぼろなるころ
【弘治三年春雪千句】／何衣 ［くわきのの］／弘治 3(1557)年正月 7日〜9日

たかかたのーあめになくらむーほとときす
つきはありあげのーなつのよのそら
【那智篤／北野天満宮収／永正十四年/】

→花盛り

まくるのくもにーなくほとときす
のをひろみーやたくらかげるーはなさかり
【昭和五条高千句】／玉何 ［はるよたた］／天文 24(1555)年 3月 26日〜毎日

なくほとときすーほのかなるそら
くももをうーつむはかりのーはなさかり
【弘治三年春雪千句】／初何 ［けはれはひ］／弘治 3(1557)年正月 7日〜9日

→雨過ぎる

はるはよのまをーなくほとときす
やよひはたーけふにつきぬるーあまそそき
【稽古千句】／山何 ［いさつみのの］／元亀 4(1573)年正月 9日〜11日

くもよりをちにーなくほとときす
はなにそへーたかそれをしきーあまそそき
【月村抜句／書陵部本／永正十四年/】

鳴けど鳥

→夏の雨

なけほとときすーよをまたすとも
くもふかきーなつやまかけてーあめすきて
【稽関記記紀書に50卷】／何人 ［うのはなし］／永享 9(1437)年 4月 25日

つきかたふきぬーなけほとときす
たちつるーくさのいぼりのーあめすきて
【永禄年間百科に28卷】／何木 ［きりのはの］／永禄 5(1562)年 7月 4日

→夏逢う

ひもゆふかげにーなけほとときす
くもまよふーかたはあめにやーむかふらむ
【冠岳千句】／何草 ［ふるゆきは］／文明 7(1475)年 11月 26日〜28日＞
なくさめる

【永年三年間百部 3 四巻】／何船 [うかなぎ]

→短夜

なけほどときす一ひとこゑの□□
にしにゆく一こころのつきの一みしかよ

【成立不詳・心敬以前 1 4】／何船 [はるはた]／成立時不詳

かかるをりふし一なけほとときす
うたたねの一ゆめのうきはし一みしかよに

【春夢草／書陵部本】／夏／永正 12(1516)
年、13 年

時鳥鳴く

→する

ほどときすなく一鳥ものをうちかた
みしかよも一たれかねさまでに一なりぬらむ

【文明十四年万句 5 2巻】／朝伺 [ひにしほう]
ひて]／文明 14(1482) 年 4 月 4 日～9 月
14 日

ほどときすなく一あのをこそみれ
むかたか一あきさきのもありと一なりぬらむ

【心相関係 1 0 種】／心王集／静嘉堂文庫本

松虫が鳴く

→草の原

つゆのやとりに一ままつむしのなく
くさのはら一あたたかるいに一うつろひて

【美濃千句】／何色 [しくれつう]／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

なにを数えかわるまつむしのなく
つきもは一かけさつつゆの一くさのはら

【永年千句】／何木 [おとそなき]／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

→秋の暮れ

なれしはるや一まつむしのなく
かりころも一いくつゆしもの一あきのがれ

【永年三年間百部 3 四巻】／何船 [うかなぎ]

→露の下道

をかのへの一かきほはまたき一むしなきて
ゆふかけふかき一きりのしたみち

【飯盛千句】／何衣 [つきいてて]／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日

さばほらけ一わけゆくかたに一むしなきて
そてさむくる一きりのしたみち

【文明十四年万句 5 2巻】／何船 [あきの
いろ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

なくさめる

愛さをただ懐める

→筆の跡

うきをたた一われかたみに一なくさめよ
それさへたゆる一ひととてのあと

【葉承千句】／薄和 [いはほにも]／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日～11 日

うきをたた一こころとしはし一なくさめて
しのへはのこすじひととふてのあと

【天文年間百部 3 8巻】／朝伺 [またてき]
く]／天文 9(1540) 年 4 月 25 日

もうかが懐める

→草枕

ひなのなかちも一うちそなくさむ
おもひおく一みやをゆめの一ふらんくら

【永年三年間百部 3 四巻】／何人 [かせなか
ら]／永正 7(1510) 年 10 月 20 日

のをなつかしめ一うちそなくさむ
くさまからいもにむすひし一ゆめさめて

【那智職／新北野天満宮本】／永正十三年／
なごり

名残り

→ 桜虫の声

あさちふをふかきみやこの一なこりにて
きすてかかきまつむしのこゑ
【永正元年八月三日】/ 吉野 [さきたれや]
/ 千句第五/ 永正元年（1518年）5月14日

もみちする一あとはくもめの一なこりにて
すゑかれにけりまつむしのこゑ
【文明二年八月七日】/ 何人 [くろし乃]
/ 文明2年（1482年）7月4日〜9月14日

名残り寂しい

→ 冬繰り

なこりさひきしとりのひとこゑ
はるけれども一れなきはなの一ふゆこもり
【伊予千句】/ 山所 [やとりとへ] / 天文
6年（1537年）5月22日

かれののはらそ一なこりさひきし
くさのとをすむきっかけにる一ふゆこもり
【明応元年八月二日】/ 何人 [ときといさ]
/ 明応2年（1567年）7月1日

なつ

たつひのなこぎろも
たつ日の夏衣

→ 山時鳥

つゆそおく一たちていくかのなつころも
たびにはつれよ一やまほとときす
【池田千句】/ 吉野 [はなはるや] / 永正
7年（1510年）永正以前 < 永正5年春>

なつころも一たちかふるひかす一もまなし
うへなくとき一やまほとときす
【大永元年八月一】/ 名号 [なつころも]
/ 大永2年（1528年）4月12日

なっかじて

→ 烏の卵の花

なっかじて一ふらさくかはへ一またもみむ
なみにあらすなへきしのうのはな
【無名千句】/ 何人 [おだきや] / 文正
元年（1466年）3月前

さかりすくるーあてのやまふきーなっかじて
はやほろふるーきしのうのはな
【文安元年八月二日】/ 何人 [さきたい]
/ 文安2年（1670年）2月7日

なつこし

→ 山時鳥

しかりのーゆきまやみねのーなっつこいち
よくよりつつーやまほとときす
【永禄石千句】/ 何人 [ししかしの]
/ 永禄2年（1564年）5月12日

はなはきのふーもみちもあずかーなっつこいち
またはつねくーやまほとときす
【園慶第三/ 総歌叢書数本】/ 夏 / 明応
4年（1495年）5月

夏の日

→ 村雨の聲

なつひはーかたふくそらもーさやかにて
めくりもあへぬーむらさめのくも
【文安元年八月三日】/ 何人 [ゆふく
よ] / 永禄3年（1516年）7月8日

なつひはーやまのあたなにーへたてりて
ふもとにめくるーむらさめのくも
【文安文安元年八月一】/ 何人 [たよあ
けて] / 冠白 / 文安2年（1528年）6月1日

夏の夜の月

→ 山時鳥

ことかはすまもーなつのよのつき
きくもたーそれがあらぬかーほとときす
【天正元年八月七日】/ 山所 [かせふけ
は] / 天正2年（1574年）5月8日

なかめあかせるーなつのよのつき
ほとときすーやむたこにーめとろまて
【園慶第三/ 総歌叢書数本】/ 夏 / 文亀
元年（1501年）3月18日
なでしこ

なでしこ

【花名の由来】

なでしこのおいゆくすゑをまちかねて
あきのこたのうひとりらしきこゑ
【大正四年花名百題I】/□□ [けふひくや] /大正3(1914)年5月23日

なでしこの橙は生まれの－いろぞめて
ゆきすきかでの－ひとりらしきこゑ
【天文年間百題38篇】/何人[なやここに] /天文4(1535)年5月1日

なに

なにと

【花名の由来】

くさのいまにに－なにおもふるむ
よのなかに－かかつつちふこそ－はかなか
【花詠抄見千首】/何路[のこるは] /永禄4(1561)年9月14日・15日

としほのちを－なにおもふるむ
けさみじも－ゆふへはかる－よのなかに
【文明年間百題34篇】/□□ [ゆきのかけ] /文明5(1473)年12月5日

防瓊む

【花名の由来】

わかよのつゆに－なにたるむらむ
あさかぼの－はなにもみをは－おとろかて
【明応年間百題22巻】/何人[たますたれ] /明応5(1496)年7月2日

はかなきこころ－なにたるむらむ
あさかぼの－はなに□□□の－うきみたれ
【永禄年間百題28巻】/□□ [ゆきにうめ] /永禄5(1562)年2月1日

何に響いよう

【花名の由来】

かかるうらみを－ににたへむ
あつきひの－ところなものせを－ふくかせに
【宝徳四年千句】/何路[はなにほと] /宝徳4(1452)年3月12日

よのなかを－ににたへむ
ふくかせに－とまりさためぬ－あまのつり
ふね
【長楽旅集／広島大学本】/雑体/文和
5(1356)年冬～翌年の春

なびく

打ち驚く

【花名の由来】

かりわくる－かとたのいは－うことらか
あしのまろやは－つゆもたまらず
【銀鏡院会千句】/何鳥[みたれあふ] /宝徳元(1449)年8月19日～21日

うたなひき－そとのときの－あさぼらけ
たけのさえたものの－つゆもたまらず
【天文廿年梅千句】/何船[つきにうめ] /天文24(1555)年正月7日

人は言いなし

かせよふ－のへのつくさーうちなひき
ひとはおとせぬ－やのしたいほ
【初稿千句】/何船[はなはほ] /享禄
2(1452)年・4月

ふねうかふ－きしひのくれたけ－うちなひき
ひとはおとせぬ－つきのゆふかせ
【明応年間百題22巻】/何路[みやことし] /明応8(1499)年1月4日

竹打驚く

【花名の由来】

たけうちなひく－をののかはきり
とふばたる－ここにかしこに－くれそめて
【石山四時千句】/何人[うめかえは] /天文24(1555)年8月15日～19日
たけうちなひく一かけのすすしさ
ほかにも一かせのまにまに一とふはるる
【天正年間百撰 57 巻】/ 初〈はるたち
て〉/ 裏白/ 天正 12(1584) 年 1 月 3 日

なみ
岩越の浪
→一尾落ちる

いはこすなみは一まつのあらしか
ちるをみる一やまにはなのは
【雑続叢集/ 広島大学本】/ 春下/ 文和
5(1536) 年冬〜翌年の春

沖の白浪
→立田山の秋

かせにまかする一おきつらしなみ
たったやま一みねのこのはに一あきくれて
【壁草/ 大阪天満宮文庫本】/ 秋/ 文正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

かくれつはれつ一おきつらしなみ
たったやま一あきふかくなる一ほとみえて
【宗長関係 8 種】/ 王生葉/ 書陵郎本

沖の浪
→立田の山

はるかにも一からくそみゆる一おきつなみ
たったのやまのーよはのかよびち
【永正十花千句】/ 何人[かせのより] /
永正 13(1516) 年 3 月 11 日〜14 日

ひとにさてーいかかからむーおきつなみ
たったのやまのーあきのいろいろ
【老集/ 吉川本】/ 秋/ 文明 13(1481) 年

掛かる藤浪
→田字の長き日

よそのこすみにーかかるふらしなみ
たこのうらーあひきのなはもーなかきひに
【雑続叢集/ 広島大学本】/ 何人[うめのな
の] / 裏白/ 天正 12(1584) 年 1 月 3 日
まつにことさら－かかるふるなみ
ひまもなく－このしょくみ－なかきひに

【春日日記記秘书 50 巻】／山何 [はなそうち]
／広文 2 (1412) 年閏 1 月 13 日

→霞の主山

あをはのころに－かかるふるなみ
あけにけり－かずみのひまに－みかさやま

【春日日記記秘书 50 巻】／何人 [はなのひ
も] ／広文 27 (1420) 年正月 13 日

まつのはのと－かかるふるなみ
かすみては－なほみねたかし－みかさやま

【春日日記記秘书 50 巻】／何船 [こととな
に] ／広文 31 (1424) 年 9 月 27 日

志賀の浦舟

→神明

よもあけかたの－しかのうらふね
かみまつり－もよほすその－いさなひに

【天文十八年秋分】／山何 [うめけさは]
／天文 18 (1549) 年正月 11 日

なみたにかすむ－しかのうらふね
たひひとに－あくるやけの－かみまつり

【助興関係 4 種】／助興連歴／天理本／

須磨の浦浪

→藻塩廻く煙

ふなちにあらき－すまのうらなみ
もしどよく－けふりにうむも－かきくれて

【満佐千句】／何文 [つきた] ／文明
8 (1476) 年 3 月 6 日～8 日

みのうきふしに－すまのうらなみ
もしどよく－けふりはあさな－ゆふなにて

【文正年間詩集 57 巻】／何船 [かすむよ
の] ／文正 6 (1578) 年 2 月 18 日

→波折

ふねさしとむる－すまのうらなみ
あはちかた－うしほのむかふ－せをみて

【宣德四年千句】／何人 [はなそうち]
／宣德 4 (1462) 年 3 月 12 日

つきをみるよの－すまのうらなみ
あはちかた－せとのあきかせ－みにみて

【文正年間詩集／文正大学本科】／秋上／文和
5 (1356) 年冬～翌年の春

→颳の岩浪

こすゑにちるや－たきのいはなみ
おどのけは－おとはかりして－くるるにに

【聖説倶／初日 [きのかんり] ／明応
3 (1494) 年 2 月 10 日～12 日

かすみてくくれに－たきのいはなみ
やまとほく－なれいてたる－おとはかは

【豊永年間詩集 20 巻】／何人 [けふす
は] ／豊永 3 (1462) 年 2 月 27 日

→波の上

→藻塩の煙

なみのうへなる－あまのいへしま
いてぬひも－こころやうかふ－ふねのうへ

【伊勢千句】／何人 [うくくもり] ／大永
4 (1524) 年 3 月 17 日～21 日

うみやまの－あさゆふかはる－なみのうへ
もしどのけふり－ちのしらくも

【宣福年間詩集 8 巻】／白何 [あさみとり]
／宣福 3 (1530) 年 3 月 2 日

→舟の内

なみのうへなる－あまのいへしま

【伊勢千句】／何文 [たからまたの] ／大永
4 (1524) 年 3 月 17 日～21 日

まつらのやまそなみのうへなる
ほとときす－きてやすらふ－ふねのうへ

【文正年間詩集 34 巻】／夕何 [みつみえぬ]
／千句第 106 『文明 17 (1485) 年 6 月 26 日

→波折

よるへはつく－なみのうきふね
てならひへ－またいとけなき－ところそかし

→波折
【看聞日記紙背 50 巻】／写部 [おのはなの] ／応永 30(1423) 年 4 月 4 日
ことにこきいるーなみのうきふね
てなならひーにほのをしへのーほとなるに
【看聞日記紙背 50 巻】／何人 [かみにうめ] ／応永 31(1424) 年 2 月 25 日

なみのまににに
浪の間に間に
→夜見めがち

お她是たーなみのまににーしくれきて
ねさめかからなるーとまふきのうち
【都信千句】／写部 [あげほのの] ／（元亀 4）天正元(1573) 年正月 9 日～11 日
なみのまににーひとりむれたつ
とまふきにーねさめかからなるーささあらし
【寛文年間書類 2 2 載】／□□ [つなきは] ／寛文 13(1673) 年 6 月 12 日

吹く浪の浦風
→鳥の鳴き立つ

ふきまとはせるーなみのがらせ
さよふかきーうきねのとりのーなきたちで
【大永三年月倉千三百頭】／□□ [はなにつき] ／月倉千三百頭／大永 3(1523) 年 3 月 23 日

ふきこそはれーなみのがらせ
なかそらにーまさこのちとりーなきたちで
【元和年間書類 2 4 巻】／□□ [まつふくや] ／元和 8(1622) 年 10 月 29 日

まつのふらふら
松の藤浪
→月出る

はるよかげよーまつのふらふら
なかきひもーくるはやかてつついてて
【看聞日記紙背 50 巻】／山口 [やおよひ] ／応永 31(1424) 年 3 月 18 日
はなまちえたるーまつのふらふら
はるのよのーひかりをそふるーつついてて
【文安年間書類 1 巻】／夢想 [おささくら] ／文安 2(1445) 年 3 月 18 日

なみだ

つゆもみなみーぞろのはさると
のはいまれーいろこそみえねーおもひくさ
【 источник千句】／□□ [ちうせぬ] ／

つゆもみなみーたれをうらめむ
ここよーねをさすものそーおもひくさ
【続歴第一／続続書類從本】／恋／長享 2

涙

そのよなよな

したひわひーおもひあまるはーなみたにて
かたみのこすーそぞのまゆすみ
【看聞日記紙背 50 巻】／何船 [おちはまて] ／応永 25(1418) 年 10 月 25 日

くろかみのーまくらのつときはーなみたにて
うおりやすさよーそぞのまゆすみ
【看聞日記紙背 50 巻】／何船 [ゆきにみて] ／応永 32(1426) 年 11 月 25 日

なみだがちうここと

涙ううう
→雁鳴く
なみだ

なみたあらそふーさをしかのこる
つきにいまーさそれはわたるーかりなきて
【明応年間百軒 2巻】/ 未人 [としにあて] / 明応 9(1500)年 7月7日

なみたあらそふーむしのこるこゑ
こはきはらーうつろふゆふーかりなきて
【大永三年月並千三百軒】/ はるをまつ / 月並千三百軒 / 大永 3(1523)年 11月 23日

海

泪落ちる
→人ともな

ゆふへのくもにーなみたおちけり
なかむなふーそらにはもふーひともなし
【新撰芳詞波集 / 実隆本】/ 恋中 / 明応 4(1495)年 9月 26日

あはれをしるやーなみたおちけり
ことわりをーうらむにうきーひともなし
【那智築 / 北野天満宮本】/ 永正十三年

→古里

しごのふものからーなみたおちけり
とふひともーおもかけはるーふるさとに
【弘治三年春雪句別 / 薄何 [そらにあふ] / 弘治 3(1557)年 正月 7日〜9日

なこりかしくーなみたおちけり
ふるさとにーまだわれぬるーゆめさめて
【園塵第三 / 根群書類従本】/ 鳥下 / 文亀 元 (1501)年 3月 18日

→夢見る

つきにくかふーもーなみたおちけり
ひとにそふーところはかなくーゆめさめて
【新撰芳詞波集 / 実隆本】 / 恋中 / 明応 4(1495)年 9月 26日

なこりかしくーなみたおちけり
ふるさとにーまたわれぬるーゆめさめて
【園塵第三 / 根群書類従本】 / 鳥下 / 文亀 元 (1501)年 3月 18日

→水上的紅葉御

かけをたにーうつさむせせーなみたかは
なとみなかみのーもみちるらむ
【成立不詳・宗間以前 6巻】 / 唐何 [なとしこ] / 成立時不詳

いろにさへーあさくはみえぬーなみたかは
なにみなかみのーもみちるらむ
【観当関係 2種】 / 観当句集 / 赤木文庫本 /

→思う

つゆもなみたもーわかそでのうへ
ひとしれぬーみにはなをかーおもふらむ
【文安年間百軒 9巻】 / 山何 [ふたひの] / 文安 5(1448)年 11月 12日

いつもなみたのーわかそでのうへ
とふひとやーこよひはかりとーおもふらむ
【合点之句 / 神宮文庫本】 / 恋 / 天文 9(1541)年 12月 25日

→秋は悲しい

むかしおもふーなみたにつきやーくもるらむ
いとねさめのーあきそかなし
【成立不詳・宗間以前 15巻】 / □□ [またもなき] / 成立時不詳

むかしおもふーなみたもつゆもーそでのうへ
ひとのこころのーあきそかなし
【文禄年間百軒 12巻】 / □□ [けののまに] / 文禄 2(1593)年 1月 14日

→草の庵

むかしおもふーこよひはなみたーもよほして
くさのいほりのーあめのさひしか
【初稿千句】 / 何人 [なつやまに] / 享徳 元・2(1452)年 4月

むかしおもふーなみたにかすむーよはのつつき
くさのいほりのーゆふくれのはる
向って涙落ちる

→なる

むかへはつつきに－なみたおちけり
おいさらし－あきはたかよに－なりぬらむ
【竹林抄／新古典文学大系本】／編下／文明 8(1476) 年 5 月頃

むかふくさきに－なみたおちけり
たかとの－よもきかそまと－なりぬらむ
【風塵第四／早稲田大学本】／編下／永正 6、7 年

なる

秋近くなる

→心細い花落ちる頃

おほつかな－あきもやちかく－なりぬらむ
ここらはそしな－はおむるところ
【心地関係 10 種】／芝草岩僧／本能寺本

くれそうき－あきもやちかく－なりぬらむ
ここらはそしな－はおむるところ
【興雄千句】／山岡 [うくひすに]／文明 2(1470) 年正月 10～12 日

かなるなる

鐘鳴る

→曉の空

はるふかき－ふもとのさとに－かねなりでお
しらぬふねゆく－あかつきのそら
【三島千句】／今河 [うつろふか]／文明 3(1471) 年 3 月 21 日～3 月
かたやまの－ゆふへのあつに－かねなりて
つきまちてむ－あかつきのそら
【生妻千句】／山岡 [けふみすは]／文明 4(1473) 年 12 月 16 日～21 日

→杉の群立ち

くれわるる－みねよりおくに－かねなりて
いあさひしき－すきのむらたち
【弘治年間百首 5 巻 】／×× [そりのこす]／弘治 2(1556) 年 9 月 10 日
かはみは－くもるいらた－かねなりて
あらしにあける－すきのむらたち
【成立不詳・宗像以前 8 巻 】／何人 [あをやきや]／成立時不詳

→月が傾く

やまふかく－すむひとしつるき－かねなりて
よをおとけと－つつきそかたぶく
【明応年間百首 2 巻 】／何人 [あさかすみ]／明応 4(1495) 年 1 月 6 日

たちまよふ－そらのおくより－かねなりて
あかつきむみ－つつきそかたぶく
【明応年間百首 2 巻 】／何水 [あけほの え]／明応 8(1499) 年 2 月 19 日

→峰の古寺

われゆかぬ－こひちのやまに－かねなりて
こころのかよふ－みねのふるてら
【文明十四年万句 5 巻 】／戸河 [かふひ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

なほくらき－ますのかげに－かねなりて
たれかとひむ－みねのふるてら
【文明十四年万句52巻】／何路【あらねなり】／文明14(1482)年7月4日～9月14日

さはみつの一ふるやすくなく一なりぬらむところところに一つくるやままた
【天正四年万句70巻】／何路【うすきりに】／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→古峰の松

たまつるののちはなにか一なりぬらむさひしくたてる一ふるつかのまつ
【文明十四年万句52巻】／山何【あきのはな】／文明14(1482)年7月4日～9月14日

みしひとやおもかけにのみなりぬらむうゑはいつぞ一ふるつかのまつ
【文明十四年万句52巻】／二字反音【はなはみな】／文明14(1482)年7月4日～9月14日

→高原の本山

とほきのの一はらもやさとに一なりぬらむひとすぢけふるゆきのやまもと
【長享年間百詠6巻】／何路【あらぬを】／長享2(1448)年4月5日

からそなく一たひととかいかに一なりぬらむさととたえたらゆきのやまもと
【成立不詳・宗長以前15巻】／名号【なはひと】／成立不明

→有明の月

ににはたく一ひかりやうずく一なりぬらむいまみえずかし一ありあげのとき
【天文十八年梅千句】／何路【ふきよわる】／天文18(1549)年正月11日

ときのまの一はるやむかしに一なりぬらむおもかけすむ一ありあげのとき
【集秘歳集／広島大学本】／春上／文和5(1356)年冬～翌年の春

なるらしはげと

→鳥飛ぶ

ひとりひとりに一なるれるしはひと
からすとふーいちのむらに一ひはおちて
【池田千句】／何人 [はるのはな] ／永正 7(1510) 年春以前 <永正 5 年春>

いりひかくれにーなれるしはひと
からすとふーすそのさとのーうすけふり
【永正年間百韻 34 巻】／何人 [すすしさや] ／永正 7(1510) 年 7 月 5 日

我でなくなるのが憂い
→芦の戸の夕風

うしやわれにもーあらすなりゆく
はなをふくーこせのとほそーゆふあらし
【春夢草／書陵部本】／春／永正 12(1516) 年、13 年

うしやわれにもーあらすなりゆく
こせのとーはなにふきたつーゆふあらし
【論書 4 種】／宗牧／

なわ

舟の網手繋
→塩釜の浦

ふねにすむーあまのしわきの一つなてなは
なみもたたならぬーしこかまのうら
【大永年間百韻 14 巻】／何船 [うめかかや] ／大永 3(1523) 年 1 月 9 日

あさはるけーいそくやふねの一つなてなは
あまぞかひなきーしこかまのうら
【園進第二／続群書類従本】／雑／明応 4(1495) 年早春

におう

梅句う
→朝ばらけ

かたえほのほのーうめにはふなり
うくひすのーはふきにあくるーあさはらけ
【称名院造書千句】／何人 [せめてきは] ／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

うふきからにーうめにはふなり
かせはまたーかすむともなきーあさはらけ
【文禄年間百韻 12 巻】／□□ [おかつなみし] ／文禄 2(1593) 年 1 月 8 日

うふ

かたえほのほのーうめにはふなり
うくひすのーはふきにあくるーあさはらけ
【称名院造書千句】／何人 [せめてきは]
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

つつくかきねのーうめにはふなり
うくひすのーこえするかたのーこすまきて
【天正年間百韻 5 7 巻】／何人 [わかくさも]
／天正 11(1583) 年 1 月 10 日

うめにおうこう

梅句う頚
→風

たけのさえたもーうめにはふころ
うくひすのーはふきにつゆやーこはるらむ
【天文年間百韻 3 8 巻】／何路 [あさかほの] ／天文 10(1541) 年 7 月 29 日

かすめるつつきーうめにはふころ
うくひすのーはなにぬねのーこそらかな
【心敬関係 10 種】／心玉集／陽明文庫本

かぎにおううちばな

風に叩う橋
→風

かせのいつくかーにはふたちはな
ふかきをーしらってさまつるーたますたれ
【天文廿四年梅句千】／山何 [うちなひき]
／天文 24(1557) 年正月 7 日

つゆちるかせにーにはふたちはな
たますたれーのきはのつきてーまきあって
【新撰雅玩波集／実隆本】／秋下／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

ににおううめのか

叩う梅の香
→朝ばらけ

とへとやけしーにはふろめかか
はるともーあらでゆきふるーあさはらけ
【大永年間百韻 14 巻】／何人 [あきのつき]
／大永 6(1526) 年 9 月 13 日
にち

こうふくかせに—はふうかふか
いとさへ—こころうかるる—あさほらけ
【天正四年万句7巻]／何路 [ちとりの
み]／天正4(1576)年5月6日〜7月19日

にち

しゅこうち

→小葉の外

したかせをくら—はふたちはな
こすると—くもすすすき—つきふて
【天文年間百詠38巻]／何路 [じとこえ
や]／天文14(1545)年5月8日

くちきのかたえ—はふたちはな
こすると—たちすすきのフはしこて
【天正四年万句70巻]／何文 [しのひね
に]／天正4(1576)年5月6日〜7月19日

にち

→朝露

こかれてのみ—はふやまふき
あさつゆに—ぬれてやてふ—めくらむ
【大永年間百詠14巻]／何木 [はなにた
ette]／大永8(1528)年2月23日

みちのへかけて—はふやまふき
おきこぼれ—かすむまかきの—あさつゆに
【月村抜句／海陵郡本]／永正十四年/

にち

水にうかう山吹

→雨晴れた春の暮れ

こふかみつみ—はふやまふき
なかあめの—ひをうつすまに—はるくて
【三島千句]／二字反音 [いなさまて]／
文明3(1471)年3月21日〜23日

にち

→朝露

いしばしるみつみ—はふやまふき
あめはるる—せのしらなみ—はるくて
【成立不詳・奈良以前15巻]／初何 [た
てから]／成立不明

にしき

紅葉の錦

→ Accent
寒い日
→脈の衣手
このねぬる—あさなあさなの—さむきひに
かさねまほし—たひのところもて
【穂間詩句】／唐詩 [遙をとす] ／永正
11(1514) 年 5 月 13 日～19 日

さむきひに—かはてやこまのーなつむらむ
あらししのく—たひのところもて
【寛文年間頌歌 22 巻】／□□ [なれてこし] ／寛文 10(1670) 年 2 月 27 日

日が暮れる
→ふる雪
ゆくふねとよ—ひこそくれねれ
ふるゆきに—やまもかくるる—みちのすえ
【寛延年間頌歌 16 巻】／何船 [はるすきぬ]／寛延 4(1492) 年 4 月 8 日

かはせさむみ—ひそくれぬれ
ふるゆきに—つまきこをの—たののみち
【大永年間頌歌 14 巻】／何人 [ちあきをも]／大永 5(1525) 年 9 月 21 日

入相の鐘
もふかきーたけよりよくに—はくれて
とよらのにしの—りいあひのかね
【顕政院歌会頌歌】／唐詩 [みたれけり]／宝徳元(1449) 年 8 月 19 日～21 日

みちのへの—ゆきかきたえ—はくれて
とほそきこゆ—りいあひのかね
【伊予千句】／何路 [きだたれの]／文明
6(1537) 年 5 月 22 日

吹く風
つきさしいつる—ひはくれにけり
きりはるる—おきつたいさき—ふくれに
【卒業三年千句】／何人 [つきたとた]／
幸徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

はれみくもり—ひはくれにけり
たけのはの—おきふすのは—ふくれに
【月橋千句】／何船 [そらゆき]／文明
7(1475) 年 11 月 26 日＜～28 日＞
ぬれる

くるるひにーかへるきのりのーともなひて
ふしもひとつにーうたふこゑこゑ

【四幡千句】／何木［ゆきとふる］／文明7(1475)年11月26日<〜28日>

くるひとのーひのくるまでーともなひて
むかひてつきにーうたふこゑこゑ

【文明十四年方句52卷】／初町［をるそ
てに］／文明14(1482)年7月4日〜9月14日

にわ

つゆのおときくにー

露の音聞く庭

ー玉置の露

つゆのおときくーにはのゆふかけ
たまれのーきりのなこりやーはれさらむ

【伊勢千句】／何人［ふかくいりて］／大
永2(1522)年8月4日〜8日

つゆのおときくーにはのしたをき
たまれのーそともものきりのーかたよりて

【天正年間百録57巻】／何船［すますみ
は］／天正13(1585)年間8月12日

袖を濡らす

ー立ち別れ

ゆめにみえてーそてぬらしき
なこりさーゆゆしみはかりーたちわかれ

【出陣千句】／折原［まききや］／永正
元(1504)年10月25日〜27日

ゆふへのかすみーそてぬらしき
まくらるーあしたのくもにーたちわかれ

【伊勢千句】／三木中略［うめさきて］／
大永2(1522)年8月4日〜8日

ぬれる

袖濡れる

ー草の原

おほろぎきよにーそてそぬれぬる
つゆをたにーわするなきえむーくさのはら

【竹林抄／新古典文学大系本］／恋下／文
明8(1476)年5月頃

ゆくへもしらすーそてそぬれぬる
みしひとをーとへはかせふくーくさのはら

【心訥関係10種】／心王集／静嘉堂文庫本

ーあく

たのまぬよはもーそてはぬれけり
あかつきのーつึกにおらくるーかねのおと

【大永年間百録14巻】／山河［うめやな
き］／大永7(1527)年1月19日

おとろくほどにーそてはぬれけり
あかつきのーかねこそめのーわかれなれ

【実吹放集／広島大学本］／恋中／文和
5(1336)年冬〜翌年の春

ーケト

よのなかにーあるかすならばーそてぬれて
いつをかぎりそーくさのかりいも

【文明年間百録34巻】／何人［よるはつ
き］／文明18(1486)年2月6日

なかなかのーなさけおもへーそてぬれて
ゆきにやとすくさのかりいも

【文明十四年方句52巻】／夢想［そのし
なも］／文明14(1482)年7月4日〜9月14日
ね
岩が根
→一樹の一筋
いまはかねに—をかはのなみの一つらふれて
あさしもふかき—はしのひとすち
【三島千句】／朝倉（やまとほく）／文明
3(1471)年3月21日～23日
たまさまも—かしめてたてる—はかねに
まつはのへふす—はしのひとすち
【聖楽千句】／作楽（うめかかに）／明応
3(1494)年2月10日～12日

ねや
関の月影
→鴨鴨
ほのかにかたひし—ねやのつきかけ
うちしきり—いまはあかま—きりきりす
【伊勢千句】／三宅中央（うえさきたて）／
大永2(1522)年8月4日～8日
よひすきゆらし—ねやのつきかけ
かたしきの—たもとにちかき—きりきりす
【大永三年月並千三百額】／□□（うめか
かや）／月並千三百額／大永3(1523)年2
月23日

ねる
如何に寝て
→昨日を去年の
いかにねて—ここよびはかかむ—ほとときす
きのふをこその—ゆめかうつか
【寛正年間百額200額】／康何（せみのは
の）／寛正4(1463)年6月23日
いかにねて—いかにみやこの—ゆめならむ
きのふをこその—はるのやまのは
【大永四年月並千二百額】／尚者（うめの
はな）／月並千二百額／大永4(1524)年1
月23日

ねぐら
鰹の鴞の声
→静か
しばしねぐらの—はるのとりのね
しかなる—あしたのほほは—おぞきひに
【元禄三年千句】／何禄（ふるさと）／
元禄2(1571)年3月5日
たけをねぐらの—はるのとりのね
しかなる—かきほやのへに一つつくらむ
【平松文庫千句】／□□（おちはして）

ねねねがての空
→月を枕に
おしあけたかの—いねかてのそら
しはのときは—みやまのつきを—まくらて
【成立不詳・心敬以前14号】／何船（は
るはま）／成立不詳
さらともよとは—いねかてのそら
たのめはい—うつろつかを—まくらて
【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541)年12月25日

うたた寝
うたたねの－はとくくあくる－はるのよに
みしかくのこる－ととしのけの

【太神宮法楽千句】／薄荷／木通のはや
／長町 2(1488) 年 7 月

うたたねの－なこりしらる－よひすきて
ほのかになれる－ともしのけの

【大永四年月日千二百篇】／□□／しもや
ひぬ／月日千二百篇／大永 4(1524) 年 9
月 23 日

仮寝の月影

→花打ち香る

かけすむ－かりねのつの－あくるよに
はなうちかをり－りのなくこゑ

【文明十四年万句 5 卷】／初町／をるそ
てに／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

かりねのつの－かけさむきそら
わくるの－はなうかもをり－ふくれて

【天正四年万句 7 卷】／何風／ふりつも
る／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

仮寝をする

→深へ

そとあちをれ－かねをやせむ
ひとかへる－あにともいまた－ふかきよに

【表佐千句】／何路／みなかみの／文明
8(1476) 年 3 月 6 日～8 日＞

おもひのほかの－かねをやせむ
やとたぼき－のへにいつれは－ふかきよに

【園慶第四／早稲田大学本】／師正／永正
6, 7 年

仮寝める

→夜が長い

つきもはや－かたふくそらに－ねさめして
こしかたおもふ－よこそなかへれ

【明応年間百題 2 卷】／何人／ふきすて
よ／明応 7(1498) 年 10 月 6 日

いよいよに－あきはこころの－ねさめして
あらましつくす－よこそなかへれ

【大永年間百題 14 卷】／山町／みぬやな
き／大永 7(1527) 年 1 月 19 日

仮寝める夜

→枕

ねさめするよの－うつるたにをし
おときは－よそのしくれを－まくらにて

【延徳年間百題 16 卷】／夢想／みぬよし
の／延徳 2(1490) 年 9 月

ねさめするよの－さをきのかゑ
つつきにる－いなはのかせを－まくらにて

【壁書／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以降

仮寝をする

→花打香る

ひとりやねむ－まきたてるかげ
はなにはふ－やまちのこけを－かたしきて

【新撰英語之集／実隆本】／春上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

ひとりやねむ－つつきはきかけ
むしのねも－よるのあらを－かたしきて

【壁書／大阪天満宮文庫本】／秋／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以降

一人寝る

→ねむ

かせみにしむしゅ－ひとりかもねむ
いつははり－のなかたちをのみ－うらみわび

【天文年間百題 3 卷】／山町／ひとりか
は／天文 19(1550) 年 6 月 16 日

まちよつじ－ひとりかもねむ
ちかひしに－かはるこころを－うらみわび

【寛文年間百題 2 卷】／□□／さきゆるも
のと／寛文 12(1672) 年 8 月 11 日

群馬が寝る

→我驚く
の

野が遠い

→安らい

ゆくゆくくらすーのこそとほけれ
ほたはたーむかひのさとにーやすらびに
【斑鳩千句】/山村 [こここより] / 永正
11(1514) 年 5 月 13 日〜19 日

けしきもはるののーのこそとほけれ
やすらびにーなかなかひくらし あかさらむ
【文禄九年雙断千句】/〇〇 [やまかせや]
/ 文禄 20(1551) 年 6 月 10 日〜12 日

→入相の難

のをとほみーわけくらしてのーたひまくら
さとはありとやーいりあひのかね
【文禄年間百韻 28 巻】/ 何人 [ひきうる]
/ 薩白/永禄 5(1562) 年 1 月 3 日

のをとほみーゆきかふみちのーやすらびに
かへさをつくるーいりあひのかね
【文禄三年十一月 10 巻】/ 何人 [はなに
あるく]/ 文禄 2(1593) 年 4 月 8 日〜10 日

のにかかける

野に仮枕

→片敷の夢

かりまくらすそののかたにーかへなまし
いかにねてかはーかたしきのゆめ
【五時一日千句】/ 初何 [やまもいさ]
/ 天文 9(1581) 年 11 月 19 日

はかないやーのかみのさとのーかりまくら
いふきおろしーかたしきのゆめ

→朝ぼらけ

野辺の衰せ

→朝の声

ことしもなきーのへのあのけほぼ
うくひすーこえはからしてーふかきよに
【太神宮宮楽千句】/ 薩何 [まきのはや]
/ 長享 2(1488) 年 7 月

ゆきとつぞむーのへのあのけほぼ
うくひすーこえにちさとのーはるの
【慶長年間百韻 27 巻】/ 〇〇 [まっやな
ほ]/ 薩白/慶長 10(1605) 年 1 月 3 日

のへはいまーところところのーしたもえに
かすみのにあけーこまいまはふり
【文禄石山千句】/ 山村 [そらにあけて]
/ 文禄 7(1564) 年 5 月 12 日

→春の竹の末々

のへちかきーやとのうくひすーねをたてて
ゆきをれふかきーたけのすゑすゑ
【永禄年間百韻 28 巻】/ 何船 [つたよろ
の]/ 永禄 5(1563) 年 12 月 9 日

のへちかきーにはのうくひすーこえそひて
ゆきのとけゆくーたけのすゑすゑ
【天正年間百韻 57 巻】/ 何路 [いもらか
も]/ 薩白/ 天正 14(1586) 年 1 月 3 日

のへのあけない

野辺の曙

→朝ぼらけ

なくやとりへのーへのあのはれさ
やまかすむーかりはのはるのーあさはらけ

→春の竹の末々

のへちかきーやとのうくひすーねをたてて
ゆきをれふかきーたけのすゑすゑ
【永禄年間百韻 28 巻】/ 何船 [つたよろ
の]/ 永禄 5(1563) 年 12 月 9 日

のへちかきーにはのうくひすーこえそひて
ゆきのとけゆくーたけのすゑすゑ
【天正年間百韻 57 巻】/ 何路 [いもらか
も]/ 薩白/ 天正 14(1586) 年 1 月 3 日

のへのあけない

野辺の曙

→朝ぼらけ

なくやとりへのーへのあのはれさ
やまかすむーかりはのはるのーあさはらけ
のき

【文安年間百鬼 9巻】／山町 [はなはひも]
／文安 5(1448) 年 2 月 5 日

のわきのあとののへのあはれさ
あさはらけ—うすきとはたより—ひのいてて
【資徳第一／続群書類従本】／秋／長享 2

野辺の色々

→旅の図

ちくさにをしき—のへのいろいろ
そめてみは—いつれとももなし—からちろも
【東山千句】／薄荷 [つゆをいろ]／永正
15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

それでもさから—のへのいろいろ
からこも—きりののしづくに—しれきてて
【石山四時千句】／初何 [くれてたて]／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日

野辺の遠近

→時鳥

いろいろたる—のへのをちこち
たちそへは—まつさへはなし—あらはれて
【天文年間百鬼 5・7巻】／初何 [はるたち
て]／裏日／天文 12(1584) 年 1 月 3 日

かすむたもとののへのをちこち
たちまほこの—みちはゆきまに—あらはれて
【天文年間百鬼 5・7巻】／□□ [けふひく
ゆ]／天文 12(1584) 年 1 月 10 日

野辺の仮組

→旅の図

ゆめちをたとる—のへのかりふし
たひまくら—ふかきもしらす—いつるよに
【住吉千句】／何田 [こののはちる]／大永
元 (1521) 年 11 月 1 日～14 日

ねられぬことは—へのかりふし
たひまくら—ゆめさへ—ひや—たえつらむ
【成立不詳・宗祇以前 15 巻】／何船 ［き
りのはに］／成立不詳

のこる

→時鳥

てらひなつとの—あめのこるすら
ほときす—ゆくゆくわかぬ—こゑきてて
【永禄石山千句】／三字中略 [このすゑまて]
／永禄 7(1564) 年 5 月 12 日

やまはみとり—あめのこるすら
ほときす—あしたのくもに—なきすてて
【合点之句／神仏文庫本】／夏／天文
9(1541) 年 12 月 25 日
おぼろにのこるありあのつつき
臠に残る有明の月
→聞ぼし小舟の音
おぼろにのこる－ありあのつつき
ほそこく－たななしをふね－おとすみてて
【心敬関係１種】／心王集／静嘉堂文庫本

おぼろにのこる－ありあのつつき
はるのよ－たななしをふね－おとすみてて
【論書４種】／宗長／

残る
→月灰か

あきのしも－きりのまかきに－のこるらむ
やまをともの－つきほのかなり
【天文年間問題３巻】／何人［さくふちの］／天文 18(1549) 年 3 月 24 日
のわきせし－そともにきや－のこるらむ
たけのはこし－つきほのかなり
【慶長年間問題２巻】／口々／慶長 5(1600) 年 1 月 3 日

草は残らない雪の下折
→野分する臠に月

くささのこらぬ－ゆきのしたれ
のわきせし－にはのつきかけ－よるされて
【新撰文抄複本／実隆本】／秋下／明応 4(1495) 年 9 月 26 日

くささはのこらぬ－ゆきのしたれ
のわきせし－にはをしかか－つきふせて
【下草／金子本】／秋－延徳 4(1492) 年頃

残る
→袖の移り香

いつまてか－ひにわかれて－のこるらむ
こそかたみ－そてのうつりか
【楽清千詠]／何草[いつくにて]／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日
おもかけや－こひしきたかに－のこらるむ
おもひめたる－そてのうつりか

ここごつりとあいか

残る有明
→朝ばらけ

かけもすくなく－のこるありあげ
やまのは－よきもきる－あさぼらけ
【文明十二年図書館 8 巻】／宇多頭[おかは
はもて]／文明 12(1480) 年 4 月 10 日～
日
それかとはあり－のこるありあげ
あさぼらけ－わけゆかたに－むしなきて
【文明十四年図書館 5 巻】／何船[あきの
ころ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

残る山影
→帰る

おぼろのにしし－のこるやまかけ
みそせし－あとやくもは－かへるらむ
のどか

雨の長閑

→何処に居む

にはにけさふる－あめののけさ
まとくる－かせはいつくに－かすむらむ
【長享年間観百齢6巻】／何方［わかみつの］／長享2(1488)年1月1日

みれもみずす－あめののけさ
いつこにか－ありあけののけさ－かすむらむ
【享禄年間観百齢8巻】／何方［あさみとり］／享禄3(1530)年3月2日

長閑

→海人の釣舟

うみすこし－あらしもなみも－ののかにて
おのかともよふ－あまのつりふね
【文明十四年万歳5巻】／何方［ゆきな
らは］／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

けふはなほ－そらのけしきも－ののかにて
いさなひつつる－あまのつりふね
【天正四年万歳7巻】／何方［ちるはな
も］／天正4(1576)年5月6日～7月19日

光長閑

→解ける

にははあさけの－ひかりののけし
いけみつや－とちしごばりの－とけぬらむ
【寛永年間観百齢1巻】／□□［しのはる
を］／寛日／寛永8(1631)年1月3日
かきはへたてぬ－ひかりののけし
たけのはののゆきやのところす－とけぬらむ
【寛永年間観百齢1巻】／□□［しのけさ
の］／寛日／寛永10(1633)年1月3日

ののみや

野々宮

→黒木の鳥居

ののみやの－わかれのあと－の一つゆけに
くろきのとりあ－きやたつらむ
【観開日記冊子50巻】／何方［としみのは
や］／応永27(1421)年12月12日

ののみやの－にはあれまざる－あきくれて
くろきのとりあ－なにそのある
【観開日記冊子50巻】／何路［まつこ
の］／応永32(1425)年10月15日

のぼる

霧晴れ昇る

→朝日影

きりはれのほる－なかのかけはし
かすかなる－のわかせのよい－あさひかけ
【出陣千句】／何路［きりもはや］／永正
元(1504)年10月25日～27日

きりはれのほる－まつのかたかさ
あさひかけ－いろつくみのに－さしきびて
【文開年間観百齢34巻】／□□［したつゆ
は］／文明12(1480)年7月4日

のり

のりのこととは

法の言の葉

→絶止める

たまたまあへる－のりのことのは
こまとめて－おなしやとかれて－ひとりも
【竹林抄／新古典文学大系本】／旅／文明
8(1476)年5月頃

みみにもふれる－のりのことのは
わたりえぬ－こたかはに－こまとめて
【基佐集／静嘉堂文庫本】／秋／永永
6(1509)年以前
のわき
野分の後
→虫の声
のわきのあとのまつのつれなさ
なきたるるなかにゆふへのむしのこる
【伊庭千句】／三字中略 [ちりやすき]／
大永 4(1552) 年 3 月 17 日～21 日
→秋更ける
ねさめにむかふるやまのはのつき
みをてむるもともいまのはのあきふれて
【三島千句】／何路 [なへてよの]／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日
まつひとさへそるやまのはのつき
さともはきししほのいはりにあきふけて
【長享年間百顛 27 巻】／何路 [さみたれは]
／長享 3(1489) 年 5 月 11 日
いるかけのころるやまのはのつき
いねかてのしのはのつのはあきふれて
【大永年間百顛 14 巻】／山何 [そめしつゅ]
／大永 3(1523) 年 9 月 2 日
いてついつのるやまのはのつき
たひころもさむさおはるるあきふけて
【慶長年間百顛 27 巻】／何路 [みつのう
へに]／裏白／慶長 17(1612) 年 1 月 3 日

は
山の端の月
→秋風
くれてまちるるやまのはのつき
あきかせによふねこたるるからとおる
【河越千句】／山何 [うくひすじ]／文明
2(1470) 年正月 10～12 日
しはしはのこれるやまのはのつ
あきかせに ゆつのいのうちも をしまれて
【聖慶千句】／何人 [つきなりら]／明応
3(1494) 年 2 月 10～12 日
うきをはすてのやまのはのつき
あきかせにふせやといへると まとろまた

は

→新しい季
こはきうつろふるいねかてのこる
しをるなよみにいたよりのあきのかせ
【延元年間百顛 16 巻】／夢想 [すみよしの]
／延元 2(1490) 年 9 月
こはきうつろふるるあとのには
とふひともあらすみみかのあきのかせ
【天正年間百顛 57 巻】／何木 [けふかへ
よ]／天正 9(1581) 年 4 月 1 日

小萩原

→後の旅人
こはきはらをりたかかにさきやきて
すきかてにゆるるのちのたびひと
【池田千句】／何何 [こころあひの]／永正
7(1510) 年春以前 < 永正 5 年春>
はこぶ

運ぶ貢

→国に従う

はこぶみつきの一おはきしなしな
このくにに－よもの□□□□一したかひて

【看聞日記紙背50巻】／山何［まっそひて］／応永26(1419)年2月6日

はこふみつきの－ふねそひまなき
わかくに－もろこしまても－したかひて

【看聞日記紙背50巻】／［やまもとは］／文安5(1448)年以前

→唐土までも従う

たまこかね－はこふみつきの－かすかすに
もろこしまても－いまそしたかふ

【看聞日記紙背50巻】／何物［かみとうめ］／応永29(1422)年2月25日

はこふみつきの－ふねそひまなき
わかくに－もろこしまても－したかひて

【看聞日記紙背50巻】／［やまもとは］／文安5(1448)年以前

はし

掛橋

→松の一本

かけはしの－くてなかはは－たえけらし
よこたはりたる－まつのひととも

【天正年間百顧57巻】／何由［ゆくそにて］／天正11(1583)年間1月1日

かけはしの－あ□□□かせの－ふねおくり
こけにかたふく－まつのひととも

【天正四年方顧70巻】／一本來源［やまのはに］／天正4(1576)年5月6日～7月19日

久米の岩橋

→ただ一言
てらにたれ－くめのいははし－つつくらむ
たたひとことも－すくにをしへよ
【享徳二年丁句】／唐伺 [ここらびく] ／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

わたしもはてぬ－くめのいははし
つきみては－たたひとことも－おもはぬに
【看聞記報書 5 卷】／唐伺 [いよとし
に] ／応永 31(1424) 年 1 月 25 日

みつふかく－なるやかなからの－はしはしら
あしのすゑはの－さみたれのころ
【作草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

みちのかけはし
道の掛橋
→寺の角
とほくみえぬる－みちのかけはし
とひよるも－ひとけまれなる－てらのかと
【天正年間百選 7 卷】／□□ [まつなら
ぬ] ／天正 17(1589) 年 1 月 4 日

うきとけはつる－みちのかけはし
とひよるも－おくのふかき－てらのかと
【慶長年間百選 2 卷】／□□ [ちりてき
へ] ／慶長 4(1599) 年 6 月 18 日

訪い寄る
とほくみえぬる－みちのかけはし
とひよるも－ひとけまれなる－てらのかと
【天正年間百選 5 卷】／□□ [まつなラ
ぬ] ／天正 17(1589) 年 1 月 4 日

うきとけはつる－みちのかけはし
とひよるも－おくのふかき－てらのかと
【慶長年間百選 2 卷】／□□ [ちりてき
へ] ／慶長 4(1599) 年 6 月 18 日

かははそこなる－みねのかけはし
さるさけふ－こゑさへさむき－たきのもと
【錦誠院会千句】／何人 [えたわけの] ／
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日～21 日

かすゑのあきの－みねのかけはし
さるさけふ－やまののつくの－ありあげに
【永禄年間百選 2 卷】／□□ [つゆはそ
てに] ／永禄 4(1561) 年 9 月 19 日

夢の浮橋
→思い出
ねぬよにくつる－ゆめのうきはし
いにしへの－なからのみやに－つつきをみて
【老葉／吉川本】/秋／文明13(1481)年
夏頃
うつとともかな－ゆめのうきはし
いにしへのふてのまきまき－ほのかにて
【宗長関係8種】/尾崎院／書陵部本
→御幸する

そをたにかけよ－ゆめのうきはし
みゆきせし－あとはしたふも－とほきょに
【明応年間百題22巻】/山何[ほととき
す]／明応9(1500)年4月9日
あとのもろな－ゆめのうきはし
みゆきせし－そのよこびき－ふるてに
【国面第四／早稲田大学本】/鶴下／永正
6.7年

→渡河

つくやまぐらの－ゆめのうきはし
とこのうの－うたかたやみ－なみたかは
【元亀年間百題6巻】/何人[はなのとき
も]／元亀4(1573)年6月6日
はかなくかよふ－ゆめのうきはし
わたるせは－いつくするるも－なみたかは
【天正四年万句70巻】/一字箆願[わか
くさる]／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

→春の夜

とたえからなる－ゆめのうきはし
ねぬるまは－ほとしもしかき－はるのよに
【永禄石山千句】/何人[つきやかる]/
永禄7(1564)年5月12日
たえはつじりな－ゆめのうきはし
いとはやも－ありなむると－はるのよに
【寛永年間百題20巻】/□□[なかつき
と]／寛永2(1641)年9月

→峰に分かれる

たつゆゆのまの－ゆめのうきはし
つきいはは－みねにわかるる－よるのくも
【実蔵千句】/何草[いつくにて]／文明
4(1473)年12月16日～21日

はじめる

氷初める

→厳ある

あらしよもつま－こほるおぞけり
ころもてに－しみつくはかり－しもぶりて
はす
蓮の上
→ 嫁

はちすのうへの一たのみたかふな
ひくらしの－こ名にすすし－いけのおも
【五時－日千句】／薄野 [あげほのの] ／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

はちすのうへの一つゆもみたるな
ひくらしの－なくゆふかせに一つきいてて
【紫實 / 玉地知本】／秋 / 文明 6(1474) 年
2 月以前

はつ
秋の初風
→月出る

にしよりむかふ－あきのはつかせ
かみのますーかのをかきよく一つきいてて
【宝徳四年千句】／何船 [いろそふ] ／
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

あかつきるき－あきのはつかせ
きよからむ－かけはのめかす一つきいてて
【永正年間百韻 34 巻】／何路 [ひとはい
さ] ／永正 17(1520) 年 2 月 4 日

ふなちにおもふ－あきのはつかせ
くまもなく－なきたるなみに一つきいてて
【天文年間百韻 38 巻】／朝何 [またてきて
く] ／天文 9(1540) 年 4 月 25 日

→ 残る暑さに端処する

ふくとしもなき－あきのはつかせ
ふくるまって－のころあつさに－はしらして

→ 落より

たえたえなりし－あきのはつかせ
ひとはより－のはちきことに－ちるをみて
はつせかぜ

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋・文明
8(1476)年 5月頃
このよをおもふ—あきのはつかせ
ひとりはより—かろきほはおの—ゆくへにて
【竹林抄／新古典文学大系本】／雑下・文明
8(1476)年 5月頃

今朝の初雪

＞詩絵書える
ふるきのめほの—けさのはつゆき
おきめつつ—しはたくよはの—さえさえて
【文正年間百選20巻】／何人［けふこす
は］／文正 3(1462)年 2月 27日

＞染火
やまのはまでの—けさのはつゆき
うつみひによるのあらしや—かへるらむ
【下草／東山御文庫本】／冬／明応 5(1496)
年 11月 18日

＜人声＞
ふゆとしらし—けさのはつゆき
うつみひに一さむさすれし—とをあげて
【園園第四／早稲田大学本】／冬／永正 6.7
年

＞初め

＜言の葉の道＞
ひくことは—いつつのしらへ—はしめにて
むくさにしける—ことのはのみち
【聖訓千句】／何路［うめかかに］／明応
3(1494)年 2月 10日～12日

＞かものよ—なはのことの—はしめにて
まねひたふる—ことのはのみち
【成立不明・宗朝以前6巻】／××［うめ
なれや］／成立時不明

＞はつせかぜ

はつせかせと—きのふはききし—あきふれて
ひとりはのらす—もろきもみちは
【季語千句】／何人［しるしらす］／文明
3(1471)年 3月 21日～23日

はつせかせと—きのふはききし—あきふれて
ひとりはのらす—もみちるかけ
【老集／吉川本】／秋／文明 13(1481)年
夏頃

＞初雁の声

＞海人小舟

＞はつせかぜ

＞初溪風

＞余所の夕暮れ

＞あかつきの—かねもみにしむ—はつせかせ
とはやつゆに—よそのゆふくれ
【美濃千句】／何草［いつくにて］／文明
4(1473)年 12月 16日～21日

＞かさすさふ—なこりもはけし—はつせかせ
こちらのはてや—よそのゆふくれ
【大永三年月並千三百箇】／□□［まつか
せや］／月並千三百箇／大永 3(1523)年 6
月 23日

＞はつせでら

＞大溪寺

はつせとしのうはしててあきふげる
初風と昨日晚は聞いて秋更ける

＞年喜の神壇
はな

青葉の花の後

かすかの香る

まつならしてあをはのゆきやはなのあと
こときのかたにかかれるふちなみ

【看板日記簡便50巻】／菅原【かせやく
も】／応永26(1419)年10月25日

をしめともあをはなりふにーはなのあと
まつにことさらかかれるふちなみ

【看板日記簡便50巻】／山原【あつさな
ほか】／応永32(1425)年6月25日

朝顔の花

かすかほのーはなに□□□のーうちみたれ
すすきかものはまつむしのこゑ

【永禄年間百種28巻】／□□【ゆきにう
み】／永禄5(1562)年2月1日

あさかほのーはなをみるからなみたおち
つひにはかれむーまつむしのこゑ

【文明十四年万句52巻】／阿房／【あさ
み】／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

惜しんで花を見る

袖の梅の香

みなひとのーをしむによらぬーはなをみて
すりてかへさはそてのうめかか

【懸想千句】／阿房／しけるきに／永禄
4(1561)年5月27日～29日

をしみてかねーちるにまかさるーはなをみて
をらすつきぬーそてのうめかか

【大永四年月並千二百幅】／□□[うくひ
すの]／月並千二百幅／大永4(1524)年2
月23日

尾上の花を見る

一殿に暮れる

あすはみむーをのはなのーいかならむ
かすみにくるーたかまとのみや

はてる

明け桟ほる

→如何なる

あるはつるまでーいねかてにして
おもふことにかすはふみにもーいかならむ

【宮城千句】／白井【ゆふへより】／天文
20(1551)年5月9日～11日

あけはつるまでーゆめはみえす
わするなよーわすればせしもーいかならむ

【元亀年間百種6巻】／何人【あきかせの
／元亀3(1572)年7月13日

弱り果てる

→うた

ものおもふにやーよわりはつるむ
わひぬるもーわれぞまされるーきりきりす

【伊勢千句】／何田【かすやてる】／大永
2(1522)年8月4日～8日

われからわれやーよわりはつるむ
つゆになれーしもにやとるーきりきりす

【酸醙第四／早稲田大学本】／秋／永正6、7
年

あゆみをはこころにはこふーはつせてら
たれもねかひのーよきのかみかき

【看板日記簡便50巻】／唐何【あすはさ
け】／応永31(1424)年2月25日

くれにけりーいりあひとはきーはつせてら
いのることのーよきのかみかき

【看板日記簡便50巻】／何目【ゆふはえ
は】／応永32(1425)年2月29日

おこなひのーいつつもたえせぬーはつせてら
わけてちかひもーよきのかみかき

【看板日記簡便50巻】／何船【ゆきにみ
ete】／応永32(1426)年11月25日
散る花

→鶴の声

ちるはなのはなみのしびくさ－かせみえて
やなきやうきねーうくひそのこゑ

【天文年間百録 38 行】／朝町・『またてきく』／天文 9(1540) 年 4 月 25 日

ちるはなのはなみちやきりにーまかふらむ
たにのついるーうくひそのこゑ

【元亀年間百録 6 行】／鶴船・『むさしのも』／元亀 3(1572) 年 3 月 18 日

→鶴が鳴く

ちるはなのはなみにはってーつげぬらむ
けさはつこゑのーうくひそそく

【天正四年万両 70 行】／鶴船・そらにまつ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

ちるはなのはなみとかもはかせにーなはしはてて
こつたひすてーうくひそそく

【下林・戸崎大学卒／春・延徳 2(1490) 年～3 年春欠

年々の花

→ふる山桜

みしにかはらぬーとしとしのはな
すゑもとほいゆよふのーやまさくら

【通院会万両文】／山寺・『あさもより』／宝永 4(1467) 年 8 月 19 日～21 日

あかれぬものをーとしとしのはな
みやすむーふるきいひのーやまさくら

【長生篇文】／河路・『みなかみの』／文明 8(1476) 年 3 月 6 日～8 日

花枝に

→若木の桜

うきよもーいのをしめーはなうあて
わかきのさくらーたのむくはる

【観開記紀斑 50 行】／唐治・『ひそをしみ』／応永 30(1423) 年 3 月 29 日

すまひとのーよかたりになるーはなうあて
わかきのさくらーはるそひさし

枯れ花薄

→弱る虫の音

はなすすきーかれゆくしもにーあきふれて
のにおしきひーよるるむしのね

【観開記紀斑 40 行】／山寺・『あきもはり』／宝永 4(1467) 年 8 月 19 日～21 日

つきのこるーかれののすゑのーはなすすき
ほのかになりぬーよるるむしのね

【歌謡千文】／薄句・『かきはかふ』／文明 4(1775) かん 11 月 26 日～28 日

咲く春の花

→桜と桜の梅の枝

ちれはさくらーちりもはかなるーはるのはな
さくらにかすはーやとのうめかえ

【大永四年月並千二百飲】／薄句・『けふひ
くや』／月並千二百飲／大永 4(1524) 年 5
月 23 日

さくこともーちるもみたかはーはるのはな
さくらにほのめくーやとのうめかえ

【歌謡第三／総群書類従本】／春・文亀元
(1501) 年 3 月 18 日
花打ち香る
→未語れる

はなうちかをリ－とりのなくこゑ
さくうめに－すみかのたけの－こかくて
【文明十四年八月五日】／初何【をるそ
てに】／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9
14 日
はなうちかをリ－のはかすみつつ
ゆふくよく－うめさくやまに－こかくて
【合点之句／神宮文書本】／春／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

花咲く
→未語れる

やへくも－みゆるよかはの－はなさきて
うすきかすみは－ときすみゆき
【宝徳年間百日 3 巻】／以呂波【いねね
や】／宝徳 3(1451) 年 8 月 15 日
おくやまも－よそめしきの－はなさきて
うすきかすみは－たつとしまし
【文永十二年句句 8 巻】／一字露鎖【わか
はもて】／文永 12(1480) 年 4 月 10 日～
* 日

→驚鳴く

くれたけの－はやじつときに－はなさきて
ねくらさためす－うきひすそなく
【延德年間百日 16 巻】／何路【かすみさ
化】／延德 4(1492) 年 1 月 22 日
はるやまの－みねのいほりに－はなさきて
たにをわかよ－うきひすそなく
【延徳関係 9 巻】／宗御関係改付句抜書／
小隱天司宮本／

→松に藤の黄昏

はなさけは－やまのなかはも－なみこえて
まつのこすゑの－ふちのたそかれ
【毛利千句】／一字露鎖【なつのひも】／
文禄 3(1594) 年 5 月 12 日～16

はなさけは－このまにうとき－はるのつきて
まつにかかれる－ふちのたそかれ
【天文年間百日 8 週】／夢想【ちりてな
ほ】／天文 10(1541) 年 3 月

はなかり
花盛り
→驚鳴く

うちむれて－ひとのなかむる－はなさかり
いつくのさとそ－うくひすのこゑ
【聖徳千句】／何人【つきならし】／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日
おくやま－いへも－おりぬ－はなさかり
ひとにけまちか－うくひすのこゑ
【文亀年間百日 4 巻】／何何【うつろはね】
／文亀 3(1503) 年 7 月 25 日
をしめとも－さきみたれたる－はなさかり
こすゑにたかき－うくひすのこゑ
【文明十四年八月五日 2 巻】／山何【つゆや
けさ】／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9
14 日

→掛かる藤

さきそびて－まつこそみえね－はなさかり
よそのこゑに－かかるふちかなみ
【春間日記紙背 50 巻】／何何【うめのな
の】／応永 30(1423) 年 5 月 27 日
たておくも－ううるもはの－はなさかり
いはかきつつき－かかるふちかなみ
【文亀年間百日 2 週】／何路【のこりな
く】／文亀 3(1560) 年 11 月 10 日

→春の杉光

くももきを－うつはかりの－はなさかり
せきのとあくる－はるのすきむら
【弘治三年春間十一句／初何【さみれは】
弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

いはかねの－こけにこそか－はなさかり
かたはらさしほ－はるのすきむら
花

花なるで

ほのめくやーたかまくらのーはなすすき
ふけゆくまでにーまつむしのこえ

【天文年間百巻33巻】／何船 [あさかほに]／天文12(1543)年7月29日

ひとかがのうちのーはなすすき
したはにすたくーまつむしのこえ

【永禄年間百巻28巻】／何船 [たちならせ]／永禄元 (1558)年7月18日

花散る

→春の朝

やよりにもーまたなりやらぬーはなちで
のこるおぼくもーひこそなかかれ

【伊勢千句】／薄野 [たかための]／大永2(1522)年8月4日~8日

みはすをーまちあへぬまのがーはなちで
のこりおぼくもーはるはいぬぬめり

【天文年間百巻38巻】／何木 [あすのなを]／天文17(1548)年8月14日

花

かすしてつ

→春の朝

とはぬをーみれはわずれしーはなちで
ふるさとさししーはるのくれた

【美濃千句】／何色 [しくれつう]／文明4(1473)年12月16日~21日

したもれのうくさのいろともーはなちで
のもあをみゆくーはるのくれた

【天文四年万句700巻】／何船 [そらにまつ]／天文4(1576)年5月6日~7月19日

花の色

→春の朝

あをはよりーあらはれそむるーはなのいろ
したひもてゆくーうくひすのこえ

【羽束千句】／朝月 [よもにふく]／天正6(1578)年5月18・19日

いまもなばーあをはにのこるーはなのいろ
みきりになるーうくひすのこえ

【永禄年間百巻28巻】／□□ [つゆはそてに]／永禄4(1561)年9月19日

さかりそーみれはうつろふーはなのいろ
みきりをよそのうくひすのこえ

【文禄年間百巻12巻】／□□ [けさのまに]／文禄2(1593)年1月14日

花

→春の朝

あめかせのーここらあはるーはなちで
とりさへかへーはるのさしし

【三島千句】／何衣 [はなにつき]／文明3(1471)年3月21日~23日

花のいなげ

→春の朝

ちるあともーみずはうらむーはなのかけ
さちらのみはーつつしやまふき

【池田千句】／何船 [おそくとく]／永正7(1510)年春以前＜永正5年春＞

やまかしとーさもこそならぬーはなのかけ
みちもせにさくーつつしやまふき

【享禄年間百巻8巻】／慎朝 [ゆふたちの]／享禄5(1532)年6月8日
→鶴の鳴き
さきぬへき－ころもちかつく－はなのかけ
かこふみきりの一とりのさへつり
【元和年間百軒 24 巻】／□□ [かせにつ
もり]／元和 7(1622) 年 11 月 28 日
このめさへ－またみえやらぬ－はなのかけ
はるのしるへの一とりのさへつり
【天正四年万句 7 0 巻】／何等 [いろそぶ
や]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日
→鶴の一声
ひとかへる－あとしつかなる－はなのかけ
かすむゆふへの一とりのひととき
【石山四吟千句】／青何 [つまゆふね]／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日～19 日
ちるまてと－おもふやまれの－はなのかけ
かへりつくして一とりのひととき
【享禄年間百頌 8 巻】／何等 [はるのいち]／
享禄 5(1532) 年 1 月 18 日
→歓の杯
くれぬれは－そぞをかたくし－はなのかけ
かへさわるるはるのさかつき
【慶長年間百頌 27 巻】／□□ [ねふかき
や]／慶長 4(1599) 年 2 月 8 日
いつれにか－くまるからおむ－はなのかけ
こころうかるるはるのさかつき
【寛永年間百頌 15 巻】／□□ [ききはみ
な]／寛永 4(1627) 年 1 月 3 日
→山霧冒春
ひとよを－あかさてかへる－はなのかけ
まきつつみに－やまかすなくれ
【文明年間百頌 3 4 巻】／□□ [あきふけ
ぬ]／文明 12(1480) 年 9 月 28 日
かりねって－いろみまほしき－はなのかけ
うちわたすのに－やまかすなくれ
【明應年間百頌 2 2 巻】／何等 [つゆやに
ほひ]／明應 5(1496) 年 8 月 5 日

→み吉野の春
ゆきそるふ－それもきえなむ－はなのかけ
やまかせふし－みよしののはる
【長享年間百頌 6 巻】／何等 [わかみつの]／
長享 2(1488) 年 1 月 1 日
さきちるも－おとつれきふぬ－はなのかけ
いりにしまの－みよしののはる
【信楽／大梵天讃音文庫本】／雑詩／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

花の陰に安らう
→春の帰り
みるままに－やすらふききの－はなのかけ
おもへはとほし－はるのかへるさ
【宝徳四年万句】／何等 [はなそころ]／
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日
やすらへ－ときそとうつれ－はなのかけ
かによつきす－はるのかへるさ
【寛正年間百頌 2 0 巻】／何等 [ひととせ
に]／寛正 5(1465) 年 12 月 9 日

花の梢に現れる
→古寺の道
くもまりよ－はなのこそふる－あらはれて
まつにふちさく－ふるてらののみり
【永禄年間百頌 2 8 巻】／何等 [きえしき
の]／永禄 7(1564) 年 1 月 22 日
すきむらの－こそするははなに－あらはれて
おをつつく－ふるてらのみり
【天正年間百頌 5 7 巻】／□□ [ことのは
も]／天正 13(1585) 年 1 月 4 日

花の木の下
→驚
いそくこころのはなのこのもと
うくひすの－はるおとろかす－ねなきて
【羽柴千句】／何等 [あくるを]／天正
6(1578) 年 5 月 18・19 日
いそくはるそふ－はなのこのもと
うくひすの－はなせをみるも－のとかにて
花の春風

→ 山桜

とはなといひしはなのはるかせ
おくはまたおそきもあれや～やまさくら
【弘治年間梅額 巻】／向松 [たくそだに]
弘治 2(1557)年 12月 2日

くもをはらふははなのはるかせ
やまさくら～よのまのあめに--さきいてて
【愚隠記】／春・永正 17年

にはのくちのいはなのはるかせ
やまさくら～かけひのみに--なかれてきて
【園塵第四／早稲田大学本】／春・永正 6、7年

花の春梅

→ 鳥の声

うふおきて～またるるはなんの～はることに
わかやとはぬ～うくひすのこゑ
【藤原千句】／初房 [きのふより]／明応
3(1494)年 2月 10日～12日

ほともなく～うつろふはなんの～はることに
みをあくからす～うくひすのこゑ
【那智緒／北野天満宮本】／永正十四年

花の一枝

→ 山桜

をるをはゆるせ～はなのひとえた
ひとをこそ―とむるせきの～やまさくら
【文和千句】／南木 [はにしたける]／文和 5年

このかけものの～はなのひとえた
やまさくら～てをもゆるさす～をりもてて
【雑順関係 2種】／春・應仁元 (1467)年
5月 10日

はなのはひとも

花の一枝

→ 春暮れ


H?࣊
) &   i ~    i  0  0
    t * 0 B    


3$

  OX  } ) Ƽ Q

ÕL O    

 ' 

  i   i  | i 0  0
0  i9  | & ~ P 0   |    
 I ¯¦3$  " "  s ) c

¥ 13$  W n  " "    B )
g   1  

\\


 ‫ل‬К

y   0 & t 0 4 @ćF   i
P 0  . P  | *t iP2

- )   ¯Ϫ3$I     
 

#

Ţ¯ Z ͰĬ

Y ; Ŀ V

 ''      #

$ʤЧ

JP 4  | y 8 PiP |   i
Pć     *t iP2

nmŗ m

   N i | it Pć
23 i   7BJP    t
¥Ǌa@J3$   "" ś Õ0ɟ%6
Ǌa    @J

   it Pć
     3  0 F   t
¥Iȝ ¯Û3$  " "  ] ; õ
ęL  ¯ȝ3$I
 

    





Ţ¯ ä  ; v %œ/ V
 ''     #

PćPFǉ 1 4   & |   i
;  ii ¿ *t iP2
¥

3$

  Z -c-

µ         #

@ èǂǋУ
   t d 9 .    D     i 
it * . ~ 4    i . D



\ķC

V- 

¥1ź e ¯ n Ð  Ú  - f % 

(ۛՅ

1  &     

 iP  2  * 7 2  | @
t 0  * "     i ~ D
ƅ «3$   ĥ  B -) 5/ɖ
{ «    '   #

pzr ¸ 7h@J  U   Ş җŞҗ k
Õ  ¢ % p¶zr

P  )   i  i)  4 | @
  t   Bʇ ð   i ~ D
! y Ɉ '    B

* 1 i |   0 4ć"    i
  4 1    i ~ D

50

% 2!  &    &  ī    #

  P2   * "  t |   i
& i4  F   i . D
13Ř W  M e  sc-
/ 1      ' #

y 4 Bi 0 P F    i
&i ‫   ڴ‬i . D

ÿ% * L 
 şÇ á

P   "| 1   % 
  i | ɯ ~ 8    t 0 
 ƋōϠ  ¯ .Ą Qt %% .
!        

 0 i ~ ~ 8  |  1  % 1
&   P7D  öt 0 



13$  W   " " k-/5

Y  1  

    #

P2  i | )    Bć 1   i
0 3    F Ē   i ~ D
=3$ W   "" ƃ Q  f /
Y  ª  O=  &''   




さきつかは－きのふけふかの－はるのはな
あさとあくは－うくひすのこえ
【永正年間百餘1巻】/ 何人 [ cosasとばこ]
/ 永正元 (1505) 年 12 月 10 日
たちより－あらかをりそーはるのはな
なかぬほとまつ－うくひすのこえ
【天正四年万可70巻】/ 何島 [かせにすらき]/ 天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

→鴨が鳴く

ひときさへ－あはれをしたふ－はるのはな
そのふをちかみ－うくひすのなく
【天正年間百餘57巻】/ x x [わけゆか
ば]/ 天正 4(1576) 年 8 月 19 日
もるひととも－なきやおいきの－はるのはな
うくひすのなく－こゑのしつけさ
【天正年間百餘57巻】/ 何路 [かすむよ
の]/ 天正 6(1578) 年 2 月 18 日

→谷の鴨

わかはにも－おもかけのこせーはるのはな
かへりはつつかかる－たのにうくひす
【天文年間百餘38巻】/ 何船 [かへおと
も]/ 天文 23(1554) 年 6 月 1 日
とまふきの－あるしもまつや－はるのはな
きこそそむれ－たのにうくひす
【天文年間百餘22巻】/ □□ [くるかり
も]/ 宽文 12(1672) 年 8 月 23 日

→鴨の声

みよしののはな

みよしののはな

→鴨の声

みよしのや－はなよりおくに－ひきこもり
かすみにもる－うくひすのこえ
【天文年間百餘57巻】/ □□ [ともなし
に]/ 天文 18(1590) 年 11 月 21 日
みよしのや－はなをよすかの－すみところ
ともとこそのれ－うくひすのこえ
【慶長年間百餘27巻】/ □□ [みつのう
へに]/ 豪自/ 慶長 17(1612) 年 1 月 3 日

→鴨を鳴かす空

たえたえに－をちのかはきり－あけはなれ
ありふるりの－なきかはさそら
【雄名院追善千句】/ 何所 [かねのこえ]
/ 永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

つきました－したふかれの－あけはなれ
たものかりの－なきかはさそら
【天正年間百餘57巻】/ □□ [ありそて
に]/ 天正 18(1590) 年 1 月 7 日

→重なる

さとはなれなる－まつかけのみち
おちはなほ－くつるかうへに－かさなりて
はな

憂い鶴の羽振き

→鶴

かそぶるもうき—しきのはねかき
あきならて—かよぶこころの—はかなや

【永楽四年間百錦文巻 12 巻】/ / [あきなつな
みし] / 文禄 2(1593) 年 1 月 8 日

はま

はまのみう

→帰る鷹舟

なみのおと—かはるやあきの—はまつたひ
きりにみたれて—かへるつりふね

【毛利九千】/ / 何人 [せせにすむ] / 文禄
3(1594) 年 5 月 12 日〜16 日

はまったひ—ゆふしはときに—なりけらし
かせにつつつかへるつりふね

【元和四年間百錦文巻 24 巻】/ / [くにににの
の] / 元和 6(1620) 年 9 月 15 日

はやい

朝まだき

→道の還けさ

きえぬる—しもうすくもる—あさまたき
おきいててゆく—みちのはるけさ

【阿越千句】/ / 行河 [はるもきて] / 文明
2(1470) 年正月 10〜12 日

いちのもの—いそくやあきの—あさまたき
きりのへたての—みちのはるけさ

【元和四年間百錦文巻 24 巻】/ / [とじとし
に] / 元和 6(1620) 年 12 月 5 日

はら

おやまだのはち

→秋更け

やへにきりふる—をやまだのはら
ひとはた—かりにたにこぬ—あきふけて

【伊勢千句】/ / 伊舟 [おきでむね] / 大永
2(1522) 年 8 月 4 日〜8 日

かりのゆくへの—をやまだのはら
みねたかみ—ふきこすかせの—あきふけて

【永正四年間百錦文巻 34 巻】/ / 何船 [うちなひ
き] / 永正元 (1504) 年 7 月

小山田の原

→秋更け
へらう

一使い访おうか

ゆくゆくも一かすみをしのの一くさのはら
たれにとはまし一はるのわかれち
【紫野千句】/ 何木 [はにしする] / 延文
2(1357)年以後・応安 3 年 6 月以前

みちぞき一はなのゆきまの一くさのはら
たれにとはまし一やまとことのは
【文安年間百題 9 番】/ 朝何 [さかきはに]
文安 4(1447) 年 10 月 18 日

小萩原

一後の旅人

こはきはら一をりたちかほに一さきやられて
すきかてにゆく一のちのたひひと
【池田千句】/ 何何 [こころあひの] / 永正 7(1510) 年春以前 < 永正 5 年春>

たちへり一みるやいるこそーこはきはら
たまかはすくるーのちのたひひと
【論書 4 種】/ 宗長 /

黄砂原

一言の葉の道

いてふねの一あとしつかなるーまさこはら
ひとりたねなきーことのはのみち
【文明十四年万句 5 2 番】/ 何船 [あきの
い] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日〜9 月
14 日

しらさきの一はをならへるーまさこはら
なにをおもふもーことのはのみち
【文明十四年万句 5 2 番】/ 何何 [はなあ
はせ] / 文明 14(1482) 年 7 月 4 日〜9 月
14 日

忘れ訪う草原

一古薰

すすむなよーとはむちきるーくさのはら
たよりはかりにーかふるふるさと
【太神宮法楽千句】/ 何何 [のはなに]
長享 2(1488) 年 7 月

わすれすーもーはきあいとふーくさのはら
なかれしがそーかふるふるさと
【永正十花千句】/ 二二反音 [こまなへて]
永正 13(1516) 年 3 月 11 日〜14 日

忘れるなよう

一別れである

はなはまたーなれしをわれもーわするなよう
はるこころなきーわれれならすや
【紫野千句】/ 何何 [いつみみ] / 延文
2(1357) 年以後・応安 3 年 6 月以前

なくさむるーひとにうきよーをわするなよ
そふともしびのーわれれならすや
【永正十花千句】/ 何何 [ゆくつきも] /
永正 13(1516) 年 3 月 11 日〜14 日

一砕は雲層

わするなよーたひねにかすむーよはのつき
ほはくもゐのーはつほとときす
【巻興田千句】/ 何何 [あけのを] / 文
明 14(1482) 年 10 月前後

とぼくなるーやとのわれれもーわするなよ
ほはくもゐの一ふるさとのやま
【巻興庭集 / 広島大学本】/ 何何 / 文明
5(1356) 年冬〜翌年の春

はらう

払う

一月のさやすき

かりころもーすそののつゆやーはらふらむ
かせわたりつつーつきのさやすき
【寛文年間百題 2 2 番】/ 何何 [みるくも
に] / 寛文 10(1670) 年 10 月 14 日

ねしとりやーきえやらぬゆきをーはらふらむ
ゆふへをへすーつきのさやすき
【天正四年万句 7 0 番】/ 何何 [さみたれ
に] / 天正 4(1576) 年 5 月 6 日〜7 月 19 日
はる
かすみ色のとおりやま
霞む春の遠山
—有明の月
かすみかくれの—はるのとはやま
ありあけの—ときもわれかれの—かりなきて
【春制記叙綴幸 50巻】／山何［まつそひ
て］／応永 26(1419) 年 2 月 6 日
かすみにのごる—はるのとはやま
ありあけの—つきのひかりの—ささえかり
【天正四年書相 70巻】／先島［せなし
るき］／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7月
19 日

咲く春の花
—桜と桜の枝
ちばれさく—立ちりもはかな—はるのはな
さくらにかはす—やとのうめか
【大永四年代纂名著 100巻】／□□［けふか
くや］／月刊千本録／大永 4(1524) 年
月 23 日
さくことも—ちらむためかは—はるのはな
さくらほのめく—やとのうめか
【霧廻第三／続野書類続本】／春／文亀元
(1501) 年 3 月 18 日

騒く春の鳥の声
—静か
しはしなくらの—はるのとりのね
しっかりある—あしたのほほ—おそきひに
【元亀三年台千句】／何故［ふるさと］／
元亀 2(1571) 年 3 月 5 日
たけをねくらの—はるのとりのね
しっかりある—かきほやのへに—つつくらむ
【和松文集本千句】／□□［おちはして］

花の春
—桜咲く頃
かくてこそ—ちよもといはめ—はなるのはる
やりはかなや—さくらさくくろ

【初頃千句］／何故［しることき］／孝徳
元・2(1452) 年、4 月
ちりすきは—よしやしのの—はなるのはる
たよのなかは—さくらさくくろ
【嘉吉年間百頌 1 巻】／何木［たけのはに］
／嘉吉 3(1443) 年 10 月 23 日

—桜咲く春
ふたもとの—すきしばいくか—はなるのはる
なつともみえぬ—つしやまふ
【初頃千句］／唐河［ふたもとの］／孝徳
元・2(1452) 年、4 月
□□をさへ—わけくれたみのの—はなるのはる
つゆながらをる—つしやまふ
【天文廿四年梅千句】／何人［うめいくつ］
／天文 24(1555) 年正月 7 日

花の春風
—山桜
とはむといひし—はなるのはるかせ
おくはまた—おそきもあれや—やまさくら
【弘治年間百頌 8 巻】／何船［たくそてに］
／弘治 2(1557) 年 12 月 2 日
すもをはらふは—はなるのはるかせ
やまさくら—よののあめに—さきいて
【愚句老葉】／春／永正 17 年
にはのくちきの—はなるのはるかせ
やまさくら—かけひのみに—なかれてきて
【霧廻第四／早稲田大学本】／春／永正 6、7
年

はなのはごこ
花の春風
—思い出
うちのおきて—たまるるはなのはるに
わかやとはぬ—うくひすのこゑ
【聖唐千句］／初何［きのふより］／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12日
ほどもなく—つるふはなの—はることに
みをあくからす—うくひすのこゑ
【別著纂／北野天満宮本】／永正十四年／
はる

春風の色

→移らう

みははしはしのーはるあきのいろ
やまふきの一つゆはもみちにうつろひて
【美濃千句】／何馬 [まちやるし] ／文明
4(1473) 年 12 月 16 日〜21 日

けにはかなやーはるあきのいろ
ひとはたーときなるかたにうつろひて
【宗祇関係 2 種】／心敬専職点宗祇付句

春風が吹く

→霞む

あしたのはらにーはるかせそふく
さしのはるーひもほかにやーかすむらむ
【筑紫千句】／朝向 [しもふけ] ／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日〜11 日

かれるやしもーはるかせそふく
やまはけさーいくしもよにかーかすむらむ
【長享年間百節 6 巻】／何人 [ゆきなら]
／長享 2(1488) 年 1 月 22 日

春が来る

→鶴が鳴く

やまとのーみちのなきたにーはるのきて
けさはつねのーうひすそなく
【紫野千句】／唐何 [かせやこれ] ／延文
2(1357) 年以後・応安 3 年 6 月以前

のちのちにーはなのさくへきーはるのきて
やとのあしたにーうひすそなく
【文明十四年方句 52 巻】／何寺 [きりう
すみ] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日〜9 月
14 日

ふるとしのーゆきのはなたにーはるはきて
おくるあしたにーうひすそなく
【享徳二年方句】／何松 [よもにちる] ／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日〜13 日

たれかはとーおもふさともーはるはきて
わかみのともとーうひすそなく
【延徳年間百節 6 巻】／山何 [ふきもこ
ぬ] ／延徳 2(1490) 年 9 月 20 日

→うち踊む

このあけほののーはるはきにけり
まきのとーいいてぬるにはーうちかすみ
【成立不詳・心敬以前 14 卷】／何詠 [ま
たしかし] ／成立時不詳

かけひのすえにーはるはきにけり
くれたけのーひとよあくれはーうちかすみ
【國慶第一 / 統書類類本】／春 / 長享 2
年

→海咲く

このさとまでもーはるはきにけり
ひとしきえーはるのまかきもーうめさきて
【國慶第一 / 統書類類本】／春 / 長享 2
年

こころうれしきーはるはきにけり
あひにあふーにひまくらにーうめさきて
【論書 4 種】／宗長 /
はなにわれ—ここはつくるひとはるすきて
のとかくらす—ひそそなかかれる

【宗座関係8種】／老耳／天理本／

春立つ

→光長閑

ひさかたの—くももののはの—はるたちて
すたれをまけは—ひかりのとけし

【文禄年間百錦12卷】／□□［わかなつ
みし］／文禄2(1593)年1月8日

うくひすの—ここあなさとの—はるたちて
そもとにうつる—ひかりのとけし

【慶長年間百錦27巻】／□□［つまやな
ほ］／嘉歴／慶長10(1605)年1月3日

はるのあるばの

春の晴

→横

おくつゆふかき—はるのあけぼの
うくひすの—はさにくのこる—ゆきおちて

【永禄元年花千句】／□□［みるままに］
／永禄元(1558)年3月23日～25日

いまいくかは—はるのあけぼの
うくひすの—かへるふるすや—たとるらむ

【至徳以前百雑7巻】／xx［はな乗りて］
／存疑／至徳4(1837)年以前

こころづくしの—はるのあけぼの
うくひすの—ここあにまくらを—せはたてて

【天正四年万句70卷】／言物［きくい
かに］／天正4(1576)年5月6日～7月
19日

→霞む夜

こころにとまる—はるのあけぼの
かすむよの—つををなこりの—かりなきて

【新撰無題短歌／実隆本】／春上／明応
4(1495)年9月26日

はなにほひくる—はるのあけぼの
かすむよの—ともしあをすき—まとにねて

【宗進関係2種】／心敬続集点宗抵付句／

はるのひ

→霞む

よいものこさぬ—はるのあけぼの
つきそなき—ふかうちにや—かすむらむ

【成立不詳・宗進以前15卷】／□□［ま
tまなき］／成立時不詳

ふるぎやこの—はるのあけぼの
ひさかたの—つきのいくよか—かすむらむ

【下草／練谷大学本】／春／延徳2(1490)
年3年春頃

はるのひのり

春の入日

→絶え絶え

はるのひのひの—かけすかなり
たえたえに—かねのひしの—きこそきて

【称名院道貫千句】／一字露顕［くもはれ
て］／永禄6(1563)年12月14日～18日

はるのひのひの—まつにかれる
かへりみる—あとはかすみの—たえたえに

【永禄年間百錦28巻】／何船［ひきう
る］／嘉歴／永禄5(1562)年1月3日

はるのうみたち

春の海面

→長閑

かりもかへるな—はるのうみたち
のとかる—しほひのをちに—やまをみて

【文禄年間百錦34卷】／何人［よいはつ
き］／文明18(1486)年2月6日

まつみえわたる—はるのうみたち
のとかる—なはにうかはぬ—ふねもなし

【明応年間百錦22巻】／何木［やまはゆ
き］／明応7(1498)年11月4日

はるのうみたち

春の帰るさ

→天つ雁

ほなくおもふ—はるのにたるさ
あまつかり—こそのなこりの—せをなきて

【成立不詳・心敬以前14卷】／何船［ち
りしえぬ］／成立時不詳

おもへはしらぬ—はるのにたるさ
ゆきさゆる—こ申し込みかふ—あまつかり
春の雁

→此方彼方

ともまちれぬ＜はるの知かね
沖りしあ＜こなたかなたに＜なりはてて

【文明律問百巻】3 4巻／※※【おきふけぬ】／文明 12(1480) 年 9 月 28 日

またたちへる＜はるのにかね
たちつは＜こなたかなたに＜かよひつつ

【英武坡集／広島大学】／恋下／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

春の伴い

→夕霞

おくれつつうき＜はるのもなひ
ことのはに＜あらぞぶさな＜ゆぶかすみ

【永禄間百巻．28巻】／信行．【かきつはた】／永禄 10(1567) 年 4 月 28 日

かたみにうとき＜はるのもなひ
てふりの＜やどりへつる＜ゆぶかすみ

【文禄間百巻．2巻】／※※．【うめかえや】／文禄 4(1595) 年 7 月 21 日

春の花

→おおぬの春

いくもとそやとにたえぬね＜はるのはな
かともこたかし＜あをやきのかけ

【永禄千句】／何舟．【いくもとそ】／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

わかきにも＜いろかのふかき＜はるのはな
かせふかなひく＜あをやきのかけ

【永禄千句】／何舟．【とりのにに】／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

かせふかぬ＜よになまたれそ＜はるのはな
めくみのつゆの＜あをやきのかけ

【文明律問百巻．3 4巻】／何舟．【かせふかぬ】／文明
9(1477) 年 1 月 22 日

→鶯の声

またるや＜ねこしてうゑし＜はるのはな
のやまをこことに＜うひすのこゑ

【永禄石山千句】／初行．【しからのしの】／永禄 7(1564) 年 5 月 12 日

たれをよの＜まつひとにせむ＜はるのはな
さくらになれよ＜うひすのこゑ

【成立不詳．宗戸以前．5巻】／※※【たれをよの】／成立不明
もるかけは－たをらむもは－はるのはな
そのふにさらぬうくひすのこゑ
【永禄年間本編 2 8 册】／山野「ゆふかほ
に」／永禄 2(1559) 年 5 月 20 日

いにしへの－あとははらはるのはな
そのふはたれぬうくひすのこゑ
【文禄年間本編 1 2 册】／□□「かはにほ
も」／永禄 2(1593) 年 5 月 27 日

かけはの－おくしるへぼよ－はるのはな
とほくりのうくひすのこゑ
【慶長年間本編 2 7 册】／□□「あらしに
も」／裏日／慶長 5(1600) 年 1 月 3 日

さきつは－きのふるかの－はるのはな
あさとあくれ－うくひすのこゑ
【文禄年間本編 1 册】／人「こゑとほく」
／永禄元 (1505) 年 12 月 10 日

たちよりて－あらくなりそ－はるのはな
なかぬほとまつ－うくひすのこゑ
【天正四千年編 7 冊】／何鳥「かせにし
るき」／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月

春の光

＞霞む

はるのひかりも－なきたにのにいほ
みねたかみ－ありあげまてや－かすむらむ
【貞盛千句】／何木「かすみの」／永禄 4(1561) 年 5 月 27 日～29 日

はるのひかりも－みえぬおくやむ
うくひすの－さへつるのにや－かすむとらむ
【逸徳年間本編 4 册】／何船「をさまれる」
／逸徳 2(1453) 年 1 月 25 日

春の古里

＞長さき

とはれものか－はるのふるさと
あめのうち－ゆふへもわかす－なかきひに
【文明年間本編 3 4 册】／何路「かせやく
も」／文明 4(1472) 年 10 月 26 日

さひしくなりぬ－はるのふるさと
なかきひに－なととすてて－かへらるむ
／延德年間本編 1 6 册／人「まつみよ
と」／延德 4(1492) 年 2 月 8 日

春の物の音

＞散走りの彼の月

ひくてもゆかし－はるのもののね
あけのころ－あられはしりの一つきのに
【正吉千句】／何田「このはるち」／大永
元 (1521) 年 11 月 1 日～14 日

しらへばならぬ－はるのもののね
しつけさや－あられはしりの－よはのつき
【元和年間本編 2 4 册】／□□「そらにみ
つ」／元和 8(1622) 年 10 月 19 日

春のやまざと

＞東

わかはにも－おもかけのこせ－はるのはな
かへりはつるか－たにのうくひす
【天文年間本編 3 8 册】／何船「かはおと
も」／天文 23(1554) 年 6 月 1 日

とまふきの－あるもまつや－はるのはな
きことぞふれ－たにのうくひす

春の山里
春の山寺
→如月の別れを訪う

しきみにとしはるのやまただ
きさらぎのわかれてのはをとひすてて
【時崎文庫】／仏家【さきでかし】（元亀 4）／天正元年（1573）正月9日～11日

かねさたかなるのはやまただ
きさらぎのわかれてたれもとひすてて
【寛永年間百錦15巻】／□□【とよとしの】／裏白／寛永20（1643）年1月3日

春の夕戯れ
→月出る

まおこちときはるのゆふくれ
とけわたるみきはもこぼる一つきいてて
【天正年間百錦5巻】／仏船［もしほくさ］／天正7（1579）年1月13日

こけふむやまのはるのゆふくれ
しづかなるはなおおくより一つきいてて
【合点之記／神宮文庫本】／春／天文9（1541）年12月25日

春の夜の月
→声々

いてたにやらすはるのよのつき
あめはれてかはつうるさきここゑに
【秋津川千句】／今出雲隠［わかはより］／天文15（1546）年8月25日

こここうかするはるのよのつき
うちわひてなきゆくかのこゑに
【明応年間百錦2巻】／仏船［はなそはる］／明応2（1493）年3月25日

はるのよのゆふくれ
→草枕

みえこしやたたはるのよのゆふ
つきもつつぬのとかになふむくさまくら
【伊予千句】／仏山［なつきさ］／天文6（1537）年5月22日

かえるともなきはるのよのゆふ
おもはすよろすみれつむののくさまくら
【明応関係2種／法縁専門達／赤木文庫本】／応永14（1647）年5月10日

春は暮
→横参

かすみはゆふへはるはあけほの
よこくもよるのうすゆきひきままさら
【皇學館文庫百句】／□□【ちはははな】／永禄6（1563）年11月18日以前

いつはありともはるはあけほの
処そかとゆきをもたとるよてもくに
【永正年間百錦34巻】／仏家【みやまきに】／永正14（1517）年3月22日

春より後
→長き日

はるよりののうくひすのこゑ
おくらすもつれつれはなほはなかきひに
【時崎千句】／花之何［うめかは］／元亀4／天正元年（1573）正月9日～11日

はるよりののとももこそあ
たかさこやむかしいいまのはななかきひに
【天正四年万句74巻】／薄何［はつかりの］／天正4（1576）年5月6日～7月19日

古き都の春
→うら騒

ふるきみやこのはるはかなさ
しばかまやけふりしこりうちかすみ
【明応年間百錦2巻】／仏山［つつきもとに］／明応5（1496）年8月15日

ふるきみやこのはなのもと
つゆかかるみちのはくさうちかすみ
【大永三年月並千三百錦】／□□【はなるにつき】／月並千三百錦／大永3（1523）年3月23日

春の夜の夢
はるか

里の遥かさ
→小田の原

やなきくれの－さとのはるけさ
すゑはなほ－かへしのこせる－をたのはら
【天正元年百堅57巻】／口口【うぐひすも】／天正14(1586)年1月4日

かすみわけゆく－さとのはるけさ
すきたし－かへはくくる－をたのはら
【慶長年間百堅27巻】／口口【はるもこそ】／裏白／慶長13(1608)年1月3日

はるばる

遥々
→海人の釣舟

はるはると－わかすむかたは－うちかすみ
おきにかられる－あまのつりふね
【宮島千句】／何木【ほかにやは】／天文20(1551)年5月9日11日

はるはると－あしへをさして－みつしに
みるみるちかき－あまのつりふね
【文徳三年正月百壱百翻句】／口口【うめかかや】／月並天壱百翻／大永3(1523)年2月23日

はれる

霧晴れ昇る
→朝日影

きのれはれのほる－なかのかけはし
かすかる－のわきせよの－あさひかけ
【木管句】／朝何【きりもはや】／永正元(1504)年10月25日～27日

きのれはれのほる－まつのことたかさ
あさひかけ－いのつくみねに－さしこひて
【文徳年間百壱34巻】／口口【さったつゆは】／文徳12(1480)年7月4日

はれるひるさめ

→晴れ白い

かりのこそ－すきをこめし－きりはれて
ひとむしろし－しをふらむみち
【弘治三年春雪千句】／初何【けさみねは】／弘治3(1557)年正月7日～9日

ゆくゆくも－はまへつたひの一きりはれて
ひとむしろし－つきのかはみつ
【天正年間百堅57巻】／何人【ときはいま】／天正10(1582)年5月24日

はれるひるさめ

→一時の時島

ふくらまくらに－はるるむらさめ
ひとりくは－ききこそわかね－ほとときす
【表千句】／初何【はなみよと】／文明8(1476)年3月6日＜8日＞

そそきもあへす－はるるむらさめ
ひとりくは－それからねか－ほとときす
【元和年間百壱24巻】／口口【とつとともに】／裏白／元和2(1616)年1月3日

水晴れる

→江のそば舟

かけおそき－ゆふひのいりえ－みつはれて
なみもよりくる－あけのそほふね
【岳雪軒文庫本千句】／口口【きてへる】／永禄6(1563)年11月18日以前

はるはると－やまもといつる－みつはれて
たひねするよの－あけのそほふね
【壁草／書陵部本】／旅／永正9年

村雨の晴れゆく後は嵐

→日に渡る舟の寒さ

むらさめの－はれゆくあとは－ふくあらし
ゆふひにわたる－ふねのさむけさ
【大永年間百壱14巻】／何人【ちあきをも】／大永5(1525)年9月21日
雪がふり晴れる
→寒ゆる夕風
　まさこに-まきるるゆきの-ふりはれて
　ふきあげののに-さゆるるふかせ
　【文安頃万句477】／何路【やへひとへ】
　
　ふりはれて-つしにもなれる-ゆきのかな
　くさきのうへに-さゆるるふかせ
　【長禄四年万句171卷】／何舟【ふりはれて】／長禄3(1459)年12月2日～5日

ぼ

青葉の花の後
→揺るる藤
　まつなれて-あをはのゆきや-はなのあと
　こときのかたに-かかるふちなみ
　【看聞日記紙背500卷】／山河【かせやくも】／応永26(1419)年10月25日

紅葉葉
→波の卒
　もみちはは-いろこきよりも-をりかさし
　よさむわせて-くめるさかつき
　【毛利千句】／初何【よもとに】／文禄3(1594)年5月12日～6月16日

田の本つ葉
→御溝水
　あきにいろつく-かきのもとつは
　おもふこと-かきやかなさむ-みかはみつ
　【看聞日記紙背500卷】／何目【いろつきぬ】／応永28(1420)年5月29日

秋の精
→御野
　くさはのつゆも-おなしなみたか
　あたしのやーおくれさきたちーいろつきて
　【飯盛千句】／千何【こねあきや】／永禄4(1561)年5月27日～29日

雫れる竹の葉の露
→片敷の枕
　こぼれてきた-ふーたけのはのつゆ
　かたきの-まくらのうへの-あきのかせ
　【弘治三年春雪千句】／何舟【きえてたに】
　／弘治3(1557)年正月7日～9日

しもじょう

草葉の露
→飛の葉
　おなしなどの-あしひたくかけ
　うちみたれーくるかたよりーとふはたる
　【天正干元百詩577】／二四［しろたへの］／天正16(1588)年1月4日

ひ

芦花飄く影
→飛ぶ萤
　おなしなどの-あしひたくかけ
　うちみたれーくるかたよりーとふはたる
　【天正干元百詩577】／山河【あをやきの】／天正3(1575)年2月2日
ひかり
春の光
→霞む
はるのひかりもーなたにのいほ
みねたかみーありあけまでやーかすむらむ
【板倉千句】／何木／ふすのの／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日
はるのひかりもーみえぬおくやま
うくひすのーさへつるのへやーかすむらむ
【享德年間百詠 4 巻】／何船／をされる
／享徳 2(1453) 年 1 月 25 日
ひかりのさびてーふといしや
いにしへのーいかるなたまそーとふぼたる
【文安雪千句】／花之何／ゆきふれは
／文安 2(1445) 年 10 月 18 日
ひかりのかけをーをしみとめはや
くれわたるーまほよりをちにーとふぼたる
【成立不詳・心歌以前 14 巻】／何人／この
のもとの／成立時不詳
光長関
→輝ける
にのはあさけのーひかりのとけし
いけみつやーどうししこほりのーとけぬらむ
【寛永年間百詠 15 巻】／□□／よのはる
を／裏白／寛永 8(1631) 年 1 月 3 日
かきほへたてぬーひかりのとけし
たけのはの ゆきやのこらすーとけぬらむ
【寛永年間百詠 15 巻】／□□／しつけさ
の／裏白／寛永 10(1633) 年 1 月 3 日
ひぐらし
ひぐらしのこえ
→山の陰
うちおとるけるーひぐらしのこえ
あきにさへーなりぬとおくるーやまのかけ
【伊庭千句】／何何／うくひすや／大永
4(1524) 年 3 月 17 日～21 日
つゆにしをるーひぐらしのこえ
むらさめやーすくるまもなきーやまのかけ
【天正四年万句 7 卷】／□何／□□□□
□／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日
→夕月後
はやしらつゆにーひぐらしのこえ
ゆふつくよくーあきかせふかぬーやまもなし
【永原千句】／何色／うきはれぬ／明応
9(1500) 年 7 月 17 日
やものさひしーひぐらしのこえ
やまのはにーまたかけすきーゆふつくよ
【東山千句】／何色／しふのねは／永正
15(1518) 年 8 月 10 日～12 日
ひだり
ひだりみき
左右
→心斎の歌
ふくふえにーあはするまひのーひだりみき
ここあらそふーうたのくちぐち
【初順千句】／何衣／しけるとも／享徳
元・2(1452) 年、4 月
ゆるさはーおなしかるまのーひだりみき
ここあらそふーうたのかたちまえ
【文明十四年万句 5 卷】／乗何／あけて
みぬ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日
ひと

出る旅人
→彼を
まとろみあへなきつつたひひと
かりまくらからねやまちにさそふらむ
【寛永年間百編 20 巻】／唐所 [せみのはの]／寛正 4(1463) 年 6 月 23 日

やすらかのへをいつるたひひと
かりまくらからはつきのをつるよに
【老集／吉川本】／旅／文明 13(1481) 年

出の舟人
→明け渡る
みなとのはるにいつるななひと
あけわたるうらのかすみにあみこえて
【宗開関係 9 種】／百番連歌／赤木文庫本／享徳 2(1437) 年 8 月 13 日以降・寛永 6 年 3 月以前

こころやとるるいつるななひと
あけわたるいりえのゆきのとまやかた
【専順関係 2 種】／冬／応仁元(1467) 年 5 月 10 日

遠方人の袖
→送る
をかたひとのそそてほのかなり
よこくもやつわかれしゆめをおくるらむ
【大永四年月並千二百編】／□□ [わけくらし]／月並千二百編／大永 4(1524) 年 7 月 23 日

をかたひとのそそてむらさめ
ほとときすなれもたひとやおくるらむ
【都智麿／北野天満宮本】／永正十三年

思う人の言の葉
→我のみ一人袖を濡らす
おもふてふっとひとのことはなたものみや
われのみひとりそそてぬらしつ

帰る里人
→方
をのへをとらめかへるさとひと
かねのこあいつじくこえぬかたならむ
【出陣千句】／初何 [けふたつじ]／永正元(1504) 年 10 月 25 日～27 日

ふねひきすぎてかへるさとひと
くれまつるすふまやふしまのかたならむ
【元和年間百編 24 巻】／□□ [あそきぬ]／元和 8(1622) 年 4 月 13 日

変わる世の中
→夏衣
ひとのこころのかはるよのなか
なつころもはるのはなぞめぬきすてて
【専順宗検百句付／専順宗検百句付／応仁 2(1468) 年 5 月下旬

さめてむちにかはるよのなか
なつころもついたうたるよはあけて
【新続大筑凝集】／夏／文治 3(1660) 年正月

須磨人
→若木の桜
すみひとのよかたりになれるはな始建
わかきのさくらはそひさきし
【看閲記記紙鉄五巻】／山所 [まつかねに]／応永 32(1425) 年 3 月 25 日

すみひとのうえけるはなになさきて
わかきのさくらさきりいつころ
【看閲記記紙鉄五巻】／何路 [ひととせに]／応永 32(1426) 年 12 月 11 日

仕える

【能楽集／広島大学本】／恋上／文和
5(1356) 年冬・翌年の春
ひと

人が恨めしい

→詫

ふりはてこぬ-ひとはうらめし
いったかの-たよりにわれを-とひつらむ

【前田伊地知本】/ 志/ 文明6(1474)年 2月以前

とばさかりぬる-ひとはうらめし
おほかかな-たここころにて-とひつらむ

【下草/ 鳥谷文庫本】/ 恩/ 堤徳2(1490)年～3年春頃

人が待たれる

→懸

かへさいそきし-ひととそたるる
こひしばは-うらみにこりぬ-ここころにて

【成立不詳・心敬以前14巻】/ 阿部 [まつかせは] / 成立時不詳

ちきりおかぬと-ひととそたるる
こひしばは-みのならはしの-ゆふへにて

【新撰文苑叢書/ 実隆本】/ 恩/ 明応4(1495)年 9月26日

人親き

→訪れて

みにしむかせそ-ひとのめなる
いまこことに-ゆふくれことに-おとつれて

【巻律千句】/ 時初 [ゆきははほ] / 文明7(1475)年 11月26日（〜28日）

はかなのゆめや-ひとのめなる
わすらるる-ちきりになせは-おとつれて

【明応年間別巻第22巻】/ 阿部 [うつろはて] / 明応3(1494)年 10月30日

→慣れ慣れ

ぞよきてをきの-ひととたのめなる
さをしかの-きりのまかきに-なれなれて

【平松文庫本千句】/ 阿部 [ふゆはつき] /
ひととたのめなる－くれもあやなし
ささかにの－かねてるきも－なれなさて
【岩倉／北野天満宮本】／永正十三年／
ひととおとこと
人の訪れ
→探求
いまはおもは正しいひとのおとつれ
さくららる－やまはかなさる－おくにして
【東山千句】／何色／[しかのかね／永正
15(1518)年 8月 10日～12日
きのつばあり－ひととのおとつれ
さくららる－はるのやまずと－くれやられて
【新撰風花叢集／美隆本】／春下／明応
4(1495)年 9月 26日
ひととおとこと
人の面影
→別れ路
ゆめかうつつか－ひととのおもかけ
しかしたに－とりつとめやのが－かわれちに
【天文廿四年梅千句】／何垣／[あさきのに]
／永正 24(1555)年 正月 7日
これにくさがう－ひととのおもかけ
けふやかて－こひしかるへき－かわれちに
【永永年間百巻冊】／[x x はせの]
／応永 24(1417)年 3月 16日
→秋更げる
つつきにみしよの－ひととのおもかけ
のこりなく－よもきかす息に－あきふけて
【永正十花千句】／何路／[ゆくつきも／]／
永正 13(1516)年 3月 11日～14日
ぬきおつきの－ひととのおもかけ
つつきめる－よいこのうらかせ－あきふけて
【盤草／伊地知本】／秋／文明 6(1474)年
2月以前
つつきにみしよの－ひととのおもかけ
のこりなく－あさかす息の－あきふけて
【岩倉／北野天満宮本】／永正十三年／
→感じる
まつとはるや－ひととのおもかけ
うきをたた－ここところはし－なくさて
【天文年間百巻 3巻】／朝何／[またたき
く／天文 9(1540)年 4月 25日
われれむとうすれば－ひととのおもかけ
あはぬまも－ありつるみそと－なくさて
【老集／吉川本】／恋下／文明 13(1481)年
夏頃
→遠
われれもやらぬ－ひととのおもかけ
うらみをは－いはぬにもしる－ななみにて
【看網日記紙写 50巻】／唐何／[としきり
て／応永 26(1419)年 11月 23日
あさちかはらの－ひととのおもかけ
つゆはたた－ゆふへのおとす－ななみにて
【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明
8(1476)年 5月頃
ひととおとこと
人の儚言
→恵り
かはるかいか－ひととのかねこと
ちきりても－ここところのくの－ゆかしきに
【看網日記紙写 50巻】／山何／[なつかけ
よ／応永 26(1419)年 3月 29日
いつはりなれや－ひととのかねこと
ちきりても－ふたりはなす－のこるみに
【心豆関係 10種】／心豆集／静岡堂文庫
本／文正元(1466)年 4月
ひととここから
人の心
→懐落ちる
たひのやと－かすはまれなる－ひとところ
なさけのなきに－なみたおちけり
【文明十四年万方 52巻】／手町／[はつふ
たに／文明 14(1482)年 7月 4日～9月
14日
たまさかに－ちりおきつる－ひとところ
かたみのふみに－なみたおちけり
人間の心が変わる

→海山

ひとのこころの一かはるよのなか
うみやまる一つみてあかすーすまのうち
【文明十四年方録 5 卷】／山河（さきの
はな）／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9月
14 日

→顕れる

ひとのこころの一かはるよのなか
はかなくもーすきにことのーさきはれて
【天正年間方録 5 卷】／河合（けふかへ
よ）／天正 9(1581) 年 4 月 1 日

→春

ひとのこころの一かはるよのなか
はかなくもーとところをはーともにせて
【兼縫宗祇百句付】／兼縫宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

人の心が変わる世の中

→秋の暮れ

ひとのこころの一かはるよのなか
やまさらをーうかれていめやーあきのくれ
【兼縫宗祇百句付】／兼縫宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→夏

ひとのこころの一かはるよのなか
いまをなほとーへやしのもーあきのくれ
【兼縫宗祇百句付】／兼縫宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→夏

ひとのこころの一かはるよのなか
うつせみーはやまおろしにーあきはきて
【兼縫宗祇百句付】／兼縫宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→夏

ひとのこころの一かはるよのなか
しるしらぬーひとつなみたにーあきはきて
【兼縫宗祇百句付】／兼縫宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→夏

ひとのこころの一かはるよのなか
よもきふーかわれあるしさーあはれにて
【兼縫宗祇百句付】／兼縫宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→夏

ひとのこころの一かはるよのなか
なきあとはーにかかりしたにーあはれにて
【兼縫宗祇百句付】／兼縫宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→秋

ひとのこころの一かはるよのなか
まちをしむーはなにほとなきーいろみえて
【兼縫宗祇百句付】／兼縫宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→秋

ひとのこころの一かはるよのなか
たけはそのーこをおもふともーいろみえて
【兼縫宗祇百句付】／兼縫宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→秋

ひとのこころの一かはるよのなか
うきみさーときにやあふとーはるたで
【兼縫宗祇百句付】／兼縫宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→秋

ひとのこころの一かはるよのなか
うきみさーいまはのときやーをしからむ
【雑草／伊地知本】／緯／文明 6(1474) 年
2 月以前

→秋

ひとのこころの一かはるよのなか
そのいへーのこれとみちのーおとろへて
ひと

【専頒宗祇百句付】／専頒宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
あかむれは一かみのしろしは一おとろへ
【専頒宗祇百句付】／専頒宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→袖ふれる
ひとのこころの一かはるよのなか
ときびびぬーしくれこのはにしぞてぬれて
【専頒宗祇百句付】／専頒宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→とりどり
ひとのこころの一かはるよのなか
さむきひぬはーみつにいるてふーとりどりに
【専頒宗祇百句付】／専頒宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→い羽根を並べる鳥部山
ひとのこころの一かはるよのなか
はかなしやーはねをならへしーとりどりへやま
【霊草／伊地知本】／応／文明 6(1474) 年
2 月以前

→かすい
ひとのこころの一かはるよのなか
はかなしやーはをもならへしーとりどりへやま
【老集／崇徳部宗訳筆本】／祈

→花咲く
ひとのこころの一かはるよのなか
のへをわけーやまらをたとるーはなさきて
【専頒宗祇百句付】／専頒宗祇百句付／応
仁 2(1468) 年 5 月下旬

→花もない
ひとのこころの一かはるよのなか
うれへあるーは来看めつるーはなもなし
ひとのこころの一かはるよのなか
とりへやま－はねをならへ－すねたえて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
つきはた－みやもわらやも－ひとつにて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
こをおもふ－みちのみたれも－ひとつにて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

→時鳥
ひとのこころの一かはるよのなか
ほとときす－はなきところを－なくさめて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
またしも－なきかやまちの－ほとときす
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
ほとときす－かへるやまちは－ともならて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

→身を知らない
ひとのこころの一かはるよのなか
うれしさと－うきもゆめなる－みをしらて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
ときをえ－なはおぞるべ－みをしらて
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

→身を知る
ひとのこころの一かはるよのなか
みをしれは－われとさためる－やともなし
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
みをしれは－いはむうらみ－なきものを
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

→我が上
ひとのこころの一かはるよのなか
わかりぬに－おもはてたれを－そしみらむ
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
わかりぬに－はしのひとの－あきもかな
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬

人の心の世の中
→花を採む
ひとのこころの一あたしよのなか
はなたれ－つろふものと－うらむらむ
【竹林寺／新谷宗文学大系本】／巻／文明 8(1476) 5月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
なつやま－みなすをはなや－うらむらむ
【専順宗祗百句付】／専順宗祗百句付／応仁 2(1468) 5月下旬
ふるさとのひとに あへるうれしさ
ゆくとくと－なみたはひとりたひとりのそら

【信楽／大阪天満宮庫文庫／尾／永正
2(1505)年 8月 23日以後同 3年 3月以前

悩

→麻の狭衣

わびひとの－むねやすからぬ－あさゆふに
きてもやせはき－あさのさころも

【文禄年間百錦 8巻／何人[あさかすみ]
／文禄 5(1532)年 1月 3日

わびひとの－はたへはいかに－さむからむ
うちしきりぬる－あさのさころも

【文禄年間百錦 12巻／チ[はくさの]
／文禄 2(1593)年 1月 10日

ひま

霞のひま

→春浅い

かすみのひまの－あさきけのやま
はるあさき－のかせやしもに－くもるらむ

【水享年間百錦 4巻／山何[くちてけり]
／永享 12(1440)年 10月 16日

かすみのひまの－なかそらのゆき
はるあさき－ひかけややすも－うすからむ

【天正年間百錦 57巻／チ[きのこ
せ]／天正 19(1591)年 1月 3日

ひややか

冷ややか

→秋の蛻

ここかそこ－かなるるみつの－ひややかに
あきのはたるや－くれいそくらむ

【文禄年間百錦 57巻／何人[ときはい
ま]／文禄 10(1582)年 5月 24日

いはねこす－いけのしらなみ－ひややかに
あきのはたるや－みつのうきさ

【信楽／大阪天満宮庫文庫／尾／永正
4(1495)年 9月 26日
ふかいて

水冷ややか

→氷の浮草

さそふへき一つ日のやまかせひややかに
いろにみたるみつのうきくさ

【弘治四句年抄8冊】／阿部 四天（1557年）12月2日

いはねこずいけのしながらひややかに
あきのほたるやみつのうきくさ

【天正年間桜抄57冊】／□□ [まつなら
ぬ]／天正17(1589)年1月4日

ひらく

窓を開く

→夏衣

まとをひらけは一つのありあげ
なつころも一いつとひしそまと一みにぶれて

【四名院追善千句】／何倉 [さかのやま]
／永禄5(1563)年12月14日～18日

まとをひらけは一かよぶあきかせ
なつころもうすきさひみ一いとはれて

【天正年間桜抄57冊】／□□ [ゆふたち
の]／天正17(1589)年6月16日

ふかい

深い夜の空

→春眠

かへすまつもふかきよくのそら
をくるま一つさへにほふるありあげに

【永正年間桜抄34冊】／何色 [うこてみ
ぬ]／永禄5(1569)年8月29日

とりのなくはふかきよくのそら
あふきやうすきのはしろき一ありあげに

【永禄年間桜抄28冊】／何人 [つきなか
ら]／永禄6(1562)年8月11日

やまぶかい

深い

→谷の横道

しもにおねさやるいあひやまふかみ
すきむらはべき一のほそみち

【壁草／大東急記念文庫本】／燥上／永正
8(1512)年11月3日～永正9年

やまふかみとひくるもたち一なになれた
ひとりかせきか一たのはほそみち

【那智砦／北野天満宮本】／永正十四年/

夜が深い

→草枕

かねたにならすよこそふかけれ
くさくらしこしゅないつむの一つきなれた
ふく

秋風が吹く

→鳴く蝉

ここにすみける—あきかせそふく
たれなく—ふにしあとの—きりきりす

【伊勢千句】／何木／大永 2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

かれののあさら—あきかせそふく
くれぬれは—なくねもかはる—きりきりす

【文明年間編纂 34 卷】／× × [あきふけぬ]／文明 12(1480) 年 9 月 28 日

→露ふる

まきのいたまは—あきかせそふく
みのむしの—こゑあはれにも—つゆふりて

【伊勢千句】／何馬／天文 6(1537) 年 5 月 22 日

とへはののみや—あきかせそふく
かきりなく—とでのわかれち—つゆふりて

【成立不詳・宗祇以前 15 卷】／× × [ちれはいさ]／成立不詳

→浅茅が鳥

さひしきものと—あきかせそふく
あさちはら—ここはをそむる—つゆなから

【雑感関係 2 種】／秋／応仁元 (1467) 年 5 月 10 日

つはふけつつ—あきかせそふく
あさちはら—むしのねよりも—われなきて

【霧島第三／続群書類従本】／秋／文亀元 (1501) 年 3 月 18 日

風吹く山

→大井川霞台

のとかにすめは—あらしかふやま
おほおはは—かすめるみの—たえたえに

【享禄年間編纂 8 卷】／何人／からこも
享禄 3(1530) 年 1 月 28 日

はなにとゆけは—あらしかふやま
おほおはは—かすみのそこに—おとはして

【文安年間編纂 4 卷】／何路／やへひとへ

袖吹きおくる風

→玉鏡

そてふきおくる—みねのこからし
たまほこの—すゑはふしも—ささえさて

【文安年間編纂 5 8 卷】／× × [うめかえの]／文安 19(1591) 年 1 月 3 日

露吹く風

→虫鳴く

つゆふくかせは—にしよりそたつ
みやきのの—はのさかりは—むしなきて

【宝徳四年千句】／何衣／はなもとも／宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

つゆふくかせは—すすのかりいを
なつころも—ひもくれかたは—むしなきて
春風が吹く

→舞む

あしたのはらに—はるかせそふく
さしのほる—ひもほのかにや—かすむらむ
【兼守千句】／朝何 [しもふけて] ／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日 <～11 日>

かれしはやしも—はるかせそふく
やまはけさ—いくしもになか—かすむらむ
【長享年間百韻 6 行】／久人 [ゆきから]
／長享 2(1488) 年 1 月 22 日

吹く風に秋の露

→踊る

かせはまた—ふかぬになるも—あきのつゆ
せみにまじるや—ひくらしのこも
【平松文隆本千句】／□□ [なたしこの]

まつにふく—かせのしたはの—あきのつゆ
またかけうすき—ひくらしのこも
【大永三年月並千三百韻】／□□ [しくれ
のあめ] ／月並千三百韻／大永 3(1523) 年
10 月 23 日

吹く波の浦風

→鳥の鳴き立つ

ふきまとはせる—なみのうらかせ
さよふかき—うきねのとりの—なきただて
【大永三年月並千三百韻】／□□ [はなに
つき] ／月並千三百韻／大永 3(1523) 年 3
月 23 日

ふきそこはれ—なみのうらかせ
なかそらに—まさこのちとり—なきただて
【元和年間百韻 24 行】／□□ [まつふく
や] ／元和 8(1622) 年 10 月 29 日

松風が吹く

→葉浮く

ええむをのへ—まつかせそふく
くれわたる—そらにひとむらく—もうきて
【三島千句】／朝何 [やまとほく] ／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

こえくるみねは—まつかせそふく
むらさめの—なこりにしは—くもうきて
【成立不詳・心敬以前 14 巻】／何船 [は
るはまた] ／成立時不詳

→憂い

みちるしのへ—まつかせそふく
ときもつて—ふねやこころの—うかるらむ
【成立不詳・宗長以前 5 巻】／何船 [し
もろき] ／成立時不詳

こころもしらす—まつかせそふく
ゆふくれや—こけのしたにもうかるらむ
【立幕／伊地知本】／雄／文明 6(1474) 年
2 月以前

→頰む

あらうみきは—まつかせそふく
あまをふね—とこのきしを—たのむらむ
【三島千句】／山何 [くひすの] ／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

こころもしらす—まつかせそふく
ふけいつる—つきはくもを—たのむらむ
【下草／金子本】／秋／延徳 4(1492) 年頃

松吹く風

→散る花

まつふくかせも—かすみはてけり
ちるはの—にほをはるの—なこりにて
【成立不詳・心敬以前 14 巻】／何人 [こ
のもとの] ／成立時不詳

まつふくかせも—ゆめはみせけり
ちるはの—かをるまくらに—めもあて
【総類関係 2 種】／春／応仁元 (1467) 年
5 月 10 日
ふける

秋更げる

→木々の下露

かせわたる－あさちかすれも－あきふけて
いろつきそむる－ききのしたつゆ

【出艸千句】／朝何[きりもやは]／永正
元 (1504) 年 10 月 25 日－27 日

やまとほき－いそのまつかせ－あきふけて
しくれはのる－ききのしたつゆ

【至徳以前前百巻 7 巻】／何所[ちりぬるか]
／至徳 4(1387) 年以前

→さ杜鹿の声

みねたかみ－へたるつつきの－あきふけて
つまやいくつの－さをしかのこる

【宗長追善千句】／白何[みやいくつ]／
（幸禄 5）天文元 (1532) 年 3 月 25 日

はやたより－おしねもるまで－あきふけて
あらしにかよふき－さをしかのこる

【寛正前年百卷 20 巻】／唐何[せみのは
の]／寛正 4(1465) 年 6 月 23 日

→弱る虫の音

はなすずき－かれゆくしもに－あきふけて
のにはおしない－よわるむしのね

【顕宗院会千句】／山何[あさよび]／
宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日－21 日

たびはまた－はるけきみに－あきふけて
わくろくさはに－よわるむしのね

【文明年間百巻 3 4 巻】／何人[よるはっ
き]／文明 18(1486) 年 2 月 6 日

→樹打つ音

あきやいま－こからしこて－ふけぬらむ
のころかたなく－ころもうつおと

【宮島千句】／山何[ことのはや]／天文
20(1551) 年 5 月 9 日－11 日

くさくら－うかとあきや－ふけぬらむ
みにむかなせに－ころもうつおと

→有明の月

ひほとた－かりにたにこぬ－あきふけて
うらみむかふ－ありあげのつより

【伊予千句】／和舟[わきてみむ]／天文
6(1557) 年 5 月 22 日

ゆふつゆに－やとかすかのの－あきふけて
こむよてらせ－ありあげのつより

【宗長関係 8 種】／泉徳苑／燕巻部本／

秋更け渡る

→雁鳴く

あきふけてる－きのうみつら
ゆふなみの－まつのはこしに－かりなきて

【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

あきふけわたる－つきのむらくも
かりなきて－よはいなけの－たまくなずに

【合点之句／神宮文庫本】／秋／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

月更ける

→樹の露けさ

たれならす－つみきるよは－ふけぬらむ
なくさめかぬる－そてのつゆけさ

【大永年間百巻 1 4 巻】／山何[うめやな
き]／大永 7(1527) 年 1 月 19 日

かたるま－つつきは－つかぬらむ
みえしこもろ－そてのつゆけさ

【天文年間百巻 3 8 巻】／何何[しくるる
か]／天文 19(1550) 年 8 月 25 日

初風と昨日は聞いて秋更ける

→人は残らない紅葉

はつかせと－きのふはときし－あきふけて
ひとははらす－もろきもみちは

【三島千句】／何何[しるしらす]／文明
3(1471) 年 3 月 21 日－23 日
はつかせと一きのふはきし一あきふけて
ひたのはのちず一もみちるかけ
【老集／吉川本】／秋／文明 13(1481)年
夏頃

夜が更ける
→まどろまない
ひさしくなりぬ一よやけぬやる
いまこむの一ちきりはなく一まどろまて
【成立不詳・宗祇以前15巻】／x x [た
れをよの]／成立時不詳

こひしんうたふややけぬやる
おもひいっるむかしにおいの一まどろまで
【宗長関係8種】／老耳／天理本/

ふじ
掛かる藤浪
→田子の長き日
よそのこすりに一かかかるふちなみ
たこのうら一あひきのなはも一なかきひに
【続編日記録50卷】／何人 [うめのな
の]／応永30(1423)年5月27日

まつにことさら一かかかるふちなみ
ひまもなき一とたのしほくむいなやかきひに
【続編日記録50巻】／山冈 [あつさな
ほ]／応永32(1425)年6月25日

→麝香三笠山
あをのはのころに一かかかるふちなみ
あけにけり一かすみのひまに一みかさやま
【続編日記録50巻】／何人 [はののひ
も]／応永27(1420)年1月13日

まつほのほのと一かかかるふちなみ
かすみては一なはみねたかし一みかさやま
【続編日記録50巻】／何船 [ことはな
に]／応永31(1424)年9月27日

ふす

おほかかなきは一ふちのたそかれ
はるてや一しのひねならし一ほとときす
【称名院追善千句】／何翼 [さかのやま]
／永禄6(1563)年12月14日～18日

まつのこすあの一ふちのたそかれ
はるこそと一はつねまたるれ一ほとときす
【毛利千句】／一右廃顕 [なつのひも]
／文禄3(1594)年5月12日～16日

松の藤浪
→月出る
はるちよかけよまつのふちなみ
なかきひも一くるれはやかて一つきいてて
【看聞日記録50巻】／山冈 [やよやよ
ひ]／応永31(1424)年9月18日

はなまちたるか一まつのふちなみ
はるのよ一ひかりをそふる一つきいてて
【文安年間書御10巻】／夢想 [おさえら]
／文安2(1445)年3月18日

→時鳥
なつをかけたるまつのふちなみ
ほとときす一このゆふつくよ一ほのめきて
【度聞千句】／何木 [いたとや]／永正
11(1514)年5月13日～19日
こえてやたきたるまつのふちなみ
ここにくわ一こゑもくものの一ほとときす
【成立不詳・宗長以前15巻】／□□ [ち
らぬより]／成立時不詳

ところところの一まつのふちなみ
またれぬ一こゑはやよひの一ほとときす
【天正年間書御7巻】／x x [かすぬけ
り]／天正10(1582)年3月1日

ふす

かふしぐのゆめ
仮眠の夢
→鶯の声
いつましめゆく一かりふしぐのゆめ
かねのこゑ一きこえてのちの一ふかきよに

藤の黄香
→春の時鳥
ふね

海人小舟
→荒穏の浪

うらかててはるかによるの－あまをふね
もはひさひし－あらいそのなみ
【永正年間百種 34 巻】／船問 [かへるか
り]／永正 16(1519) 年 2 月 19 日

あけくれをうけてのみこそ－あまをふね
よるとかへると－あらいそのなみ
【大永年間百種 14 巻】／山河 [いやすし
に]／大永 5(1525) 年 1 月 17 日

→お気に見える沖の島

なみのうへに－なかきひくらす－あまをふね
わつかにみゆる－おきつしまやま
【沼田千句】／何人 [はるのはな]／永正
7(1510) 年春以前＜永正 5 年春＞

ゆふくれは一つにといつ－あまをふね
わつかにみゆる－おきのとほとしむ
【島津千句】／何木 [たけのはに]／嘉吉
3(1443) 年 10 月 23 日

海人の釣舟
→潮ぼけ

はなれこしまに－あまのつるふね
うなはらや－くももはれたり－あさぼらけ
【聖薬千句】／何船 [にそくと]／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日

うらっかする－あまのつるふね
やまかすむ－みきはのまつ－あさぼらけ
【天正四年万亜 70 巻】／白衣 [うのはな
の]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日－7 月 19 日

→潮に時雨る

おきにかかれる－あまのつるふね
そことも－なみにりひや－しろくらむ
【宮島千句】／何木 [ほかにはや]／天文
20(1551) 年 5 月 9 日～11 日

ふね

野辺の仮隠
→旅枕

ゆめちをたとる－のへのかりふし
たひまくら－ふかきもしらす－いつるよに
【住吉千句】／何田 [このはるち]／永元
1521 年 11 月 1 日～14 日

ねられぬところはへのかりふし
たひまくら－ゆめさしとひや－たえつむ
【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船 [き
りのはに]／成立時不詳

→潮の空

ところさためぬ－へのかりふし
うきものと－いひしそまこと－たひのそら
【明応年間百種22巻】／十三仏名号 [な
かつきも]／明応4(1495)年9月30日

みやこせすぬへのへのかりふし
たちよの－とりかたなく－たひのそら
【宗範関係2種】／宗範連歌合／静嘉堂文
庫本／

ふで

筆の跡
→霞む朱のそほ舟

たをりくる－さくらのみかは－ふてのあと
かすみにくたす－あけのそほふね
【天文廿四年梅千句】／何船 [つきにうめ]
／天文24(1555)年正月7日

くらへみよ－すずゑのはなに－ふてのあと
かすむみきり－あけのそほふね
【毛利千句】／白何 [うすゆきの]／文禄
3(1594)年5月12日～16日
ゆふへにいてし－あまのつりふね
たかさとの－うらわのなみに－しくるらむ
【那覇纂／北野天満宮本】／永正十四年

→松立てる

かつかつうかふ－あまのつりふね
またてる－いそのかくれや－さとならむ
【成立不詳・垂立以前 8 巻】／山河（ひと
ことや）／成立時不詳

はるともしらし－あまのつりふね
またてる－かけにふちえの－うらさひて
【老書／毛利本】／雑上／（文明 17(1485)
年 7 月 23 日頃）

出る舟人

→明け渡る

みなとのはるに－いつるふなひと
あけわたる－うらのかすみに－なみこえて
【宗期関係 9 巻】／百番連歌／赤木文庫本
／享徳 2(480) 年 8 月 13 日以後・寛文 6 年 3
月以前

こころやとる－いつるふなひと
あけわたる－いりえののゆきの－とまやかた
【宗期関係 2 巻】／冬／応仁元 (1467) 年
5 月 10 日

沖の釣舟

→深夜の上

かすみはかりの－おきのつりふね
やまのはは－ほのかにたにても－なみのうへ
【永正十花千句】／雪木（ひかすたに）／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

のとかにうかふ－おきのつりふね
あけぼのの－つををひたせる－なみのうへ
【慶長年間百頌 27 巻】／雪人（わかくさ
の）／慶長 4(1599) 年 1 月 22 日

かすみにうかふ－おきのつりふね
とふとりも－それかあらぬか－なみのうへ
【天正四年年頃 70 巻】／一子開鑑（わか
くさも）／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7月
19 日

沖の舟

→処の朝明け

おきつふねの－とけきなみに－こききえて
つきになたちる－うらのあさあげ
【太神宮法楽千句】／薄倉（もきのはや）
／長享 2(1488) 年 7 月

おきつふね－つきをともとや－いてぬるま
あきかせさむき－うらのあさあげ
【文明四年万句 52 巻】／唐倉（たるけ
とは）／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9月
14 日

川浴い舟

→岸の泉竹

さしいつる－かはそひふねに－かせふきぬ
すようなひく－きのくれたけ
【永原千句】／何寛（たかそめし）／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

なみもたき－かはそひふぬに－さをとりて
をのえてきらむ－きのくれたけ
【文明十四年万句 52 巻】／何色（はるな
つを）／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9月
14 日

泊まり舟

→沖の白浪

うらかせも－あまけありとや－とまりふね
いくしはあひの－おきつしらなみ
【永禄年間百頌 68 巻】／何船（たちなら
せ）／永禄元 (1558) 年 7 月 18 日

よをこめて－つきにそいてし－とまりふね
かたへきふる－おきつしらなみ
【文禄年間百頌 41 巻】／□□（おかつな
みし）／文禄 2(1593) 年 1 月 8 日

→松風の音

のとかなる－なみをまくらの－とまりふね
さそおらいの－まつかせのおと
【聖暦千句】／何人（つきならし）／明応
3(1494) 年 2 月 10 日～12 日
泊まり舟音していちず

唐土舟

満の川舟

舟の網手錦

ふね

ふねひのほる－そてそくれゆく
かへりみる－はなのこすゑは－しろたへに

【永禄元年九月刊】／口町【としきはらは】
【永禄元（1558）年 3 月 23 日～25 日】

ふねひのほる－あとははるかな
かへりみる－みちのひとむら－うちかすみ

【元亀年間百巻 6 巻】／何人【とめゆけは】
【元亀 3 (1572) 年 9 月 28 日】

とおりふね－おとしていつち－わたるらむ
たれたひならぬ－くにくのにひと

【東山千句】／字露顕【つきみつつ】／
永正 15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

とまりふね－おとしていつち－わかるらむ
あはれのたびやす－くにくのにひと

【一本関係著 8 種】／興津光／書陵部本／

海のうかね

→乎習い

よるへはいつく－なみのうきふね
てならひは－またいとけなき－ころそかし

【看聞日記紙背 50 卷】／何路【うのはなの】／応永 30(1423) 年 4 月 4 日

ことにきている－なみのうきふね
てならひは－にのはをしへの－ほとなるに

【看聞日記紙背 50 卷】／何人【かみにうめ】／応永 31(1424) 年 2 月 25 日

ふねにすむ－あまのしわさの－つたなてなは
なみもたたらぬ－はかまのうら

【大永三年間百巻 1 卷】／何船【うめかかや】／大永 3(1523) 年 1 月 9 日

あさばらけ－いそくやふねの－つたなてなは
あまそかひなき－しはかまのうら

【墨墨筆第二】／続群書類従本／編／明応
4(1495) 年早春

ふねひのほる－そてそくれゆく
かへりみる－はなのこすゑは－しろたへに

【永禄元年九月刊】／口町【としきはらは】
【永禄元（1558）年 3 月 23 日～25 日】

ふねひのほる－あとははるかな
かへりみる－みちのひとむら－うちかすみ

【元亀年間百巻 6 巻】／何人【とめゆけは】
【元亀 3 (1572) 年 9 月 28 日】

とおりふね－おとしていつち－わたるらむ
たれたひならぬ－くにくのにひと

【東山千句】／字露顕【つきみつつ】／
永正 15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

とまりふね－おとしていつち－わかるらむ
あはれのたびやす－くにくのにひと

【一本関係著 8 種】／興津光／書陵部本／

海のうかね

→乎習い

よるへはいつく－なみのうきふね
てならひは－またいとけなき－ころそかし

【看聞日記紙背 50 卷】／何路【うのはなの】／応永 30(1423) 年 4 月 4 日

ことにきている－なみのうきふね
てならひは－にのはをしへの－ほとなるに

【看聞日記紙背 50 卷】／何人【かみにうめ】／応永 31(1424) 年 2 月 25 日

ふねにすむ－あまのしわさの－つたなてなは
なみもたたらぬ－はかまのうら

【大永三年間百巻 1 卷】／何船【うめかかや】／大永 3(1523) 年 1 月 9 日

あさばらけ－いそくやふねの－つたなてなは
あまそかひなき－しはかまのうら

【墨墨筆第二】／続群書類従本／編／明応
4(1495) 年早春

ふねひのほる－そてそくれゆく
かへりみる－はなのこすゑは－しろたへに

【永禄元年九月刊】／口町【としきはらは】
【永禄元（1558）年 3 月 23 日～25 日】

ふねひのほる－あとははるかな
かへりみる－みちのひとむら－うちかすみ

【元亀年間百巻 6 巻】／何人【とめゆけは】
【元亀 3 (1572) 年 9 月 28 日】
ふる

【助信関係 4 種】／応信通歌／天理本／
さすかにはやきよるとのかはふね
ほとときす―ひとこゑをたに―ききやらて
【基佐集／静嘉堂文庫本】／夏／永正
6(1509) 年以前

渡し舟
一直真楽に流しる鏡閣山吹
わたしひふねはなのゆききもーはるくれて
ましはにましる一つつしやまふき
【大永四月三月千二百編】／□□ [けふひくや]／月三月二編／大永 4(1524) 年 5
月 23 日
やまもとのーはなをよそめのーわたしひふね
ましはにましる一つつしやまふき
【天文年間百編乙 3 番】／□□ [ちりうせ
ぬ]／天文 19(1550) 年 2 月 17 日

ふみ

ふみのまきまき
文の巻々

→始りましょう

なほおふかきふみのまきまき
とびよるもーたしかりばーいかてむ
【文禄年間百編 八 2 番】／□□ [はなのい
ろや]／文禄 4(1595) 年 1 月 30 日
あたらやきぬーふみのまきまき
すめらきのーさかなきよをーはいかてむ
【寛文年間百編 2 番】／□□ [よもう
つ]／寛文 10(1670) 年 8 月 29 日

ふゆ

幸い冬霧り

→晴れな朝

うきふゆこもりーいつかかるらむ
しつかなるーなにはのうみーあさなあさな
【伊勢千句】／山口 [みるかねけ]／大永
2(1522) 年 8 月 4 日ー8 日

うきふゆこもりーといそくらむ
ふくかせもーまたさむからぬーあさなあさな
【天正四年方親十番大】／所 [きくやい
かに]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日ー7 月
19 日

冬枯れ

→我が肯う草

ふゆかれにーかけなきのこそーとぼくしれ
いつまでのこそーわかおもひくさ
【永原千句】／唐何 [とりのねに]／明応
9(1500) 年 7 月 17 日
むさしのもーかきりしるるーふゆかれに
いかなるたねそーわかおもひくさ
【老集／吉川本】／秋下／文明 13(1481) 年
夏頃

冬霧もる頃

→梅が春待つ

ゆきよりさきとーふゆこもるころ
はなにかつつーほめるうぬのーはるまちて
【往吉千句】／白何 [あられのみ]／大永
元(1521) 年 11 月 1 日ー14 日
かせもあたらすーふゆこもるころ
かめにさすーはなのうめかえーはるまちて
【成立不詳・敏準以前 1 番】／所 [ま
たしかし]／成立時不詳

ふる

雨がある

→三輪崎

やとりもかやーあめそふりくる
うちもるーいりひをすにーみわかさき
【文明十四年方親五番大 2 番】／生字反音 [は
なはみな]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日ー
9 月 14 日
ばつせのかはーあめそふりくる
みわかさきーおつるあらしのーのをすきて
【専信関係 2 番】／毎／応仁元(1467) 年
5 月 10 日
ふる

いけふる

→天の磐真山

いけふりてほのかにうつる＝よはのつき
あきいくあきそ＝あまのかくやま

【成立不詳・崇徳以前15巻】／和人 [み
つつさし]／成立時不詳

なかむらむ＝きりははるの＝いけふりて
みやちたえぬ＝あまのかくやま

【永正年間百鎖34巻】／和人 [みやまき
に]／永正14(1517)年3月22日

篤にふる壇

→衣が千難い

あしやのゆきの…しのにふるころ
たくびにも＝わかころもては＝ひかたくて

【文安雪千古】／何田 [あとさる]／文
安2(1445)年10月18日

ひとむらしくれ＝しのにふるころ
おりくる＝くものころも＝ひかたくて

【初備千句】／何水 [うのはなの]／享徳
元.2(1452)年.4月

露のふる道

→夜半の月

わけはやたゆる＝つゆのふるみち
ひとはいさみしはわすれぬ＝よはのつき

【永正年間百鎖34巻】／和船 [うななひ
き]／永正13(1516)年1月

ぬれてみなせの＝つゆのふるみち
しらきにく＝うつろひふくる＝よはのつき

【天文年間百鎖38巻】／和人 [にはへか
つ]／天文13(1544)年1月29日

ふる

→積もる白雪

はつしみも＝ふゆをまちてや＝ふりぬらむ
けしきながら＝ももるとらゆき

【天正四年句十巻】／朝何 [なみよす
る]／天正4(1576)年5月6日～7月19日

いつのまに＝かくてさとは＝ふりぬらむ
やまのはつかに＝ももるとらゆき

【前智験／北野天満宮本】／永正十二年

→五月雨の増

さくふらの＝かかれはまつは＝ふりはてて
かせもたえたる＝さみたれたのころ

【天文廿年鳴千句】／和木 [つみそへよ]
／天文24(1555)年正月7日

のきくる＝かさりのはたも＝ふりはてて
ぬのおるとの＝さみたれたのころ

【心斎関係10種】／静嘉堂文庫本

古き都の春

→うち渡る

ふるきみやこの＝はるのはかなさ
しばまや＝けふりなしこり＝うちかすみ

【明応年間百鎖22巻】／山何 [つつきひと]
／明応5(1496)年8月15日

ふるきみやこの＝はなのひとと
つゆかかる＝みちのはしくさ＝うちかすみ

【大永三年月並千三百鎖／□□ [はな
つき]／月並千三百鎖／大永3(1523)年3
月23日

ふるきみやこの=はるのはかな

【前智験／北野天満宮本】／永正十二年

→灯の下

ふるてらに＝たのむはやしの＝かけふかみ
かりぬめまする＝もしみのもと

【問越千句】／朝何 [ゆつくよ]／文明
2(1470)年正月10～12日

かたらはむとももなみたの＝ふるてらに
ほとときすきつ＝もしみのもと

【行動関係4種】／行動句集／大阪天満宮本

→灯の影

いりあかの＝かねちかくになる＝ふるてらに
やくくれそむる＝もしみのかけ
ふるさと

思う古里

→旅の空

ふわらのみをみておもふふるさと

やどりをも－さためぬまなの－たひのそら

帰る古里

→春焼る

よもぎになりぬ－かへるふるさと

みつつこし－はなの□□□□－はるくて

みちさへいつこ－かへるふるさと

たまさかの－ひとのゆきも－はるくて

→寒衣

のくれやまくれ－かへるふるさと

たひこも－はなにしきを－かけにきて

→春殺

ふるさを－かへるふるさと

はるかに－ぬれぬれかりの－たひこも
ふるさと

住める古里

→思う

なほあらましと－すめるふるさと
たひゆくや－あるとをいかにと－おもふらむ
【表佐千句】／農用［つきはたた］／文明
8(1476)年3月6日～8日

あれれかくても－すめるふるさと
つれもなき－わかみやまつも－おもふらむ
【大永四年月並千二百韻】／□□［そよと
しも］／月並千二百韻／大永4(1524)年10
月23日

露のふる里

→秋風

かたるにおつる－つゆのふるさと
あきかせの－ならのかれはに－そよきて
【大神宮歌文千句】／何船［とこよにや]
／長安2(1488)年7月

たひねさその－つゆのふるさと
あきかせの－ふきいてぬれは－うつころも
【毎利千句】／初何［よともに］／文禄
3(1594)年5月12日～16日

遠き古里

→旅衣

さていくひかす－ほはひふるさと
たひころも－せきちかさなる－あつまかた
【時聞日記歌百50卷】／何路［ひととせ
に］／応永32(1426)年12月11日

かへらむほの－とはきふるさと
あめののち－いそきてゆかむ－たひこころも
【成立不詳・心敬以前14卷】／朝何［し
たみつに］／成立時不詳

春の古里

→長き日

とはれものか－はるのふるさと
あめのうち－ゆふへもかす－なかきひに

【文明年間百韻34卷】／何路［かせやく
も］／文明4(1472)年10月26日

さひしくなりぬ－はるのふるさと
なかきひに－たとひすて－かへるらむ
【延德年間百韻16卷】／何人［まつみよ
と］／延徳4(1492)年2月8日

古里

→旅の悲哀

うみかはを－へてておもふるさとに
とぼくもなれる－たひのかなしさ
【明応年間百韻22卷】／何船［はなそは
る］／明応4(1493)年3月25日

ふるさとに－しかひとつかり－かへるらむ
みはいつまつの－たひのかなしさ
【成立不詳・宗栗以前15卷】／□□［ち
れはいさ］／成立時不詳

→花の一枝

ふるさとに－ことつやめらむ－ひともかな
かへしてたる－はなのひとえた
【熊野千句】／何船［のとかる］／文正
元(1466)年3月以前

またよとは－かはやすも□□た－ふるさとに
みれはくちの－はなのひとえた
【天正四年万句70卷】／何物［ととき
す］／天正4(1576)年5月6日～7月19日

→思いやるにも袖

ふるさとの－ひといがならむ－たひのみち
おもひやるに－そてそをるる
【因幡千句】／何船［そらやすき］／文明
7(1475)年11月26日～28日

ふるさとの－あきはいつしか－□□ぬられた
おもひやるに－そてそぬれるる
【天正四年万句70卷】／何木［させはな
の］／天正4(1576)年5月6日～7月19日

古里の秋

→形観
へだたる

へだたる

隔たる

一離である

うくつらきーわかなかやまのへたたりて
くもやゆふへのーまかきなるらむ

【慶長年間百帳４巻】／何木【ささのはの】
／永亨6(1434)年6月18日

うくひすの－こゑもみきりにへたたりて
いくへかすみの－まかきなるらむ

【慶長年間百帳27巻】／□□【ちひろある】／慶長4(1599)年5月10日

ほし

さやかな星

→恵星の庭

さやなる－ほしやまよびを－てらすらむ
つかさつかさに－ももしきのには

【石山四時千句】／青何【つぎやふね】／
天文24(1555)年8月15日～19日

さやかなる－ほしのひかりの－うすくもり
はるあらたまる－ももしきのには

【慶長年間百帳27巻】／□□【あらしみ
も】／裏白／慶長5(1600)年1月3日

星を頂く

→武士が扁看る

ほしをいたたく－きぬきぬのそら
もののふは－とののほろかけ－かふきて

【宗関関係9種】／連歌百句／小松天満宮本／

ほしをいたたく－たそかれのとき
おのかなを－なるもののがるのふかふきて

【心信関係10種】／心王集／静嘉堂文庫本／
ほそい
道が細い
→橋の一筋
さしあほふーいはみのもとの一休みはほそみひとやはかよふーはしのひとすち
【成立不詳・宗長以前15巻】／X X [きみたれや]／成立不詳
おしねるるーたのものにかよふーみちほそみしもうこほーるーはしのひとすち
【心歌関係10巻】／芝草内連歌合／天理本

ほたる
秋の蛩
→凪居する袖冷やか
あきのほたるのーほのかなるかけ
はしめるーそてひややかに一つきてて
【新世千句】／一字露顔 [つきのころ]／
永禄4(1561)年5月27日～29日
あきのほたるの一いつちきゆらむ
はしめるーそてひややかにーあけはなれ
【慶長年間百詩27巻】／□□ [こからしも]／慶長3(1598)年10月19日

飛ぶ蛩
→風の凜しさ
はるはるとーかはのほとりをーとふたる
なかれふきくるーかせのすすしさ
【元亀二年千句】／山河 [はなのかの]／
元亀2(1571)年3月5日
ゆふなきにーきえてはもえてーとふたる
むらさきたかくーかせのすすしさ
【永正年間百詩34巻】／山河 [まちここしや]／永正12(1515)年11月11日
かけとほくーあしやのさとにーとふたる
つきにくれゆくーかせのすすしさ
【成立不詳・宗長以前15巻】／X X [きみたれや]／成立不詳

→蛻の凜しさ
むしのなくーかたはくられてーとふたる
なつをわるるーそてのすすしさ
【金院館文庫千句】／□□ [きてかへる]／
永禄6(1563)年11月18日以前
くれぬれはーみたれあひつつーとふたる
やすらびつるーそてのすすしさ
【天正年間百詩57巻】／□□ [たれまけ]／天正15(1587)年1月10日

蛻訪う暮れ
→月はまだ
かはかみよりやーほたるとふくれ
つきはまたーいてぬひかりのーみねこえて
【永禄年間百詩28巻】／何路 [なつくさの]／
永禄9(1566)年5月9日
だのものはならーはたるとふくれ
つきはまたーおぞきやまのーあめ□□□
【寛永年間百詩15巻】／□□ [まつにこまつ]／薬白／寛永19(1642)年1月3日

蛻飛ぶ空
→秋が来る
たとるみちをやーほたるとふぞら
うすもののーそてにおはるーあきのきて
【天文四月年梅千句】／二波反音 [くれなゐの]／天文24(1555)年正月7日
かせのよりるーはたるとふぞら
あしかきのーすまびはかなきーたきのきて
【永正年間百詩34巻】／何栄 [うなひき]／永正13(1516)年1月

→水の凜しさ
とふたるーつゆにみたれてーくるのに
ひともかけするーみつのすすしさ
【豊政千句】／初河 [おっかなけ]／長享
元(1487)年10月9日～11月
かたきのーそてにみたれてーとふたる
なかるるおもーみつのすすしさ
【河山四時千句】／參河 [つゆやふね]／
天文24(1555)年8月15日～19日
ほとけ

仏唱える

→籠り居る

よをしるひとやーほとけとななる
こもりみてーむふもなつのーものならし

【仏学館文庫本千句】／□□ [たきつつこ]
／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前

ほとけとななるーみこそふりぬれ
ひとしほぬーかたやまでらにーこもりみて

【行動関係 4 階】／行動連歌／天理本／

ほとどぎす

聞く時鳥

→有明の空

きあへぬーゆめのたちのーほとどぎす
のころほなたきーありけのそら

【文安月千句】／何処 [なにてて] ／文安 2(1445) 年 8 月 15 日

さみたれにー今いつかもふーほとどぎす
ねぬよほどふるーありけのそら

【文明年間百題 34 巻】／く [つきをかせ] ／文明 12(1480) 年 8 月

鳴く時鳥

→有明の月

やまよりやまにーなくほとどぎす
ありけのーつきはくもにーかけみえて

【天正年間百題 5 7 巻】／何処 [きすむよの] ／天正 6(1578) 年 2 月 18 日

くさのまくらにーなくほとどぎす
ありけのーつきをなこりにーよはのゆめ

【天正年間百題 5 7 巻】／□□ [ともなしに] ／天正 18(1590) 年 11 月 21 日

→月は有明

→雨遮る

はるはがのまをーなくほとどぎす
やよびはたーけふとにぬるーあまそそき

【曉風千句】／山何 [いきめつ] ／（元 兔）天正 15(1573) 年正月 9 日～11 日

くもををいにーなくほとどぎす
はなにそへーたぞかをしきーあまそそき

【月村抜句／書陵郎本】／永正十四年／

→聞まら

ひもふかきーなつやまかけにーあめすきて

【春開日記録 5 0 巻】／何人 [うのはなでは] ／永禄 9(1437) 年 4 月 25 日

つきかたふきぬーなけほとどぎす
たちつるーくさのいほりのーあめすきて

【永禄年間百題 2 8 巻】／何木 [きりのはの] ／永禄 5(1562) 年 7 月 4 日

→雲遮う

ほほとどぎすはのなかはにーきてもなけ
つきはありけのーおほらなるこ

【弘治三年春雪千句】／何衣 [なくきのし]
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

たかたのーあめになくらむーほとどぎす
つきはありけのーなつのよのそら

【織部翁／北野天満宮本】／永正十一年／
ほとぎす

【因幡千句】／何草 [ふるゆきは] ／文明
7(1475)年11月26日～28日

「短夜」

【豪門千句】／佚名 [とにちに]

「雨の寂しさ」

【春夢草／書陵邸本】／夏／永正12(1516)年、13年

「雨の徒然」

【春夢草／書陵邸本】／秋／永正6(1509)年8月29日

「月の有明の頃」

【春夢草／書陵邸本】／冬／永正6(1509)年9月2日

【春夢草／書陵邸本】／秋／永正6(1509)年8月29日
しのひねもー なかなかはやよひのーほとときす
かすみにひとりーありあげのそら
【永正五年間百巻 34巻】／何船 [かへのり]
／永正 16(1519) 年 2 月 19 日
うきなみなたーいさくらへてむーほとときす
つれなきをまつーありあげのそら
【文開間百巻 22巻】／□□ [たれもき
け]／文開 13(1673) 年 6 月 29 日

→有明の月

やよひよりーまちこそながらへーほとときす
はなのくもにーありあげのつき
【元亀二年千句】／朝何 [あたちる]
／元亀 2(1571) 年 3 月 5 日
またれはーよをもかさねよーほとときす
つれなくのころーありあげのつき
【武蔵波集／武蔵大学本】／夏／文和
5(1356) 年冬～翌年の春

→池の藤浪

ほとときすーはるくれぬとやーいそくらむ
こすゑにほふーいけのふちなみ
【太神宮楽歳千句】／玉何 [あきとほし]
／長阜 2(1488) 年 7 月
ほとときすーむかしにかへーをなきて
うゑしこかけのーいけのふちなみ
【應永年間百巻 28巻】／何路 [はななか
り]／永禄 3(1560) 年 2 月 25 日

→面影に立つ

ひとこゑをーみやこのそらのーほとときす
たかのきはよりーかをるたちはな
・【毛利千句】／何船 [みてもおふら／文
禄 3(1594) 年 5 月 12 日～16 日
ほとときすーさそはぬあめのーくものまに
ぬるとしもうーかをるたちはな
【永正五年間百巻 34巻】／何木 [いろはふ
ちの／永正 8(1511) 年 4 月 6 日
ひとこゑやーこのまのつきのーほとときす
ゆめのなこりにーかをるたちはな
【大永三年月並千三百年】／□□ [ひとこ
あや]／月並千三百歳／大永 3(1523) 年 4
月 23 日

→草の庵

さひしきはーとほくなりぬるーほとときす
くさのいぼりにーきくはむらさめ
【文明十四年万句 52巻】／朝何 [あきか
せに]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日
ひととたび　たたむおもはし−ほときす
くさのいほりの−あめのさよなか
【天文年間百箇 3 卷】／山何 [ふむあとも]／天文 13(1544) 年 10 月 15 日
さみたれの−はれまちいてし−ほときす
くさのいほりの−とさしはらげる
【天文年間百箇 5 卷】／舟船 [すましまは]／天文 13(1544) 年 9 月 12 日
なつきても−いかにつれなき−ほときす
くさのいほりの−ゆふへあけの
【文禄年間百箇 1 卷】／eker [かたけを]／文禄 2(1593) 年 5 月 20 日

→雲の遠方
ほときす−よそのにきはの−くれもうし
やまほのかなる−くものをちかた
【表佐千千】／何木 [くたかた]／文明 8(1476) 年 3 月 6 日<〜 8 日>
しのひねに−ところをしむか−ほときす
わかはになひく−くものをちかた
【天文四年間万方 7 卷】／何文 [じのひねに]／天文 4(1576) 年 5 月 6 日〜 7 月 19 日

→五日雨の頃
たちはなの−ちきりわするな−ほときす
うちのこしまの−さみたれのころ
【享和三年千千】／三字中略 [はらへかせ]／享和 2(1453) 年 8 月 11 日〜 13 日
おもひてて−ふるきやこの−ほときす
くらしかたくも−さみたれのころ
【住吉千千】／山何 [そめさらは]／大永元 (1521) 年 11 月 1 日〜 14 日
やまとほく−こゑまれゆく−ほときす
あとさきみえぬ−さみたれのころ
【文明十四年間万方 5 卷】／何船 [みつとりか]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日〜 9 月 14 日
やすらはて−いつちゆくらむ−ほときす
ひとりわびぬる−さみたれのころ
【文明十五年間千千 11 卷】／何舟 [かたたかし]／文明 15(1483) 年 3 月 1〜 3 月 2 日
やまもりや−なれてきくらむ−ほときす
かはのむかひの−さみたれのころ
【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明 8(1476) 年 5 月頃
おのにつかへ−なくおまれなる−ほときす
おもへはひさし−さみたれのころ
【謹愛第二／続群書類従本】／夏／明応 4(1495) 年春

→茂る桜
よこくもの−わかれてとほき−ほときす
しけるこゑの−とときかすかなり
【永禄元年千千】／eker [みるまに]／永禄元 (1558) 年 3 月 23 日〜 25 日
ほときす−なけはじしの−とときなし
しけるこゑの−あめはるるやま
【天文年間百箇 3 卷】／何路 [ほときす]／天文 24(1555) 年 4 月 10 日

→杉の梢
ひとこゑは−つれなくつらき−ほときす
すきのこゑの−あめのさひしみ
【永禄年間百箇 3 卷】／何路 [うえてみぬ]／永禄 6(1509) 年間 5 月 19 日
なやここヘ−とほきやまたの−ほときす
すきのこゑの−みしかとよのつき
【天文年間百箇 3 卷】／何人 [なやここに]／天文 4(1535) 年 5 月 1 日

→過ぎる雨
あかしかた−ふねとめられし−ほときす
なみよりそらも−すくゐるむらさめ
【天文年間百箇 3 卷】／何人 [かすむよは]／天文 23(1554) 年 3 月 26 日
うたたねの−まくらやさそふ−ほときす
こすのとちみ−すくゐるむらさめ
－ほとぎす

【天正年間百選 5 7 巻／何人 [みれはみし] ／天正12(1584) 年 9 月 13 日

ほときす－まつたのしはし－のこれかしきりねのやとに－すくむらさめ

【文明十二年間句 8 巻／何路 [よもののつ] ／文明12(1480) 年 4 月 10 日～*日

ほときす－のれなきよひの－そだたのめくもたちかへり－すくむらさめ

【文明十五年間句 1 1 巻／何路 [あさつゆの] ／文明15(1483) 年*月*日～3 月 2 日

→往き捨てる

はるから－なきいてけりな－ほとときす

【天正年間百選 5 7 巻／*x [わけゆかは] ／天正4(1576) 年 8 月 19 日

ひとこゑを－まつにつれなき－ほとときす

【天正年間百選 5 7 巻／何船 [あをやきは] ／天正13(1585) 年 1 月 28 日

ひとこゑの－なこりもあらめ－ほとときす

【文安年間百選 2 2 巻／【なつはたた／文安13(1673) 年 6 月 1 日

→往き捨てる

しのひねを－かすみにもらせ－ほとときす

【文安年間百選／何水 [つきぬはは] ／文安2(1445) 年 8 月 15 日

みしかよに－これなをしみそ－ほとときす

【文安年間百選 3 4 巻／何人 [よるはつき] ／文明18(1486) 年 2 月 6 日

→月の寂しさ

とやまの－くもをゆかれる－ほとときす

【聖慶千句／二字返音 [よにひとき] ／明応3(1494) 年 2 月 10 日～12日

はつこゑを－やにまるとる－ほとときす

【慶長年間百選 2 7 巻／*□ [つゆにみを] ／慶長9(1604) 年 6 月 28 日

→軒の橋

さとわたって－ここにやすらへ－ほとときす

【文明年間百選 3 4 巻／*□ [はたはりや] ／文明14(1482) 年 9 月

ひとこゑやは－ましやく－ほとときす

【文明年間百選 3 8 巻／何路 [ひとこゑや] ／文明14(1454) 年 5 月 8 日

ほときす－ねもたひなる－しのひねにさきぞめつも－にほふたたはな

【天和年間百選 2 巻／□ [つきになは] ／天和2(1682) 年 3 月 27 日

→軒の橋

またてみよ－まつにはつらき－ほとときす

【金鳥千句／玉何 [はるといは] ／天文20(1551) 年 5 月 9 日～11日

ことってむ－ここへかもな－ほとときす

【秋名院追善句／山何 [ことってむ] ／永禄6(1563) 年 12 月 14 日～18日

をちへり－なたはみやこそ－ほとときす

【明応年間百選 2 2 巻／何人 [あわかりみ] ／明応4(1495) 年 1 月 6 日

なくやいつれ－そのねさめの－ほとときす

【天文年間百選 3 8 巻／山何 [なくやいつれ] ／天文24(1555) 年 5 月 14 日

→軒の橋
ほどときす一しほのやまに一たへわひて
みるひとやたれの一きのたちはな
【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前
おもかけは一きのふのはなに一ほとときす
むかしこはるーの一きのたちはな
【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

→花橋

むらさめのーそそとたのむーほとときす
はなたはなにーつゆかをるやと
【新撰英和対音集／実隆本】／夏／明応
4(1495) 年 9 月 26 日
なるらぬはーしふねきりやうかーほとときす
はなたはなにーまとふちのはな
【正撰千句 11 巻】／正撰千句 第四 [な
のらせは]／正保 4(1647) 年 11 月
ほとときすーつれなきうちにーまたやねむ
はなたはなのーつろへるくれ
【阿纒千句】／白伺 [はるかせに]／文明
2(1470) 年正月 10 日

→舟差し止める

ほどときすーこゑさたかにもーなきすてて
ふねさしとむるーよとのはつら
【天正年間百撰 57 巻】／初時 [はるたち
て]／襄曰／天正 12(1584) 年 1 月 3 日
つゆのまの一やとりにきなけーほとときす
ふねさしとむるーいそやまのかけ
【天正四十年方 70 巻】／竹伺 [まつほと
や]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

→短夜の空

たびひとの一やとをはしかのヘーほとときす
かりねのつきーみしかよのそら
【天正年間百撰 57 巻】／□□ [たびひと
の]／天正 17(1589) 年 4 月 7 日
まつとしるーたよりもかもなーほとときす
むらさめすくーみしかよのそら
【文徳二年千句 1 0 巻】／山伺 [まつとし
る]／文徳 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日

→村雨過ぎる

ほどときすーちこゑはあきのーみやまかな
むらさめすくーまきのがしたつゆ
【文明四年方 52 巻】／何国 [ほとと
きす]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

まつとしるーたよりもかもなーほとときす
むらさめすくーみしかよのそら
【文徳二年千句 1 0 巻】／山伺 [まつとし
る]／文徳 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日

→村雨がふる

ほどときすーまつてはつれなきーなつのに
こころてしめりーむらさめふる
【大永四年四月歩千二百揺】／□□ [へつ
なよ]／月歩千二百揺／大永 4(1524) 年 3
月 23 日

さつふるてーなはあかなくにーほとときす
はなたはなのーやをわするな
【寛永仏事／広島大本】／夏／文和
5(1356) 年冬～翌年の春
まつかたに－こののみこゑよ－ほときす
やまをはなれぬ－むらさめのくも
　【三省堂句／何衣（はなきつ）／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日]

なこりをも－おもはてゆくか－ほときす
のきのとやまの－むらさめのくも
　【天文十八年春千句／－宇五郎（にえてはるに）／天文 18(1549) 年正月 11 日]

ほときす－たよりすくすな－とはかりに
やすらふそれ－むらさめのくも
　【皇学館文庫春千句／□□（はなさけは）
／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前]

たかたに－ききはそめぬる－ほときす
けしかはかりの－むらさめのくも
　【天文正月百題 57 題／何路（いのもか
も）／嘉靖／天文 14(1586) 年 1 月 3 日]

→村雨の空

ほときす－わかまつほどや－しらさらむ
やかてはれぬる－むらさめのそら
　【文明正月百首 34 首／何船（とふひと
に）／文明 13(1481) 年 2 月 24 日]

なきわれぬ－みねのあなの－ほときす
ぐものゆくへ－むらさめのそら
　【宽文正月百題 22 題／□□（むさきお
もふ）／宽文 10(1670) 年 2 月 7 日]

ひとこゑの－なごむらあらぬ－ほときす
そとときすたる－むらさめのそら
　【宽文正月百題 22 題／□□（なつはた
た）／宽文 13(1673) 年 6 月 1 日]

→山の夕暮れの空

しるべや－おもふむかしを－ほときす
やますみふかき－ゆふくれのそら
　【永正元月百題 34 首／何路（あきにか
せ）／永正 8(1511) 年 7 月 14 日]

こととふは－こころやはなき－ほときす
まちかねやまの－ゆふくれのそら
　【永正元月百題 34 首／何人（みちあ
れや）／永正 2(1505) 年 1 月 1 日]

【永正元月百題 34 首／山何（たちはな
に）／永正 18(1521) 年 5 月 7 日]

→眺める夕暮れの空

ほときす－わたれぬる－ついていて
なかめをうつす－ゆふくれのそら
　【弘治元月百題 8 首／何路（ゆくみつや）
／弘治 2(1556) 年 3 月 24 日]

ここあらむ－あるにきなけ－ほときす
なかめねたる－ゆふくれのそら
　【永禄元月百題 28 首／何人（つきなか
ら）／永禄 5(1562) 年 8 月 11 日]

→夢か現か

まてしはし－みねこすくもの－ほときす
さむるまくら－ゆふくれつつか
　【飯盛千句／何衣（つきいて）／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日]

いかにねて－こよひはきかむ－ほときす
きのふをこそ－ゆふくれつつか
　【嘉永元月百題 20 首／何阿（せみのは
の）／嘉永 4(1463) 年 6 月 23 日]

わかこころ－ありあけたの－ほときす
ゆふくれつつか－いしへのひと
　【大永元月百題 1 首／何路（いつののも）
／大永 5(1525) 年 4 月 15 日]

まちてのみなつをおくりし－ほときす
ゆふくれつつか－さめてはひしき
　【天正四年万句 70 題／何水（むしのね
や）／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日]

→遠方の遠山

ふなちも－きてくひはあれな－ほときす
むらさめたる－そののほやす
　【享徳年度百首 4 首／何路（さくふちの）
／享徳 2(1453) 年 3 月 15 日]

ほのかにて－うらすきましや－ほときす
なかめよはぬ－そののほやす
　【永正正月百題 34 首／何人（みちあ
れや）／永正 2(1505) 年 1 月 1 日]
ほととぎす

草の寝の時

ほととぎす—くもをしはしの—やとりにて
くさのｍくらノ—あかつきのそら
【文禄十四年万句52巻／石倉・「きぬがため」／文禄14(1482)年7月4日－9月
14日】

ほととぎす—なればたひとややまふらむ
くさのまくらノ—あめのあかつき
【能智篇／北野天満宮本】／永正十二年／

伯爵山

きははやな—ひとこあなりと—ほととぎす
くらはしやまに—まよふさみたれ
【文禄十四年万句52巻／朝倉・「つきひ
とつ」／文禄14(1482)年7月4日－9月
14日】

ほととぎす—へははるこそ—わかれ
くらはしやまに—さくらちるところ
【名所句集／静嘉堂文庫本】／春／（大永
前後）

つきては—おもかげにせむ—ほととぎす
くらはしやまの—あきのむらさめ
【成立不詳・心敬以前14巻／何路・「か
すみかは」／成立時不詳】

ほととぎす— COSははるこそ—わかれ
くらはしやまの—さくらちるところ
【宗部句解9巻／宗部発句並付句抜書／小松天満宮本／

柄の藤の言

ほととぎす—もよへされてや—ときらぬ
こすゑのふちの—はるのたたかれ
【伊勢千句／三字中略・「うめさきて」／
大永2(1522)年8月4日－8日】

ほととぎす—それならぬか—なきすべてて
こすゑのふちの—たたかれたのいて
【壁草／大阪天満宮文庫本】／春／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

枕苦しい

みしかよの—そらにつれなき—ほととぎす
くらくぐるしき—このとまりふね
【文禄二年万句10巻／何木・「うすき
や」／文禄2(1593)年4月8日－10日】

ほととぎす—こゑをなきけつ—すきむらに
くらくぐるしき—なつのよからす
【春夢草／書陵部本】／夏／永正12(1516)
年、13年

時鳥鳴く

ほととぎすなく

ほととぎすなく—くものをしたかた
みしかよも—たれかねさめに—なりぬらむ
【文禄十四年万句52巻／朝倉・「ひにそ
ひて」／文禄14(1482)年7月4日－9月
14日】

ほととぎすなく—あとをこぞみ
むかしたか—うゑきのもりと—なりぬらむ
【心徳関係10巻／心王集／静嘉堂文庫本

時鳥の一声

春の驚

かへるさを—いまひとこゑの—ほととぎす
なこりやをむへ—はるのうぐひす
【敦學館文庫本千句／□□・「はなにいそ
き」／永禄6(1563)年11月18日以前】

ほととぎす—ひとこゑをさへ—またせきて
もさへつりへ—はるのうぐひす
【永禄年間百錬28巻／何路・「ねにかへ
る」／永禄4(1561)年3月22日

時鳥枕のいはずど過ぎる

静かな雨

ほととぎす—まくらのいつち—すきぬらむ
しかにあめの—うちそそくそら
【伊予千句／御仏・「すさきは」／天文
6(1537)年5月22日

ほととぎす—まくらのいつち—すきぬらむ
しかにあめの—はるくさふき
待つ時鳥

→短夜の月

みゆらめや~こころのまつに~ほとときす
あかつきすめる~みしかよのつき

【天文年間百首 38 首】／何人 [みゆらめ／天文 14(1545) 年 4 月 16 日

まちまちで~いつかはきかむ~ほとときす
つきはいても~みしかよのつき

【橘長年間百首 27 首】／何人 [ねふかき／橘長 4(1599) 年 2 月 8 日

山の時鳥

→短夜の月

ほとときす~はなもまちける~みやまかな
くれはいてよ~みしかよのつき

【初開千句】／何人 [ほとときす／享徳元 2(1452) 年 4 月

なやここに~とほきやまたの~ほとときす
すきのこすゑの~みしかよのつき

【天文年間百首 38 首】／何人 [なやここに／天文 4(1535) 年 5 月 1 日

山時鳥

→旬けやらない

いくよまたるる~やまほとときす
あめきせは~あけやすきころの~あけやるて

【天文年間十百句】／何人 [いくよまたるる／天文 20(1551) 年 6 月 10 日～12 日

くもよりいつる~やまほとときす
すゑはとく~かりねせしの~あけやるて

【永禄山石千句】／初町 [しらかしの／永禄 7(1564) 年 5 月 12 日

→浅緑

きれいもおかけ~やまほとときす
うつしきの~あともこすゑの~あさみとり

【大永四年月並千二百首】／何人 [きれいもおかけ／大永 4(1524) 年 2 月 23 日

うへなくときか~やまほとときす
あさみとり~はるののこりの~はなさきて

【大永年間百首 14 首】／何人 [うへなくときか／大永 8(1528) 年 4 月 12 日

→雨晴れる

まかふやくもち~やまほとときす
ゆふなみに~うらつたひする~あめはれて

【大永三年月並千三百首】／何人 [まかふやくもち／大永 3(1523) 年 5 月 23 日

やまほとときす~ゆふへとふやと
こすまけは~ときはあらはす~あめはれて

【元和年間百首 24 首】／何人 [やまほとときす／元和 8(1622) 年 4 月 13 日

→有明

はるををしめは~やまほとときす
なこりなほ~おほろつきよの~ありあげに

【正德千句】／何人 [はるををしめは／正德 1(1521) 年 11 月 1 日～14 日

さつきすきゆく~やまほとときす
みしかよの~もまわかれぬ~ありあげに

【伊予千句】／何人 [さつきすきゆく／伊予 6(1537) 年 5 月 22 日

まつにもなかぬ~やまほとときす
ありあげに~なるへときつは~おぞくして

【近名十三歌 36 首】／何人 [まつにもなかぬ／正德元 (1332) 年 9 月 13 日

よふかきほの~やまほとときす
かりくら~さそははいつる~ありあげに

【延徳年間百首 16 首】／何人 [よふかきほの／延徳 4(1492) 年 1 月 23 日

はるもおもはし~やまほとときす
いるかたは~あかぬもしすき~ありあげに

【弘治年間百首 8 首】／何人 [はるもおもはし／弘治 3(1557) 年 8 月 28 日

【新年年間百首 15 首】／何人 [きさきはみ

な／義白／寛永 4(1627) 年 1 月 3 日

【大永四年月並千二百首】／何人 [うけ

すの／月並千二百首／大永 4(1524) 年 2
ほとぎす

→片岡の社

みやこはときとーやまほどときす
かたをおのをするあめにてたちぬれて
【難波寺関句】／「あするよ」／文
明 14(1482) 年 10 月前後

はつねめつらしーやまほどときす
かたをかのにちのごかけにてたたすみて
【板倉千句】／「さくらは

→木の下

たびにはつれよーやまほどときす
かへるやとーいふひとばはなきーこのもとに
【池田千句】／「はなはるや」／永
正 7(1510) 年春併く正 5(1503) 春

みやこつるふーやまほどときす
このもとにーはなたよりのはーかをとめて
【秋津洲千句】／「はなはるし」／天
文 15(1546) 年 8 月 25 日

ひこるまでやーやまほどときす
このもとにーいさやすすむーなつのみち
【成立不詳・宗城以前 15 巻】／「はな
かの」／成立時不詳

→春過ぎる

やまほどときすーきなこのところ
ときわかぬーたににははるやーすきぬらむ
【享徳二年関句】／「かなくらぬ」／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

あとはおののーやまほどときす
むらさめやーすきのあはるかにーすきぬらむ
【伊予関句】／「けさやはる」／大永
4(1524) 年 3 月 17 日～21 日

→花橋

やまほどときすーあやなひところ
さかりなるーはなたはなのーあさゆふに
【伊予関句】／「うつせみの」／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

みやこつるふーやまほどときす
このもとにーはなたはなのーかをとめて
【秋津洲千句】／「はなにらし」／天
文 15(1546) 年 8 月 25 日

くものむかびのーやまほどときす
ふきすくるーはなたはなのーゆふかに
【大永四年月並千二百帳】／「はつ
かし」／月並千二百帳／大永 4(1524) 年 7
月 23 日

→花散る

わかさうとときーやまほどときす
かへるにはーしかむかけなきーはならじて
【成立不詳・宗城以前 5 巻】／「みつ
たまり」／成立時不明

やまほどときすーはなほそたるる
かりそにーやとるいはりのーはならじて
【文禄年間百帳 12 巻】／「はなのい
ろや」／文禄 4(1595) 年 1 月 30 日

→短発

さつきすきゆくーはまほどときす
みしかよのーくもまわれぬーありあけに
【伊予関句】／「はるひとの」／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

かけたにとめよーやまほどときす
みしかよのーつきもいまはたーみねこえて
【宮島関句】／「はるひめてふ」／天文
20(1551) 年 5 月 9 日～11 日

→村語

わすれぬつてのーやまほどときす
むらさめにーたちよるさくらーいをりて
【三島関句】／「はるほし」／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

こゑはまくらのもーやまほどときす
さそはてーすきゆくかせのーむらさに
【弘治三年事部関句】／「はなどもとも」／
弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

しのひあまるーやまほどときす
むらさめのーすきけるくもにーよびふけぬ
【天文十八年梅千句】／何年 [つつきうむ] 
天文 18(1549) 年正月 11 日

ままたもきなかむ－やまほどときす
むらさめの－はるるあとより－うちそそき
【天文元年時百錦 57 巻】／□□ [きわくータ]／天文 18(1590) 年 10 月 8 日

→夜半の月

ゆくやいつくの－やまほとときす
あらましの－ねさめをさそへ－よはのつきて
【大永三年月並千三百錦】／□□ [しほれのもあめ]／月並千三百錦／大永 3(1523) 年 10 月 23 日

まつとやおもふ－やまほとときす
さらには－まくらもとらぬ－よはのつきて
【天文元年時百錦 57 巻】／何路 [なみこえときに]／天文 9(1581) 年 2 月 3 日

→舟に明石の泊

やまほとときす－ゆくもうらみし
ふねによびり－あかしのとまり－ことわかれ
【東山千句】／何人 [つつきるるる]／永正 15(1518) 年 8 月 10 日～12日

やまほとときす－ひこあたのそら
ふねよせて－あかしのとまり－いてかてに
【名相句集／静嘉堂文庫本】／旅／（大永前後）

→鶴

たえにしずのの－やまほとときす
うくひすの－こゑをへたつる－なははきて
【天文年間百錦 38 巻】／何路 [ひすすけ]／天文 11(1542) 年 6 月 12 日

いまはといつる－やまほとときす
うくひすの－かへるたのにの－はるくて
【宗長関係 8 巻】／王生秀／書陵邦本

→橋

おとつけすてし－やまほとときす
たちはなの－いくやとこととに－にほふらむ

【元和元年時百錦 24 巻】／□□ [としとしに]／元和 6(1620) 年 12 月 5 日

よがれかならる－やまほどときす
たちはなの－はならるつきて－ありあげに
【昭賢集／北野天満宮】／永正十三年
きけはほのかに－やまほどときす
たちはなの－にほふらくらを－そはたて
【合点之句／神宮文庫本】／夏／天文 9(1541) 年 12 月 25 日

→花咲く

うへなくときか－やまほどときす
あさみとり－はるののこりの－はなさきて
【大永三年月並千三百錦】／□□ [なつつこらも]／大永 3(1523) 年 4 月 12 日

やまほどときす－うくもになくなら
とほきのの－ひととあさち－はなさきて
【墨佐集／静嘉堂文庫本】／夏／永正 6(1509) 年以前

→花橋

やまほどときす－こゑものこすな
そてかをる－はなたはに－かせすきて
【老集／毛利本】／夏／（文明 17(1485) 年 7 月 23 日頃）

やまほどときす－こゑものこす
そてかをる－はなたはに－かせすきて
【墨句老集】／夏／永正 17 年
つきておちかえる－やまほどときす
まくらかのの－はなたはに－はみはさきて
【合点之句／神宮文庫本】／緋／天文 9(1541) 年 12 月 25 日

→春暮れる

かたふくつきの－やまほどときす
はなもいま－むかひのみとのに－はるくて
【天文年間百錦 38 巻】／何木 [あすのなを]／天文 17(1548) 年 8 月 14 日

かつこえてもの－やまほどときす
あふさかのの－おはのこそすべてなさらくに
ほどの

程が知られる

→言いしばかりに秋

さひしくなれぬーほどそらるる
つきはた−いひしはかりにーあきれて

【宗長道養十種】／何何 [うくひすの] ／
(享禄5) 天文元 (1532) 年 3 月 25 日

はるにつれなきーほどそらるる
このくれとーいひしはかりにーあきかて

【心敬関係10種】／芝草内浦歌合／天理本／

ほのか

月がほのめく

→秋風

やまをしみれは一つきそほのめく
あきかせにーくさのとほをーただいてて

【永原千種】／千何 [ひととせは] ／明応
9(1500) 年 7 月 17 日

ふかきみねより一つきそほのめく
いはかねわーかりねのとこのーあきかせに

【大永四年月並千二百帳】／口口 [うのはなの]／月並千二百帳／大永 4(1524) 年 4
月 23 日

ほのか

→秋の初風

ゆふくくよーなかむるかけもーほのかにて
おほえぬはかりーあきのはつかせ

【池田千種】／唐何 [つゆかけて] ／永正
7(1510) 年春以前＜永正 5 年春＞

なかそらにーくるれはつきのーほのかにて
ふきたけりなーあきのはつかせ

【毛利千種】／何船 [みてもおもふ] ／文
禄 3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

→ 所々
このしたの－はたやくかたは－ほのかにて
ところところに－まきしひあれさ
【称名院仏手千句】／江何［ことつむ］
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日－18 日

ふゆたに－ひつしのする－ほのかにて
ところところに－しろきはつしも
【羽柴千句】／初何［ふしたては］／天正
6(1578) 年 5 月 18 －19 日

ぼかねな霧
→衣打つ音

ほかにも－ふしみのかたは－きりこめて
たえただとうひし－ころうつおと
【称名院仏手千句】／江何［いるかたの］
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日－18 日

ほかにも－へたてしさとの－きりはれて
そともあらはに－ころうつおと
【寛正年間百首 20 巻】／余船［はなおも
き］／寛正 2(1461) 年 11 月 22 日

松虫ほのめく
→秋の深き

まつむし－ゆふかしちかく－ほのめきて
かせのまにに－あきのすすしさ
【天文年間百首 38 巻】／何人［つつきよ
る］／天文 5(1536) 年 6 月 15 日

まつむし－おこぼのめかす－のはくれて
つゆのみたれも－あきのすすしさ
【天文年間百首 38 巻】／何人［うつせよ
に］／天文 21(1552) 年 2 月 23 日

ほん

うちなめの一本

→鳥

さきつめにけむ－うめのひとと
うくひすの－うちはふきくる－そののうち
【五言一句千句】／何木［としのうちに］
／天正 9(1581) 年 11 月 19 日

やつれてにほふ－うめのひととも
うくひすの－いくはるとなき－こゑおいて
【大永三年月並千首百句】／□□［やよい
くへ］／月並千首百句／大永 3(1523) 年 8
月 23 日

こしけきなかの－うめのひととも
うくひすの－うちはふきたる－こゑすなり
【天正年間百首 57 巻】／初何［はるたち
de］／裏白／天正 12(1584) 年 1 月 3 日

菊の一本
→山気

しものそこなる－きくのひととも
やまひとの－すむあといに－たつなまし
【天文廿年短千句】／□□［つけのこせ］
／天文 20(1551) 年 6 月 10 日－12 日

ちくさしじて－きくのひととも
やまひとの－すみかはこことに－ものふるく
【長禄三年千句 1 巻】／何男［ふかふ
る］／長禄 3(1459) 年 12 月 2 日－5 日

はやちりそむる－きくのひととも
やまひとの－すさみいかなる－こころならむ
【天正四年万句 70 巻】／朝何［なみよす
る］／天正 4(1576) 年 5 月 6 日－7 月 19 日

花の一本
→春もるえる

おそきものこる－はなのひととも
しらさりし－みやまをとへは－はるくて
【文明年間百首 34 巻】／何人［ちきりあ
れや］／文明 14(1482) 年 3 月 20 日

まきのはしの－はなのひととも
とりのねも－こそかとなく－はるくて
【大永四年月並千二百句】／□□［ゆきふ
かき］／月並千二百句／大永 4(1524) 年 11
月 23 日

松の一本
→美濃の小山

あきをふるや－まつのひととも
つゆやも－みののをやまの一ふのはせき
たてるさびさしーまつのひとりと
さきのけのーみののをやまのーゆきのくれ
【竹林抄／新古典文学大系本】／冬／文明
8(1476) 年 5 月頃

たてるさびさしーまつのひとりと
さきのけのーみののをやまのーゆきのくれ
【宗御関係 9 種】／宗御句集／大阪天満宮本

やまもと

山本

→譚が越える

やまもとのーさともわれかせずーきりこめて
くるまかきをーたれかこゆるむ
【宝徳四年千句】／山町 [みにしむは]／
宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日

やまもとのーとのわきのあとのーしかのこゑ
をのへのみちはーたれかこゆるむ
【永正年間百篇 34 卷】／何人 [はなのき]
も／永正 7(1510) 年 4 月 1 日

やまもとのとこと

山本の里

→掛橋

なかはかすみーやまもとのさと
かけはしーのきはのみねにーまこたはり
【池田千句】／何船 [おそくとく]／永正
7(1510) 年春以前＜永正 5 年春＞

いつくるらむーやまもとのさと
かけはしーふむあとももくーくちはてて
【慶長年間百篇 27 卷】／□□ [つゆにみ
を]／慶長 9(1604) 年 6 月 28 日

ま

かせのまにまに

風のまにまに

→春けるる日

ちりもあくたーかせのまにまに
おくれぐーうしのあゆみのーくるるにに

かせのまにまに

→夜起る

かせのまにまにーつゆみたるらし
なみかへーみきはのみちのーくるるひに
【元亀二年千句】／何船 [ふるさとど]／
元亀 2(1571) 年 3 月 5 日

つゆのたちるーかせのまにまに
なみかへーまきあにうつーつりのくれ
【寛文年間百篇 22 卷】／□□ [さそなお
く]／寛文 13(1673) 年 7 月 28 日

浪の間に間に

→寝覚めがら

おとはたーなみのにまにーしくれきて
ねさめからなるーとまふきのうち
【嵯峨千句】／何路 [あけほのの]／（元
亀 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

なみのまにまにーうちりむれたつ
とまふきにーねさめからなるーさよあらし
【寛文年間百篇 22 卷】／□□ [なつなき
は]／寛文 13(1673) 年 6 月 12 日

まつりを待つ間

→時雨

まつとせまにーよもきふのかけ
ほとときすーなたちははねにーかへはてて
【太陽官田楽千句】／白何 [つゆならか]／
長享 2(1488) 年 7 月

まつとせまにーおくるはるあき
ほとときすーきかぬひとよいにーとしをへて
【心徳関係 10 種】／心王集／静嘉堂文庫本

ま
まい

舞の袖
→桜の舞い

あしひみもさすかよしある－まひのそて
なこりをおもふ－おはしまのおく
【五音い一日千句】／三田村蔵【くらさね】
／天正 9(1581) 年 11 月 19 日

いりあやも－したはれてまた－まひのそて
おもかけさたか－おはしまのおく
【天正年間百編 5 巻】／□ □【はなさかり】
／天正 6(1578) 年 3 月 10 日

まえ

前渡り
→星の華

ふえのね－それとはしるき－まへわたり
ふねにのり－たる－さとのくさり
【磐嶋千句】／何船【はるはゆきに】／(元
亀) 天正 11(1583) 年正月 9 日～11 日

かすかに－ふえのねも－す－まへわたり
すみかやをの－さとのくさり
【寛永年間百編 1 巻】／□ □【あさひか
け】／襄白／寛永 11(1634) 年 1 月 3 日

まがき

霧の薔
→明け離れる

きりのまがきの－ひまそひにけり
のきちかき－やまはみるみる－あけはなれ
【文禄年間百編 12 巻】／□ □【あつまや
の】／文禄 2(1593) 年 5 月 6 日

きりのまがきの－あらはなりけり
みつおつる－かたのつかの－あけはなれ
【天和年間百編 24 巻】／□ □【むかしに
や】／天和 5(1619) 年 7 月 24 日

まき

文の巻々
→如何しよう

なほおにふかき－ふみのまがき
とひるも－したしかるぬは－いかかせむ
【文禄年間百編 22 巻】／□ □【はのい
ろや】／文禄 4(1595) 年 1 月 30 日

あたらやきぬる－ふみのまがき
すめらきの－さかなきよをは－いかかせむ
【寛永年間百編 22 巻】／□ □【よもにう
つ】／寛永 10(1670) 年 8 月 29 日

まぎれる

紺れない
→寝る

すくなるみちは－まかれさりけり
かかるよ－かしこきかなや－のころらむ
【寛政百句千句】／□ □【にしきにて】／文
明 14(1482) 年 10 月前後

おひぬるひとの－まかれさりけり
いにしは－まことあるにや－のころらむ
【寛長造巻千句】／山何【こはるのや】／
（享禄 5）天文 9(1532) 年 3 月 25 日

まく

華をやけば雪
→夜もすがら

すたれをまけば－ゆきしろきやま
よくもすから－しくれしつきの－けさすみて
【弘治年間百編 8 巻】／何船【たくそにに】
／弘治 2(1557) 年 12 月 2 日

すたれをまけは－けさのうすゆき
よくもすから－あらしをそにて－かたしきて
【成立不詳・宗議以前 8 巻】／朝何【なび
くより】／成立時不詳
まくら

秋の手枕

→花黒
かたはらあかしーあきのたまくら
ましろののーくすはけばれのーはなすすき
【文亀年間百鎖4巻】／何人 [まっこえし]
／文亀3(1503)年4月29日

つゆこそのこれーあきのたまくら
やまとぼくーつつきはいるののーはなすすき
【老集／吉川本】／秋／文明13(1481)年
夏頃

仮枕

→古里の夢

わけのこすーくすはをむすふーかりまくら
みるやとたのむーふるさとのゆめ
【表徳千句】／何方 [よるやあめ] ／文明
8(1476)年3月6日 < 8 日>

はるけさーおなしやまちのーかりまくら
まとろむほとのーふるさとのゆめ
【称名院歳盡千句】／何路 [いるかたの]
／永禄6(1563)年12月14日～18日

かりくらーかたくしゅつゆのーふかきのに
むすひもとめよーふるさとのゆめ
【成立不詳・宗楽以前8巻】／何木 [とこ
なつに] ／成立時不詳

くさまくら

→掲載出する道

くさまくらーゆめのつてさへーあくるよに
かねこそるへーおきつるみち
【文亀年間百鎖38巻】／何木 [しみる
か] ／文亀19(1550)年8月25日

にはとりのーこえはきこえぬーくさまくら
つきをしるへーおきつるみち
【文亀四年方句70巻】／山何 [みかつき
の] ／文亀4(1576)年5月6日 ~ 7月19日

→夢の面影

あふひともーあらののはらのーくさまくら
つきをなひとりーゆめのおもかげ
【毛利千句】／初何 [よまともに] ／文禄
3(1594)年5月12日 ~ 16日

さきたつやーあかつきかきーくさまくら
したふもあへーゆめのおもかげ
【文亀年間百鎖57巻】／何船 [もしこ
さ] ／文亀7(1579)年1月13日
夢見てる

なみたにかかるーたまくらのつ
ものうかるーをのおりにーゆめさして
【享徳二年千句／手何／なほみとよ／
享徳 2(1453) 年 8 月 11 日～13 日

かたみかはるーたまくらのつ
いにしへのーたちかなしきーゆめさて
【大永三年月並千三百轉／口口／はると
ふく】／月並千三百轉／大永 3(1523) 年 1
月 23 日

露の手枕

女郎花

おきあかしたーつゆのたまくら
なつかしやーやとかかるのへーをみなへ
【文安雪千句／朝何／ゆきさそへ／文
安 2(1446) 年 10 月 18 日

くるれはいとーつゆのたまくら
をみなへーまねくをはなにーうちみたれ
【天文十八年梅千句／何路／ふきよるる]
／天文 18(1549) 年正月 11 日

新学枕

鶴交わす

にひたまくらはーゆめかうつつか
はちかはすーなかそののはーしのはれめ
【伊予千句／御何／すすしきは／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

にひたまくらはーあくるたひたか
はちかはすーこころふかさをーうらみわひ
【五時一日千句／三字中略／くちらさぬ)
／天正 9(1581) 年 11 月 19 日

のにかまりまくら

野に仮枕

一葉散の夢

かりまくらーすそののかにーかへなまし
いかおいてはーかたしきのゆめ
【五時一日千句／初何／やまもいさ／
天正 9(1581) 年 11 月 19 日

はかなやーのかみのさとのーかりまくら
ふきおろしをーかたしきのゆめ
【壁草／大阪天満宮文庫本／旅／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

時鳥枕のいやすく行ったるる

静かな雨

ほとときすーまくらのいつちーすきぬらむ
しつかにあめのーうちそそくそら
【伊予千句／御何／すすしきは／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

ほとときすーまくらのいつちーすきぬらむ
しつかにあめのーはるるふく
【寛永年間百編 15 号／口口／ききはみ
な／裏目／寛永 4(1627) 年 1 月 3 日

枕定めない

月を見る

まくらさためぬーなつのうたたね
うかぬのはーおもはぬかたのーつじきをみて
【春日日記紙背5 0 号／片何／まつはあ
め／応永 32(1425) 年 7 月 25 日

まくらさためぬーあきのさひさ
うたたねはーつじき口口口口ーつじきをみて
【成立不詳・心敬以前 14 号／何木／ゆ
くみつの人／成立時不詳

枕の上

月のさやけさ

なかむれはーまくらのうへのーみねのくも
かねおおくるーつぎのさやけさ
【長楽館文庫本千句／口口／はおははに
／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以来

おきそふやーまくらのうへのーあきのしも
いたまもりいるーつぎのさやけさ
【慶長年間百編 27 号／口口／はなれ
は／慶長 4(1599) 年間 3 月 21 日

枕の夢

→雁の声
まるらのゆめを——さそふあきかせ
いつくとも——おほえすとほき——かりのころ
【文明年間百録 34 巻】／□□ [ゆきのかけ]／文明年間 5 年 12 月 5 日

まるらのゆめを——さそふあきかせ
わかるないや——ありあけたので——かりのころ
【文明年間百録 12 巻】／□□ [あめのひの]／文明年間 2 年 5 月

若草枕
→秋更ける

わかくさまくら——うつらふこゑ
ときむき——たひにしあれは——あきふけて
【番外短句／何船 [はれたてに]／延文
2(1357) 年後・応安 3 年 6 月以前

わかくさまくら——うつらふこゑ
ときむき——たひにしあれは——あきふけて
【長押年間百録 6 巻】／何人 [ゆきながら]
／長押 2(1488) 年 1 月 22 日

まさご

夢の仮枕
→月に残

なはすはは——みえましゆめか——かりまくら
つきにいくたへーかけふるさと
【成立不詳・宗長以前 15 巻】／何者 [みねかし]／成立不詳
みしゆめの——のちもよなかき——かりまくら
つきにいくたへーとこのやまかせ
【文明年間百録 2 巻】／□□ [おいかみに]
／文明年間 2(1682) 年 4 月 3 日

武蔵野の原

雨を待つ
→時過ぎる時鳥

みなつきのそらの——あめやまつらむ
ときすぎて——やすらふこゑの——ほとときす
【文明年間百録 14 巻】／何人 [ちあきをも]／大永 5(1525) 年 9 月 21 日

みなつきのそらの——あめやまつらむ
ときすぎて——やすらふこゑの——ほとときす
【番外短句／老耳／天理本／
岩が枝の松
ただ松の風

→初時雨

ふりたるみやは－たたまつのかせ
さびしさは－かみなきつきの－はつしくれ
【丙辰千句】／何郎（やまかせに）／文明
2(1470)年正月10～12日

あきのまくらは－たたまつのかせ
さをしかの－なくねにしるき－はつしくれ
【丙辰四月並並並並並並並並並並並並】／□□（けふひ
くや）／月並並並並並並並並並並並並並並並並並並並
水 4(1524)年5月23日

誰を待つ

→タペ

たまゆらのよに－たれをまつらむ
いのちこそ－ものもはする－ゆふへなれ
【宝德四月千句】／唐何（さはやや）／
宝德 4(1542)年3月12日

をきふかせに－たれをまつらむ
うきあきも－きみこそらむ－ゆふへなれ
・【老書／書陵部密語筆本】／寛下／

→呼子島

はるゆくまでに－たれをまつらむ
みをつくす－こゑのかなしき－よふことり
【享禄年間百編 8 巻】／兼田（ゆふたちの）
／享禄 5(1532)年6月8日

はなのありの－たれをまつらむ
こえれは－なほはなふかく－よふことり
【下草／能谷大学本】／春／延德 2(1490)
年～3年春頃

月待つ

→愛する世の中

いってたに－もの□□□□－つつきまちて
さためなやけに－かはるよのなか
【春日日記紙筒 5 0 巻】／何郎（ことはな
に）／応永 31(1424)年9月27日
松の一群

→夜が明ける
しほにたかき－まつのひとむら
とふかの－かずもまきれす－よはあけて
【成立不詳・心仏以前 4 卷】／何人／はるふかし／成立不時詳

うらのとほきは－まつのひとむら
やまみえぬ－はみのう－より－よはあけて
【兼秋抄集／広島大学本】／雑三／文和
5(1356)年 3月 26日

まつのひとと

松の一一本

→美濃の小山

あきをふるやの－まつのひととも
つゆやる－みののをやまの－ふはのせき
【兼徳三年手名】／手名／【なはみよと】／
兼徳 1(1453)年 8月 11日～13日

たてるもさしき－まつのひとと
さきのけの－みののをやまの－ゆきのくれ
【竹林抄／新典文庫大系本】／冬／文明
8(1476)年 5月頃

たてるさひし－まつのひとと
さきのけの－みののをやまの－ゆきのくれ
【宗朝関係 9 種】／宗朝句集／大阪天満宮本／

まつのいとこな

松の藤浪

→月出る

はるちよかけよ－まつのふなちみ
なかきひも－くるれはやかて－ついきてて
【春間日記紙背 5 卷】／山田／【やよやよ
り】／応永 31(1424)年 3月 18日

はなまちえ－るまつのふなちみ
はるのの－ひかりを－ふるか－ついきてて
【文安年間編集 1 卷】／夢想／【よそくらし】
／文安 2(1445)年 3月 18日

まつに

→島

なつけかたる－まつのふなちみ
ほとときす－このゆふつよ－ほのめきて
【浅間千句】／何木／【さつとや】／永正
11(1514)年 5月 13日～19日

こえてやたかき－まつのふなちみ
ここなく－こえもくもゐの－ほとときす
【成立不詳・心仏以前 4 卷】／何人／はるゆつり／成立不時詳

まつはつす

松吹く風

→散る花

まつふくかせも－かすみはてげり
ちるはな－にはひをはるの－なこにて
【成立不詳・心仏以前 4 卷】／何人／この
もとの／成立不時詳

まつふくかせも－ゆゆはみけり
ちるはな－ををるまぐらに－めもあへて
【宗朝関係 2 種】／春／応仁元 (1467) 年
5月 10日

まつはつす

待つ時鳥

→短夜の月

みゆらめや－こころのまつに－ほとときす
あかつきすめる－みしかよのつきて
【天文年間編集 3 卷】／何船／【みゆらめ
や】／天文 14(1516)年 4月 16日

まちまちて－いつときはきむ－ほとときす
つきはいてても－みしかよのつきて
【慶長年間編集 2 卷】／□□／【ふかかき
や】／慶長 4(1599)年 2月 8日

まつに

松見える

→雉の雁

かすめとも－つきまつやまは－まつみえて
くもはるかに－かへるうかね
【春間日記紙背 5 卷】／何船／【ふりかっ
け】／応永 29(1422)年 [B] 3月 15日

とほさの－はなを－たつる－まつみえて
やまのはつかに－かへるうかね
【春間日記紙背 5 卷】／何船／【ことはな
に】／応永 31(1424)年 9月 27日
まつむし

松を頼りに

→立ち返る

まつをたよりに一ずめるはしのは
たちかへる—やとははしらの—くちのこり

【天正年間百話 7 巻】／□□［くへひす
も］／天正 14(1586) 年 1 月 4 日

まつをたよりに—かこふしあがき
たちかへる—はるものこころも—わかやかに

【文明十四年万方 52 巻】／二宇司音 [ま
つうきて] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～
9 月 14 日

山の松風

→架の風

ふるさとよりの—やまのまつき
なかなかに—かこふしあがき—しのはのいほ

【太神宮法歌千句】／何人 [しかののを]
／長享 2(1488) 年 7 月

なれてもさひし—やまのまつき
たれきてかこ—こころとめむ—しのはのいほ

【紫草／伊地知本】／雄／文明 6(1474) 年
2 月以前

→年の

ふるさとよりの—やまのまつき
なかなかに—かこふしあがき—しのはのいほ

【太神宮法歌千句】／何人 [しかののを]
／長享 2(1488) 年 7 月

なれつつすめる—やまのまつき
なかなかに—こけのこころも—さむからて

【藤原藤一／続群書類従本】／雄／長享 2
年

まつむし

松虫の鳴く

→訪う人も風の山の秋の暮れ

あかつきたらを—まつむしのなく
とふひとも—あらしのやまの—あきのくれ

【文安頃千句 4 巻】／朝何 [すあとほき]
→月の夜
まつり
大原祭り
→春の言人
おはらやまつりのそとのあまたにて
みゆきことなるはるのみやひと
【慶長年間篇題2巻】／□□／はるもこすそ
【裏本】／慶長13（1608）年1月3日
おはらやかみのまつりもちかつて
はなるかさすはるのみやひと
【天正四年万賀7巻】／山河／かみつきの
【裏本】／天正4（1576）年5月6日～7月19日

祭りする神
→森の隠れ
まつりせしひもくれゆけはかみさきて
みちはのこるめもりのこかくれ
【永禄年間篇題2巻】／渡辺／まれにとこ
【裏本】／永禄元（1558）年11月5日
まつりせしあはといかそかみのまへ
くさうしけるめもりのこかくれ
【文明十四年万賀5巻】／阿部／つゆは
けさ／文明14（1482）年7月4日～9月14日

まど
ここごまどのうち
心が窓の内
→灯の影
しっかりとこころをしむるまとのうち
かせふくよるのもしびのかけ
【寛元年間篇題2巻】／阿部／ひはなか
【裏本】／寛元3（1462）年1月25日
いつおもひたえむころそまとのうち
かかれてはまつももしびのかけ
【合点之句／神宮文庫本】／文／寛文
9（1541）年12月25日

まどをひらく
→夏衣

なれもたれをかーまつむしのこる
ふたりみしーかけもすれぬ一つきのよいに
【文明十四年万賀5巻】／宇多肆亀／ち
あかふる／文明14（1482）年7月4日～
9月14日

えらひかねたるーまつむしのこる
いつよりもひかけるとさせて一つきのよいに
【天正四年万賀7巻】／何筆／ところにま
つ／天正4（1576）年5月6日～7月19日

いかなるときをーまつむしのこる
ちきりしもーいまやかけのとーなりぬらむ
【聖観千句】／山河／ぬるとるの／明応
3（1494）年2月10日～12日

はしらになるーまつむしのこる
うらかれのーのははやさむくーなりぬらむ
【天正四年万賀7巻】／何筆／かせ
やいろ／天正4（1576）年5月6日～7月19日

まつむしのゆるさところでーまつむしのこる
さらたたーたとりしみちのーむらすさき
【成立不詳・宗長以前1巻】／名号／な
かはひと／成立不詳

いろいろなれやーまつむしのこる
いつしかにーしこきとものーむらすさき
【寛永年間篇題1巻】／□□／よのはる
【裏本】／寛永8（1631）年1月3日

まつむしのはめく
→秋の深しき
まつむしのゆふかけちくーあるのはめきて
かせのににまにーあきのすすしさ
【天文年間篇題3巻】／阿部／つきによ
る／天文5（1536）年6月15日

まつむしのこころのめかすーほまれて
つゆのみたれもーあきのすすしさ
【天文年間篇題3巻】／阿部／うつつよ
に／天文21（1552）年2月23日

松虫ほのめく
→秋の深しき
まどい

円居する
→袖の数々

なかきひも→なりあやしたふ→まとみして
いろにくくれぬ→そこのかすかす

【名称院追論千句】／何等【さかのやま】
／永禄 6(1563) 年 12 月 14 日～18 日

それはさく→はなよりはなに→まとてして
はるはこゆみ→そものかすかす

【慶長年間百題 27 巻】／□□【あまりに
のも】／裏白／慶長 5(1600) 年 1 月 3 日

まぼろし

ぼろぎ
→心使い

ゆきてとふなる→まぼろしもかな
おもかげも→ここところかびに→なるかとよ

【文安文庫千句】／花之何［ゆきふれは］／
文安 2(1445) 年 10 月 18 日

おもひをつける→まぼろしもかな
こぬひとと→ここところかびに→かはるるむ

【成立不詳・心敬以前 14 巻】／何人［こ
のもとの］／成立時不詳

み

風が身にしめる
→秋の空

なみたしくれて→かせそみにしむ
なほさりと→おもふなひとの→あきのそら

【三題千句】／何木【さかのやま】／文明
3(1471) 年 3 月 21 日～23 日

よふかやまの→かせそみにしむ
しくれぬ→ねさめはいかに→あきのそら

【集守千句】／何木【あらかりし】／長享
元(1487) 年 10 月 9 日～11 日

身にしめる

→袖に掛ける

みにしめて→おもふよいもか→いそまくら
なみのおとを→そにてにかけつ

【経豊に追論千句】／何木【おと起こめて】
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～毎日

みにしめて→いすれるぬ→そのはかみなれ
ひとのなみたを→そにてにかけつ

【永禄元年花千句】／□□【さそふなよ】
／永禄元(1558) 年 3 月 23 日～25 日

→月さやか

ことのねの→あかぬしらへ→みにしめて
おきみてみれは→つきたさやなり

【顕盛千句】／何木【さかのの】／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日

みつのえや→ゆふへのあへれ→みにしめて
よさのみなたの→つきたさやなり

【寛永年間百題 1 ５巻】／□□【ふたよあ
けて】／裏白／寛永 5(1628) 年 1 月 3 日

身の行方

→明かし暮らし

いにしへに→まかせやせまし→みのゆくへ
いたちにやは→あかしくらさむ

【伊予千句】／御所【さす仕は】／天文
6(1537) 年 5 月 22 日

たくふれは→かせまつゆの→みのゆくへ
なかめてつきに→あかしくらさむ

【文明十四年间万句 5 2 巻】／徳所【かるひ
とは】／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日
みじかい

短夜の月

→時鳥

ありあげになるーみしかよのつき
ほとときずーなほしのひねの一つれなくて
【宝徳四年判句】／山何［みにしむは］／宝徳 4(1452) 年 3 月 12 日
ここを出すーみしかよのつき
ほとときずーあるるそらにかねなれて
【寛文年間判句 2 2 卷】／□□［つなきは］／寛文 13(1673) 年 6 月 12 日
あまりみしかきーみしかよのつき
なつかりーあしのしのひのーほととき
【文政四年万句 7 0 卷】／何心［やまかけどや］／文政 4(1827) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

みじかい

短夜の夢

→忍び妻

むすふともなきーみしかよのゆめ
まちふけてーあふもぼとなきーしのひつま
【看聞日記紙背 5 0 卷】／山何［やよよひ］／応永 31(1424) 年 3 月 18 日
みるもすなきーみしかよのゆめ
ふけてあふーおわれそはやきーしのひつま
【看聞日記紙背 5 0 卷】／何何［しいういと］／応永 31(1424) 年 10 月 26 日

みじかい

身を思う

→み吉野の奥

あればあるーみともいつまでーおもふらむ
たえはやあをーみよしののおく
【夜聞判句】／白何［たますたれ］／永正 11(1514) 年 5 月 13 日～19 日
すつるみーはるはみやこやーおもふらむ
かすめはほときーみよしののおく
【文明年間築百額 3 4 卷】／何何［かせふかぬ］／文明 9(1477) 年 1 月 22 日

みじかい

身を願むな

いだる

いつくもかりのーみをなったのみそ
たれもよにーありははしのーいのちにて
【永禄年間築百額 2 8 卷】／山何［ゆふかほに］／永禄 2(1559) 年 5 月 20 日
ゆふへのつゆのーみをなたのみそ
けさのまをーつきかけるふーいのちにて
【宗割関係 9 種】／宗割句／静嘉堂文庫本 a

みじかい

左若

→必争う歌

ふくふえにーあはするまひのーひたりみき
こころあらそふーうたのくちくち
【初協判句】／何衣［しけるとも］／享徳元・2(1452) 年、4 月
ゆるらはーおなしくるまのーひたりみき
こころあらそふーうたのかたち
【文明十四年万句 5 2 卷】／黒何［あけてみむ］／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月 14 日

みじかい

→疏花の筆

とけてやはみるーみしかよのゆめ
かせそよくーなはのにあしの一かりまくら
【那智騏／北野天海書】／永正十二年／
おもかけをしきーみしかよのゆめ
あふほともーなりはのにあしきのふしみ
【那智騏／北野天海書】／永正十三年／
みず

秋の沢水

→鰤鳴く

をふねさをさすーあきのさはみつ
やまかげのーとこそたまらぬーしきなきて

【伊予千句】／倉舟／【おきでみむ】／天文 6(1537)年 5月 22日

しばふかくれのーあきのさはみつ
ゆふまくれーきりふるつきにーしきなきて

【文安室間百錬 9 巻】／何人／【なましらぬ】／文安 4(1447)年 8月 19日

池水

→永解け行く

いけみつのーつきかけあらふーやなきかな
こほりとくゆーなみのあさかせ

【嵯峨千句】／山何／【いけみつの】／(元龟 4)天正元(1573)年正月 9 日ー11 日

いけみつのーささみさそふーはるのかせ
いはまはまのーこほりとくゆく

【慶長室間百錬 27 巻】／□□／[のはるさめも]／慶長 9(1604)年 10月 6日

いさら井の水

→硯ける夜

こほりのひまのーいさらおのおみつ
かはおとのーあめかときけはーあくるよに

【天文案四題千句】／何木／【つみそへよ】／天文 24(1555)年正月 7日

かすみにむせふーいさらおのみつ
うくひすーこあするかれーあくるよに

【大永四年月並千二百錬】／□□／【うのはな】／月並千二百錬／大永 4(1524)年 4月 23日

懸橋に受ける水

→ここかしこ

かけひにうくるーみつのまにまに
ここかしこーいはのはさまもーうるたに

【伴言千句】／□□／[ちりうせぬ]／
かけひにうくるーおほどのはみつ
ここかしこーなかれのすあーいせのうみ

【天正四年敷聞く 5 巻】／下何／[むらさきの]／天正 4(1576)年 5月 6日ー7月 19日

かすみのうちのみつさまから
護の内の水の水上

→言問う

かすみのうちのーみつののみかみ
こととはむーいつくはるのーみなとかは

【天文室間百錬 38 巻】／何人／【はなのいろも】／天文 14(1545)年 2月 25日

かすみにおっつーみつののみかみ
はるくるーうちのしはふねーこととはむ

【行助関係 4 巻】／行助句集／書陵部本／
文正元(1466)年(7月 16日)

すきやきのあと

沢水の音

→舟下す伏見

きけはさむけきーさはみつのおと
ふねたくすーふしみのつつきーふくるよに

【竹林抄／新古典文学大系本】／秋／文明 8(1476)年 5月頃

きけはさむけきーさはみつのおと
ふねたくすーふしみのつつきーふくるよに

【心敬関係 10 巻】／心敬僧都百句／岩倉文庫本／文明 7(1475)年 4月 16日以前

きけはさむけきーさはみつのおと
ふねたくすーふしみのつつきーふくるよに

【名所句集／静嘉堂文庫本】／秋／(大水前後)

つきもさひきーいはみつのおと
ふねたくすーひとふしみのーえばふけて

【心敬関係 10 巻】／吾妻鏡抄／天理本

懸橋に受ける水

→ここかしこ

かけひにうくるーみつのまにまに
ここかしこーいはのはさまもーうるたに

【伴言千句】／□□／[ちりうせぬ]／
かけひにうくるーおほどのはみつ
ここかしこーなかれのすあーいせのうみ

【天正四年敷聞き 7 巻】／下何／[むらさきの]／天正 4(1576)年 5月 6日ー7月 19日

かすみのうちのみつさまから
護の内の水の水上

→言問う

かすみのうちのーみつののみかみ
こととはむーいつくはるのーみなとかは

【天文室間百錬 38 巻】／何人／【はなのいろも】／天文 14(1545)年 2月 25日

かすみにおっつーみつののみかみ
はるくるーうちのしはふねーこととはむ

【行助関係 4 巻】／行助句集／書陵部本／
文正元(1466)年(7月 16日)
水の音

→何処にある

うつみつる－たけはかけひの－みつのおと
いしまのこけは－いつくならるる

【天正年間百編 5 7巻】／何人（ときはいか
）／天正 16(1582) 年 5 月 24 日

とめよれば－くるうるいはまの－みつのおと
いつくならるらむ－たきつかはかみ

【慶長年間百編 2 7巻】／□□（さきかかむ）／慶長 19(1614) 年 1 月 3 日

水の錦絵

→柳陰

つきにひかるや－みつのさひあゆ
えたかはす－もみちはいかに－やなきかけ

【寛永版前編第 7 巻】／□□（いれかせて）
／寛永 14(1417) 年 3 月 16 日

みしづかくれの－みつのさひあゆ
ちるとみて－そてにいろつく－やなきかけ

【文安年間百編 9 巻】／何人（ときはなる）
／文安 8(1444) 年 10 月 12 日

水の末見える

→廃れ橋の一筋

たきとり－みつつをむすひしおすゑみえて
やまくれかかる－はしのひとすち

【秋津洲千編】／何人［ひとかき］／天
文 15(1546) 年 8 月 25 日

こほりとく－みつつをつみの－すゑみえて
たえたえくる－はしのひとすち

【元亀年間百編 6 巻】／何船（むさしのも）
／元亀 3(1572) 年 3 月 18 日

水の絶え絶え

→朝水

みずすすてたる－みつのたえたえ
ふゆはまた－あさかのぬまの－あさこほり
みだれる

【園亜第一／続群書類従本】／冬／長享 2
年
かけひのいばに—みつのはたえ
あさこはり—こよひはして—むふらむ
【宗長関係三種】／老耳／天理本／

みずのひとすじ
水の一筋

→潮

そくくはかりの—みつのはとすち
ふりにける—あたやとなたの—たきながらむ
【大水四月箇千二百箇】／月々／や
海）／月と千二百箇／大水 4(1524) 年 9
月 23 日

みなかみしらぬ—みつのはとすち
そえやた—うきおとなしの—たきながらむ
【名所句集／静嘉堂文庫本】／増下／（大
水前後）

水は澄む

→明け方

あかてみせの—みつのはすけり
あけたの—たきよりうへ—ときなれや
【石山四吟小集】／青行【つきやふね】／
天文 24(1555) 年 8 月 15 日—19 日

くみにはまの—みつのはすけり
あけたの—ときにしてぬる—そてみえて
【慶長年間百箇 2 7 巻】／□□【けふこと
に】／表白／慶長 8(1603) 年 1 月 3 日

水晴れる

→朱のそぼ舟

かけおおき—ゆふひのいえ—みつのはて
なみもよりくる—あけのそほね
【息学館文庫本千句】／□□【きてかへる】
／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日以前

はるはると—やまもといふる—みつのはて
たびねするよの—あけのそほね
【壁草／書陵部本】／城／永正 9 年

みつひややかに—おつるかはつら
あしのはも—たたかれわたる—たちつはな
【天正四年万句 70 巻】／山間【みつつき
の】／天正 4(1576) 年 5 月 6 日—7 月 19 日

みつひややかに—すみわたるこゑ
おちくすーはなのこのまの—たちつはな
【天正四年万句 70 巻】／玉何【まつはら
も】／天正 4(1576) 年 5 月 6 日—7 月 19 日

山の井の水

→木の下

むすふはつきぬ—やまのあみのみつ
このもとに—ひとふたつの—こけのいほ
【成立不詳／宗長以前 1 5 巻】／花之何【ふ
ゆのいほ】／成立時不詳

むすこふかし—やまのあみのみつ
すすしきは—きりのわかはの—このもとに
【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505) 年 8 月 23 日以後同 3 年 3 月以前

みだれる

【庭堂品】

露が乱れる

→朝霧

つゆをたるる—にはのたまささ
あさきりの—まかきにつる—さしごこり
【楽音千句】／□□【くれかたち】／

あめにもまさり—つゆをたるる
あさきりの—みのしろころも—しれをはきて
【壁草／続群書類従本】／秋／永正 3(1506)
年 3 月頃

露に乱れる

→飛ぶ蝶

つゆにみたるる—あしのひむら
くれぬれは—きりのひまひま—とふばたる
【楽音千句】／□□【ときももや】／

ねにこそかれ—つゆにみたるる
したもえを—しきのふののきに—とふばたる
みち

【心密関係１０種／心密僧都百句／岩倉文庫本／

「乱れ雯」

→青柳の系

たはけつしーずちともあらぬーみたれかみ
つゆにぬれぬーあをやきのいと

【文統年間百句１巻／白河 [はなさけ
と]／文3 2(1593)年2月18日

「かきやるは一つれなきかけのーみたれかみ
いているかとのーあをやきのいと

【扇畫第四／早稲田大学本／巻／永正6、7

「乱れて飛ぶ蜜

→水の涼しさ

とふばるーつゆにみたれてーくるのに
ひとりかけするーみつのすずしさ

【扇守千句／初期 [おかこゑ]／長幸
元 (1487)年10月9日<〜11日>

かたしきのーそてにみたれたーとふばるる
なかるるおともーみつのすずしさ

【石山四時千句／春何 [つきやふね]／
天文24(1555)年8月15日〜19日

「みち

acd

幾重豊浦の竹の下道

→また月ある雪の晴れる

いくへとよるーたけのしたみち
にしにまた一つきあるゆきのーけさはれて

【竹林抄／新古典文学大系本／冬／文明
8(1476)年5月頃

いくへとよるーたけのしたかけ
あめにまた一つきあるゆきのーよるはれて

【心密関係１０種／心王集／静堂堂文庫本

「帰るさの道

→なる

あさたかひのーかへるさのみち
かきもりーそらやゆきにもーなりつらむ

【天文十八年梅千句／何禅 [つきにうめ]
／天文18(1549)年正月11日

かすみこめたるーかへるさのみち
なみたにやーおほろつきよーとなりつらむ

【文明十四年方句52句／山何 [つゆや
けさ]／文明14(1462)年7月4日〜9月
14日

霞にたたる道

→呼子島

かすみにたたるーいはのかけみち
よふことりーなきてこころのーしるへせよ

【扇守千句／白河 [ことからし]／長幸
元 (1487)年10月9日<〜11日>

かすみにたたるーみちのをちこ
よふことりーこゑするかたにーひはくれて

【天文十八年梅千句／何禅 [ゆけはうめ]
／天文18(1549)年正月11日

川浴いの道

→暁

みつうちけふるーかはそひのみち
 accru

あかつきのーときのこるえにーふねさして

【国越千句／二学反音 [はるみても]／
文明2(1470)年正月10〜12日

かすかにのこるーかはそひのみち
あかつきのーやまにかかれるーよはのつき

【文明年間百句34句／何木 [うめかか
を]／文明15(1483)年2月19日

→濁し島

くたれはあさきーかはそひのみち
はやせにーおとされてーのーわたしうね

【成立不詳・宗祇以前15句／xila [は
るやたつ]／存疑／成立時不詳

つつくともなきーかはそひのみち
くれぬれはーひとりふたりの一ーわたしうね

【天文年間百句57句／何人 [みれはみ
し]／天文12(1584)年9月13日
霧の下道
→音がする

まわれてみぬーきのしたみち
たれとしもーかわすつまつーおとはして
【伊勢聖本院注】三字中略・うめさきて
大永2(1522)年8月4日〜8日

あふひととなきーきのしたみち
さとときはーみやまにたきーおとはして
【新解関係10種】信楽僧都百句・岩瀬
文庫本

木の下道
→片断

ゆふへすすしきーこのもとのみち
しっかりなるーかせのさゆりはーかたしきて
【宗政延善本千句】山河.[ちるちぬ]／
永禄4(1561)年9月14日・15日

あくるもははーこのもとのみち
さよろもーはなのにほにーかたしきて
【合点之句・神宮文庫本】春・天文
9(1541)年12月25日

里離れた道
→重なる

さとはなれるーまつかけのみち
おちはなほーくつるかうへーかさなりて
【称名院追喜本千句】何陽.[さかのやま]／
永禄6(1563)年12月14日〜18日

さとはなれるーみちのたええ
かひすれるーまくははみとりーかさなりて
【文禄年間百箇12巻】□□[はかつな
みし]／文禄2(1593)年1月8日

月の旅の道
→後の世の秋

つきたびのちも

道絶え絶え
→雪かる
道である

→掛橋の末

ひとすじやーこかけにつつくーみちならむいはまこけむーかけはしのすえる
【文集関語文庫本千本】／丁丁 いいたてむきの [文集関語文庫本千本]／丁丁 立白 (1677) 11 月 18 日以前

かたやまきしもーかけはしのすえる
【元亀四年間本各巻 4 巻】／文三 ふかたん (1677) 6 月 6 日

道の辻占

→待ち結び

ききもさざめぬーみちのつしようら
はるかれるーたひのかーサーーまちわび
【文集関語文庫本千本】／丁丁 わたくらの [文集関語文庫本千本]／丁丁 立白 (1677) 5 月 12 日

こひにまへーるーみちのつしようら
まちわびてーわれとははやとーおもふみに
【文安頃千句 4 巻】／二三 近藤 (1677) 6 月 6 日

道の一筋

→放料

たなかにつくーみちのひとすら
はなれこまーいはふかたにしーゆきついて
【文集関語文庫本千本】／丁丁 わたくらの [文集関語文庫本千本]／丁丁 立白 (1677) 5 月 6 日

さととみえぬむーみちのひとすら
つなながらーいつくよりかはーはなれこま
【文集関語文庫本千本】／丁丁 わたくらの [文集関語文庫本千本]／丁丁 立白 (1677) 5 月 6 日

→行き連れる

たなかにつくーみちのひとすら
はなれこまーいはふかたにしーゆきついて
【元亀四年間本各巻 4 巻】／丁丁 わたくらの [文集関語文庫本千本]／丁丁 立白 (1677) 5 月 6 日

かよふをのへのーみちのひとすら
このかたはーたききしはとーゆきついて
みつぎ

【文明十五年丁十一月】／専路【ひめもの】／文明5(1483)年正月日～3月2日

道の安らぎ

→星の傍ら

やなぎるる-caかねのみちの-やすらに
ややくれかかる-さとのかたはら

【天文十二年四月】／何人【かせみえて】／千日第四・天文13(1545)年四月25日

たまほこの-みちもすすき-やすらに
みやこにたる-さとのかたはら

【文禄二年四月】／何人【かれたても】／文禄2(1593)年4月8日～10日

山の下道

→時鳥

むらさめすくる-やまのはしたみち
まちてみょーなかたはあらし-ほぼときす

【文禄年間百顔34番】／何人【ゆきのやま】／文禄14(1482)年1月16日

とふにならはぬ-やまのはしたみち
またときく-たひのゆくての-ほぼときす

【文禄年間百顔34番】／何人【みやまきに】／文禄14(1517)年3月22日

→きのとりの音

そよきたのは-やまのはしたみち
さをかした-たちととらる-こそすなり

【文禄年間百顔57番】／何路【なみこえて】／文禄9(1581)年2月3日

きりのあしたの-やまのはしたみち
さをかした-いまひとところは-かすかにて

【台所之句】／神宮文庫本／文禄9(1541)年12月25日

→鹿鳴

きこりたたむ-やまのはしたみち
くさからの一ふえにはよらぬ-しかなきて

【観光関係2種】／観光自遊旅行／望風

ゆふきりふかき-やまのはしたみち
いりあひの-こそすかすれば-しかなきて

【基註集／静嘉堂文庫本】／秋／永正
6(1509)年以前

別れ路の跡

→流影

あくかれいつる-わかれのあと
おもかけに-わかたましびや-つれぬらむ

【鶴波田千句】／□□【あけのを】／文
明14(1482)年10月前後

くもそかたみ-わかれのあと
ゆふへに-あとともならる-おもかけに

【鶴波田千句】／□□【にしきにて】／文
明14(1482)年10月前後

みつぎ

【運ぶ員】

→国に従

はこふみつきの-おほきしなしな
このくにに-よものがん-したかへて

【観光記録書50番】／山何【ますしみて】／応永26(1419)年2月6日

はこふみつきの-ふふそまなき
わかくに-ちよこしまも-したかへて

【観光記録書50番】／【やまもとは】
／文安5(1448)年以前

→国に従

たまこかね-はこふみつきの-かすかに
もろこしまも-いさそかたかふ

【観光記録書50番】／何物【かみとう
め】／応永29(1422)年2月25日

はこふみつきの-ふふそまなき
わかくに-ちよこしまも-したかへて

【観光記録書50番】／【やまもとは】
／文安5(1448)年以前
みね
雲かかる峰
→花盛り
みるかうちよりーくもかかるみね
はなさかりーかすみはるれはーあらはれて
【文禄年間百額12巻】／□□ [わかなつみし]／文禄2(1593)年1月8日
きゆるとみしもーくもかかるみね
かつらきやーさきつきてのーはなさかり
【文禄年間百額12巻】／□□ [うめかえや]／文禄4(1595)年7月21日

峰越える
→春の雁
くもにけふーはならちはつるーみねこえて
きけはいまはのーはるのかりかね
【長享年間百額6巻】／何人 [ゆきながら]
長享2(1488)年1月22日
ゆきおくれーひとりかすみーみねこえて
よはおけたのーはるのかりかね
【大永三年月並千三百額】／□□ [はるをまつ]／月並千三百額／大永3(1523)年11月23日

峰高い
→ささ白鹿の声
みねたかみーへつるつきのーあきふけて
つまやいくのーさをしかのこゑ
【宗長追善千句】／白何 [みややつろ]
(享禄5)天文元(1532)年3月25日
かたをかのーへのむかひのーみねたかみ
あけはなれてもーさをしかのこゑ
【元亀年間百額6巻】／何人 [はなのときも]／元亀4(1573)年6月6日

峰の秋風
→鷹蜉
つきさやかなるーみねのあきかせ
かきつらねーみたれぬくもにーかりなきて

峰の雲
→山時鳥
あらましにーこよびもあけぬーみねのくも
かなさいつのーやまほとときす
【永正十花千句】／何船 [ねぶを]／永正13(1516)年3月11日〜4月1日
なかめつつーかたもつらきーみねのくも
いつはこえしてーやまほとときす
【成立不詳・宗聖以前8巻】／何木 [ことなに]／成立不詳

峰の雪化け
→松風の声
みねのいほーはのののちもーすみあかて
さひしさならふーまつかせのこゑ
【長享年間百額6巻】／何人 [ゆきながら]
長享2(1488)年1月22日
しつけはーひとりかうへのーみねのいほ
ともとたのむーまつかせのこゑ
【永正年間百額34巻】／何路 [はやのみに]／永正12(1515)年11月10日

峰の掛橋
→猿叫ぶ
かははそこなるーみねのかけはし
さるさけふーこゑさへさむきーたきのもと
【錦様院会千句】／何人 [えたわけの]／
宝徳元(1449)年8月19日〜21日
こすゑのあきのーみねのかけはし
さるさけふーやすちのつきのーありあけに
【永禄年間百額28巻】／□□ [つゆはそてに]／永禄4(1561)年9月19日

峰の雲
→山時鳥
あらましにーこよびもあけぬーみねのくも
かなさいつのーやまほとときす
【永正十花千句】／何船 [ねぶを]／永正13(1516)年3月11日〜4月1日
なかめつつーかたもつらきーみねのくも
いつはこえしてーやまほとときす
【成立不詳・宗聖以前8巻】／何木 [ことなに]／成立不詳

峰の雪化け
→鷹蜉
つきさやかなるーみねのあきかせ
かきつらねーみたれぬくもにーかりなきて

峰の雲
みや

→塩ゆる

のはしもかれの－みねのしらゆき
さとふりぬ－たかよひちの－のところらむ
【業野千句】／郵路 [あふちさく] ／延文
2(1357) 年以前 ∴安 3 年 6 月以前

それとはかりの－みねのしらゆき
いつおきて－かれののしもは－のころらむ
【業野千句】／山何 [ゆぶたは] ／延文
2(1357) 年以前 ∴安 3 年 6 月以前

ふりそめけりな－みねのしらゆき
まったくく－しくれのくもや－のところらむ
【業野千句】／何色 [なみしけし] ／文正
元 (1466) 年 3 月以前

みや

古の宮

→花 =$

はるのこころは－いにしへのみや
をかのへ－なきさのさくら－はなさきて
【名所句集／静嘉堂文庫本 ／春／（大永前後）

たまをみかける－いにしへのみや
よしのなる－ときつかはつら－はなさきて
【名所句集／静嘉堂文庫本 ／春／（大永前後）

みや

古宮の內

→鷲

すたれやつるる－ふるみやのうち
つはくらめ－いているのみの－ひましまく
【寛正年間百額 20 巻 ／何人 [うめおく]
る／寛正 6(1465) 年 1 月 16 日

はるをわすれぬ－ふるみやのうち
おなしに－こころやかくる－つはくらめ
【広解関係 4 種 ／広解句集／書陵部／

みやこ

ふるきみやこの是る

古き都の春

→うち瀧む

ふるきみやこの－はるのはかなさ
しほかやや－けふりしなこり－うおかすみ
【明応年間百額 22 巻 ／山何 [つきてパ
とに／明応 5(1496) 年 8 月 15 日

ふるきみやこの－はなのはみどると
つゆかかかる－みつねの化くさ－うどかすみ
【大永三年三月並千三百額 ／□□ [はな
つき／月並千三百額 ／大永 3(1523) 年 3
月 23 日

みやこがうわしい

→鳴く時鳥

峰の古寺

→花 =$

くものなかはの－みねのふるてら
まったてる－はやしのおくに－はなさきて
【四幡千句 ／何人 [みるたたは] ／文明
7(1475) 年 11 月 26 日 ＜～28 日＞

かさなるのきの－みねのふるてら
をはつせや－らるあとももほ－はなさきて
【天正年間百額 57 巻 ／何木 ［ここらあ
de に／天正 3(1575) 年 1 月 7 日

峰の霜

→とが春る

みねのゆき－いくへともなく－ふみならし
つまきこりつむ－としはくけり
【出興千句 ／白何 [あおやきや] ／永正
元 (1504) 年 10 月 25 日～27 日

あさなあさな－はたちるかふ－みねのゆき
はやのこりなく－としはくけり
【天文年間百額 38 巻 ／何路 [あきかほ
の] ／天文 10(1541) 年 7 月 29 日
みる

惜しんで花を見る

→桜の梅の香

みなひとの－をしむよらぬ－はなをみて
をりてかへは－そてのうめかか
【飯盛千句／河路／のるにきに／元禄
4(1651)年5月27日〜29日】

をしみかね－ちにまかする－はなをみて
をらすきぬる－そてのうめかか
【大永四年月並千二百句】／△△／うくひ
すの／月並千二百句／大永 4(1524)年2
月23日】

尾上の花を見る

→波に春れる

あすはみむ－をのへのはなの－いかならむ
かすみくる－かねのさひかし
【慶長年間百句 27 矢／△△／ゆきにし
も／裏名／慶長 9(1604)年1月3日】

くもとみしーをのへのはなの－あたもなし
かすみくる－かねのさひかし
【慶長年間百句 27 矢／△△／うめかか
は／裏名／慶長 11(1606)年1月3日】

風見るる

→初曇の声

はなすきーなひくはかりに－かせみえて
つきにほのき－はつかりのこる
【明応年間百句 22 矢／何人／ひかしほ
ふ／本式／明応 5(1496)年1月9日】

むらさめに－つゆふきみたす－かせみえて
すすきになひく－はつかりのこる
【新撰英釈波集／実隆作／秋上／明応
4(1495)年9月26日】

月見る

→秋風が吹く

たのむよに－またふけはてぬ－つきをみて
とふかときけは－あきがせそふく

みやこと

宮事もない

→花が衰える

かすみのはばは－みやこともなし
ときすくくる－ここはのはな－おとろへて
【三島千句】／三字中略／はるよまて／
文明3(1471)年3月21日〜23日

うきときはまた－みやこともなし
あきふかみーはなのきとも－おとろへて
【心斎関係 10種】／吾妻達云拾／天理本
花見える
→春の声

ものをふかきし、けむりをゆげは、はなみでて
やどをしめる、うくひふるこえ
【文安元年百鎖 9 卷】/ 朝何に【さきがはに】
文安 4(1447) 年 10 月 18 日

松見える
→春の声

かすめと一、つまつやまは、まつみでて
くちはるかに、かへるかんかね
【看聞記記第五 9 卷】/ 何路に【ふりかつけ】
応永 29(1422) 年 [B] 3 月 15 日

水の未見る
→春の声

たきとり、みつをむすひし、すみみて
やまくれかかふる、はしのひとす
【秋陰博士 9 卷】/ 何路に【ひとさかり】
天文 15(1546) 年 8 月 25 日

むかし
→紅葉散る頃

さもあらぬ、なきなになして、みるもうし
あらしのやまを、もみおちくるところ
【延德一年百鎖 1 卷】/ 何人【まつみよと】
延德 4(1492) 年 2 月 8 日

むかう
語るばかり、にむかうがおもかげ
→それでない声

かたるはかりに、むかふおもかげ
それなら、ふこえも、むつまし、みこと

むかって、なみだるる
→なる

むかへは、つきに、なみだおおけり
おいさりし、あきは、たかよに、なりぬらむ
【竹林抄/ 新古典文学大系本】/ 何下/ 文明 8(1476) 年 5 月頃

むかふくさきに、なみだおおけり
たかさとの、やき、かぞまと、なりぬらむ
【園戸第四/ 早稲田大学本】/ 何下/ 天正 6, 7 年

むかし
→蓬生の影

かたるよも、おなしえなる、むかし、にて
あたりよりまつ—よもきふのかげ
【弘治三年春雪千句】／何木 [はならて]
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

はなさけはおもひやらるる－むかしにて
はるともわかぬ－よもきふのかけ
【天正三年二月五日】／山河 [あおやきの]
／天正 3(1575) 年 2 月 2 日

むかしをいまの
－髪の毛

むかしきものをの‐おもかかのゆめ
おもひいてて－ふるきみやこの－ほどときす
【住吉千句】／山河 [そめささら]／大永
元 (1521) 年 11 月 1 日～14 日

むかしをいまの－こころとやせむ
わすれずも－なつはきてなく－ほどときす
【天正四年万句 70 卷】／花町 [うくひすの]
／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

昔を思う涙
－秋は悲しい

むかしよもふーなみたにつきや－くもるま
いとねさめの－あきそかなかし
【成立不詳・宗顕以前 1 卷】／□□ [ま
たもなき]／成立時に不詳

むかしよもふーなみたにもつゆや－そひのうへ
ひとのこころの－あきそかなかし
【文禄元年万句 1 卷】／□□ [けさのま
に]／文禄 2(1593) 年 1 月 14 日

－春の風

むかしよもふーこよびはなみた－もよぼして
くさのいはりの－あめのさしふし
【初瀬千句】／何人 [なつやまに]／享徳
元・2(1452) 年・4 月

むかしよもふーなみたにかすむ－よほのつき
くさのいはりの－ゆふくれのはる
【文明十四年万句 52 卷】／何木 [あきの
ひも]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

むさしの
遠き武蔵野
－草枕

ゆけともいまた－ほきむさしの
くさまくらもゆめもみながら－あはれにて
【天文十八年春月千句】／何隆 [しつくさへ]
／天文 18(1549) 年正月 11 日

わけてもすなのが－ほきむさしの
おのつかから－やることかの－くさまくら
【常陸日記氏記 4 卷】／何人 [まつちか
し]／応永 32(1425) 年 6 月 25 日

むし

繁き虫の音
－夜半の月

かへのうちにも－しぶきむしのね
みえこしも－ゆめとほさかけは－よほのつき
【大原野う花千句】／何隆 [かをりきて]
／元亀 2(1571) 年 2 月 5 日～7 日

かせややさむき－しぶきむしのね
やとれとは－すみやはあらす－よほのつき
【宗顕関係 8 種】／老耳／天理本

虫鳴く
－森の下道

をかへの－かきはもきたき－むしなきて
ゆふかせゆふかき－きのしたみち
【板貯千句】／何衣 [つきいてて]／永禄
4(1561) 年 5 月 27 日～29 日

あさほらけ－わけゆかたに－むしなきて
そでさむかなる－きのしたみち
【文明十四年万句 52 卷】／何船 [あきの
いる]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

むしのこえ
虫の声
－秋更げる
むしのこゑ－きけはいまはた－をりはへてゆふれふかき－つゆそみたる
【大永三年月並千三百錦】／□□□【あちたまの】／月并千三百錦／大永3(1523)年12月23日

みちのへに－なきよゆたる－むしのこゑ
ゆけはもすそに－つゆそみたる
【文明十四年万方錦52巻】／騒作【つきひとつ】／文明14(1482)年7月4日～9月14日

かれのにも－なほかけたのむ－むしのこゑ
ひとむらすすき－ちりなつくそ
【三島錦】／何路【なへてよの】／文明3(1471)年3月21日～23日

わひしきは－かれのこたる－むしのこゑ
ひとむらすすき－うななひくかけ
【五時一日錦】／何路【いそなみ】／天正9(1581)年11月19日

むしのねも－みたるつゆの－しつけきのに
とへはなみたの－ふるさとのあき
【大永三年月並千三百錦】／□□□【うめかかや】／月并千三百錦／大永3(1523)年2月23日

むしのねも－きえわたるよ－ありてあけに
あはれなそへ－ふるさとのあき
【天文年間百錦38巻】／夢想【むりてなほ】／天文10(1541)年3月

むしのねも－みたるつゆの－しつけきのに
とへはなみたの－ふるさとのあき
【大永三年月並千三百錦】／□□□【うめかかや】／月并千三百錦／大永3(1523)年2月23日

むしのねも－きえわたるよ－ありてあけに
あはれなそへ－ふるさとのあき
【天文年間百錦38巻】／夢想【むりてなほ】／天文10(1541)年3月

むしのねも－みたるつゆの－しつけきのに
とへはなみたの－ふるさとのあき
【大永三年月並千三百錦】／□□□【うめかかや】／月并千三百錦／大永3(1523)年2月23日

むしのねも－きえわたるよ－ありてあけに
あはれなそへ－ふるさとのあき
【天文年間百錦38巻】／夢想【むりてなほ】／天文10(1541)年3月
むしろ
さ廻
→鳴く蜂
さむしろに一かれゆくはの一いつきもしれ
たのはゆめにーなくきよりきります
【永禄年間百錬 2巻】／何人 [ふくやい
かに] ／永禄 5(1562) 年 3 月 7 日

わひしは一ひとりの気のーさむしろに
なみたなそへーなくきよりきります
【元和年間百錬 4巻】／□□ [まつふく
や] ／元和 8(1622) 年 10 月 29 日

さ廻の月
→軒の松
みをこからしの一さむしろのきつ
とこふりてーひたすらひとりは一のきのまつ
【宗長後福布巻】／何色 [うくひの] ／
（享禄）天文元 (1532) 年 3 月 25 日

しもおきそふーさむしろのきつ
くれてよりーこゑかしあましーのきのまつ
【永禄石山手錬】／三三中略 [こするまで]
／永禄 7(1564) 年 5 月 12 日

むね
胸の思い
→我が夢
むねのおもひそーとふにきえぬる
わかなみたーかさねておちはーいかせむ
【弘治三年春朝手錬】／何果 [はなかなか]
／弘治 3(1557) 年正月 7 日～9 日

むねのおもひそーしほしめうき
わかなみたーくへへのいろをーからころも
【成立不詳・宗範以前 6巻】／何人 [みつ
たまり] ／成立時不詳

むらさめ
秋の村雨
→霞が夏い
うらつたひするーあきのむらさめ
ぬれとほるーわたつひこもーつゆもうし
【文安年間百錬 9巻】／山何 [はなはひも]
／文安 5(1448) 年 2 月 5 日

やまのかけゆくーあきのむらさめ
ふりでむーいのほりのののーつゆもうし
【文明十四年分校 5 2巻】／山何 [あきか
せに] ／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

風の村雨
→時鳥
ふきおくもるー一かせのむらさめ
ほときーまきれはててやーすきぬらむ
【出陣手錬】／何木 [しもから] ／永正
元 (1504) 年 10 月 25 日～27 日

あとよりふれるーかせのむらさめ
ほときーはなもちあへーはやなきて
【壁草／続群書類従本】／夏 ／永正 3(1506)
年 3 月頃

過ぎる村雨
→時鳥
くもるとすれはーすくるむらさめ
したふとーいちちはやいかてーほときーす
【長享年間百錬 6巻】／朝何 [はるくさは]
／長享 2(1488) 年 4 月

むらくもとぼくーすくるむらさめ
ひとこゑの一ほかにはきかいーほときーす
【天正四年分校 7 0巻】／三三中略 [かせ
たえて] ／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月
19 日

晴れる村雨
→一聲の時鳥
ふくるまくらにーはるるむらさめ
ひとこゑはーきこそわかねーほときーす
村雨
→鳴く時鳥
ひとむらさめの一つのところやま
かへりなく一晩にきつてるほどとつ
【寛永年間百編 15 巻】／扉目 [はるをう
る]／扉目 / 寛永 2(1625) 年 1 月 3 日
ひとむらさめの一すくるをちかた
つゆのまの一やとりきくなりなけーほどとつ
【天正四年方冊 7 卷】／竹何【まつほと
や】／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

村雨
→鳴く時鳥
むらさめの一ひめくりまつーなかやとり
ここをわずすーなくほとつ
【文楽十句】／何鳥 [こころさへ] ／文明
4(1473) 年 12 月 16 日～21 日
むらさめの一なこりにしはしーくもうきて
なけほとつーひよこゑの□□
【成立不詳・心歌以前 14 卷】／何船 [は
るはまた]／成立時不詳

→囲縄の声
むらさめの一あともとてすーはれつらむ
はしはしの一よつつののところ
【絹毛古徳善十句】／何人 [なきあとは]
／文 24(1555) 年 3 月 26 日～晦日
むらさめの一やまちにしはしーやすらびて
せきのわらやにーよつののところ
【箏楽第四／草薙田大学本】／種下／永正
6、7 年

→時鳥
むらさめの一けしきをそちにーさきたてて
のへのくさはそーつゆにうつろふ
【池田十句】／何田 [をとめこか] ／永正
7(1510) 年春以前＜永正 5 年春＞
むらさめの一あとはほのかにーきりたちて
つゆにうつろふーありあけのかけ
【文楽四年月並千二百編】／扉目 [としな
みの]／月並千二百編／文 4(1524) 年 12
月 23 日

村雨
→時鳥
むらさめすくるーをのかけはし
さたかのーたれかきけむーほとつ
【平松文庫十句】／扉目 [したみの]

→時鳥
むらさめすくるーやまのしたみち
まちのよなかてはあらしーほどとつ
【文楽年間百編 3 卷】／何人 [ゆきのや
ま]／文明 14(1482) 年 1 月 16 日

村雨の空
→山の晴
たくはかりのーむらさめのそら
やまのはのーくもにいりひのーかたわけて
【文楽年間百編 5 7 卷】／退掉 [としをふ
る]／文 5(1577) 年 9 月 22 日
なこわしのーむらさめのそら
やまのはのーきりまにうすきーよはのつ
【慶長年間百編 2 7 卷】／扉目 [ちりてさ
へ]／慶長 4(1599) 年 6 月 18 日

→時鳥
すすぐりぬーむらさめのそら
ひとときすーあきまつころやーかへるらむ
【歌行関係 4 種】／歌行通歌／天理本

すくるものはやきーむらさめのそら
ほとときすーといつれのくもにーやとるらむ
村雨の晴れゆく後は嵐

→日に渡る舟の寒さ

むらさめのへはれゆくあとはふくあらし
ゆふいわたるふねのさむけさ

【大永年間百首 4 卷】／歌人 [ちあきをも]／大永 5(1525) 年 9 月 21 日

むらさめのへはれゆくあとはゆふふるあらし
いりひをわたるふねのさむけさ

【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

むれ
打ち群れる

→袖の色々

はなのはるしめのゆくひとうちむれて
つむやすみれをそてのいろいろ

【伊勢千句】／何者 [あさひかけ]／大永 2(1522) 年 8 月 4 日～8 日

たれとなくのとでなるのにうちむれて
かすむやいつれそてのいろいろ

【明応年間百首 22 卷】／歌人 [くもはれ
て]／明応 5(1496) 年 8 月 22 日

岡辺の樽の一群

→夕日聴

をかへいろこいのはのひとむら
つゆやはよふんかかれにのこるるむ

【出陣千句】／何者 [はなさかり]／永正元(1504) 年 10 月 25 日～27 日

をかへとなひくのはのひとむら
うすきりのゆふかかれにもすなきて

【応仁年間百首 6 卷】／何人 [つきのあき]
／応仁 2(1468) 年 1 月 1 日

をかへとなひくのはのひとむら
うすきりのゆふかかれにもすなきて

【置基／伊地知本】／秋／文明 6(1474) 年
2 月以来
いはるすさひやひとけのひとむら
ゆくひとともーかたをかのヘーのふゆかれに
【春夢草／善隠部本／雑／永正 12(1516)
年、13年

→山本

なはくやかせのたけのひとむら
やまもとの一つのゆしたみちくさかれて
【文明年間百錦34巻／何人【ちきりあれや／文明 14(1482) 年3月20日
かすみになはくたけのひとむら
やまもとのーはるのあかはーゆきはれて
【若葉／吉川本／雑／文明 13(1481) 年夏頃

月の群鳥

→夜に躍鳴く

はるくれたのうさぎのむらも
かへるよーあまとひくくれーかびななたて
【月村抜句／善隠部本／永正十四年
あきふけわたる一つのむらも
かりななたてーはいねかてのーたまくらに
【合点之句／神宮文庫本／雑／天正
9(1541) 年12月25日

→葉く高竹

ひととるのーけふりのするーはれわたり
そよいてつーなびくくれたけ
【毛利千句／山形【きくのかは／文禄
3(1594) 年5月12日～6月
ひととるのーすすいにつけるーのをとえに
かこはぬかたーはなびくくれたけ
【天正年間百錦57巻／何木【うくひすの／天正 11(1583) 年間1月8日

→群雛

→中里の山田

ひとむらすすきーそでふるるかけ
しもよふーやまたのおしねーかびななたて
【永正年間百錦34巻／何路【はやみのに／永正 12(1515) 年11月10日
ひとむらすすきーひともかけせす
しもよふーやまたのこいへーかふきて
【合点之句／神宮文庫本／雑／天正
9(1541) 年12月25日

松の一団

→夜が明ける

はしのたかきーまつのひとむら
とふかのーかすもまくれーよはあけて
【成立不詳・心敬以前14巻／何人【はるふかし／成立不詳
うらのときはーまつのひとむら
やまみえぬーまみのうへよりーよはあけて
【大政改集／広島大学本／雑三／文和
5(1556) 年3月26日

群千鳥

→真砂砂の末

ゆくかたはーいつこなるらむーむらちとり
ゆふかせすきーまあここのする
【羽柴千句／千何【あくるよぬ／天正
6(1578) 年5月18日～19日
したあるもーたちさきぬるーむらちとり
かへるとたまはーまあここのする
【慶長年間百錦27巻／謡旧【みなそこに
/慶長 時間4(1599) 年5月2日
かたかたーなきたてでゆくーむらちとり
おくしもふかせーまあここのする
【慶長年間百錦27巻／□□【けふこと
/誇白／慶長 時間8(1603) 年1月3日

群鳥が能る

→我驚く

むらとりのーねにゆくかせやーくれぬらむ
けふもふきすーとーわれそおとくく
【美濃千句／何草【いつくにて／文明
4(1473) 年12月16日～21日
むらとりのーねくらのたけのーゆきをれに
われそおとくーさむきよのゆめ
【伊予千句／何馬【もろひとの／天文
6(1537) 年5月22日
めずらしい
聴くのも珍しい
→時鳥
きくもめつらしーこのみやことり
ほとんどすけすはおとのはのーやまこえて
【竹枝抄／新古典文学大系本】／夏／文明
8(1476) 年 5 月頃
まれのみゆきはーきくもめつらし
ゆふかってーかみまつるよのーほととくす
【豊草／伊地知本】／夏／文明 6(1474) 年
2 月以前

もえる
枯れた草が萌える出
→駒況う声
ふゆかれしーみちのしはくさーもえいてて
のへのかすみにーこまいはふかこる
【聖懸千句】／何田／[のころひに]／明応
3(1492) 年 2 月10日〜12日
こそかれしーくさはつゆけくーもえいてて
のはあまたきーこまいはふかこる
【明応八年時物百錦 22 紙】／何水／【あけのほ
を】／明応8(1499) 年 2 月 19 日

もしょ
揺く藻塩草
→消の汀に松の花落ちる
かくてふるはーたたもしほくさ
みつみのーみきはにまつのーはおちて
【論書 4 種】／宗長／
かきあつむるはーたたもしほくさ
にほのうみのーみきはにまつのーはおちて
【論書 4 種】／宗牧／

もず
鴨の草莢
→端紅葉
しだにあとなきーもすのかくさ
ちりにけりーきにかせふくーはしももち
【壁草／続群書類従本】／秋／永正 3(1506)
年 3 月頃
ちきりはかなやーもすのかくさ
はしももしーかえにのこるーかせたて
【宗長関係 8 種】／老耳／天理本／

もつ
移り持て行く
→起き出る
うつりもてゆくーあきのかなしか
いまこむとーなくさめつつもーおきいてて
【文禄年間平極 12 紙】／□□／【たかには
も】／文禄 2(1593) 年 5 月 27 日
うつりもてゆくーそてのつつきかけ
つゆをくーかねののへーおきいてて
【文明十四年方物 52 紙】／山何／【つゆや
けさ】／文明14(1482) 年 7 月4日〜9月
14日

もと
垣の本つ葉
→御溝水
あきにいろつくーかきのもとつは
おもふとーかきやなかさむーみかはみつ
【看聞日記紙背 50 紙】／何田／【いろつき
ぬ】／応永 28 年 5 月 29 日
いろしみすむーかきのもとつは
はさののーはさへうつるーみかはみつ
【看聞日記紙背 50 紙】／何田／【まっころ
の】／応永 32(1425) 年 10 月 15 日

霞む山本
もの

→水無瀬川

くるまるさは－かすむやまもと
ところせき－わたりかねる－みなしはか
【平松文庫本千句】／□□ [ふぐるよの]

あらしの音－かすむやまもと
ゆきをしも－ははやるの－みなしはか
【天文年間百穂 38 卷】／何木 [やまかけ
て]／天文 21(1552) 年 3 月 11 日

みれはほのかに－かすむやまもと
はるのも－ありあけたの－みなしはか
【永禄年間百穂 28 卷】／何人 [つきなか
ち]／永禄 5(1562) 年 8 月 11 日

とてもみえず－かすむやまもと
ほのかにも－あけのこりる－みなしはか
【慶長年間百穂 27 卷】／□□ [ののひし
て]／慶長 6(1601) 年 1 月 26 日

もの

無き物

→古里の春

たびにして－いつくもさため－なきものを
いそくやへる－ふるさとののはる
【慶長年間百穂 20 卷】／□□ [なかつ
と]／慶長 2(1461) 年 9 月

むかしには－かへるにならひ－なきものを
あほれのときや－ふるさとののはる
【大永年間百穂 14 卷】／何木 [うめかか
を]／大永 7(1527) 年 1 月 18 日

春の物の音

→秋にりの夜の月

ひくてもゆかし－はるのものね
あけのこる－あられはしりの－つきのよいに
【住吉千句】／何田 [このはちる]／大永
元(1521) 年 11 月 1 日～14 日

しらへなならぬ－はるのものね
しつけさや－あられはしりの－よのはつき
【文禄二年千句 10 卷】／山何 [まつとし
る]／文禄 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日

ものと

物思う頃

→如何なる

こころくたけてもおもふころ
ひとうし－ゆきてはむも－いかならむ
【難波田千句】／□□ [あけはのを]／文
明 14(1482) 年 10 月前後

つゆのみたれに－もおもふころ
よしやとの－ゆふへよあきよ－いかならむ
【永正年間百穂 34 卷】／何人 [みちしあ
れや]／永正 2(1505) 年 1 月 1 日

→誰がや

つゆもかかみの－もおもふころ
あちきや－たれゆつらも－うかるらむ
【太神宮法楽千句】／白何 [つゆから
され]／長享 2(1488) 年 7 月

なみたするに－もおもふころ
ちきらすよ－たれにゆふへの－うかるらむ
【竹林抄／新古典文学大系本】／忠上／文
明 8(1476) 年 5 月頃

物想しき

→暦月

ものかなしきの－しもはらふこゑ
ねさめする－あかつきつの－なさのいほ
【毛利千句】／何田 [やまとりも]／文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

ふもとに－ものかなしきの－なききてて
あかつきつの－いろのさやけさ
【文禄二年千句 10 卷】／山何 [まつとし
る]／文禄 2(1593) 年 4 月 8 日～10 日

ものこと

物毎

→春秋の空

ものこと－こころのとまる－としれて
ゆくすゑいやに－はるあきのそら
【三島千句】／何船 [とりのはね]／文
明 3(1471) 年 3 月 21 日～23 日
ものこととに一みやこをこふる一かたあなかなか
おくるもつらし一はるあきのそら
【文徳三年合書 34 巻】／□□【ゆきのかけ】／文徳 5(1473)年 12 月 5 日

もみじ
花よ紅葉よ
→大和歌
かさしてもみむ一はなよもみちよ
あはれさの一こころしこる一やまとるた
【五日一日合句】／薄何【あけはのの】／
天正 9(1581)年 11 月 19 日
ひとのこころは一はなよもみちよ
あらそふも一さすかゆゑある一やまとるた
【文徳三年合書 12 巻】／□□【うめさきてい】／文徳 2(1593)年 2 月 12 日

紅葉の錦
→古箏
もみちのにしき一かさねきところ
ふたたびは一いなしともおもふるさとに
【文徳四年方書 70 巻】／夕何【はるさめに】／文徳 4(1576)年 5 月 6 日～7 月 19 日
もみちのにしき一きてやゆかまし
ぬれぬれも一あきはくれぬの一ふるさとに
【選集雑集／広島大学本】／選一／文和
5(1356)年冬～翌年の春

やしろ

もみちはは一いろきよりも一をりかさし
よさむすれて一くめるさかつき
【毛利千句】／初何【よとともに】／文禄
3(1594)年 5 月 12 日～6 日
もみちはは一たくあよりも一かきあつめ
つきになるまで一くめるさかつき
【天正年間合書 57 巻】／□□【しろたへの】／天正 16(1588)年 1 月 4 日

ものましい

ともしびのかけ一ものさびしきの手みよ
ののふみよる一ここあそきこゆる
【五日一日合句】／□□【くれかきたき】／

もみじ

かすまたつつきの一よきのみやしろ
いつくにも一あまみつかみの一なはたまし
やすらう
花の陰に安らう
→春の倦るさ
みるままに一やすらすきの一はなのかけ
おもへはもはしるのかへるさ
【宝徳四年十二月】／【なし】／
【宝徳4(1452)年3月12日】
やすらへはともときそつれはなのかけ
かねのつけこすはなるのかへるさ
【嘉永五年十一月】／【をとせに】／
【嘉永5(1465)年12月9日】

やすらうにさする道の安らい
→星の傍ら
やすきるつーかきねのみちの一やすらひに
やすくれかるつーさとのかたはら
【天文年間三書・天文・天文13(1545)年間11月
25日】
たまほこの一みちもすすき一やすらひに
みやこにたるつーさとのかたはら
【文禄二年十二月・はなし】／【しくれて
もの】／【文禄2(1593)年4月8日〜10日】

安らう
→句処に旅の宿
みちのへは一はやしくれの一やすらひに
いつくにたびの一やとりさためむ
【羽柴千里】／【をとせに】／天正
6(1578)年5月18〜19日
そこでなきかたをかこえの一やすらひに
いつくにたびの一やとりさため
【天正五年年間六書5(1577)年】／【をとせに
て】／天正6(1578)年1月3日

やすらう
宿の桜
→軒の静の声
ひとやつつーはるの一ひくるーやとのうめ
けさのきちかきーうくひすのごゑ
【美濃千年】／【をとせに】／文明
4(1473)年12月16日〜21日
たをるなと一そてにになゆふーやとのうめ
のきはにきなくーうくひすのごゑ
【文明五年年間三書3(1483)年】／【をとせに】／
【文明5(1483)年1月16日】

やすらう
宿の梅の香
→驚
かこふにもるるーやとのうめかか
うくひすの一へよりのへにかないてて
【田原の一日千里】／【をとせに】／
【天正9(1581)年11月19日】
たちえかくれぬーやとのうめかか
うくひすの一こゑするつきやーあけぬらむ
【大永三年月並千本録】／【の是なる
ふく】／【月並千本録】／【大永3(1532)年1
月23日】
なきひとりたべーかとのうめかか
うくひすの一ないやもやて一しのふらむ
【享禄年間五冊8(1532)年】／【はるしに
て】／【享禄5(1532)年7月29日】
つほみにこむるーやとのうめかか
うくひすのーかきほのはゆきをーはらひて
【寛永五年年間六書5(1638)年】／【の是なる
を】／【寛永6(1638)年1月3日】

やすらう
宿の夕暮れ
→花の陰
くさかをかの一やとのゆふくれ
たちよらむーこままかへゆくーはなのかけ
【竹林抄新古典文学系本】／【のはる
を】／【寛永8(1631)年1月3日】

やすらう
宿の朝
→花の露
くさかをかの一やとのゆふくれ
たちよらむーこままかへゆくーはなのかけ
【竹林抄新古典文学系本】／【のはる
を】／【寛永8(1631)年1月3日】
宿を借る

→村雨

せきのこたに一やとやながらし
むらさめの大とはのさとに一たよりて
【遠行関係4種】／行路記／書陵部本

 shamしのはどのにやつながらし
むらさめの大とはよりすける一このもとに
【大原三吟／酒竹文庫本】／大原三吟／文明14(1482)年10月<11月>

宿を訪う

→面影

ゆきすきかたきえの吉ととはし
おもかげの大かふるあり一こまとてて
【宗楽関係8種】／興楽院／書陵部本

をしへてたるえの吉ととはし
おもかげの大きたつはかり一しるべにて
【宗楽関係8種】／老耳／天理本

やなぎ

青柳

→葛城山

あをやきの一いとしつけきあめみきて
こえむもいかか一かたさきのやま
【天文年間百顔38巻】／山河「つきやけさ」／天文21(1552)年7月26日

あをやきの一はかはふきぬる一かせもなし
よもはかすみの一かたさきのやま
【春夢草／書陵部本】／春永正12(1516)年、13年

→打ち飲む

やなぎ

青柳

→葛城山

たえぬをかげるの一あをやきのいと
つゆながら一あさゆかずみうちはへて
【宮中書】／山河「ことのはや」／天文20(1551)年5月9日～11日

はるにやさらす一あをやきのいと
えのみつに一かすみのころも一うちはへて
【文明年間百顔34巻】／同人「うすれては」／文明5(1473)年2月1日

→川添い

のとかになひく一あをやきのいと
かはそひの一ふねのつなての一なかきに
【看間日記紙背50巻】／唐河「うめはけふ」／応永26(1419)年2月25日

みたれあひたる一あをやきのいと
かはそひの一つつみやまの一こぬらむ
【文永年間百顔12巻】／■■「あぬのひの」／文永2(1593)年5月

青柳の陰

→花を見る

かせもかよはぬ一あをやきのかげ
けふもまた一なかきびくらし一はなをして
【新撰雑然洪集／実隆本】／春上／明応4(1495)年9月26日

しばたすむ一あをやきのかげ
あふひとに一ところせかるる一はなをして
【宗楽関係8種】／老耳／天理本

離く青柳

→高風

かせよりさきも一なひくあをやき
ありあげや一なかそらたくーかすむらむ
【看間日記紙背50巻】／同人「うめのなの」／応永30(1423)年5月27日

はるのしるしに一なひくあをやき
かたすきやーくもののよそにーかすむらむ
【看間日記紙背50巻】／唐河「いやとしに」／応永31(1424)年1月25日
ヤマ

秋の山

→永久の布留宮

おもひにはーみわかぬものをーあきのやま
ひとはかけせぬーとはのふるみや

【文 vì 年間百錦 22 番】/ 二月 9 (1669) 年 10 月 2 日

→時枝

いくへかすみーあけぼののやま
とひすつーはるのまくらのーほととぎす

【倫務千句】/ 三月三日 [まつかのはなの]
(元亀 4) 天正元 (1573) 年正月 9 日～11 日

くものがなるーあけぼののやま
ほととぎす ききあへぬそらにつきおおて

【藻草/伊地知本】/ 夏 / 文明 6 (1474) 年
2 月以前

→積雲

ふるさとさひしーあけぼののやま
よこくもにーをちかたひとやーわかるるむ

【老集/毛利本】/ 六月 / (文明 17 (1485)
年 7 月 23 日頃)

かせもかすみもーあけぼののやま
よこくもにーまほのふねゆくーなみのうへ

【宗長関係 8 種】/ 老耳/ 天理本

暑の山

→驚

はるなりけりなーあけぼののやま
うくひすのーなかすはこそのーゆきのうち

【文 vì 年間百錦 3 4 番】/ 仲良 [そめよな
ほ] / 文明 14 (1842) 年 9 月 20 日

さくらにおぬるーあけぼののやま
うくひすのーへのあるしーくさまくら

【大永年間百錦 1 4 番】/ 仲良 [はままつの]
/ 大永 4 (1524) 年 5 月 1 日

→なる

こよひのつきのーあけぼののやま
あきさむしーふならいくかにーなりぬらむ

→大井川霞む

のとかにすめはーあらしほくやま
おぼるかはーかすめるみつのーたえたえに

【享禄年間百錦 8 番】/ 仲良 [からこも]
/ 享禄 3 (1530) 年 1 月 28 日

はなにとゆけはーあらしほくやま
おぼるかはーかすみのこそにーおとはして

【文安頃千句 4 番】/ 仲良 [やへひとへ]

→後ろの山

南は長閑

【文安頃千句】/ 何田 [あとそうる] / 文
安 2 (1445) 年 10 月 18 日

くものがなるーあけぼののやま
みはなやーたひねのゆめにーなりぬらむ

【検当関係 2 種】/ 検当句集 / 赤木文庫本

うしろのやまの－かせのはけしさ
たひのそら－みなみにゆけは－のとかにて
【国産記／新田学談本／雑草／長年】
6.7年
うしろのやまの－あらしこからし
ふゆのひも－みねのみなみは－のとかにて
【宗名長関係8種】／老耳／天理本／
宇津の山
→鷹の下
うつのやま－あひるひとも－みなみにて
ふゆはかくれる－つつのしたみち
【文明十四年万句52句／野何【ゆきならは】／文明14(1482)年7月4日～9月14日
わかかたへ－ふみことつくる－うつのやま
やすらびにけり－つつのしたみち
【文明十五年万句111句／何何【たきなみや】／文明15(1493)年1月8日～3月2日
宇津の山越え
→秋の風
つきにもよよふ－うつのやまこえ
しみはらぶ－みちのゆれての－あきのかせ
【延暦年間百鄞66句／初何【さけはさく】／千句第三／延暦4(1492)年3月3日
あはれはおなげ－うつのやまこえ
ふるさとの－ゆふへなりけり－あきのかせ
【大永四月並千二百篇／○□【へつつな】/月束千二百篇／大永4(1524)年3月23日
奥山の陰
→打ち解けて
こころのほかの－おくやまのかけ
まつのにて－はらはぬゆきも－うちとしてもて
【秋津洲千句／何何【しかのぬえ】／大文15(1546)年8月25日
さりてはまた－おくやまのかけ
うちて－なかなかみやこの－ほどときす
【国産記／続群書類従本】／夏／長享2年
遠方の山
→わたの原
つきのひかりに－をもこちのやま
わけわたる－きりのたえもの－わたのはら
【経巴亡父追思千句／唐何【はなのきに】／大文24(1555)年3月26日～毎日
かれはかすみの－をちこちのやま
わたのはら－いつくのかたに－とまりふね
【玉吟一日千句／何何【としのうちに】／天正9(1581)年11月19日
遠方の遠山
→雁鳴
みつつかすみの－をちのにばやま
わけれしも－おなしゆくへの－かりなきて
【経巴亡父追思千句／何何【すみそめの】／大文24(1555)年3月26日～毎日
あすやこえし－をちのにばやま
わたりかね－ふかきふるうちに－かりなきて
【心敬関係10種】／若草／赤木文庫本／
小山田の末
→霧蒸れ
かへしてたる－をやまたのすゑ
しもかれの－くすはにかはる－あきのかせ
【天正年間百鄞57句／何何【もしかくさ】／天正7(1579)年1月13日
かりのこしぬる－をやまたのすゑ
しもかれの－ひとむらずすき－ほのかにて
【天正年間百鄞58句／□□【あさらさね】／天正15(1587)年1月3日
おやまだのはら
小山田の原
→秋更ける
やへにきりふる－をやまたのはら
ひとはた－かりににこぬ－あきふて
かすみはるるよ

霞む春の遠山

かすみかくれの－はるるよ
ありけの－きもかくれの－かかりなきて

【看過日記紙葉（50）】／山川【まつそひて】／応永26(1419)年 2月 6日
かすみのにこる－はるるよ
ありけの－きの－ささえへり

【天正四年万春句 70】／何義【かせのにしるき】／天正4(1576)年 6月 6日～7月 19日
かすみのこも

霞む山本

→水無瀬川

くるまくさは－かすむやまもと
ところせき－わたりかねたる－みねかせは

【平松文庫本千句】／□□【ふくるよの】

あらしのすゑの－かすむやまもと
ゆきてしても－はははるの－みねかせは

【天文年間万春 38】／何義【やまかけて】／天文21(1552)年 3月 11日
みむき－はほのくに－かすむやまもと
はるるよ－ありけかたの－みねかせは

【永禄年間万春 28】／何義【つきのから】／永禄5(1562)年 8月 11日
そこともみえす－かすむやまもと
ほのかに－あげのこりたる－みねかせは

【慶長年間万春 27】／□□【ののしでて】／慶長6(1601)年 1月 26日
かすみの／

かすみはるるよ

霞む春の遠山

かすみかくれの－はるるよ
ありけの－きもかくれの－かかりなきて

【看過日記紙葉（50）】／山川【まつそひて】／応永26(1419)年 2月 6日
かすみのにこる－はるるよ
ありけの－きの－ささえへり

【天正四年万春句 70】／何義【かせのにしるき】／天正4(1576)年 6月 6日～7月 19日
かすみのこも

霞む山本

→水無瀬川

くるまくさは－かすむやまもと
ところせき－わたりかねたる－みねかせは

【平松文庫本千句】／□□【ふくるよの】

あらしのすゑの－かすむやまもと
ゆきてしても－はははるの－みねかせは

【天文年間万春 38】／何義【やまかけて】／天文21(1552)年 3月 11日
みむき－はほのくに－かすむやまもと
はるるよ－ありけかたの－みねかせは

【永禄年間万春 28】／何義【つきのから】／永禄5(1562)年 8月 11日
そこともみえす－かすむやまもと
ほのかに－あげのこりたる－みねかせは

【慶長年間万春 27】／□□【ののしでて】／慶長6(1601)年 1月 26日
かすみの／
桜の葛城の山

→朝霞立つ

おくんもさくらの一つときはやま
あさかすみ一たつやたはくへへつつむ

【毛利千句】／何田 [やまとどり]／文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

さくらさくらなる一つときはやま
あさかすみ一たつははなによりぬらむ

【園地第二／続群書類従本】／春／明応
4(1496) 年早春

霧霧まじい山

→松 Nursery

しもすますしくーからすなくやま
かはきりにーふもとのまつはーあらはれて

【聚楽千句】／何船 [うあしうふあ]／長
享元 (1487) 年 10 月 9 日＜11 日

しもすますしくーよよふやまも
けぶりよりーいろなきまつのーあらはれて

【元和年間百紙 24 番】／図画 [くひすの]／裏白／元和 9(1623) 年 1 月 3 日

にい山里

→恋いやる

めさますかねの一ちかきやまさと
おもひやるーみやこのつきにーまぐらして

【表佐千句】／何衣 [よるやあめ]／文明
8(1476) 年 3 月 6 日＜8 日

ゆきのつまきの一ちかきやまさと
おもひやるーひのすまひのーふゆこもり

遠山の秋

→紀伊海

いまつきにみるーとほやまのあき
きのうみーふねをきりまにーこきいたし

【文明十四年万句 52 番】／何木 [ひかもの
つゆ]／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9 月
14 日

なかめわびぬるーとほやまのあき
きのうみーたまつしまつーきりごめて

【春順関係 2 種】／秋／応仁元 (1467) 年
5 月 10 日

残る山影

→帰る

おほめのにしひーのこるやまかけ
みそれそしーあととやくるーかへるらむ

【永正年間百紙 34 番】／何船 [ひちなひ
き]／永正 13(1516) 年 1 月

ほのほのつきのーのこるやまかけ
のにいてーしかやまをこめーかへるらむ

【天正年間万句 70 番】／花何 [くひす
の]／天正 4(1576) 年 5 月 6 日～7 月 19 日

花の山風

→春になる

くもあるつきのーはなのやまかせ
あけほのはーゆふへ汚れてもーはるなれや

【至徳以前百紙 7 番】／図画 [くれなかの]
／至徳 4(1387) 年以前

うらみははてしーはなのやまかせ
くれてもーなほとまれぬーはるなれや

【大永三年月並千三百紙】／図画 [ひとこ
永]／月並千三百紙／大永 3(1523) 年 4
月 23 日

春の里

→舞
春の山寺

→如月の別れを訪う

さくらのことを一はるのやまさと
うくひすの一つ者はかすみの一のきはにて

【東山刊行会刊 1922年】

やかてもとへやているのやまと
うくひすの一つはかすみののがゆききえて

【東山刊行会刊: 春の山寺】

春の山寺

→春の松の枝

きものみみゆるやと起きーやまきくら
こすらひとつにかすむあかほの

【東山刊行会刊 1922年】

み吉野の山

→長鬚

かすみやべたみよしののやま
やまら比の一せにゆくみつの一のとかにて

【安楽寺刊 1922年】

はなにみいるみよしののやま
しらくもののをおのへのまつもの一のとかにて

【伊予刊行会 1922年】

山が苦しい

→老の坂

ちかきありがとう一やまきくるしき
こしごおしててひとほかのの一よいのさか

【伊予刊行会 1922年】

やまきくら山

→暦の雨

やまきくらの一はるをさしこくーなのはてて
かすめるかはなーあかつきのあめ

【安楽寺刊行会 1922年】
やまちかい
山近い
→往待ち遠い

やまちかきよしののさとはかせさえて
はなまちほとにInformeばはつはる

【美濃千句】／何心「つゆにきけ」／文明
4(1473)年12月16日～21日

やまちかきーはほのきのまつとーひきともで
はなまちとにーおくるつれつれ

【寛文元年百絵を2巻】／□□「つきやあらぬ」／寛文 13(1673)年7月19日

山の井の水
→水の幸

むすぶはつきぬーやまのゐのみつ
このもとにーひととつぶたつのーこけのいほ

【成立不詳・宗長以前15巻】／花之何「ふゆいいろに」／成立時不詳

むすこけふかしえやまたのゐのみつ
すすしけはーきりのわかつはのーこのもとに

【壁草／大阪天満宮文庫本】／夏／永正
2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

やまのおか

山のかくれ

→蜂の松風

すみわひぬーいつらとしぶるーやまのおく
ともとはきくーみねのまつせ

【延徳年間百絵を16巻】／夢想「もののおも
はて」／延徳元(1489)年9月27日

やまのおくーさひしくとてもーいはせてし
こころしてふけーみねのまっかせ

【大永年間百絵を1巻】／河路「いつのよい」／
大永5(1525)年4月15日

やまのかくれの

→なる

やますとのーかせひやゆかにーはまはさめて
はなよふかきーあかつきのあめ

【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1541)年12月25日

山の陰
→頭の廻

こえわひぬーあめにかみなるーやまのかけ
ふなりにあらきーすまたのうらなみ

【表佐千句】／唐何「つきはたた」／文明
8(1476)年3月6日＜8日＞

つらがりーうきよをかたるーやまのかけ
あはれかけーすまたのうらなみ

【永禄年間百絵を28巻】／山何［ゆふかほ
に］／永禄2(1558)年5月20日

→松風が吹く

そこたなきーかねもすさまーやまのかけ
こえむをのへーまつかせそふく

【兼厳千句】／朝何「やまもほく」／文明
3(1471)年3月21日～23日

つきもたたーこころつくしのーやまのかけ
このはしくてーまつかせそふく

【兼厳千句】／□□「はるのよい」／文
明14(1482)年10月前後
すまれすは－たちもかへらむ－やまのかけ
たきのひきも－まつかせそふく
【経巴亡父追善千句】／何木 [おとろけと]／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～毎日
けふもまた－くもるいひの一やまのかけ
みちるるしばに－まつかせそふく
【成立不詳・宗長以前１５巻】／何船 [しかもろき]／成立時不詳

一道の掛機
のるこまを－しはしむかふる－やまのかけ
すはあやふき－みちのかけはし
【永禄年間百韻 28 巻】／何船 [ひきうる]／裏白／永禄 5(1562) 年 1 月 3 日
あきふて－てあはねよぬ－やまのかけ
さとはなれる－みちのかけはし
【天正年間百韻 57 巻】／□□ [あさなあさ]／天正 15(1587) 年 1 月 3 日

やまのしたかげ
山の下道

→そよぐ秋風
ましはわけゆく－やまのしたかげ
ならのはに－そよきもてくる－あきのかせ
【文安月句】／何木 [つきぬはな]／文安 2(1445) 年 8 月 15 日
いれにすすし－やまのしたかげ
うゑしたも－そよきいてる－あきのかせ
【経巴亡父追善千句】／何船 [すみぞめの]
／天文 24(1555) 年 3 月 26 日～毎日

やまのはのつき
山の端の月

→秋風
くれてまちる－やまのはのつき
あきかせに－よふねこたふる－かちのおと
【阿波千句】／山何 [うくひすに]／文明 2(1470) 年正月 10 日～12 日
しはしきこのれ－やまのはのつき
あきかせに一つゆのいのちも－をしまれて
【聖明天句】／何人 [つつきなり]／明応 3(1494) 年 2 月 10 日～12 日
うきをはすて－のやまのはのつき
あきかせに－ふふやといへと－まろとま
【伊勢千句】／三宇中略 [ちにやすき]／
大永 4(1524) 年 3 月 17 日～21 日

→秋更ける
ねさめにむかふ－やまのはのつき
みをむてむ－ほもしみまはの－あきふて
【三島千句】／何路 [なへてよの]／文明 3(1471) 年 3 月 21 日～23 日
山の時鳥

→短夜の月

ほとんどすーはなもまちけるーみやまかなか
くれははいてよーみしかよのつき

【明鏡千句】 / 何木 [ほとときす] / 亨徳
元 2(1452) 年 4 月

なやここにーとなはきやまたの一ほととす
すきのすゑのーみしかよのつき

【天文年間百感 38 巻】 / 何人 [なやここ
に] / 天文 4(1535) 年 5 月 1 日

山の松風

→蛻の庵

ふるさよりのーやまのまつかせ
なかなかはーかこぶそやすきーしはのいほ

【太神宮楽歌千句】 / 何人 [しかのねを]
/ 長享 2(1488) 年 7 月

なれててもさびしーやまのまつかせ
たれきてかーここところめむーしはのいほ

【蓼原／伊地知本】 / 雑 / 文明 6(1474) 年
2 月以前

→正月

ふるさよりのーやまのまつかせ
なかなかにーかこぶそやすきーしはのいほ

【太神宮楽歌千句】 / 何人 [しかのねを]
/ 長享 2(1488) 年 7 月

− 雨晴

ふるさよりのーやまのまつかせ
なかなかにーかこぶそやすきーしはのいほ

【太神宮楽歌千句】 / 何人 [しかのねを]
/ 長享 2(1488) 年 7 月

→雨晴

まかふやくもちーやまぽととす
ゆふなみにーうらったひするーあめはれて
がんばったときととき

やまほとときす

おおほろつきよのありあげに

【伊予千句】／何馬／【りもひとの／天文6(1537)年5月22日】

まつになかぬえやまほとときす

ありあげになるへきつきはおそくして

【称名寺通歌3巻】／x x [つきはあき]
／正慶元(1322)年9月13夜

よふかいいほのやまほとときす

かりまくらさはれいつるありあげに

【延徳年間百帳16巻】／何馬／【うめかかの／延徳4(1492)年1月23日】

はるもおもはしやまほとときす

いるかたはかすみもうすきありあげに

【元明治年間百帳8巻】／何人／【ときはなる／弘治3(1557)年8月28日】

→片桐の社

みやこはときほきやまほとときす

かたをかのもりくるあめにたちぬれて

【親中千句】／□□【あくらを】／文永14(1482)年10月前後

はつねめつらしやまほとときす

かたをかのもりのこかけにたたすみて

【高宮千句】／□□【こちふかは】／

→未の下

→花散る
わかりとうときーやまばほとんどきす
かへるに違いしかむかげなきーはたちりて
【成立不詳・宗期以前6巻】／何人 [みつ
たまり]／成立時不明

やまほとときすーなほそまたるる
かりそめにーやとるいほりーはたちりて
【文禄年間百話1巻】／□□ [はなのい
ろや]／文禄4(1595)年1月30日

→短夜

さつきすきゆくーやまほとときす
みしかよのーくもまわられぬーありあげに
【伊予千句】／何人 [もろひとの]／天文
6(1537)年5月22日

かけたにとめよーやまほとときす
みしかよの一つきもいまはたーみねこえて
【宮城千句】／何船 [ちかしてふ]／天文
20(1551)年5月9日～11日

→村雨

わずれぬるでのーやまほとときす
むらさめにーたちよるさくらーまたをりて
【三島千句】／御所 [はるとほし]／文明
3(1471)年3月21日～23日

こゑばまくらのーやまほとときす
さらばれてーすきゆくかせのーむらさめに
【弘治三年春節千句】／山河 [はなそも]
／弘治3(1557)年正月7日～9日

しのひあまるーやまほとときす
むらさめのーすきげるくもにーよひふけぬ
【天文十八年終千句】／何船 [つさきうめ]
／天文18(1549)年正月11日

またもきかむーやまほとときす
むらさめのーじるるあとよりーうちそそき
【天文年間百話5巻】／□□ [ときわく
や]／天正18(1590)年10月8日

→夜半の月

ゆくやいつくのーやまほとときす
あらましのーねさめをさそへーよすはのつき
【大永三年月並千三百篇】／□□ [しれ
のあめ]／月並千三百篇／大永3(1523)年
10月23日

まつとよおふーやまほとときす
さらにたーまくらもとらぬーよはのつき
【天正年間五百七巻】／何路 [なみこえ
て]／天正9(1581)年2月3日

→舟に明石の泊

やまほとときすーゆくもうらみし
ふねにこよびーあかしのとまりーこきわかれ
【東山千句】／何人 [つきよじる]／永正
15(1518)年8月10日～12日

やまほとときすーひとこゑのそら
ふねよせてーあかしのとまりーいてかてに
【名所句集／静嘉堂文庫本】／旅／（大永
前後）

→驚

たえにしのちのーやまほとときす
うくひすのーこゑをへたつるーなつはきて
【天文年間百録38巻】／何路 [ひすす
し]／天文11(1542)年6月12日

いまはといつるーやまほとときす
うくひすのーかへるたのとーはるくて
【宗長関係8種】／壬生宛／書陵部本／

→橋

おとつれずでしーやまほとときす
たちはなーいくやとことにーにほふらぬ
【元和年間百録24巻】／□□ [としきとし
に]／元和6(1620)年12月5日

よかれからなるーやまほとときす
たちはなーはならちのつきはーありあげに
【馬騨卿／北野天海宮本】／永正十三年／

けいたるのかにーやまほとときす
たちはなーにほふくらーをぞはたてで
【合点之句／神宮文庫本】／夏／天文
9(1541)年12月25日
かけたにとめよーやまほとときす
みしかよの一つきえいはたーみねこえて
【室町千句／何胡（かししてみ）／天文
20(1551)年 5月 9日〜11日

かけぬらくものーやまほとときす
さみたれの一なかりすすくーみねこえて
【東慶第三／和歌百首文従本／夏／文亀元
(1501)年 3月 18日

やまもと

山本

→誰が越える

yamaもとの一さともわかれずーきりこえて
くるまきをーたれかごゆらぬ
【宝徳年刊句／山口【みにむは】／
宝德 4(1452)年 3月 12日

やまもとののわきのあのーのしかのとき
をののみちはーたれかごゆらむ
【永正年刊句百大全340句／兼人【はなのき
も】／永正 7(1510)年 4月 1日

山本の里

→掛橋

なかはかすみの一やまもとのさと
かけはしの一のきはのみねにーよこはたり
【池田千句／何胡（おそくとく）／天文
7(1510)年 早春以前＜永正 5年春＞

いつくるるるまーやまもとのさと
かけはしーふむあもなくーくちはて
【慶長刊句三七句／□□【つゆにみ
を】／慶長 9(1604)年 6月 28日

夕暮れのやま

→一帯り

ゆきふゆむかふふふふふれのやま
ひとくもりーしくれしほらーはるるひに
【鍋島刊句十千／何胡【にはにさせ】／
宝応元 (1449)年 8月 19日〜21日

ほんとまちかーゆふくれのやま
ひとくもりーあらしのはとのーゆきはれて
【称名院追善千句／山口【ことてつむ】
／永禄 6(1563)年 12月 14日〜18日

→花橋

やまほとんどきすーこあものこすな
そこでをるーはたちはなにーかせすきて
【老若／毛利本／夏／（文明 14(1485)年
7月 23日頃）

やまほとんどきすーこあものこす
そこでをるーはたちはなにーかせすきて
【浪句老若／夏／永正 17年

つきおおかかるーやまほとときす
まぐらからのーはたちはなにーめはさされて
【合点之句／神宮文庫本／合／天文
9(1541)年 12月 25日

→春暮れる

かたふくつきのの一やまほとときす
はなもいーむかひのみねのーはるくれて
【天文刊句百全38句／何胡／あすのな
を／天文 17(1548)年 8月 14日

かつこえきての一やまほとときす
あふさかの一おとはのこすーーはるくれて
【別書／北野天満宮本／永正十二年

→峰越える

いまはといつーやまほとときす
うくひすの一かへるたのにーはるくれて
【宗関関係8種／北生実／叡陵郡本

まつつともれるーやまほとときす
はなはたーのかふのゆめのーはるくれて
【宗関関係8種／老耳／天理本

→峰越える
やまおろし
山嵐
→舟に須磨の浦浪
すさまし—さとのうしろの—やまおろし
ふねさしとむる—すまのうらなみ
【延徳四年三月】／伊勢 [むじつ]／延徳 4(1452) 3 月 12 日
おはた — あまりなるまで—やまおろし
よるふねいかに—すまのうらなみ
【東山千句】／伊勢 [むじつ]／永正 15(1518) 8 月 10 日～12 日

やまがつ
山鰐
→鰐の花
やまかつの— やとりにあたり—あきのつき
つゆをたよりの—あさはほのはな
【永禄千句】／伊勢 [くもと]／明応 9(1500) 7 月 17 日
やまかつの— ひとりむろうる—くれたけど
かかるかきほの—あさはほのはな
【合点之句／神宮文庫】／秋／天文 9(1541) 12 月 25 日

やまぶき
やまぶきの香
→菱の香
ひもさむけなる—ゆふくれのやま
みねのくも—かへるやゆきを—さそぶらむ
【鷹波千句】／鷹波 [あけはの]／文明 14(1482) 10 月前後
つきをはいそげ—ゆふくれのやま
あらましの— こころにかかる—みねのくも
【文明年間百題 34 卷】／大和 [みつみえぬ]／文 明 17(1485) 6 月 26 日

やまばし
大和言の葉
→唐土
みちこたかき—やまとことのは
もろこしの—ふみをよるの—うへにみて
【延徳四年三月】／伊勢 [むじつ]／延徳 4(1452) 3 月 12 日
いのちはいたれ—やまとことのは
もろこしの— ひとりのひととまつ—あさゆふに
【老集／吉川本】／旅／文 13(1481) 夏頃
水に匂う山吹

→雨晴れた春の暮れ

こふかきみつに→にほふやまふき
なかあめの→ひとつすまで→はるくて
【三島十千句】／字鼓音【受けさせ下】／
文明3(1471)年 3月21日～23日

いしはしびみつに→にほふやまふき
あめはるる→せせのしなみ→はるくて
【成立不詳・宗長以前15巻】／初間【た
てから】／成立時不詳

春の夕暮れ

→月出る

まさことときは→はるのゆふくれ
とけわたる→みきはもこはる→ときいて
【天正年間百巻57巻】／何船【もしもく
き】／天正7(1579)年 1月13日

こけふゆやまの→はるのゆふくれ
しほかなる→はのおくより→ときいて
【合点之句／神宮文庫本】／春／天文
9(1584)年 12月25日

宿の夕暮れ

→花の陰

やよい

弥生の雨

→時鳥

やよいのあめの→ゆふくれのやま
なつまたて→なくをさはや→ほどとときす
【享徳二年千句】／手の大【なはみとよ】／
享徳2(1453)年 8月11日～13日

やよいのあめの→ときくもるそら
いまより→しのひねならし→ほどとときす
【天文年間百巻38巻】／山口【はたると
ふ】／天文6(1537)年 5月10日

くさかるをかの→やとのゆふくれ
たちよらむ→こまつかれゆく→はなのかけ
【竹林抄／新古典文学大系本】／春／文明
8(1476)年 5月頃

あらさひしききゃ→とのゆふくれ
たかためか→ゆきをはらはむ→はなのかけ
【文亀関係2種】／春／応仁元(1467)年
5月10日

夕壇

→入相の鐘

やまだらの→かへさをおくる→ゆふあらし
ひとりのみきく→いありひのかね
【大永四年月並千二百巻】／口井【ゆふた
ちは】／月並千二百巻／大永4(1524)年 6
月23日

ゆふあらし→もよはすやまの→むらくもに
つねよりさしこ→いありひのかね

霞む夕暮れ

→月の出
夕暮れの雲
→時雨

をのへにのこるゆふくれのくも
やまさとや―はるともなく―しつつらむ
【延徳五年間１４巻】／何人（はなやあらぬ）／延徳2(1490)年2月25日

へたつるかたちのゆふくれのくも
やまとりのををのへのまつや―しつつらむ
【大永三年年間千二百巻】／□□（はなにつき）／月並千二百巻／大永3(1523)年3月23日

がかめこそやれゆふくれのくも
きのふかも一なきつとききし―ほどと続き
【天文十八年間千二百巻】／何人（はなにつき）／天文18(1549)年正月11日

わかやまのはのゆふくれのくも
ここところや―なくねをしまぬ―ほどと続き
【大永四年月並千二百巻】／□□（へたつなよ）／月並千二百巻／大永4(1524)年3月23日

→東風

それでもともなるゆふくれのそら
くもにけふ―はなりはつる―みねこえて
【長楽年間千百巻6巻】／何人（ゆきなから）／長楽2(1488)年1月22日

すすきやまの一ゆふくれのそら
かせぞふ―ひとむらさめの―みねこえて
【成立不詳・宗祇以前15巻】／何船（きたにみる）／成立不詳

夕暮れの空
→なる

やますみふかきゆふくれのそら
いつしかも―まなくしきれに―なりぬらむ
【永正五年間千二百巻34巻】／何路（あきにかせ）／永正8(1511)年7月14日

つつくぐむかふーゆふくれのそら
きえにしは―いつれのくとも―なりぬらむ
【園慶第三・統群書類従本】／雑下／文亀元(1501)年3月18日

→時鳥

あつきひしけのゆふくれのそら
ひところも―まれになりたる―ほどと続き
【永禄元年花千句】／何路（さつふなよ）／永禄元(1558)年3月3日～25日

そこところはのゆふくれのそら
ほとときす―あしこのひに―なさきてて
【竹林抄／新古典文学大系本】／夏／文明8(1476)年5月頃

うらみをかくるゆふくれのそら
ほとときす―またせてもたた―ひどこことに
【壁草／大阪天満宮東書本】／雑上／永正2(1505)年8月23日以後同3年3月以前

→山里

なくさめかねつゆふくれのそら
やまさとは―ことわりよりも―さひしくて
【竹林抄／新古典文学大系本】／雑上／文明8(1476)年5月頃

あしたのかすみゆふくれのそら
やまさとは―はなのにひに―とおりのこゑ
【論語4種】／宗長

→我が心

なかめわひぬるゆふくれのそら
さりともと―おもひなれそ―わかこころ
【竹林抄／新古典文学大系本】／恋下／文明8(1476)年5月頃

おもひなつけそゆふくれのそら
こひしあが―たかすこすこと―わかこころ
【北島家連歌合／書陵郷本】／北島家連歌合／文明2(1470)年正月6日
夕春の山

ゆきふりむかふゆふくれのやま
ひくももふれる所ははるるひに

【顕徳院前千句】／白石 [はにはせに] / 宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日～21 日

【春日年間百韻 1 卷】／何年 [たけのはに] / 嘉永 3 (1443) 年 10 月 23 日

かすみけりささらたにともゆふつと
おぼつかないやなよふこと

【永正年間百韻 3 卷】／x x [なつたれも] / 永正 7 (1510) 年 4 月 1 日

ゆうぐれの山

ゆきふりむかふゆふくれのやま
ひくももふれる所ははるるひに

【顕徳院前千句】／白石 [はにはせに] / 文明 14 (1482) 年 10 月前後

【文選年間百韻 3 卷】／何年 [みつみえぬ] / 千葉第 / 文明 17 (1485) 年 6 月 26 日

ゆうぐれ

ゆうぐれ

【文選年間百韻 3 卷】／何年 [みつみえぬ] / 文明 24 (1555) 年 3 月 26 日～梅日

【文選年間百韻 3 卷】／何年 [みつみえぬ] / 文明 24 (1555) 年 3 月 26 日～梅日

ゆうぐれ

ゆうぐれの山

ゆきふりむかふゆふくれのやま
ひくももふれる所ははるるひに

【顕徳院前千句】／白石 [はにはせに] / 宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日～21 日

【春日年間百韻 1 卷】／何年 [たけのはに] / 嘉永 3 (1443) 年 10 月 23 日

かすみけりささらたにともゆふつと
おぼつかないやなよふこと

【永正年間百韻 3 卷】／x x [なつたれも] / 永正 7 (1510) 年 4 月 1 日

ゆうぐれの山

ゆきふりむかふゆふくれのやま
ひくももふれる所ははるるひに

【顕徳院前千句】／白石 [はにはせに] / 文明 14 (1482) 年 10 月前後

【文選年間百韻 3 卷】／何年 [みつみえぬ] / 千葉第 / 文明 17 (1485) 年 6 月 26 日

ゆうぐれ

ゆうぐれ

【文選年間百韻 3 卷】／何年 [みつみえぬ] / 文明 24 (1555) 年 3 月 26 日～梅日

【文選年間百韻 3 卷】／何年 [みつみえぬ] / 文明 24 (1555) 年 3 月 26 日～梅日

ゆうぐれ

ゆうぐれの山

ゆきふりむかふゆふくれのやま
ひくももふれる所ははるるひに

【顕徳院前千句】／白石 [はにはせに] / 宝徳元 (1449) 年 8 月 19 日～21 日

【春日年間百韻 1 卷】／何年 [たけのはに] / 嘉永 3 (1443) 年 10 月 23 日

かすみけりささらたにともゆふつと
おぼつかないやなよふこと

【永正年間百韻 3 卷】／x x [なつたれも] / 永正 7 (1510) 年 4 月 1 日

ゆうぐれの山

ゆきふりむかふゆふくれのやま
ひくももふれる所ははるるひに

【顕徳院前千句】／白石 [はにはせに] / 文明 14 (1482) 年 10 月前後

【文選年間百韻 3 卷】／何年 [みつみえぬ] / 千葉第 / 文明 17 (1485) 年 6 月 26 日

ゆうぐれ

ゆうぐれ

【文選年間百韻 3 卷】／何年 [みつみえぬ] / 文明 24 (1555) 年 3 月 26 日～梅日

【文選年間百韻 3 卷】／何年 [みつみえぬ] / 文明 24 (1555) 年 3 月 26 日～梅日

ゆうぐれ
ゆうだち

→入国の鏡

ゆふかほの→やともかりなる→ちきりにて
したかかれときそへとはまたるる
【春日日記紙葉 50巻】/ 唐脇 [いやとし
に] / 広永 31(1424)年 1月 25日

揚かほの→ははちきりの→しるへにて
したかれときそへここうからる
【春日日記紙葉 50巻】/ 作物 [つれみ
む] / 広永 32(1425)年 9 月 17 日

ゆうだち

→夜の音が清い

ゆふたちの→するかたへの→たまりみつ
いはまのさなみ→おとそすしき
【国書院天聖千句】/ 山豆 [あきさよひ] /
宝德元 (1449)年 8 月 19 日～21 日

ゆふたちの→ゆくへにつるる→おきつね
よせるやさみの→おとそすしき
【伊予千句】/ 作馬 [もろひとの] / 天文
6(1537)年 5 月 22 日

ゆうだち

→急ぐ

ひはまたのこる→ゆふたちのあと
こぬあきを→ひくらしのねや→いそくらむ
【慶長年間百顛 27 卷】/ □□□ [つつのと
き] / 萱白 / 慶長 18(1613)年 1 月 3 日

いつるひきよき→ゆふたちのあと
□□□をもうくれぬ□□□とや→いそくらむ
【天正四年万句 70 巻】/ 山豆 [みかつき
の] / 天正 4(1576)年 5 月 6 日～7 月 19 日

ゆうがお

→黄衣の空

ゆふかぼの→はなにくるまを→ひきいれて
けはひしらぬ→たそかれのそら
【天正四句万句 70 卷】/ 作人 [をうてみ
よ] / 天正 4(1576)年 5 月 6 日～7 月 19 日

ゆふかほの→かきほのつゆに→やすらびて
はなにことふ→たそかれのそら
【敬愚歌集 / 広島大学本】/ 書下 / 文和
5(1536)年冬～翌年の春

→哀の途絶えにほのめく

ひととほりせね→ゆふたちのあと
ひのかけは→くものとたえに→ほのめきて
【総集千句】/ 作人 [さきでちる] / (元
亀 4) 天正元 (1573)年正月 9 日～11 日

ふりめくほたる→ゆふたちのあと
むらくものを→たえまつひかり→ほのめきて
【慶長年間百顛 27 卷】/ □□□ [はるにま
つ] / 萱白 / 慶長 6(1601)年 1 月 3 日
ゆうつけどり
木綿付け鳥を聞く
→深い夜
ゆうつけどりをうらはみてそくく
いましはしーうちもねぬべくーふかきよに
【集守千句】／何路［しこうや］／長享
元 (1487) 年 10 月 9 日＜〜11 日＞

ゆうつけどりをなにこにそくく
ゆめひとのーあとはかもなくーふかきよに
【住吉千句】／何木［つさはつゆ］／大永
元 (1521) 年 11 月 1 日〜14 日

ゆき
内の雪
→洪の浮舟
もろともにーひともわけけりーうちのゆき
よるへはいつくーなみのうきふね
【看関日記紙背 50 巻】／何路［うのはなの］／応永 30(1423) 年 4 月 4 日
あとみるーしのひかひのーうちのゆき
ことにこくいるーなみのうきふね
【看関日記紙背 50 巻】／何人［かみにうめ］／応永 31(1424) 年 2 月 25 日

草は残らない雪の下折
→野分する庭に月
くさはのころぬーゆきのしたをれ
のわきせーにはのきかけーよるさえて
【新撰読歌集・実隆本】／秋下／明応
4(1496) 年 9 月 26 日
くさはのころぬーゆきのしたをれ
のわきせーにはをしかにーときふけて
【下草／金子本】／秋／延徳 4(1492) 年頃

今朝の初雪
→春待てる
ふるきほりのーけさのはつゆき
おきみつつーはつくよはのーさえさえて
【崇正年間布部 20 巻】／何人［かけこすは］／崇正 3(1462) 年 2 月 27 日

むらむらのころーけさのはつゆき
ふきたゆむーかせもはひはーさえさえて
【天文年間布部 38 巻】／夢想［おりてなほ］／天文 10(1541) 年 3 月

越の白雪
→帰る雁
はるふかきまてーこしのしらゆき
ありあげのーつきもなこりといかるかり
【看関日記紙背 50 巻】／山何［あつさなほ］／応永 32(1425) 年閏 6 月 25 日
きゆるひもなきーこしのしらゆき
かへらかりーいつかったこえてーままはこむ
【幸禄年間布部 8 巻】／白何［あきみとる］／幸禄 3(1530) 年 3 月 2 日

廉を捲けば雪
→夜もすら
すたれをまけはーゆきしろきやま
よもすからーしくれしきのーけさすみて
【弘治年間布部 8 巻】／何勲［たくこそてに］／弘治 2(1557) 年 12 月 2 日
すたれをまけはーけさのうすゆき
よもすからーあらしをつてーかたしきて
【成立不詳・宗書以前 8 巻】／朝何［なひくよや］／成立不詳

峰の白雪
雪のうき

一寒ゆる夕風

まさこれに－まきるるゆきの－ふりはれて
ふきあげのに－さるるゆふふかせ

【文安頃千句4巻】/ 何路 [やへひとへ]

「ふりはれてつきにもねるる－ゆきのかな
さきのうへに－さるるゆふふかせ

【長禄三年千句11巻】/ 初何 [ふりはれて]
／長禄3(1459)年12月2日～5日

雪消える

一鸚鳴の声

たきつせの－まさらはおくの－ゆききえて
ふるすをいつる－うくひすのこゑ

【看聞日記紙背50巻】/ 山何 [やよやよひ]／応永31(1424)年3月18日

「ふりつつも－のやまをわかつ－ゆききえて
みきりにちかし－うくひすのこゑ

【天正年間百講57巻】/ 何垣 [ゆくそてに]／天正11(1583)年3月1日

～水流れる

はるのひの－かすみののやま－ゆききえて
こほりなかる－さはののかはなみ

【永享年間百講4巻】/ 何木 [さのはの]／永享6(1434)年6月18日

うくすすの－こゑのかよひち－ゆききえて
こほりなかる－たきのゆくすゑ

【寛享年間百講20巻】/ 何水 [をるひとを]／寛享5(1464)年3月29日

～雪になる

ゆきにやならむ－そらそさむけき
のをとはみ－つまきみのちの－いそかれて

【因幡千句】/ 何石 [やまはたか]／文明7(1475)年11月20日＜～22日＞

ゆきにやならむ－ちかたのく
ふゆこり－こころになはも－いそかれて

【文明十四年方文52巻】/ 初何 [をるそ
tに]／文明14(1482)年7月4日～9月14日

～雪の書き

【ゆきのおびの

一山高い

すきむらうすき－ゆきのあけほう
やまたかみ－よるのあらしや－よわるらむ

【巻波千句】/ 何囲[ゆくはるに]／文
明14(1482)年10月前後

ふしにれるる－ゆきのあけほう
つくいっぱい－おとろくにはの－やまたかみ

【東山千句】/ 何何 [つるつにに]／応永
15(1518)年8月10日～12日

【ゆきのおびの

雪の朝ぬけ

ゆきのあけは

雪消える

一鸚鳴の声

たきつせの－まさらはおくの－ゆききえて
ふるすをいつる－うくひすのこゑ
ゆくすえ

雪の内

→冬観る頃

むらとりの-たつにみえぬ-ゆきのうち
たれくらさす-ふゆこもあること

【三島千句】／物語 [はるとほし]／文明
3(1471)年 3月21日～23日

たくさはの-のるも-ゆきのうち
かせもあたらす-ふゆこもあること

【成立不詳・心敬以前 14 巻】／何笏 [た
しかし]／成立時不明

雪の中空

→ふきと吹く

くれわたりる-ゆきのなかそれ
ふきとふく-あらしこのおとな-しかしかにて

【羽柴千句】／何笏 [すくにゆく]／天正
6(1578)年 5月 18・19日

のはちりきゆる-ゆきのなかそれ
ふきとふく-かせよりのち-あさつくるひ

【天正年間百首 57 巻】／xx [わけゆか
は]／天正 4(1576)年 8月 19日

ゆっくり

身の行方

→明かし暮らす

いにしへに-まかせやせまし-みのゆくへ
かたつらにやは-あかしくらさむ

【伊予千句】／物語 [すすしは]／天文
6(1537)年 5月 22日

たくふれは-かせまつつゆの-みのゆくへ
かねてつきに-あかしくらさむ

【文禄四年万句 52 巻】／退佐 [かすみ
とは]／文禄 14(1592)年 7月 14日～
9月 14日

ゆっくり

老いの行く末

→春の下草

あるにまかせる-おいでのゆっくり
たねさへに-もりのしたくさ-よもかれし

【寛永年間百首 20 巻】／何笏 [いはかね
に]／寛永 2(1665)年 9月 23日

たのむあるや-おいでのゆっくり
ふゆかれる-もりのしたくさ-はるまらて

【新撰蔵経渾集／実隆本】／冬／明応
4(1495)年 9月 26日

かぜのゆっくり

風の行末

→植え置く

いかにふきそぼ-かせのゆっくり
うえおきし-そののふのたけの-かせふかみ

【天正年間百首 57 巻】／何笏 [かくさ
ち]／天正 11(1583)年 1月 10日

のとかになりぬ-かせのゆっくり
うえおきし-みきりのまつの-かくさもり

【文禄二年千句 10 巻】／何笏 [うすきり
や]／文禄 2(1593)年 4月 8日～10日

月の行く末

→時雨れる

なみにかたふく-つつきのゆっくり
をしかなく-あはちのやまや-しくるらむ

【大永年間百首 14 巻】／何笏 [ゆきのう
ちに]／大永 5(1525)年 1月 25日

あかつきかたの-つつきのゆっくり
つゆさむき-まくらのうへ-しくるらむ

【天正年間百首 57 巻】／何笏 [とふひと
の]／天正 14(1586)年 3月 19日
ゆめ

古の夢

～小夜鶴～

わかれしまさまの一いしにへのゆめ
さよさくら一かねよりののは一まとまるまで

【永原十書】／何木 [おとそなき]／明応 9(1500) 年 7 月 17 日

みるもくやさき一いしへのゆめ
つきひとり一はらぬあきの一さよまくら

【天文十八年十月書】／青何 [ゆけはうめ]
／天文 18(1549) 年正月 11 日

仮の夜の夢

～朝の雲～

はかなしな一かにみたりしよるのゆめ
あしたのくもの一あともとまらす

春の夜の夢

～草枕～

みえこやたた一はるのよのゆめ
つきもいつ一のかにされむ一くさまくら

【伊予十書】／何柱 [なつきさは]／天文 6(1537) 年 5 月 22 日

かへるともなき一はるのよのゆめ
おもはすよ一すみれつむのの一くさまくら

～夜のゆめ～

【成立不詳・成化以降 6 番】／何人 [みつたまり]／成化時不詳

かりそ 믠一なれてかへりしよるのゆめ
あしたのくもの一のころやまのは

【専順関係 2 番】／雄／応仁元 (1467) 年 5 月 10 日

仮臥の夢

～鐘の声～

いつもさめゆく一かりふしみのゆめ
かねのこゑ一きこえてのちの一ふかきよに

【天文年間十書 3 番】／山何 [つきやけさ]／天文 21(1552) 年 7 月 26 日

むしもあへぬ一かりふしみのゆめ
かねのこゑ一ことともしらす一あけはてて

【天文年間十書 3 番】／xx [しかむせく]／天文 24(1555) 年 9 月 19 日

ただ夢の内

～まどろむ～

おとつぬるや一たたゆめのうち
つきよしよ一はまちるつも一まとろむ

【永禄年間十書 2 番】／河船 [ひきうる]／織白／永禄 5(1562) 年 1 月 3 日

ひかりのかけは一たたゆめのうち
ともしひの一ふくろずもしらす一まとろむ

【行助関係 4 番】／行助句集／音楽曲部／
短夜の夢

→ 山風が吹く

木久らのゆめを一さそりあきかせ
いつくとも一おほえずと尋かり一かりのこえ
【文明天智院文書録 34 巻】/「ゆきのかけ」/文明天智院文書録 5(1573)年 12月5日

木久らのゆめを一さそりあきかせ
わかるや一ありあけたの一かりのこえ
【文明天智院文書録 12 巻】/「あけのひの」/文明天智院文書録 2(1593)年 5月

→ 濃の浮橋

→ 御膳

ねぬるおをうらみやすらむ一ほどととし
【行動関係 4 巻】/行動句集/大鞍天王窟本

まくらのゆめに一つけやまつらむ
ぬるひとに一こえをはしきめ一ほどととし
【豊岡/伊地知本】/文明天智院文書録 6(1474)年
2月以前

→ 御膳

むすふともなき一みしかよのゆめ
まちふけて一あふももほなき一しのひつま
【看間書記後 50 巻】/山何「やややよひ」/応永31(1424)年 3月18日

みるもしくなき一みしかよのゆめ
ふかくあふく一かかればやさき一しのひつま
【看間書記後 50 巻】/山何「しじやいと」/応永31(1424)年 10月26日

→ 御膳

とけてやばみる一みしかよのゆめ
かせそよく一なにはのにしきの一かりまくら
【山国院/北野天満窟本】/永正十二年

おもけをしき一みしかよのゆめ
あふほとも一なにはのにしきの一ふしたまに
【山国院/北野天満窟本】/永正十三年

→ 波

つくやまくらの一ゆめのうきはし
とこのうへの一あたかやみの一なみたかは
【元亀年間文書 6 巻】/「はなのがときと」/元亀4(1573)年 6月6日

はかなくかふる一ゆめのうきはし
わたるせは一いつくならむ一なみたかは
【天正四年万文 7 巻】/「はかくさも」/天正4(1576)年5月6日〜7月19日
夜の夢

→春の夜

とてえからなるゆめのうきはし
ねぬるまのうはほさらしかきはるのよに
【永禄石山千句】／何時／つきかるく／永禄⑦(1564)年5月12日

たえはてけになゆめのうきはし
いとはやもーあげむとるーはるのよに
【寛正年間百題２０巻】／□□／なかつきと／寛正②(1461)年9月

夜の夢

→古の月

ゆめらにもーゆきつつつおなしーかりまくら
またみぬかたやーむさしのはら
【羽柴千句】／薄乃／たちはなの／天正⑥(1578)年5月18・19日

すえいかにーみはてねゆめのーかりまくら
あすもくべきーむさしのはら
【文明十四年万条2巻】／山何／あきかせに／文明⑪(1482)年7月4日～9月14日

夢の面影

→深の上

うつのはかりのゆめのおもかけ
まくらからーあかてまたねのーとこのうへ
【称名院授善千句】／何時／いるかたの／永禄⑥(1563)年12月14日～18日

つきをなこりのゆめのおもかけ
ふたりねしーあとすさましーとこのうへ
【毛利千句】／初何／よとをもと／文禄③(1594)年5月12日～16日

夢の仮枕

→月にきぐり

ならはすーみえましゆめかーやからまくら
つきにいくたひーかけふるさと
【成立不詳・宗長以前15巻】／何時／みねちかし／成立時不詳

みしゆめのーのちもよかきーからまくら
つきにいくたひーとこのやまかせ
【天和年間百題2巻】／□□／おいかみに／天和②(1682)年4月3日

変わる世の中

→夏衣

ひのこころのーかはるのーなか
つなこもーはるのはなそめーぬきすてて
【秦順宗祇百句付】／秦順宗祇百句付／応仁②(1468)年5月下旬

→武蔵野の原

變る世の中

→夏衣

ひのこころのーかはるのーなか
つなこもーはるのはなそめーぬきすてて
【秦順宗祇百句付】／秦順宗祇百句付／応仁②(1468)年5月下旬

味気ない世

→懸置く

わかれもしかすーあちきなのや
あととへーたのめおきてもーいかならむ
【磐波田千句】／□□／みののおもに／文禄③(1594)年10月前後

なれこしとしもーあちきののやす
しかはかりーたのめおきてもーわするらむ
【大永四年月並記二千題】／□□／うくひすの／月並記千題／大永③(1524)年2月23日

夜の夢

→春の夜

とてえからなるゆめのうきはし
ねぬるまのうはほさらしかきはるのよに
【永禄石山千句】／何時／つきかるく／永禄⑦(1564)年5月12日

たえはてけになゆめのうきはし
いとはやもーあげむとるーはるのよに
【寛正年間百題２０巻】／□□／なかつきと／寛正②(1461)年9月

夜の夢

→古の月

ゆめらにもーゆきつつつおなしーかりまくら
またみぬかたやーむさしのはら
【羽柴千句】／薄乃／たちはなの／天正⑥(1578)年5月18・19日

すえいかにーみはてねゆめのー切りまくら
あすもくべきーむさしのはら
【文明十四年万条2巻】／山何／あきかせに／文明⑪(1482)年7月4日～9月14日

夢の面影

→深の上

うつのはかりのゆめのおもかけ
まくらからーあかてまたねのーとこのうへ
【称名院授善千句】／何時／いるかたの／永禄⑥(1563)年12月14日～18日

つきをなこりのゆめのおもかけ
ふたりねしーあとすさましーとこのうへ
【毛利千句】／初何／よとをもと／文禄③(1594)年5月12日～16日

夢の仮枕

→月にきぐり

ならはすーみえましゆめかーやからまくら
つきにいくたひーかけふるさと
【成立不詳・宗長以前15巻】／何時／みねちかし／成立時不詳

みしゆめのーのちもよかきー切りまくら
つきにいくたひーとこのやまかせ
【天和年間百題2巻】／□□／おいかみに／天和②(1682)年4月3日

変わる世の中

→夏衣

ひのこころのーかはるのーなか
つなこもーはるのはなそめーぬきすてて
【秦順宗祇百句付】／秦順宗祇百句付／応仁②(1468)年5月下旬

→武蔵野の原

變る世の中

→夏衣

ひのこころのーかはるのーなか
つなこもーはるのはなそめーぬきすてて
【秦順宗祇百句付】／秦順宗祇百句付／応仁②(1468)年5月下旬

→武蔵野の原
さめてむちうちにーかはるよのなか
なつぞろもついたたちきたる—よはあけて

【新続大覚要集】／夏／万徳3(1660)年正月

捨てる世の中

—花ふれは思う

なほいかならむーつするよのなか
わひぬれはーおもひしことのーまさらみに

【遠佐千句】／何人／はなそくも／文明
8(1476)年3月6日～8日

まよふちにもーつするよのなか
わひぬれはーおもふこさにへーちかかて

【基佐集／静嘉堂文庫本】／楊／永正
6(1509)年以前

のちののものは

後の世の道

—大和歌

いかさまならむーのちのよのみち
かすかにーかはりもできぬーやまとと

【成立不詳・心敬以前14巻】／何船／ちりしれぬ／成立時不明

くらきそうらみーのちのよのみち
たとたとしーこれよりさきのーやまとた

【宗関関係9種】／宗仰／静嘉堂文庫本

人の心が変わる世の中

—秋の暮れ

ひとのこころのーかはるよのなか
やまとをーうかれいてめやーあきのくれ

【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
いまをなほーとへやよしのーあきのくれ

【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

秋が来る

—哀える

ひとのこころのーかはるよのなか
うつせみのーはやまおろしにーあきはきて

【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
そのいはーのこころもみのーおとへへ

【寶草／伊地知本】／楊／文明6(1474)年
2月以前

—哀える

ひとのこころのーかはるよのなか
よもきふーかれぬあるしかーはれにて

【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
なきあとはーにうかりしたにーはれにて

【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

—色見る

ひとのこころのーかはるよのなか
まちをしむーはなにほたなきーいろみて

【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
たけはそのーこをおもふとーいろみて

【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

—憂い身の時

ひとのこころのーかはるよのなか
うきみさへーときにやあふとーはるたて

【専順宗祇百句付／専順宗祇百句付／応
仁2(1468)年5月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
うきみさへーいまはのときやーをしからむ

【宝草／伊地知本】／楊／文明6(1474)年
2月以前
→袖離れる
ひとのこころの一かはるよのなか
ききわびぬーしくれのはにそそってぬれて
【専順宗道百句付】／専順宗道百句付／応
仁 2(1468) 5 月下旬

→とりあえず
ひとのこころの一かはるよのなか
さむきひはーみつにいるてふーとりとりに
【専順宗道百句付】／専順宗道百句付／応
仁 2(1468) 5 月下旬

→あわない羽根を並べる鳥邸山
ひとのこころの一かはるよのなか
はかなしやーはねをならへへーとりへやま
【抄草／伊地知本】／応／文明 6(1474) 年
2 月以前

→差り
ひとのこころの一かはるよのなか
うみやまの一なるところもーたひなれや
【専順宗道百句付】／専順宗道百句付／応
仁 2(1468) 5 月下旬

→見やり
ひとのこころの一かはるよのなか
なへてうきーあきなとほしのーちきるるむ
【専順宗道百句付】／専順宗道百句付／応
仁 2(1468) 5 月下旬

→花見
ひとのこころの一かはるよのなか
のへをわけーやまちをたとするーはなさきて
【専順宗道百句付】／専順宗道百句付／応
仁 2(1468) 5 月下旬

→月を見る
ひとのこころの一かはるよのなか
よつのときーいつれまるとーつきをみて
【専順宗道百句付】／専順宗道百句付／応
仁 2(1468) 5 月下旬

→花のない
ひとのこころの一かはるよのなか
うれへあるーみはなかめつるーはなもなし
→羽根を並べる鳥部山

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
うたのみちーまることをうるのはーはなもなし

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→時鳥

ひとのこころの一かはるよのなか
ままたきすーはなきこころをーなくさめて

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
まだしよもーなきやまちのーはほときす

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
ほときすーへるやまちはーともならて

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→身を知らない

ひとのこころの一かはるよのなか
うれしさもーうきもゆめなるーみをしらて

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
ときをえはーなはおぞるへきーみをしらて

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→身を知る

ひとのこころの一かはるよのなか
みをしれはーわれとさめむーやともなし

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころの一かはるよのなか
みをしれはーいはむうらしもーなきものを

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

→我が上

ひとのこころのーかはるよのなか
かわうへにーおもはてたれをーそらむらむ

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

ひとのこころのーかはるよのなか
かわうへにーはしのひとのーあきもなかなか

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬

人の心の世の中

→花を頼む

ひとのこころのーあたしよのなか
はなをたれーうつろふものとーうらむらむ

【竹林抄/新古典文学大系本】/春/文明

8(1476) 年 5 月頃

ひとのこころのーかはるよのなか
なつやまとーみなすをはなやーうらむらむ

【専順宗祇観句付】/専順宗祇観句付/応

仁 2(1468) 年 5 月下旬
世に長らるる
→花の一本
あるのはみなーなきよかなきさしーながらへに
えたももきのーはなのひとと
【永禄元年花千句／□□（さそふなよ）
／永禄元 (1558) 年 3 月 23 日 ~ 25 日
あたになりせーよはけふのみのーながらへに
くちきのにこるーはなのひとと
【天正四年方句70巻／何路（うすゆき
に）／天正4 (1576) 年 5 月 6 日 ~ 7 月 19 日
世の中
→身を安く
たのむことーあれはなほうきーよのなかに
おいてやひとはーみをやすくせむ
【延徳年間百錦16巻／何人（うすゆき
に）／延徳3 (1491) 年 10 月 20 日
をくるまのーくるしきめくるーよのなかに
うしやいつかはーみをやすくせむ
【延徳年間百錦16巻／初何（さけはさ
く）／千句第三／延徳4 (1492) 年 3 月 3 日
世の習い
→蓬生の影
おとろへもーさかえもおなしえーよのならひ
さそふにいてぬーよもきふのかけ
【元和年間百錦24巻／□□（よにおほ
へ）／元和7 (1621) 年 1 月 19 日
しのふるもーかくれたかたよーよのならひ
けふりとともにーよもきふのかけ
【天正四年方句70巻／何何（はつあら
れ）／天正4 (1576) 年 5 月 6 日 ~ 7 月 19 日
世ばかり掛かる
→春の主題
おなしえーたのはかりやーかかるらむ
かすならぬそーつらきたまのを
【大原野十花千句／何路（けふそは）
／元亀2 (1571) 年 2 月 5 日 ~ 7 日
世を越う
→塢染の袖
うかげりーよやたひとをーいとふらむ
こころよりいつーすみそめのそて
【明応年間百錦22巻／何人（あきのい
ろに）／明応4 (1500) 年 7 月 11 日
みつをたにーぬるはとよをーいとふらむ
あさくしもやーすみそめのそて
【永正年間百錦34巻／山家（ひとめき
へ）／永正8 (1511) 年 11 月 3 日
よき
→与喜の御社
→何処にも
かすまでつきのーよきのみやしろ
いつくにもーあまみつかみのーなはたかし
【看聞日記紙背50巻／何何（まつはあ
め）／応永32 (1425) 年 7 月 25 日
かみのこころもーよきのみやしろ
いつくにもーおなしえたのーあとたれて
【看聞日記紙背50巻／何物（いくれみ
む）／応永32 (1425) 年 9 月 17 日
よこ
→棚引き横雲の空
→月残る
やまにたなびくーよこくものそら
つきのよやーあくるとみえてーのこらむ
【紫野千句／何木（はにしきる）／延文
2 (1357) 年以後、応安3年6月以前
みねにたなびくーよこくものそら
つきやまーかすみかくれにーのこらむ
横雲霞む
→夢の浮橋
よこくもの－わかるるかたや－かすむらむ
よるるはなの－ゆめのうきはし
【熊野千句】／何個［かななるや］／文正
元 (1466) 年 3 月以前
よこくもの－のこれをるよも－かすむひに
さめてそなほも－ゆめのうきはし
【文明十二年千句 8 巻】／白何［まつりする］／文明 12(1480) 年 4 月 10 日～*日
横雲の空
→春の夜
かすみのまよふ－よこくものそら
はるのよ－ゆめのわかれは－たとたとし
【文明十四年万句 5 2 卷】／手何［はつたに］／文明 14(1482) 年 7 月 4 日～9月
14日
ひきかれてゆく－よこくものそら
はるのよ－ときをひととしきかりとひて
【論呂 4 卷】／宗長/
よしの
み吉野の奥
→影塩の
くもはいくへそ－みよしののおく
たつねる－はなにやすらふ－かけくて
【看日記日記紙 5 0 巻】／何物［かみとうめ］／応永 29(1422) 年 2 月 25 日
さとのほかなる－みよしののおく
かへらしよ－たつねるなのは－かけくて
【看日記日記紙 5 0 巻】／何船［ゆきにみて］／応永 32(1426) 年 11 月 25 日
→花を見る
みをすつへは－みよしののおく
わかやと－たつねのみこし－はなをみて
【壁草／書陵部本】／巻／永正 9 年
いりにしけとの－みよしののおく
しるへする－あとさへたゆる－はなをみて
【宗長関係 8 種】／宗長付句／「雑袋」所
載本/
→蜂子鳥
はなをたよりの－みよしののおく
ゆくゆくも－ききこそかなね－よふことり
【東山千句】／何船［をきにかせ］／永正
15(1518) 年 8 月 10 日～12日
よしひなかさも－みよしののおく
すつるみの－つれつれいつち－よふことり
【那智誰／北野天鶴宮本】／永正十二年/

みよしのやま
→鷹の声
みよしのや－はなよりおくに－ひきこもり
かすみにもる－うくひすのこゑ
【天正年間百錦 5 7 卷】／□□［ともなしに］／天正 18(1590) 年 11 月 21 日
みよしのや－はなをすかさの－すみところ
ともこそなれ－うくひすのこゑ
【慶長年間百錦 2 7 卷】／□□［みつのうへに］／ (?)/慶長 17(1612) 年 1 月 3 日

み吉野の山
→長関
かすみやへ－つ－みよしののやま
やまふきの－せにゆくみつの－のとかにて
【文安常句】／何月［しほくもの］／文安 2(1445) 年 10 月 18 日
はなにのみいる－みよしののやま
しらくものの－をのへのまを－のとかにて
【伊予千句】／何月［かせをてに］／天文
6(1537) 年 5 月 22 日
よしのがわ
吉野川の花
→春過ぎる
よしのかはひときちほるぬはなまなし
みゆききつつはるもすきげり
【伊庭千句】／竹村（うつりきつ）／大永
4(1524)年3月17日～21日
やまふきのはなさきつくよしのかは
せかれぬみとはるもすきげり
【成立不詳・宗長以前15巻】／何船（し
もろき）／成立時不詳

よぶこどり
呼子鳥
→観東ない
なつれははるかへれとやよいふこどり
おほつかきはゆめのよよのか
【美濃千句】／何心（つゆにき）／文明
4(1473)年12月16日～21日
よぶこどりよぶはたれをかまちぬらむ
おほつかきはしののめのつ
【豊盛千句】／何船（ありあけや）／永禄
4(1561)年5月27日～29日

よど
渡の川舟
→春雨
みつのにつけよとものはふね
むらさめのあはみさきやまささららむ
【文明十四年万句52巻】／一字蘋機（ち
あきふ）／文明14(1482)年7月4日～
9月14日
ともにおくるよとものはふね
むらさめのあまたふるまかなはほしわびて
【文明十四年万句52巻】／何船（かみや
しる）／文明14(1482)年7月4日～9月
14日

→時雨
なこりなかむるよとものはふね
なきつけるよつばすゆのほとときす
【永原千句】／何色（うつろはね）／明応
9(1500)年7月17日
はやかけするよとものはふね
ほとときすひとつあとにやまみみて
【空間関係4種】／空間連歌／天理本／
さすかにはやきよとものはふね
ほとときすひとをたにきりはらて
【基佐集／静嘉堂文庫本】／夏／永正
6(1509)年以前

よもぎ
蓬生
→重乳根の詩
よもきふのかけしていむわかみかは
なけくぞなこりたらちねのあと
【延徳三年万句16巻】／何船（はるすき
ぬ）／延徳4(1492)年4月8日
よもきふの一やをしるへとたとるらむ
たいちえてたしかたらちねのもと
【文禄二年万句10巻】／王何（かはせ
に）／文禄2(1593)年4月8日～10日

蓬生の影
→蝶蜂
のところはまれのよもきふのかけ
のわきせしけさまつきにきりきりす
【弘治年間百花8巻】／何船（ゆみつや）
／弘治2(1556)年3月24日
すみならひたるよもきふのかけ
きりきりすなくよのつっはなはさひし
【天正年間百花57巻】／□□（うくひす
も）／天正14(1586)年1月4日
みちわけわふるよもきふのやと
きりきりすのころをふるよもきふの
【美濃千句】／何色（しきれつつ）／文明
4(1473)年12月16日～21日
よる
秋の夜すうから
→彼なる
このはまたちる－あきのよすから
ねられめや－まくらにちかく－うつところも
【文安顕年間4巻】／朝倉 [すあとほき]
/　
よひのまふるる－あきのよすから
ねられめや－のわきやまかせ－ふきそびて
【文武十六年年中11卷】／二之逆音 [は
なははの]／文明 15（1480）年3月3日

あきのよのつ
秋の夜長
→聳
はしゐにあかぬ－あきのよになかさ
ききすてて－たれかをぬる－きりきりす
【文治年間年賀14巻】／今人 [つきやふ
ね]／大水 2（1522）年8月
おもひをつす－あきのよになかさ
きりきりす－なれかなくてんに－まけむやは
【弘治年間年賀8巻】／今人 [うめひとき]
／裏白／弘治 3（1557）年1月3日

あきのよのな
秋の夜なな
→草枕
つきまつころの－あきのよなな
ふるさとも－さそなつゆけき－くさまくら
【天文年間年賀38巻】／xx [しかそな
く]／天文 24（1555）年9月19日
おもひをつす－あきのよなな
ゆめにわれ－みゆらむものをくさまくら
【壁草／大阪天満宮文庫本】／壇／永正
2（1505）年8月23日以後同3年3月以降

秋の夜の月
→身にしるる
ひとのかたみの－あきのよのつ
しもよふ－かれののすき－みにしみて
【長町年間年賀2巻】／伊川 [よるやあむり]／文明
8（1476）年3月6日＜～8日＞
あくかれてゆく－あきのよのつ
ものおもふ－みちののかせ－みにしみて
【諸家法式編3巻】／手信 [むすふん]／
建武 4（1337）年6月23日

→野分する
あさちかやを－あきのよのつ
かこはれし－つゆのたよりも－のわきして
【文亀年間年賀4巻】／今人 [さえよの]
／文亀 2（1502）年8月6日
むぐらかおく－あきのよのつ
いつこにも－さはるかげなく－のわきして
【宗家関係8巻】／老耳／天理本／

ほらばきよ
臥月夜
→長閑の枕
おほろつきよに－ゆくそらもなき
のとかるや－まくらゆめを－したふらむ
【親波田年賀】／□□ [みのももに]／
文明 14（1482）年10月前後
おほろつきよに－しくあきもやは
のとかる－まくらもをたれて－あかしはて
【慶長年間年賀27巻】／□□ [ちりつさ
るし]／慶長 4（1599）年6月18日

→時鳥の声
おほろつきよい－ゆめをのこして
ほときさ－はるのまくらの－ひとこゑに
【報巴亡父範善年賀】／何木 [おとこげ
と]／天文 24（1555）年3月26日～暦
おほろつきよい－あのこころやま
ほときさ－それかいやと－こふゆきて
仮の夜の夢
→鳥の雛

はかなしなれどかりにみたりしよるのゆめ
あしたのくもの一るともとまらす
【成立不詳・宗穆以前5巻】／何船 [きたにみる] ／成立不詳

夏の夜の月
→時鳥

ことかはすまもーなつのよのつき
きむたたーそれかあらぬかーはとときす
【天文二年千句】／何船 [はなにとふ] ／
天文 2(1571) 年 3 月 5 日

心を尽す雨の夜
→身が老いた時鳥

ねられぬここをつくるせものよ
まつうちーみもおいぬへきーはとときす
【心歌関係10種】／早川内連歌合／天理本

眠ねむる夜
→枕

ねさめるよのうつのたにをし
おときけはいよそのくれをいまくらにて
【延徳年間百題16巻】／夢想 [すみよしの] ／
延徳 2(1490) 年 9 月

月が霞む夜
→漆黒をぬく雁

ありけのつつきやあらねとーかすむよに
きけはくもぬをーかへるかりきぬ
【延徳年間百題4巻】／山何 [おいまつば]
／万葉歴解／万葉 9(1437) 年 3 月 21 日

春の夜の月
→声々

いへたにやるすーはるのにのつき
あわれけてーかはつるさきーこゑこゑに
【彰徳満千句】／宇治鮎／[わかはより]
／天文 15(1546) 年 8 月 25 日

月夜な夜
→き運の鶴

しのふれはつつきもさはりの一をたなよに
はらふるとおきーさむしろのにゆ
【明応小後百題22巻】／何船 [はなそばる] ／
明応 2(1493) 年 3 月 25 日
よる

→草枕
みえこしやたた－はるのよのゆめ
つきもいった－ときかになれむ－くさまくら
【伊予千句文】／広瀬『なっくさは／天文
6(1537)年 5月22日　かへるとなき－はるのよのゆめ
おもはずよ－すみれつむのの－くさまくら
【鏡関係二種】／法隆寺善達敏／赤木文
庫本／応仁元(1467)年 5月10日

深い夜の空
→有明
かへすもまつも－ふかきよのそら
をくるまの－ときさへにほふ－ありあげに
【永正四年百選34巻／何色／うゑみて
ぬ／永正6(1509)年間 8月29日　とりのなくねは－ふかきよのそら
あふすかや－すきのはしろき－ありあげに
【永正四年百選28巻／何人／つきたか
ら／永禄5(1562)年 8月11日

短夜の月
→時島
ありあげになる－みしかよのつき
ほときす－なほしびのひねの－つれてなくて
【宝德四年百選／山何／みにしむは／
宝德4(1452)年 3月12日　こころをすます－みしかよのつき
ほときす－たまるるそに－かねなりて
【寛文四年百選2巻／□□／なっなきは／寛文13(1673)年 6月12日　あまりみしかき－みしかよのつき
なつかりの－あしごのひに－ほときす
【天正四年万選70巻／何心／やまかけや／天正4(1576)年 5月6日～7月19日

短夜の夢
→急増
むすふともなき－みしかよのゆめ
まちふけて－あふもほなき－しのひつま
【看出細記要五巻／山何／やよやよ
ひ／応永31(1424)年 3月18日　みるもすくなき－みしかよのゆめ
ふけてあふ－わかれそはやき－しのひつま
【看出細記要五巻／片何／しもやい
と／応永31(1424)年 10月26日

→鏡泊の波
とけてやはみる－みしかよのゆめ
かせそよく－なれはのあしの－かりまくら
【脇開／北野野高宮本／永正十二年
おもかけをしき－みしかよのゆめ
あふほども－なれはのあしの－ふしみのまに
【脇開／北野野高宮本／永正十三年

夕月夜
→覚束なさ
まつかけは－みえてすなき－ゆふつくよ
おはつかなしや－あきのくるみち
【嘉吉年間百選1巻／何木／たけのはに
／嘉吉3(1443)年 10月23日　かすみてり－さらてもと－ゆふつくよ
おはつかなしや－あきのくるみち
【永正四年百選34巻／□□／なっなこ
も／永正7(1510)年 4月1日

夜が明ける
→月残る
あふちさく－やとのときくに－よはあけて
かせふくと－ときの－つれのこす
【伊予千句文／広瀬『さみたれの／天文
6(1537)年 5月22日　たひひとの－ともをいさなふ－よはあけて
あまのとやまの－つれのこす
【長禄三年年選11巻／何舟／しはかれ
て／長禄3(1459)年 12月2日～5日

夜が長い
→悪戦勝

月を見る

はつしもふれる—よこそなかれた
まとろます—かりねのへの一つきを目

【熊野千句】／何田 [おささくら]／文正
元 (1466) 年 3 月以前

ねさめののちも—よこそなかれた
ふるさとに—をはすてやまの一つきを目

【新撰英和辞典／実隆本】／秋上／明応
4(1495) 年 9 月 26 日

夜が深い

かねたにならず—よこそふかれ
くさまくら—しらぬいつの一つきなれや

【東山千句】／何色 [しかのねは]／永正
15(1518) 年 8 月 10 日～12 日

かねにたいった—よこそふかれ
たかさとも—しつけきへの一つさくら

【成立不詳・宗祐以前 15 卷】／山何 [め
つらし]／成立時不詳

夜が更ける

—まどるまない

ひさしくなりぬ—よやふけぬらむ
いまこむの—ちきはかなく—まとろまて

【成立不詳・宗祐以前 15 卷】／未

夜寒おぼえる

夜は東雲

—別れる

よしばののめに—しくれてそゆく
わかれての－てのけしきを—ひとみよ

【永正十胡千句】／何船 [ねぬるよを]／
永正 13(1516) 年 3 月 11 日～14 日

よしばののめに—はるのたまくら
わかれての－きはやはときはき—わるなるよ

【永禄年間千首 34 卷】／何船 [あひにあ
ひぬ]／永禄 6(1563) 年 11 月 18 日

夜もすか

夜しの影

—月の下

よもすから—のはのたたく－をとらて
はやきсадての－ともしびひのかけ

【熊野千句】／何人 [よろっとせ]／文正
元 (1466) 年 3 月以前

よもすから—まつはかせふく—ふるてたに
つきこそまとの－ともしびひのかけ

【延徳年間千首 16 卷】／何船 [はるすき
ぬ]／延徳 4(1492) 年 4 月 8 日

夜ゑむ杯

—月の下

よさむわすれて—くめるさかつき
もろともに—なかめあかせる一つのもと

【毛利千句】／初何 [よともに]／文禄
3(1594) 年 5 月 12 日～16 日

よるはすからに—くめるさかつき
あくるをも—しらてともなふ一つのもと
夜の夢
→古の月
ときもえぬまくらのうへ～よるのゆめ
みしはつその～いにしへのつ
【享徳三年下旬】／／享徳 2(1453) 8 月 11 日～13 日
はるかなる～ところもかよぶ～よるのゆめ
あふとはしるや～いにしへのつ
【天文年間百選 38 巻】／／天文 24(1555) 9 月 2 日

よるのあかせ

夜半の秋風
→草枕
すからにさひし～よはのあきかせ
あくるまでの～はのにおそき～くさまくら
【宮島千句】／／山岡 [ことのはや]／／天文 20(1551) 5 月 9 日～11 日
すさしささくら～よはのあきかせ
くさまくら～しきもさためぬ～いろにして
【五倉一日千句】／／何船 [をはさをへ]／／天文 9(1581) 11 月 19 日

夜半の月
→秋風の空
くもはれて～さたまりけりな～よはのつ
しくれつくせる～あきかせのそら
【称名院追題千句】／／宇喜頭 [くもはれ
て]／／永禄 6(1563) 12 月 14 日～18 日
ひとはいさ～しほはすれぬ～よはのつ
たのむるするは～あきかせのそら
【永正年間百選 34 巻】／／何船 [うちだひ
き]／／永正 13(1516) 1 月

よるのかかげ

夜半の虫の音
→月に仮枕
をささかもとの～よはのむしのね
ねられな～つにかふく～からまくら
【寛永年間百選 20 巻】／／何人 [うめおく
る]／／寛永 6(1465) 1 月 16 日
ところさめぬ～よはのむしのね
さやかなる～つをみるみる～からまくら
【大永年間百選 14 巻】／／何人 [ちあきを
も]／／大永 5(1525) 9 月 21 日

よるのかかげ

ししもも～とばやまらの～よはのつ
きりまれたる～かねかすかなり
【宗右衛門千句】／／山河 [ちちはらね]／／
永禄 4(1561) 9 月 14 日・15 日

よるのかかげ

弱り果てる
→蝋蟀

よるのかかげ
わかられる

別れ路の跡

→面影

あくかれいつる－わかれちのあと
おもかげに－わかれましびや－つれぬらむ

【難波田千句】／□□ [あけぼのを]／文
明14(1482)年10月前後

くもこそかたみ－わかれちのあと
ゆふへには－あめともなれ－おもかげに

【難波田千句】／□□ [にしきにして]／文
明14(1482)年10月前後

別れる

→命である

つらきよや－すみうちにたに－わかれらむいとひをしむも－いのちなりけり

【成立不詳・心経以前14巻】／何人 [はるかし]／成立時不詳

いくたひか－これをかきり－わかれらむのちのちきは－いのちなりけり

【愛秋談集／広島大学本】／恋上／文和
5(1356)年冬～翌年の春

別れる旅は悲哀

→逢う人

わかれゆくゆく－たひそかしなき
あふひとも－かたみになこり－うちなきて

【壁草／大阪天満宮文庫本】／恋下／永正
2(1505)年8月23日以後同3年8月以前

けふわかれしも－たひそかしなき
あふひとも－またふるさとの－なこりにて

【奈長関係8種】／老耳／天理本／
わすれる

誰に忘れる

→辛い

おもひなそへそたれにわすれむ
つらして－うつるならひは－しらぬ肴に
【文明年間六願書 34巻】／山何［かせにた
ちし］／文明18(1486)年9月30日
こひしきことを－塩てにわすれむ
つらして－ふたつかたに－うつらまし
【延徳年間六願書 16巻】／何路［かすす
すし］／延徳4(1492)年6月1日

忘れる草原

→古里

わするなるよーとはむとときるーくさのはら
たよりはかに－かかるふるさと
【太史官往来千句】／山何［のはなに]
／延享2(1488)年7月
わすれむものはききあるとふーくさのはら
なれこしれそかれるふるさと
【永正十花千句】／二之反音［こまとて
た］／永正13(1516)年3月11日～14日

忘れもない

→古

わすれもやらず－はるのおもけ
いにしへの－てらをかすみの－ててこめて

【天正四年万句 70巻】／何色［ちるはな
も］／天正4(1576)年5月6日～7月19日

わすれもやらず－ここのへのうち
いにしへの－なこりもいはは－おぼろかは
【文禄年二千句 100巻】／白何［としなみ
の］／文禄2(1593)年4月8日～10日

忘れようとする

→我が心

わすれむとすれば－ふるさとのゆめ
わかこころ－ちちになれとや－かかるちむ
【天文十八年二千句】／青何［ゆけほうめ]
／天文18(1549)年正月11日

わすれむとすれば－みなたなるところ
わかこころ－きみかこころを－かしつりて
【大永四年月並二千百句】／□□［そよと
しも］／月並二千百句／大永4(1524)年10
月23日

忘れなよ

→別れである

はなはまた－ねれしをわれも－わするなよ
はるこころなき－わかれなすや
【紫野千句】／何路［いつもむみ］／延文
2(1357)年以後・応安3年6月以前

なくさむる－ひとにうきよを－わするなよ
そふともしびの－わかれなすや
【永正十花千句】／何路［ゆくっきも］／
永正13(1516)年3月11日～14日

程は雲居

わするなるよーたひねにかすむ－よのはつき
ほろはくみの－はつほとときす
【難波田千句】／□□［あけはのを］／文
明14(1482)年10月前後

とほくになる－やとのわれも－わするなよ
ほろはくみの－ふるさとのやま
【長楽観集／広島大学本】／觀部／文和
5(1356)年冬～應和の春
わたす

打ち渡す
→駒も進まない

うちわたす—はもとかけて—よるなみに
あさかせたては—こまますます
【文明年間百篠34巻】／何人／きえねよし／文明14(1482)年2月2日

うちわたす—ふゆたのはらは—あはれにて
ゆきのゆふへは—こまますます
【天正四年万句70巻】／薄何／はつきりの／天正4(1576)年5月6日～7月19日

わたる

秋更け渡る
→雁鳴く

あきふけわたる—きりのうみつら
ゆふなみの—まつのはこしに—きりなきて
【合点之句／神宮文庫本／秋／天文
9(1541)年12月25日

あきふけわたる—つきのむらくも
かりなきて—よしはいわけて—たまくらに
【合点之句／神宮文庫本／雜／天文
9(1541)年12月25日

前渡り
→星の草刈り

ふえのねに—それとはしるき—まへわたり
ふねのにりたる—さとのくさき
【嘉靖千句】／何船／はるはゆきに／（元亀4）天正元(1573)年正月9日～11日

かすかに—ふえのねらす—まへわたり
すみかやをその—さとのくさき
【寛永年間百篠15巻】／□□／あさひかけ／襄伯／寛永11(1634)年1月3日

渡し舟
→真巻に漂じる鷹鳴山吹

わたしうね—はなのゆきも—はるくれて
ましはにましる—つしぶやまふき
【大永四年万句千二百露出】／□□／けふひくや／月並千二百露出／大永4(1524)年5月23日

やまもののに—はなをよせのの—わたしうね
ましはにましる—つしぶやまふき
【天文年間百篠38巻】／××／ちるうせぬ／天文19(1550)年2月17日

わたるかがね

渡る雁
→鵜の波

ねさめのまくら—わたるかりかね
あかつきと—おもじてたにも—なかきよに
【応永年間百篠7巻】／何路／やまみつの／応永15(1408)年3月11日

かすきへしく—わたるかりかね
たつきのに—おのひはねかき—なかきよに
【宗長関係8種】／壬生児／書陵部本

わびる

敷き坐ふ
→払う衣の露

しきわびて—つずにいくよ—かけまくら
はらひくさふす—ころもてのつゆ
【天文年間百篠57巻】／何船／なはしろの／天文3(1576)年3月8日

ちりもる—あきのさむしろ—しきわびて
いつかははるむ—ころもてのつゆ
【文明十五年句11巻】／三弦中略／かたいとを／文明15(1483)年1月3日～

3月2日

わびと

侘
→煩の狭衣

わびひとの—むねやすからぬ—あさゆふに
きてもやせはき—あさのさころも
【享禄年間百篠8巻】／何人／あさかすみ／
享禄5(1532)年1月3日

わびひとの—はさへいかに—さむからむ
うちしきりぬる—あさのさころも
【文禄年間百篠12巻】／□□／はくさの／文禄2(1593)年1月10日
われ

なでらかをふくでのうへ

→思う

つゆもなみたもーわかそてのうへ
ひとしほぬーみにはなにをかーおもふらむ

【文安年間番録 9 巻】／山何 [ふたたひの]
／文安 5(1448) 年 11 月 12 日

いつもなみたのもーかくそてのうへ
とふひとつふことひはかりとーおもふらむ

【合点之句／神宮文庫本】／恋／天文
9(1541) 年 12 月 25 日

われでなくなるのが憂い

→吾の戸の夕風

うしやわれにもーあらすなりゆく
はなをふくーこけのとほそのーゆふあらし

【春夢草／春陵部本】／春／永正 12(1516)
年、13 年

うしやわれにもーあらすなりゆく
こけのとーはなにふきたつーゆふあらし

【論書4種】／崇狄／
索引

あう (逢う), 187
あうきぬぎねはうい (逢う後朝は憂い), 69, 280
あうひと (逢う人), 168, 274, 464
あおいかつら (葵桝), 171, 370
あおはのはなのあと (青葉の花の後), 55, 75, 344, 361
あおやぎ (青柳), 55, 430
あおやぎのいと (青柳の糸), 55, 94, 171, 412, 430
あおやぎのかげ (青柳の陰), 55, 142, 350, 375, 430
あかしかた (明石旛), 55
あかしくらす (明かし暮らす), 304, 407, 449
あかしかつる (明かし果てる), 189, 317
あかつき (暦), 56, 83, 178, 256, 258, 280, 331, 412
あかつきがた (暦の), 127, 287
あかつきづき (暦月), 56, 131, 168, 279, 427
あかつきのあめ (暦の雨), 231, 435
あかつきのそら (暦の空), 56, 170, 261, 326, 385
あかつきふか (暦の深い), 241
あきがる (秋が来る), 60, 180, 197, 216, 264, 305, 310, 366, 383, 453
あきかぜ (秋風), 56, 153, 229, 284, 289, 294, 299, 338, 381, 395, 437
あきかぜがふく (秋風が吹く), 59, 156, 252, 255, 284, 288, 371, 418, 445
あきかぜのごえ (秋風の声), 59, 156, 204
あきかぜのそら (秋風の空), 235, 289, 463
あきがふるる (秋が更る), 173, 316
あきくさ (秋草), 60, 191
あきひる (秋来る), 60, 197
あきくる (秋来る), 100, 160, 183, 339
あきむい (秋寒い), 60, 208, 229, 234, 237
あきしくれ (秋時雨), 60, 239
あきちかなる (秋近くなる), 61, 276, 326
あきないことのね (飽きない琴の音), 67, 125, 220
あきにしみれる (秋に時雨れる), 61, 239
あきのあまのはしたて (秋の天橋立), 130, 281
あきのおかげがた (秋の面影), 61, 132
あきのかかず (秋の風), 82, 113, 114, 207, 212, 234, 236, 262, 286, 338, 432
あきのかかぜ (秋の風), 61, 157, 177
あきのくも (秋の雲), 83, 280
あきのくれ (秋の暮れ), 130, 180, 203, 216, 310, 319, 366, 405, 453
あきのくれた (秋の暮れ方), 61, 164, 199
あきのさびしさ (秋の寂しさ), 61, 232
あきのさわみず (秋の氷水), 62, 237, 409
あきのしぐ (秋の霜), 126, 235, 239, 260, 352
あきのすずしさ (秋の涼しさ), 396, 406
あきのたまくら (秋の手枕), 62, 297, 399
あきのつき (秋の月), 62, 279
あきのはつかさ (秋の初風), 62, 123, 157, 263, 310, 342, 395
あきのはつもし (秋の初霧), 124, 283
あきほたる (秋の堂), 63, 369, 383
あきのみず (秋の水), 68, 331
あきのみろやま (秋の三室山), 183, 428
あきのむらさめ (秋の村雨), 63, 282, 299, 422
あきのやま (秋の山), 63, 431
あきのゆうぐれ (秋の夕暮れ), 87, 153
あきのよ (秋の夜), 82, 103, 121, 143, 158, 167, 283
あきのよすがる (秋の夜すがる), 63, 459
あきのよなが (秋の夜長), 64, 313, 459
あきのよなよな (秋の夜な夜な), 64, 459
あきのよのつき (秋の夜の月), 64, 279, 459
あきのよもぎのうのと (秋の蓬生の里), 172, 224
あきはかしい (秋は悲しい), 131, 325, 420
あきふかわたる (秋更け渡る), 65, 373, 466
あきほかたるとゆうまくら (秋堂と夕枕), 144, 306
あけたがた (明け方), 108, 256, 315, 411
あけたのがのそら (明け方の空), 69, 164, 261
あけたのがのぼれ (斗のそば舟), 161, 338, 360, 411
あけのとりのこげこえ (明けの鳥の声々), 101
あけはてる (明け果てる), 69, 344
あけはなれる (明け離れる), 69, 188, 241, 351, 398
あけぼののくも (曙の雲), 67, 194
あけぼののそら (曙の空), 67, 262, 385
あけぼののやま (曙の山), 67, 431
索引

あけやすいところ (明けやすい頃), 385
あけやすいつき (明けやすい月), 69, 280
あけやらない (明けやらない), 392, 438
あける (明ける), 70, 91, 210, 308
あけるよ (明ける夜), 89, 409
あけわたる (明け渡る), 298, 363, 376
あけわたるそら (明け渡る空), 174, 291, 305
あさあけのどか (朝明け長閑), 106
あさおのいろ (朝顔の色), 73, 99
あさおのはな (朝顔の花), 73, 272, 321, 344, 442
あさがすみ (朝霞), 70, 148
あさがすみたつ (朝霞立つ), 167, 228, 434
あさぎり (朝露), 61, 232, 293, 411
あさくるうぐいす (朝来の鶯), 71, 106, 197
あさけすか (朝明け静か), 70, 71, 240
あさごあり (朝水), 266, 410
あさごもうちつ (麻衣打つ), 74, 113, 224
あさじう (浅茅生), 172
あさじうのおく (浅茅生の奥), 189
あさじうのつゆ (浅茅生の露), 172, 292
あさじかはら (浅茅が原), 59, 156, 371
あさつゆ (朝露), 269, 329
あさなあさな (朝朝朝な), 102, 222, 378
あさのさごもる (麻の狭衣), 74, 224, 369, 466
あさかげ (朝日影), 71, 142, 188, 329, 337, 360
あさまだき (朝まだき), 72, 352
あさみどり (緑), 392, 438
あじけないよ (味気ない世), 74, 452
あした (朝), 72
あしたのくも (朝の雲), 175, 450, 460
あしひたくかげ (罠火焚く影), 74, 143, 267, 361
あすかぜ (明日香風), 303, 418
あだしず (化野), 192, 292, 361
あただかちくる (徒と掛かり来る), 74, 139, 197
あただみがそでぬらす (徒傘が袖濡らす), 255, 272, 402
あたをだな (後をだなに訪る), 75, 300
あまおとめ (天乙女), 127, 298
あまおぶね (海人小舟), 77, 128, 174, 210, 343, 375
あまそそぎ (雨洗う), 318, 384
あまつおとめ (天女), 128
あまっかり (天つ雁), 138, 356
あまっかりがね (天つ雁), 255, 284
あまのかぐやま (天の香具山), 88, 379
あまのがわ (天の川), 177, 298
あまのつりぶね (海人の釣舟), 71, 72, 77, 142, 295, 329, 337, 360, 375
あまひこのこえ (天彦の声), 78, 204
あめかすむくれ (雨霞むくれ), 78, 153, 199
あめがふる (雨がふる), 78, 378
あめながたとあのしずかさ (雨過ぎた後の静けさ), 75, 78, 240, 249
あめすぎる (雨過ぎる), 318, 384
あめのうち (雨の内), 78, 112
あめのくれ (雨の暮れ), 79, 199, 254, 257, 261
あめのこるそら (雨襲る空), 79, 262, 335
あめのさびしさ (雨の寂しさ), 385
あめのつれつれ (雨の沓沓), 385
あめのなごり (雨の名残), 209, 307
あめののどかさ (雨の長閑さ), 79, 337
あめはれたはるのくれ (雨晴れた春の暮れ), 329, 410, 443
あめはれる (雨晴れる), 392, 438
あめをまつ (雨を待つ), 79, 401
あやおるみず (緑緑の水), 76, 197
あやめくさ (菖蒲草), 80, 114, 134, 258
あらいくそのなみ (荒礁の浜), 77, 128, 375
あらしやま (巻の山), 211, 405
あらしよくやま (風吹く山), 80, 371, 431
あらまし (あらまし), 81, 97, 169
あらればりせるのよるつき (顧走りの夜の月), 126, 358, 427
あらわす (現す), 81
あらわれる (現れる), 81, 124, 137, 173, 335
ありあげ (有明), 81, 246, 264, 314, 370, 392, 439, 461
ありあげたが (有明方), 231, 275
ありあげのかげ (有明の影), 82, 143
ありあげのそら (有明の空), 82, 185, 262, 271, 384, 385
ありあげのかつむ (有明の月), 65, 71, 82, 107, 114, 119, 132, 151, 186, 280, 296, 301, 318, 327, 354, 373, 384, 386, 433
あるかなか (有るか無きか), 84, 309
あるもの (あるもの), 84
あわじがた (瀬戸瀬), 118, 253, 323
あわじしま (瀬戸島), 118, 254
あわじしまやま (瀬戸島山), 314
あわれ (哀れ), 85, 180, 216, 310, 366, 453
あわれがし (哀れ知る), 85, 247
あわれである (哀れである), 85
あわれをする (哀れを言う), 137, 173, 207
いよいよばかりにあき (言いかえばかりに秋), 247, 395
いえいえのかぜ (家々の風), 279, 363
いかが (如何), 87
いかがしよう (如何しよう), 378, 398
いかだをくすぐかわ (筏を下す川), 327
いかなる (如何なる), 69, 131, 223, 344, 427
いかにてく (如何にて), 88, 332
いかばかり (如何ばかり), 78, 153, 207, 238
いくえすみ (幾重霞), 88, 149
いくえとよのたけのしたみち (幾重豐浦の竹の下道), 88, 241, 267, 307, 412
いけのふじみな (池の藤浪), 386
いけふる (池ふる), 88, 379
いけみず (池水), 88, 409
いさらみのみず (いさら井の水), 89, 409
いここにある (何処にある), 127, 410
いここにかすむ (何処に霰), 79, 337
いここにたびのやどり (何処に旅の宿り), 429
いここに何 (何処に), 428, 456
いそがれる (急がれる), 89, 448
いそく (急く), 76, 89, 446
いそくかど (急ぐ雁), 124, 151
いそにふねにひくれ (槇に舟に日暮れ), 101, 332, 401
いつかして (何時かして), 94
いづるたびびと (出る旅人), 272, 298, 363
いづるひがけ (出る日影), 72, 152, 159
いづるふなびと (出る舟人), 298, 363, 376
いつわり (偽り), 94, 187, 220
いなおおせどり (稲負鳥), 60, 94, 197
いなずまのかげ (稲妻の陰), 95, 143, 282, 299
いにしえ (古), 95, 106, 123, 240, 340, 451, 465
いにしえのあと (古の後), 75, 85, 95, 247
いにしえのつきて (古の月), 95, 281, 452, 463
いにしえのみや (古の宮), 95, 417
いにしえのゆめの (古の夢), 87, 95, 244, 450
いねねのそら (寝ねぬての空), 262, 332
いのち (命), 272, 408
いのちであってはい (命であってほしい), 95
いのちである (命である), 464
いのちにて (命にて), 96
いまわもつときたかたく (今際と月が傾く), 388
いまがこいしくて (妹が恋しくて), 96, 203
いまにもこいつま (妹に恋いつつ), 96, 203
いりあいのかね (入和の鐘), 80, 97, 136, 168, 175, 187, 200, 225, 297, 302, 330, 334, 380, 443, 445
いりひかげ (入和日影), 98, 143, 329
いろうかわる (色変わる), 99, 180
いろうかわるの (色変わる壺), 99, 180, 222
いろうづく (色付く), 60, 99, 103, 239, 290, 296
いろうみえる (色見える), 180, 217, 310, 366, 453
いわがね (岩が根), 100, 332
いわがねのまつ (岩が根の松), 101, 332, 401
いわくすなみ (岩越す浪), 101, 212, 322
うい (憂い), 101, 163, 258, 293, 372, 403
ういあき (憂い秋), 65, 95, 102, 281
ういしきのはねがき (憂い鳴の羽揮き), 102, 141, 239, 352
ういてぬるかもめ (浮いて寝る鳴), 241
ういふゆごもり (憂い冬籠り), 102, 222, 378
ういみのとき (憂い身の時), 180, 217, 311, 366, 453
ういものはない (憂いものはない), 82, 280
うえおおく (植え置く), 160, 265, 449, 450
うえないならきないおとぎのうわかぜ (植えないなら聞かないおとぎの上風), 65, 102
うえはつれない (上は遜れない), 103, 296
うえたる (植える田), 105, 265
うきをたたなくさめる (憂きをたた慰める), 102, 319
うくいす (鳴), 67, 68, 90, 106, 115–117, 125, 135, 150, 179, 184, 197, 202, 222, 231, 242, 259, 316, 328, 348, 356, 358, 394, 396, 429, 431, 434, 440
うくいすがなく (鳴かぬ), 108, 198, 227, 278, 315, 345, 346, 351, 355, 358
うくいすのこえごえ (鳴の声々), 80, 111, 214
うくつらい (憂辛い), 102, 295
うしろのやま (後ろの山), 75, 431
うすがすみ (薄霞), 70, 73, 227, 346, 448
うすぎりのまがき (薄霧の翳), 242, 295, 339
うすけむり (薄煙), 111, 203
うすみび (埋火), 73, 343, 447
うずもれる (埋もれる), 86, 141, 433
うずらなく (鶴鳴く), 123, 278
うたうこえごえ (歌の声々), 201, 306, 330
うたたね (うたた寝), 332
うたのしみない (歌の品々), 111, 244
うちかえす (打ち返す), 113, 135, 265
うちかすむ (うち嘘む), 109, 149, 198, 205, 355, 359, 379, 417
うちがなくさめる (うちが慰める), 319
うちかすず (打ち交わす), 85, 278
うちきせい (打ち着せい), 190
うちしひれ (うち時雨), 97, 168
うちしぐるす (うち時雨れる), 277, 317
うちとけ (打ち解けて), 122, 143, 432
うちたびく (打ち膜く), 321
うちのかたち (内の形), 84, 276, 309
うちのゆき (内の雪), 112, 447
うちはえる (打ち映える), 55, 94, 430
うちむれる (打ち群れる), 424
うちわたす (打ち渡す), 466
うちつさごろも (打つ麻衣), 60, 234
うちのやま (宇津の山), 113, 432
うちのやまごえ (宇津の山越え), 113, 212, 432
うちもてゆく (移り持て行く), 88, 114, 426
うちる (映る), 232, 285
うちろう (移ろう), 66, 100, 114, 174, 207, 355
うちのはな (卵の花), 115
うちのなぎさにまつのはなおちる (海の打に松の花落ちる), 141, 191, 426
うちやま (海山), 180, 216, 366
うちのまつまつ (梅が待つ), 222, 223, 378
うちさく (梅咲く), 115, 198, 227, 355
うちにおおう (梅吹く), 115, 328
うちにおうごろ (梅吹う頃), 115, 328
うちのか (梅の花), 115, 324
うちのかすがる (梅の香がする), 116, 134
うちのひとともと (梅の一木), 90, 116, 396
うちなみのおと (潮流の音), 136
うちのあささけ (潮の朝明け), 121, 376
うちみむしる (浸み透びる), 92, 333, 369
えだにうめさく (枝に梅咲く), 109, 205
おののさか (老の仮), 198, 435
おののゆくえ (老の行く末), 119, 449
おうさかのせき (逢坂の関), 119, 128, 159
おうさかのやま (逢坂の山), 120
おうのうちなみ (恵生の浦), 351, 442
おおいがわくすむ (大井川霧む), 80, 371, 431
おおはらまつり (大原祭り), 120, 406
おおよどならみ (大淀の浪), 136
おおへのあき (岡辺の秋), 56, 285
おおへのはじのひとむら (岡辺の棚の一群), 90, 120, 341, 424
おきでる (起きでる), 88, 114, 116, 134, 426
おささまぶ (萩に風), 121, 158
おさのうかわ (萩の上風), 85, 103, 121, 141, 158, 445, 446
おきのしらぬ (神の白滝), 120, 247, 305, 322, 376
おきのつりぶね (神の釣舟), 120, 296, 376
おきのなみ (神の浪), 121, 322
おきのふね (神の舟), 121, 198, 302, 376
おくやまのかげ (奥山の陰), 122, 143, 432
おくる (送る), 122, 164, 257, 301, 363
おくるまのおと (小車の音), 123, 125, 198
おじかなくこえ (牡鹿鳴く声), 206, 237, 316
おじかなくやま (牡鹿鳴く山), 290, 463
おしむ (想む), 123
おしんではなをみる (想しくて花を見る), 123, 344, 418
おぞさくら (遅桜), 123, 228
おだのはら (小田の原), 230, 360
おちかたのくも (遠方の雲), 164, 194, 301
おちかたのやま (遠方の山), 164, 301, 432
おちかたびと (遠方人), 190
おちかたびとのそで (遠方人の袖), 164, 257, 301, 363
おちのたおやま (遠方の遠山), 165, 301, 390, 432
おちのひとむら (遠方の一村), 138, 252
おちるあまつかり (落ちる天つ雁), 124, 173, 298
おちるたきなみ (落ちる氷濁), 151
おとがする (鶴がする), 184, 188, 241, 242, 349, 413
おとすれて (訪れて), 272, 364
おとろえる (衰える), 128, 181, 217, 311, 366, 453
おとわがわ (音羽川), 101, 267, 323
おなじころ (同じ心), 128, 214
おのえのはなをみる (尾上の花を見る), 128, 344, 418
おばしまのおお (欄干の奥), 260, 398
おばつかない (覚束ない), 149, 221, 289, 445, 458, 461
おぼろづきよ (観月夜), 129, 281, 459
おぼろにのころありあののつき (雛に残る有明の月), 83, 129, 281, 336
おみなえし (女郎花), 129, 294, 400
おもいかえす (思い返す), 130, 136
おもいかねる (思いかねる), 209, 277, 317
おもいぐさ (思い草), 294, 324
おもいそめる (思い初める), 133, 214
おもいいたい (思いみたい), 98, 169
おもいいたえる (思い耐える), 130, 266
おもいめむり (思いの煙), 130, 203
おもいやする (思いやする), 166, 231, 276, 434
おもいやするもそで (思いやするもそで), 381
おもいわびる (思いわびる), 314, 461
おもう (思う), 103, 104, 112, 121, 158, 245, 255, 260, 299, 325, 381, 467
おもうこととき (思う事と月), 130, 281
おもうな (思うな), 130
おもうひとのことは (思う人の言の葉), 130, 220, 363
おもうふるさと (思う故里), 130, 239, 380
おもかげ (面影), 77, 114, 132, 134, 258, 300, 415, 430, 464
おもかげたつ (面影に立つ), 386
おもかげばかり (面影ばかり), 247, 292
おやまだのすえ (小山田の末), 248, 266, 432
おやまだのはら (小山田の原), 266, 352, 432
おろかなところ (愚かな心), 133, 214
かえしおく (返し置く), 225, 307
かえりにこまいううえ (帰りに駄吠えの声), 101, 136, 207, 221
かえりみる (帰り見る), 377
かえりをいそぐ (帰りを急ぐ), 89, 136
かえるからがね (帰り雁), 72, 81, 82, 129, 137, 151, 173, 219, 243, 247, 280, 404, 419, 447
かえるのこえ (帰り雁の声), 137, 173, 207
かえるさ (帰りさ), 137, 265, 450
かえるさとびと (帰り里人), 137, 230, 363
かえるさのみち (帰りさの道), 137, 386, 412
かえるとぼね (帰り釣り), 291, 352
かえるとりのね (帰り鳥の音), 125, 137, 307
かえるぶびと (帰り舟人), 200
かえるふるさと (帰り故里), 138, 380
かおるたちばな (香る蛙), 386
かかかる (帰り), 139
かかかるふなみ (排かれる藤浪), 55, 75, 139, 226, 322, 344, 346, 361, 374
かきねづたい (垣根伝い), 140, 291
かきのもとっぱ (垣の本つ葉), 140, 361, 426
かきのやはたやま (垣の八幡山), 254, 402
かくもおおずく (捜く獲物), 141, 191, 426
かくれが (隠れる家), 86, 141
かくれがのやま (隠れる山), 86, 141, 433
かくれがない (隠れない家), 86, 142, 309
かけいにうるむみず (懸崖に受ける水), 111, 142, 409
かげかすか (隠かすか), 143, 148
かげくるる (影すぎる), 122, 143, 199, 457
かげさびしい (影寂しい), 59, 156, 204
かげたたくる (影高くなる), 144, 266
かけはし (排橋), 139, 231, 304, 339, 397, 441
かけはしのすえ (排橋の末), 414
かげろうのいわがき (暗礁の岩垣), 84, 309
かこうてる (圍い捨てる), 207
かささぎ (鰹), 140, 195, 340
かさなる (重なる), 231, 351, 413
かさなるやま (重なる山), 147, 433
かさのはのゆき (笠の端の雪), 137
かしめい (賤い), 147
かずあまた (数あまた), 78, 153
かすか (微か), 248, 268
かすかなかげ (微かな影), 144, 148
かすそう (数添う), 84, 369
かずならぬ (数ならぬ), 153
かすみ (霞), 149, 225, 308
かすみあつゆ (霞の朝露), 216
かすみくみよる (霞くみよる), 149
かすみこめる (霞こめる), 149, 174, 207, 221
かすみつつ (霞つつつ), 109, 149, 205
かすみにくれる (霞にくれる), 128, 344, 418
かすみにこもる (霞にこもる), 150, 222
かすみにたどるみち (霞たどる道), 150, 271, 412
かすみのうちのみずのみなかみ (霞の内の水の水), 104, 112, 150, 409
かすみのそこの (霞の底), 150, 257
かすみのひま (霞のひま), 150, 369
かすみよる (霞よる), 151
かすむ (霞む), 55, 69, 109, 151, 162, 205, 222, 227, 228, 322, 355, 356, 358, 362, 372, 430
かすむあけのそばぶね (霞む朱ノそば舟), 76, 375
かすむあけのそばの (霞む曙), 107, 213, 228, 304, 435
かすむあさまだき (霞む朝まだき), 109, 204
かすみ入りあいのかね (霞む入相の鐘), 200, 357
かすむおおちこ (霞む遠近), 124, 151
かすむこのあした (霞むこの朝), 108, 315
かすむたまつしま (霞む玉津島), 220
かすむの (霞む野), 109, 205
かすむはのはとよやま (霞む春の遠山), 151, 301, 354, 433
かすむひ (霞む日), 151, 329
かすむみかさやま (霞む三笠山), 139, 323, 374
かすむやまもと (霞む山本), 152, 426, 433
かすむゆうぐれ (霞む夕暮れ), 152, 199, 443
かすむよ (霞む夜), 68, 356
かざがすまじい (風がすまじい), 158, 249
かざがみにしめる (風が身にしめる), 158, 245, 407
かざされる (風をされる), 83, 281
かざとあがすみ (風と朝霞), 72, 152, 159
かざにつゆがおちる (風に霧が落ちる), 129
かざにつゆがこぼれる (風に霧が零れる), 61, 239
かざにおうたばね (風にうたばね), 159, 269, 328
かざにならう (風に花散る), 159, 278, 345
かざのおとやすみ (風の音羽山), 128, 159
かざのおおりお (風の折々), 133, 159
かざのしずけさ (風の静けさ), 159, 241
かざのすずさ (風の涼しさ), 159, 251, 305, 383
かざのはげしさ (風の激しさ), 160, 339
かざのまにまに (風のまにまに), 160, 397
かざのむらさめ (風の村雨), 160, 422
かざのゆくすえ (風の行末), 160, 449
かざみえる (風見える), 160, 418
かざわるた (風渡る), 282, 299
かた (方), 137, 230, 363
かたかのべ (片岡野辺), 91, 268, 424
かたかのみち (片岡の道), 307, 317
かたかのもり (片岡の松), 393, 439
かたしきのそで (片敷の袖), 165, 257, 386
かたしきまくら (片敷の枕), 221, 267, 292, 361
かたしきのゆめ (片敷の夢), 176, 334, 400
かたく (片敷), 92, 146, 166, 183, 242, 333, 369, 413
かたはこり (鶴はこり), 183
かたみ (形見), 66, 75, 114, 134, 166, 186, 224, 254, 259, 381
かたむく (傾く), 166
かたさだめない (方も定めない), 165, 230
かたより (片寄), 167
かたるばかりにむかうおもかげ (語るばかりに向う面影), 132, 167, 419
かつなぎのやま (葛城の山), 167, 433
かつなぎやま (葛城山), 55, 430
かどす (門す), 97, 168
かどみえる (門見える), 98, 169
かねがすか (鐘微か), 290, 463
かねなる( 鐘鳴る), 67, 104, 170, 228, 262, 326
かねのおと (鐘の音), 104, 150, 178, 222, 285
かねのこえ (鐘の声), 176, 374, 450
かねのひびき (鐘の響き), 88, 149
かみにただいるの (神にただ祈る), 96, 171
かみまつり (神祭り), 117, 238, 323
かもひょうし (賀茂日吉), 171, 370
からごろも (唐衣), 100, 128, 172, 209, 224, 235, 256, 335, 462
からとぶ (烏飛ぶ), 245, 327, 364
かたりなきかわささら (雁が鳴き交わす空), 69, 351
かたりごろも (駿衣), 187
かたりぞめ (仮最初), 175
かたりなく (雁鳴く), 65, 66, 80, 161, 163, 165, 173, 210, 301, 316, 324, 373, 416, 432, 466
かたりのつきかげ (仮寝の月影), 144, 175, 282, 323
かたりのね (仮寝の野辺), 70
かたりねをする (仮寝をする), 175, 333
かりのいくつら (雁の幾列), 173, 464
かりのこえ (雁の声), 82, 174, 207, 280, 400, 450
かりのこえごえ (雁の声々), 174, 207
かりのこのよ (仮のこの世), 190, 271
かりたまはずさ (雁の玉章), 174, 274
かりのなかこえ (雁の鳴く声), 71
かりのひとこえ (雁の一声), 174, 207
かりのひとつら (雁の一列), 174, 464
かれのよるのにめ (仮の夜の夢), 175, 450, 460
かれふしのゆめ (仮臥の夢), 176, 374, 450
かれまくら (仮枕), 168, 176, 272, 273, 298, 363, 399
かれたくさかもえる (枯れた草が萌え出る), 177, 191, 298, 426
かれはなすすき (枯れ花穂), 177, 251, 345
かわおと (川音), 125, 177
かわすところは (交わす言の葉), 179, 220
かわゆなく (蛙鳴く), 113, 135, 150, 179, 186, 257, 265, 316, 442
かわぞい (川踊い), 55, 94, 430
かわぞいのみち (川流の道), 167, 178, 256, 412
かわぞいぶるい (川流の舟), 178, 256, 376
かわつらのさと (川面の里), 178, 230, 295
かわる上のなか (変える世の中), 214, 230, 287, 363, 402, 452
かんなづき (神無月), 183
かんなびのもり (神奈備の森), 183, 428
きえない (消えない), 67, 262
きえるけむり (消える煙), 184, 203
きえるならきえるもの (消えるならば消えるべき思い), 129, 184
きぎすなきたつ (鶴鳴き立つ), 186, 316
きぎのいろいろ (木々の色々), 100, 183
きぎのしたつゆ (木々の下露), 64, 373
きくのひとともと (菊の一本), 90, 185, 396
きくのもずらしい (聞くのも珍しい), 185, 426
きくほとぎす (聞く時鳥), 185, 384
きけはばれ (聞けば風), 192, 399
きさらぎのわかれるをとう (如月の別れを訪う), 297, 359, 435
きしのうのはな (岸の卵の花), 142, 320
きしけくれたけ (岸の臭竹), 178, 256, 376
きしのやまぶき (岸の山吹), 186, 442
きぬぎぬ (後朝), 186
きぬぎぬあつと (後朝の後), 57, 75, 154, 186
きぬぎぬのおもかげをしたう (後朝の面影をしたう), 67, 194
きぬぎぬのそで (後朝の袖), 56, 186, 257
きぬたのおと (砧の音), 125, 187
きのうくも (昨日の雲), 187, 194
きのうち (紀伊海), 66, 302, 434
きのうをこそのが (昨日を去年の), 88, 332
きみなよ (君が代), 187
きみなことのは (君の言の葉), 187, 220
きょうとが (今日の), 187, 225
きょうばかり (今日ばかり), 187
きよまわり (清まわり), 188
きりぎりす (幡蝶)，64, 145, 147, 158, 189, 249, 288, 313, 332, 344, 458, 459, 463
きりたんのぼる (霧立ち上る)，327
きりにしも (霧に霜)，188, 246
きりのうえ (霧の上)，104, 188
きりのうち (霧の内)，61, 232
きりのところ (霧の残)，188, 336
きりのしたみち (霧の下道)，188, 241, 319, 413, 420
きりのまがき (霧の隙)，188, 398
きりのみちのかたた (霧の道の方々)，89
きりはれのぼる (霧晴れ昇る)，188, 337, 360
きりはれる (霧晴れる)，189, 236, 284, 360
きりわたる (霧わたる)，61, 157, 177

くさのいお (草の庵)，87, 131, 191, 325, 386, 420
くさの入りいお (草の仮庵)，260, 331
くさのつゆ (草の露)，191, 292
くさのふち (草の穴)，112, 191, 299
くさのはら (草の原)，258, 275, 300, 319, 331, 405
くさのまくら (草の枕)，263, 273
くさのまくらのあかつき (草の枕の朝)，391
くさのはるかないゆきのしたおれ (草は残らない雪の下)
折)，133, 191, 242, 336, 447
くさばのつゆ (草葉の露)，192, 292, 361
くさはら (草原)，192, 352
くさまくら (草枕)，56, 64, 66, 68, 82, 90, 96, 139, 164,
168, 192, 203, 231, 261, 262, 273, 288, 289,
293, 302, 319, 359, 370, 382, 399, 418, 420,
424, 450, 459, 460, 462, 463
くににしたがう (国に従う)，194, 243, 339, 415
くむさかずき (汲木杯)，361, 428
くめいわすはし (米木の橋)，101, 194, 339
くもいをかるかりがね (雲居を婦に連)，152, 283, 460
くもうく (雲浮く)，162, 372, 403
くもかかるみね (雲かかる峰)，139, 195, 416
くもどりのあと (雲鳥の跡)，76, 197
くもにありあのつつき (雲に有明の月)，70, 148
くもになくほととぎす (雲に鳴く時鳥)，233
くものうえ (雲の上)，84
くものおきかた (雲の遠方)，165, 195, 302, 387
くものかけはし (雲の橋掛)，140, 195, 340
くものかよいおし (雲の通路)，127, 298
くものたえ (雲の絶え間)，195, 266
くものとだえにほのめく (雲の途絶えにほのめく)，77,
446
くものひとむら (雲の一群)，90, 195, 424
くものむらむら (雲の群々)，240, 445
くもまよ (雲迷う)，318, 384
くらはしやま (倉橋山)，391

くれごとのそら (暮れごとの空)，199, 262
くれたけ (呉竹)，267
くれつがた (暮れ方)，190, 317
くれないのうめ (紅の梅)，116, 202
くれのはなすすき (暮れの花薄)，61, 132
くれゆかた (暮れゆか方)，165, 200
くれる (暮れる)，200, 209, 307
くれるはしのひとすじ (暮れ橋の一筋)，248, 410, 419
くれるひ (暮れ日)，160, 397
くれわたる (暮れ渡る)，125, 137, 307
くろきのとりい (黒木の鳥居)，337

けさのはつゆき (今朝の初雪)，72, 343, 447
げにもあだむむ (げにも従む)，75
けむりたてそまる (煙立て舔まる)，87, 442
けむりひとりすじ (煙一筋)，90, 203, 250
けむりふきやるかぜ (煙吹きやる風)，92, 250

こいじか (恋じか)，364, 403
こえがきこえる (声が聞こえる)，132, 233, 428
こえごえ (声々)，288, 359, 460
こえる (声する)，207
こえのさむさ (声の寒さ)，207, 234
こえるいせき (越える井戸)，254
こえるおうかがのせき (越える逢坂の関)，119, 212
こえるおうかかのやま (越える逢坂の山)，120, 213
こおるそめる (水初める)，213, 341
こおりとけゆく (水解け行く)，88, 409
こおりながれる (氷流れる)，184, 448
こがくれる (木聴れる)，119, 135, 212, 346
こがらしのかぜ (木枯しの風)，160, 214
こけのとのゆふあらし (苦の戸の冷風)，103, 328, 467
ここかこし (ここかこし)，111, 142, 409
こここのえのうち (九重の内)，183
こころあらそううた (心争う歌)，80, 111, 214, 362, 408
こここうかれる (心浮かれる)，105, 215, 229
こここうましい (心恨ましい)，118, 215
こころがまどのうち (心が窓の内)，215, 406
こころづかい (心使い)，407
こころづくし (心尽くし)，215, 290
こころある (心ある)，130, 215
こころであればあそ (心であればあそ)，275
こころではない (心ではない)，215
こころながくまで (心長く待て)，215, 313, 402
こころんくて (心にて)，216
こころぼさいはおちるころ (心細い花落ちる時)，61,
276, 326
こころをつくすあのよる (心を尽す雨の夜)，79, 216,
290, 460
しばのふるところ（篠にふる頃）, 223, 244, 379
しばのめ（東雲）, 186, 257
しばのかけね（忍びかけね）, 244
しばのび茶（忍び茶）, 408, 451, 461
しばのぶき（忍草）, 192, 244
しばのいお（柴の髪）, 87, 163, 244, 254, 257, 261, 405, 438

しばのとのうち（柴の戸の内）, 112, 245, 299
しばもつひと（柴持人）, 89, 136
しばあさがお（萎木朝顔）, 73, 245
しばがれ（萎枯れ）, 248, 266, 432
しばさまざまなやま（萎きまして山）, 246, 250, 434
しばものたき（萎の片敷）, 166, 246
しばはただ（萎はただ）, 140, 261, 340
しばふる（萎る）, 213, 341
しばまようやまだ（萎迷う山田）, 93, 251, 425
しばかわのせき（白河の関）, 246
しばつゆ（白露）, 247, 292
しばない（知らない）, 213, 215, 259
しばる（知る）, 247
しばべ（横）, 165, 230
しばべおきいづるみち（標置き出る道）, 192, 399

すえにちるはな（末に散る花）, 248, 269, 424
すぎのこずえ（杉の梢）, 387
すぎのむらだち（杉の群立ち）, 170, 248, 269, 326, 424
すぎのなるさめ（過ぎる村雨）, 249, 387, 422
すぎのゆうぐれ（過ぎる夕暮れ）, 244
すぎあきかぜ（衰えの秋風）, 65, 161, 249
すぎましいそら（衰えの空）, 250, 263
すぎしい（衰えしい）, 251
すぎしき（衰しき）, 126, 178, 276
すぎしきにあきたつ（衰えしさに秋立つ）, 65, 251, 270
すぎむしのこえ（鈴虫の声）, 208, 252
すぎをまけゆき（霧をかげ雪）, 252, 398, 447
すてであえる（捨てて帰る）, 138, 252
すてであかる（捨ててから）, 86, 141, 433
すてるほどとぎす（捨ててる時鳥）, 90, 195, 424
すてるよのない（捨ててる世の中）, 252, 310, 453
すてのうら（須屋の浦）, 117, 253
すてのうらなみ（須屋の浦の海）, 118, 146, 253, 323, 436
すてびと（須屋の人），253, 363
すみぞめのそで（墨染の袖）, 94, 101, 254, 257, 261, 456
すみだがね（隅田川）, 254
すみどところ（住み所）, 255, 303
すみのこもも（墨の衣手）, 224, 254
すみよい（住吉）, 254
すみよいのうら（住吉の浦）, 118, 254
すみよいのまつ（住吉の松）, 254, 402

すみよしのまつとたのむ（住吉の松と頼む）, 255, 272, 402
すむみねのふるでら（住む峰の古寺）, 87, 271
すめるふるさと（住める古里）, 255, 381

せきのと（間の戸）, 209, 308, 317
せみのもろごえ（蝉の雄音）, 209, 256

そうはおまかげ（添うは面影）, 132, 256
そこたない（そこたない）, 174, 464
そこなくかすむ（そこなく霞む）, 110, 205
そのきすてる（住き捨てる）, 388
そでがつゆっぱい（袖が舞っぱい）, 62, 103, 258, 273, 279, 293

そのにかける（袖に掛ける）, 245, 407
そのぬれる（袖濡れる）, 181, 217, 258, 311, 331, 367, 454

そののあきかぜ（袖の秋風）, 290, 463
そののいろいいろ（袖の色々）, 100, 258, 274, 424
そののうつがり（袖の移り香）, 114, 134, 172, 186, 224, 258, 336
そののうめのか（袖の梅の香）, 116, 123, 135, 259, 344, 418

そののかずかず（袖の数々）, 407
そののくれない（袖の紅）, 203, 259
そののこおり（袖の水）, 213, 259
そののすずしさ（袖の涼しさ）, 305, 383
そののすつやけ（袖の開け）, 287, 373
そののまゆみ（袖の眉梅）, 324
そのふきおくるかぜ（袖吹おくる風）, 122, 161, 259, 371

そのをぬらす（袖を濡らす）, 260, 331
そののあさがお（園の朝顔）, 73, 260
そののうめのか（園の梅の香）, 81
そののむらたけ（園の群竹）, 107
そのままた（そのまま）, 260

そばのかはし（傍の掛橋）, 140, 261, 291, 340
そよくあきかぜ（そよく秋風）, 147, 243, 437
そら（空）, 88, 395
それでないこえ（それでない声）, 132, 167, 419

たえない（耐えない）, 172, 292
たがさと（誰か里）, 231, 275
たき（澗）, 93, 250, 411
たきおちる（澗落ちる）, 101, 212, 322
たきのいわなみ（澗の岩波）, 101, 267, 323
たきのしらなみ（澗の白波）, 151
たきのなみ (蓑の波), 370, 411
たけうちなびく (竹打ち風), 268, 321
たけのすえづえ (竹の末々), 248, 268
たけのひととち (竹の一群), 91, 268, 424
たけをうつえ (竹を打つ声), 113, 209, 268
たのごながきさ (田子の長き日), 139, 322, 374
たそがれどき (黄昏時), 277, 446
たそがれのらせ (黄昏の空), 446
ただあきのかぜ (ただ秋の風), 65, 161
ただあたりなごのちぎり (ただ有り無しの契り), 84, 276, 309
ただおもかげは (ただ面影), 260
ただひとこと (ただ一言), 101, 194, 339
ただひとときおり (ただ一通り), 91, 303
ただまつのかつ (ただ松の風), 161, 402
ただゆめのうち (ただ夢の内), 112, 450
たちかえる (立ち返る), 274, 405
たちばな (桜), 114, 135, 259, 394, 440
たちやすらが (立ち安らぐ), 248, 414
たちわかれ (立ち別れ), 260, 331
たためがわ (立川), 203, 259
たためのやま (立山), 121, 322
たためやまのあき (立山の秋), 120, 247, 322
たってうかがる (立って浮かばれる), 105, 270
たつのはなごろも (たつ日の夏衣), 224, 270, 320, 330
たなしだおぶねのおと (棚無し小舟の音), 83, 129, 281, 336
たなばた (七夕), 63, 157, 271, 342
たなびくよこぐものそら (棚引き横雲の空), 195, 263, 271, 456
たにうえやらない (田に植えやらない), 223, 234
たにのおい (谷の梅), 87, 271
たにのおうずいす (谷の鳴), 351, 358
たにのとおうずいす (谷の戸の鳴), 226, 308
たにのとのやま (谷の戸の山), 107
たにのとおおせてもおそひのひかり (谷の戸は明けても暗い光), 108, 204
たにのほそみち (谷の細道), 370, 438
たのしみをきわめる (楽しみを極める), 190, 271
たのしむ (楽しむ), 272
たのしみおお (頼み置く), 74, 452
たのむ (頼む), 163, 372, 403
たのむおなじよ (頼む同じ世), 96
たののもと (田の面の原), 248, 314
たび (旅), 181, 217, 311, 367, 454
たびごろも (旅衣), 138, 225, 250, 263, 273, 302, 380, 381
たびにある (旅にある), 273
たびのかなしき (旅の悲しみ), 168, 273, 381
たびのくににのにひと (旅の国々の人), 89, 126, 306, 377
たびのころもで (旅の衣手), 225, 234, 273, 330
たびのそら (旅の空), 130, 176, 263, 273, 335, 369, 375, 380, 382
たびはうた (旅は悲し), 103, 273
たびはかたい (旅は悲し), 168, 273
たびまくら (旅枕), 176, 335, 375
たまがわのなみ (多摩川の流れ), 115
たまくらのつき (手枕の月), 282, 399
たましまがわ (玉島川), 274
たますだれ (玉簾), 70, 71, 106, 159, 197, 240, 252, 269, 328
たますだれあける (玉簾あける), 70, 252
たまねぎのきり (玉ねぎの露), 126, 185, 294, 331
たまのおすえ (石の緑の末), 74, 139, 197
たまぼこ (玉箱), 122, 161, 259, 274, 371
たまぼこのくぐえ (玉箱の行方), 125, 187
たらちねのあと (垂乳棺の跡), 458
だれがうい (誰が喜び), 131, 223, 427
だれかえる (誰かへ), 138, 275
だれがうえたまつのころ (誰かが植えた松残る), 90, 203, 250
だれがこえる (誰が越える), 397, 441
だれなのか (誰なのか), 275
だれにわされる (誰に忘れられる), 275, 465
だれをとおうか (誰を訪おうか), 192, 275, 300, 352
だれをまつ (誰を待つ), 275, 402
だれをまとむしのなく (誰を松虫の鳴く), 276, 317, 405
ちかいがねがわ (近い雁), 246, 285
ちかいかねおと (近い川音), 126, 178, 276
ちかいやすま (近い山里), 231, 276, 434
ちぎり (契り), 166, 171, 181, 217, 277, 311, 365, 367, 454
ちどりなく (千鳥鳴く), 277, 317
ちどりなくこえ (千鳥鳴く声), 209, 226, 277, 284, 317
ちょうのおわせ (猿の哀さ), 85, 278
ちるのがおしい (散るのが惜しい), 123, 278
ちるはな (散る花), 163, 278, 345, 372, 404
つかえびと (仕え人), 279, 363
つきでやる (月出る), 282, 299
つきでる (月出る), 60, 62, 157, 197, 200, 282, 299, 324, 342, 359, 374, 404, 443
つきおちる (月落ちる), 124, 209, 283, 307
つきかすむ (月が霧む), 152, 283
つきかすむよる (月が霧む夜), 152, 283, 460
つきがかたむく (月が傾く), 167, 170, 283, 326
素 引

とおきた (遠く来た), 198, 302
とおやまのあき (遠山の秋), 66, 302, 434
ときすぎるほどとぎす (時過ぎる時鳥), 79, 401
とける (解ける), 337, 362
とこのうえ (床の上), 133, 452
ところでどこ (所々), 303, 327, 395
とこをしめる (所を占める), 246, 303
としがくれる ( asynchronously), 417, 448
としこえる (年越える), 213, 304
とたえる (年長者), 268, 304
としこかなは (年々の花), 304, 345
とにかけて (とにかいて), 304
とふかりのつばさ (飛ぶ雁の翼), 174, 291, 305
とぶはたる (飛ぶ翼), 74, 143, 144, 146, 148, 266-268, 293, 305, 321, 361, 362, 383, 411
とまりぶね (泊まり舟), 305, 376
とまりぶねおとしていずち (泊まり舟音していずち), 89, 126, 306, 377
ともしびのもも (灯の下), 297, 306, 379
ともどり (友同鳥), 118, 253
とりがさえずる (鳥が鳴る), 225, 307
とりどり (とりどり), 181, 217, 311, 367, 454
とりなく (鳥鳴く), 164, 194, 301, 307, 317
とりのこえ (鳥の声), 209, 307
とりのこごえ (鳥の声々), 209, 267, 307
とりのさえずり (鳥の鳴き), 145, 225, 308, 348
とりのなきつと (鳥の鳴き立つ), 118, 162, 324, 372
とりのなくこえ (鳥の鳴く声), 209, 308, 317
とりのひとりこえ (鳥の声), 91, 145, 210, 308, 348
とわふるみや (永久の布留宮), 63, 431
とわれる (訪われる), 300
なおさびしい (なお寂しい), 232
なおさまのうら (なお須磨の浦), 118, 253
ながあめのそら (長雨の空), 79, 263, 314
ながいよ (長い夜), 175, 466
ながきひ (長き日), 76, 149, 358, 359, 381
ながきよのゆめ (長い夜の夢), 192, 399
なかぞら (中空), 263, 310
なかぞらのくも (中空の雲), 195, 263, 310
なかだち (蝶), 85
ながつきのしも (長月の霜), 246, 314
ななかなか (中々), 164, 405, 438
ななかなかいちはずみよい (中々市は住みよい), 91, 256, 313
ながめる (眠める), 314
ながめるゆうぐれのそら (眠める夕暮れの空), 390
ながめわびる (眺め佐びる), 94
ながらえる (長らえる), 215
ながれのすえ (流れの末), 248, 314
ながれる (流れる), 314
ながれるみず (流れの水), 315, 409
なせいでる (鳴き出る), 304
なきそめる (鳴き初める), 236, 286
なきもの (無き物), 309, 427
なくきりぎるす (鳴く蟋蟀), 59, 60, 156, 189, 191, 317, 371, 422
なぐさめる (慰める), 133, 365
なくほとんどとす (鳴く時鳥), 92, 204, 233, 247, 318, 384, 417, 423
なくむし (鳴く虫), 288, 382
なくやまととす (鳴く山時鳥), 296
なけほとととす (鴨け時鳥), 318, 384, 423
なごり (名残り), 320
なごりさびし (名残り寂しい), 232, 320
なつかくて (夏かくて), 142, 320
なっこだち (夏木立), 183, 270, 320
なっごろも (夏衣), 214, 363, 370, 406, 452
なつのひ (夏の日), 320, 330
なつのよのつき (夏の夜の月), 288, 320, 460
なでしこ (撫子), 321
なにおもう (何思う), 130, 321
なにたのむ (何頼む), 272, 321
なににたとえよう (何に譬えよう), 72, 271, 321
なにわのあしみ (難波の花), 408, 451, 461
なびきあうたけ (播き合う竹), 268, 322
なびくあおやぎ (飛う青栃), 55, 322, 430
なびくれたけ (播く呪竹), 92, 425
なみかえる (浪返る), 160, 397
なみここもと (浪次血許), 117, 253
なみだ (涙), 133, 254, 257, 261, 324, 365
なみだありそうこえ (涙声う声), 80, 210, 324
なみだおちる (涙落ちる), 124, 216, 325, 365
なみだがわ (涙河), 106, 178, 325, 341, 451
なみだがわがそでのうえ (涙が我が袖の上), 104, 260, 325, 467
なみにしぐるる (浪に時雨る), 77, 296, 375
なみのうえ (浪の上), 104, 120, 296, 323, 376
なみのうきはし (浪の浮橋), 213, 410
なみのうきふね (浪の浮舟), 106, 112, 323, 377, 447
なみのおと (浪の音), 215, 290
なみのおとがすずしい (浪の音が激しい), 446
なみのまにに (浪の間に間に), 324, 397
なる (なる), 67, 75, 86, 91, 95, 125, 133, 137, 142, 146, 159, 201, 208, 211, 238, 264, 303, 309, 319,
326, 327, 364, 391, 406, 412, 419, 431, 436, 444

ねずむのはるのとりのね (潮の春の鳥の声), 210, 308, 332, 354

ねぎめがち (熟睡の気) 324, 349
ねぎめる (熟睡の気), 325, 333
ねぎめるよ (熟睡する夜), 235, 333, 460
ねぎめのあかつきのやま (熟睡の朝の山), 395, 465
ねぎめのほどときす (熟睡の時鳥), 223, 234
ねぎめればつ (熟睡すれば月), 206, 237, 316
ねやのつきかげ (闇の月影), 145, 288, 332
ねられない (熟睡される), 63, 459
ねるほどときす (熟睡時鳥), 401, 451

のとおってい (野が遠い), 208, 209, 238, 302, 308, 334
のきのうくいすのこえ (軒の驚の声), 117, 429
のきのたとばなか (軒の錦), 269, 335, 388
のきのまつ (軒の松), 422
のきばたむく (軒端傾く), 76, 233
のこおりおおい (残り多い), 278, 347
のころ (残る), 55, 152, 247, 283, 322, 336, 398, 416, 430, 447
のころあけぼの (残る朝), 107
のころあつはさいあいする (残る暑さに端居する), 62, 157, 342

のころありあけ (残る明), 84, 336
のころつきあけ (残る朝), 71, 148
のころやまかげ (残る山影), 145, 336, 434
のころやまとなでしこ (残る大樫わ), 189
のちのたたばい (軒の桶), 388
のちのたびびと (後の旅人), 338, 353
のちのよのあき (後の世の秋), 274, 286, 413
のちのよみつ (後の世の道), 76, 102, 413, 453
のどか (長間), 115, 295, 337, 356, 435, 457
のどかなまくら (長間枕), 129, 281, 459
のにかりまくら (野に枕役), 176, 334, 400
のにしたもえ (野の下敷き), 334

のひとつまつ (野の一つ松), 65, 161, 249
のみや (野々宮), 337
ののみやのみつ (野々宮の道), 188
のはるか (野は遠か), 225, 273
の白いうぐいす (野辺近い鶴), 111, 276, 334
のあけぼの (野辺の朝), 68, 334
のあわれさ (野辺の萩の香), 85, 334
のあわれのたとおる (野辺の色の), 100, 335
のあおうら (野辺の遠近), 124, 335
のあかりかす (野辺の乾燥), 176, 335, 375
のあたむら (野辺の村), 138, 364
のあたすけね (野辺の虫の音), 57, 154
のあること (法の言の葉), 221, 337
のあけのう (法の道), 95
のあけるする (野分する), 64, 73, 99, 279, 459
のあけるするにわつき (野分する庭に月), 133, 191, 242, 336, 447
のあけるすること (野分の風), 161, 338

はかない (夢), 102, 141, 216, 239, 352, 366
はかないはねをなべるともやま (夢の羽根を並べる
鳥部山), 181, 218, 311, 367, 454

はぎさく (初夜), 60, 197
はぎのしたつゆ (初夏の雨), 242, 295, 339
はぐむつむ (運ぶ雨), 339, 415
はひするそでひやか (端居する袖冷ややか), 63, 383
はひらす (面吹く), 74, 297, 400
はひのひとすじす (柄の一筋), 100, 146, 332, 383, 413, 436
はひらす (柄柱), 340, 341
はじめ (初頭), 343
はしぼうみ (端紅葉), 190, 193, 426
はるすうえ (運の上), 105, 342
はつかせときのうはさいてあきふる (初風と昨夜は
聞いて秋吹く), 66, 162, 185, 187, 343, 373
はつかれのこえ (初夜の声), 57, 154, 160, 174, 210, 343, 418

はつしくれ (初時雨), 61, 161, 164, 199, 402
はつせき (初朝風), 343
はつせぐる (初朝), 98, 170, 343
はつせく (初朝風), 98, 170
はつととぎす (初朝風), 81
はななえる (花を吹く), 105, 345
はなうちかおる (花打ち香する), 135, 144, 175, 282, 333, 346
はながおとろえる (花が衰える), 309, 418
はなざかり (花盛り), 139, 195, 226, 318, 346, 384, 416
はなさく (花咲く), 95, 99, 180, 181, 218, 222, 227, 233, 297, 300, 312, 346, 357, 367, 380, 394, 417,
ほしけいたちく (星を頂く), 382
ほたるとうふれ (星訪の愛), 201, 300, 383
ほたるとびう (蛻飛びう), 251
ほたるとびそら (蛻飛び空), 264, 305, 383
ほだらがしられる (程知られる), 247, 395
ほけとなえる (仮吹える), 304, 384
ほとぎすなく (時鳥鳴), 319, 391
ほとぎすのかえ (時鳥の声), 129, 281, 459
ほとぎすのちえ (時鳥の声), 93, 211, 391
ほとぎすまくるらのいだすぎる (時鳥枕のいちずぎる), 89, 249, 391, 400
ほほどくも (程は雲居), 193, 353, 465
ほのか (仄か), 395
ほのかなき (仄かな霧), 189, 396
ほのかなそら (仄かな空), 336
まいのそで (舞の袖), 260, 398
まえわた (前渡り), 398, 466
まがきである (蔵である), 382
まぎれない (影は), 398
まくら (枕), 235, 333, 460
まくらるるしく (枕苦しい), 391
まくらさだめない (枕定めない), 230, 400
まくらんかたしく (枕片敷く), 96, 203
まくらにちどりなくこえ (枕千鳥鳴声), 55
まくらのうね (枕の上), 105, 400
まくらのゆめ (枕の夢), 400, 450
まくらはいすこ (枕は何か), 58, 155
まさぎしのせ (真砂路の末), 277, 282, 299, 425
まさぎはら (真砂原), 353, 401
ますしばにじまのつじやすぶき (真紫に混じる鼠鳴山吹), 378, 466
ませのうち (霰の内), 86
まつなきあるゆきのはる (また月ある雪の晴れる), 88, 241, 267, 307, 412
ままたはる (また恥じる), 94
まちわび (待ち結びる), 112, 118, 191, 291, 299, 414
まつあいだ (待つ間), 397, 403
まつあらわれる (松現れる), 246, 250, 434
まつかぜがふく (松風が吹く), 147, 162, 372, 403, 436
まつかぜのおと (松風の音), 305, 376
まつかぜのこえ (松風の声), 87, 163, 211, 403, 416
まつかぜのつき (松風の月), 67, 125, 220
まつたてる (松立てる), 77, 296, 376
まついふじのたそがれ (松に藤の黄昏), 227, 346
まつのひとむら (松の一間), 93, 184, 302, 403, 425
まつのひともと (松の一本), 93, 111, 139, 203, 339, 396, 404
まつのふじなみ (松に藤窪), 123, 228, 324, 374, 404
まつふかが (松風吹く風), 163, 372, 404
まつほどたす (待つ時鳥), 392, 404
まつみえる (松見える), 404, 419
まつむしがなく (松虫が鳴く), 319, 405
まつむしのこえ (松虫の声), 57, 73, 99, 154, 180, 211, 251, 320, 344, 347, 405
まつむしのほと (松虫のとり), 396, 406
まつらがた (松潰湯), 172, 377
まつりするかみ (祭りする神), 171, 406
まつりたよに (松を頼りに), 274, 405
まどいする (円居する), 407
まどろまない (まどろまない), 374, 462
まどろむ (まどろむ), 112, 450
まどをひらく (窓を開く), 370, 406
まぼろし (夢), 407
まよう (夢), 97, 169
みえかくれる (見え隠れる), 195, 263, 310
みがねたどとぎす (身が老いた時鳥), 79, 216, 290, 460
みかわみず (御溝水), 140, 361, 426
みじかよ (短夜), 319, 385, 393, 440
みじかですよ (短夜の空), 389
みじかよのつき (短夜の月), 289, 392, 404, 408, 438, 461
みじかよのゆめ (短夜の夢), 408, 451, 461
みずかげのさびしさ (水影の寂しさ), 146, 233, 410
みずこえる (水越える), 213, 410
みずたえだえ (水絶え絶え), 110, 205
みずにおうやまぶき (水に匂う山吹), 329, 410, 443
みずのうきくさ (水の浮草), 230, 370
みずのおと (水の音), 127, 410
みずのさびあ (水の畳畳), 80, 274, 410
みずのすえみえる (水の末見える), 248, 410, 419
みずのすずしさ (水の涼しさ), 241, 305, 383, 412
みずのたえだえ (水の絶え絶え), 266, 410
みずのひとすじ (水の一筋), 93, 250, 411
みずはすむ (水は澄む), 256, 411
みずはれる (水懐れる), 360, 411
みずひややか (水冷ややか), 370, 411
みだれがみ (乱れ髪), 171, 412
みだれてとぶはたる (乱れて飛ぶ鷗), 305, 383, 412
みわがほそい（道が細い）、383, 413
みちたえだえ（道絶え絶え）、266, 413
みちである（道である）、414
みちのおく（道の奥）、246
みちのかけはし（道の掛橋）、140, 147, 340, 414, 437
みちのかたがた（道の方々）、92, 229, 303
みちのすえ（道の末）、248, 414
みちのつじうら（道の辻）、118, 291, 414
みちのはるけさ（道の遙けさ）、72, 107, 352
みちのひとすじ（道の一筋）、93, 250, 414
みちのはすらい（道の安らぎ）、415, 429
みなかみのもみじ町（水上の紅葉散る）、178, 325
みなせがわ（水無瀬川）、152, 426, 433
みなみはのどこか（南は長閑）、75, 431
みにかならない（身に限らない）、190, 318
みにしみる（身にしみる）、60, 64, 156, 204, 245, 279, 407, 459
みねこえる（峰越える）、196, 201, 213, 395, 416, 441, 444
みねたかい（峰高い）、267, 416
みねにわれる（峰にかわれる）、106, 341, 452
みねのあきかぜ（峰の秋風）、66, 163, 416
みねのあらしがね（峰の嵐）、195, 266
みねのいお（峰の美）、87, 416
みねのかけはしがね（峰の掛橋）、140, 340, 416
みねのかくも（峰の雲）、147, 196, 202, 416, 433, 442, 445
みねのしらゆき（峰の白雪）、247, 416, 447
みねのふるでら（峰の古寺）、171, 297, 326, 380, 417
みねのまつかげ（峰の松風）、122, 436
みねのゆき（峰の雪）、417, 448
みののおやま（美濃の小山）、93, 396, 404
みのくゆくえ（身の行方）、407, 449
みにみちる（耳に満ちる）、190, 318
みやこがこいしい（都が恋しい）、204, 417
みやこがたは（都が遠い）、303, 418
みやごもないと（宮事もない）、309, 418
みやこのつつきにかえる（都の月に帰る）、139, 289, 418
みやこのはるかすみ（都の春霧）、120, 213
みやこびと（都人）、101, 136, 207, 221
みやのうち（宮の内）、183
みゆきする（御幸する）、106, 341, 451
みよし（美濃）、86, 142, 433
みよしのおく（美濃の奥）、86, 122, 131, 141, 142, 309, 408, 457
みよしのはな（美濃の花）、351, 457
みよしのはる（美濃の春）、145, 348
みよしのやま（美濃の山）、435, 457
みるのもうい（見るのも憂い）、103, 419
索引

もみじ (紅葉葉), 361, 428
ももしきのにわ (百敷の庭), 236, 382
ももとせ (百年), 75, 220, 270
もりのこがくれ (森の木隠れ), 171, 406
もりのしたくさ (森の下草), 119, 193, 243, 428, 449
もろこし (唐土), 221, 442
もろこしぶね (唐土舟), 172, 377
もろこしにしてもかったう (唐土までも従う), 339, 415
やすらい (安らい), 302, 334, 429
やすらう (安らう), 159, 251
やどのうめ (宿の梅), 117, 429
やどのうめのか (宿の梅の香), 117, 135, 429
やどのうぐれ (宿の夕暮れ), 201, 429, 443
やどをかる (宿を惜む), 177, 430
やどをとる (宿を訪る), 300, 430
やなぎかげ (柳陰), 80, 410
やまおろし (山蒙), 442
やまおぼろ (山廃), 129
やまがくろい (山が黒い), 198, 435
やまかずくくれ (山霞む歳), 145, 348
やまかぜがふく (山風が吹く), 95, 235, 451
やまがつ (山麓), 74, 224, 442
やまがつのいお (山麓の庵), 87, 442
やまごえる (山越し), 83, 281
やまざくろ (山桜), 91, 119, 137, 162, 173, 184, 228, 242, 349, 354, 435
やまざと (山里), 202, 231, 246, 435, 444
やまだかい (山高い), 69, 448
やまちかい (山urch), 276, 436
やまとうた (大和歌), 76, 350, 413, 428, 453
やまとことのは (大和言の葉), 194, 221, 243, 442
やまなしのさな (山梨の花), 351, 442
やまのあきぐるめ (山の秋暮れる), 161, 214
やまののみずみ (山の井の水), 85, 411, 436
やまのお (山の奥), 122, 232, 436
やまのかくれが (山の隠れ家), 86, 142, 436
やまのかげ (山の陰), 146, 210, 362, 436
やまのたかが (山の下陰), 147, 243, 437
やまのたまうち (山の下道), 243, 415, 437
やまのは (山の端), 75, 78, 240, 249, 264, 423
やまのはいの (山の端の色), 57, 154
やまのはつ (山の端の月), 58, 155, 171, 289, 327, 338, 437
やまのはとときす (山の時鳥), 392, 438
やまのまつかざ (山の松風), 163, 405, 438
やまのぬぐれのそろ (山の夕暮れの空), 390
やまびと (山人), 90, 185, 396
やまぶかい (山深い), 97, 169, 370, 438
やまほとときす (山時鳥), 78-80, 87, 89, 112, 183, 191, 196, 199, 224, 233, 270, 320, 330, 392, 416, 438
やまもと (山本), 91, 268, 397, 425, 441
やまもとのさと (山本の里), 231, 397, 441
ややさいいそで (やや寒い袖), 235, 260
やよいのあめ (弥生の雨), 79, 443
ゆうあらし (夕嵐), 80, 443
ゆうがお (夕顔), 123, 125, 198, 446
ゆうがおのちぎり (夕顔の裂り), 277, 446
ゆうがすみ (夕霞), 306, 357
ゆうぐれのくも (夕暮れの雲), 196, 201, 444
ゆうぐれのそら (夕暮れの空), 201, 264, 444
ゆうぐれのやま (夕暮れの山), 202, 441, 445
ゆうしゅくし (夕時雨), 240, 445
ゆうすずみ (夕涼み), 252, 445
ゆうだち (夕立), 251, 294, 446
ゆうだちのあと (夕立の後), 76, 446
ゆうづくよ (夕月夜), 210, 289, 362, 445, 461
ゆうつけどりをきく (木綿をきく夢), 185, 447
ゆうひがくれ (夕日隠れ), 90, 120, 341, 424
ゆうべ (夕べ), 183, 242, 275, 292, 402, 445
ゆうべかがり (夕望の月), 141, 445
ゆうまくす (変々), 62, 104, 122, 158, 188, 232, 445
ゆうがふれはせる (山にふれはせる), 361, 380, 448
ゆうきえる (雪消える), 110, 184, 206, 448
ゆうきかく (雪消える), 93, 250, 414
ゆうきとはなかげ (雪と花の陰), 75, 300
ゆうきになる (雪になる), 448
ゆうきのあけぼの (雪の朝), 69, 448
ゆうきのあかあけ (雪の朝明け), 70, 73, 448
ゆうきのうち (雪の中), 113, 449
ゆうきのしたお (雪の下庵), 267
ゆうきのたけのすえすえ (雪の木の末), 111, 276, 334
ゆうきのなかぞら (雪の中空), 265, 313, 449
ゆうきのむらさご (雪の眠る), 151, 329
ゆうきのやまもと (雪の山本), 327
ゆうきはふりつつ (雪はふりつつ), 108
ゆうきふる (雪ふる), 266, 413
ゆくえられない (行方知れない), 314
ゆくすえはるま (行末の空), 265, 450
ゆくすえはるま (行末の空), 229, 435
ゆくほどとぎす (行く時鳥), 88, 395
ゆめかうつつか (夢か現か), 390
ゆめさめる (夢覚める), 124, 235, 282, 325, 399, 451
ゆめめる (夢覚める), 106, 152, 196, 340, 451, 457
ゆめのおもかげ (夢の影), 133, 192, 277, 399, 452
ゆめのかりまくら (夢の枕まくら), 176, 401, 452
ゆめもうつつも（夢も現も）、268, 304

よいのま（宵の間）、95, 143
よがかる（夜が明ける）、70, 93, 403, 425, 461
よがおさまる（世が治まる）、147
よがながい（夜が長い）、235, 282, 299, 314, 333, 461
よがふき（夜が深い）、370, 462
よがふる（夜が更ける）、113, 172, 209, 214, 224, 268, 284, 374, 462
よきのかみがき（与喜の神垣）、343
よきのみやしろ（与喜の御社）、428, 456
よこぎも（横隠）、68, 69, 359, 431
よこぎもかすむ（横雲霞む）、152, 196, 457
よこぎものそら（横雲の空）、196, 265, 457
よぎむおぼえる（夜寒おぼえる）、128, 235, 462
よしのがわ（吉野川）、315, 409
よしのがわのはな（吉野川の花）、351, 458
よしや（よしや）、128, 214
よそのゆうぐれ（余所の夕暮れ）、343
よつのねこえ（四緒の声）、423
よどのかふね（昼の川舟）、179, 377, 458
よにながらえる（世に長らえる）、314, 456
よのなか（世の中）、130, 313, 321, 456
よのらない（世の暮れ）、326, 456
よばりながらる（世ばかり掛かる）、140, 456
よのはしのめの（夜は東雲）、244, 462
よぶかおりち（夜深い道）、82
よぶこどり（呪子鳥）、122, 149, 150, 221, 271, 275, 402, 412, 457, 458
よもぎ（蒲生）、458
よもぎのかげ（蒲生の影）、147, 326, 419, 456, 458
よもすがら（夜もすがら）、252, 398, 447, 462
よろくすさかずき（夜汲む杯）、194, 226, 462
よろにかりなく（夜に雁鳴く）、195, 287, 425
よるのゆめ（夜の夢）、452, 463
よわのあきかぜ（夜半の秋風）、66, 164, 463
よわのつき（夜半の月）、110, 126, 165, 206, 240, 257, 289, 294, 379, 394, 413, 420, 440, 463
よわのむしのね（夜半の虫の音）、127, 421, 463
よわゆるはてる（弱り果てる）、344, 463
よわるむしのね（弱る虫の音）、64, 177, 251, 345, 373
よをいとう（世を厭う）、94, 456
よをこめる（夜をこめる）、83, 263, 285

わかつつ（分かつつ）、303
わかがみだ（我が滅）、131, 422
わかばのくずのかかるうもれぎ（若葉の暮の掛かる埋もれ木）、138, 355
わからない（わからない）、97, 169
わかるじ（別れ路）、132, 365
わかれるじのあと（別れ路の跡）、77, 415, 464
わかれる（別れる）、193, 353, 465
わかれる（別れる）、244, 462, 464
わかれるたびはかならない（別れる旅は悲しい）、168, 274, 464
わかれをいそぐ（別れを急ぐ）、67, 262
わけるほどとぎす（別ける時鳥）、395, 465
わずかにみえるおきのしま（わずかに見える沖の島）、77, 128, 375
わすれとうくさはら（忘れ訪る草原）、193, 301, 353, 465
わすれもしない（忘れもしない）、465
わすれようとする（忘れようとする）、465
わすれるなるよ（忘れられるなよ）、193, 353, 465
わたしびね（渡し舟）、178, 256, 378, 412, 466
わたのはら（わたの原）、164, 301, 432
わたるかとがね（渡る雁）、175, 193, 240, 293, 466
わびぬればおもう（偌ぬればもう思う）、252, 310, 453
わびびと（偌人）、369, 466
われおどろく（我驚く）、309, 333, 425
われでなくなるのがうい（我でなくなるのが憂い）、103, 328, 467
われののみひとりそでをぬらす（我ののみ一人袖を濡らす）、130, 220, 363
連歌の発想

山田 繁治・岩井 茂樹

発行所
国際日本文化研究センター

印刷所
創文堂印刷株式会社

ISBN 4-901558-32-3  PRINTED IN JAPAN
連歌の発想
連想語彙用例辞典と、そのネットワークの解析
山田奨治・岩井茂樹 編著